

一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）
埋蔵文化財発掘調査報告書 1

—千曲市内その 1—

しゃ ぐう じ
社 宮 司 遺 跡 ほか

《第 2 分冊》

2006.3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター

本文目次(つづき)

本文目次

挿図目次

挿表目次

第3章 発掘調査の概要	35
第12節 社宮司遺跡の調査	125
- 3. 掘立柱建物跡	358
- 4. 区画的溝状遺構	482
3. 特殊遺構	615
- 1. 地鎖的遺構	615
- 2. 土壇墓跡	627
4. 特殊遺物	637
- 1. 墨書土器・漆紙文書・習書木簡	637
- 2. 土器に付着する漆・油脂・硫黄	646
- 3. 奈良三彩及び緑釉陶器	650
- 4. 六角木幢	652
5. 総括	698
第4章 発掘調査のまとめ	713
第1節 更級郡とは	715
第2節 更級郡衙とは	716
第3節 社宮司遺跡とは	717
第4節 社宮司遺跡にみる郡内官衙の変遷とその背景	718
1. 律令国家への歩みと評制の成立	718
a. 7世紀後半の八幡遺跡群	718
b. 7世紀後半の国史概略	719
2. 律令国家と郡制の施行	720
a. 8世紀の八幡遺跡群	720
b. 8世紀の国史概略	727
3. 律令国家の衰退と郡制の変質	728
a. 9世紀の八幡遺跡群	728
b. 9世紀の国史概略	733
4. 王朝国家の成立と富豪層の台頭	734
a. 10世紀の八幡遺跡群	734
b. 10世紀の国史概略	737
5. 摂関政治と武士の台頭	738
a. 11世紀前半の八幡遺跡群	738
b. 11世紀の国史概略	741
付 5章 シンポジウム 六角木幢と信濃中世の幕開け	742
索引 結語	745
挿表目次	
挿図目次	
本文目次	

挿 図 目 次

第493図	ST 01 完掘の状態	358	第534図	ST 22 完掘の状態	418
第494図	ST 02 完掘の状態	360	第535図	ST 22 出土の土器・木製品 1	419
第495図	ST 03 完掘の状態	361	第536図	ST 22 出土の土器・木製品 2	420
第496図	ST 04 完掘の状態	363	第537図	ST 23 完掘の状態	421
第497図	ST 05 完掘の状態	364	第538図	ST 23 出土の木製品 1	422
第498図	ST 05 出土の木製品	365	第539図	ST 23 出土の木製品 2	423
第499図	ST 06 完掘の状態	366	第540図	ST 24 完掘の状態	425
第500図	ST 07 完掘の状態	367	第541図	ST 25 完掘の状態	427
第501図	ST 08 完掘の状態	369	第542図	ST 26 Pit5 出土の土器	429
第502図	ST 09 完掘の状態	371	第543図	ST 26 完掘の状態	429
第503図	ST 09 出土の木製品 1	374	第544図	ST 27 完掘の状態	431
第504図	ST 09 出土の木製品 2	375	第545図	ST 27 出土の土器・木製品	432
第505図	ST 09 出土の木製品 3	376	第546図	ST 28 完掘の状態	434
第506図	ST 10 完掘の状態	378	第547図	ST 28 出土の土器・木製品	436
第507図	ST 10 出土の木製品 1	380	第548図	ST 29 完掘の状態	438
第508図	ST 10 出土の木製品 2	381	第549図	ST 29 出土の木製品 1	440
第509図	ST 11A 完掘の状態	383	第550図	ST 29 出土の木製品 2	441
第510図	ST 11B 完掘の状態	385	第551図	ST 29 出土の木製品 3	442
第511図	ST 11B 出土の土器	386	第552図	ST 30 完掘の状態	445
第512図	ST 11 完掘の状態	387,388	第553図	ST 30 出土の木製品 1	448
第513図	ST 12 完掘の状態	391	第554図	ST 30 出土の木製品 2	449
第514図	ST 12 出土の土器	391	第555図	ST 30 出土の木製品 3	450
第515図	ST 13 完掘の状態	393	第556図	ST 31 完掘の状態	451
第516図	ST 13 出土の木製品	394	第557図	ST 31 Pit3 出土の柱材	451
第517図	ST 14 完掘の状態	395	第558図	ST 33 完掘の状態	453
第518図	ST 14 出土の木製品	396	第559図	ST 33 出土の土器	453
第519図	ST 15 完掘の状態	398	第560図	ST 34 完掘の状態	455
第520図	ST 15 出土の木製品 1	401	第561図	ST 35 完掘の状態	456
第521図	ST 15 出土の木製品 2	402	第562図	ST 36 完掘の状態	458
第522図	ST 15 出土の木製品 3	403	第563図	Pit8 出土の土器	458
第523図	ST 16 Pit6 出土の土器	404	第564図	ST 37 完掘の状態	459
第524図	ST 16 完掘の状態	405	第565図	ST 38 完掘の状態	460
第525図	ST 17 完掘の状態	407	第566図	ST 39 完掘の状態	461
第526図	ST 17 出土の土器・木製品	408	第567図	ST 40 完掘の状態	462
第527図	ST 18 完掘の状態	410	第568図	ST 41 完掘の状態	464
第528図	ST 18 出土の木製品	411	第569図	ST 41 出土の木製品	464
第529図	ST 19 完掘の状態	413	第570図	ST 42 完掘の状態	465
第530図	ST 19 出土の木製品	414	第571図	ST 44 完掘の状態	467
第531図	ST 20 完掘の状態	415	第572図	ST 44 出土の土器	468
第532図	ST 20 出土の木製品	416	第573図	ST 45 完掘の状態	469
第533図	ST 21 完掘の状態	417	第574図	ST 45 出土の土器	469

第575 図	ST 46 完掘の状態	471	第618 図	1 層～検出面の遺物出土分布	519
第576 図	ST 47 完掘の状態	472	第619 図	溝底の出土遺物 1	521
第577 図	ST 48 完掘の状態	473	第620 図	溝底の出土遺物 2	523
第578 図	ST 48 出土の木製品 1	475	第621 図	溝底の出土遺物 3	525
第579 図	ST 48 出土の木製品 2	476	第622 図	溝底の出土遺物 4	526
第580 図	ST 49 完掘の状態	477	第623 図	溝底の出土遺物 5	527
第581 図	ST 50 完掘の状態	478	第624 図	溝底の出土遺物 6	528
第582 図	ST 51 完掘の状態	479	第625 図	2 層下の出土遺物 1	530
第583 図	ST 52 完掘の状態	480	第626 図	2 層下の出土遺物 2	532
第584 図	SD 01 南北セクション	482	第627 図	2 層下の出土遺物 3	534
第585 図	SD 01 土器等出土分布 1	483	第628 図	2 層下の出土遺物 4	535
第586 図	SD 01 土器等出土分布 2	484	第629 図	2 層下の出土遺物 5	536
第587 図	SD 01 土器等出土分布 3	485	第630 図	2 層下の出土遺物 6	537
第588 図	SD 01 木製品・礫出土分布 1	486	第631 図	2 層下の出土遺物 7	538
第589 図	SD 01 木製品・礫出土分布 2	487	第632 図	2 層の出土遺物 1	540
第590 図	溝底及び埋土出土遺物	489	第633 図	2 層の出土遺物 2	542
第591 図	溝底出土遺物	490	第634 図	2 層の出土遺物 3	543
第592 図	溝底出土遺物	491	第635 図	2 層の出土遺物 4	544
第593 図	溝底出土遺物	492	第636 図	1 層～検出面の出土遺物 1	546
第594 図	下層出土遺物	494	第637 図	1 層～検出面の出土遺物 2	547
第595 図	下層及び上層出土遺物	497	第638 図	SD 03 東西流路の遺物出土分布	550
第596 図	上層及び埋土出土遺物・溝底出土遺物	499	第639 図	SD 03 東西流路の礫出土分布	551
第597 図	溝底出土遺物	500	第640 図	溝底の遺物出土分布	552
第598 図	下層出土遺物	501	第641 図	溝底～2 層下の遺物出土分布	552
第599 図	下層出土遺物	502	第642 図	2 c 層下～2 b 層・2 層下の遺物出土分布	553
第600 図	上層及び検出面出土遺物	503	第643 図	2 a 層・2 層の遺物出土分布	553
第601 図	SD 01 の大型植物化石写真と数量	509	第644 図	溝底の出土遺物 1	556
第602 図	SD 01 の花粉化石写真と数量	510	第645 図	溝底の出土遺物 2	557
第603 図	社宮司遺跡獣骨写真	511	第646 図	溝底の出土遺物 3	558
第604 図	東西古期流路の南北セクション	512	第647 図	溝底の出土遺物 4	559
第605 図	東西新期流路の南北セクション	512	第648 図	2 層下の出土遺物	561
第606 図	南北流路の東西セクション	512	第649 図	2 c 層・2 c 層下の出土遺物 1	563
第607 図	SD 03 東西流路の遺物出土分布	513	第650 図	2 c 層・2 c 層下の出土遺物 2	565
第608 図	SD 03 東西流路の礫出土分布	514	第651 図	2 b 層の出土遺物	567
第609 図	溝底の遺物出土分布	515	第652 図	2 層の出土遺物 1	568
第610 図	溝底の遺物出土分布	515	第653 図	2 層の出土遺物 2	570
第611 図	溝底の遺物出土分布	516	第654 図	2 層・2 層下の出土遺物 3	571
第612 図	2 層下の遺物出土分布	516	第655 図	2 層下～2 層の出土遺物	572
第613 図	2 層下の遺物出土分布	517	第656 図	1 層～検出面ほかの出土遺物	574
第614 図	2 層下の遺物出土分布	517	第657 図	SD 03 南北流路の遺物出土分布	577
第615 図	2 層の遺物出土分布	518	第658 図	2 層下遺物出土分布状態	578
第616 図	2 層の遺物出土分布	518	第659 図	2 層遺物出土分布状態	578
第617 図	2 層の遺物出土分布	519	第660 図	溝底から 1 層出土遺物	580

第661 図	溝底出土遺物	581	第704 図	赤外線分光分析チャート	647
第662 図	2 層下から 2 層出土遺物	583	第705 図	蛍光 X 線分析チャート	648
第663 図	2 層出土遺物	584	第706 図	1 号溝出土の短頸壺蓋	650
第664 図	2 層から 1 層出土遺物	585	第707 図	SD 01・SD 03 出土の短頸壺	650
第665 図	溝底出土遺物 1	587	第708 図	木輪出土状況	653
第666 図	溝底出土遺物 2	588	第709 図	SD 03 南北セクション	654
第667 図	2 層下出土遺物	590	第710 図	木輪出土位置	654
第668 図	2 層出土遺物	592	第711 図	石輪の部分名称	655
第669 図	1 層・出土地区不明出土遺物	593	第712 図	長野市松代町の石輪	655
第670 図	社宮司遺跡獣骨写真	597	第713 図	木輪の部分名称と略寸法	656
第671 図	SD 53 土器出土分布 1	600	第714 図	木輪属性の計測部位	657.658
第672 図	SD 53 土器出土分布 2	601	第715 図	残存する仏画	659
第673 図	SD 53 木製品出土分布 1	602	第716 図	宝珠	661
第674 図	SD 53 木製品出土分布 2	603	第717 図	笠	662
第675 図	SD 53 出土遺物 1	605	第718 図	笠	663
第676 図	SD 53 出土遺物 2	606	第719 図	葎手	665
第677 図	SD 53 出土遺物 3	607	第720 図	葎手	666
第678 図	SD 53 出土遺物 4	608	第721 図	葎手	666
第679 図	SD 53 出土遺物 5	610	第722 図	葎手	667
第680 図	SD 53 出土遺物 6	611	第723 図	葎手	667
第681 図	SD 53 出土遺物 7	613	第724 図	風鐸	669
第682 図	地鎮遺構の完掘状態	615	第725 図	風鐸	669
第683 図	SK 500 と出土の土器	617	第726 図	風鐸	670
第684 図	SK 500 出土の土器と緑釉把手付き瓶	618	第727 図	風鐸	670
第685 図	SK 650 と出土の土器	620	第728 図	風鐸	671
第686 図	SK 1063 と出土の土器	621	第729 図	風招	673
第687 図	SK 1179 と出土の土器	623	第730 図	風招	673
第688 図	SK 1160 と出土の土器	625	第731 図	風招	674
第689 図	検出状態 1	627	第732 図	風招	674
第690 図	中央部の土層	627	第733 図	風招	674
第691 図	検出状態 2	628	第734 図	輪身	675.676
第692 図	検出状態 3	628	第735 図	輪身正面上半の阿弥陀如来像	678
第693 図	検出状態 4	629	第736 図	輪身正面の阿弥陀如来像と宝相華唐草文 1	680
第694 図	検出状態 5	629	第737 図	輪身正面の阿弥陀如来像と宝相華唐草文 2	681
第695 図	天井板	631	第738 図	輪身正面の阿弥陀如来像と宝相華唐草文 3	682
第696 図	上下側板と底板	632	第739 図	輪身左隣接面の阿弥陀如来像	683
第697 図	右側板	633	第740 図	輪身右隣接面の阿弥陀如来像 1	684
第698 図	左側板	634	第741 図	輪身右隣接面の阿弥陀如来像 2	685
第699 図	柱木と刀形及び弓形の木製品	635	第742 図	木輪関連遺物 1	688
第700 図	SD 03 出土の漆紙付着の土器	640	第743 図	木輪関連遺物 2	689
第701 図	SD 03 出土の漆紙付着の土器	641	第744 図	蛍光 X 線による顔料分析	690
第702 図	SK 746 出土の漆紙付着の土器	641			
第703 図	SD 01 出土の習書木簡	644			

第745図	六角木桶に用いられた樹木……………	692	第757図	律令期の北信濃の郡郷名……………	715
第746図	疾行餓鬼……………	695	第758図	信濃国の郡等級と郡司定員……………	716
第747図	水施餓鬼……………	695	第759図	東山道支道推定路と更級郡……………	716
第748図	社宮司Ⅰ期Ⅰ小期ほかの遺構……………	699	第760図	社宮司Ⅰ期Ⅰ小期・Ⅱ小期の遺構全体 ……………	721.722
第749図	社宮司Ⅰ期Ⅱ小期の遺構……………	701	第761図	社宮司Ⅰ期Ⅲ小期の遺構全体 ……………	725.726
第750図	社宮司Ⅰ期Ⅲ小期の遺構……………	703	第762図	社宮司Ⅱ期の遺構全体……………	729.730
第751図	社宮司Ⅱ期の遺構……………	705	第763図	社宮司Ⅲ期・Ⅳ期の遺構全体……………	731.732
第752図	社宮司Ⅲ期の遺構……………	706	第764図	社宮司Ⅴ期の遺構全体……………	735.736
第753図	社宮司Ⅳ期の遺構……………	707	第765図	社宮司Ⅵ期の遺構全体……………	739.740
第754図	社宮司Ⅴ期の遺構……………	709			
第755図	社宮司Ⅵ期の遺構……………	710			
第756図	社宮司Ⅶ期の遺構……………	711			

挿 表 目 次

第99表	ST 01 柱穴属性……………	359	第126表	ST 15 柱穴属性……………	399
第100表	ST 01 出土土器組成……………	359	第127表	ST 15 出土木製品属性……………	399
第101表	ST 02 柱穴属性……………	360	第128表	ST 16 柱穴属性……………	404
第102表	ST 03 柱穴属性……………	362	第129表	ST 16 出土土器組成……………	404
第103表	ST 03 出土土器組成……………	362	第130表	ST 17 柱穴属性……………	408
第104表	ST 04 柱穴属性……………	363	第131表	ST 17 出土土器組成……………	408
第105表	ST 04 出土土器組成……………	363	第132表	ST 17 出土木製品属性……………	408
第106表	ST 05 柱穴属性……………	365	第133表	ST 18 出土土器組成……………	409
第107表	ST 05 出土木製品組成……………	365	第134表	ST 18 柱穴属性……………	411
第108表	ST 06 柱穴属性……………	367	第135表	ST 18 出土木製品属性……………	411
第109表	ST 06 出土土器組成……………	367	第136表	ST 19 柱穴属性……………	412
第110表	ST 07 柱穴属性……………	368	第137表	ST 19 出土土器組成……………	412
第111表	ST 08 柱穴属性……………	370	第138表	ST 19 出土木製品属性……………	414
第112表	ST 09 柱穴属性……………	371	第139表	ST 20 柱穴属性……………	416
第113表	ST 09 出土土器組成……………	371	第140表	ST 21 柱穴属性……………	416
第114表	ST 09 出土木製品属性……………	371	第141表	ST 22 柱穴属性……………	419
第115表	ST 10 柱穴属性……………	379	第142表	ST 22 出土木製品属性……………	420
第116表	ST 10 出土木製品属性……………	379	第143表	ST 23 柱穴属性……………	423
第117表	ST 11A 柱穴属性……………	382	第144表	ST 23 出土木製品属性……………	423
第118表	ST 11A 出土土器組成……………	382	第145表	ST 24 柱穴属性……………	424
第119表	ST 11B 柱穴属性……………	386	第146表	ST 25 柱穴属性……………	426
第120表	ST 11B 出土土器組成……………	386	第147表	ST 25 出土土器組成……………	426
第121表	ST 11 出土土器組成……………	389	第148表	ST 26 柱穴属性……………	428
第122表	ST 12 柱穴属性……………	392	第149表	ST 26 出土土器組成……………	429
第123表	ST 12 出土土器組成……………	392	第150表	ST 27 柱穴属性……………	430
第124表	ST 13 柱穴属性……………	394	第151表	ST 27 出土木製品属性……………	431
第125表	ST 14 柱穴属性……………	396	第152表	ST 28 柱穴属性……………	433

第153表	ST 28 出土土器組成	435	第184表	ST 51 柱穴属性	479
第154表	ST 28 出土木製品属性	435	第185表	ST 52 柱穴属性	481
第155表	ST 29 柱穴属性	437	第186表	SD 01 出土土器・木製品組成	504
第156表	ST 29 出土木製品属性	440	第187表	社宮司遺跡帳骨一覧表	511
第157表	ST 30 柱穴属性	444	第188表	東西流路出土土器組成 1	548
第158表	ST 30 出土木製品属性	447	第189表	東西流路出土木製品組成	549
第159表	ST 31 柱穴属性	451	第190表	東西流路出土土器組成 2	576
第160表	ST 33 柱穴属性	452	第191表	南北流路出土土器組成	594
第161表	ST 34 柱穴属性	454	第192表	南北流路出土木製品組成	595
第162表	ST 35 柱穴属性	456	第193表	SD 03 出土骸骨一覧	598
第163表	ST 36 柱穴属性	457	第194表	SD 53 出土土器組成	604
第164表	ST 36 出土土器組成	457	第195表	SD 53 出土木製品組成	604
第165表	ST 37 柱穴属性	459	第196表	SD 53 出土木製品属性	614
第166表	ST 38 柱穴属性	461	第197表	地鎮遺構の属性	626
第167表	ST 39 柱穴属性	461	第198表	SK 740 出土木製品組成	630
第168表	ST 40 柱穴属性	463	第199表	社宮司遺跡出土の墨書文字一覧	637
第169表	ST 41 柱穴属性	463	第200表	社宮司遺跡出土の刻書文字一覧	638
第170表	ST 41 出土木製品属性	463	第201表	社宮司遺跡出土の土器付着物一覧	646
第171表	ST 42 柱穴属性	465	第202表	付着物分析資料一覧	646
第172表	ST 42 出土木製品属性	466	第203表	蛍光 X 線分析による半定量分析結果	
第173表	ST 44 柱穴属性	468			648
第174表	ST 44 出土土器組成	468	第204表	付着物分析の結果	649
第175表	ST 45 出土土器組成	470	第205表	社宮司遺跡出土の緑釉陶器ほか一覧	651
第176表	ST 45 柱穴属性	470	第206表	宝珠属性	660
第177表	ST 46 柱穴属性	471	第207表	笠属性	660
第178表	ST 47 柱穴属性	472	第208表	蔽手属性	664
第179表	ST 48 柱穴属性	474	第209表	風鐸属性	668
第180表	ST 48 出土土器組成	474	第210表	風招属性	673
第181表	ST 48 出土木製品属性	475	第211表	輪身属性	679
第182表	ST 49 柱穴属性	477	第212表	阿弥陀如来像属性	683
第183表	ST 50 柱穴属性	478			

第2分冊

第3章 発掘調査の概要

第12節 しゃぐうじ社宮司遺跡の調査

2. 遺構と遺物の概要

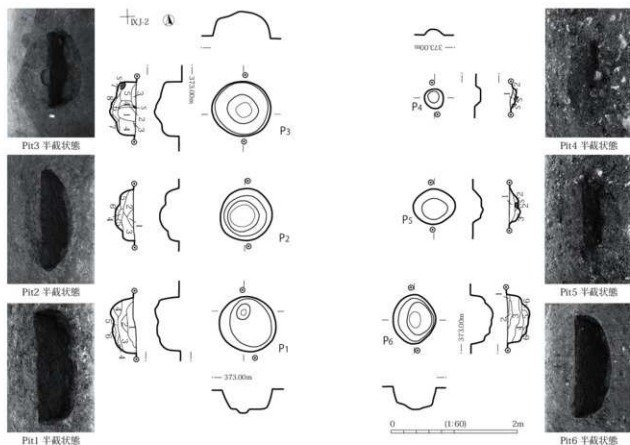
2-3. 掘立柱建物跡

千曲市発掘のB地点では、9棟の掘立柱建物跡が確認された。今回の調査では52棟を検出、調査した。遺構はSD 01南の②区に34棟、SD 03南の③区に18棟がある。以下にその調査概要を建物番号順に記述するが、それぞれの所属時期は、概ね以下ようになる。

社宮司Ⅰ期第1小期(古代2期, 7世紀後半)	4棟該当。
ST 15・ST 27・ST 29・ST 48	
第2小期(古代2期・3期, 8世紀前半)	7棟該当。
ST 08・ST 12・ST 19・ST 25・ST 30・ST 33・ST 37	
第3小期(古代3期・4期, 8世紀中頃～後半)	9棟該当。
ST 09・ST 11・ST 16・ST 24・ST 26・ST 35・ST 39・ST 42・ST 45	
社宮司Ⅱ期(古代5期～7期, 9世紀前半)	14棟該当。
ST 02・ST 05・ST 06・ST 07・ST 10・ST 17・ST 18・ST 21・ST 22・ST 28・ST 31・ST 36・ST 40・ST 41	
社宮司Ⅲ期(古代8期, 9世紀後半)	8棟該当。
ST 01・ST 03・ST 04・ST 13・ST 14・ST 20・ST 23・ST 44	
社宮司Ⅳ期(古代9期, 9世紀終末～10世紀前半)	該当なし
社宮司Ⅴ期(古代12期以降, 10世紀後半)	2棟該当。
ST 44・ST 50・ST 51	
社宮司Ⅵ期(古代14期頃, 11世紀前半)	1棟該当か。
ST 52	
時期不明	7棟該当か。
ST 32・ST 34・ST 38・ST 43・ST 46・ST 47・ST 49	

1号掘立柱建物跡(第493図)

時 期： 9世紀後半～？(古代8期～?)



第493図 ST 01 発掘の状態

- 位置： XJ-2 (③区)
- 重複： 2号建物跡と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。
- 検出経過： 黄褐色砂層上面で、黒褐色土(10YR3/2)の円形の落ち込みを確認する。ほぼ同規模で同形状の3基が、等間隔に直線上に並び、その配置から掘立柱建物跡を想定し調査に入った。
- 規模： 平面形は、2間×1間の側柱式の南北棟。桁行2間(3.4m)×梁行1間(3m)。床面積10.2㎡。主軸N-3'-Eを指す。
- 柱穴： 西側桁行の柱筋の通りは比較的良好だが、東側桁行のPit6は大きく内側に入り込んでいる。全体的にPitの平面形は、ほぼ円形を呈し、断面形態は、底部に段を有する形態。埋土は、黒褐色土(10YR3/2)を基調とし、2層から8層に分層できる。堆積状況からみて人為的に埋め戻されたと考えられる。規模は、Pit4及びPit5を除き、長径80cm、深さ35cm前後の掘り方を持つ。そのうち、特に柱痕跡が明確に残るのはPit3で柱直径径約20cmを測る。Pit4及びPit5は、規模が小さく浅い。底部中央部に拳大の礫を確認した。上屋構造との関連を考える必要がある。
- 柱間寸法： 平均柱間寸法は桁行166cm(160~178cm)、梁行283cm(268~298cm)である。
- 出土遺物： Pit1からは、土師器甕形土器の体部破片2片、須恵器の甕形土器A類と推定できる小破片1片、非ロクロ土師器の杯形土器口縁部破片2片が出土した。杯形土器の1片は、微細破片で断定はできないが、黒色土器の可能性もある。Pit3では、土師器と須恵器の甕体部小破片がそれぞれ1片出土した。



ST 01 全景 (完備)



ST 01 全景 (白線入り)

Pit番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の 分層	土色層記号		柱材の 有数	出土遺物	切合	備考
1	円	B2	88	86	34	b	1層~4層 10YR3/2、5層・6層 10YR3/1		-	土師器甕? 黒色土器A 杯 須恵器甕A	なし	
2	円	B	82	80	28	b	1層~5層 10YR3/2、6層 10YR3/1		-	なし	なし	
3	円	B	86	84	38	f	1層 10YR3/2、2層 10YR3/1、3~6層 10YR3/2、7層・8層 10YR3/1		-	土師器甕? 須恵器甕?	なし	
4	円	D	30	30	9	b	1層・2層 10YR3/2		-	なし	なし	
5	円	B	67	54	16	b	1層・2層 10YR3/2、3層 10YR3/1		-	なし	なし	
6	円	B	76	69	35	b	1~5層 10YR3/2、6層 10YR3/1		-	なし	なし	

第99表 ST 01 柱穴属性

遺構名	非ロクロ土師器	土師器	須恵器	数/総重量 (破片/g)
ST 01	杯?	甕?	甕A	
Pr1	2	2	1	4/25.7
Pr3		1	1	2/3.0

第100表 ST 01 出土土器組成

2号掘立柱建物跡(第494図)

時期：9世紀以前か？(古代6期・7期以前か？)

位置：XJ-2(③区)

重複：1号建物跡と重複関係はあるが、遺構の切り合いがなく、新旧関係は不明である。

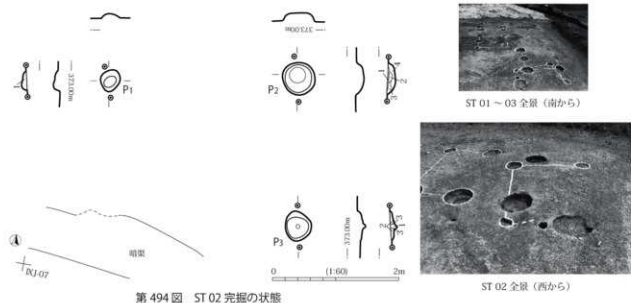
検出経過：黄褐色砂層上面で黒褐色土(10YR3/2、3/1)の落ち込みを確認する。3基の土坑がL字形に位置する。他の1基は暗渠によって破壊されているのであろうか、確認できなかった。掘立柱建物跡を想定し調査を実施した。

規模：平面形は1間×1間の東西棟。桁行1間(2.9m)×梁行(2.4m)。

床面積は6.9㎡。主軸は、N-11.5°-W。

柱穴：Pit1及びPit3に対応すると考えられるPitは暗渠により確認できない。3基の土坑については比較的柱筋の通りがよい。平面形は円形。断面形はPit1及びPit2は皿状を呈する。Pit3の底部中央には段を有する。規模は長軸32cm～52cm、深さは8cm～11cm程度と浅い。Pit3は3層に分層できた。削平が激しいものの、柱痕跡がしっかり残る。掘り方埋土は2層からなり、下層は粒子が細かく粘性がやや強い黒褐色土(10YR3/1)で、上層は締まりがあり、炭化物が僅かに混じる黒色土(10YR3/2)が堆積していた。柱痕の幅は10cm前後と細く、上層は簡易な建物小屋の可能性を考えるべきか。

出土遺物：なし



第494図 ST 02 完掘の状態

Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分層	土色層記号	柱材の有無	出土遺物	切合	備考
1	円	D	32	30	8	a	10YR3/1	-	なし	なし	
2	円	D	52	50	11	b	1～4層 10YR3/2	-	なし	なし	
3	円	B	44	40	8	f	1層根底、2層 10YR3/2、3層 10YR3/1	-	なし	なし	

第101表 ST 02 柱穴属性

3号掘立柱建物跡(第495図)

時期：9世紀後半～？(古代8期～？)

位置：XE-16, 17, 21, 22(③区)

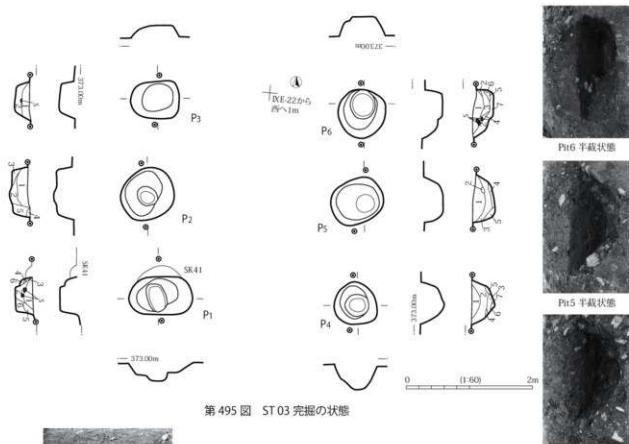
重複：SK 41を破壊する。

検出経過：黄褐色砂層上面で暗褐色土（10YR3/3）の落ち込みを確認する。その形状、規模から掘立柱建物跡を想定し調査した。Pit1とSK41との切り合いは砂の含有量の差異で判断したが、大差はなく、Pit1の部分とも考えられる。

規模：平面形は2間×1間の側柱式の南北棟。桁行2間（3.3m）×梁行1間（3.3m）。

床面積 10.9㎡。主軸 N-4°-W。

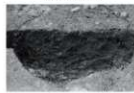
柱 穴：ほぼ柱筋は通る。平面形は、隅丸方形に円形、そして楕円形と一様ではないが、大きさは長軸が80cm、深さは30cm前後であり、規模には大きな片寄りはない。断面は底部に段を有する形態を基本とする。埋土はすべて複層。暗褐色土及び黒褐色土を基調とし、ブロック状



第495図 ST03 完掘の状態



Pit3 半載状態



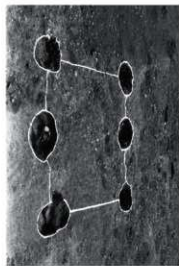
Pit2 半載状態



Pit1 半載状態



ST 03 全景 (完掘)



ST 03 全景 (白線入り)

Pit4 半載状態

の混入物が認められ、人為的に埋めたものと判断できる。

- 柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行が159cm（152～166cm）、梁行159cm（314～324cm）。
- 出土遺物： すべてが極く微細な破片であり、全体形の予想は難しい。Pit2からは、土師器の甕形土器腰部破片1片と杯A類口縁部1片、黒色土器A杯A類1片、須恵器の杯形土器A類（糸切り離し）2片の出土がある。Pit4では、土師器甕の小破片1片、黒色土器Aの杯A類1片があり、Pit6では、土師器甕の腰部1片と須恵器杯A類の口縁部破片が1片ある。埋土中の混入物と考えられる。
- 所見： 柱穴の規模がほぼ同規模であること。柱筋を通り、平面形がほぼ正確な正方形をつくるなど比較的精度が高い。構図のある計画的設計が伺える。

Pit番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の 分類	土色標記号	柱材の 有無	出土遺物	切合	備考
1	楕円	B2	100	60	28	b	1～6層 10YR3/3	-	なし	SK41を切る	SK41と同一の可能性あり
2	円	B	84	80	34	b	1層 10YR3/3, 2層・3層 10YR3/1, 4層・5層 10YR3/3	-	土師器杯A? 須恵器杯A	なし	
3	楕円	A	75	59	20	b	1層・2層 10YR3/3	-	なし	なし	
4	円	B	68	66	37	g	1層・2層 10YR 3/3, 3～6層 10YR 3/1, 7層 10YR6/2	-	なし	なし	
5	楕円	D	84	68	32	b	1～3層 10YR3/3, 4層・5層 10YR3/1	-	なし	なし	
6	円	B2	72	68	30	b	1層・2層 10YR3/3, 3～7層 10YR3/1	-	須恵器杯A	なし	

第102表 ST03柱穴属性

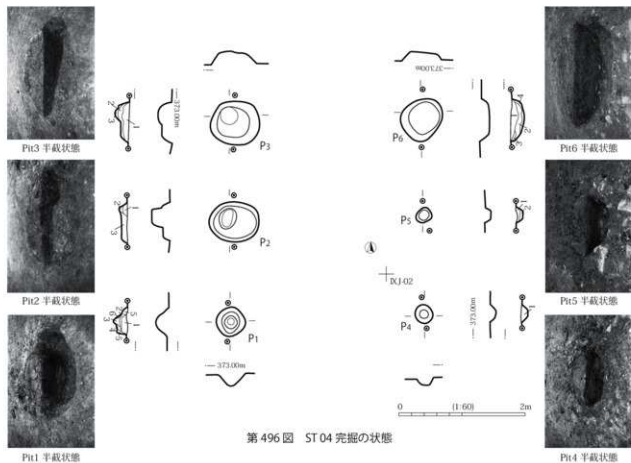
遺構名	土師器		須恵器		黒色土器A	数/総重量 (破片/g)
ST03	甕?	小型甕	杯A?	杯A	杯A	
Pit2	1		1	2	1	5/21.8
Pit4		1			1	2/2.2
Pit6	1			1		2/9.4

第103表 ST03出土土器組成

4号掘立柱建物跡（第496図）

- 時期： 9世紀代（古代6期～8期?）
- 位置： IX E-21, 22, IX J-1, 2（③区）
- 重複： なし
- 検出経過： 黄褐色砂層上面で、暗褐色土（10YR3/3）及び黒褐色土（10YR3/1）の落ち込みを確認した。それぞれの落ち込み位置から掘立柱建物跡を想定し調査した。
- 規模： 平面形は2間×1間の側柱式の南北棟。桁行2間3.2m、梁行1間（3.06m）。床面積9.8㎡。主軸N-2.5°-W。
- 柱穴： 柱筋の通りがよい。平面形は円形を基本とし、70cm前後の柱穴（Pit2・3・6）と上部を大きく削平した径24cm-29cmの小さな柱穴（Pit4・5）からなる。断面形態は、底部に段を持つ西桁（Pit1・2・3）と底部が平坦な形状を示す東桁（Pit4・5・6）に分けることができる。ただしPit3は、やや隅丸方形に近い円形で、底部でも壁面に段を持つ点で他のPitと異なる。Pit3の埋土は、下層に粘性のある黒褐色土（10YR3/1）が堆積し、その上に灰褐色ブロックを含む砂混じりの暗褐色土（10YR3/3）がレンズ状に堆積、さらに上層に明褐色砂質ブロックを含む暗褐色土（10YR2/3）が水平に重なる。
- 柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行161cm（156cm-164cm）、梁行304cm（302cm-306cm）。
- 出土遺物： Pit2からは、黒色土器Aの杯形土器A類口縁部破片1片、甕形土器腰部破片2片が出土している。いずれも、微細な小破片であり、混入物と考えられる。

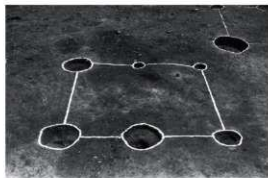
所見： ST 03 の南に位置し、同軸、同規模、同形状であり、造営精度も同様に高い。ST 03 と本跡は棟続きとも考えられるが、両跡の間隔が1間 160cmを越え 240cm 前後となるため、別棟として考えた。



第 496 図 ST 04 完掘の状態



ST 04 全景 (完掘)



ST 04 全景 (白線入り)

Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色補記号	柱材の有無	出土遺物	切合	備考
1	円	B	46	44	20	e?	1層 10YR3/3, 2層 10YR3/1, 3層・4層・6層 10YR6/2, 5層 10YR4/4	—	なし	なし	
2	楕円	A	78	64	27	d 3?	1層・2層 10YR3/3, 3層 10YR3/2	—	土師器杯 A	なし	
3	円	B2	76	68	22	b	1層・2層 10YR3/3, 3層 10YR3/1	—	なし	なし	
4	円	A	29	27	9	a	10YR3/1	—	なし	なし	
5	円	A	24	24	11	b	1層 10YR3/3, 2層 10YR3/1	—	なし	なし	
6	円	A	66	64	16	b	1層・2層・4層 10YR3/3, 3層 10YR5/8	—	なし	なし	

第 104 表 ST 04 柱穴属性

遺構名	土師器	黒色土器 A	数 / 総重量 (破片/g)
ST 04	壺	杯 A	
Pit2	2	1	3/12.4

第 105 表 ST 04 出土土器組成

5号掘立柱建物跡 (第497図・第498図)

時期： 9世紀前半? (古代5期~7期?)

位置： VII X-25, Y-21 (②区)

重複： なし

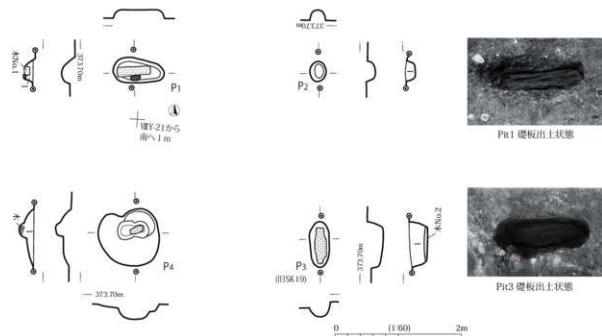
検出経過： 調査はPit3をSK19とし、Pit4はまた別の土坑として調査した。しかしながら、土坑の配置からひとつの掘立柱建物跡を想定した。

規模： 平面形は1間×1間の側柱式の東西棟。桁行1間(302cm)×梁行1間(254cm)。
床面積77.67㎡。N-3.5°-W。

柱穴： 柱筋の通りはよいが、Pit2がややずれる。平面形は楕円形を呈し、断面形はPit4が底部に段を有するが、他は平坦なタライ状である。4基中3基に礎板が残存し、その内2基(Pit1・3)は残りがよい。掘り方は礎板の形状に沿って掘られているのが特徴。Pit1では礎板中心部の底面の横に、固定のためと推定できる裏込め様の礫がある。埋土は単層で粘性が強く、締まりのある褐灰色粘土(10YR4/1)。

柱間寸法： 平均柱間寸法 桁行297cm(290cm~304cm)、梁行259cm(252cm~266cm)。

出土遺物： Pit1・3より礎板が出土。Pit4より割材が出土している。Pit1とPit3の礎板ともに分割材で樹種はケヤキである。Pit1の礎板(第498図1)は、裏面を表にして使用している。上端はやや山形に切断され、斧痕跡が残る。全体に腐蝕がすすんでいて表面の加工がはっきりしない。炭素年代は744±40年AD。Pit3の礎板(第498図2)は、下端を木目に対し垂直に切断し、上端は腐蝕が進み切断面がはっきりしない。裏面を表にして使用される。表面は一部に面取り加工(5単位)が残されていることから、柱材を分割して礎板に使用したと考えられる。分析年代は844±40年ADとPitに比べて100年程度の違いがある。Pit4からは割材で角状の木片(第498図3)が出土している。一端は木目に対し、垂直に切断された痕跡が残る。樹種はケヤキ材で、底面から出土していることから判断し、礎板と考えられる。



第497図 ST 05 完掘の状態



ST 05 全景 (完備)



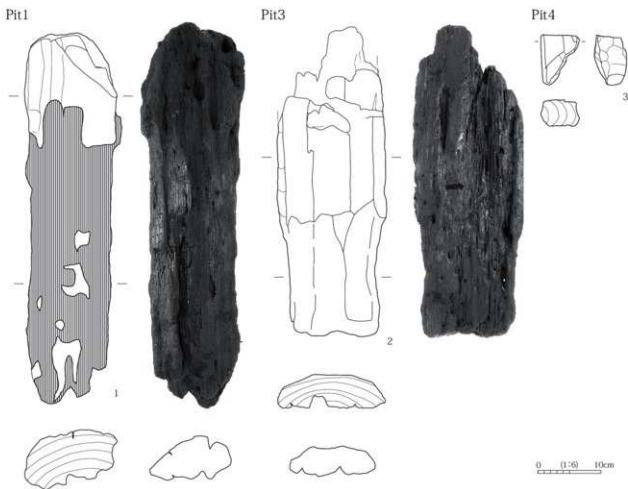
調査風景

Pit番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色標記号	柱材の有無	出土遺物	切合	備考
1	楕円	A	80	39	18	a	注記なし	—	礎板	なし	
2	楕円	A	31	24	18	a	10YR1/4	—	なし	なし	
3	楕円	A	72	29	23	a	注記なし	—	礎板	なし	旧 SK 19
4	楕円	B2	96	76	24	a	注記なし	—	角材?	なし	(ST 08 Pit4)

第106表 ST 05 柱穴属性

検出番号	Pit番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	埋存長 (cm)	幅	厚さ	形状の特徴 (C14年代)
第498図1	1	底面	礎板	分削材 (平丸太)	ケヤキ	58.8	15.3	9.5	礎板分類 Bd 1260 ± 40BP
第498図2	3	底面	礎板	板目	ケヤキ	(49.1)	17.4	5.8	礎板分類 Ca 1160 ± 40BP
第498図3	4	底面	角材?	板目	-	7.9	6.2	4.2	角状の木片

第107表 ST 05 出土木製品組成



第498図 ST 05 出土の木製品 (Pit1・Pit3・Pit4 出土の礎板材と角材)

6号掘立柱建物跡 (第499図)

時期： 9世紀以前? (古代6期以前?)

位置： XE-17, 22 (③区)

重複： なし

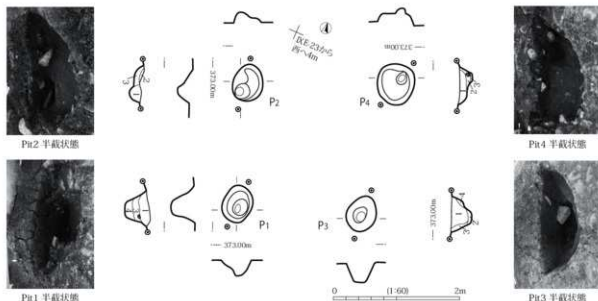
検出経過： 礫を多く含む黄褐色砂層上面に暗褐色土 (10YR3/3) の落ち込みを確認した。その形状及び配置から掘立柱建物跡を想定し調査した。

規模： 平面形は1間×1間の側柱式の東西棟建物。桁行1間 (192cm)、梁方向1間 (190cm)。床面積 3.65 m²。主軸 N-68°-E。

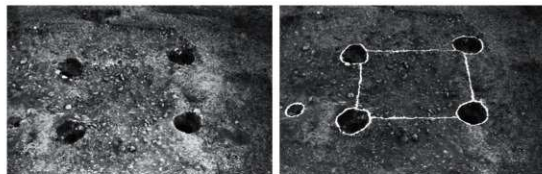
柱穴： 東梁行の柱筋の通りが悪く、やや台形状の不整形な建物となる。各柱穴の平面形は、楕円状を呈する。Pit2及びPit4は、断面に段を有する形態。Pit2の埋土は3層に分層でき、柱痕は暗褐色 (10YR3/3) の砂混じりの粘質土で、焼土粒子を混じる。埋土の下層は黄褐色の砂を多く含む暗褐色土 (10YR3/3)。その上層は、柱痕の土質と類似しているが、やや小粒の焼土が混じる層が堆積していた。Pit3は底部が平坦。Pit1は堆積状況が水平に3層に堆積していて他のPitと性格を異にしている。全体に埋土は3層から4層に分層でき、暗褐色土を基本としてブロック土、礫、焼土粒などの混入がある。

柱間寸法： 平均柱間寸法は桁行 225cm (194cm・256cm)、梁行 210cm (186cm、224cm)。

出土遺物： Pit1は、土師器の杯A類体部破片1片、甕形土器体部破片1片が埋土中より出土。



第499図 ST06 完掘の状態



ST06 全景 (完掘)

ST06 全景 (白線入り)

Pit番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色標記号	柱材の有無	出土遺物	切合	備考
1	楕円	C	59	50	34	b	1層・3層・4層 10YR3/3	—	土師器杯 A 土師器椀 B	なし	
2	楕円	H	64	45	22	d	1層・2層・3層 10YR3/3	—	なし	なし	
3	楕円	D	58	46	34	e	1層・3層 10YR3/3, 2層・4層 10YR7/2	—	なし	なし	
4	円	C	64	60	25	b	1層 10YR3/3, 2層 10YR6/6, 3層 10YR7/2	—	なし	なし	

第108表 ST 06 柱穴属性

遺構名 ST 06	土師器		数/総重量 (破片/g)
	椀 B	杯 A	
Pit1	1	1	2/6.6

第109表 ST 06 出土土器組成

7号掘立柱建物跡 (第500図)

時期：9世紀前半～？(古代5期～?)

位置：ⅤY-16, 21 (②区)

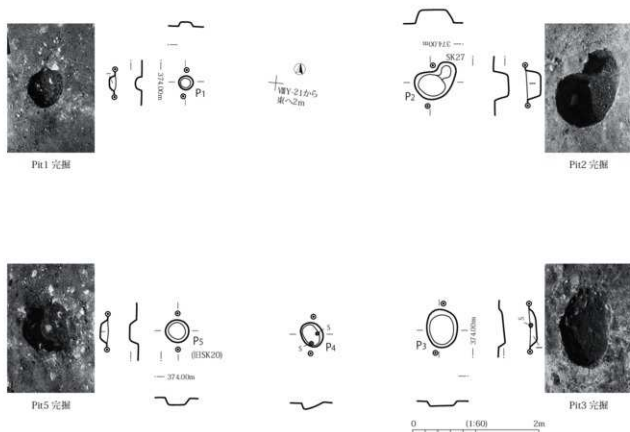
重複：5号掘立柱建物跡と切り合う。新旧関係は不明。

検出経過：黄褐色砂礫層上面で黒色粘土(N2/O)の落ち込みを確認する。5基の土坑として調査したが、配置から掘立柱建物跡と認定した。

規模：平面形は、南桁中央 Pit4 に対応する北桁の Pit が確認できなかったが、2間×1間の側柱式の東西棟と推定できる。桁行2間(412cm)、梁行1間(388cm)。

床面積 16㎡。主軸は、N-30°-Wを指す。西側に隣接する ST 10 とほぼ同軸方向である。

柱穴：平面形は円形及び楕円形状を呈する。断面形は底部が平坦なタライ状。規模は長径が22～



第500図 ST 07 完掘の状態

57cm。深さは10cm～21cmと比較的浅い。特にPit1・4・5は小規模である。埋土は単層で、粘性の強い黒色粘土層(N2/O)で、鉄分が多量に沈着する。

柱間寸法： 平均柱間寸法は、205cm(200cm～210cm)、梁行390cmである。

出土遺物： なし

Pit番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の種類	土色標記号	柱材の有無	出土遺物	切合	備考
1	円	A	22	20	13	a	N2/O	—	なし	なし	
2	円	A	43	?	21	a	N2/O	—	なし	SK 27を切る	
3	楕円	A	57	46	12	a	N2/O	—	なし	なし	
4	楕円	D	40	33	10	a	N2/O	—	なし	なし	
5	円	A	34	34	13	a	N2/O	—	なし	なし	旧SK 20

第110表 ST 07 柱穴属性

8号掘立柱建物跡(第501図)

時期： 8世紀前半? (古代2期・3期?)

位置： IX D-17, 18, 22, 23 (③区)

重複： SK 842, SK 855, SD 74に破壊される。SD 56～59, SD 77との切り合いは不明である。ST 32と重複するが、新旧関係は判然としなない。

検出経過： 遺構密度の高い③地区で、黄褐色砂層上面にて暗褐色土の円形状の落ち込みを確認、土坑と判断し調査した。調査中、土坑の位置が等間隔に配置し、方形状に筋が通る建物跡を想定してきたため、本跡を掘立柱建物跡と判断した。

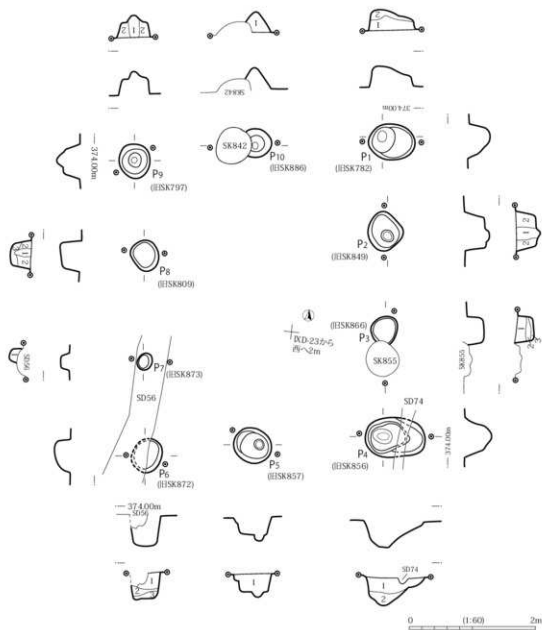
規模： 平面形は3間×2間の側柱式の南北棟。桁行3間(425cm)×梁行2間(390cm)。床面積16.6㎡。主軸はN-8°-Wを指す。

柱穴： 柱筋は少し乱れた直行である。柱穴の平面形は楕円形及び円形が基本。断面は底部が平坦でタライ状の形態を呈する例と、底部に段を有する例がある。規模は長軸が44cm～92cm、深さは23cm～46cmを測る。Pit7は、SD 56と切り合があり、調査経過上、上面を削平してしまった。埋土は、ほぼ暗褐色土(10YR3/3)を基本とし、単層から3層に分層してきた。Pit2及びPit8は、柱の痕跡が比較的しっかり残っている。Pit8の柱痕跡は、痕径12cmを測り、炭化物の多く混じった暗褐色土(10YR3/3)である。痕跡外の埋土は、底部に黄褐色土(10YR4/3)が堆積し、上部に白色粘土ブロックを混じった暗褐色土(10YR3/4)が堆積していた。

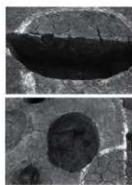
柱間寸法： 平均柱間寸法は桁行158cm(150cm～170cm)、梁行191cm(180cm～200cm)。

出土遺物： Pit3の埋土中から、板目取りの板材(15.5×4.8×1.5cm)と考えられる木片が出土した。礎板の破損品であろうか。

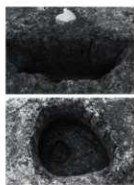
所見： 梁と桁が密着には直行しない。梁は2間規格で、北梁、南梁とも東側の柱間寸法が西側よりやや長い。したがって、棟木もやや東側にずれ、西側の垂木が長かった可能性も考えられる。構図の精度が高いとは言えない。



第 501 図 ST 08 完掘の状態



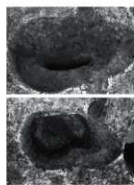
Pit1 半載及び完掘状態



Pit2 半載及び完掘状態



Pit3 半載状態



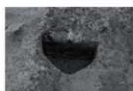
Pit4 半載及び完掘状態



Pit5 半載及び完掘状態



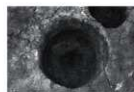
Pit6 半載及び完掘状態



Pit7 半載及び完掘状態



Pit8 半載及び完掘状態



Pit9 完掘



Pit10 半載状態

Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の 分類	土色感記号	柱材の 有無	出土 遺物	切合	備 考
1	楕円	B2	73	56	32	b	1層 10YR3/3, 2層 10YR3/4	—	なし	なし	旧 SK 782
2	楕円	B	62	54	36	d	1層 10YR3/3, 2層 10YR3/4	—	なし	なし	旧 SK 849
3	円	A	44	40	24	b	1層 10YR3/3, 2層 10YR4/4, 3層 10YR2/3	—	なし	SK 855 に切られる	旧 SK 866
4	楕円	B2	92	63	46	b	1層 10YR4/4, 2層 10YR3/3	—	なし	SD 74 に切られる	旧 SK 856
5	楕円	B	60	54	37	a	1層 10YR3/4	—	なし	なし	旧 SK 857
6	楕円	A	54	45	23	b	1層 10YR4/4, 2層 10YR3/3, 3層 10YR4/6	—	なし	SD 56 に切られる	旧 SK 872
7	楕円	A	28	22	12	a	1 0 YR3/3	—	なし	SD 56 に切られる	旧 SK 873
8	楕円	A	48	42	34	d2	1層 10YR3/3, 2層 10YR3/4, 3層 10YR4/3	—	なし	なし	旧 SK 809
9	円	B	55	50	36	d	1層 10YR3/3, 2層 10YR3/4	—	なし	なし	旧 SK 797
10	円	D	46	42	34	a	10YR3/4	—	なし	SK 842 に切られる	旧 SK 886

第 111 表 ST 08 柱穴属性

9号掘立柱建物跡 (第 502 図～第 505 図)

時 期： 8 世紀代 (古代 4 期前後)

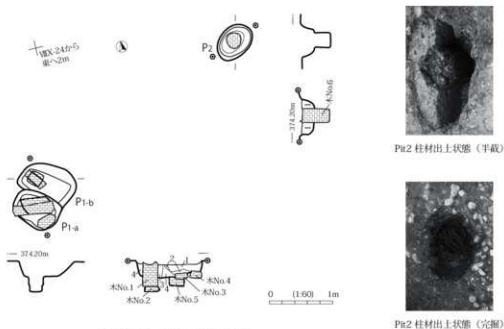
位 置： VIII - 24 (②区)

重 複： ST 10 と重複するが、新旧関係は不明。炭素年代測定結果から判断すると、ST 10 より新しいと考えられる。

検出経過： 黄褐色砂層上面で土坑状の褐色土の落ち込みを数箇所に確認した。落ち込みの位置関係から、明瞭な掘立柱建物跡は想定できなかったが、良好な状態で礎板及び柱材が確認できたことから、建物跡の一部と判断した。

規 模： 平面形は柱穴配置からは推定できないが、東西棟であろうか。柱穴規模及び出土木材の大きさから推定すると大型の建物であった可能性がある。

柱 穴： Pit1 は 2 基の切り合いがあり、Pit1a (新) と Pit1b (古) とする。Pit1b 構築後、沈下に伴う補強のための柱、あるいは上屋の増築に伴う柱として Pit1a が設置されたものか。平面形状は、Pit1 が隅丸長方形、Pit2 が楕円形である。断面は底部に段を有する。規模は長径 64cm ～ 100cm、深さは 25cm ～ 47cm を測る。また柱材周囲の埋土は、褐色土 (10YR4/1) である。



第502図 ST 09 完掘の状態



Pit1 半載状態



Pit1b 柱材出土状態



Pit1a 礎板材出土状態

Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色標記号	柱材の有無	出土遺物	切合	備考
1	隅丸長方形	A	100	84	25	d(i)	1~4層 10YR4/1	—	須恵器蓋 破片 礎板 柱材	なし	
2	楕円	A	64	44	27	d(i)	10YR4/1	—	土師器蓋 B 柱礎	なし	

第112表 ST 09 柱穴属性

遺構名	土師器	須恵器	黒色土器 A	数 / 総重量 (破片 / g)
ST 09	蓋 B	蓋	蓋 B	杯 A
Pit1		1	1	2/13.5
Pit2		1		2/18.2
検出面	1			1/12.6

第113表 ST 09 出土土器組成

探出番号	Pit 番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	取付長 (cm)	幅	厚さ	形状の特徴 (C14年代)
第503図1	1b	底面	柱材	削出	クリ	(40.2)	直径 23.0		柱材分層 Ba 1230 ± 40BP
第503図2	1b	礎板の上	礎板	掘目	サワラ	50.5	14	5.3	礎板分層 Aa
第504図3	1a	底面	礎板	分削材 (平丸太)	クリ	45.6	22.7	12.4	礎板分層 Ca
第504図4	1a	底面	礎板	分削材 (湯釜目部分)	クリ	34.4	18.9	9.6	礎板分層 Cd
第505図5	1a	底面	礎板	板目	-				礎板分層 Bb
	1a	底面	板材?	不明	-	3.1	3.4	0.8	木片
	1a	底面	板材?	掘目	-	3.5	1.7	0.6	木片
第505図6	2	底面	柱礎	削出	クリ	29.8	直径 24.8	20.8	柱材分層 Ba 1160 ± 40BP

第114表 ST 09 出土木製品属性

出土遺物：

Pit1b 第503図1は柱材分類Ba。上部は腐蝕により欠損する。底部は平滑に削られ、工具の刃痕が明瞭に残る。表面は細かく面加工（14面）され、断面は円形に近い。Pit2の柱材6とほぼ同形状、同じクリ材であることから、同一木材から削り出した可能性を考えることができる。年輪の弧の状況から径80cm



柱材の木取りと年輪

以上の大木から加工したと考えられる。C14年代測定は、 774 ± 40 年ADを測定した。2は礎板分類Aa。樹種はサワラ。板材で材に対し下端は垂直に、

上端は斜めに切断される。木目を横切るように刃痕が多く入る。ホゾ孔溝が中心部に約9cm×3cmで2箇所あることから、廃棄した建築材（骨格材）を利用したものと考えられる。

Pit1a 第504図3は礎板分類Ca。上端は材に対して斜め。下端は垂直に切断される。表面は細かく面調整され、断面は半円形に近い。各側面に刃痕が認められる。裏面の刃痕は僅かである。柱材を分割して転用したものであろうか。クリ材。4は礎板分類Cd。表面を上にして据えられていた。樹種はクリ材で、角状に削り出し、5面を取る。上端はV字形に切断し、下端は斜めに切断する。裏は割れ痕跡のみである。木目、表面の加工から、礎板5と同一木材であろうか。分割し板状に作り出したと考えられる。5は礎板分類Bb。本跡の礎板中では最も大きい。4分の1強の分割材を使用し、木元部分にホゾ孔加工の痕跡が3箇所残る。柱からの転用材であろうか。両端は粗く大きく切断され、斧痕跡が残る。樹種はクリ材。

Pit1からの土器は、須恵器杯蓋の返し部の破片1点が出土している。胎土中に白色の微粒子を多く含み、折返しは強い。黒色土器Aの杯形土器A類口縁部破片1片が1点出土しているが、微小破片であり、非ロクロ土師器の可能性もある。時期は古代3～4期、8世紀後半頃比定できるか。

Pit2 6は柱材分類Ba。上部は腐蝕している。底面は平滑化され工具痕が残る。側面は12単位にわたり面的な加工を施す。面の取り方はPit1bの柱材とほぼ同様と観察できる。樹種もクリ材でありPit1と同一の木材から削り出した可能性を示唆できる。C14年代測定結果は、 734 ± 40 年AD。

所見： Pit1・2の柱材は、クリ材で、大木を削り出し使用している。芯持ち材ではなく、狂いが少ない削り出し材とした点は、建築物への何らかのこだわりがあったものと考えられる。礎板材は、不要になった柱材及び骨格材等の建築部材を使用し、またそれらの分割材を据えている。沈下を防ぐ目的のみで製作され、形状等についてのこだわりは見られない。樹種については、柱材と同樹種のクリ材、あるいは、水や湿気に強く、通直に割れる水切れのよいサワラを使用している。

Pit1bでは、礎板が確認できたものの、Pit2では礎板が出土しなかった点が疑問として残る。構築当初からPit1bのみ、地盤の緩さを見越し礎板を据えたものだろうか。現にPit1aでは、3点もの礎板が据えてあるのは、上屋との関連もあるとはいえ、地盤の緩さを意味するものではないだろうか。



Pit1 及び Pit2 出土の柱材

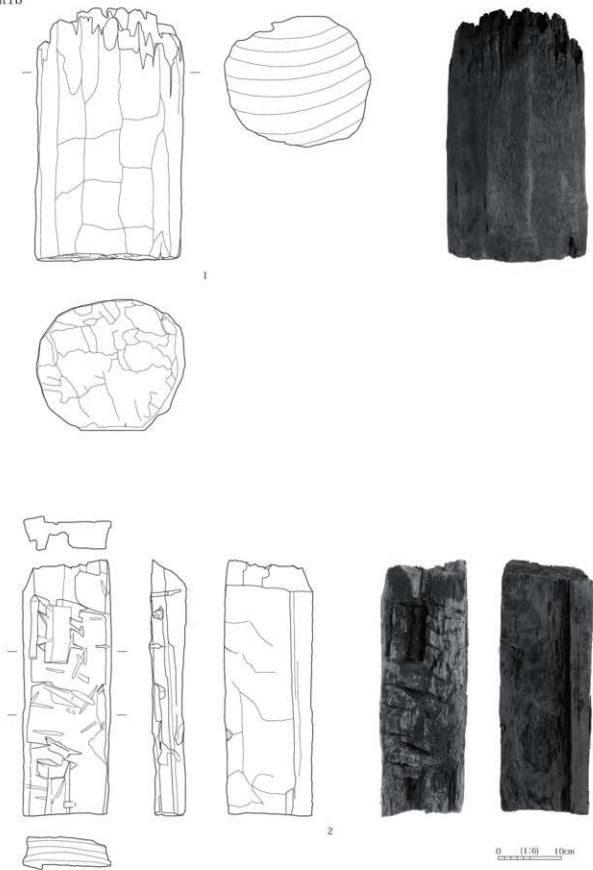


Pit1 出土の礎板材



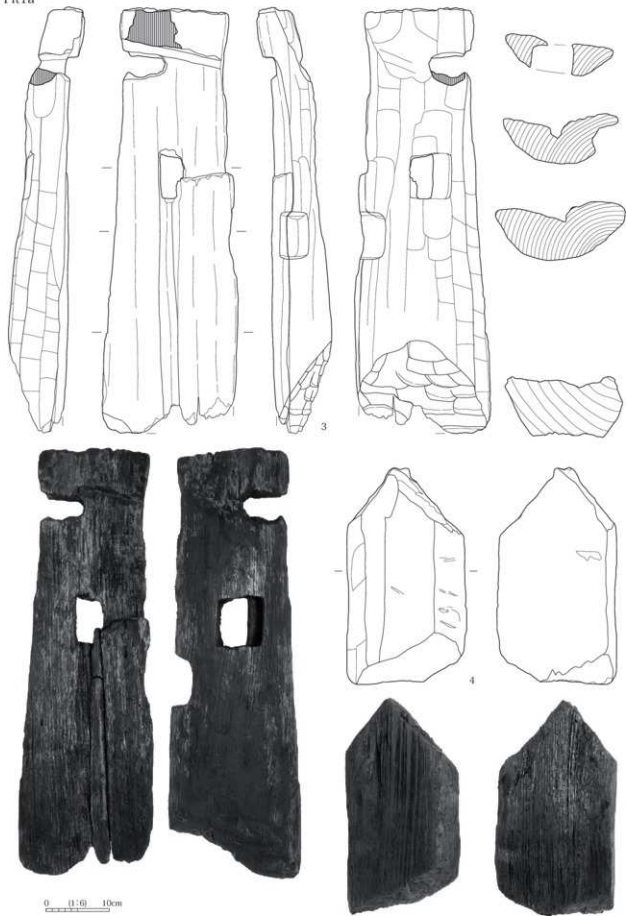
ST 09 出土の柱材と礎板材

Pit1b



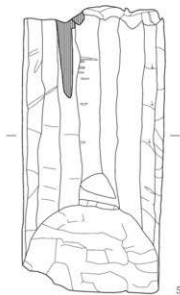
第503図 ST 09 出土の木製品1 (Pit1b 出土の柱材及び板材)

Pit1a



第504図 ST 09出土の木製品2 (Pit1a出土の礎板材)

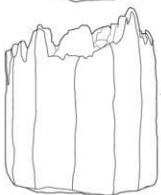
Pit1a



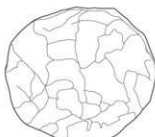
5



Pit2



6



0 (1:6) 10cm

第 505 図 ST09 出土の木製品 3 (Pit1a 出土の礎板材、Pit2 出土の柱材)

10号掘立柱建物跡（第506図～第508図）

時期：8世紀後半～9世紀初頭（古代4期・5期）

位置：ⅧX-19, 24（②区）

重複：SD 25との切り合い関係は不明。

検出経過：黄褐色砂層上面で灰色土（5YR4/1）の落ち込みを確認した。西桁のPit6～9、東桁Pit1は、検出が不明瞭で再度の精査により5cm程面を下げて検出した。本跡北側を東西に走るSD 25との切り合いは、Pit6との重複関係でははっきりしなかった。Pit5では、SD 25に破壊されているように観察できたが、確信はない。北側の梁中央Pit5に対応する南側梁Pitが確認できなかったが、整理作業時に、柱筋からややはずれるもののSK 244が該当する可能性があると考えた。

第506図内には、それを組み入れて図化した。

規模：平面形は3間×2間の側柱式南北棟建物である。桁行3間（570cm）×梁行2間（414cm）。床面積23.6㎡。主軸はN-9.5°-Wを指す。

柱穴：平面形は楕円及び円形を基本とするが、Pit1・2は隅丸長方形である。礎板を据えるため、その形状に沿って掘り込まれたものと考えられる。断面は底部が平坦となるタライ状が基本。長径は36cm～65cm、深さは9cm～36cmを測る。埋土は、締まりが悪く粘性の強い灰色土（5YR4/1）を基調とする。Pit7及びPit8以外は、複層でほぼ水平に堆積する。なお、出土している各Pit内の礎板は、砂質分を含む層より検出した。

柱間寸法：平均柱間寸法 桁行191cm（170cm～210cm）、梁行250cm（204cm～210cm）。

出土遺物：

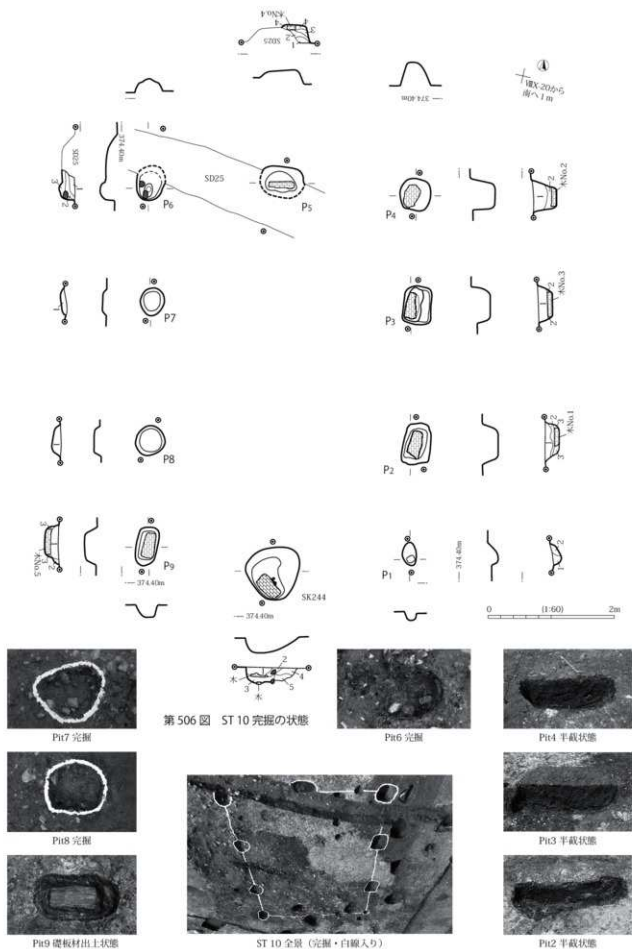
Pit2 第507図1は礎板分類Cd。木の裏面を上面とする。裏面は加工単位が5箇所確認できる。下端はV字状に両面から切断され、上端はほぼ垂直に切断。木目から判断して、Pit4の礎板と同一材からの分割材と考えられる。Pit2からは、土師器甕形土器の体部破片1片（3.2g）が出土している。

Pit3 3は礎板分類C。木の表面は平滑に加工されている。裏面は割れ痕のみである。両端が欠損しているものの、残存する加工面は、やはりPit2に類似していることから、この礎板も同一材からの分割材と考えられる。

Pit4 2は礎板分類Cb。下端は表裏両面から斜めにカットされV字状になる。上端は欠損部分が多いがほぼ垂直に割れている。裏面は割れ痕跡のみが残る。C14炭素年代測定結果は、784±40年ADであった。

Pit5 4は腐蝕が進み全体の形状ははっきりしない。中央に工具の刃痕が残る。礎板の一部か。Pit5からは、須臾器壺形土器と考えられる底部付近の破片1片（15.9g）が出土している。

Pit9 5は礎板分類Ca。芯持ち材の板目辺材部分を使用。両端はほぼ垂直に切断されている。木の裏面は平滑で礎板として使用している。据付痕跡はない。表面には、底面付近の側面に木目に直行する溝状の掘り込みがあり、面加工が施されていることから柱材を分割し、礎板として再利用したと考えられる。C14年代測定は754±30年ADである。またSK 244からは、礎板及び板材のほか、木片3点が出土している。この礎板は、礎板分類Bbに属する。樹種はカツラ材。分割材の辺材部分を使用している。表面の一部を削り、平らな面を作り出している。平らな裏面側を表にして柱を据えるのではなく、木表に加工を施して据えたものか。切断面には斧を斜めに入れ、2回から3回、断ち割った痕跡が残る。この板材は榎目材。



第506図 ST10完掘の状態

両端が欠損している。表面は平滑であり製材された板（壁板か）であろうか。底面から出土していることから礎板の一部として転用した可能性がある。Pit9からは、土師器甕（A類の可能性あり）の体部破片1片（14.5g）が出土している。また本建物に伴う可能性を指摘できる。SK 244からは、土師器甕の体部破片6片が出土している。いずれも混入遺物と判断できるか。



柱材利用の礎板

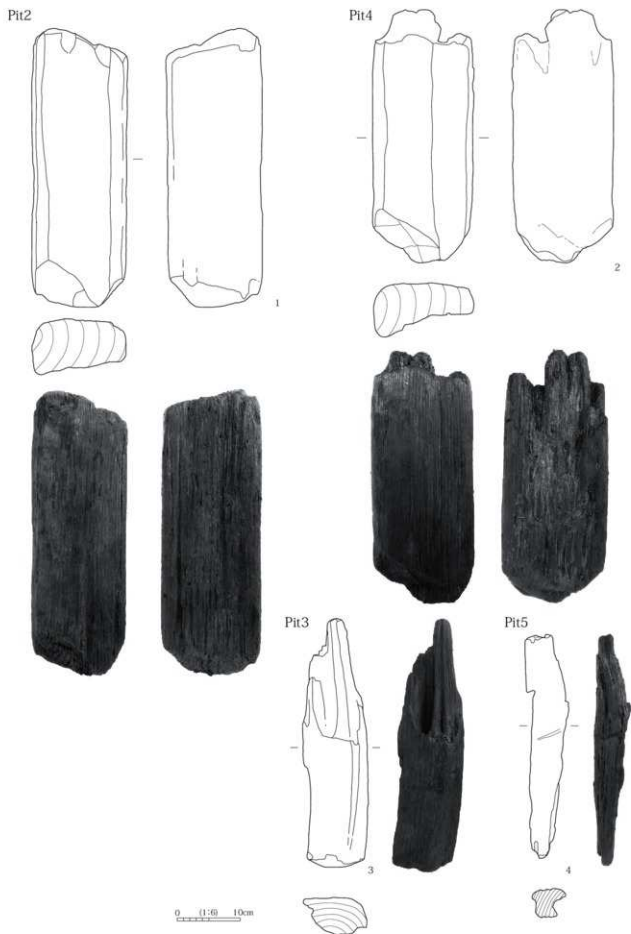
所見：樹種は、Pit5の礎板及びSK 244の礎板がカツラ材であるほか、桁の礎板はすべてクリ材である。このクリ材の礎板は、すでに使用した一本柱を分割し、再利用した可能性が高い。Pit2・3・4の礎板は、前述したように同一材からの分割材であろう。またPit9の礎板には溝があり、他の掘立柱建物跡（ST 30など）にも柱材として出土している「溝あり柱材」の分割材と考えられる。また本跡の出土木製品は、礎板のみで柱材は確認できなかったことから、柱材のみ引き抜かれ、それらは再度、建物の礎板等の材に使用されたものであろうか。

Pit番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色植記号	柱材の有無	出土遺物	切合	備考
1	楕円	D	36	20	15	d3	1層・2層 5Y4/1	-	なし	なし	
2	隅丸長方形	A	65	42	21	b(k)	1層～3層 5Y4/1	-	土師器 礎板材?	なし	礎板
3	隅丸長方形	A	61	42	23	b(k)	1層・2層 5Y4/1	-	礎板	SK 343 を切る	礎板
4	円	D	48	48	36	b(k)	1層・2層 5Y4/1	-	礎板	なし	礎板
5	楕円	A	-	-	29	b(k)	1層・2層・3層 5Y4/1, 4層 5Y2/1	-	須恵器壺 礎板	SD 25 に切られる	礎板
6	楕円	B2	-	-	24	b	1層・2層 5Y4/1, 3層 2.5Y3/3	-	なし	SD 25 に切られる	
7	楕円	A	44	36	9	a	1層 5Y4/1	-	なし	なし	
8	楕円	A	48	45	15	a	1層 5Y4/1	-	なし	なし	
9	楕円	A	62	34	21	b(k)	1層・2層・3層 5Y4/1	-	土師器甕 礎板材	なし	礎板
SK 244	隅丸形	A	84	82	24	b, k	1～5層 10YR4/1	-	土師器甕 B 礎板 板材 4点	なし	礎板 板材

第115表 ST 10 柱穴属性

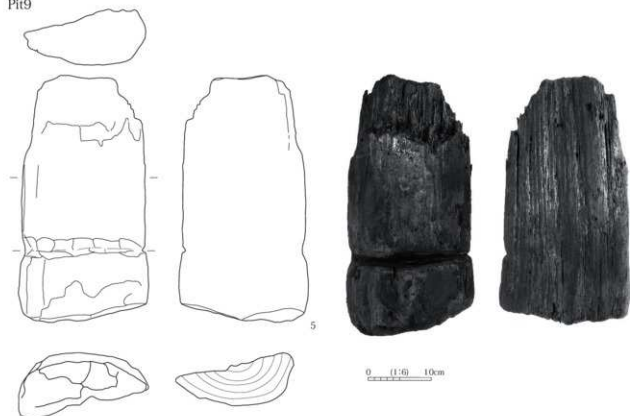
挿入番号	Pit番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅	厚さ	形状の特徴 (C14年代)
第507図1	2	底面	礎板	削出(分割材)	クリ	44.2	15.2	8.9	礎板分類 Cb
第507図3	3	底面	礎板	削出(分割材)	クリ	39.5	10.4	5.9	礎板分類 C
第507図2	4	底面	礎板	削出(分割材)	クリ	40.1	16.0	8.6	礎板分類 Cb 1220 ± 40BP
	4	埋土	割材	みかん割り	-	8.2	3.0	2.1	木片
第507図4	5	底面	礎板	板目	カツラ	35.5	6.9	4.6	形状不明 礎板一部か
第508図5	9	底面	礎板	削出(分割材)	クリ	39.2	20.5	8.8	礎板分類 Ca 1250 ± 40BP

第116表 ST 10 出土木製品属性



第507図 ST 10出土の木製品1 (Pit2～5出土の礎板材)

Pit9



第508図 ST 10出土の木製品2 (Pit9出土の礎板材)



ST 10出土の礎板材

11号掘立柱建物跡・ST11A(第509図)

時期：8世紀中頃～後半？(古代3期ないしは4期?)

位置：XI-3, 4, 8, 9(③区)

重複：SB 02, SK 436, SK 931, SK 1108に破壊される。

検出経過：黄褐色砂礫面で暗褐色及び黒褐色の円形状の落ち込みを確認した。西側桁行きのPit6(旧SK 401)、Pit20(旧SK 418)、Pit12(旧SK 416)は、検出時、SKとして調査し、途中でST 11Bの柱穴としたが、SB 02の調査結果から、本跡に属する可能性を考えた。すなわちSB 02として調査した柱穴3基(Pit8、Pit16、Pit18)及びSK 426、SK 762を本跡に組成させて、1棟の掘立柱建物跡と考える。

規模：平面形は桁行2間(3.93m)×梁行2間(4.1m)、床面積は16㎡を推定する。

主軸はN-85°-E。

柱穴：平面形はほぼ円形状。ただし、Pit6とPit20は隅丸形状で、軸も同方向を示す。断面はタライ状の形態が基本だが、底面に段を有するPit20もある。柱穴の規模はPit12が長軸100cm前後を測るが、大部分は50cm～70cm前後である。深さはPit9(旧SB 02のPit9)が30cmと浅いが、他は43cm～55cmとほぼ一定している。埋土は暗褐色(10YR3/4)及び黒褐色土(10YR3/2)を基調とする。Pit20は柱痕が中央に残り、埋土は炭化物及び白色粘土を僅かに混入する暗褐色土(10YR3/2)。Pit9(旧SB 02のPit18)は東南壁際にある柱痕部分を確認できる。

柱間寸法：平均柱間寸法は梁行197cm(195～200cm)、桁行は213cm(205cm～230cm)で各柱間はほぼ一定。

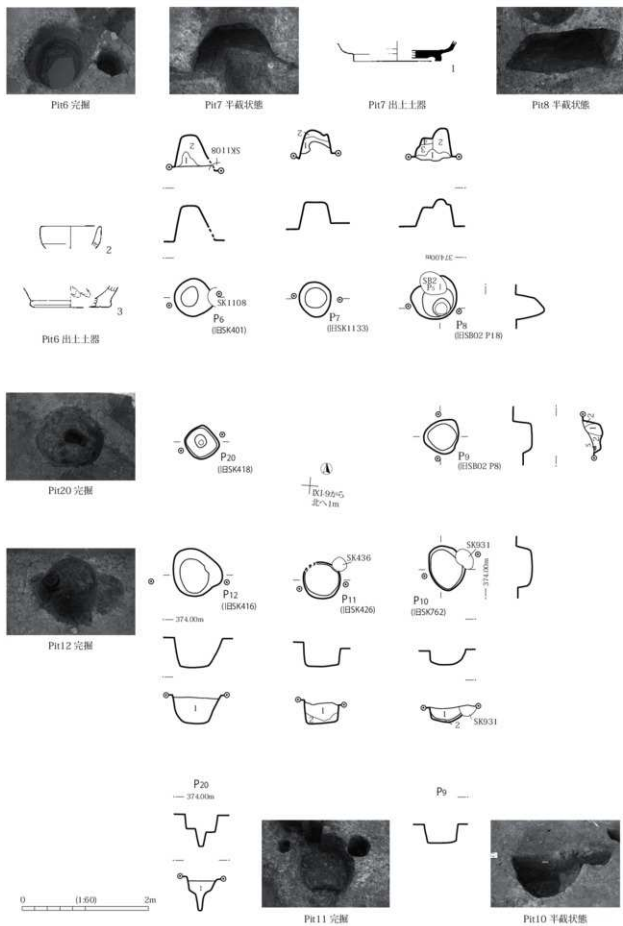
出土遺物：SB 02調査時に確認したPit7～Pit9は、土師器の微小破片を含み、それが食器類であれば新しい要素の混在がある。9期相当のSB 02との重複を考えると、Pit7の非ロクロ土師器杯の体部小破片、須恵器杯B(第509図1)及び蓋形土器の小破片から、6期以前の古い様相と考えるべきか。Pit8では、非ロクロ土師器の杯体部小破片と須恵器杯B類口縁部破

Pit番号	旧Pit番号	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	埋土の分類	土色補記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
6	SK401	隅丸方形	G	60	58	55	b	注記なし	—	土師器A? 須恵器杯A(へら) 黒色土器小破片	SK1108に切られる	
7	SK1133	円	A	50	48	45	b	1層 10YR6/4, 2層 10YR3/4	—	須恵器杯A, 杯B, 蓋 土師器破	なし	～8期
8	SB02 Pit18	円	B	70	70	43	b	1層 7.5YR3/4, 2層 10YR3/4, 3層 10YR3/4, 4層 10YR3/4	—	須恵器杯B 土師器杯A	SB02Pit5に切られる	8期?
9	SB02 Pit8	円	A	56	50	30	d	1層 10YR3/3, 2層 10YR3/4	—	須恵器杯A 土師器杯A 黒色土器A	なし	
10	SK762	楕円	A	74	(54)	23	b	1層 10YR3/4, 2層 10YR4/4	—	なし	SK931に切られる	
11	SK426	円	A	60	57	36	b	1層 10YR6/4, 2層 10YR3/4	—	土師器A?, 蓋B, 蓋F	SK436に切られる	
12	SK416	円	A	100	80	48	a	10YR3/2	—	土師器杯A, 蓋?, 須恵器杯A, 蓋?	なし	
20	SK418	隅丸方形	B	52	46	53	a	10YR3/2	—	土師器A? 須恵器A?	なし	

第117表 ST11A柱穴属性

遺構名	土師器杯A	器	蓋	器A?	器B	器E	黒色土器A小破片	須恵器杯A	杯B	蓋B	器	器C	数/総重量(破片/g)
ST11A													
Pit6			6	1			2	1	2				12/152.3
Pit7	3		2		1	1	1		2	1	1		12/94.3
Pit8	3		6				4		1	1			15/61.4
Pit9			6			1	5		2		1		16/66
Pit11			11		1	1	1		1				15/54.4
Pit12	13	2	21				8		2			1	47/186.8
Pit20				1								3	4/87.4

第118表 ST11A出土土器組成

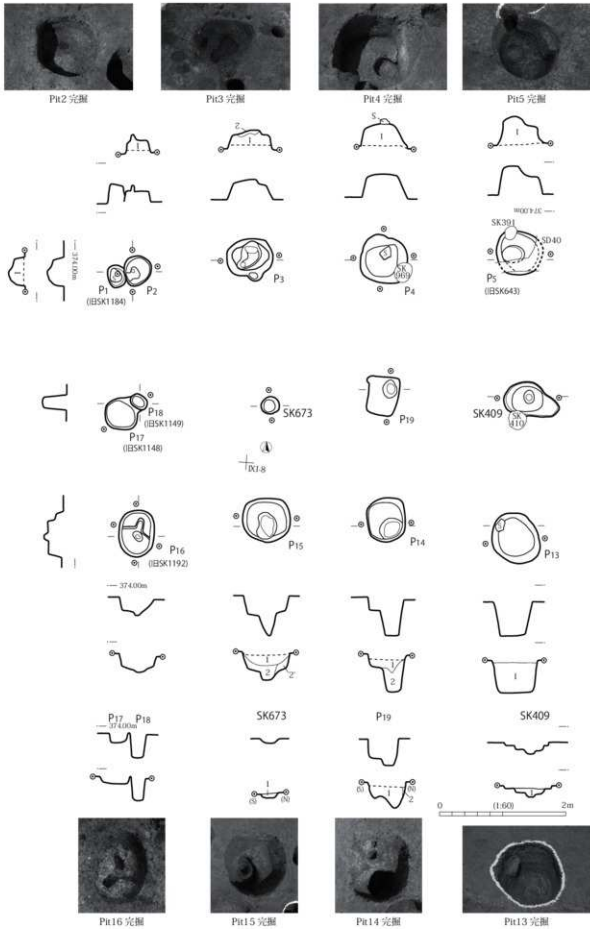


第509図 ST 11A 完掘の状態

- 片、土師器微小破片が出土し、やはり古い様相を示すか。Pit20とPit12(旧SK416)及びPit11(旧SK426)は須恵器へら切り離し調整の杯A類に蓋形土器、黒色土器A杯類の小破片があり、3期前後からの様相が看取できる。Pit6(旧SK401)では非ロクロ土師器杯類(第509図2)と土師器甕形土器(第509図3)の破片が出土している。
- 所見: 本跡は、ST11Bと接する。柱穴規模・形状及び柱間寸法は類似し、ST11Bとのつながりで柱筋を見て通りがよい。後述するが、結論としてはAとBを合わせて1棟として扱いたい。この場合、6間×2間の巨大建築物が想定できる(P387・P388, 第512図)。なお、本跡を1棟と考えた場合には、当然ながら図示したように梁行と桁行との関係は逆になる。本跡の北側に南北棟のST16、ST32が直行することから、規則性を持った配置の中に位置づけた建物とみることができると考えられる。

11号掘立柱建物跡・ST11B(第510図・第511図)

- 時期: 8世紀中頃～後半?(古代3期ないしは4期?)
- 位置: XI-2, 3, 7, 8(③区)
ST11Aより1間分東側に位置する。
- 重複: ST12、SD40と重複し、SD40に破壊される。ST12との切り合い関係はないが、ST12が古いと考える。ST12は梁行2間でほぼ本跡と同規模で、南東方向1m前後に位置することから、建て替えと判断したい。
- 検出経過: 黄褐色砂層面で黒褐色土の落ち込みを確認した。検出時、個別に検出していたSK1192及びSK1148を含め、柱状の落ち込みが規則的に認められたことから、掘立柱建物跡の存在を想定し調査した。旧Pit1から旧Pit4、Pit6である。その後、SK1184とSK1149を確認したことから、西の梁側は柱穴状土坑の重複があると判断し、それらを含めて建物跡を想定した。この他、SK409を東側梁柱に加えた。前述したST11Aとの関係から、Pit7～Pit9を本跡から切り離して考えた。結果、Pit1(旧SK1184)、Pit2(旧ST11Pit1)、Pit3(旧ST11Pit2)、Pit4(旧ST11Pit3)、Pit5(旧SK643)、Pit13(旧SK422)、Pit14(旧ST11Pit5)、Pit15(旧ST11Pit6)、Pit16(旧SK1192)、Pit17(旧SK1148)、Pit18(旧SK1149)、Pit19(旧ST11Pit4)、さらにSK673とSK409を組成させるか。
- 規模: 平面形は3間×2間の総柱式の東西棟、桁行3間(6.0m)×梁行2間(4.2m)、床面積は25㎡。主軸はST11A同様にN-85°-Eを指す。
- 柱穴: 柱筋の通りは比較的よい。平面形は、ほぼ円形及び隅丸方形のPitを基本とする。断面形態は、タライ状で底面が平坦なもの。底部中央部、あるいは壁際に柱痕部を有するもの。砲弾状に掘られている柱穴など、3つの形態が確認でき定型化していない。規模は、長軸で27cm～88cm、深さ40cm～60cmを測る。特に南桁は、ほぼ規模が類似、形状も隅丸方形の柱穴が並ぶ。中柱のSK673とSK409は、浅く小規模の柱か。互いに隣接しているPit1(旧SK1184)とPit2、Pit17(旧SK1148)とPit18(旧SK1149)は、浅いPitと深いPitが組み合わせられた例か(連結柱か)。埋土は単層で黒褐色粘土質(10YR3/2)を基調とする。Pit14及びPit15は2層に分層でき、黒褐色粘土の下層に10YR5/3が堆積。
- 柱間寸法: 平均柱間寸法は桁行200.6cm(190-225)梁行216.6cm(190～243)である。
- 出土遺物: 埋土中からは、SK673を除き、すべてから土器が出土している。Pit1からは須恵器杯蓋、土師器の甕形土器(非ロクロ土師器の杯?)破片が出土し、Pit2は須恵器杯Aと甕形土器破片、



第510図 ST 118 完掘の状態

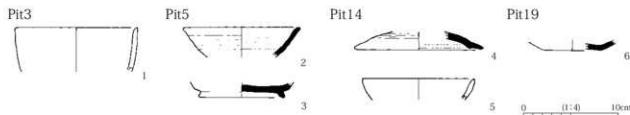
Pit3は非ロクロ土師器の杯口縁部破片(第511図1)に黒色土器A杯A類の底部破片、土師器小破片が出土、Pit4は非ロクロ土師器の杯または鉢破片に土師器甕形土師器の破片、須恵器杯A及び蓋形の破片がある。Pit5は須恵器杯A口縁部破片(第511図2)と杯B底部破片(第511図3)、土師器甕形土師器破片があり、Pit13は黒色土器A杯A?と土師器小破片が、Pit14では非ロクロ土師器の杯口縁部破片(第511図5)と須恵器杯A及び蓋形土器A類の破片(第511図4)がある。Pit15は非ロクロ土師器の杯、土師器甕の破片がある。Pit17からは須恵器甕の口縁部破片、Pit18では土師器甕小破片がある。Pit19からは黒色土器A?と土師器の磨耗著しい小破片、須恵器杯A類底部破片(第511図6)がある。その他、本跡に組み込む可能性を考えたSK409からは黒色土器碗の底部破片及び土師器杯A類の体部破片があり、本跡の他の柱穴出土土器よりも新しい。SK673とともに、本跡とは別のSKか、古代2期あるいは3期頃の様相であろうか。

Pit番号	旧Pit番号	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	高さ(cm)	堆土の分類	土色標記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK1184	円	(G)	34	(26)	—	—	—	—	土師器甕? 須恵器甕	なし	
2	ST11 Pit1	円	B	48	44	31	a	10YR3/2	—	須恵器杯A 杯A	なし	
3	ST11 Pit2	楕円形	A	70	68	33	b	1層 10YR3/2, 2層 10YR5/3	—	土師器杯A 須恵器杯A 非ロクロ土師器鉢?	なし	4期も可
4	ST11 Pit3	楕円形	A	84	76	53	a	10YR3/2	—	土師器小型甕A 杯A 非ロクロ土師器鉢	SK969に切られる	
5	SK643	円	A	74	68	46	a	10YR3/2	—	須恵器杯A 杯B 土師器甕B	SD40に切られる	
13		円	A	84	74	53	a	10YR3/2	—	黒色土器A 土師器甕B	なし	4期~
14	ST11 Pit5	楕円形	G	69	60	58	b	1層 10YR3/2, 2層 10YR5/3	—	非ロクロ土師器杯C 須恵器杯A 杯B 蓋 土師器甕B 須恵器杯A 非ロクロ土師器杯C	なし	4期も可
15	ST11 Pit6	楕円形	B	74	70	44	b	1層 10YR3/2, 2層 10YR5/3	—	土師器杯A 甕?	なし	4期も可
16	SK1192	楕円	B	73	55	28	—	—	—	土師器杯A 甕?	なし	
17	SK1148	円	A	55	46	10	—	—	—	土師器杯A 須恵器甕E 黒色土器A 鉢片	なし	
18	SK1149	円	G	27	22	38	—	—	—	甕?	なし	
19	ST11 Pit4	方形	G	62	48	40	c	1層 10YR3/2, 2層 10YR3/1	—	須恵器杯A 杯B 黒色土器A	なし	
SK409		円	B	88	29	16	a	10YR3/2	—	黒色土器碗 土師器杯A 甕?	SK410に切られる	
SK673		円	D	28	26	7	a	5YR2/2	—	なし	なし	

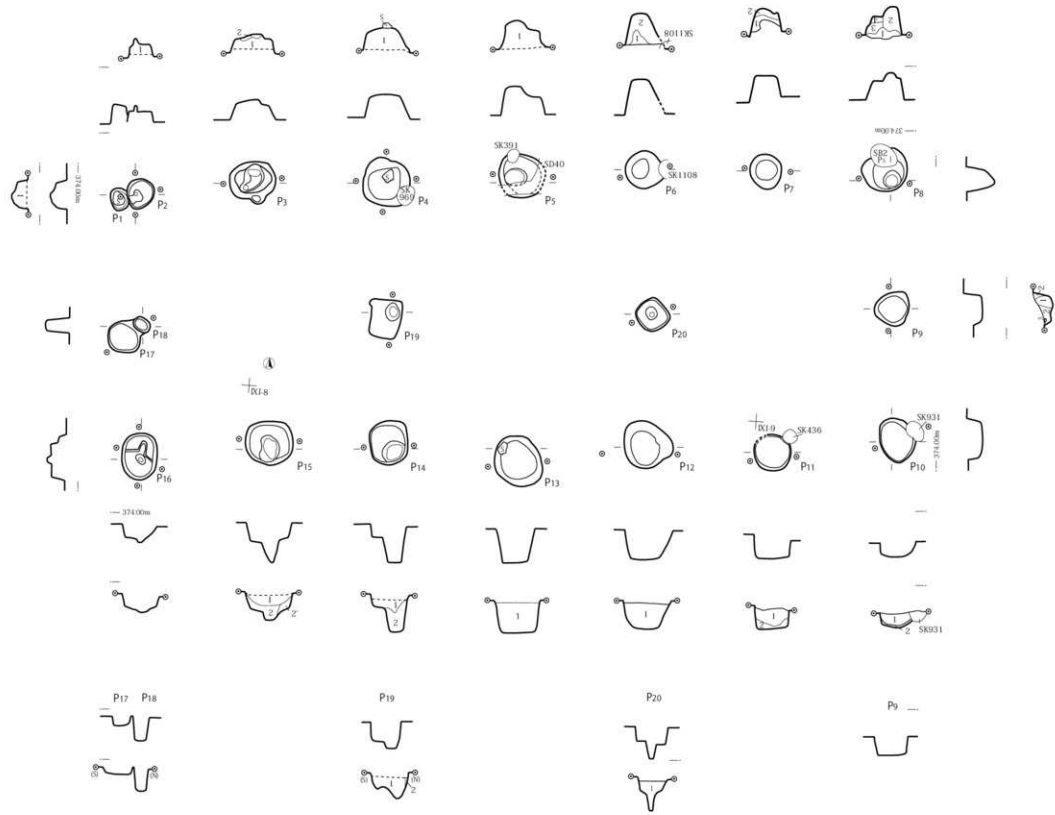
第119表 ST11B 柱穴属性

遺構名	非ロクロ 杯C 不明	土師器										黒色土器A		須恵器					数/総重量 (破片/g)			
		杯A	鉢	甕A	甕B	甕D	甕E	小型甕	小型甕A	不明	杯A	碗	杯A	杯B	蓋A	蓋B	甕	甕C		甕E		
Pit1	1															1					2/19.4	
Pit2																		3	1			5/45.4
Pit3	1	6		3								3									16/69.3	
Pit4			1	1	8			5	4	2								1	2		27/176.1	
Pit5						1															4/73	
Pit13				2		1					7										10/32.8	
Pit14	6			15		2		3	3						5	1	1	3			39/217.3	
Pit15	2	2		7		8		4							3						26/132	
Pit16		9		11																	22/69.5	
Pit17		3			2					1	2								1		9/79.1	
Pit18				2																	2/8.2	
Pit19				3		1		2		1	3		1	2							13/63.2	
SK409		3		2								1	2								10/67.4	

第120表 ST11B 出土土器組成



第511図 ST11B 出土の土器 (Pit3・Pit5・Pit14・Pit19)



第512図 ST 11完掘の状態 (11Aと11Bの連結状態)

11号掘立柱建物跡・ST 11A + ST 11B (第512図)

時期： 8世紀中頃～後半? (古代3期ないし4期?)

位置： K1-2~4, 7~9 (③区)

重複： ST 12と重複し、SB 02、SD 40、さらにはSD 42・SD 43に破壊されるか。

検出経過： 黄褐色砂層面で暗褐色土及び黒褐色土の落ち込みを確認した。ST 11A及びST 11Bの組成を個別に認定したが、東側で検出したSB 02内のPit (本跡のPit7~9)、及びSK 426とSK 762の土坑2基(本跡Pit10とPit11)とも柱筋が通ることから6間×2間の掘立柱建物跡の可能性を整理時に考えた。奈良文化財研究所の山中敏史氏に検討結果についてご意見を頂戴したところ、「両棟間は柱筋も通り、柱穴の形状も隅丸方形とほぼ同様であることや、地方でも6間×2間規模の建物跡もあり得るので、一棟と考えるべき」との所見を頂いた。

規模： 平面形は、6間×2間の側柱式の東西棟建物。桁行6間(1185cm)、梁行2間(420cm)、床面積は50㎡。

柱穴： 平面形は、多くが隅丸方形を呈する。楕円形の柱穴もあるが、隅丸に近い形状と観察した。また、Pit1とPit2、及びPit17とPit18のように添柱を持つ連結柱の場合は、小規模で円形を呈する。断面は、いずれも底部が平坦なタライ状及び底部に柱痕を有する柱穴からなる。規模は、連結柱の柱穴を除き、長軸は50cm~84cm、深さは23cm~58cmを測る。埋土は、暗褐色土(10YR4/3)及び黒褐色土(10YR3/2)を基調とする単層堆積が多いが、柱痕が残り複層となる柱穴もある。Pit9などは中央部に柱痕があり、埋土は炭化物及び白色粘土を含む暗褐色土(10YR3/3)と炭化物が少ない暗褐色土(10YR4/3)が堆積していた。Pit8では東壁際に底部を掘り込んだ柱痕が、またPit6でも埋土中位までほぼ柱痕が残存している。

柱間寸法： 平均柱間寸法は桁行198cm(195~205cm)×梁行208cm(205~215cm)

出土遺物： ST 11AとST 11Bに記載提示した遺物と共通。第118表と第120表を参照。

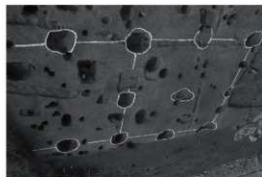
所見： Pit19とPit20は屋内柱穴である。2基とも隅丸方形を呈し、規模や柱の根入れも外回り柱とほぼ同規模である。それぞれ桁行2間飛ばしで、相対する側柱の柱筋上に位置することから壁や扉を取り付けるための間仕切り柱と考えられる。この間仕切り柱により、3室に分けられる。先の山中氏からのコメントでは「官衙にある政庁的な建造物ではなく、田租や出挙の額穀を収納する倉庫等の可能性もある」とする。重複関係にあるST 12に対し、およそ4間近く東北東方向にずれて位置する。主軸がほぼ同方向で、同規模であることから、建て替えが行われたと考えるべきか。本跡北側に南北棟のST 16、ST 32が直行することから、規則性を持った配置の中に位置づけられた建物とみることができる。

遺物名 ST11	計口口 杯C 不明	土師器										黒色土器A				須恵器				数/柱断面 破片(%)				
		杯A	鉢	盤	鉢A	鉢B	鉢D	鉢E	小型A	小型B	不明	杯A	杯	小	小	杯A	杯B	蓋A	蓋B		蓋C	蓋E		
Pit1	1																						2/19.4	
Pit2																								5/45.4
Pit3	1	6		3											3									16/69.3
Pit4			1		8				5	4	2													27/76.3
Pit5								1																4/7.3
Pit6				6	1										2		1							12/152.3
Pit7		3		2		1			1						1									12/94.3
Pit8		3		6											4		1							15/61.4
Pit9				6					1						5									16/66
Pit11				11		1			1						1									15/54.4
Pit12			13		2	21									8									47/186.8
Pit13					2				1						7									10/32.8
Pit14					15		2		3	3														39/217.3
Pit15	6	2		2		7		8	4						2									26/132
Pit16	2			9		11									2									22/69.5
Pit17				3				2							1									9/79.1
Pit18						2																		2/8.2
Pit19						3		1		2					1		2							13/63.2
Pit20								1																4/87.4
SK409				3		2											2							10/67.4

第121表 ST 11出土土器組成



ST 11 調査時の全景 (完備)



ST 11 調査時の全景 (白線入り)

1 2号掘立柱建物跡 (第513図・第514図)

時 期： 8世紀前半? (古代2期・3期?)

位 置： IX1-2, 3, 8 (③区)

重 複： ST 11と重複する。新旧関係は、厳密には不明だが、本跡が古いと考えたい。SK 354、SK 963を破壊する。SK 763には破壊されるか。

検出経過： 黄褐色砂層上で黒褐色の落ち込みを確認した。土坑の規模と形状、その配置から掘立柱建物跡を想定し調査した。

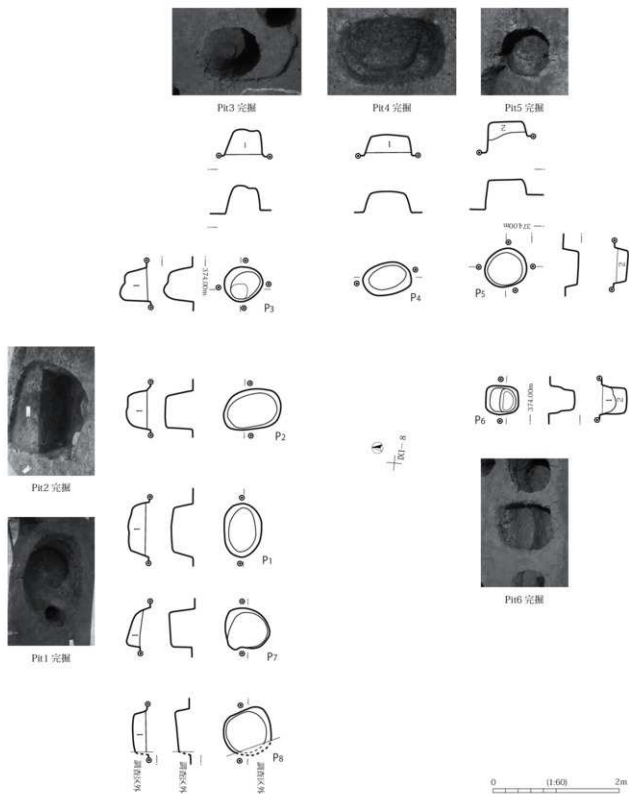
規 模： 西側調査区外に伸び、西南部分は水田化による削平と擾乱等より、北桁 Pit1 と Pit7 に対応する南桁の Pit が確認できていない。4間以上×2間の側柱式の東西棟建物が想定される。桁行7.20 m以上、梁行4.1 m、床面積29.5 m²以上を推定する。主軸はN-85°-E。

柱 穴： 平面形は、楕円及び円形だが Pit6 のみ隅丸形状を呈する。断面は Pit1 及び Pit6 が底部に段を有するほかは、底部が平坦で深いタライ状。長軸が53cm~90cm、深さは20cm~52cmを測る。埋土は Pit6 が2層に堆積しているほかは単層である。土質は粘性が僅かに、淡褐色砂粒を含む黒褐色土 (10YR3/2)、あるいは、やや粘性のあるにぶい黄褐色シルト層 (10YR5/3) である。

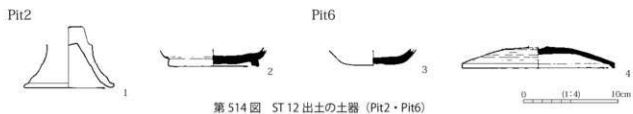
柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行181cm (155~210cm)、梁行210cm (185~235cm)。

出土遺物： 他の掘立柱建物跡に比して出土遺物が多い。押しなべて所属時期は、古代3期から古代4期に位置付けられるか。Pit1より須恵器甕口縁部破片。Pit2より非ロクロ土師器の高杯脚部 (第514図1)、須恵器杯A (ヘラ切り離し) と杯B (第514図2)、土師器甕形土器の破片が出土している。2は凹形外接地の高台で、底面2/3以上をケズリ調整する。Pit3より須恵器及び土師器の甕形土器破片が、Pit4より土師器甕、黒色土器A杯A、須恵器杯A類破片が出土。Pit6より須恵器杯A、甕D類、黒色土器A杯A類の口縁部破片が出土している。3は須恵器杯A類の底部小破片、4は須恵器蓋形土器で、かえし部は低く緩い外反。体部外面は1/2程度のケズリ調整である。

所 見： 重複関係にあるST 11とほぼ同方位で、柱穴も同規模、柱間寸法も大きなずれはないことから、建て替えを行った建物の可能性が高い。したがってST 11と同規模の建物跡を想定すれば、6間×2間の可能性が大きい。検出時ではあるが、ST 11とは床面に近い部分でのレベルが異なるので、建替え時に整地せずに建てた可能性が考えられる。



第513図 ST 12 完掘の状態



第514図 ST 12 出土の土器 (Pit2・Pit6)



ST 12 調査時の全景 (完備)



ST 12 調査時の全景 (白線入り)

Flt 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色層記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	楕円	A	68	63	34	a	10YR3/2	—	須恵前装 鉄	なし	
2	楕円	A	90	65	38	a	10YR3/2	—	須恵前装、杆 A、杆 B 土師前装	なし	
3	円	B-2	60	53	48	a	10YR3/2	—	須恵前装 土師前装	なし	
4	楕円	A	76	48	31	a	10YR3/2	—	土師前装 黒色土器杆 A 須恵前装杆 A 装	なし	
5	円	A	66	58	20	a	2層 10YR5/3	—	なし	なし	
6	方形	B	53	43	52	b	1層 10YR3/2, 2層 10YR5/3	—	須恵前装杆 A、装 D	なし	
7	円	A	70	67	40	—	—	—	なし	なし	
8	円	—	73	60	25	—	—	—	なし	なし	

第 122 表 ST 12 柱穴属性

遺構名 ST12	非開口 高杯	土師器 高杯?	須恵 A 装 B 装 E 小型装 不明					黒色土器 A 杆 A 装 A 小型装		須恵前 杆 A 杆 B 装 B 装 A 装 C 装 D 装 E 小型装					数 / 総量 (破片 / g)				
			装	装 A	装 B	装 E	小型装	不明	杆 A	装 A	杆 A	杆 B	装 B	装 A		装 C	装 D	装 E	小型装
Pit1			1															2/19.2	
Pit2	1	1	5	2		2					3	2	1		2	1		1	21/385.6
Pit3			5		1		1	1									1		10/73.1
Pit4			1	4	3	1	3	5		5	1	3		2			6		34/136.5
Pit6			3					4	1	4	1	1			2				16/137.8

第 123 表 ST 12 出土土器組成

13号掘立柱建物跡 (第515図・第516図)

時期： 9世紀後半 (古代8期以降)

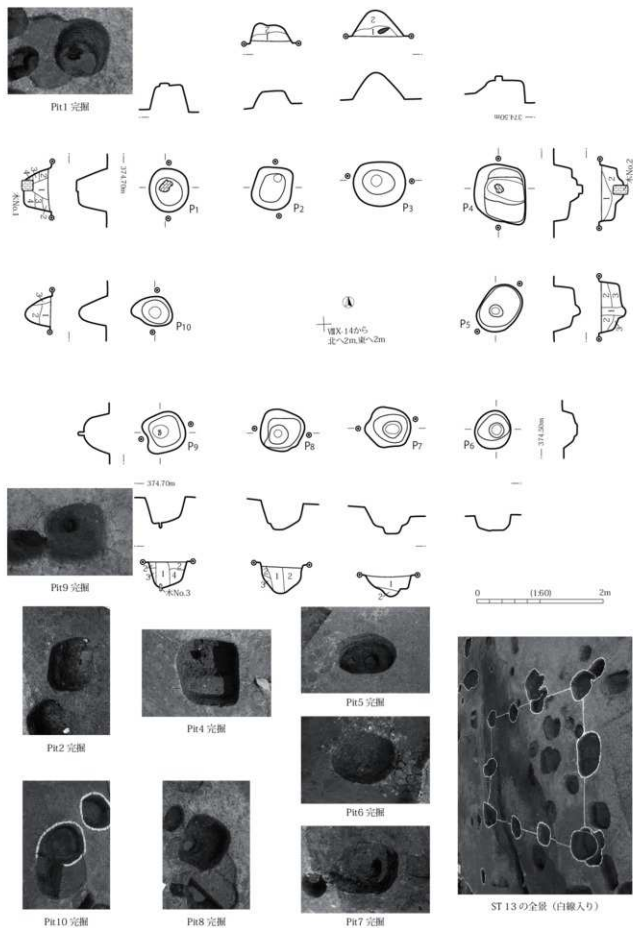
位置： VIII-X-8, 9, 14 (②区)

重複： SB 05 を破壊し、SD 26 (SD 01 の一部) と重複がある。SD との切り合いは不明。

検出状況： 本地区では広い範囲に黒褐色土の落ち込みを認めた。遺構を確認する目的で、検出面より3～10cm程度掘り下げ精査した結果、SD 26 及び柱状の土坑を確認した。調査中に、SD 26 範囲内にも柱状の土坑が存在していたことから、それらとの配列を確認したところ、東西棟と考えられる掘立柱建物跡を想定できた。すでに調査が進行していたことから、個別に土坑として調査した。

規模： 平面形は、3間×2間の側柱式東西棟の建物。桁行3間 (5.3m) ×梁行 (3.9 m)、床面積 20.5 m²。主軸は N-89°-W を指す。

柱穴： 西梁に相当する柱穴、Pit1 (旧 SK 328)、Pit9 (旧 SK 302)、Pit10 (旧 SK 311) に対し、それぞれ SK 349、SK 331、SK 301 が重複する。新旧関係は、いずれも本跡 Pit が新しいことから、西梁部分のみ柱の建て替えが行われたと考えるか、あるいは添索として、追加された可能性を考えるべきであろうか。整理結果では、SK 331 と SK 301 を別の建物跡 (ST 46



第 515 図 ST 13 完掘の状態

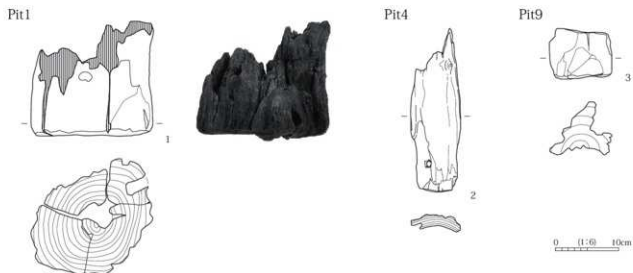
と ST 47)の一部と判断した。柱穴配置は全体的に柱筋の通りがよい。柱穴の形状は、円形及び隅丸方形を基本とし、断面の多くは、底面に段を有する形状である。規模は長軸が 62cm～90cm、深さは 24cm～46cm を測る。埋土は、単層から 4 層に分層できた。Pit1 及び Pit9 は柱材が底面に残存し、その上部に柱痕跡 1 層が明瞭に残る。1 層は炭化物を僅かに含む暗褐色土 (10YR3/3) で、周囲に白色粘土ブロックを含む黒褐色土が堆積する。柱材こそないが、Pit5 も同様か。

柱間寸法： 平均柱間寸法 桁行 176cm (155～195cm)、梁行 194cm (190～200cm)。

出土遺物： Pit1 より柱材が出土している。底部付近は比較的残りはよいが、周囲は腐蝕し全体の形状はつかめない。樹種はクリ材で、長さ 18.2cm × 径 19.3cm を測る。C14 年代測定から、824 ± 40 年 AD (9 世紀中頃から 9 世紀後半) が得られている。Pit2 からは黒色土器 A の杯 A 類底部破片 1 片、Pit5 からは土師器甕形土器破片 1 片、須恵器甕 4 片、杯 A 類 1 片、蓋形土器破片 1 片がある。Pit4 にはクリの柱材があり、柱根の部分木片で、板目部分のみ残る。下部に穴がある。腐食がはげしく表面の加工は観察できない。25.7cm × 7.9cm × 2.0cm を測る。C14 年代測定の結果、864 ± 40 年 AD (9 世紀代)。Pit9 では、土師器小破片 1 片と須恵器甕破片 1 片、柱材と考えられる木片 1 点がある。樹種はクリ材で、8.0cm × 9.9cm × 8.4cm を測る。

Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の 分類	土色層記号		柱材の 状態	出土遺物	切り色い	備考	
							1層	2層					
1	円	A	70	60	44	f	1層 10YR3/3、 4層 10YR2/2	2層 10YR3/4、 3層 10YR2/3	○ 柱材		SK349 を切る		
2	隅丸方形	B-2	66	60	32	b	1層 10YR3/3、 2層 10YR4/3	—	—	開口クワ土師器? 褐色土器 A	なし		
3	円	D	82	70	42	b	1層 10YR3/2、 2層 5Y2/2	—	—	—	なし		
4	隅丸長方形	B	90	80	38	f	1層 10YR3/2、 2層 10YR3/1	—	○ 柱根	—	なし		
5	楕円	B	80	58	40	(db)	1層 10YR3/2、 2層 10YR4/2、 3層 10YR2/2	—	—	須恵器甕、鏝? 杯 A 土師器甕?	なし		
6	円	D	62	56	24	—	—	—	—	—	なし		
7	楕円	B	72	64	35	b	1層 10YR3/3、 2層 10YR2/3	—	—	—	なし		
8	隅丸方形	B	66	64	46	d	1層・2層・3層 10YR3/3	—	—	—	なし	SK273,SK274 を切る	
9	隅丸方形	G	60	60	40	f	1層 10YR2/3、 2層 10YR3/3、 3層 10YR3/2、 4層 10YR3/2	—	○ 柱材	土師器 須恵器甕?、鏝?	なし		
10	不整形	G	65	47	45	b	1層 10YR3/3、 2層 10YR2/3、 3層 10YR3/2	—	—	—	なし	SK331 を切る	方形・抜き取り穴か

第 124 表 ST 13 柱穴属性



第 516 図 ST 13 出土の木製品 (Pit1・Pit4・Pit9 出土の柱材)

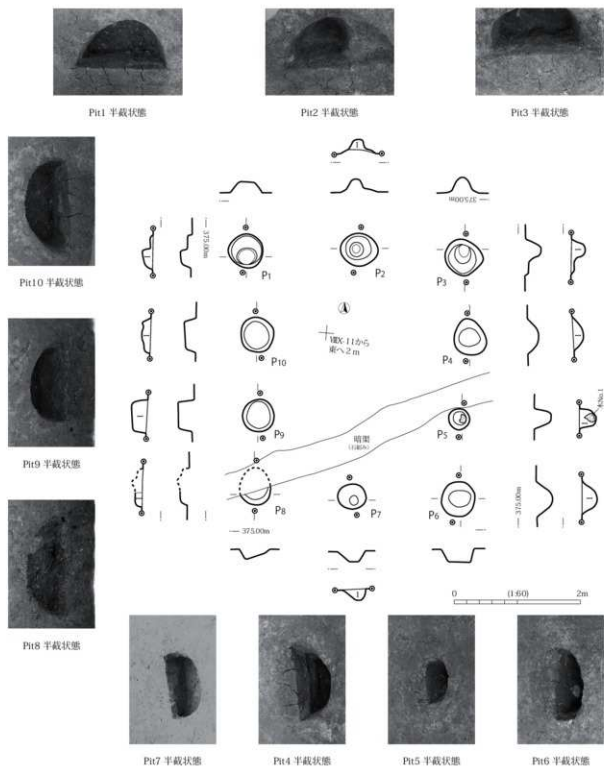
14号掘立柱建物跡(第517図・第518図)

時期：9世紀後半(古代8期以降)

位置：ⅧX-6, 11(②区)

重複：なし

検出状況：黄褐色砂層上面にて灰褐色粘土(10YR4/1)の落ち込みを確認する。落ち込みの配置、形状から掘立柱建物跡を推定し調査した。



第517図 ST14完掘の状態

- 規模：平面形は、3間×2間の側柱式の南北棟建物。桁行3間（3.9 m）、梁行2間（3.45 m）。床面積 13.5 m²。主軸はN-4°-Wを指す。
- 柱 穴：東桁行きの柱筋は比較的通りはよいが、西桁はややずれている。柱穴は円形を基本形とし、Pit1～Pit3は、やや隅丸方形に近い。断面は底面が平坦な形状で、Pit1とPit3は段を有する形態。規模は長径32cm～60cm、深さは10cm～26cmを測る。埋土は、すべて単層でPit8を除いて、粘性が強く鉄分を僅かに含む10YR4/1の褐灰土である。Pit8は黒褐色土（10YR3/2）であるが、暗渠跡の影響を受けたものか。
- 柱間寸法：平均柱間寸法 桁行き128cm（120～140cm）、梁行168cm（160～170cm）。
- 出土遺物：Pit3より須恵器甕形土器破片1片と杯A類破片1片、Pit4より須恵器杯A類破片3片が出土した。Pit5には柱材が残存しており、芯持ち材で樹種はクリ材。割れ、腐蝕が激しく、樹芯の周囲が僅かに残るだけであるが、残部は比較的堅固である。16.5cm×11.2cm×4.9cmを測る。C14年代測定の結果、844±40年AD（9世紀代）を得た。
- 所 見：調査区の北西に位置する。北のSD 01と南のSD 25に挟まれた帯状の部分にあり、建物群の西端にあたる1棟。SD 25を超えて南側に対峙するST 30と同方向の建物で、規則的な配置とも考えたが、それぞれの出土木材の年代値に違いが認められ、同時存在の可能性は少ない。

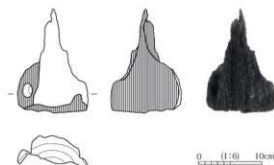
Pit番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色標記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備 考
1	方円形	B-2	55	53	16	a	10YR4/1	—	なし	なし	
2	方円形	C	60	51	16	a	10YR4/1	—	なし	なし	
3	方円形	B-2	58	56	22	a	10YR4/1	—	須恵器類	なし	
4	円	D	56	50	15	a	10YR4/1	—	須恵器杯A	なし	
5	円	G	32	32	26	a	10YR4/1	○	柱材	なし	
6	円	D	56	51	24	a	10YR4/1	—	なし	なし	
7	円	A	44	42	17	a	10YR4/1	—	なし	なし	
8	(円)	A	46	(22)	10	a	10YR3/2	—	なし	なし	
9	円	A	50	50	26	a	10YR4/1	—	なし	なし	
10	円	A	56	52	15	a	10YR4/1	—	なし	なし	

第125表 ST 14柱穴属性



ST 14の全景（白線入り）

Pit5



第518図 ST 14出土の木製品（Pit5出土の柱材）

15号掘立柱建物跡（第519図～第522図）

時期：8世紀前半？（古代2期か？）

位置：ⅧW-19, 20, 24, 25（②区）

重複：なし

検出状況：2002年度、側道部分の調査で確認した。表土及びその下の粘質土を削平したところ明瞭な円形の落ち込み（N3/O）を認めた。数基の配置から掘立柱建物跡を想定し調査した。

規模：西側が調査区外であるため、検出できなかったPitもある。2間×2間あるいは3間×2間の東西棟の建物を推定できる。確認面では、桁行2間（3.98m）以上、梁行2間（3.63m）、床面積14.4㎡以上。主軸はN-91°-Eを指す。

柱穴：礎板の下に柱材が遺存したPitが3基ある。礎板下の柱材を本跡柱位置と考えたと桁行、梁行の柱筋が直行せず、建物の平面形はややいびつになる。しかし、Pit底面の柱材上部の礎板と柱材の位置を考えると柱筋はほぼ直行してくる。建て替えであろうか。各Pitの平面形は、楕円形状を呈し、断面は、柱材の根入れのため底部に段を有する。長径が82cm～106cm、深さ34cm～52cm。埋土はPit3及び4を除き、単層で、粘性が非常に強く、灰褐色砂粒土ブロック及び炭化物を僅かに含む暗褐色粘土（N3/O）が堆積。Pit3及び4は、その下層にほぼ同質の黒色粘土（N1.5/O）を堆積する。

柱間寸法：平均柱間寸法は、桁行193cm（184～202）、梁行168cmである。

出土遺物：3基のPitからは、前述したように柱材の上に礎板が据えられた状態で検出された。柱材はすべてコナラ節で、礎板はクリ材である。礎板と柱材の間には角礫が確認された。礎板押さえの意味があったか。

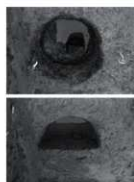
Pit1 Pit1からは土師器甕Bの大型破片5片と非クロコ土師器杯C類の破片1片、須恵器甕破片1片が出土。1の柱材は分類Da。分割材で、角状に削り出し面をとる。上部は腐蝕している。方形孔は縦4cm、横6.5cm、深さ4.7cmで、方形孔間の間材は破損する。隣接する側面2方向より彫り込み、底部木口には切断痕が残る。比較的平滑に切断。C14年代測定から785年ADから885年AD（8世紀後半から9世紀後半）を得た。

Pit2 Pit2からは、土師器杯A類の破片1片が出土。2は柱材で分類Da。木目から判断すると、樹芯を中心に4分割し、さらに面加工、角状にした例と考えられる。断面形は、他のPit柱材に比して、丁寧に方形に形が整えられている。側面には、加工痕が浅く残る。上部は腐蝕。隣接する側面2方向より方形に彫り込まれた両穴は、貫通する。孔にはノミ等で欠いたと思われる加工痕が残る。底部木口は平面に加工が施される。縦5.0cm、横7.0cm、深さ5.8cm。C14年代測定結果は、560年AD（6世紀後半）である。3は礎板で分類Db。一端は垂直に、もう一端は斜めに切断する。木裏を表に据え、柱材の据え付け圧痕は、中心より上部に円状の黒い範囲を確認したものの、はっきりとは確認できなかった。加工した材を切断し再利用したか。

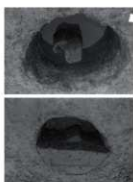
Pit3 4はPit3の柱材で分類Da。Pit1柱材と同様。やはり樹芯を中心に4分の1に分割した材に、面を取って加工する。方形孔（縦4.7cm 横6.5cm、深さ4.2cm）がある。5は礎板で分



ST 15の全景（完備）



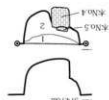
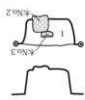
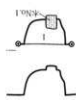
Pt1 平載と遺物出土状態



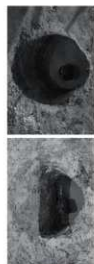
Pt2 平載と遺物出土状態



Pt3 平載と遺物出土状態



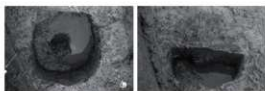
0 (1:50) 2m



Pt4 平載と遺物出土状態



Pt6 平載と遺物出土状態



Pt5 平載と遺物出土状態

第519図 ST15 発掘の状態

類は Db。底部は面を取り、両端に切断痕がある。加工面を下に据える。Pit2 同様、加工材を切断して再利用したと考えられる。C14 年代測定では、725 年 AD、740 年 AD、770 年 AD (8 世紀代)。

- Pit4 Pit4 からは、須恵器破片 1 片が出土した。6 は柱材で分類 Cb。分割材で、多角形に削り出された材か。さらに分割 (半割) され、角状を呈している。そのため、他の柱材よりも大きさが小さい。上部は腐蝕。底部は平坦に加工され、端の角を落としている。面加工も施され、磨耗するが、刃当て痕が側面随所に残る。他の Pit 内出土の柱材と異なり、方形孔はなく、底面付近の側面に木目に直行するように溝状の切り込みを持つタイプ。しかし、溝は分割されたため半周しているのみ。C14 年代測定の結果、540 年 AD の年代値を得る (6 世紀半ば)。
- Pit5 Pit5 の 8 は柱材で、分類 Da。Pit2 出土の柱材とほぼ同じ形状を持つ。上部は腐蝕。隣り合う面で方形孔があり、貫通する。孔にはノミ等で欠いたと思われる加工痕が残る。方形孔縦 8.0cm、横 4.5cm、深さ 8.0cm を測る。木口にあたる底部は平面に加工。C14 年代測定で 725 年 AD、740 年 AD、770 年 AD を得る (8 世紀代)。7 は礎板で、分類 Aa。縦横 15cm 前後。加工材を切断して再利用したものか。一端は垂直に、もう一端は斜めに切断し、4 面に面取りされる。
- Pit6 Pit6 の 9 は柱材で、分類 Da。分割材で、方形孔を持つ多角形の柱材を半割し、角状に整形する。方形孔は分断され、溝形状となり、材は角材に近い。縦 5.2cm、横 5.0cm、深さ 3.2cm の方形孔。C14 年代測定で 690 年 AD、755 年 AD を得ている。

Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色標記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	楕円	B	82	65	40	f	N3/0	○	柱材 土師器壺 B 非口クロ土師器杯 C	なし	
2	楕円	B	84	72	42	f	N3/0	○	柱材 礎板 土師器杯 A	なし	
3	楕円	B-2	91	72	52	f	1 層 N3/0, 2 層 N2/0	○	柱材 柱材 (横木) 須恵器杯 A	なし	
4	楕円	B	106	86	40	f	1 層 N3/0, 2 層 N2/0	○	柱材 須恵器壺	なし	
5	楕円	B-2	85	78	44	f	N3/0	○	柱材 礎板	なし	
6	楕円	B	103	78	34	f	N3/0	○	柱材	なし	

第 126 表 ST 15 柱穴属性

挿入番号	Pit 番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴 (C14 年代)
第 520 図 1	1	底面	柱材	削出 1/4	コナラ筋	(33)	21.7	17.6	柱材分類 Da 1180 ± 35BP
第 520 図 2	2	底面	柱材	削出 1/4	コナラ筋	(33.8)	20.6	15.6	柱材分類 Da 1505 ± 35BP
第 520 図 3	2	柱上	礎板	削出	クリ	(19.8)	16.1	9.6	礎板分類 Db
第 521 図 4	3	底面	柱材	削出 1/4	コナラ筋	(35.3)	直径 20.4		柱材分類 Da
第 521 図 5	3	柱上	礎板	削出	クリ	(16.3)	15.9	8.3	礎板分類 Db 1260 ± 35BP
第 521 図 6	4	底面	柱材	削出 1/4	コナラ筋	(25.5)	18.8	14.7	柱材分類 Cb 1540 ± 45BP
第 522 図 7	5	柱上	礎板	削出	クリ	(15.7)	15.9	4.6	礎板分類 Aa
第 522 図 8	5	底面	柱材	削出 1/4	コナラ筋	(30.5)	直径 20.0		柱材分類 Da 1260 ± 35BP
第 522 図 9	6	底面	柱材	削出 1/4	コナラ筋	(27.3)	21.8	11.5	柱材分類 Da 1295 ± 35BP

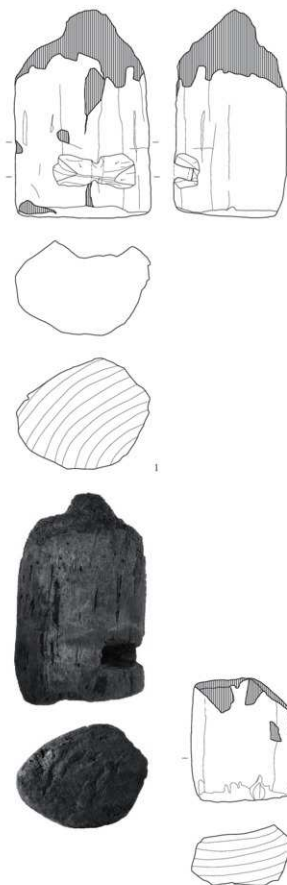
第 127 表 ST 15 出土木製品属性

- 所見：(1) 下部にある柱材とその上部で確認された礎板は、必ずしも柱中心部に位置していない。Pit3 はほぼ直上に据えられているが、他の Pit は柱に接していてもどちらかに片寄る。柱材を柱位置とすると柱筋は直行しないが、上部の礎板を通すと、直行に近くなる。柱筋が直行しない、ややいびつな建物を取り壊し、その上に柱位置を変えて建て直した可能性が考えられる。その際、前の柱を残したのは、沈下を防止するためのものと考えられる。礎板をすえるだけでは支持力が期待できなかったためか。ただし、柱材には、年代測定値に大きな開きがあり、建て替えに時間的な開きがある可能性も考えられる。
- (2) Pit4 の柱材以外には、すべて方形孔が彫られている。「筏穴」と言われ、木材を伐採地から筏に組んで流すためのもので、陸揚げした後も建築現場まで運ぶために空けられた穴と言われている。Pit4 のみ溝ありの柱材で、筏穴柱材と同様に運搬上の目的で彫られた穴だと考えられ、官衙的な大きな建物施設には見られる。
- (3) 柱材は芯持ち材ではなく、分割材である。Pit4 及び Pit6 の柱材は、他の Pit の柱材と比べて、小規模で角状。Pit6 の場合、方形孔が1穴になっていることから、恐らく、建築現場まで輸送した後、分割したと考えられる。柱材の太さに偏りが生じるが、それ以上に経済性を優先させたとも考えられる。(写真は左が Pit6 の柱材。右の Pit5 に比して、規模は1/2程度。半割されたため、方形孔も途中で切れている。)
- (4) 以上の所見から、本跡利用の柱材は、木の伐り出し→分割→面加工→方形孔か溝をつくる。→河川輸送する→陸揚げ移動→建築現場(材によってはさらに分割。)という工程が想定できるか。
- (5) 柱規模が比較的大きい(最大幅20cm前後)が、柱筋が直行せず、柱の形状にもこだわりが認められないことから、少なくとも遺跡の中心的施設とは考えにくい。ただし、建て替えも原位置で行われているため、その場所で行わなければならない何らかの理由があったのか。
- (6) 礎板は小規模であり、基礎強化の意味もある。製材加工がなされているので、柱材等の加工材の転用かと考えられる。樹種は下部柱材とは異なり、クリ材を用いる。
- (7) 北にSD 25、南にSD 26の間、SD 03の北側にある。掘立柱建物跡群の中心部からは西側のはずれに位置し、遺構密度の低い場所にある。東西棟である点も中心部が南北棟であることに比し異なっている。年代測定においても掘立柱建物跡の中心部より古い数値がでていることから、集落の変遷とも関わって考察する必要がある。



筏穴のある柱材

Pit1

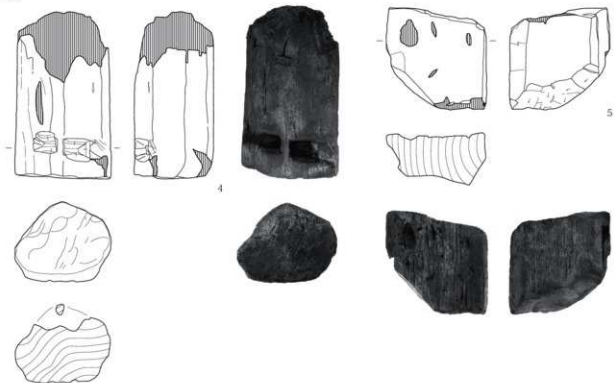


Pit2

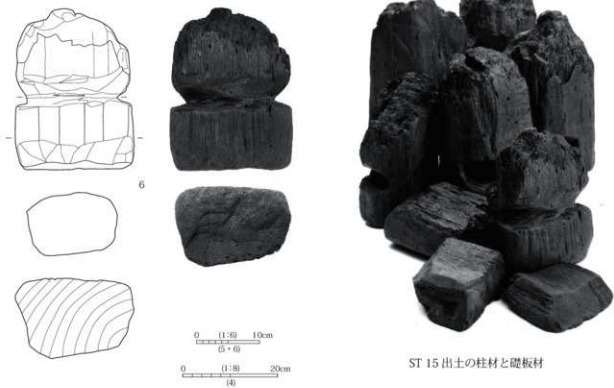


第 520 図 ST 15 出土の木製品 1 (Pit1・Pit2 出土の柱材と礎板材)

Pit3



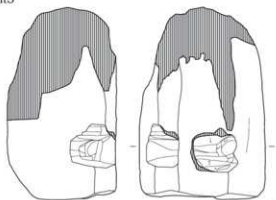
Pit4



ST 15 出土の柱材と礎板材

第 521 図 ST 15 出土の木製品 2 (Pit3・Pit4 出土の柱材と礎板材)

Pit5



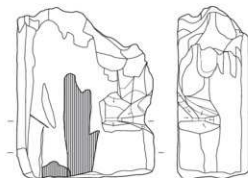
8



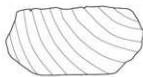
7



Pit6



9



0 (1:6) 10cm

第 522 図 ST 15 出土の木製品 3 (Pit5・Pit6 出土の柱材と礎板材)

16号掘立柱建物跡(第523図・第524図)

- 時期：8世紀中頃～後半?(古代3期ないしは4期か?)
- 位置：KD-22, 23, KI-1, 2, 3 (③区)
- 重複：SD 49を破壊し、SD 50に壊されるか。SK 1063, SK 492, SK 491, SK 486, SK 641に破壊される。
- 規模：2間×3間の南北棟の側柱式建物跡である。桁行2間(530cm)×梁行2間(405cm)、床面積21.5㎡。主軸はN-10°-Eを指す。
- 検出経過：黄褐色砂層下面に暗褐色土の落ち込みを多数確認した。柱状と考えられる土坑の配置を検討した結果、2間×2間の掘立柱建物跡を想定した。調査時、Pit8を破壊するSK 1063も、本跡のPitとして検出したが、SK 500等の確認に伴ない、地質的遺構の一部として区別した。整理作業段階で、本跡の北側に位置するST 32で調査したPitの南側一部分が、本跡Pitと柱筋が通ることが判明したため、それらを含めて、2間×3間の掘立柱建物跡と考えた。
- 柱穴：平面形は楕円形を基本とし、円形ないしは隅丸方形を呈する。断面形は、底部が平坦で、段を有する形態。規模は削平が激しいPit13を除くと、長軸48～84cm、深さは28～56cm。四隅のPitは他のPitに比して、総じて大きい。埋土は、Pit4が2層に分層できたほか、単層(10YR3/3暗褐色)である。
- 柱間寸法：平均柱間寸法は、桁行173cm(150～200cm)、梁行201cm(190～210cm)。
- 出土遺物：Pit2, Pit4～Pit8より、土器が出土した。Pit2及びPit4から、土師器甕と須恵器甕の破片が出土。Pit5からは須恵器蓋の破片が、Pit6では非ロクロ土師器の高杯の破片1片と、須恵器杯A類、黒色土器A杯A類、土師器甕類の破片、灰釉陶器碗の底部破片が出土した。1はPit6埋土中出土の灰釉碗の底部破片で、底部外面はケズリ調整で、高台は1.4cmと高い。混入か否かは不明。Pit8からは土師器甕の破片6片、黒色土器A杯A類の破片3片、須恵器杯B類1片などが出土している。
- 所見：北側2mに位置するST 45とは方位を同じくする2間×3間の南北棟で、ほぼ同時期に並存した可能性が高いと考えられる。本跡と重複したST 33との新旧関係は定かではないが、ST 45とST 08、本跡とST 33はともに建て替えの可能性を考えるべきか。また、本跡南に位置する2間×6間のST 11は直行して建てられており、それとの関連については、同時存在である可能性も考えておきたい。

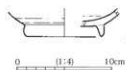
Pit番号	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	埋土の分類	土色補記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	楕円	B	79	(45)	40	b	1層 10YR2/3, 2層 10YR5/3	-	なし	SK491に切られる	
2	楕円	A	70	55	28	a	10YR2/3	-	土師器甕 須恵器甕	なし	
3	楕円	B-2	64	52	37	a	10YR2/3	-	なし	なし	
4	楕円	B-2	67	53	50	b	1層 10YR2/3, 2層 10YR5/3	-	土師器甕 須恵器甕	なし	
5	楕円	B-2	61	42	50	a	10YR2/3	-	須恵器蓋	なし	
6	円	B	84	82	56	a	10YR2/3	-	非ロクロ土師器 黒色土器A土師器甕 灰釉陶器碗	なし	
8	隅丸方形	A	80	(55)	40	a	10YR2/3	-	土師器甕 黒色土器A杯A類 須恵器杯B	SK492, SK1063に切られる	
10	円	A	(60)	51	29	a	10YR2/3	-	なし	SK641に切られる	
12	不整形	H	48	36	23	-	10YR2/3	-	なし	なし	
13	円	A	28	27	11	-	10YR2/3	-	なし	SK486に切られる	旧S635

第128表 ST 16柱穴属性

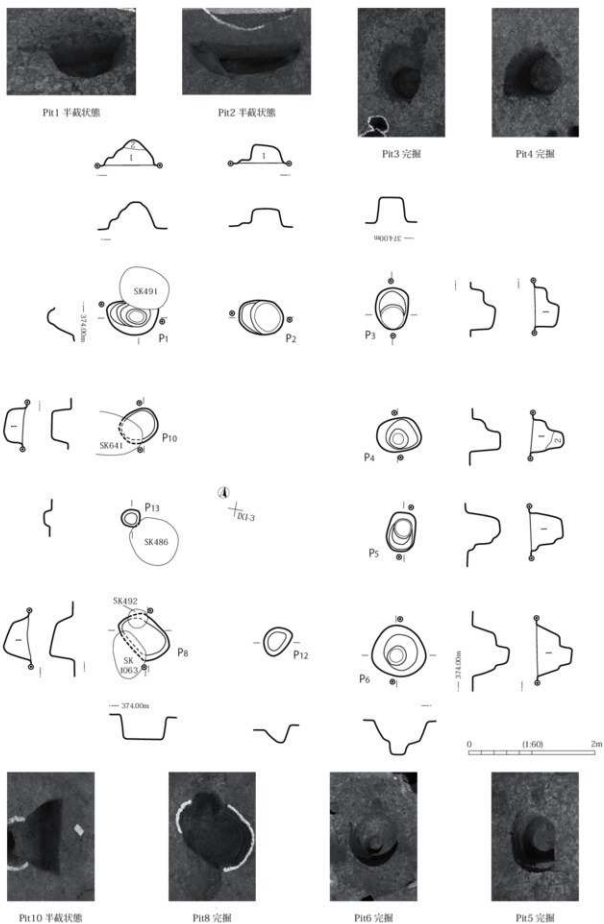
遺構名	非ロクロ高杯	土師器杯A	土師器甕B	黒色土器A杯A	須恵器杯A	須恵器杯B	須恵器蓋	須恵器甕	須恵器蓋	須恵器甕	灰釉陶器碗	数/総重量(破片/g)
Pit2		1			1							3/18.4
Pit4			6				4					10/168.9
Pit5						1						1/28.9
Pit6	1		4	7	2	3	1	2	1	1		23/267.3
Pit8			1	6			3	1		2		13/175.3

第129表 ST 16出土土器組成

Pit6



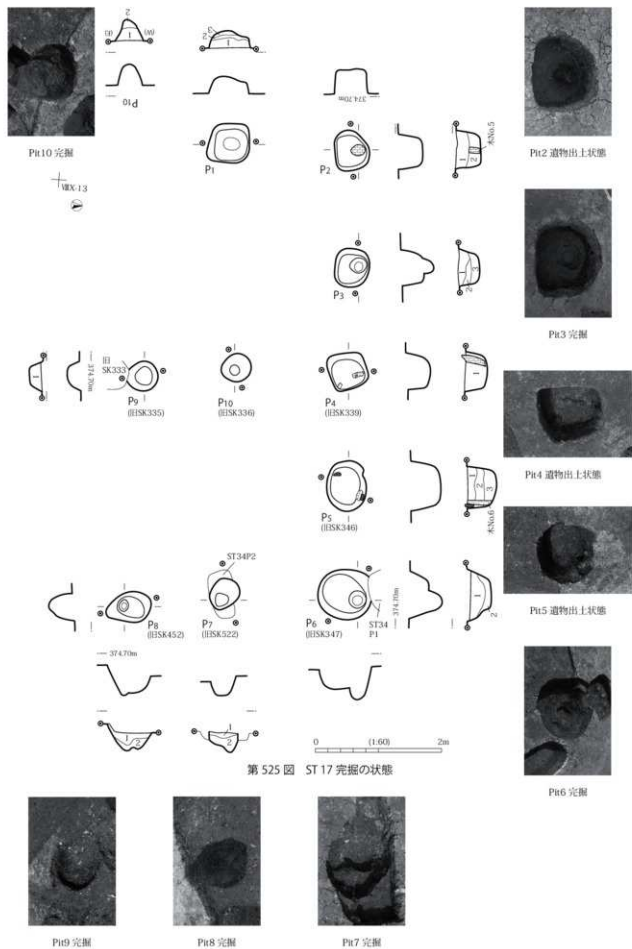
第523図 ST 16 Pit6出土の土器



第 524 図 ST 16 完掘の状態

17号掘立柱建物跡(第525図・第526図)

- 時期： 8世紀後半～9世紀初頭? (古代4期・5期比定)
- 位置： VII X-7, 8 (②区)
- 重複： ST 34, SB 05 に壊される
- 規模： 整理段階で、土坑調査から掘立柱建物跡を想定した。北桁は5本の柱穴がほぼ直線的に並ぶが、これに対応する南桁は柱穴2基のみしか確認できない。残存する北桁、東梁から推定すると平面形は、4間×2間ないしは4間×3間の東西棟建物を想定できるか。現存する桁行は4間(708cm)、梁行は2間(338cm)で、床面積23.9㎡。主軸はN-4.5°-W。
- 検出： 発掘作業時、黄褐色土層面に隅丸形状の黒褐色土の落ち込み3基(Pit1・Pit2・Pit3)がL字形に位置していることを確認した。周辺に土坑多数を検出したが、掘立柱建物跡を組成するには至らなかった。整理作業において柱筋を通る土坑を、本跡の柱穴とした。Pit4(旧SK 339)、Pit5(旧SK 346)、Pit6(旧SK 347)、Pit7(旧SK 522)、Pit8(旧SK 452)、Pit9(旧SK 335)、Pit10(旧SK 336)のように選定した。
- 柱穴： 平面形は、北桁の柱穴は比較的隅丸形状であるが、他の内部柱穴及び東梁、南桁は円形状または楕円形を呈する。断面形は底部が平坦か段を有する形状。内部柱穴は砲弾状である。外回り柱の規模は、長軸50cm～85cm、深さは18cm～52cm。内部柱穴のPit10は、長軸49cm、深さ35cmを測る。埋土は、10YR3/3の暗褐色土及び10YR3/1の黒褐色土を基調に単層から3層に分層できる。Pit3の埋土は、黒褐色土であるが、下層に締まりの悪い粘質土とにふい黄褐色ブロックが含まれる。中層はほぼ同質だが、黄褐色ブロックが細くなる。さらに上層は、同色だが締まりの強い土となる。なお、残存する北桁Pit2・Pit4・Pit5の柱材は、いずれも壁面に位置し構築されている。
- 柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行178.5cm(170cm～184cm)、梁行180cm(146～200cm)。
- 出土遺物： Pit2より須恵器杯蓋3片、高盤の破片3片が出土。1は須恵器杯蓋の2/3個体で、つまみ部を欠失する。体部外面は2/3程度ケズリ調整し、かえしは緩く外反する。2は須恵器高盤の皿部の破片が。5は柱材で、分類AまたはB。腐蝕がはげしく、板目部分のみが残る。形状から一本材の半分と考えられ、柱元に側面から斜めに角を切り落とした痕跡が残る。樹種はクリ材。C14年代測定の結果、804±40年ADの値を得た。Pit3より黒色土器杯A6片、須恵器盤1片がある。Pit4より土師器甕形土器1片、黒色土器A杯A1片、柱材の一部が出土。柱材はクリ材で、底部切断面の一部が残るほか、腐蝕が著しい。3は黒色土器A杯A類の底部破片。底部に、刻目様の刻みがある。Pit6より須恵器杯A2片と、柱材が出土。6の柱材は、芯材材だったと考えられるが、他は腐食し、板目部分のみ残ったと考えられる。底部のみ加工痕が僅かに残る。クリ材。Pit6より須恵器蓋4片、土師器甕1片などが出土した。4は須恵器蓋の破片。
- 所見： 内部の柱穴を持つため総柱の可能性も考えておくべきであるが、残存する柱穴の柱径は細い上に、内部の柱穴Pit10は外回り柱穴と比し小規模である。高床建物構造ではあるものの、高い床や重い荷重を支える床構造は考え難く、Pit10は間仕切り穴として評価すべきか。



第 525 図 ST 17 完掘の状態

第3章 発掘調査の概要

Pit番号	旧 Pit番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色補記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1		楕円方形	B-2	66	60	26	b	1層～3層 10YR3/1	—	なし	なし	
2		方形円	A	56	50	39	f	1層・2層 10YR3/1	○	須恵器杯蓋・蓋 柱材	なし	
3		楕円方形	B-2	60	54	52	b	1層～3層 10YR3/1	—	黒色土器杯 A	なし	
4	SK339	楕円方形	A	58	57	37	f2	10YR2/3	○	土師器腰 黒色土器杯 A 柱材	なし	
5	SK346	円	A	78	62	46	b(f2)	1層 10YR3/3, 2層 10YR2/3, 3層 10YR2/2	○	須恵器杯 A 柱材	なし	
6	SK347	(円)	B-2	85	80	33	b	1層 10YR3/3, 2層 10YR2/3	—	須恵器蓋	ST34Pit1 に切られる	
7	SK522	楕円	A	50	42	31	b	1層・2層 10YR3/1	—	なし	ST34Pit2 に切られる	
8	SK452	楕円	B	73	50	42	b	1層 10YR4/4, 2層 10YR3/2	—	なし	なし	
9	SK335	円	A	50	45	18	a	10YR3/3	—	なし	SK333 に切られる	
10	SK336	円	G	49	44	35	b	1層 10YR4/4, 2層 10YR2/3	—	なし	なし	

第130表 ST 17 柱穴属性

遺構名	土師器	黒色土器 A	須恵器	高蓋	蓋 B	蓋 E	数 / 総重量 (破片/g)
ST17	甕 A	小型甕	杯 A				
Pit2			1	3	3		7/114.3
Pit3			6	1			7/17.1
Pit4	1						2/39.5
Pit5			2				2/5.3
Pit6	1	1	1		4	3	10/64

第131表 ST 17 出土土器組成

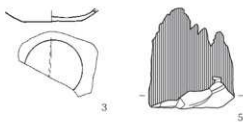
検出番号	Pit 番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴 (C14年代)
第 526 図 5	2	底面	柱材	芯持ち材	クリ	16	13.6	7.1	柱材分類 A か 1200 ± 30BP
第 526 図 6	5	底面	柱材	芯持ち材	クリ	19.5	10.6	5.1	底部のみ加工痕

第132表 ST 17 出土木製品属性

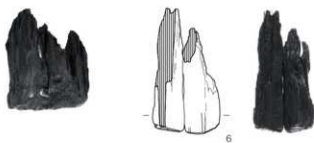
Pit2



Pit4



Pit5



Pit6



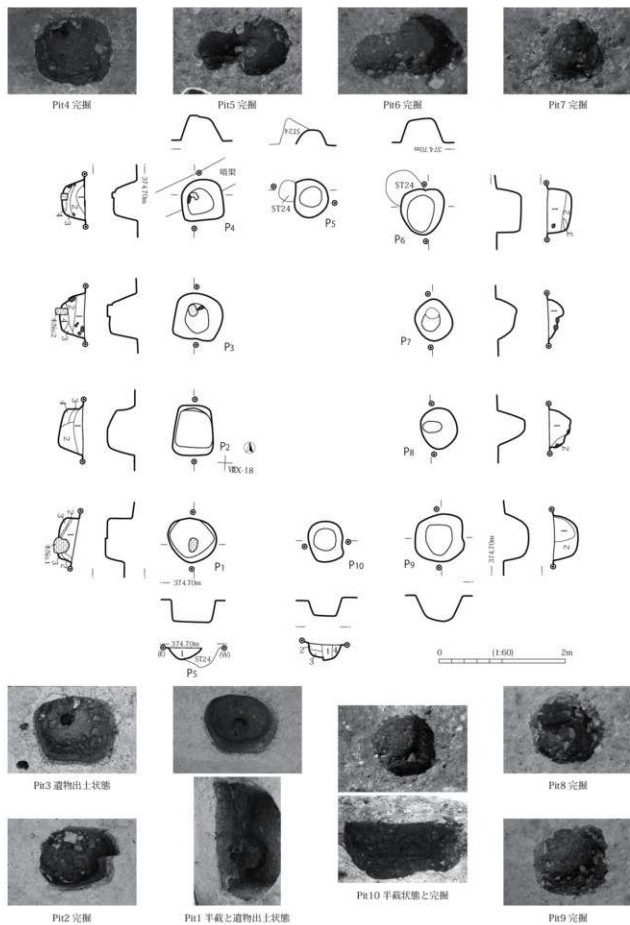
第 526 図 ST 17 出土の土器・木製品 (Pit2・Pit4・Pit5・Pit6)

18号掘立柱建物跡（第527図・第528図）

- 時 期： 8世紀後半～9世紀初頭（古代4期ないしは5期比定）
- 位 置： VII-X-7, 12, 13, 17, 18 (②区)
- 重 複： ST 24, SD 62を破壊する。
- 規 模： 平面形は、3間×2間の側柱式南北棟建物である。桁行3間（536cm）、梁行2間（370cm）。床面積 19.8㎡。主軸はN-4°-Wを指す。
- 検 出： 黄褐色砂層上面で黒褐色（10YR3/1）の落ち込みを確認する。配置及び形状から掘立柱建物跡を想定し調査した。
- 柱 穴： 柱痕は壁際に位置し、柱筋の通りがよい。平面形は、隅丸方形、隅丸長方形を呈する。第134表に楕円としてあるPitも隅丸方形、方形に近い。断面形は底面が平坦なバケツ状の形態が基本。Pit1・Pit3・Pit4に柱材が残る。規模は、長軸60cm～84cm、深さは18cm～39cmを測る。埋土は、西桁列の柱穴に覗られる柱材が底部に残存する。切断したもののか、腐蝕した結果であるのかは不明だが、柱材を残したまま人為的に埋め戻した可能性がある。埋土は、その西桁のPit1からPit4は黒褐色（10YR3/1）、褐色（10YR4/1）を基調とし、3層から4層に分層できた。Pit1には柱材が残り、周囲の掘り方には下層に締まりの悪い10YR4/1の褐色粘質土が堆積し、その上にぶい黄褐色のブロックが混じる黒褐色土層が、さらに上層には、炭化物の僅かに混じる10YR3/1の黒褐色土が堆積する。それに対し、東桁Pit6からPit9は、黒褐色（10YR3/1）を基調に、単層もしくは2層に分層できた。
- 柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行168cm（153～178cm）、梁行187cm（180～207cm）。
- 出土遺物： Pit1より須恵器杯A類2片が出土。1の柱材は、径23cmのクリ材で、削出材。腐蝕が激しいが、底面はほぼ残り、僅かに残る側面は面をとってあり、多角形状に加工されたものと考えられる。底部には、5cm前後の工具による切断痕跡が残る。柱材分類はBa。C14年代測定値は、774±40年AD（8世紀後半から9世紀初頭）。Pit2からは須恵器杯A類と甕E類の破片が出土している。Pit3は柱材が出土し、12.1cm×14.5cm×9cm。樹種はクリ材で削出材。炭素分析年代は634±40年AD（7世紀代）。Pit4は須恵器杯蓋、土師器甕の破片が出土。柱材はクリ材で、木目は不明。6.5cm×8.6cm×3.7cm。Pit6では須恵器杯A、杯Bの破片が出土し、Pit7では須恵器杯Aと蓋、土師器甕の破片が、Pit8からは須恵器杯A、杯B等の破片が出土している。Pit9は須恵器杯A、蓋などが出土している。
- 所 見： SD 01に近い北端の建物群近くに位置する。柱筋がしっかり通ることから、造営精度は比較的高いと考えられる。また、他の掘立柱建物跡と比較して、各柱穴の平面形状が、隅丸方形、方形の円形が多い点も特徴的。

遺構名	土師器					須恵器					数/総重量 (破片/g)			
	甕A?	甕E	甕H	小型甕A	不明	杯A	杯B	蓋	蓋	甕		甕A	甕C	甕E
Pr1						2								2/7.8
Pr2					1	1							1	3/19.9
Pr4		3						1						4/15.2
Pr6						4	1							5/33.3
Pr7		2		1		1		1				1		6/57
Pr8			1		2	1	2			1	1	1		9/147.8
Pr9	1					3		3	1	1				9/88.2

第133表 ST18出土土器組成



第 527 図 ST 18 発掘の状態



ST 18の全景(完備)



ST 18の全景(白線入り)

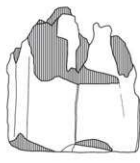
Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色層記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	楕円方形	D	78	72	33	f	1層 10YR3/1, 2層 10YR3/1 3層 10YR4/1	○	須恵器杯 A 木器 柱材	なし	
2	楕円方形	A	78	60	39	e	1層 10YR4/1, 2層 10YR3/1 3層 10YR3/1, 4層	—	須恵器甕 E, 杯 A 土師器不明	SD62を切っている	
3	楕円方形	D	84	84	39	e2	1層 10YR4/1, 2層 10YR3/1 3層 10YR2/4, 4層 10YR3/1	○	木器 柱材	なし	
4	楕円方形	D	74	74	36	e2	1層 10YR4/1, 2層 10YR3/1 3層 10YR3/1, 4層 10YR3/1	○	須恵器杯蓋 土師器甕 破片 木器 柱材	幅縁を切っている	
5	楕円	H	60	58	18	a	10YR3/1	—	なし	なし	
6	楕円	A	75	68	37	b	1層 10YR3/1, 2層 10YR3/1 3層 10YR7/4	—	須恵器杯 A, 杯 A へう	ST24Pt5を切る	ST24Pt5に 遺物所属か
7	方形(?)	D?	71	57	26	a	10YR3/1	—	須恵器杯 A 蓋 土師器甕	なし	
8	方形(?)	H	63	55	34	?	1層 10YR3/1, 2層 10YR7/4	—	須恵器杯 A へう, 杯 B	なし	
9	楕円方形	D	75	72	40	d2	1層 10YR3/1, 2層 10YR5/2	—	須恵器杯 A, 杯 A へう, 杯 B, 破面	なし	
10	方形	D	62	54	24	d	1層 10YR3/1, 2層 10YR3/1 3層 10YR3/1, 4層 10YR3/1	—	なし	なし	

第 134 表 ST 18 柱穴属性

検出番号	Pit 番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴
第 528 図 1	1	底面	柱材	削出	クリ	(23.0)	直径 21.0		柱材分類 Ba 腐蝕がほげしい
第 528 図 2	3	底面	柱材	削出	クリ	12.1	14.5	9.0	柱材分類 B7a 腐蝕激しい

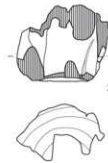
第 135 表 ST 18 出土木製品属性

Pit1



1

Pit3



2



0 (1/5) 10cm

第 528 図 ST 18 出土の木製品 (Pit1・Pit3 出土の柱材)

19号掘立柱建物跡(第529図・第530図)

時期： 8世紀前半(古代2期ないしは3期比定)

位置： VII X-7, 11, 12 (㊸区)

重複： SD 46を破壊し、ST 42、ST 26、ST 38に壊されるか。

規模： 平面形は2間×1間の側柱式南北棟建物。桁2間(453cm)、梁1間(246cm)、床面積11.1㎡。
主軸は、真北を指す。

検出状況： 黄褐色砂層面で黒褐色土(10YR2/3)の落ち込みを確認した。

柱穴： 平面形は、Pit1が楕円形のほかは、隅丸長方形状を呈する。断面は、主に段を有する形態と底部が平坦なバケツ形とに分けることができた。規模は、長軸が68cm～106cm、深さは36cm～42cmを測る。縮まりのよい黒褐色土(10YR2/3)を基調とし2層から4層に分層できた。Pit3の柱材は底部のみ残存し、上部は腐蝕して柱痕層(10YR2/3黒褐色)のみが検出できた。周囲の掘り方の埋土は版築状に締まって堆積していた。下層は10YR8/2の砂質土及び炭化物が含まれている黒褐色土(10YR2/3)で、その上層は、粘性の強い土質が堆積する。

柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行241cm(235cm～250cm)、梁行250cm。

出土遺物： Pit2より柱材と考えられる木片が出土した。C14炭素年代測定では、794±40年AD(8世紀末から9世紀前半)を得ている。Pit3にも柱材があり、年代測定結果は614±40年AD(7世紀代)であった。この他、黒色土器A類杯Aの破片1片が出土。Pit4及びPit5では、須恵器杯A類、土師器甕類の破片が出土している。Pit6からは礎板が出土、分類Baに相当。半丸太材で、樹種はオニグルミ。木裏を上面に据え、木表を裏にする。木裏は割痕があるのみ。中心部は欠損。樹芯部分が腐蝕したと思われる。木表は手斧で加工したと思われる痕跡が木目にそって残っている。骨格材等からの転用材の可能性はある。

所見： 柱穴規模にばらつきがあるが、隅丸長方形状を基本としている。簡易な小屋ではなく、建物造営時における何らかの計画性を持って築造された建物と考えたい。Pit2とPit3の柱材では、年代測定に180年ほどの差があることは疑問が残る。Pit2はST42と同一位置にある柱穴で重複していることから、ST42の柱材である可能性を考えるべきか。したがって、Pit3を本跡の柱材と判断すれば、7世紀以後の建物跡で、搬出した黒色土器の存在から、8世紀前後に位置付けられるか。

Pit番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色標記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	楕円	C	68	56	36	b	1層・2層 10YR2/3	○	なし	なし	
2	隅丸長方形?	B-2	60	38	36	d3	1層・2層 10YR2/3	○	柱材	ST42Pit6に切られる	
3	隅丸長方形	B	84	77	42	f	1層 10YR2/3、2層 10YR3/2、3層 10YR2/3	○	黒色土器杯A 柱材	SD46を切る	ST42Pit4
4	隅丸長方形	A	63	58	55	b	1層～4層 10YR2/3、5層 10YR8/2	—	須恵器 杯A	ST26Pit1と切り合う	
5	方形円	A	65	60	50	d2	1層～5層 10YR2/3	—	須恵器 杯A	SD46を切る	
6	隅丸長方形	A	70	52	38	b(k)	1層・2層 10YR2/3	○	礎板	なし	

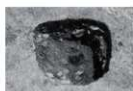
第136表 ST19柱穴属性

遺構名	黒色土器 杯A	土師器 甕A 甕B 甕E	須恵器 杯A 甕A 甕C 甕E	数/総量 (破片/g)
Pit3	1			1/11.2
Pit4		1	1	4/61.1
Pit5		1	2	7/73.3

第137表 ST19出土土器組成



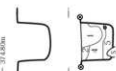
Pit2 完掘



Pit3 遺物出土状態



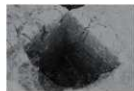
Pit4 完掘



Pit1 半掘状態



Pit6 遺物出土状態



Pit5 完掘



ST 19の全景 (完掘)



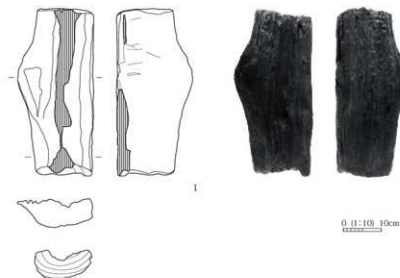
ST 19の全景 (白線入り)

第529図 ST 19完掘の状態

検出番号	Pit番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴 (C14年代)
	2	埋土	柱材	不明		4.4	径 11.5		柱材木片か 1210 ± 30BP
	3	底面	柱材	不明		3.6	径 9.0		柱材木片か 1390 ± 40BP
第 530 図 1	6	底面	礎板	半丸太材	オニグルミ	44.3	19.9	7.6	礎板分類 Ba 骨格材等からの転用材か

第 138 表 ST 19 出土木製品属性

Pit6



第 530 図 ST 19 出土の木製品 (Pit6 出土の礎板材)

20号掘立柱建物跡 (第531図・第532図)

時期： 9世紀後半 (古代8期～)

位置： IX D-3、VIII X-23 (②区)

重複： SD 59 と重複があり、破壊されるか。

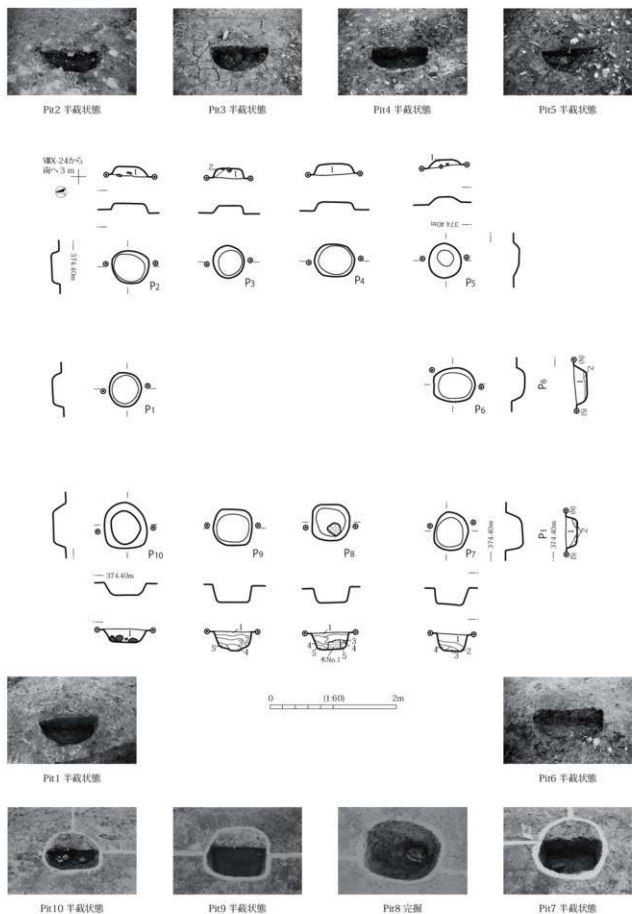
規模： 平面形は、3間×2間の側柱式の南北棟。主軸は真北を指す。

検出状況： 黄褐色砂礫層面で、灰褐色粘土層の落ち込みを確認した。落ち込みは径 40～50cm を測る柱状で、配置から掘立柱建物跡を想定、調査した。

柱 穴： 比較的柱筋の通りはよい。平面形は、円形及び楕円形状を呈する。断面は、底部が平坦なタライ状。規模は長径 52cm～73cm、深さは 11cm～30cm と比較的浅いが、全体的に柱穴規模は一様である。埋土は暗灰色粘質土と褐色粘質土を基本に、2層から4層に分層できた。Pit7 と Pit9 では、下層に柱痕と思われる土層が残る。Pit7 の最下層は、粘性が強く鉄分を含む黒褐色粘質土で、中層は黄褐色ブロックを含む黒褐色土 (5YR3/1) が堆積。上層は灰褐色粘土 (10YR4/1) が堆積していた。Pit10 の底面には、15cm の角礫が底部に残っていた。

柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行 172cm (156cm～190cm)、梁行 208cm (198cm～218cm) である。

出土遺物： Pit2 からは須恵器杯 A の体部破片と、須恵器蓋 B または盤の接合部の破片が各 1 片出土。Pit3 では須恵器甕の小破片が 1 片あり、Pit7 では土師器甕小破片 1 片がある。Pit8 は底面から板状の石が 1 点出土し、柱材 1 点がほかにある。1 は腐蝕が激しいが、クリの芯持ち材で、15.0cm × 20.8cm × 13.9cm を測る。C14 炭素年代測定の結果、834 ± 40 年 AD を得た。



第 531 図 ST 20 完掘の状態

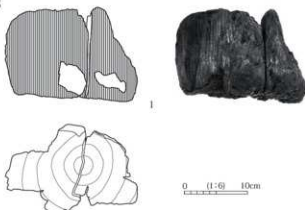
Pit番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色層記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	円	A	54	52	19	a	1層・2層 N3/0	—	なし	なし	
2	楕円	A	59	52	16	a	1層 10YR4/1	—	須恵器類 B 砂器, 杯 A 石	なし	
3	円	A	52	49	16	c	1層・2層 N3/0	—	須恵器類 D	なし	
4	楕円	A	63	50	17	a	1層 10YR4/1	—	なし	なし	
5	円	D	54	50	11	a	1層 N3/0	—	なし	なし	
6	楕円	D	63	53	21	a	1層・2層 N3/0	—	なし	なし	
7	楕円	A	60	52	28	d3 7	1層 10YR4/1, 2層 5Y3/1, 3層・4層 10YR1/3	—	土師器類	なし	
8	円	A	58	55	27	b	1層 10YR4/1, 2層 5Y3/1, 3層 10YR1/3, 4層 10Y4/1, 5層 10YR1/3	○	柱材 木 No1	なし	
9	円	A	61	57	30	b	1層 10Y4/1, 2・3層 5Y3/1, 4層 10Y4/1, 5層 注記なし	—	なし	なし	
10	楕円	A	73	65	21	a	1層 10YR2/1	—	なし	なし	

第139表 ST 20 柱穴属性



ST 20 の全景 (白線入り)

Pit8



第532図 ST 20 出土の木製品 (Pit8 出土の柱材)

2 1号掘立柱建物跡 (第533図)

時期： 9世紀前半以前? (古代5期以前か不明?)

位置： VII-X-24 (㊸区)

重複： なし

規模： 平面形は、1間×1間の側柱式の南北棟建物。桁行 (2.62 m)、梁行 (2.62 m)。床面積は、6.86 m²。主軸は、N-4°-Wを指す。

検出状況： 黄褐色砂礫層面にて 10YR3/1 の黒褐色粘土の落ち込みを確認した。落ち込みは円形状で、その配置から、4本柱の掘立柱建物跡を想定した。

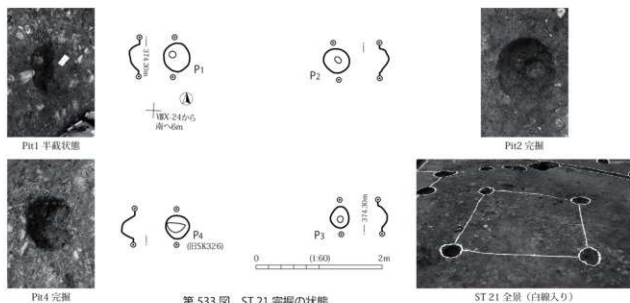
柱 穴： 平面形は、円形を基本とする。断面は底部が丸い皿状。埋土は単層で、10YR4/1 の褐灰土を基調とする。規模は、長径 34cm ~ 46cm、深さは 14cm ~ 25cm ほどである。

柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行 262cm (270cm・254cm)、梁行 260cm (258cm・262cm)。

出土遺物： Pit2 より非ロクロ土師器の杯 A の破片 1 片、須恵器甕形土器の小破片 2 片が出土した。時期は、古代 4 期以前であろうか。

Pit番号	旧 Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色層記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1		円	B-2	46	40	17	a	10YR3/1	—	なし	なし	
2		円	D	40	38	16	a	10YR4/1	—	非ロクロ土師器杯 須恵器類	なし	
3		楕円	D	34	28	14	—	—	—	なし	なし	
4	SK326	円	D	36	36	25	a	10YR4/1	—	なし	なし	

第140表 ST 21 柱穴属性



第 533 図 ST 21 完掘の状態

2 2号掘立柱建物跡 (第 534 図～第 536 図)

時 期： 8 世紀後半から 9 世紀前半 (古代 5 期ないしは 6 期比定)

位 置： IX D-2 区 (②区)

重 複： 本跡の Pit3 と Pit4 は、ST 25 の Pit8 及び Pit7 と共有する。新旧関係は調査段階で区別できなかった。Pit7 は SK 757 と SK 758 を破壊する。

規 模： 平面形は、2 間×2 間の側柱式の南北棟建物。桁行 2 間 (4.24m)、梁行 2 間 (4.1m)、床面積 17.43 m²。主軸は、N-5°-E を指す。

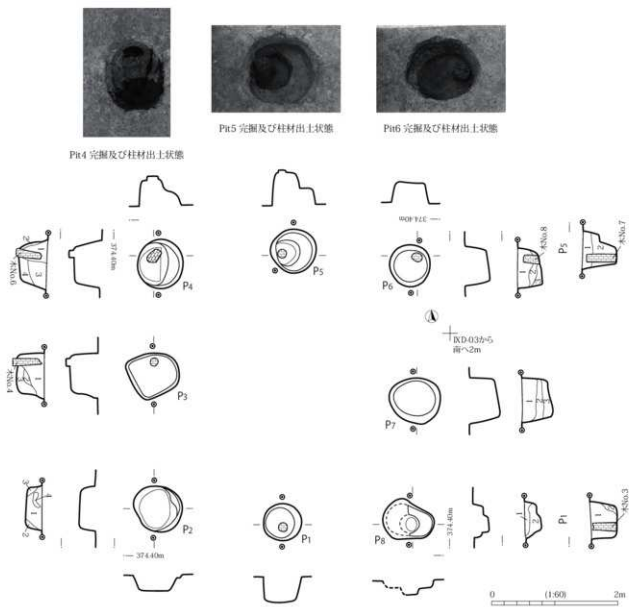
検出状況： 黄褐色土層面にて黒褐色土 (10YR3/1) の落ち込みを確認する。形状と規模から柱穴を想定、配列から掘立柱建物跡と判断し調査した。

柱 穴： 比較的柱筋の通りはよい。平面形は円形を基本とするが、Pit3 は隅丸方形である。断面は、バケツ形で、明瞭な柱痕を持つ例 (Pit4・Pit5・Pit6・Pit8) が半数を占める。埋土は、黒褐色の粘質土。規模は、長径 59cm～80cm、深さ 24cm～54cm 程度である。

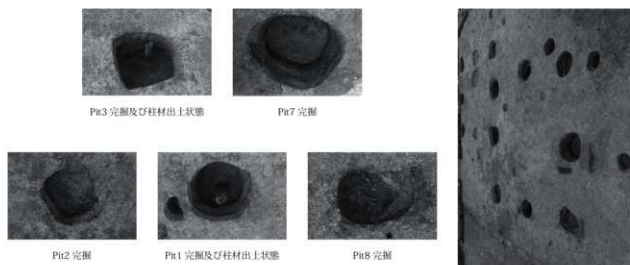
柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行 211cm (167cm～256cm) 梁行 204cm (200cm～210cm)。

出土遺物： Pit1 には 3 の柱材がある。芯持ち丸木材で、樹種はクリ。柱材分類 Aa。一端は垂直に切断し、底部は平滑に加工される。表には浅い窪みが 1 箇所あり、木目を横切るように刃痕が数箇所に入る。転用材ではない。炭素年代測定の結果、804 ± 40 年 AD (9 世紀前半) を得た。Pit2 からは須恵器杯 A 類 1 片、甕破片 1 片、灰軸陶器の壺破片 1 片がある。1 は灰軸の長頸壺の頸部小破片である。

Pit3 では須恵器杯 A 類の破片 1 片と柱材の出土がある。2 は糸切り離し調整の杯 A 類底部破片である。4 の柱材は、芯持ちのクリ材。表面には 10cm の長さで斜め方向の斧痕が入る。樹皮を削った際に生じたものであろうか。底部に切断痕がある。木に対し斜め方向と横方向に 2 方向から斧で切断。斜め方向の痕跡は、鋸によるものであろうか、切断面が平滑である。側面の加工はない。転用材ではない。炭素年代測定の結果、744 ± 40 年 AD (8 世紀後半) の値を得た。Pit4 からは 5 の角材が出土。柱目のサワラ材で、両端部は欠損する。断面形は四角形。各面とも平滑。他に 6 の柱材が出土。フジキの削出材。不整形な断面に削り出す。側面は数面をとり、4 cm ほどの刃痕が数カ所に入っている。広い側面部には、溝が彫られた痕跡がある。



第534図 ST 22 完掘の状態



ST 22 全景 (完掘)

もともとは角状で、ほぞ孔のある柱材、再加工された例か。この柱材のみは転用材であろう。Pit5では土師器杯A類の破片と7の柱材が出土。クリの芯持材。柱材分類Acで、底部は2方向から斜めに切断した痕跡が観られる。底部付近の外周には、長さ10cm前後、幅1.5cmの斧痕が残る。一本材としては、本跡で最大。側面加工はなし。

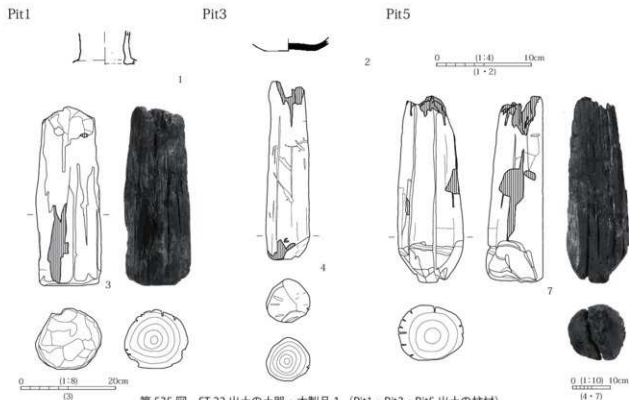
Pit6は黒色土師器A類の破片と8の柱材が出土。芯持丸木材。樹種はクリ。柱材分類Ac(bに近い)で、底部は2方向から斜めに切断し、一方からは急角度に切断する。

Pit7からは須恵器甕E類の体部破片1片がある。

所見： Pit8基中、5基より柱材が出土している。その内、Pit4のみが削り出しの柱材で、他はすべて一本の丸太材を使用している。丸太材の長径は17.3cmから11.6cmと幅がある。根入れは、ほぼ50cm。いずれもは壁際に位置し、柱筋の通りはよく、造営精度は高い。なお、Pit4の柱材は、底部近くに浅い溝があることから、筏穴を持つ柱材を分割再加工して使用したものと考えられる。柱材底部付近の加工状況は、垂直に切断されるもの、底部片側角を落とすもの、尖らせるものと、材に統一性は観られない。

Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	高さ (cm)	埋土の 分類	土色鑑別号	柱材の 有無	出土遺物	切り合い	備考
1	円	A	59	59	40	f2	1層10YR3/1, 2層10YR3/1	○	木器 柱材 削材?	なし	
2	円	A	80	70	24	b	1層・2層10YR3/1, 3層10YR3/1, 4層10YR6/2	—	須恵器杯A 灰釉陶器	なし	
3	方形円	B-2	76	70	42	f2	1層・2層10YR3/1, 3層10YR3/1	○	須恵器杯A 木器 柱材	なし	柱の底部までの 深さ49cm (ST25Pit8)
4	円	B-2	78	70	44	f2	1層10YR3/1, 2層7.5YR5/8, 3・4層10YR3/1	○	木器 柱材 角状木製品	なし	柱の底部までの 深さ30cm (ST25Pit7)
5	円	B-2	71	68	54	f2	1層10YR3/1, 2層10YR3/1	○	土師器杯A 木器 柱材	なし	
6	円	A	66	62	38	f2	1層・2層・3層10YR3/1	○	扉口クロ土師器杯? 木器 柱材	なし	
7	円	A	80	70	48	b	1層・2層・3層10YR3/1	—	須恵器甕?	SK756,757,758	
8	楕円	B-2	78	62	24	b	1層・2層10YR3/1	—	なし	なし	

第141表 ST22柱穴属性



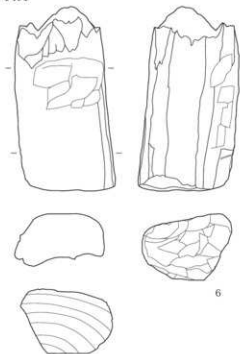
第535図 ST22出土の土器・木製品1 (Pit1・Pit3・Pit5出土の柱材)

第3章 発掘調査の概要

検出番号	Pit 番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴
	1	遺面	削材?			(4.0)	2.2	2.1	木片
第 535 図 3	1	遺面	柱材	芯持ち丸木	クリ	(37.8)	直径 13.3		柱材分層 Aa 1200 ± 40BP
第 535 図 4	3	遺面	柱材	芯持ち材	クリ	(47.3)	直径 11.6		柱材分層 Ab ST 25Pit8 1260 ± 40BP
第 536 図 5	4	埋土	角材	経目	サワラ	(6.8)	1.2	1.0	尚残欠損
第 536 図 6	4	遺面	柱材	削出	フジキ	(39.0)	23.3	13.7	柱材分層 Da ST25Pit7
第 535 図 7	5	遺面	柱材	芯持ち材	クリ	(49.4)	直径 17.3		柱材分層 Ac
第 536 図 8	6	遺面	柱材	芯持ち丸木	クリ	(24.8)	直径 15.5		柱材分層 Ae (やや b に近い)

第 142 表 ST 22 出土木製品属性

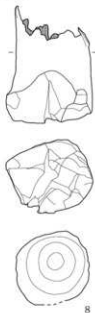
Pit4



Pit4



Pit6



0 (1:4) 10cm
(5)

0 (1:8) 20cm
(前・8)



ST 22 出土の柱材

第 536 図 ST 22 出土の土器・木製品 2 (Pit4・Pit6 出土の柱材)

23号掘立柱建物跡(第537図～第539図)

時期：9世紀代(古代6期～8期比定)

位置：ⅧX-19, 20(②区)

重複：なし

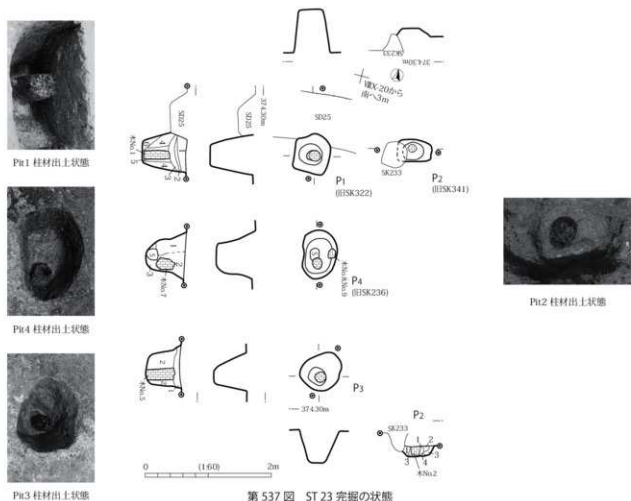
検出経過：明瞭な円形の落ち込みを確認でき、その配列から掘立柱建物跡を検出時から想定した。東側は、近現代に行われた水田化により削平され、発見できなかった。

規模：西側南北に3基、それと直行する柱穴1基のみを確認した。平面形は、2間×2間以上の側柱式の南北棟建物か。桁行2間(3.5m)×梁行1間以上(1.5m以上)。床面積5.25㎡以上。主軸はN-14°-Wを指す。

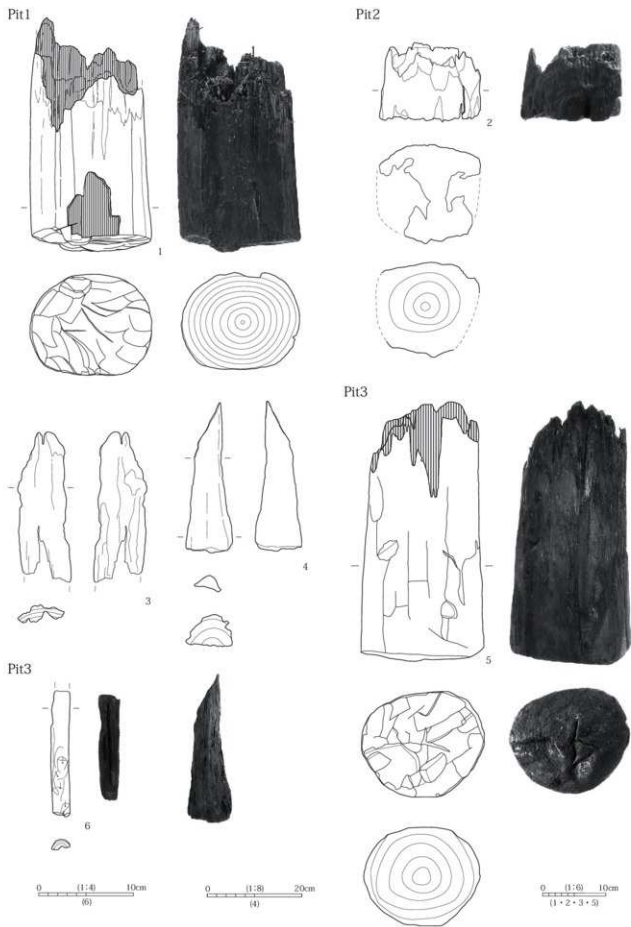
柱穴：平面形は、楕円形を基本とする。断面はバケツ形。長径は52cm～79cm。深さは15cm～72cm。埋土は、粘性のある10YR2/1の黒色土及び灰色土を基調とする。すべて柱材が残存している。柱痕の上面に埋土が堆積している例(Pit1・Pit3)から、柱が腐蝕した後、それらの埋土が堆積した期間・状況があったことが想定できる。

柱間寸法：平均柱間寸法は、桁行175cm(170・180cm)、梁行150cm以上である。

出土遺物：Pit1から黒色土器A杯Aの小破片2片と須恵器蓋破片1片、柱材(分類Aaか)が出土。1の柱材は、丸太状の芯持ち材。上部は腐蝕する。底部は水平に切断、長さ38.2cmを測る。クリ材。Pit2からは、土師器甕1片と柱材(分類Aaか)、割材2点が出土。2はクリの芯持ち材。底部は水平に切断。炭素年代測定の結果、744±40年AD(8世紀後半)を得た。3はク



第537図 ST23 完掘の状態



第538図 ST 23 出土の木製品 1 (Pit1 ~ 3 出土の柱材ほか)

Pit4



第 539 図 ST 23 出土の木製品 2 (Pit4 出土の柱材と礎板材)

りの芯持ち材の破片で、2 と同一物か。4 は芯持ち材の半割品。

Pit3 では土師器甕破片 6 片、須恵器杯 A 類 2 片、蓋 1 片があり、柱材 (Aa) と棒材が出土した。5 の柱材は、クリの芯持ち材。底部に斧切断痕があり、刃痕が数箇所に観察できる。長さ 41cm、直径 19.5cm を測る。また、6 の棒状木製品はウツギの芯持ち丸太材で、表面に加工痕が数箇所入る。一端は斜めに切断され、もう一端は欠損する。

Pit4 は土師器甕破片 1 片があり、柱材 (Aa) と板材 2 点がある。7 の柱材はクリの丸太で、底部水平に切断。炭素年代測定の結果、854 ± 40 年 AD (9 世紀後半) を得た。8 と 9 はクリの板材で、裏面に刃痕が観察できる。礎板材等の破損品か。

Pit 番号	旧 Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色標記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK322	円	C	63	56	72	e	1 層 5Y4/1, 2 層 2.5Y4/2, 3 層・6 層 5Y4/1	—	なし	SK343 を切る SD25 を切る	
2	SK341	楕円	A	(52)	34	15	d	1 層~4 層 5Y4/1	○	柱材	SK233 に切られる	
3		楕円	C	66	56	53	e	1 層・2 層 10YR4/1	○	柱材 棒状木製品	なし	
4	SK236	楕円	C	79	49	61	e	1 層・2 層 10YR2/1, 3 層 7.5YR4/1	○	板材 柱材	なし	

第 143 表 ST 23 柱穴属性

棟図番号	Pit 番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴 (C14 年代)
第 538 図 1	1	底面	柱材	クリ	クリ	37.0	19.0	16.0	柱材分層 Aa
第 538 図 3	2	埋土	新材	芯持ち材	クリ	23.8	8.4	2.8	樹芯近くの材
第 538 図 2	2	底面	柱材	芯持ち材	カツラ	12.6	16.0	15.3	柱材分層 Aa か 1260 ± 40BP
第 538 図 4	2	埋土	新材	芯持ち材 (半割)	コナラ類	31.7	9.8	6.7	柱材平截
第 538 図 5	3	底面	柱材	芯持ち材	クリ	(41)	直径 19.5		柱材分層 Aa
第 538 図 6	3	埋土	棒状木製品	芯持ち丸太 (半割)	ウツギ類	(13.4)	2.0	(1.1)	加工痕が数カ所あり
第 539 図 7	4	底面	柱材	芯持ち材	クリ	27.4	直径 14.7		柱材分層 Aa か 1150 ± 30BP
第 539 図 8	4	埋土	板材	径目	クリ	9.2	(8.4)	(2.6)	片側面は平直
第 539 図 9	4	埋土	板材	径目	クリ	6.5	5.2	1.6	刃痕あり

第 144 表 ST 23 出土木製品属性

24号掘立柱建物跡(第540図)

時期：8世紀代? (古代4期以前?)

位置：ⅧX-8, 13 (②区)

重複：SB 05、SK 335 を破壊する。SK 535 との切り合い関係は不明。ST 18 に破壊される。

検出経過：黄褐色砂層面で黒褐色土(10YR3/1)の落ち込みを確認した。ひとつひとつを単独で、土坑(SK 332・SK 307・SK 561・SK 534・SK 530・SK 529・SK 528・SK 333)としたが、規模及び配列から、掘立柱建物跡を考えた。

規模：平面形は3間×2間の側柱式の南北棟建物。桁行3間(452cm)、梁行(407cm)床面積18.4㎡。主軸はN-5°-Eを指す。

柱穴：柱筋の通りは比較的よい。平面形は楕円形を基本とする。断面はすり鉢状に立ち上がる土坑が多い。長軸32cm～90cm、深さは21cm～39cmを測る。埋土は10YR3/1の黒褐色土を基調に、単層から3層に分層できた。柱痕が残る土坑は、Pit3(旧SK 561)とPit4(旧SK 534)である。

柱間寸法：平均柱間寸法は、桁行153.5cm(147～159cm)、梁行197.5cm(175cm～220cm)。

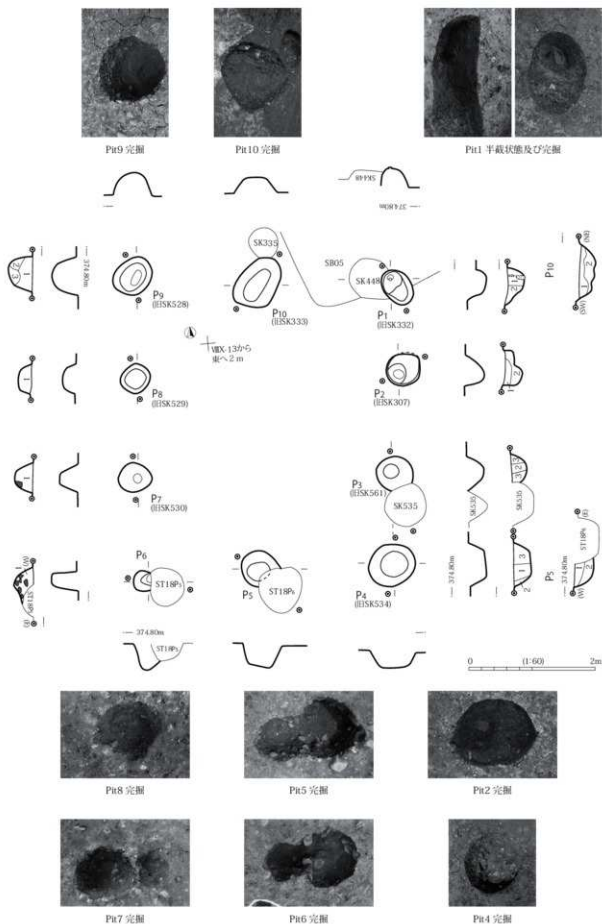
出土遺物：Pit1から土師器杯A2片、甕破片4片、須恵器蓋1片が出土した。Pit5では須恵器杯A、杯A(へラ切り難し調整)の破片、Pit9では黒色土器杯Aの破片1片、土師器甕破片1片が出土した。

Pit番号	旧Pit番号	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	埋土の分層	土色層記号	柱材の敷数	出土遺物	切り合い	備考
1	SK332	楕円	D	60	42	30	f	1層 10YR3/4, 2層 10YR3/3	○	須恵器蓋 土師器甕 柱槽 木片 (遺物取り上げなし)	SK335に切られる	
2	SK307	方形	B-2	58	50	32	b	1層 10YR3/3, 2層 10YR4/3	-	なし	なし	
3	SK561	楕円	D	58	56	27	d	2層 10YR3/1, 3層 10YR7/4	-	なし	SK335に切られる	
4	SK534	楕円	A	78	66	28	d	1層 10YR3/1, 2層 10YR4/3, 3層 10YR7/4	-	なし	なし	
5		楕円	A	62	58	30	b	1層 10YR3/1, 2層 10YR3/1	-	須恵器杯A, 杯Aへラ	ST18Pit6に切られる	ST18Pit6に遺物所属か
6		楕円	E	32	32	32	a	10YR3/1	-	なし	ST18Pit5に切られる	
7	SK530	楕円	D	54	46	28	a	10YR3/1	-	なし	なし	
8	SK529	楕円	D	50	44	21	a	10YR3/1	-	なし	なし	
9	SK528	円	A	64	54	39	e	1層 10YR3/1, 2層 10YR3/1, 3層 10YR3/1	-	黒色土器杯A	なし	
10	SK333	楕円	A	90	60	34	b	1層 10YR3/4, 2層 10YR2/3	-	なし	SK335を切る	

第145表 ST 24柱穴属性



真夏の発掘、一息



第540図 ST 24 完掘の状態

25号掘立柱建物跡(第541図)

時期: 8世紀代(古代2期~4期)

位置: VII X-22, IX D-2(②区)

重複: ST 22のPit3と本跡Pit8、ST 22Pit4と本跡Pit7は重複する。切り合い関係は確認できず、同一柱穴を再度利用したのか。

検出状況: 黄褐色砂層上面で検出。黒褐色土(10YR3/1)を基調とした落ち込みで、柱状の土坑を確認、規模、配列から掘立柱建物跡を想定し調査した。

規模: 平面形は、2間×2間の側柱式の南北棟建物。桁行2間(330cm)、梁行2間(307cm)床面積10.1㎡。主軸は真北を指す。

柱穴: 柱筋は柱痕を通るが、直行はしない。平面形は楕円形状または円形状を呈し、断面形はバケツ形で、柱材の残存する底部に段を有する形態が中心。規模は長軸53cm~78cm、深さは10cm~52cmを測る。埋土は10YR3/1の黒褐色土を基調に、単層から4層に分層できた。ST 22Pit4と同一位置のPit7の埋土は、柱根を含む層の締まりが悪く、明褐色土粒子を混じる黒褐色粘質土である。柱材は、やや傾斜して出土した。

柱間寸法: 平均柱間寸法は、桁行151cm(138~170cm)、梁行156cm(147~165cm)。

出土遺物: Pit1より須恵器、杯蓋形土器の破片1片、Pit3及びPit4では、土師器甕形土器1片、小型甕3片、須恵器壺形土器体部小破片1片が出土している。

Pit3では、さらに木製品(棒材)が1点ある。芯持ち丸木材で長さ10.2cm、直径1.0cmを測る。端部の切断痕は明瞭でない。

Pit5は非口口土師器の高杯脚部破片及び杯形土器体部破片の土師器甕破片が出土。

Pit6では須恵器杯Aの底部破片と土師器甕形土器の体部破片が出土した。

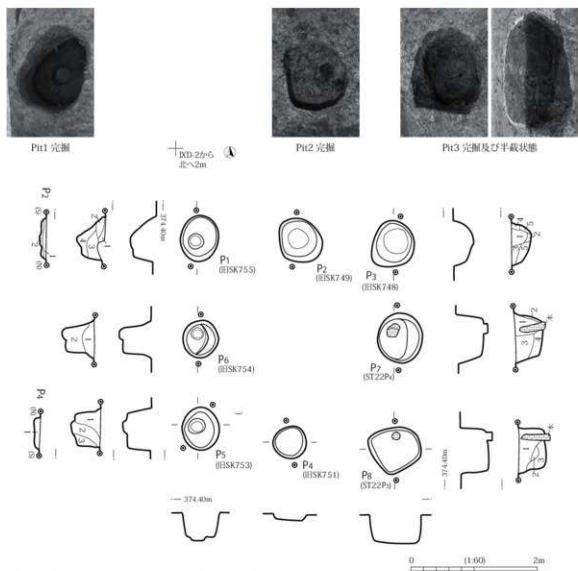
Pit7からは柱材Da類が1点出土、フジ系の削出材で、不整形な断面形に削り出している。ST 22のPit4(P420、第536図6)と同一で、新旧関係がつかめなかったことから、両建物跡で扱う。Pit8も同様にST 22のPit3(P419、第535図4)と同一で、両建物跡で扱う。

Pit番号	旧Pit番号	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	埋土の分類	土色標記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK755	楕円	B-2	72	60	45	b 7	1層 10YR3/3, 2層 10YR6/2, 3層 10YR3/1, 4層 10YR3/1	-	須恵器杯蓋破片	なし	
2	SK749	楕円	B	74	67	10	d2	1層 10YR3/1, 2層 10YR6/3	-	なし	なし	
3	SK748	楕円	D	76	66	31	d	1層~5層 10YR3/1	-	土師器甕破片 木器 棒材	なし	
4	SK751	円	A	53	50	10	a	10YR3/1	-	土師器甕破片	なし	
5	SK753	楕円	B	67	58	46	d	1層 10YR3/1, 2層 10YR3/1, 3層 10YR3/1	-	非口口土師器高杯, 杯 木器 割材	なし	
6	SK754	円	B-2	60	55	52	b	1層 10YR3/1, 2層 10YR3/1	-	須恵器杯A	なし	
7		円	B-2	78	70	44	f2	1層 10YR3/1, 2層 7.5YR5/8, 3層 10YR3/1, 4層 10YR3/1	○	木器 柱根 角状木製品	なし	ST22Pit4 共用
8		方形円	B-2	76	70	42	f2	1層 10YR3/1, 2層 10YR3/1, 3層 10YR3/1	○	須恵器杯A 木器 柱材	なし	ST22Pit3 共用

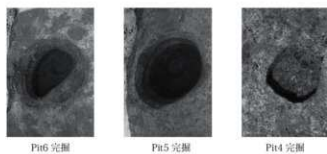
第146表 ST 25 柱穴属性

遺構名	非口口土師器		土師器				須恵器			数/総重量 (破片/g)	
	杯C	高杯	杯A	甕	甕B	甕E	小型甕	杯A	蓋		壺
Pit1									1		1/6.8
Pit3				1			2				3/13.7
Pit4							1			1	2/49.3
Pit5	1	1				2					4/53.9
Pit6			1		1			1			3/20

第147表 ST 25 出土土器組成



第541図 ST 25 完掘の状態



Pit6 完掘

Pit5 完掘

Pit4 完掘



ST 25 全景 (完掘)



ST 25 及び ST 22 全景 (白線入り)

26号掘立柱建物跡(第542図・第543図)

時期：8世紀後半～(古代4期以降に比定)

位置：ⅧX-12(②区)

重複：SD60、SK617を破壊し、SK623に本跡Pit5が壊される。また本跡Pit1とST19Pit4は切り合い関係にあるが、新旧については不明である。

検出状況：黄褐色砂層上面で黒褐色土の落ち込みを確認した。土坑として調査し、整理作業で、土坑の形状及び配置から判断し、掘立柱建物跡とした。

規模：平面形は2間×1間の側柱式の南北棟建物。桁行2間(2.6m)、梁行1間(2.5cm)、床面積6.3㎡。主軸はN-1.5°-Eを指す。

柱穴：東西の柱筋が直行しない建物である。平面形はPit1とPit2が隅丸形状で、ほかは楕円・形状か。断面はバケツ形、底部が平坦か、あるいは柱材により底部に段を持つ形態。規模は長径59cm～85cm、深さ27cm～47cmを測る。埋土は10YR2/3の黒褐色土を基調とし、数枚に分層できた。

柱間寸法：平均柱間寸法は、桁行132.5cm(115～145cm)、梁行237.5cm(245cm～230cm)。

出土遺物：Pit1からは、非ロクロ土師器杯の小破片1片と須恵器甕E類の1/5程度の一括個体1点が出土している。やや軟質の作りで、頸部の屈曲が弱く、ナデ幅の大きなタイプである。また割り材1点は6.9cm×2.4cm、厚さ1.4cmのカツラ材。

Pit5からは、須恵器杯A類及びB類の破片と土師器甕形土器の体部破片、1の盤A類脚部破片が出土。SK623に1/3程度破壊されており、出土遺物の混在は考えておくべきであろうか。Pit6では、軟質須恵器の杯A類緑部小破片が出土している。

Pit番号	旧Pit番号	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	埋土の種類	土色標記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK618	隅丸方形	A	59	53	40	d(f)	1層～4層 10YR2/3	—	須恵器甕E 非ロクロ土師器杯? 割り材	ST19Pit4と切り合い不明	
2		隅丸長方形	B-2	(85)	65	43	d	1層・2層・3層 10YR3/2, 4層 10YR2/3, 5層 10YR7/2, 6層～9層 10YR2/3	—	土師器甕	SK617とSD60を切る 暗渠に切られる	SK617の一部
3	SK619	変形円	A	60	54	35	e	1層～4層 10YR2/3	—	なし	なし	
4	SK620	変形円	B-2	83	78	47	d	1層～7層 10YR2/3, 8層 10YR7/2, 9層 10YR2/3	—	非ロクロ土師器杯?	なし	
5		楕円	G	70	(45)	40	e	3層 10YR3/2, 4層・5層 10YR2/3, 6層 10YR7/2	○	須恵器杯A, 杯B 土師器甕, 盤A 柱根	SK623に切られSD60を切る	SK623の一部 盤AはSK623に属する可能性も有り
6	SK622	楕円	A	(40)	53	27	a	10YR3/2	—	須恵器杯A	暗渠に切られる	

第148表 ST26柱穴属性

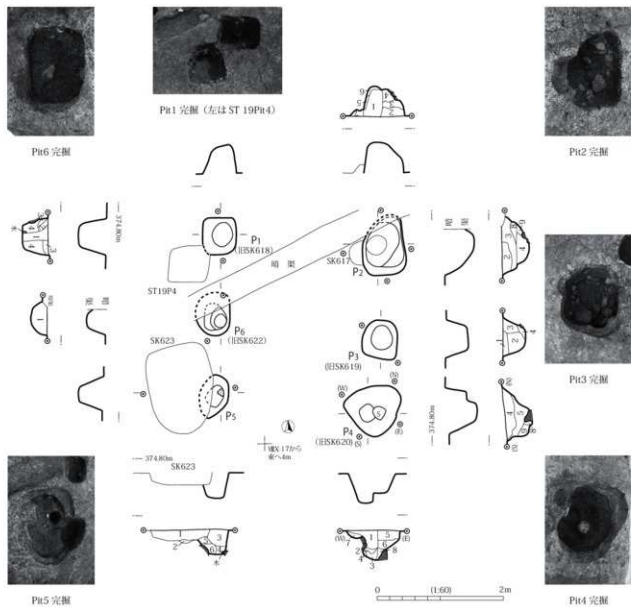
遺構名	非口 杯	土師器 甕A	甕	甕B	須恵器 杯A	杯B	甕A	甕E	数 / 総重量 (破片/g)
Pit1	1			1				19	20/322.3
Pit2									1/2.4
Pit4	1								1/4
Pit5		1		1	1	1			4/150.4
Pit6					3		1		4/25.9

第149表 ST 26 出土土器組成

Pit5



第542図 ST 26 Pit5 出土の土器



27号掘立柱建物跡(第544図・第545図)

時期：7世紀～8世紀(古代2期?)

位置：KD-1(②区)

重複：SD73に本跡Pit5は破壊される。

検出経過：黄褐色砂層上面で黒褐色土の落ち込みを検出した。SD73に破壊された柱穴状の土坑を含め、5基のみしか確認できなかった。検出状況も悪くなく、再度の精査を行ったが、これら以外に柱状の土坑を周辺にて確認することはできなかった。一つ一つを土坑として扱ったが、整理時に掘立柱建物跡と認定した。

規模：平面形は2間×1間の側柱式の東西棟建物。桁行2間(4.04m)、梁行1間(2.02m)、床面積9.24㎡。主軸はN-2°-Wを指す。

柱穴：隅丸方形に近い円形を基本とする。断面はバケツ形を呈し、Pit1からPit3は底面に段を有する形態。10YR2/3の黒褐色土及び10YR4/1の褐灰色土を基調とした複層。SD73に破壊されたPit5の埋土は、締めりのある10YR4/1の褐灰色の粘質土が下層に、中層には10YR3/1の黒褐色土、上層に10YR2/3の黒褐色土が堆積していた。いずれも埋土中にブロック状の土が混入しており、人為的な堆積の可能性が高い。Pit1及びPit2からは、礎板が出土し、それらは壁際に据えられていた。

柱間寸法：平均柱間寸法は、桁行202cm(192～212cm)、梁行202cm(200cm～204cm)。

出土遺物：Pit1から須恵器杯A(ヘラ切り離し調整)底部1片、土師器甕破片が出土。1は杯Aで硬質、底部は水平方向にヘラ切りされる。3は埋土から出土した漆器1点。クリ材の横木取りで、長さは3.6cm、復元径は6cmを測る。高台部からの立ち上がりの部分で両面とも朱塗りで、また、柱穴底面から礎板(Ba類)1点が出土。4がそれで、キリの分割材。大きさは38.1cm×14.9cm×4.2cm、木裏を表にし、樹皮が部分的に残る。明確な刃痕は2箇所あり、両端部の断面は刃痕が観られず、鋸による切断も考えられる。転用材ではない。据え付け痕跡は観察できない。Pit2では土師器杯A類と須恵器甕E類の破片が各1片出土。坑底面からは礎板(Aa類)、が1点出土し、大きさは27.0cm×6.3cm×2.7cmで、樹種はモミ属である。一端の切断痕は明瞭だが、もう1端は割り切断か。木表を表とし利用する。Pit5より須恵器杯Aと蓋の破片出土。2はかえし部が緩やかに外反する蓋破片。その他、埋土2層と3層の間から5の付札状木簡1点が出土した。ヒノキの板目材で、大きさは15.3cm×3.6cm×1.0cm。板状で、両端近くに左右V字状の溝が入る。赤外線では、墨痕は認められなかった。

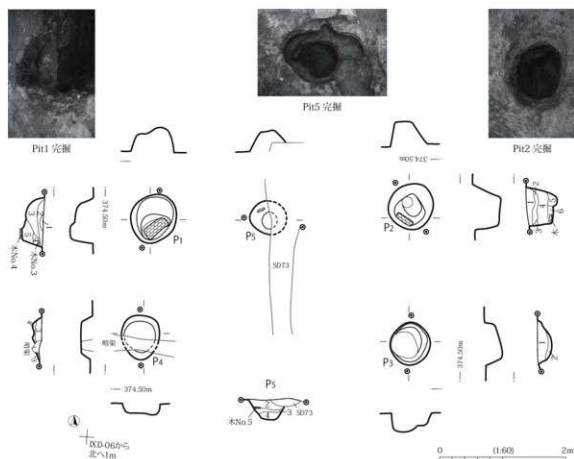
所見：柱穴が方形に近い形態で、規模がほぼ揃っていること、埋土内から出土した遺物に漆器や付札木簡があったことを考えると、単なる集落内の建物ではなく、特別な性格を持つ施設と考えたほうがよいであろう。

Pit番号	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	埋土の分類	土色備記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	方形円	B-2	84	71	38	b(k)	1層・2層 10YR2/3、3層 10YR4/1、4層・5層 10YR2/1	○	須恵器杯A 土師器甕 礎板 漆器	なし	礎板 漆器
2	方形円	B-2	59	59	48	b(k)	1層・2層・3層 10YR2/3、4層・5層・6層 10YR2/1	○	黒色土器7群A 須恵器甕 礎板	なし	礎板
3	方形円	B-2	65	62	22	b	1層・2層 10YR4/1	—	なし	なし	
4	方形円	A	58	58	14	b	3層・4層 10YR4/1	—	なし	なし	
5	方形円	D	不明	不明	32	b	2層 10YR2/3、3層 10YR2/1、4層 10YR4/1	—	須恵器杯A 蓋 付札	SD73に切られる	付札

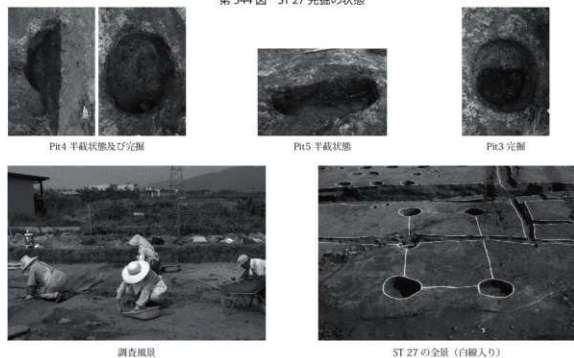
第150表 ST27柱穴属性

検出番号	Pit番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴 (C14年代)
第545図4	1	底面	礎板	分割材(芯去)	キリ	38.1	14.9	4.2	礎板分類 Ba 1210 ± 40BP
第545図3	1	埋土	漆器	横木取り	ケリ	3.6	高台復元径 6.0		内外面とも朱塗 水廻朱か
	2	底面	礎板	透柱目	モミ属	27.0	6.2	2.7	礎板分類 Aa か 1430 ± 40BP
第545図5	5	埋土	付札	板目	ヒノキ科	15.3	3.6	1.0	側面部にV字状溝

第151表 ST 27 出土木製品属性

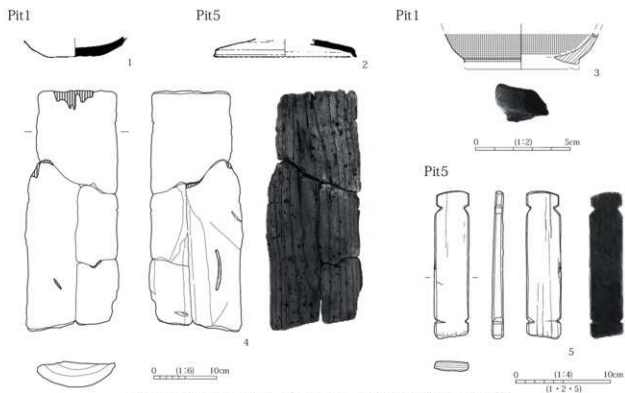


第544図 ST 27 完掘の状態



調査風景

ST 27 の全景 (白線入り)



第545図 ST 27出土の土器・木製品 (Pit1・Pit5 出土の破板材と付札木筒)

28号掘立柱建物跡 (第546図・第547図)

時期： 8世紀終末 (古代5期)

位置： IX D-23, 24 (③区)

重複： SK 870、SK 590、SK 912、SB 10・SB 15、SD 51 (SD 14) に破壊されるか。

検出経過： 調査ではSB 10及びSB 15の床面調査時に確認した。暗褐色土及び黒褐色土の落ち込みを検出した結果、規模の大きな柱状土坑が規則的に確認できた。配列から、それらは掘立柱建物跡と考えられたが、すべて単独の土坑として調査した。整理段階で、それぞれをPit1 (旧SK 1088)、Pit2 (旧SK 1064)、Pit3 (旧SK 1039)、Pit4 (旧SK 1038)、Pit5 (旧SK 1065) Pit6 (旧SK 1089)、Pit7 (旧SK 1069)、Pit8 (旧SK 1085)、Pit9 (旧SK 1086)、Pit10 (旧SK 1087)、Pit11 (旧SK 1067)、Pit12 (旧SK 1066) とする。SB 10及びSB 15の切り合いにより、Pit2及びPit3の立ち上がり部分が破壊され、連結して1基の土坑のように検出された。第546図の破線部分は、その推定復元である。

規模： 平面形は、3間×2間の総柱式の東西棟建物。桁行3間 (440cm)、梁行2間 (374cm)、床面積16.5㎡。主軸はN-16°-Eを示す。

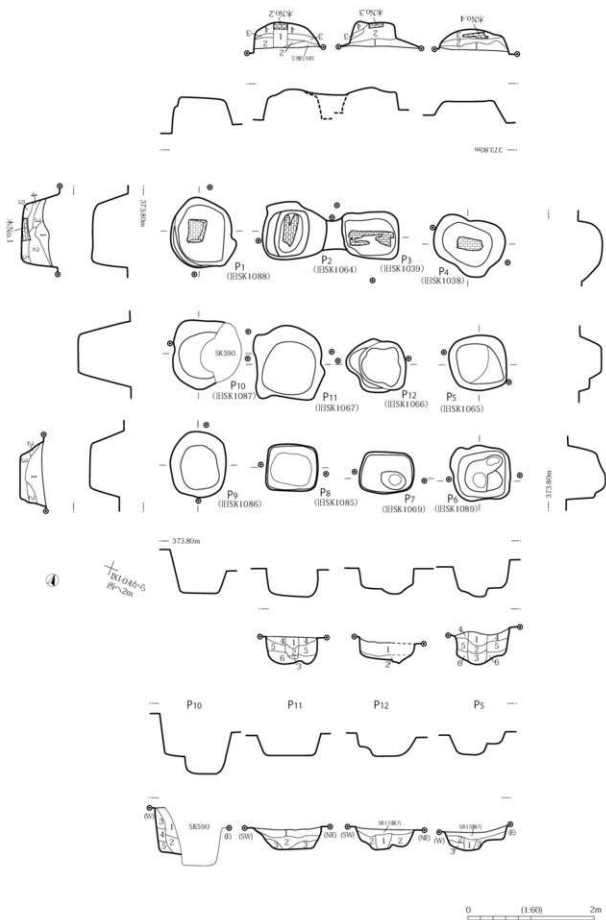
柱 穴： 平面形は、隅丸方形及び隅丸長方形を呈する。断面形は底面が平坦な深いタライ状 (バケツ形) もしくは段を有する形態。規模は長軸41cm~60cm、深さ36cm~71cmを測る。埋土は、3~6層に分層できた。柱痕が明確に残るのはPit2、Pit5、Pit6である。Pit6は柱痕部が、炭化物を含む暗褐色土及び黒褐色土で3層に分層できた。掘り方の埋土は、下層に白色粘土ブロックを含む黄灰色粘質土 (2.5Y4/1) で、中層に地山の黄褐色粘質土ブロックを含む暗褐色土 (10YR3/3)、上層に白色粘土ブロックを含む暗褐色土 (10YR4/3) が版築状に堆積していた。Pit2及びPit6、Pit10も版築状か。またSB 2軒の下層にて検出した結果、一部、上層にSBの床下埋土を堆積したPitも見られた (Pit11・Pit12・Pit2)。

- 柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行 146cm (126 ~ 168cm)、梁行 188cm (186 ~ 190cm)。
- 出土遺物： Pit1 より土師器甕 B、土師器杯 A、須恵器杯 A 類の破片が出土し、坑底面からは 1 の礎板材 1 点がある。モミ属の板目材で分類 Aa。調整加工された木裏を表とし、木表は枝節が大きく残る。断面の年輪の形状は緩やかな板目の年輪を示すことからかなりの大木から伐り出されたと推定できる。一端には V 字状の深い刃痕が 2箇所確認できる。而としての加工は認められず、転用については不明。炭素年代測定から、644 ± 40 年 AD (7 世紀後半) を得た。5 は埋土内から出土した No1 の土師器甕 B 類の口縁部破片。如意形に外反した口縁部で、幅 2.0cm 程度の板状工具で外面は縦方向に、内面は横方向に調整を施す。
- Pit2 は土師器杯 A 類、須恵器杯 A 類の破片、2 の礎板材 (Ee 類) 1 点が出土。礎板材は丸太の分割材で樹種はキリ。一端部に U 字状の欠き溝あり、受け手となる部材 (柱材) を転用したものか。炭素年代測定から、774 ± 40 年 AD (8 世紀後半) を得た。
- Pit3 では土師器甕形土器、黒色土器 A 杯 A 類、須恵器杯 B 類の破片が出土し、坑底面には板材があった。6 は須恵器杯 B III 類の 2/3 個体。口径 15.0cm、器高 6.3cm、高台径 9.5cm を測る。底部糸切り離した後ケズリ調整。高台は凹形である。その他、SB 15 埋土中の遺物と接合関係にある須恵器盤がある (P342, 第 480 図 37)。3 の板材はキリの分割材で、木表に斧痕跡はいる。残存部から板状の礎板と考えられるが、大部分を欠失している。
- Pit4 では、土師器甕は片 1 片と 4 の礎板材 (分類 Aa) 1 点が出土。モミ属の分割材で、木裏を表とする。一端に切断面があり、比較的平滑だが、加工面は見当たらない。転用かは不明。
- Pit5 ~ Pit12 については、第 153 表に示す、土器が出土している。

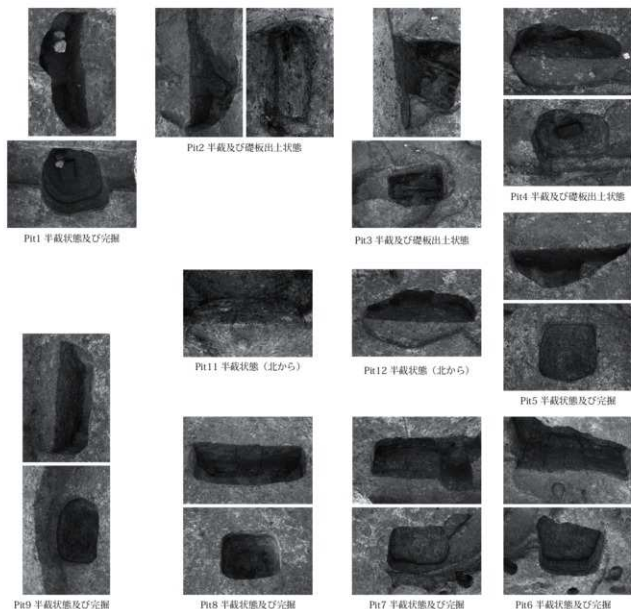
所 見： 本跡は、以下の点から穀倉級の正倉と考えたい。平面形状が総柱建物であり、側柱と中柱の柱規模に違いがない。柱穴形状が隅丸形状を基本とし、柱穴規模は大きく、ほぼ均一。残存している礎板の規模も他の掘立柱建物跡の礎板材と比較して極めて大きい。これは、建物総体の自重がかなりあったと考えられる。掘り方の埋土が版築状に叩き叩き閉められている。隣接する掘立柱建物跡と比べて、主軸方向が異なる、特別な建物か。

Pit 番号	旧 Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	高さ (cm)	埋土の分類	土色相記号		柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
								1層	2層				
1	SK1088	隅丸方形	A	54	52	59	b0k	1層 10YR/4、2層 2.5Y6/3、3層 2.5Y4/2、4層 2.5Y3/2、5層 2.5Y4/1		○	No1 土師器甕 B、FF A No2 石 礎板		
2	SK1064	隅丸方形	A	53	46	71	d0k	1層 5Y2/2、2層 2.5Y3/2、3層 5Y4/1、4層 5Y3/1		○	礎板		
3	SK1039	隅丸長方形	A	44	37	36	d0k	1層 2.5Y3/1、2層 5Y3/1、3層 5Y3/1、4層 7.5Y5/2		○	木器		
4	SK1038	隅丸長方形	A	56	45	60	b0k	1層 2.5Y3/2、2層 2.5Y4/1、3層 5Y3/1		○	木器		
5	SK1065	隅丸方形	B-2	44	44	41	e	1層 2.5Y3/2、2層 2.5Y4/2、3層 2.5Y3/1		-	なし		
6	SK1089	隅丸方形	B-2	45	43	65	d	1層 10YR3/3、2層 10YR3/4、3層 2.5YR3/2、4層 10YR3/4、5層 10YR3/3、6層 2.5Y4/1		-	なし		
7	SK1069	隅丸長方形	B	42	33	44	(b)	1層 2.5Y3/2、2層 2.5Y4/1		-	なし		
8	SK1085	隅丸長方形	A	41	38	46	d2	1層 2.5Y3/3、2層 2.5Y3/1、3層 N4/、4層 2.5Y4/3、5層 2.5Y3/2、6層 2.5Y6/4		-	なし		
9	SK1086	隅丸長方形	A	51	44	69	d7	1層 2.5Y3/3、2層 2.5Y3/2、3層 5Y4/1		-	なし		
10	SK1087	隅丸方形?	G	55	54	95	-	1層 10YR3/4、2層 5Y4/1、3層 10YR3/3、4層 2.5Y6/4、5層 5Y3/1		-	なし	SK990 に切られる	
11	SK1067	隅丸方形?	A	60	55	37	b	1層 2.5Y3/2、2層 2.5Y3/1、3層 5Y5/2		-	なし		
12	SK1066	隅丸方形	B-2	46	43	36	e	1層 2.5Y3/2、2層 2.5Y4/2		-	なし		

第 152 表 ST 28 柱穴属性



第 546 図 ST 28 完掘の状態

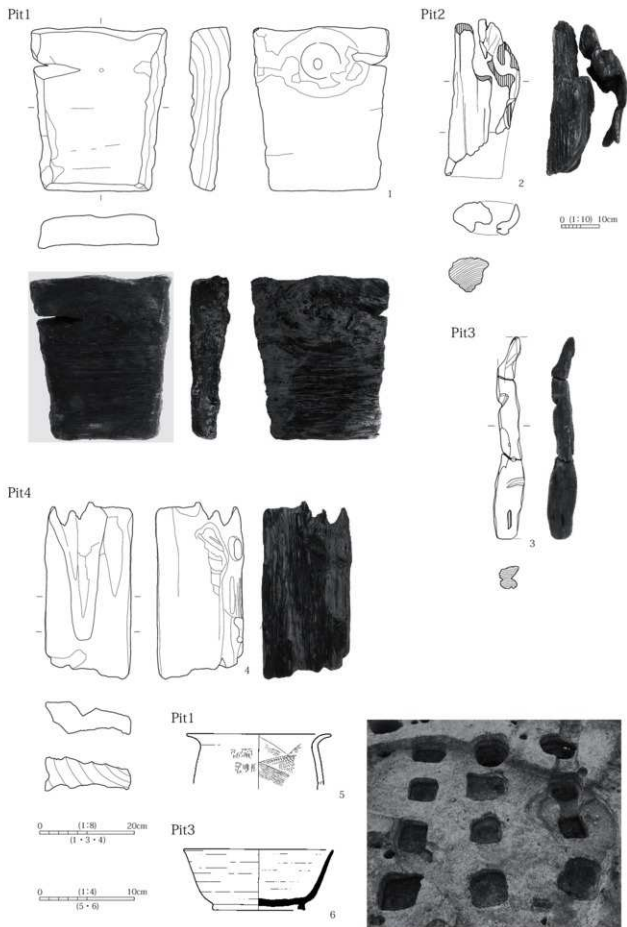


遺構名 ST28	非ロウ 杯C	土師器					黒色土器A		須恵器					数 / 総重量 (破片 / g)		
		杯A	杯B	杯E	小型杯	杯A	杯A	杯B	杯	杯A	杯C	杯D	杯E		小瓶	
Pit1		3	3	2	3	5	2				1					21/223.1
Pit2		2					3									5/85.2
Pit3			10	2		3	2	4		1			1			23/559.8
Pit4		1														1/4
Pit5		1														1/4.5
Pit6		2				1			1		1		1			7/200.2
Pit7		1				1	2	3	1							8/73.8
Pit8		3					1									4/16.3
Pit9		1		1	2	2			1							7/55.1
Pit11				3			1			1						5/28.6
Pit12	1		1													2/15.4

第153表 ST28 出土土器組成

検出番号	Pit 番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴 (C14年代)
第547図1	1	底面	礎板	板目	モミ属	34.8	28.7	8.7	礎板分類 Aa 1360 ± 40BP
第547図2	2	底面	礎板	分割材	キリ	41.4	19.8	9.4	丸木材礎板分類 Ee 1230 ± 40BP
第547図3	3	底面	礎板	分割材	キリ	44.6	(6.9)	4.9	斧痕跡あり
第547図4	4	底面	礎板	分割材	モミ属	37.5	18.5	7.7	礎板分類 Aa

第154表 ST28 出土木製品属性



第 547 図 ST 28 出土の土器・木製品 (Pit1 ~ 4 出土の礎板材)

ST 28 全景

29号掘立柱建物跡（第548図～第551図）

時 期： 7世紀～8世紀（古代2期）

位 置： VII-X-17, 22（㊸区）

重 複： SB 14, SB 17, SD 24を破壊する。

検出経過： 黄褐色砂層面にて10YR2/3及び10YR2/1の黒褐色粘質土の落ち込みを確認した。SB 14推定プランの北壁沿いに3箇所、西壁沿いに1箇所が認められた。落ち込みの規模・配置から掘立柱建物跡を想定するが、4基のみであったことと、SB 14との重複部分については土の相違を判断できず、他の柱穴を確認できなかったことから、調査経過上、それぞれの落ち込みについて、単独に土坑番号を付し調査した。SB 14の床面調査時に、北側の土坑と対峙した土坑を2基確認するが、ST 17の柱穴と重複し、その土層についても判断できないほどに近似していた。本跡 Pit1 と SB 17 Pit2 の切り合いから、ST 17を破壊すると決定したが、極めて不明瞭。SB 14とは、本跡 Pit3 が、SB 14の木樋状遺構を破壊するように観察できたので、本跡が新しいと判断した。やはり難しい決定。

規 模： 平面形は、2間×1間の側柱式の東西棟建物。桁行2間×梁行1間（3.66m×3.18m）、床面積11.6㎡。N-88°-E。

柱 穴： 柱筋はほぼ直行する。Pit2で検出した柱材のみが通らない。Pit2はSB 17のPit2と重複しており、礎板材と柱材のあり方が極めて不自然であった。平面形は円形を基本とする。長径は71cm～120cm、深さは22cm～48cmを測る。断面は底部が平坦か深いタライ状で、礎板材がすべてに据え付けられる。埋土は単層から3層に分層できた。10YR2/1の粘性強い黒色土を基調とする。

柱間寸法： 平均寸法は、桁行170.5cm（152cm～200cm）、梁行313cm（300cm・326cm）。

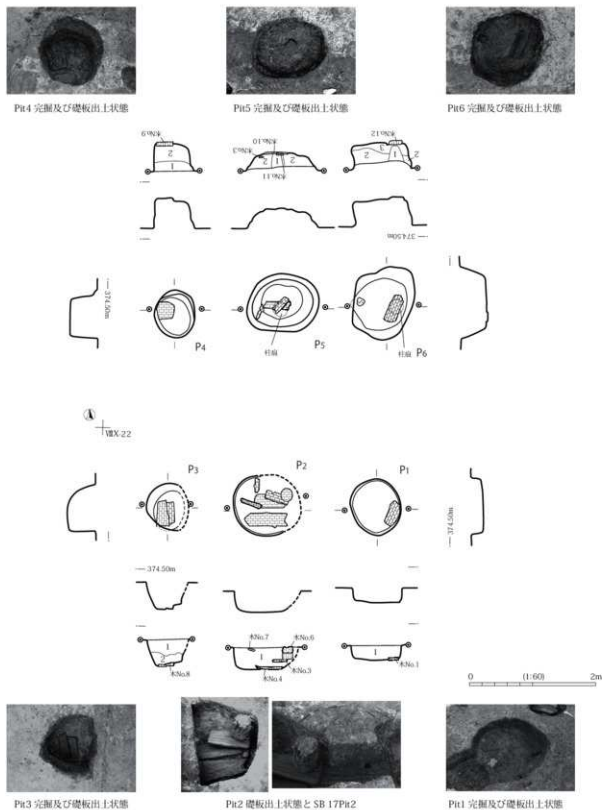
出土遺物： Pit1からは1の礎板材が出土した。モミ属の板目材で分類Aa。木裏を表として使い、一端の切断痕は、5cm前後の斧痕跡がほぼ表側からと裏側から連続的に打ち込まれる。割材を加工して礎板として使用したのか。炭素年代測定の結果、644±40年AD（7世紀代）。ほか1点の出土があるが、1と同一個体であろう。

Pit2からは8点の木製品が出土した。2は礎板材の破損品。モミ属の板目材。一端は斜めに切断し、もう一端は垂直に割る。形状は角状。比較的表裏両面平滑。7も2と同様に礎板材の欠損痕か。サワラの板目材。一端の切断痕あり。比較的平滑で製材される。転用材の可能性もあり。3も礎板材。ヒノキの板目材で分類Aa。一端の切断面には斧痕跡が連続して入り、Pit1の礎板材に類似する。もう一端は垂直に切られており、鋸であろうか、木目も暴れる。

Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の 分類	土色係記号	柱材の 有無	出土遺物	切り合い	備 考
1	楕円	A	88	80	26	a	10YR2/1	—	礎板	なし	
2	楕円?	B	(104)	(96)	30	a	10YR2/1	○	礎板 割材 柱材	なし	
3	円	A	71	(50)	38	b	1層・2層 10YR2/1	—	礎板 割材	なし	
4	楕円	A	78	62	48	b	1層 10YR2/3, 2層 10YR2/1	—	礎板	なし	
5	楕円	D	106	92	22	j	1層 10YR2/3, 2層 10YR2/1	—	礎板 板材	なし	
6	楕円	A	120	94	30	j	1層 10YR2/3, 2層・3層 10YR2/1	—	須臾器痕、壺、杯片 礎板 板材	なし	

第155表 ST 29柱穴属性

木裏を表に据えられ、木裏には木目に逆らうように横方向からの鋭利な刻線が入る。木表側には4 cm 前後の刃で削ったと思われる削り痕が観察できる。チョウナであろうか。側面にはホゾ孔加工が施されており、転用材と考えてよい。ホゾ孔を持つ柱材の分割材とも考えられるか。4も礎板。板目。モミ属。礎板分類 Aa。3の下部に据えられていた。木裏を表に



第 548 図 ST 29 発掘の状態

して使用し、切断面は他の礎板と同様、一端は垂直に削り落とし、もう一端は両面から打ち落としている。5も礎板材。モミ属の板目材で、礎板分類 Bd。木裏を中心にほぼ全面的に削られる。チョウナ痕跡であろうか。木表は中央部横に 3.0cm 前後の刃で削ったと思われる痕跡が残る。切断面の一端は中心部を尖らせ、V字形に削り落とす。斧による粗い切断痕が残る。もう一端は打ち割った痕跡。使用済みの柱材を分割して利用したものか。6は芯持のクリ材を使用した柱材(分類 Cb)。樹芯部は腐蝕し空洞化している。木目は不明。加工痕も腐蝕のため明瞭ではないが、底部の角を落とし、V字形に削った横溝が一周する。炭素年代測定では、744 ± 40 年 AD (8世紀代)の結果を得た。この他、礎板材1点と割材1点が出土している。

Pit3からは礎板材と割材で板目(15 × 1.2 × 0.5cm)の基礎材の一部が出土している。8の礎板材は、モミ属の板目で分類 Ad。板状に削って使用され、木裏を表とする。木裏には平滑に加工されている箇所が中央部より両端にかけて3箇所あり、切断面は一端はV字形、もう一端は横に切断される。製材はしていない。転用材であるかは不明。

Pit4からは10の礎板材が出土。モミ属の板目材、礎板分類 Aa。木表を下にする。木裏面を加工。特に中心部が平坦に加工される。据え付け面を作るためであろうか。一端は、V字形に切断され、斧痕跡がはっきり残る。他の礎板に比して長さは短い、厚みがある。

Pit5からは礎板材と考えられる板材2点が出土。10はモミ属の板目材で分類 Aa。一端は欠損するが、もう一端には切断面痕が残る、表面、裏面の両面から打ち落されている。木裏を表にして使用。11は柾目の礎板材で、モミ属。礎板分類 Aa。割った面には斜めに刃痕が数カ所入る。切断面の斧痕は確認できない。鋸による切断なのか。

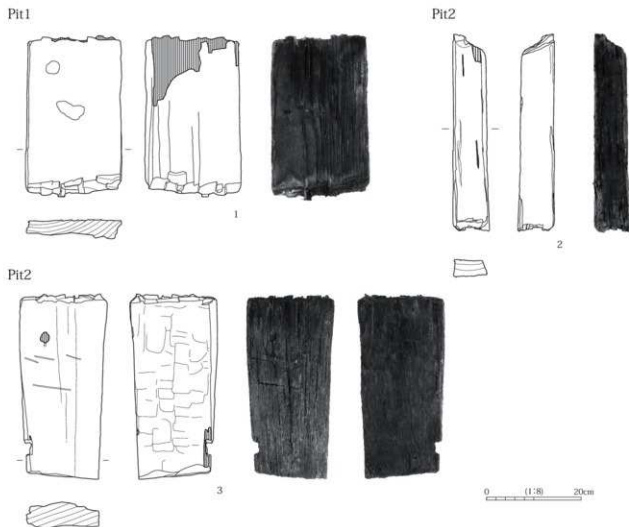
Pit6では、須恵器杯A類、甕及び壺形土器の破片が各1点出土し、木製品も2点が出土。12はモミ属の礎板材で板目。分類は Ad。木裏を表とする。木裏の表面は割れ痕のみが残る。木口から縦に割り、材は年輪に沿って湾曲している。両端ともに、斧による切断痕が残る。幅 4.0cm 前後の刃で、6、7回、打ち割ったものか。両端部ともに右側角を打ち落とす。据え付け痕跡は確認できない。他の1点は柾目の木片(11.5 × 3 × 1.3cm)。

所見： 各柱穴から出土した礎板材は、端部の切断形状等から判断して、同一の木材(樹種モミ属)から割り板として取り出したと考えられる。Pit4の礎板33、Pit1の礎板1、Pit3の礎板8、Pit6の礎板12、Pit2の礎板2である。切断する際にも、刃幅の痕跡からみて同じ工具(斧)を用いたと考えられる。また、これらの材は、板目部分を木目に沿って割ったもので、特に調整加工は施さないことが特徴である。

Pit2の礎板7は、製材板を使用している。これは転用材を使用した結果であろう。同 Pit2内の礎板3も板状で側面部に欠き込みを残すことから、「筏穴」を持つ柱状の材を割った可能性がある。特に Pit2の柱材は、2枚に重なっている礎板上に位置し、礎板中心部から大きくずれており、SB 17Pit2との係わりからも、やや異質、不自然である。理由はわからない。

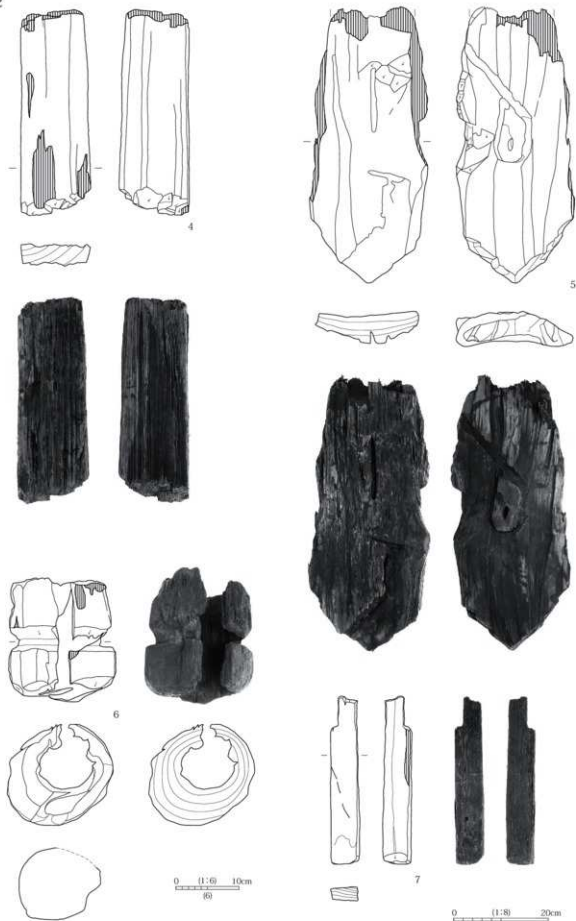
検出番号	Pit 番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴 (C14年代)
第549 図1	1	底面	礎板	板目	モミ属	34.1	20.4	4.1	礎板分類 Aa 1360 ± 40BP
	1	埋土	礎板	板目	モミ属	5.9	4.6	1.0	一端は斜めに切断
第550 図4	2	底面	礎板	板目	モミ属	43.6	14.8	4.5	礎板分類 Aa
第549 図2	2	埋土	礎板	板目	モミ属	(41.7)	(7.7)	3.7	礎板分類 Ab
第549 図3	2	埋土	礎板	板目	ヒノキ	39.2	18.5	5.5	礎板分類 Aa
第550 図5	2	埋土	礎板	板目	モミ属	58.5	25.0	6.8	礎板分類 Bb
第550 図6	2	埋土	柱材	芯持ち材	クリ	(19.6)	17.0	16.0	柱材分類 CB 1260 ± 40BP
第550 図7	2	埋土	礎板	板目	サワラ	(35.5)	(6.2)	2.9	礎板分類 Dd
	2	埋土	礎板	板目	モミ属	22.7	6.0	0.7	両端欠損
	2	埋土	割材	板目		12.4	1.8	1.2	木片 (基礎材の一部か)
第551 図8	3	底面	礎板	板目	モミ属	36.4	23.5	5.8	礎板分類 Ad
	3	埋土	割材	板目		15.0	1.2	0.5	木片 (基礎材の一部か)
第551 図9	4	底面	礎板	板目	モミ属	23.9	26.8	7.5	礎板分類 Aa
	4	埋土	割材	板目		2.2	1.2	0.6	木片
	5	底面	板材	板目	モミ属	(38.9)	11.6	2.3	礎板分類 Aa
第551 図11	5	底面	礎板	板目	モミ属	27.1	10.7	2.7	礎板分類 Aa
	5	埋土	割材	追柱目		12.9	2.9	0.8	木片
	5	埋土	割材	板目		4.1	1.2	0.3	木片
	6	埋土	板材	板目		11.5	3.0	1.3	木片
	6	底面	礎板	板目	モミ属	45.6	19.7	4.9	礎板分類 Ad

第156表 ST 29 出土木製品属性

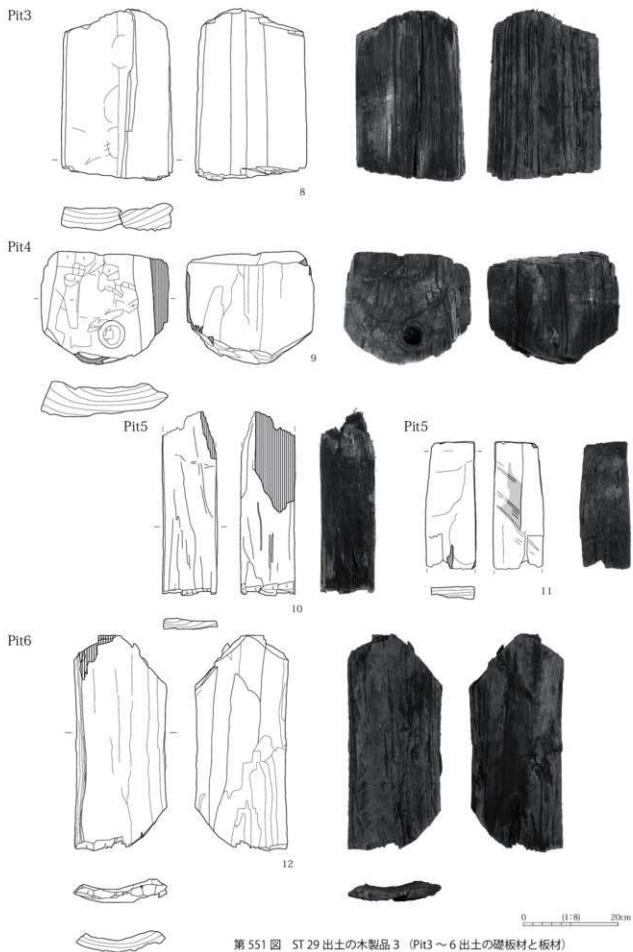


第549 図 ST 29 出土の木製品 1 (Pit1・Pit2 出土の礎板材)

Pit2



第550図 ST 29 出土の木製品 2 (Pit2 出土の柱材と礎板材)



第551図 ST 29 出土の木製品3 (Pit3～6 出土の礎板材と板材)



掘立柱建物跡の柱材と礎板材

30号掘立柱建物跡(第552図～第555図)

時期：8世紀前半～中頃?(古代2期・3期?)

位置：ⅧW-20, 25, ⅧX-16, 21 (②区)

重複：SD 46, SD 65 を破壊する。

規模：平面形は3間×2間の側柱式の南北棟建物。桁行3間(5.3m)、梁行2間(3.6m)、床面積19.2㎡。真北を指す。

検出状況：黄褐色砂質土中にてN2/O 黑色粘土の落ち込みを確認する。落ち込み部は、円形を呈し、配置の規則性から掘立柱建物跡を想定し調査した。

柱穴：柱筋は、各Pitの礎板、柱材を確実に通ることから、他の掘立柱建物跡と比較して、造営精度は高いと言える。各柱穴の平面形は円形状を呈し、底部が平坦なバケツ形。規模は、長径56cm～94cm、深さ18cm～45cmを測る。埋土は単純堆積で黑色粘土。Pit5とPit11は礎板のみで、他のPitは、すべて柱及び礎板が残存した。基礎材は、柱の中心部ではなく、内側壁面に寄せて据えられる。Pit2は別の土坑となったことにより欠番。

柱間寸法：平均柱間寸法は、桁行176cm(146cm～229cm)、梁行182cm(175cm～190cm)である。また、対応する西側桁行Pit9とPit10、東側桁行Pit3とPit4の柱間が、他の桁行柱間寸法に比較して長い。建物構造を考える上で重要な事例か。

出土遺物：本掘立柱建物跡は10基の柱穴内に、基礎材がすべてそろっている。このうち、礎板のみ確認できているのが2基(Pit5・Pit11)。他の8基には礎板・柱材が残存していた。それぞれPitの礎板は、面の加工状態が類似していることから、基本的には廃材(削り出し材)となっ

た柱材を分割して、礎板にした考えられる。ただし Pit10 のみは半丸太材であるため、他の Pit と同様に転用されたものかは不明。特徴的な点として、樹種はすべてクリ材を使用。Pit1 の 1 は礎板材。クリの柵目材で礎板分類 Ca。本跡の礎板材としては小さい。木裏を表に設置する。据え付け痕跡が明瞭に残る。木目を横切るように細長い溝が 2 本走る。釘の痕跡か。表裏の両端を山形にカットし、裏面は斜めに一部刃を入れた痕跡がある。断面形は 4 方向に面取りする。磨耗は激しい。2 は柱材。削出材で分類 Ca。切り込みの溝は 1 周を廻らず途中で途切れる。側面は 10 面程度面取りする。Pit3 の 3 は礎板 (分類 Ad)。クリの柵目材。据え付け痕が残る。斜めに削り痕が観察でき、底部面加工が施される。4 は柱材分類 Cb。削出材。10 面前後加工面を持つ。Pit4 の 5 は礎板 (分類 Ad)。柵目。据え付け痕が残る。一方を山形にカットし、もう一方もやや斜めにカットする。裏面は、加工痕と思われる浅く摩耗した痕跡が至る所に観られる。6 は削出の柱材 (分類 Ca)。上部は腐蝕により破損し脆弱。底部は円形にそして平滑になるよう加工している。特に底部の加工部分はしっかりしている。Pit5 の 7 は柵目の礎板材。分類 Ca。表は据え付け痕跡が、しっかり残る。周囲は荷重によりつぶされている。中央部と上部に丸底の溝が走る。中央部では据え付け痕跡を切るようにある。両端をノミなどで落とした工具痕跡か。裏は 4 面面取りし (Pit1 と同じ)、下部斜め

Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	理士の分類	土色標記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考 (C14年代)
1	楕円	A	72	64	42	a(j)	N2/0	○	柱材 礎板	SD46 を切る	
3	楕円	A	71	61	34	a(j)	N2/0	○	柱材 礎板	なし	
4	楕円	A	86	68	36	a(j)	N2/0	○	柱材 礎板	SD65 を切る	
5	楕円	A	78	60	19	a(j)	1層 10YR3/1,10YR4/6,6/3, 2層 10YR3/1,10YR4/2, 3層 10YR4/6	○	礎板	なし	
6	楕円	A	64	63	18	a(j)	10YR3/1,10YR4/6,6/3	○	柱材 礎板	なし	
7	楕円	B-2	86	84	45	a(j)	1層 10YR3/1,10YR4/6,6/3	○	柱材 礎板	なし	
8	楕円	A	62	54	24	a(j)	N2/0	○	柱材 礎板	なし	
9	楕円	A	56	45	28	a(j)	N2/0	○	柱材 礎板	SD65 を切る	1480 ± 40BP
10	楕円	A	94	84	32	a(j)	N2/0	○	柱材 礎板	なし	1280 ± 40BP
11	円	A	70	66	34	a(k)	1層・2層 N2/0	○	礎板	なし	

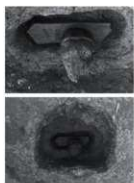
第 157 表 ST 30 柱穴属性



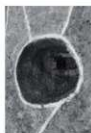
ST 30 全景 (2001年度)



ST 30 全景 (2002年度)



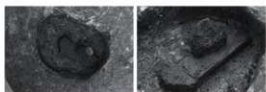
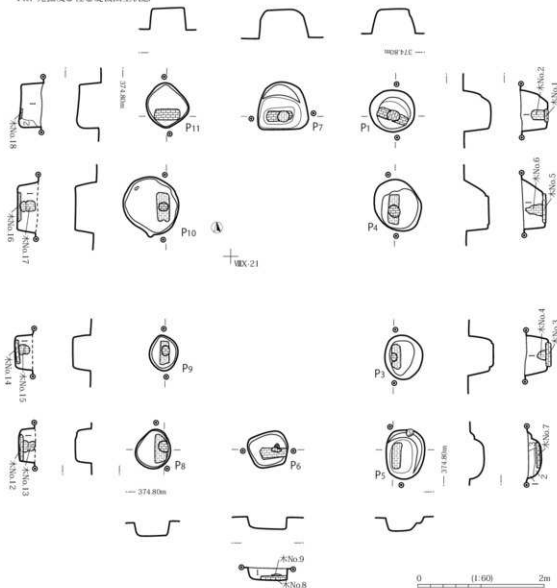
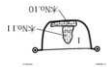
Pr7 完履及び柱と礎板上状態



Pr1 完履及び柱と礎板上状態



Pr4 完履及び柱と礎板上状態



Pr6 完履及び柱と礎板上状態



Pr5 完履及び礎板上状態



Pr3 完履及び柱と礎板上状態

に丸底の溝が走る。裏面に直線上の小さな穴がある。Pit6の8は礎板材(分類Ad)。柾目。一方は中心を軸にして山形に切り落とし、もう一方はひとつの角を斜めにカットする。据え付け痕跡が残る。目に逆らって横方向に刃痕が入る。釘穴が残る。裏(底面)は、平坦で柾目の木目がはっきり出ている。角を僅かにけずって面をとる。9は削出の柱材。腐蝕による破損がひどく木片として残るのみ。

Pit7の10は礎板材。柾目で礎板分類Cd。据え付け痕跡がある。長さ7cm前後の斧痕が残る。木口にも刃痕が残る。分割する際の痕跡であろうか。底部は6面が面取り加工される。11は柱材。削出で柱材分類Cb。比較的残りがよいものの、溝の上、5cmほどまで腐蝕が進んでいる。面取りは10面ほどある。底部に近い側面には、角を落とす粗い削り痕が覗かれる。

Pit8の12は礎板。柾目で礎板分類Ad。比較的残りがよい。表には据え付け痕跡が、しっかり残る。両端に切断痕がある。13は柱材。削出材で柱材分類Cb。残存状況は悪い。柱底の面半分が残存する。比較的しっかりするが、切り込み溝から上部は腐蝕が激しい。

Pit9の14は礎板材。追柾目の礎板分類Ad。表は据え付け痕跡が、しっかり残る。両端を斧などで落とし、端に刃の痕跡が残る。木口に鋭い刃の痕跡がある。くさび等による打ち込み痕であろうか。縦に割った際に割れ目がまっすぐに入っている様子を観察できる。15は柱材(分類Cd)。削出。残りが比較的よい。側面は摩耗するが、加工痕は12面を数えるか。炭素年代測定で、524 ± 40年AD(6世紀後半)を得た。

Pit10の16は礎板。半丸太。礎板分類Ba。材の残りが大変よい。本跡の中で一番大きい。他の柱穴出土例と異なり、半丸太材。一方を斜め山形にカット。木裏を表にし、木表を下に置く。表には据え付け痕跡がしっかり残る。裏面には節が覗かれる。特に大きな調整痕は観察できないが、浅く面を取っている可能性もある。17は柱材。削出材で柱材分類Cb。底部から切り込み溝の上15cm前後まではしっかりと残る。底部の角をしっかりととり、側面は12面に及ぶ加工があり、底部にも平滑化をはかり、中心に向かって刃の削り痕が残る。炭素年代測定で、724 ± 40年AD(8世紀後半)を得た。

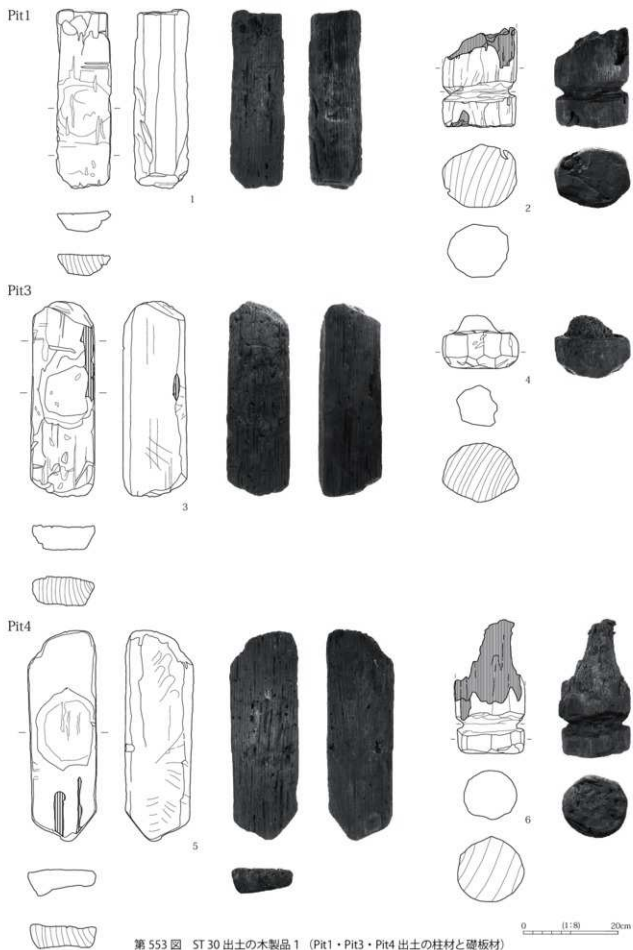
Pit11の18は柾目の礎板材(Aa類)。据え付け痕跡が不明だが、中心部の木目が円状につぶれ、なめらかになっているため、その痕跡と想定した。本跡の中では、据え付け痕跡のはっきりしないのは、このPitのみである。柾目状で木目ははっきりしない。割板の剥がれ痕跡が残るが平滑。他のPit出土礎板材と比べ、最も平板で、水平に置くことができる。端部には切断痕がある。

検出番号	Pit 番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴
第 553 図 1	1	底面	礎板	柱目	クリ	37.9	11.5	4.5	礎板分類 Ca 掘え付け痕残る
第 553 図 2	1	礎板の上	柱材	削出	クリ	21.1	直径 15.6		柱材分類 Ca 溝は 1 周をまわらず
第 553 図 3	3	底面	礎板	柱目	クリ	41.3	13.5	6.2	礎板分類 Ad 掘え付け痕残る
第 553 図 4	3	礎板の上	柱材	削出	クリ	(11.2)	直径 16.0		柱材分類 Cb
第 553 図 5	4	底面	礎板	柱目	クリ	44.6	14.5	5.6	礎板分類 A d 掘え付け痕残る
第 553 図 6	4	礎板の上	柱材	削出	クリ	(28.3)	直径 14.9		柱材分類 Ca
第 554 図 7	5	底面	礎板	柱目	クリ	40.2	12.8	6.1	礎板分類 Ca 掘え付け痕跡、しっかり残る
第 554 図 8	6	底面	礎板	柱目	クリ	44.5	13.8	5.5	礎板分類 Ad 掘え付け痕残る
第 554 図 9	6	礎板の上	柱材	削出	クリ	5.3	7.6	2.1	木片
第 554 図 10	7	底面	礎板	柱目	クリ	43.5	13.4	7.0	礎板分類 Cd 掘え付け痕あり
第 554 図 11	7	礎板の上	柱材	削出	クリ	(29.0)	15.5	12.5	柱材分類 Cd
第 554 図 12	8	底面	礎板	柱目	クリ	41.0	13.1	5.7	礎板分類 Ad 掘え付け痕残る
第 554 図 13	8	礎板の上	柱材	削出	クリ	10.0	直径 11.6		柱材分類 Cb 残存状況は悪い
第 555 図 14	9	底面	礎板	追柱目	クリ	40.9	14.5	6.0	礎板分類 Ad 掘え付け痕跡、しっかり残る
第 555 図 15	9	礎板の上	柱材	削出	クリ	(18.6)	直径 15.3		柱材分類 Cd 1480 ± 40BP
第 555 図 16	10	底面	礎板	半丸木	クリ	43.8	17.0	7.8	礎板分類 Ba 掘え付け痕跡がしっかり残る
第 555 図 17	10	礎板の上	柱材	削出	クリ	(27.3)	直径 14.3		柱材分類 Cb 1280 ± 40BP 残存状況は悪い
第 555 図 18	11	底面	板材	柱目	クリ	37.1	13.6	3.7	礎板分類 Aa 掘え付け痕跡不明瞭

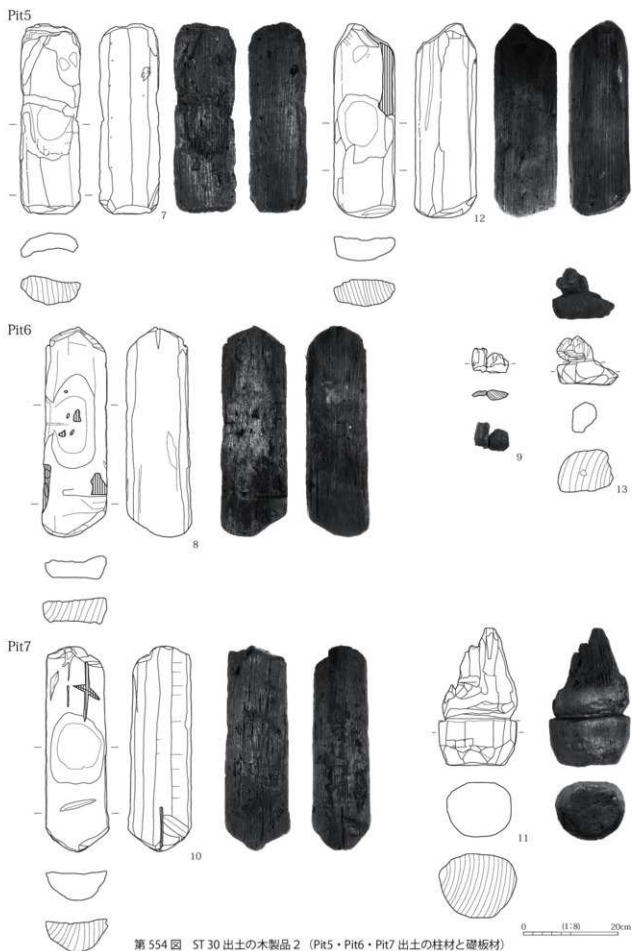
第 158 表 ST 30 出土木製品属性

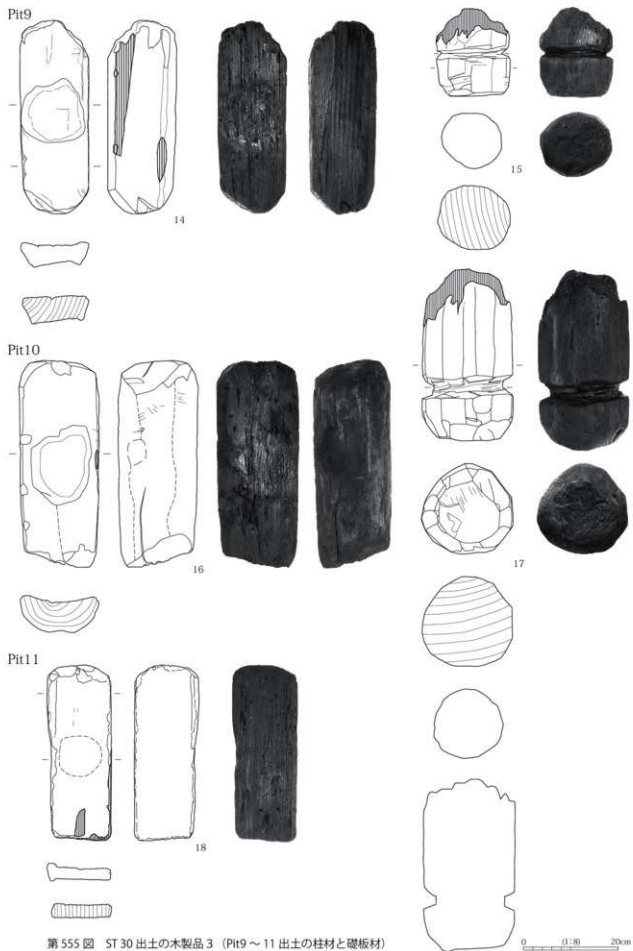


ST 30 出土の柱材と礎板材



第 553 図 ST 30 出土の木製品 1 (Pit1・Pit3・Pit4 出土の柱材と礎板材)





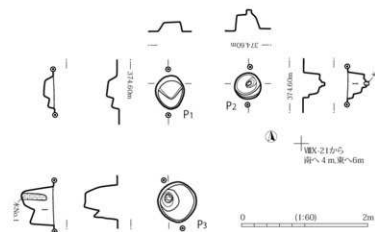
第 555 図 ST 30 出土の木製品 3 (Pit9 ~ 11 出土の柱材と礎板材)

3 1号掘立柱建物跡 (第556図・第557図)

- 時 期： 8世紀末～9世紀前半 (古代5期ないし6期か?)
- 位 置： VII X-21 (②区)
- 重 複： SD 53 と重複関係にあるが、切り合い関係は不明。
- 規 模： 検出できた土坑のみで判断すると、平面形は1間×1間の側柱式の南北棟建物であるが、状況から、ST 27 と同様な2間×1間の側柱式東西棟建物の可能性が高い。現存部分での桁行は180cm、梁行は125cmである。床面積は22.5㎡。主軸はN-0.5°-E。
- 検出状況： 黄褐色砂質土上面にて、N5/0 または 10YR2/2 の黒褐色の落ち込みを確認した。円形の落ち込みであり、その配列から ST 27 と同様な掘立柱建物跡と想定し調査に入った。すでに SD 53 を調査しており、東側に想定できる柱穴は検出できなかった。
- 柱 穴： 平面形は円形で、断面は底部に段を有する形態である。長径42cm～63cm。深さ17cm～50cm。埋土は単層でN5/0の黒色粘質土。柱材は2基から出土。
- 出土遺物： 土器は Pit2 より土師器裏形土器の破片2片と木片1点が出土。Pit3からは土師器杯Aの破片1片と柱材が1点出土。1は芯持ち材で樹種はカツラ。39cm×37.8cm×直径12.5cm。柱材分類A aで柱穴底部隅に据えられていた。表面に刃痕が僅かにある。礎板がないことや、柱材の規模から考えても比較的簡易な建物だった可能性がある。炭素年代測定の結果、794±40年AD (8世紀末から9世紀前半)を得た。

Pit番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色標記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	円	A	52	45	17	a	N5/0	-	なし		なし
2	円	B	42	40	34	f	10YR2/2	-	土師器裏 柱材 (取り上げ遺物なし)		なし
3	円	G	63	60	50	f-2	N5/0	-	土師器杯 A 柱材		なし

第159表 ST31柱穴属性



第556図 ST31完掘の状態

Pit3



第557図 ST31Pit3出土の柱材

3 2号掘立柱建物跡

- 時 期： 不明
- 位 置： IX D-4 (②区)
- 重 複： なし。ただし、個別のSK 287、SK 286、SK 282とは重複関係がある。
- 検出経過： 単独の土坑跡として調査した。SK 260 と SK 281 と SK 285 を、平面的な配置に基づき建物跡として想定したが、掘立柱建物跡を認定する根拠は乏しい。重複するSK 282からは柱材が出土、SK 286及びSK 287等、建て替え等の要素を含め、再考の余地がある。SK 281に

については、170ページに単独土坑として掲載した。

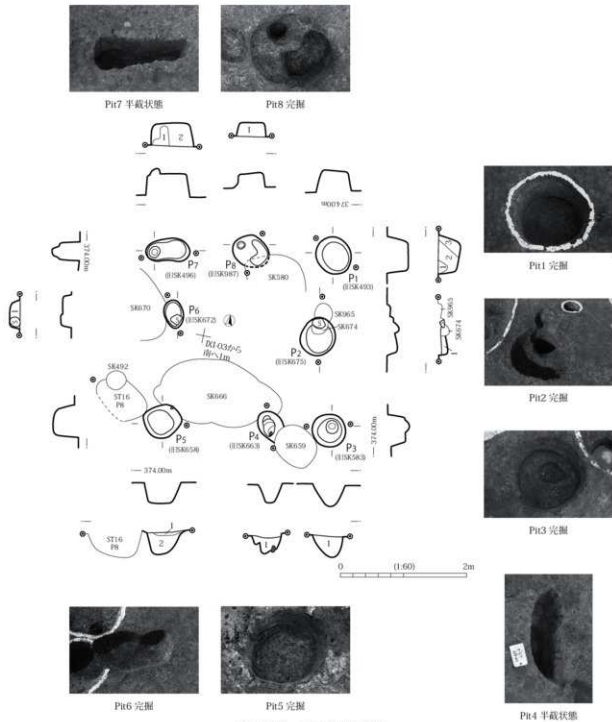
- 規 模： 1間×1間の南北棟建物。桁行(264cm)×梁行(230cm)。床面積 6.1 m²、主軸 N-3°-W。
 柱 穴： 平面形は円形。長径 68cm～98cm、深さ 10cm～31cm。埋土は単層で N5/0 の黒色粘質土。
 柱材は 2 基から出土。
 出土遺物： SK 281 と SK 282 は同時に調査し、切り合い関係関係は判然としなない。埋土中から、土師器裏類と須恵器杯 A 類、黒色土器 A の杯 A 類破片が出土した。SK 285 と SK 286 及び SK 287 も同時に調査しており、厳密には切り合い関係関係がつかめていない。埋土中から、須恵器杯 A と杯 B 類、黒色土器 A 杯 A 類の破片が出土している。

3 3号掘立柱建物跡 (第 558 図・第 559 図)

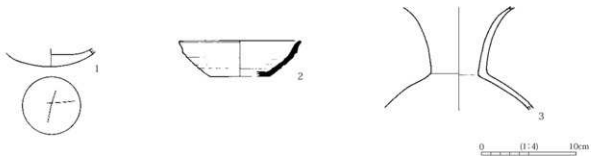
- 時 期： 8 世紀前半? (古代 2 期・3 期比定?)
 位 置： IX D-22, 23, 1-2, 3 (③区)
 重 複： SD 50, SK 674, SK 659 に破壊され、SD 49, SK 670, SK 965, SK 666 を壊す。SK 1197 との新旧関係は不明。
 検出経過： 黄褐色砂層上面にて黒色粘質土の落ち込みを確認した。検出時、土坑として番号を付し調査したが、その後の整理段階にて掘立柱建物跡を想定した。
 規 模： 平面形は、2間×2間の側柱式南北棟建物。桁行 (275cm)、梁行 (255cm)。床面積 7.0 m²。主軸は N-11°-W を指す。
 柱 穴： 柱筋の通りは余りよくはない。平面形は円形もしくは楕円形を基本とし、断面は Pit4・Pit7 が底面に段を有する形態。規模は長軸が 43cm～38cm、深さ 14cm～38cm を測る。埋土は、単層 (10YR3/2 黒褐色) を基調とし 2 層に分層できた。Pit2 の土層は、粘性が強く、炭化物や焼土が混じる 10YR1.7/1 で、黒色粘土の柱痕部を持ち、その周囲には締まりが非常に強い 10YR3/4 の暗褐色土が堆積。
 柱間寸法： 平均柱間寸法、桁行 136cm (99～172cm)、梁行 137cm (100cm～166cm)。
 出土遺物： Pit2・Pit6・Pit7 から土師器の小破片が出土し、Pit4 では土師器裏類と盤 A、須恵器杯 A 類、灰釉陶器の壺類、黒色土器 A 杯 A の破片が出土した。Pit5 では、土師器裏類、須恵器杯 A 類、非ロクロ土師器杯類の破片の出土があった。1 は非ロクロ土師器杯の底部破片でヘラ記号「×」がある。2 はロクロ成形痕を明瞭に留める須恵器杯 A 類。3 は灰釉陶器の壺頸部破片。いずれも Pit5 出土。

Pit 番号	旧 Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色幅記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK493	円	A	62	54	34	b	1層 10YR3/1, 2層 10YR3/2, 3層 2.5Y4/8	-	なし	なし	
2	SK675	円	A	58	52	14	d3	10YR3/4	-	土師器破片	SK674 に切られる SK965 を切る	
3	SK583	円	D	50	52	34	a	10YR3/2	-	なし	SK1197 を切る	
4	SK663	楕円	B	43	38	24	a	10YR3/2	-	土師器裏、盤 A 須恵器杯 A、黄灰釉陶器壺、黒色土器 A 杯 A	SK659 に切られる SK666 を切る	
5	SK658	円	A	56	54	38	b	1層 10YR3/1, 2層 10YR3/2	-	土師器裏、須恵器杯 A 非ロクロ土師器杯 C	SD49 の下面	
6	SK672	楕円	A	44	30	19	a	10YR2/2	-	土師器破片	SK670 を切る	
7	SK496	楕円	B	68	36	37	d2	1層 10YR3/1, 2層 10YR3/2	-	土師器裏	なし	
8	SK987	楕円	A	60	47	23	a	10YR3/3	-	なし	SK580 と切り合い不明	

第 160 表 ST 33 柱穴属性



第 558 図 ST 33 完掘の状態



第 559 図 ST 33 出土の土器

34号掘立柱建物跡(第560図)

時期：不明

位置：ⅧX-7, 8, 13(②区)

重複：SB 05を破壊する。ST 17及びST 24との新旧関係は不明である。

検出経過：黄褐色砂層にて、黒褐色土の落ち込みを確認した。各柱穴は、検出時、土坑として調査し、その後整理段階に、掘立柱建物跡とした。

規模：平面形は、2間×2間の側柱式の東西棟建物か。北桁Pit6に対応する南桁Pitは確認できないが、桁行2間(602cm)、梁行(517cm)、床面積3.1㎡と推定する。主軸はE-4°-N。

柱穴：検出時の平面形は、隅丸方形、楕円形、不整形と一定していない。断面は底部が平坦なバケツ形を基本とする。規模は長径49cm～72cm、深さ19cm～38cmを測る。埋土は、黒褐色土を基調とし、単層から4層に分層できた。柱痕が明確に残るのはPit4である。柱痕部分は、炭化物・白色粘土を僅かに含む10YR4/3のにぶい黄褐色土。掘り方の埋土は、下層は柱痕跡とほぼ同色であるが、白色粘土ブロックを多く含む。上層は10YR3/2の黒褐色土が堆積。版築状か。

柱間寸法：平均柱間寸法は、桁行285cm(260～324cm)、梁行236cm(203～254cm)である。

出土遺物：Pit1より土師器裏破片1片(3.5g)が出土。Pit4より須恵器裏A類の破片1片(89.6g)が出土。またPit7の坑底面より樹皮状の木片が1点出土している。残存している樹皮(22.1cm×8.6cm×1.3cm)は、比較的堅く、しっかり残る。樹種は不明。柱材、礎板などの基礎材の一部か。

Pit 番号	旧 Pit 番号	平面形	断面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	埋土の 分層	土色補記号	柱材の有 無	出土遺物	切り合い	備 考
1	SK348	隅丸 方形	A	72	64	19	b	1層 10YR3/3, 2層 10YR4/4	—	土師器裏 SK347を切る	なし	
2		不整形	B	50	42	31	d	3層 10YR3/1, 4層 10YR3/1	—	なし	なし	
3	SK305	楕円	A	71	51	22	a	10YR3/3	—	なし	なし	
4	SK310	楕円	A	50	42	35	d	1層 10YR4/3, 2層 10YR5/4, 3層 10YR3/2	—	須恵器裏A	なし	
5	SK527	方形	A	49	45	30	a	10YR3/1	—	なし	SD 46を切る	
6	SK525	不整形	A	55	44	22	b	1層 10YR3/1, 2層 10YR3/1	—	なし	なし	
7	SK340	楕円	A	62	42	38	a	10YR3/3	—	樹皮	なし	

第161表 ST 34柱穴属性

35号掘立柱建物跡(第561図)

時期：8世紀中頃～後半?(古代3期・4期?)

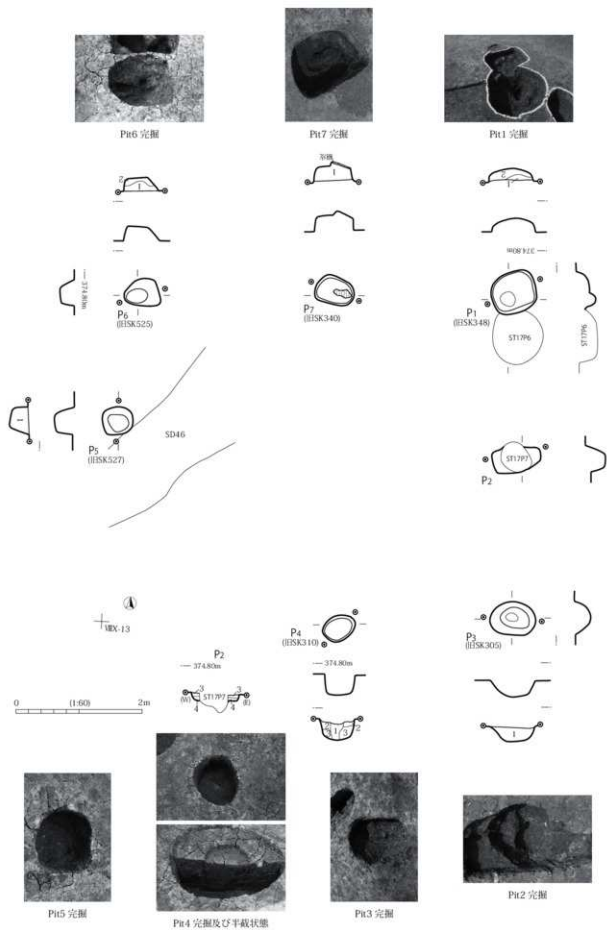
位置：ⅧX-7(②区)

重複：SB 08を破壊し、ST 37との新旧関係は不明。

検出経過：黄褐色砂層に黒褐色の落ち込みを平面で確認した。検出時は、単独の土坑として調査したがSB 08の調査時に、SB内で検出したSK 518、SK 515とともに掘立柱建物跡を想定した。本跡Pit3(旧SK 515)がSB 08Pit2を破壊していた。

規模：平面形、1間×2間の南北棟建物。桁行1間(268cm)、梁行2間(260cm)、床面積6.9㎡。主軸は、ほぼ南北を指す。

柱穴：平面形は円形を基本とする。断面は底部が平坦な形状で浅いタライ状。規模は長径48～69cm、深さ12～20cmを測る。埋土は、10YR3/2の黒褐色土を基調とし、単層から4層に分層できた。比較的柱痕跡がはっきりしているのはPit3である。柱痕部は10YR7/2のブ



第 560 図 ST 34 発掘の状態

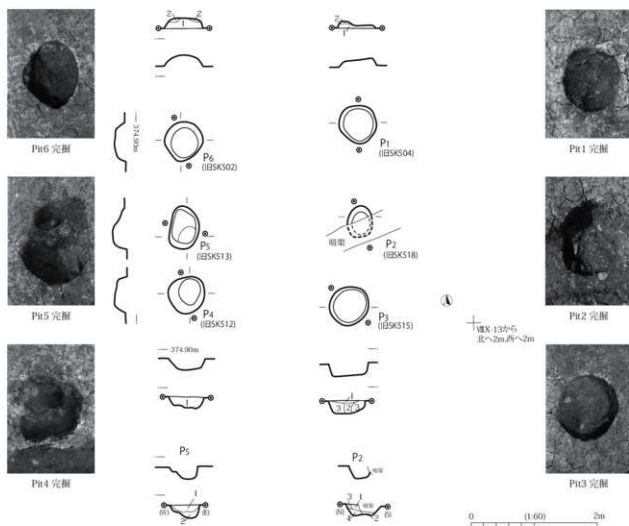
ロックを含む黒褐色土。掘り方も黒褐色土だが、10YR7/2のブロック混入が少ない。

柱間寸法： 推定平均柱間寸法は、桁行 268cm (268cm)、梁行 130cm (112cm ~ 152cm) を測る。

出土遺物： ない。

Pit 番号	旧 Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色標記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK504	円	B-2	61	58	12	b	1層・2層 10YR3/2	—	なし	なし	
2	SK518	楕円	A	48	38	16	-	1層 暗渠の残り 2層~4層 10YR3/2	—	なし	SB08を切る 暗渠に切られる	
3	SK515	円	A	64	58	20	e	1~3層 10YR3/2	—	なし	SB08Pit2を切る	
4	SK512	楕円	A	62	59	18	a	10YR3/2	—	なし	なし	
5	SK513	楕円	D	69	46	21	b	1層 10YR3/2、2層 10YR4/1	—	なし	SB08を切る	
6	SK502	楕円	D	64	58	18	d	1層 10YR3/2、2層 10YR4/1	—	なし	なし	

第 162 表 ST 35 柱穴属性



第 561 図 ST 35 完掘の状態

36号掘立柱建物跡(第562図・第563図)

時期：8世紀後半～9世紀初頭(古代4期ないしは5期比定)

位置：XI-2, 3, 7(③区)

重複：SK 644を破壊し、SD 40に壊される。ST 11、ST 12、SD 43との新旧関係は不明。

検出経過：黄褐色砂層面の遺構検出面の再検出時に確認した結果、多くの遺構との切り合い関係は把握できなかった。黒褐色土(10YR3/2)の落ち込みで、形状から土坑として想定し調査した。整理作業段階で、各土坑の柱筋がほぼ通ることから、掘立柱建物跡と判断した。

規模：平面形が3間×2間の側柱式東西棟建物。桁行(480cm)、梁行(400cm)、床面積19.2㎡。主軸はN-84°-Eを指す。

柱穴：平面形は円形及び楕円形を呈し、断面は砲弾状の形態を基本とする。規模は比較的小さく、長軸が35cm～64cm、深さが21cm～46cmを測る。埋土は10YR3/2の黒褐色を基調とした単純堆積。砲弾状柱痕部の径は20cmから30cmである。

柱間寸法：平均柱間寸法は、桁行167cm(154～180cm)、梁行205cm(190～220cm)。

出土遺物：Pit1より黒色土器杯A、須恵器杯A、土師器甕類の破片が、Pit2からは黒色土器の破片、Pit3より土師器甕類、Pit4より土師器小甕及び黒色土器A杯A類の破片が出土。Pit5とPit6では土師器の小破片、Pit7より須恵器甕類の破片が、Pit8より1の須恵器杯A類ほぼ完形個体が出土した。口径14.0cm、底部内径7.5cmを測り、底部は磨耗激しく観察不能だが、糸切り離し調整であろう。Pit9では黒色土器杯Aに須恵器杯A、Pit10より土師器甕類破片が出土した。

Pit 番号	旧Fe 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の 分類	土色補記号	柱材の 有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK388	円	G	42	30	37	a	10YR3/2	—	黒色土器杯A 須恵器杯A 土師器甕	SK644を切る	
2	SK390	円	G	36	34	40	a	10YR3/2	—	黒色土器破片	なし	
3	SK417	楕円	G	35	29	22	a	2層 10YR3/1	—	土師器甕	なし	
4	SK359	楕円	B-2	63	42	46	d	1層 10YR3/2, 2層 10YR3/1	—	土師器小甕類 黒色土器A杯A	なし	
5	SK364	楕円	A	52	33	38	a	2層 10YR3/2	—	土師器破片 須恵器甕	なし	
6	SK1146	円	A	40	35	31	?	?	—	土師器破片	なし	
7	SK763	楕円	D	(42)	(32)	28	?	?	—	土師器甕	SD43,ST12Pit1,SK063に切られるか?	
8	SK066	円	A	(34)	(34)	21	?	?	—	須恵器杯A	SK597に切られるか?	
9	SK384	楕円	G	54	30	51	d3	1層 10YR3/2, 2層 10YR3/3	—	黒色土器杯A 土師器甕 須恵器杯A	なし	
10	SK387	不整形	B-2	64	32	43	a	10YR3/2	—	土師器甕	なし	

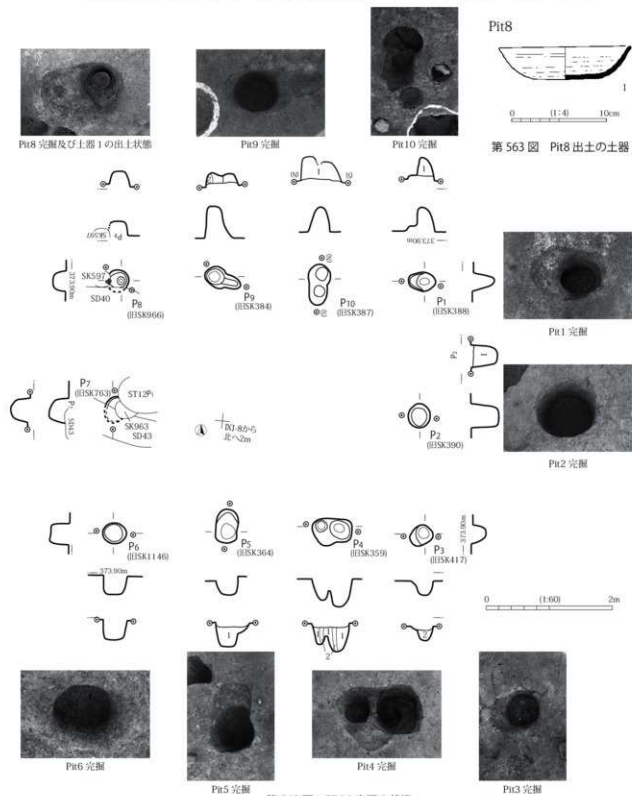
第163表 ST36柱穴属性

遺構名 ST36	土師器								黒色土器A		須恵器					数/総重量 (破片/g)	
	杯A	甕	甕A	甕B	甕E	小型甕D	小型甕	不明	杯A	杯B	杯B	甕	甕B	甕A	甕C		甕E
Pit1	1								1		1						3/20.4
Pit2		1									1						3/16.5
Pit3			1					1									2/15.7
Pit4	2	1			3	1	4		1								13/48.7
Pit5			1	4					3					1	1		10/203.4
Pit6	2																2/12.6
Pit7									2				1	2	2		7/192.8
Pit8	2		1	1				1	1	1							8/192.3
Pit9	7		1	1				1	3				1				14/71
Pit10	2			1													3/13.6

第164表 ST36出土土器組成

所見：本跡の柱穴は砲弾状の形態が多く、規模が小さい。礎板を持たず、柱径からみて十分な掘り方を伴わない柱穴と考えられる。礎板を据える必要のない上屋とすれば簡易な小屋を想定できるか。切り合い関係があるが、状況から判断して時期が下る可能性もある。

Pit8 (旧SK 966) 出土の須恵器杯Aから、古代4期～5期相当と判断できる。したがって、ST 11 及びST 12 よりは新しいと考えられるか。また各柱穴から多くの土器が出土している点、煮炊き具や食器が多い点は、建物機能を考えていく上に留意すべき点であろう。



37号掘立柱建物跡(第564図)

時期：8世紀～(古代2期・3期～?)

位置：ⅧX-7(②区)

重複：SB 08を破壊。ST 35との新旧関係は不明。

検出経過：黄褐色砂層面にて、柱状の落ち込みを確認した。検出時、単独に土坑(SK 501、SK 503、SK 511)として調査したが、SB 08の調査途中で、柱状の落ち込み1基がSB床面にて確認されたことから、1間×1間の建物跡を想定した。判断に至る経過はST 35と同様である。

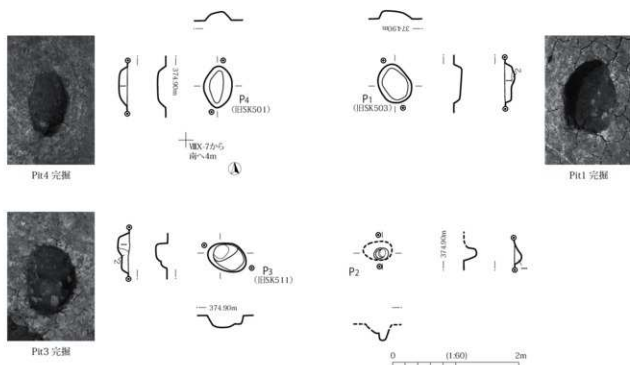
規模：平面形が1間×1間の南北棟建物。桁行(265cm)、梁行(260cm)。

床面積6.9㎡。主軸は真北を指す。

柱穴：平面形は円形及び楕円形を呈する。断面形状は浅いタライ状。長軸が44cm～48cm、深さが12cm～19cmを測る。埋土はPit1以外、10YR3/2の黒褐色を基調とした単純堆積。

柱間寸法：平均柱間寸法は、桁行265cm(260～265cm)、梁行260cm(255～280cm)。

出土遺物：Pit3から、須恵器杯A及び杯B類の破片が出土し、Pit4から黒色土器杯A類の破片3片(18.7g)が出土している。



第564図 ST 37 完掘の状態

Pit番号	旧Pit番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の 分類	土色権記号	柱材の 有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK503	楕円	B-2	62	48	16	b	1層 10YR3/2, 2層 10YR4/1	—	なし	なし	
2		円	B-2	23	20	14	a	1層 10YR2/3	—	なし	なし	
3	SK511	楕円	B-2	66	44	19	b2	1層・2層 10YR3/2	—	須恵器杯B	なし	
4	SK501	楕円	D	64	44	12	a	10YR3/2	—	黒色土器杯A	なし	

第165表 ST 37 柱穴属性

38号掘立柱建物跡(第565図)

時期：不明

位置：ⅧX-11, 12 (②区)

重複：SD 46を破壊し、ST 19との新旧関係は不明。

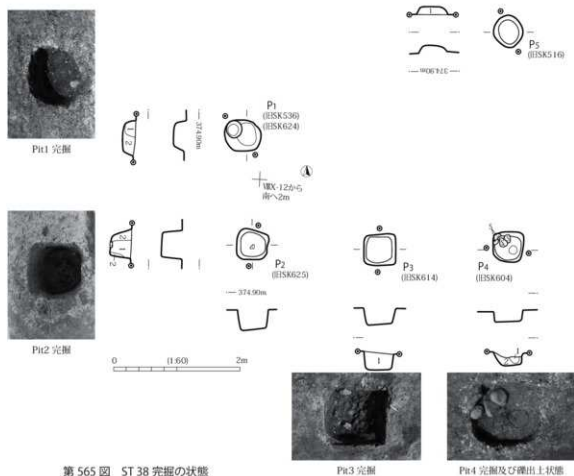
検出経過：黄褐色砂層上面にて黒褐色土の落ち込みを確認した。半載した結果、柱痕と思われる埋土も確認できたが、配列する土坑が少なく、掘立柱建物跡として積極的に認定できなかった。整理作業時に、4基の土坑の配列が規則的であり、SB 08と切り合い関係にあるSK 516を北側の柱穴として加えることで、それらを掘立柱建物跡と考えた。

規模：平面形は2間×2間と考えられる。南列の柱穴に対応するPit2基が確認できないが、床面積は8.9㎡以上と推定できる。

柱穴：Pit1は調査時にSK 624として検出したが、その後の再検出でSK 536を確認し符号した。調査後の所見で、2基の土坑は同一である可能性が示唆された。柱筋はPit1のみやや外れるが、他のPitは柱筋が通る。平面形は隅丸方形が基本。断面は、底部が平坦なバケツ形である。規模は、長軸で56cm～64cm、深さ20cm～34cmを測る。比較的柱穴の大きさは揃っている。特に南側の柱列は、ほぼ同規模の隅丸方形の土坑が並ぶ。埋土は、単層または2層程度の堆積である。Pit4は締まりがあるが粘性が弱い10YR2/3の黒褐色土の柱痕を持つ。掘り方の埋土は、柱痕層に比べ10YR7/2のブロックが混じる。

柱間寸法：平均柱間寸法は、桁行164cm(160cm～168cm)、梁間143cmか。

出土遺物：Pit2から柱材が出土。分割材であるが、腐食著しく、2.2cm×3.5cm×1.6cm程度しか残存していない。Pit4では15cm前後の礫が集中して出土した。柱材の裏込め石であろうか。



第565図 ST 38 完掘の状態

Pit 番号	旧 Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の種類	土色補記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK624 と SK536	楕円	A	56	50	21	d3	1層 10YR4/1, 2層 10YR2/3	—	なし	なし	
2	SK625	隅丸方形	A	56	56	34	d	1層・2層 10YR2/3	○	柱材の一部	なし	
3	SK614	隅丸方形	A	64	62	28	a	10YR2/3	—	なし	SK46を切る	
4	SK604	隅丸方形	A	56	55	20	d2	1層・2層 10YR2/3	—	なし	なし	
5	SK516	楕円	A	50	46	12	a	10YR4/1	—	なし	S88を切る	

第 166 表 ST 38 柱穴属性

39号掘立柱建物跡(第566図)

時期：8世紀中頃～後半？(古代3期・4期?)

位置：ⅧX-10, 15(②区)

重複：SK 222 を破壊し、SK 707 との新旧関係は不明。

検出経過：黄褐色砂礫層面に黒褐色土の落ち込みを確認した。検出時より南北一列に並ぶ建物跡を想定したが、西側に柱穴は確認できず、東側は調査区外であったことから、3基の土坑(SK 430, SK 223, SK 225)として調査した。整理作業時、それらの配列、規模及び形状を重視し、掘立柱建物跡と判断した。

規模：南北方向に柱穴列3基のみ。N-9°-Wを指す。東側が調査区外になるため、規模は不明である。

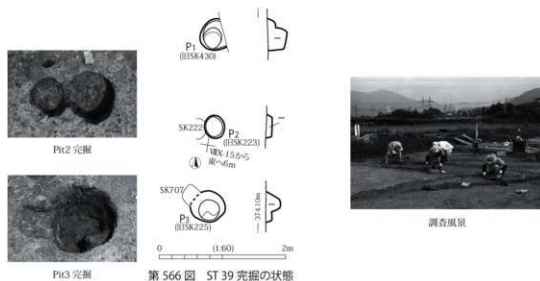
柱穴：平面形は円形。断面形は、Pit1及びPit3は壁面に段を有する形態。埋土はすべて単層。Pit1は暗褐色土、Pit2は黒褐色土、Pit3はPit2と同色であるが粘性が非常に強い。

柱間寸法：平均柱間寸法は135cm(130・140cm)を測る。

出土遺物：出土遺物はない。

Pit 番号	旧 Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の種類	土色補記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK430	不明	B-2	(44)	(40)	28	a	10YR3/3	—	なし	なし	
2	SK223	円	A	34	32	11	a	10YR3/1	—	なし	SK222を切る	
3	SK225	楕円	B	54	48	22	a	N4/0	—	なし	SK707を切る	

第 167 表 ST 39 柱穴属性



40号掘立柱建物跡 (第567図)

時期： 9世紀前半? (古代5期~7期?)

位置： VII-X-14, 15 (②区)

重複： SK 262 に本跡 Pit6 は破壊される。

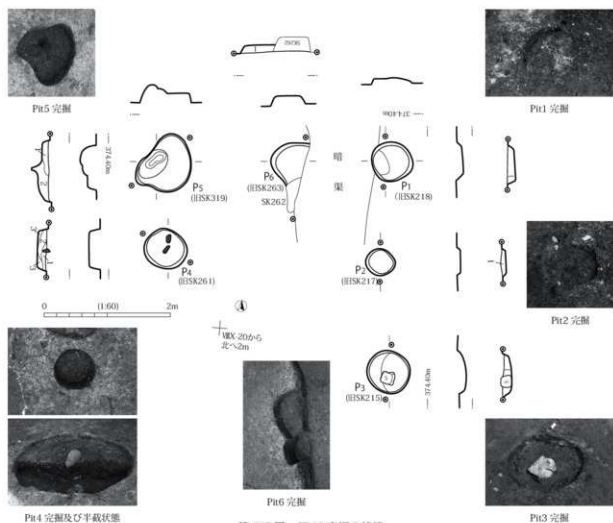
検出経過： 黄褐色砂層面にて、円形状の黒褐色土の落ち込みを確認した。土坑を推定し調査したが、それらの規模、配列から掘立柱建物跡と判断できる。

規模： 平面形は2間×2間の側柱式東西棟建物であるが、2間×3間の可能性もあるか。北桁に対応する柱穴2基は確認できなかった。桁行 (342cm)、梁行 (360cm)、床面積 12.3 m²と想定できる。主軸は N-5°-W である。

柱穴： 平面形は円形を呈し、断面形は、底部が平坦なタライ状。Pit5及びPit6の平面形は不整形で底部に段を有する。規模は、長軸が43cm~98cm、深さは8cm~26cmを測る。埋土は東梁の柱穴はN3/0の黒色土。他のPitは暗褐色土からにぶい黄褐色土を基本とする。Pit5は、下層面に黒色砂質土ブロック混じりの10YR2/3黒褐色土が堆積。上面には炭化物が僅かに混じる10YR3/3暗褐色土が堆積していた。

柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行180cm (150~21cm)、梁行161cm (140cm~180cm)を測る。

出土遺物： 出土遺物は、Pit3よりやや扁平な角礫1点が出土。Pit4より土師器甕破片13片、須恵器杯A類2片が出土した。



第567図 ST40 発掘の状態

Pit 番号	目 Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色補記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK218	円	A	64	62	12	a	N3/0	—	なし	なし	
2	SK217	円	A	43	47	8	a	N3/0	—	なし	なし	
3	SK215	円	A	67	67	14	algf	N3/0	—	磁石か?	なし	
4	SK261	円	A	66	60	17	b	1層 10YR3/3、2層 10YR2/2、 3層 10YR4/4	—	土師製埴 須恵器FF A	なし	
5	SK319	不整形	B-2	98	94	26	e	1層 10YR3/3、2層 10YR2/3	—	なし	なし	
6	SK263	不明	A	(76)	(52)	16	a	10YR3/4	—	なし	SK262に切られる	

第 168 表 ST 40 柱穴属性

4 1号掘立柱建物跡 (第 568 図・第 569 図)

時 期： 9世紀前半? (古代5期~7期?)

位 置： VIII-X-9, 10, 14 (②区)

重 複： SB 04 と重複関係にあるが、新旧は不明。本跡が新しいか。

検出経過： 黄褐色土砂層上面に暗褐色土の落ち込みを確認、検出時は土坑として調査した。SK 429、SK 442、SK 219 である。柱穴の底面からは、いずれも礎板材が出土し、掘立柱建物跡と考えることができる。配置から SK 318 も本跡に含めて考える必要があるか。

規 模： 明確な柱列は L 字形にしか残存、確認できなかった。確認できた柱穴から 1間×1間以上の側柱式東西棟建物と想定できる。桁行 (268cm)、梁行 (290cm)、床面積 (8.4) m² と推定。主軸は N-80°-W を指す。

柱 穴： 平面形は、礎板材の形状にあわせて隅丸長方形または方形に掘り込まれる。断面形は、底部が平坦なタライ状。長軸は 77~85cm、深さは 14~29cm を測る。Pit 1 及び 2 の埋土は礎板上に柱痕部が残る。土質は、白色粘土ブロックが混じる 10YR3/3 の暗褐色土。周囲の掘り方は 10YR2/3 の黒褐色土。

柱間寸法： 平均柱間寸法、桁 268cm、梁 290cm。

出土遺物： Pit 1 より礎板 1 が出土。分割材で、樹種はカツラ材。分類 Aa。木裏を表として使用。両面は平滑。転用か否かは不明。Pit 2 からも礎板 2 が出土。厚い板状に加工されている。両端は垂直に切断され、転用の可能性が高い。樹種はカツラ材。Pit 3 出土の礎板は、板状の Aa 類。樹種はケンボナシ属。また Pit 3 からは須恵器甕 A 類体部破片 1 片 (31.6g) が出土している。

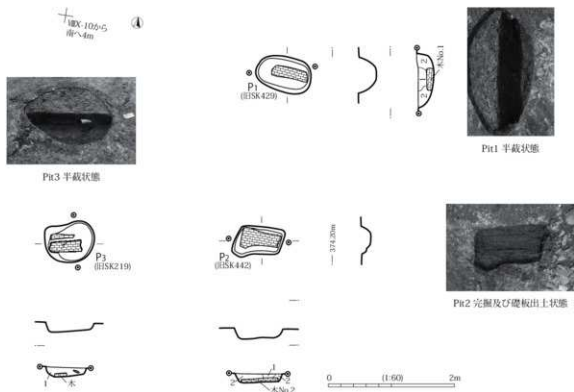
Pit 番号	目 Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色補記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK429	隅丸長	A	85	55	29	dkf	1層 10YR3/3、2層 10YR2/3	○	礎板	なし	
2	SK442	隅丸長方形	A	71	43	14	dkf	1層 10YR3/3、2層 10YR3/4	○	礎板	組築を切る	
3	SK219	方形円	A	77	61	17	dkf	N3/0	○	須恵器甕 礎板	なし	

第 169 表 ST 41 柱穴属性

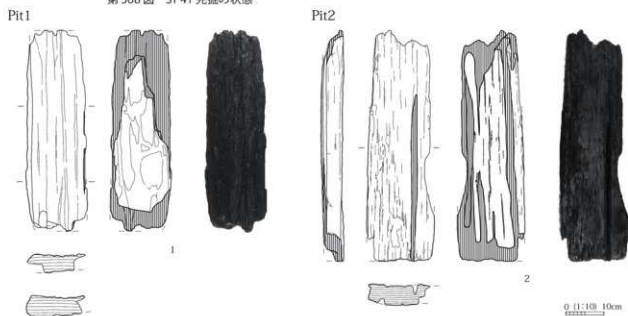
検出番号	Pit 番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴
第 569 図 1	1	底面	礎板	分割材	カツラ	53.5	16	5.9	礎板分類 Aa
第 569 図 2	2	底面	礎板	柱目	カツラ	61	18	5.4	形状から礎板とした
	3	底面	礎板	不明	ケンボナシ属	28.2	10.6	5.2	礎板分類 Aa

第 170 表 ST 41 出土木製品属性

第3章 発掘調査の概要



第568図 ST 41 発掘の状態



第569図 ST 41 出土の木製品 (Pit1・Pit2 出土の礎板材)

4 2号掘立柱建物跡 (第570図)

時期： 8世紀後半～(古代4期以降～?)

位置： VIII X-7, 12 (②区)

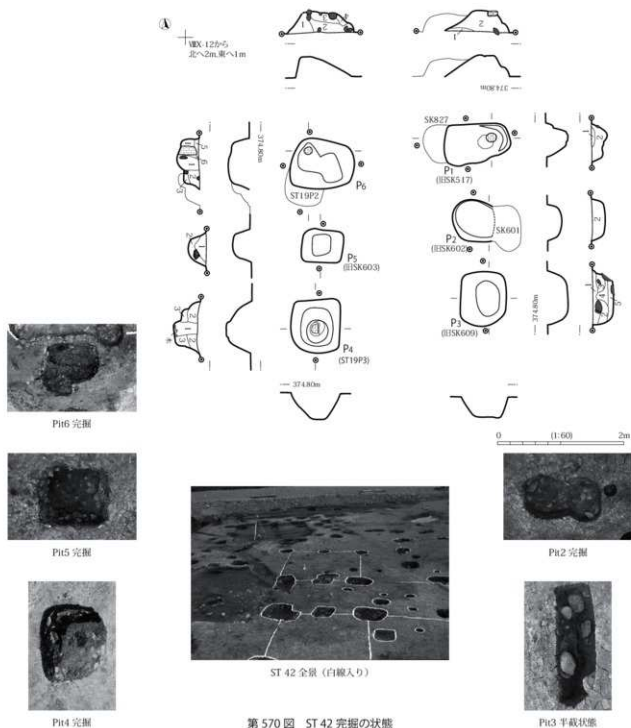
重複： ST 19を破壊する。

検出経過： 黄褐色砂層面に黒褐色土(10YR3/2)の落ち込みを確認、土坑として個別に調査したが、調査中、柱穴の規模及び形状から掘立柱建物跡を想定していた。

規模： 平面形は、2間×1間の側柱式南北棟建物。桁行2間(284cm)、梁行1間(280cm)、床面積8㎡を測る。主軸は真北を指す。

Pit 番号	旧 Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分層	土色標記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK517	楕円長方形	(D)	103	64	33	b	1層 10YR3/2, 2層 10YR3/2	○	清漆蝋杆 6 柱材?	SK827, SD46 を切る	
2	SK602	楕円	A	66	(63)	25	a	2層 10YR2/3	—	なし	SK601 と切り合い不明	
3	SK609	楕円長方形	A	94	88	32	b	1層 10YR2/3, 2層 10YR2/3, 3層 10YR4/1, 4層 10YR7/2, 5層 10YR2/3	○	柱材	なし	
4		楕円長方形	B	84	77	42	d(f)	1層~3層 10YR2/3, 2層 10YR3/2	○	柱根	SD46 を切る	ST19P13 と共用
5	SK603	楕円長方形	D	72	64	30	b	1層 10YR2/3, 2層 10YR2/3	—	なし	SD46 を切る	
6		楕円長方形	B-2	100	80	36	d(f)	1層~8層 10YR2/3	○	柱材	なし	ST19P12 と共用

第171表 ST42 柱穴属性



第570図 ST42 完掘の状態

- 柱 穴： ST 19Pit3 と本跡 Pit4、ST 19Pit2 と本跡 Pit6 が重複する。平面形は、隅丸長方形で、断面形態は、底部が平坦なバケツ形を基本とする。規模は、長軸 66cm ～ 103cm、深さ 25cm ～ 42cm を測る。西桁 Pit4、Pit6 は比較的柱痕の残りがよい。Pit4 の柱痕部は 10YR8/2 の砂と炭化物が僅かに混じる 10YR2/3 の黒褐色土。掘り方の埋土下層は、同色の黒褐色 (10YR2/3) だが、10YR7/2 の砂を混じる。上層は粘性の弱い黒褐色土 (10YR3/2)。
- 柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行 134cm (120 ～ 150cm)、梁行 277cm (270 × 284cm)。
- 出土遺物： Pit1 より須恵器杯 B の破片と柱材 1 点が出土した。柱材は辺材部分の破片で、大部分は腐蝕してしまっている。樹種は広葉樹か。
- Pit3 より柱材 1 点が出土。残った僅かな材は比較的堅固であるが、木裏部分が弧をつくっていることから、柱内部から腐食が進んだ結果と考えられる。樹種はクリ材。
- Pit4 及び Pit6 より柱材の木片が出土している。

Pit 番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴
1	底面	柱材?	板目?	広葉樹	5.5	6.5	3.0	
3	埋土	柱材?	不明	クリ	5.8	10.0	3.5	
4	底面	柱材	不明		3.6	直径 9.0		柱材木片か
6	埋土	柱材	不明		4.4	直径 11.5		柱材木片か

第 172 表 ST 42 出土木製品属性

[4 3 号掘立柱建物跡]

時 期： 不 明

位 置： IX1-9 (③区)

重 複： SF02 と本跡想定 Pit (SK 970) は重複するが、新旧関係は不明。

検出経過： 黄褐色砂層上面にて黒褐色土の落ち込みを確認し、土坑として調査した。SK 176、SK 181、SK 191、SK 970、SK 167 である。規模と配列から掘立柱建物を想定したいが、柱痕や柱材等の出土もなく、耕作による検出レベルの低下から、認定根拠がなく、単独に土坑として扱った。ここでは、ST を想定した場合の遺構説明を加える。

規 模： 残存する柱穴からは、平面形は 2 間 × 2 間の側柱建物が想定できる。2 間 (365cm) × 2 間 (435cm か)、主軸は N - 7.5° - W。

柱 穴： 平面形は、隅丸方形、隅丸長方形、方形と形が一定ではないが、方形志向か。規模は全体に大きく、長軸 50cm ～ 108cm、深さ 15 ～ 70cm を測る。埋土は黒褐色土を基調とし複層に分層できた。SF02 との切り合い関係は不明。

柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行 180cm、梁行 220cm を測る。

出土遺物： SK 181 からは、須恵器鉢形土器口縁部破片 (P251、第 377 図)、黒色土器 A の杯 A 類が出土。SK 176 では、土師器甕 B 類の破片が、SK 167 では土師器甕 B 類と黒色土器 A 杯 A の破片が出土。

4 4号掘立柱建物跡(第571図・第572図)

時期：9世紀後半か? (古代8期以降か?)

位置：X1-2, 3 (③区)

重複：SD 40 に破壊され、ST 16、ST 33、ST 36 との新旧関係不明。

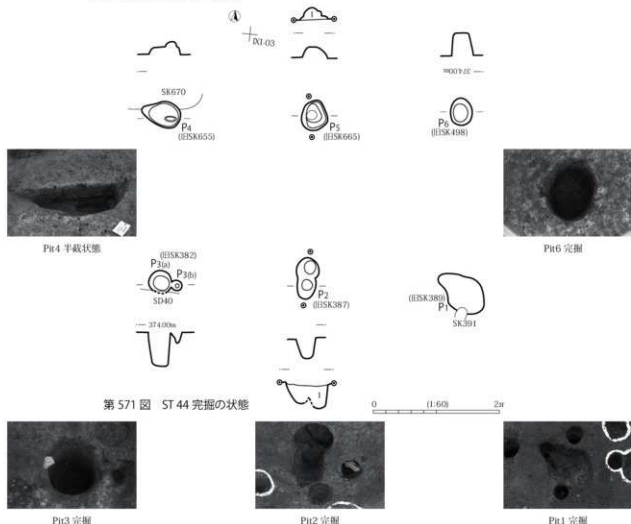
検出経過：黄褐色砂質土面に黒褐色土の落ち込みを確認、土坑として調査した。SK 382、SK 387、SK 389、SK 498、SK 655、SK 665 である。整理時に規模と配列から掘立柱建物跡を想定し、認定した。

規模：平面形は2間×1間の側柱式東西棟建物である。桁行2間(470cm)、梁行1間(264cm)。床面積は12.4㎡、主軸はN-83°-Eを指す。

柱穴：平面形は、楕円形か不整形形を呈する。断面は底部が平坦なバケツ形。長軸は42cm～88cm、深さは20cm～54cmを測る。径の小さな柱穴。埋土は10YR3/2の黒褐色土、単純堆積。Pit2は2基複合しているが、北側はST 36Pit10にあたり、南側のみが本跡Pitと考えられる。ただし、切り合い関係は不明。

柱間寸法：平均柱間寸法は、桁行233.5cm(224～244cm)、梁行273cm(260・286cm)。

出土遺物：Pit1より土師器甕、黒色土器A杯A、須恵杯蓋、灰軸陶器椀が出土している。1が灰軸陶器椀の底部破片で、高台は高く、まっすぐに立つ形態。Pit2より土師器表形土器破片、Pit3より須恵器杯A、甕類の破片が出土。Pit6には土師器杯A類と皿の破片などが出土している。2は土師器皿の1/4個体。



Pit 番号	旧 Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色編記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK389	不整形	D	88	45	24	a	10YR3/2	-	土師器 黒色土器 A 類 A 須恵器杯蓋 灰釉陶器碗	SK391 に切られる	
2	SK387	不整形	A	64	32	43	a	10YR3/2	-	土師器	なし	ST36Pit10 と共用
3	SK382	不整形	G	54	(32)	54	a	10YR3/2	-	須恵器杯 A 類	SD40 に切られる	
4	SK655	楕円	B	62	40	29	a	10YR3/2	-	なし	SK670 を切る	
5	SK665	楕円	B	49	40	20	a	10YR3/2	-	なし	なし	
6	SK498	楕円	A(G)	42	34	36	a	10YR3/1	-	土師器杯 A 類	なし	

第 173 表 ST 44 柱穴属性

遺構名	土師器					黒色土器 A 類		須恵器					灰釉陶器	数 / 総重量 (破片 / g)		
	杯 A	皿	甕	甕 B	甕 E	杯 A	杯 A	蓋 B	盤	甕	甕 A	甕 C			甕 D	短頸壺
Pit1						4		1			1		1		1	9/164
Pit2			2		1											3/13.6
Pit3			3	1		1		5	1	1		1				13/107.5
Pit6	1	1	1							1				1		5/34.9

第 174 表 ST 44 出土土器組成



第 572 図 ST 44 出土の土器

4 5号掘立柱建物跡 (第 573 図・第 574 図)

時期： 8世紀中頃～後半？ (古代3期ないしは4期か?)

位置： XD-17, 18, 22, 23 (③区)

重複： SD 58, SK 557, SK 843, SK 598, SK 577 に破壊され、SD 61, SD 77, SD 78 を壊す。SD 75 との新旧関係は不明だが、それを破壊していた可能性が高い。

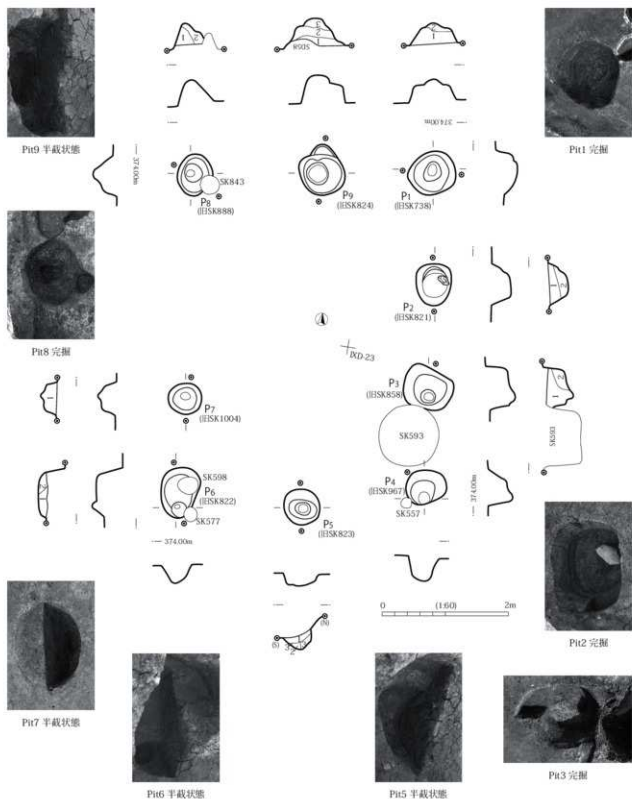
検出経過： 黄褐色砂層面にて暗褐色土の落ち込みを確認。検出時に土坑として調査した。完掘後の確認で、形状・配列等から掘立柱建物跡を認定した。すなわち SK 738 を Pit1、SK 821 を Pit2、SK 858 を Pit3、SK 967 を Pit4、SK 823 を Pit5、SK 822 を Pit6、SK 1004 を Pit7、SK 888 を Pit8、SK 824 を Pit9 とする。

規模： 平面形は、3間×2間の側柱式南北棟建物である。桁行3間 (520cm)、梁行2間 (380cm)、床面積は 19.7 m² である。なお、東桁 Pit2 に対応する西桁の Pit は確認できなかった。主軸は、N-9°-W。

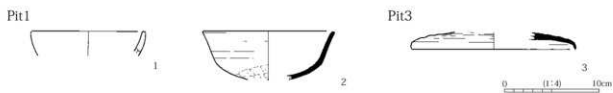
柱穴： 平面形は、円形及び楕円形を呈する。断面形は、底部に段を有する形態を基本とする。規模は、長径 52 ~ 80cm、深さは 27 ~ 50cm を測る。埋土は、暗褐色土 (10YR3/4・10YR3/3) を基調とし、単層から3層に分層できた。Pit5 は3層からなる。柱痕には炭化物が混じる暗褐色土 (10YR3/4) が堆積、その周囲の埋土は、同じ色調だが、白色粘土ブロックを混じる。それら2つの層を切るように、上層に炭化物・礫・白色粘土ブロックの混じる暗褐色土 (10YR3/3) が堆積していた。埋め戻し等の土であろうか。

柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行 175cm (160 ~ 180cm)、梁行 193cm (180 ~ 200cm)。

出土遺物： Pit1 より1の非クロコ土師器の杯口縁部破片、2の須恵器杯 A 類、甕形土器の破片が出土。Pit2 から、土師器杯 A 類と甕の破片、灰釉陶器碗の破片が出土、Pit3 からは須恵器杯 A 類



第 573 図 ST 45 完掘の状態



第 574 図 ST 45 出土の土器

と甕形土器の破片、3の須恵器蓋形土器の体部破片が出土した。Pit9では土師器甕、須恵器の蓋形土器の破片等がある。

遺構名 ST45	非ロウ 杯	土師器					黒色土器A		須恵器					灰釉陶器		数 / 総重量 (破片 / g)	
		杯A	甕	甕A	甕B	甕E	不明	杯A	杯A	杯B	蓋B	甕A	甕C	短頸壺	壺		壺
Pit1	1						1	5	1	2							11 / 207.2
Pit2		6	2			1								1		10 / 43.3	
Pit3			1	1	1	1		5		1	1	2				13 / 145.6	
Pit9			1											1		3 / 27.6	

第175表 ST45出土土器組成

Pit 番号	旧Pit番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の 分類	土色補記号	柱材の 有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK738	円	B	73	70	34	b	1層 10YR3/4, 2層 10YR3/3	—	須恵器杯A, 蓋	SD58に切られる	
2	SK821	楕円	D	66	55	30	b	1層 10YR4/4, 2層 10YR3/3	—	土師器杯A, 甕 灰釉陶器壺	SD75を切る	
3	SK858	楕円	B	80	68	42	d3	1層 10YR3/3, 2層 10YR3/4	—	土師器甕 須恵器杯A, 蓋, 甕	SD77を切り, SK593に切られる SD78切り合い不明	
4	SK967	楕円	B-2	64	53	35	—	注記なし	—	なし	SK557, SD61に切られる	
5	SK823	円	D	60	56	50	e	1層 10YR3/3, 2・3層 10YR3/4	—	なし	SD61に切られる	
6	SK822	楕円	A	80	53	28	c	1層 10YR3/3, 2層 10YR4/4	—	なし	SK577, SK598, SD57, SD61に 切られる	
7	SK1004	円	B	52	50	27	a	10YR3/3	—	なし	SD57に切られる	
8	SK888	楕円	B	66	46	42	c	1層・2層 10YR3/3	—	なし	SK843, SD58に切られる	
9	SK824	円	B-2	80	76	44	b	1層 10YR3/3, 2層 10YR4/4, 3層 10YR2/2	—	土師器甕 須恵器甕	SD58に切られる	

第176表 ST45柱穴属性

46号掘立柱建物跡(第575図)

時期： 8世紀以前か？(古代5期以前～?)

位置： VII X-8, 9, 13, 14 (②区)

重複： ST47と重複関係にある。ST13, SK270に壊される。

検出経過： 黄褐色砂層面にて検出し, SK274, SK292, SK301, SK330, SK424として調査した。その後、整理作業時に柱間隔等を観察する中で掘立柱建物跡を想定した。

規模： 平面形は、2間×1間の側柱式南北棟建物である。桁行2間(460cm)、梁行1間(290cm)。床面積は13.3㎡。主軸は真北を指す。

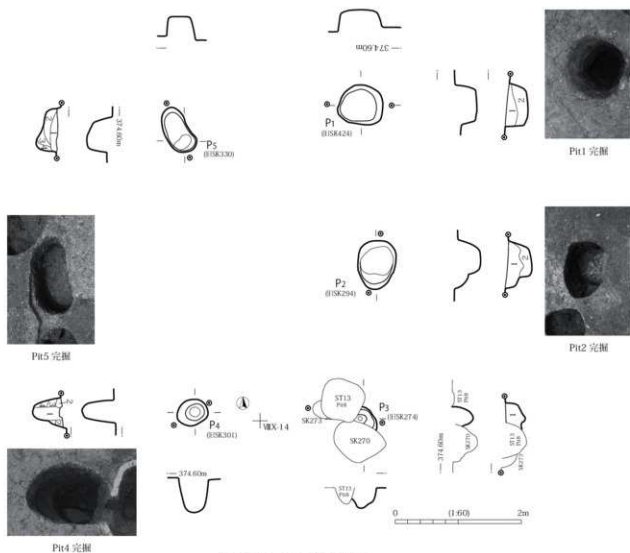
柱穴： 平面形は円形及び楕円形状を呈す。断面形はバケツ形の形態。規模は長軸50cm～75cm、深さ30cm～56cmを測る。埋土は単層から4層に分層できた。Pit2は2層からなり、下層は、白色粘土ブロックを僅かに含むにぶい黄褐色土(10YR4/3)で、上層は白色粘土ブロックが大半を占め、そこに暗褐色土が混在する明黄褐色土(2.5Y7/6)が堆積。柱痕が明確に残るのはPit4で、柱痕部は黒褐色土(10YR2/3)、周囲の埋土は下層に10YR2/3の黒褐色土、中層に10YR4/4の褐色土、上層に10YR3/4の暗褐色土が堆積する。

柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行250cm、梁行280cm(260cm～300cm)。

出土遺物： Pit1より土師器杯Aと小型甕、黒色土器A杯A類の破片が出土した。Pit2より須恵器の小破片が出土している。

Pit 番号	旧 Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の 分類	土色層記号	柱材の 有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK424	円	A	72	62	33	b	1層 10YR3/3, 2層 5Y2/2	-	土師西頸杆 A 小型 黒色土器杆 A	なし	
2	SK294	楕円	B-2	75	58	40	b	1層 2.5Y7/6, 2層 10YR4/3	-	漆器破片	SD26 を切る	
3	SK274	円(1/3)	B	-	-	30	a	10YR3/3	-	なし	SK270, ST13P18 に切られる	
4	SK301	変形円	G	50	40	56	d	1層 10YR2/3, 2層 10YR3/4, 3層 10YR4/4, 4層 10YR2/3	-	なし	なし	
5	SK330	楕円	B-2	75	40	34	b	1層 10YR3/3, 2層 10YR2/2, 3層 10YR3/1, 4層 10YR3/2	-	なし	なし	

第 177 表 ST 46 柱穴属性



第 575 図 ST 46 完掘の状態

4 7 号掘立柱建物跡 (第 576 図)

時期： 8 世紀以前か？ (古代 5 期以前～？)

位置： VIII X - 8, 9 (㊸区)

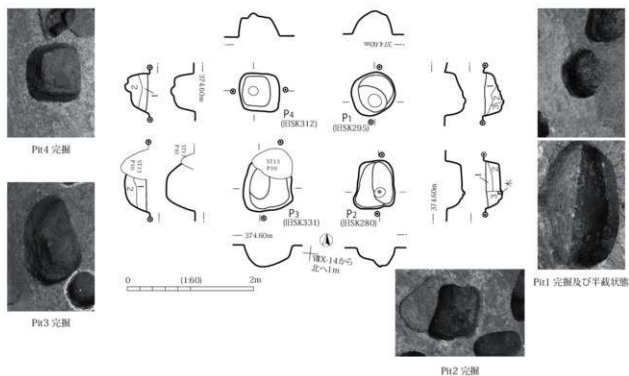
重複： ST 46 と重複関係にある。ST 13 に破壊されるか。

検出経過： 黄褐色砂層面にて、SK 295、SK 280、SK 312、SK 331 として調査した。規模、形状から柱穴と考えられ、整理作業時に掘立柱建物跡を想定した。すなわち SK 295 が Pit1、SK 280 が Pit2、SK 312 が Pit3、SK 331 が Pit4 である。

- 規 模： 平面形は、1間×1間の側柱建物。1間（160cm）×1間（194cm）。床面積は31㎡。
主軸はN-4.5°-Wを指す。
- 柱 穴： 平面形は、隅丸長方形及び隅丸形状を呈する。断面は底面が平坦なタライ状で、Pit3以外は、底面に柱痕部を有する形態。規模は長軸67cm～78cm、深さ55cm～64cmを測る。埋土は2～3層に分層できた。Pit4は下層に白色粘質土が混じる灰黄褐色土（10YR4/2）、上層には下層に比して炭化物をやや多く含む暗褐色土（10YR3/3）が堆積する。
- 柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行150cm、梁行190cm。
- 出土遺物： Pit1からは、須恵器杯A類と杯B類の破片が、Pit2からは柱材の破材が1点出土した。8.0cm×5.4cm×3.5cmを測り、樹種はコナラ属コナラ亜属コナラ節である。Pit4からは、須恵器壺と土師器甕形土器の破片が出土。
- 所 見： 柱穴の形状が隅丸方形であることから、規格的な建物を考えることが可能。他の掘立柱建物跡に比して、柱穴規模が大きいものの、1間×1間と小規模であることから、特殊な建物、例えば、権威を外部に対して表すような荘厳施設、あるいは防御施設としての「門」などを考えてもよいか。

Pit 番号	旧 Pit 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の 分類	土色係記号		柱材の 有無	出土遺物	切り合い	備 考
								1層	2層				
1	SK295	隅丸 方形	B-2	70	64	32	e	1層 10YR3/3、 2層 10YR4/3、 3層 10YR4/3	—	—	須恵器杯 A、 杯 B	SD26 を切る	
2	SK280	隅丸 長方形	B	74	64	26	d3	1層～3層	—	○	柱材	SK279 との切り合い不明	
3	SK331	隅丸 長方形	D	78	(55)	40	b	1層 10YR3/4、 2層 10R3/2	—	—	なし	ST13Pit10 に切られる SB05 を切る	
4	SK312	隅丸 方形	B	67	58	38	b	1層 10YR3/3、 2層 10YR4/2	—	—	須恵器壺 土師器甕	SB05 を切る	

第178表 ST47 柱穴属性



第576図 ST47 発掘の状態

48号掘立柱建物跡(第577図~第579図)

時期：7世紀後半? (古代2期か?)

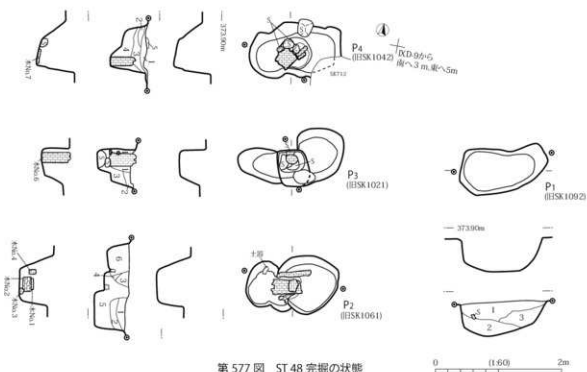
位置：KD-9 (②区)

重複：ST 49と重複関係にある。ST 49Pit3と本跡 Pit4との切り合い関係から、本跡が破壊されると考えられる。

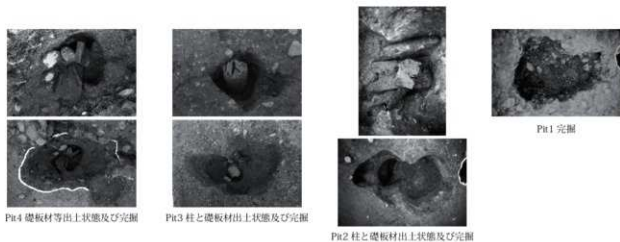
検出経過：黄褐色砂層面にて暗褐色土の落ち込みを確認。落ち込みは不整形形で、複数の土坑が切り合って存在していると考えられた。SK 1042とSK 1021、SK 1061の配列、坑底面から礎板材が出土したことから、それらを積極的に掘立柱建物跡と考えた。東側にて確認しSK 1092と合わせ、ST 48とする。SK 1092をPit1、SK 1061をPit2、SK 1021をPit3、SK 1042をPit4とする。

規模：平面形は、2間×1間の側柱式南北棟建物か。桁行2間(370cm)、梁行1間(330cm)、床面積12.2㎡を想定できる。

柱穴：平面形は、いずれも不整形な形状。一つの柱穴と重なり合うように3箇所の掘り込みがあり、



第577図 ST 48 完掘の状態



Pit4 礎板材等出土状態及び完掘

Pit3 柱と礎板材出土状態及び完掘

Pit2 柱と礎板材出土状態及び完掘

構築されているようだ。規模は、長軸140～166cm、深さ53～62cmを測る。埋土は3層から5層に分層できた。Pit3は、底部に径30cmの礎の上にさらに15cm前後の小礎を重ね、その上に柱を建てている。沈下防止の石、礎石と考えられる。この柱材の周囲に柱に沿って堆積していたのが1層で、締まりが悪く、にぶい黄褐色土を含む黒褐色土(10YR3/1)である。掘り方の下層には締まりの悪い黒褐色土(10YR3/1)が堆積し、その上層にはにぶい黄褐色土が堆積していた。

柱間寸法： 平均柱間寸法は、桁行185cm(200cm・170cm)、梁行330cmを測る。

Pit番号	旧Pit番号	平面形	断面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	埋土の分類	土色検記号		柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
								1層	2層				
1	SK1092	楕円	D	140	72	54	b	1層 10YR3/3, 2層 10YR3/1, 3層 10YR3/3	—	土師器類、非口クロ杯	なし		
2	SK1061	不整形	A	148	92	53	b	1層 10YR3/1, 2層 10YR3/1, 3・4層 10YR3/1, 5層 10YR3/1+礎	○	土師器類も、須F 割材、礎板、棒材、板材	SK1062, SK1063に 切られる		
3	SK1021	不整形	H	166	84	57	d3	1層 10YR3/1, 2層 10YR3/1, 3層 10YR3/1	○	土師器類、須器器類 柱材	なし		
4	SK1042	不整形	B-2	144	86	62	e	1層 10YR4/2, 2層 10YR7/2, 3層 10YR5/1, 4層 10YR3/1+砂	○	須器副杯A、釜、鉢 割材、角状木製品	SK712に切られる		

第179表 ST48柱穴属性

出土遺物： Pit1から非口クロ土師器杯、土師器類の破片が出土した。

Pit2からは土師器器類、黒色土器A杯A類の破片と、木製品が5点出土した。1は割材。シナノキ属の板目材。形状から礎板として利用したものか。一端には切断痕があり、もう一端は腐蝕により破損。両面平坦。転用材ではないと考えられる。2は礎板。追柱目材で、シナノキ属。木裏を表にして使用。形状は角状で、側面は摩耗しているものの加工痕が残る。角材として製材してある点から柱材を転用したものか。礎板分類Da。3は棒材。芯持丸木材でキリ。加工痕は摩耗により不鮮明。枝分かれした下部で切断している。4は棒材(杭材)。キリの芯持丸木材であることから、3の下部か。底部は2方向から斜めに切断している。表皮は残る。5は板材。モミ属の柱目材。一端は斧の切断痕がある。礎板の割材か。

Pit3からは土師器杯A類1片、黒色土器A杯A類1片、須器器類2片の出土がある。木製品は2点があり、6はコナラ材の柱材。芯持ち丸太材。底部は垂直に切断し、表面には刃痕が数カ所に残る。芯持ち材での「穴」は、本遺跡ではこの材のみである。柱材分類Da。この他に割材1点が出土。板目材(5.9cm×3.5cm×1.8cm)で、柱の割材の可能性がある。Pit4からは、須器器杯A類1片と盤1片、鉢類2片が出土したほか、木製品5点がある。7は割材。追柱目のシナノキ属。一端は垂直に切断し、形状は角状を呈する。表裏両面は腐蝕してもろいが、平滑である。側面も平滑で加工してある。転用材であろうか。礎板分類Da。8は割材。キリの板目材。一端は斜めに切断。木表と片側側面は平滑に、調整加工を行っている。礎板の割材か。9は角状の木製品。ヒノキの二方板。両端を垂直に切断する。一端の角は僅かだが面を取り、もう一端は浅い角度で斜めに切断する。この他、割材が1点と木っ端1点が出土。割材はみかん割で、キリ。20cm×3.4cm×3.8cm、加工痕は観られない。柱材あるいは礎板材などの割材か。木っ端はシナノキ属で、5.2cm×3.5cm×1.8cmの木片。腐食が激しい。

遺構名	非口クロ杯	土師器							黒色土器A杯A	須器				数/総重量(破片/g)			
		杯A	器A	器B	器C	器D	器E	器F		不明	杯A	盤	器A		器E	器F	
ST48	2																
Pit1			1														4/33.1
Pit2					1	2	1		1								5/186.8
Pit3		1	2						1			1	1				6/91.8
Pit4										1	1			2			4/82.4

第180表 ST48出土土器組成

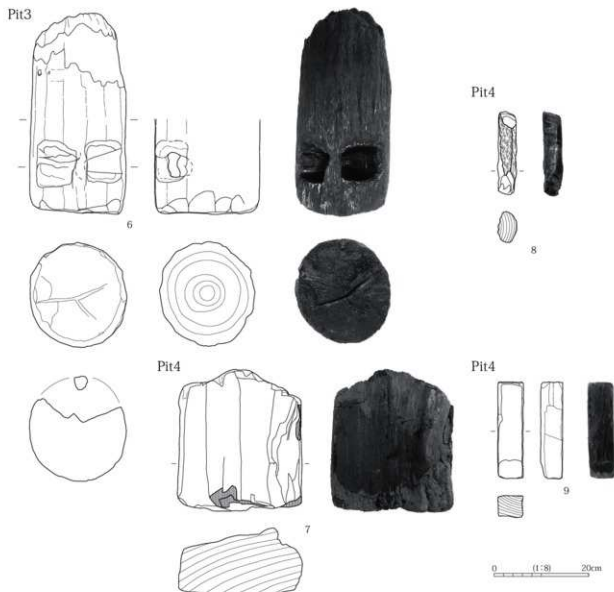
検出番号	Pit 番号	層位	器種	木目・木取り	樹種	現存長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	形状の特徴
第 578 図 1	2		割材	板目	シナノキ属	(17.6)	(23.1)	7.0	一端は切断痕あり もう一端は腐蝕
第 578 図 2	2		礎板	追柱目	シナノキ属	(45.2)	24.6	11.6	礎板分類 Da
第 578 図 3	2		棒材	芯持ち丸木	キリ	21.2	直径 9.7		枝が分かれ下部で切断
第 578 図 4	2		棒材 (杭材)	芯持ち丸木	キリ	(47.9)	直径 8.3		底部は斜めに切断
第 578 図 5	2		板材	柱目	モミ属	9.0	3.8	2.6	一端は斧切断痕あり 礎板の割材
第 579 図 6	3		柱根	芯持ち丸木	コナラ	(42.5)	直径 22.2		柱材分類 Da
第 579 図 7	4		割材	追柱目	シナノキ属	(30)	26.4	14.0	礎板分類 Da
第 579 図 9	4		角状木製 部材	二方柱	ヒノキ	20.5	(5.4)	4.7	両端を垂直に切断
第 579 図 8	4		割材	板目	キリ	17.6	3.8	6.5	一端斜めに切断

第 181 表 ST 48 出土木製品属性

Pit2



第 578 図 ST 48 出土の木製品 1 (Pit2 出土の割材ほか)



第579図 ST 48出土の木製品2 (Pit3・Pit4出土の柱材ほか)

49号掘立柱建物跡 (第580図)

時期：不明

位置：XD-9 (②区)

重複：ST 48と重複関係にある。ST 48Pit4と本跡 Pit3との切り合い関係から、ST 48を破壊すると思われる。

検出経過：黄褐色土砂層面に暗褐色土の落ち込みを確認。落ち込みは不整形で、複数の土坑が切り合って存在していると考えられた。ST 48と同様に、SK 1071とSK 1043、SK 1021とSK 712の配列から、それらを掘立柱建物跡と考えた。SK 1071をPit1、SK 1043をPit2、SK 712をPit3とする。

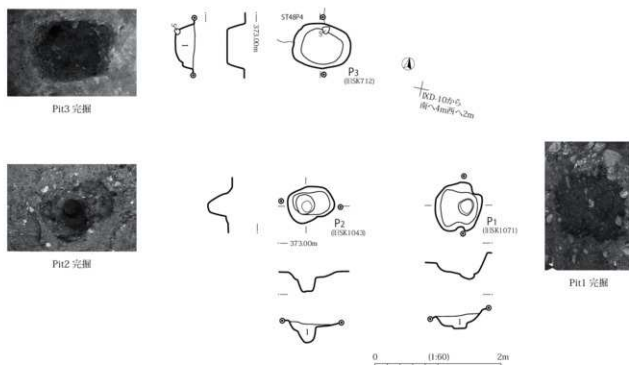
規模：平面形は1間×1間の側柱式南北棟建物か。桁行1間 (254cm)、梁行1間 (250cm)、床面積 6.35㎡を想定できる。

柱穴：平面形は、いずれも不整形。断面に柱痕状の掘り込みを持つ。長軸70cm～92cm、深さ22cm～62cmを測る。埋土は10YR2/3・3/1の黒褐色土の単純堆積。

出土遺物： Pit1 及び Pit2 から須恵器甕形土器の破片が出土している。

Pit番号	目Pit番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の分類	土色標記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK1071	円	B-2	76	74	22	a	10YR3/1	—	須恵器破片	なし	
2	SK1043	楕円	B-2	70	50	32	a	10YR3/1	—	須恵器破片	なし	
3	SK712	楕円	A	92	70	62	a	10YR2/3	—	なし	ST48Pit4を切る	

第 182 表 ST 49 柱穴属性



第 580 図 ST 49 完掘の状態

50号掘立柱建物跡 (第581図)

時期：10世紀後半以降 (古代12期～)

位置：IXD-17, 22 (③区)

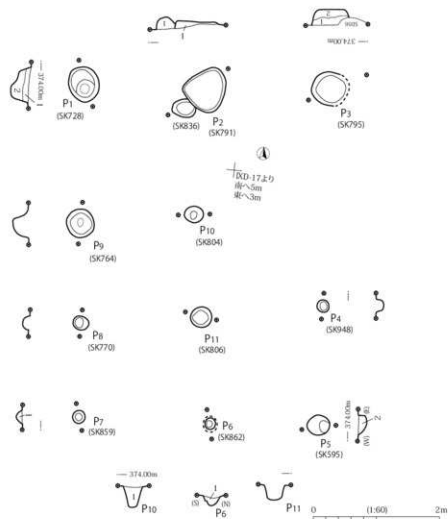
検出経過：黄褐色砂礫面で、黒褐色土の落ち込みを確認した。柱状の土坑が無数にあり、形状と規模から、掘立柱建物跡 ST 08 等を推定し調査した。さらに整理段階で、柱穴状の土坑として調査した遺構の内、規模・形状、そして遺構間の配置から建物を想定したのが本跡である。不完全な要素も多く、グリッド説明では、土坑扱いとしている。

規模：平面は桁行3間 (5.20m) × 梁行2間 (3.92m)、床面積 20.4 m²を推定する総柱式建物。主軸 N-8°-W。

柱穴：平面形は円形で、新旧関係の新しい小規模な柱穴。掘り方も深くなく、20cm内が主体。

柱間寸法：平均柱間寸法は、梁行 190cm (178～204cm)、桁行 175cm (146～208cm)。

所見：本地区検出の比較的小規模な柱状土坑を、配置から組成させて考えてみた。遺構の切り合い関係から、最も新しい建物跡を想定できるが、必ずしも完全なものではなく、建物跡であるか否かの成否は解らない。P1 (SK 728) と P2 (SK 791 または SK 836) と P3 (SK 795) は、規模・形状から、本跡に組成しない可能性もある。東隣の ST 51 とは同方向の主軸を持ち、ともに建物であれば、同時存在であろう。



第 581 図 ST 50 完掘の状態

仮 Pit 番号	SK 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土質の分類	土色層記号	柱材の有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK728	楕円	B-2	55	48	30	b	1層 10YR3/4, 2層 10YR4/4	—	須置器 壺	SD76を切る	
2	SK791	円	A	70	67	10	a	10YR3/3	—	須置器 蓋, 杆A	SKB33, SKB36を切る	
3	SK795	円	A	58	55	24	b	1層 10YR3/3, 2層 10YR3/4	—	なし	SD56に切られる	
4	SK948	円	A	18	18	12	—	—	—	なし	SD56と切り合い不明	
5	SK959	円	D	35	32	13	a	2層 10YR3/1	—	須置器 壺	SD56を切る	SD77と切り合い不明
6	SK862	円	D	24	22	12	a	10YR2/3	—	なし	SD77に切られる	
7	SK859	円	D	20	20	8	a	10YR3/3	—	なし		
8	SK770	円	D	24	22	10	a	10YR2/3	—	なし		
9	SK764	円	D	43	43	23	—	1層 10YR3/4, 2層 10YR4/4	—	なし		
10	SK804	円	G	29	26	33	a	10YR2/3	—	なし		
11	SK806	円	A	33	32	23	a	10YR3/3	—	なし		

第 183 表 ST 50 柱穴属性

5 1号掘立柱建物跡 (第582図)

時 期： 10世紀後半以降 (古代12期～)

位 置： IXD-17, 18 (③区)

検出経過： ST 50同様な経過で検出し、整理段階で、規模・形状、そして遺構間の配置から建物を想定した。不完全な要素も多く、グリッド説明では、やはり土坑扱いとする。

5 2号掘立柱建物跡（第583図）

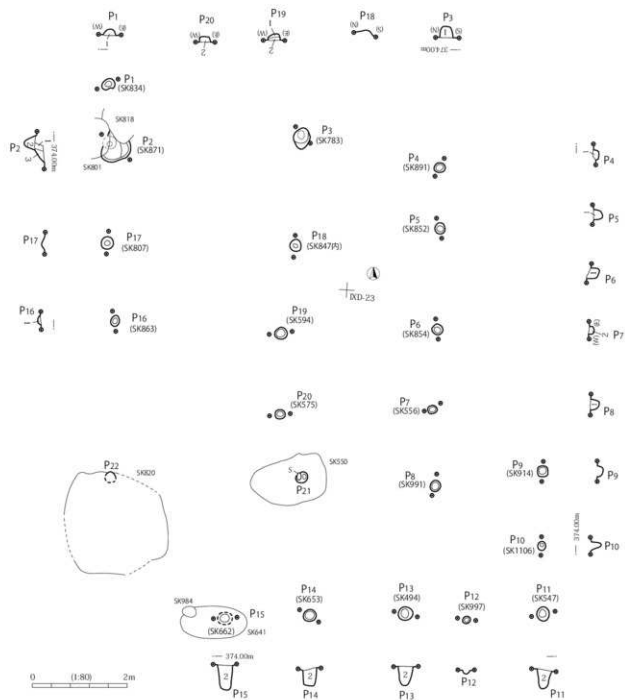
時 期： 11世紀前半？（古代14期～？）

位 置： XD-17, 18, 22, 23 (③区)

検出経過： ST 50、ST 51と同様な経過で検出し、整理段階で、規模・形状、そして遺構間の配置から建物进行を想定した。柱配置・規模等、不完全な要素が多く、グリッド説明では土坑扱いとした。

規 模： 平面は桁行6間？（10.1m）×梁行5間？（9.08m）、床面積91.9㎡を推定する総柱式建物。主軸N-4°-W。

柱 穴： 円形で平面規模の小さな柱穴。掘り方は深い例と浅い例が混在し、15cm前後と40cm近くの例がある。



第583図 ST 52 発掘の状態

柱間寸法：平均柱間寸法は、梁行 274.8cm (128～400cm)、桁行 162.0cm (106～232cm)。

所見：小規模な柱状土坑を配置から組成させたが、ST 50 や ST 51 に比して、規模が大きい。それから ST との切り合い関係は不明だが、建物であれば、本跡のほうが若干新しいと考えたい。柱穴全体の位置や配置のパラツキが多く、建物跡として認定できるか否かは厳密には解らない。見掛けだけの柱穴状土坑の配置とも考えられるか。

Pit 番号	SK 番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の 分類	土色帳記号	柱材の 有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK834	円	D	27	25	12	a	10YR3/3	—	なし	SK833 を切り、SK835 に切られる	
2	SK871	楕円	—	64	57	40	—	1層 10YR3/3、2層 10YR2/2、3層 10YR3/4	—	なし	SK801・SK818 に切られる	
3	SK783	円	A	34	30	22	a	10YR3/3	—	なし		
4	SK891	円	A	21	21	15	a	10YR3/3	—	なし	SD58 を切る	
5	SK852	円	A	22	19	20	a	10YR3/3	—	黒色土器 A 杯 A	なし	
6	SK854	円	B2	20	20	26	a	10YR3/3	—	なし	SD77 を切る	
7	SK556	円	A	18	17	12	a	2層 10YR3/1	—	なし	SD61 を切る	
8	SK991	円	A	22	20	18	a	10YR1.7/1	—	黒色土器 A 杯 A	なし	
9	SK914	円	A	26	23	12	a	10YR2/2	—	なし	SB10 を切る	
10	SK1106	楕円	E	18	15	22	a	注記なし	—	なし	なし	
11	SK547	円	G	26	24	40	a	2層 10YR3/1	—	なし	なし	
12	SK997	円	A	15	14	8	a	注記なし	—	なし	なし	
13	SK494	楕円	G	31	28	40	a	2層 10YR3/1	—	土師器 甕	なし	
14	SK653	円	G	25	25	38	a	2層 10YR3/1	—	なし	なし	
15	SK662	楕円	G	31	22	48	a	2層 10YR3/1	—	須恵器 罎	ST16 pit10 を切り、SK641 に切られる	
16	SK863	楕円	A	21	15	6	a	10YR2/3	—	なし	SD77 に切られる	
17	SK807	円	D	27	25	6	a	10YR3/4	—	なし	なし	
18	SK847 内	円	—	(13)	(13)	—	—	注記なし	—	なし	なし	
19	SK594	円	A	24	23	14	b	1層 10YR3/2、2層 10YR3/1	—	なし	なし	
20	SK575	円	A	20	17	13	a	2層 10YR3/1	—	須恵器 破片	なし	SD61 切り合い不明
21	SK550 内	楕円	—	(13)	(11)	—	—	注記なし	—	なし	なし	
22	SK820 内	円	—	(12)	(8)	—	—	注記なし	—	なし	なし	

第185表 ST 52 柱穴属性



現地見学会の様子



お昼のひととき

2-4 区画の溝状遺構

調査で検出した溝跡は61本あり、この内、遺跡を大きく区分するような大溝が3本ある。これら区画の性格を備えた大溝は、規模も大きく、遺物出土量も充実していることから、個別に本節にて扱い記録する。東西方向の大溝は北にSD 01、南にSD 03があり、これらと直結する南北方向の溝跡がSD 53及びSD 03南北流路(旧SD 02)である。SD 01とSD 03南北流路は、1975年千曲市教育委員会発掘のB地点でも確認されており、今回、同一の溝跡を調査した。

1号溝跡(第584図～第603図)

時期：8世紀後～9世紀前半(古代4期～6期に比定)

長軸方向：E-2°-N

位置：ⅧW-4, 5, 9, 10区、X-1～10区

規模：長さ50m 幅3m 60cm 深さ82cm

断面形態：アサガオ形に開くタライ状

壁立ち上がり：42度

埋土堆積：6層に分層できた。1層～4層は10YR3/1黒褐色粘土、5層は5Y3/1のオリブ黒色粘土、6層は7.5Y4/2灰オリブ色粘土で、いずれも炭化物粒子を僅かに混入する。便宜的に1層から5層を上層、6層を下層として出土遺物を整理した。第584図中のTは花粉分析、Kは珪藻分析採取点を示している。

重複遺構：SD 11と重複あるいは並存する。SD 16, SD 46, SD 47を破壊する。

検出経過：調査開始時、W-4区からX-5区にかけての以北と以南では、現表土に高低差40cmほどの耕作面の違いがあった。表土掘削の結果、SD 11及びSD 01と称した東西方向に真直ぐ伸びる溝状の落ち込みを確認し、旧地形の改変が少ないことを把握した。検出面での精査では、SD 11との区別が不明瞭で、ことにX-1区、W-5区では、落ち込み土が重なった状態で検出できた。またX-3区ではSD 46及びSD 47との重複を確認したが、厳密には切り合い関係はつかめなかった。



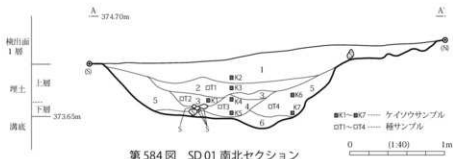
遺物出土状態(東から)



礎・樹木の出土状態(東から)



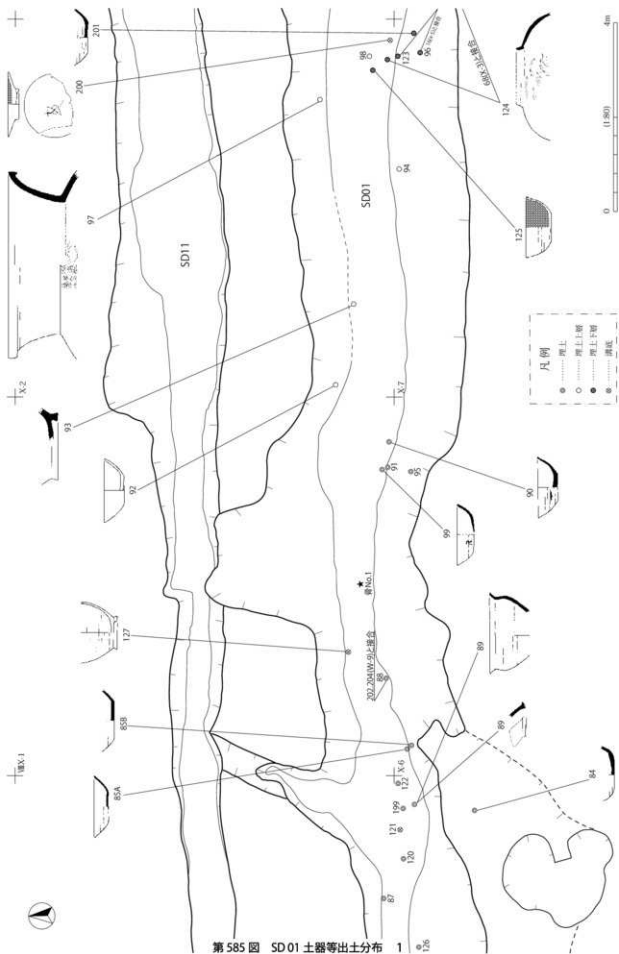
SD 01の完掘



第584図 SD 01南北セクション

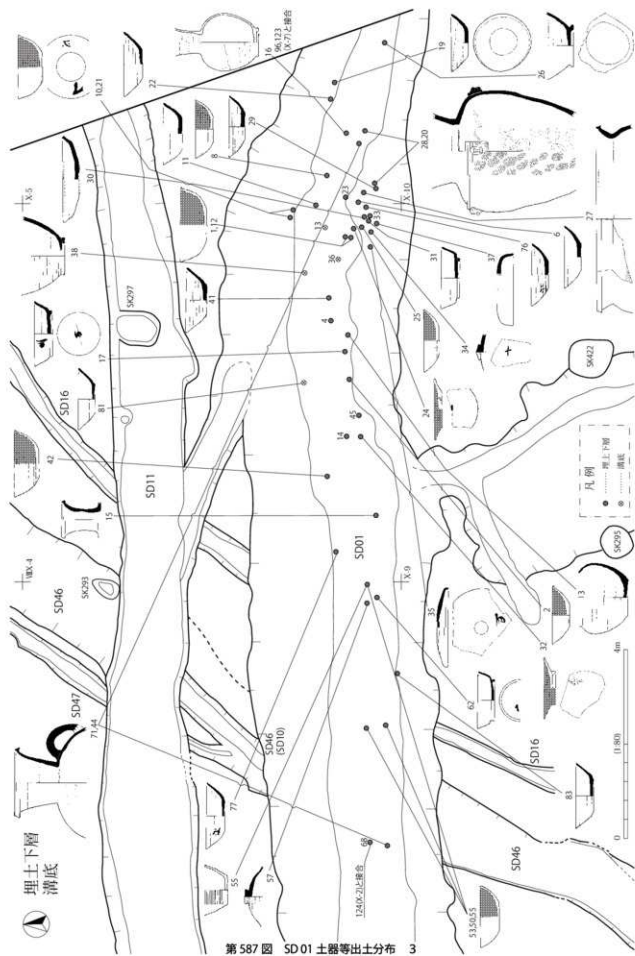


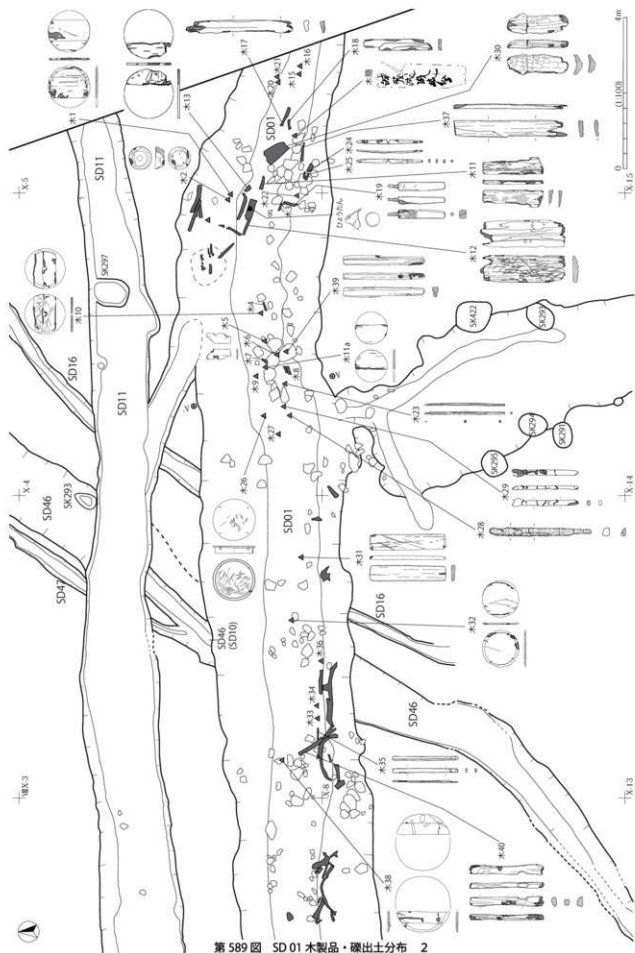
堆積上層(東から)





第586図 SD01土器等出土分布 2





第589図 SD 01 木製品・礎出土分布 2

出土遺物の概要：

W-4, 5, 9, 10区, X-1, 2, 6, 7区

溝底出土の資料

1～3は須恵器杯A類、焼成はいずれも良好ではなく、軟質の感がある。1はX-1区の2/3個体。底部糸切り離し調整、口径14.0cm、底部内径6.0cmを測る。内外面、磨耗著しい。2はX-2区1/3個体。口径13.0cm、底部内径5.5cm。3はX-1区の口縁部破片で、外面倒位で墨書「御」が書かれる。勢いのある筆使いで、丁寧な文字であるが残念ながら薄れて判読しづらい。4と5は黒色土器A類。4はW-9区の杯A類1/3個体。内面良好にミガキ調整し、黒光りする。底部持ちヘラケズリ調整。口径13.0cm、底径6.0cmを測る。5はX-2区No200の皿B2/3個体。底部糸切り離し後、貼り付け高台。内外面とも良好にミガキ調整する。皿部内面には焼成後の刻書「坂」が記される。口径13.5cm。23はW-9区No2017出土の先端部加工材。芯持ち丸木のヤナギ属。一端は破損。もう一端は二方向より斜めに切断。切断面には細かい刃痕が残る。樹皮僅かに残存し、杭材として利用したものか。24はX-6区No51の曲物。柾目のサワラ材。薄い板材、結合孔などは残存部からは確認できなかった。炭素年代測定結果、484±40年AD。25はW-5区No41の板材。板目でハリギリ材。厚みがあり、建築材に使用されたものか。表面に残る無数の穴は埋没後の植物根によるもの。26はW-10区No42の曲物。中央部に穴がある。追柾目のサワラ材。大型曲物。周縁部が腐蝕しているものの、ほぼ完形である。

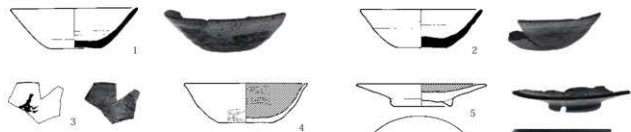
埋土下層から中層出土の資料

6はX-2, 7区の須恵器杯A類口縁部破片。体部外面に墨書「□」が一筆のみ確認できる。7～9は黒色土器A類。7はX-2, 7区出土の1/5個体。口径12.0cm、内面のミガキは良好で黒光りし、底部は回転ヘラケズリ調整。8はX-2区No125で、体部のやや張る形態で、ロクロ成形痕を明瞭に留める。良好なミガキが施され、底部は回転ケズリ調整。9はX-2, 7区の2/3個体。口径13.0cm、底径5.3cm、底部回転ケズリ調整。外面には正位にて墨書「示」が筆幅0.3cmで書かれる。10と11はX-2, 7区出土の須恵器盃E類の口縁部破片。10は細頸で、やや直立した口縁。27は角状木製品。齧申であろうか。二方柾のサワラ材。上端は中心部より4方向に切断。側面角に斜め下方向に1.0cm前後の切り込みが入る。上端直下の側面角の切り込みは左右向かい合うが、以下下方は互い違いに入る。下端の欠損部には切り込みの痕跡残る。角状ではあるが、切り込みが残っていることから齧申の可能性を考えたい。28は板材で挽物。横木取りで、ケヤキ材。両面とも調整加工し平滑。側面は楕円状になるが、全体の形状はつかめない。29と30はX-1, 6区出土の板状木製品。29は柾目材のサワラ材。形状から曲物の一部と考えるべきか。径60cmの大形の曲物が推定できる。残存部は、穴があるため中心部の残片か。30は柾目でモミ属。5片からなる。形状ははっきりしないが、幅2.7cm～3.0cm前後の製品か。多数の小孔のある薄板。孔の縦列をみた場合、1片に二列の小孔があり、一定の間隔で中心部に径1.0cmの孔が続いている。

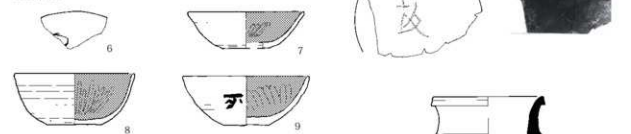
埋土中層から検出面出土の資料

12から15は須恵器杯A類。12はW-10区No84の底部。ヘラ切り離し調整で、底部内径10.0cm。13から15は糸切り離し手法で、焼成良好、硬質感のある土器。13はX-6区No85-Aの1/3個体で、口径12.0cm、底部内径6.0cm。14は13と一括して出土したNo85-Bの底部で、内径7.5cmを測る。15はX-1区No99の1/2個体で、口径12.0cmを測る。体部外面には筆幅0.2cmの墨書で「六」が正位に書かれる。16はX-1区No88とW-9区No202とNo204の接合資料。須恵器長頸壺の1/3個体。底部糸切り離し調整後、高台は低く潰れた貼り付け。17はX-2区出土の杯、体部外面に横位で墨書「坂」と倒位で「三」が書かれる。「坂」は筆幅0.3cmで一氣に書き上げられ、

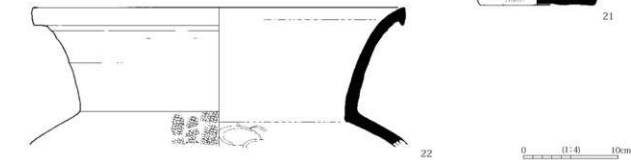
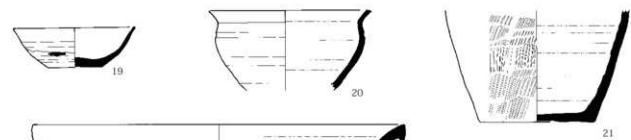
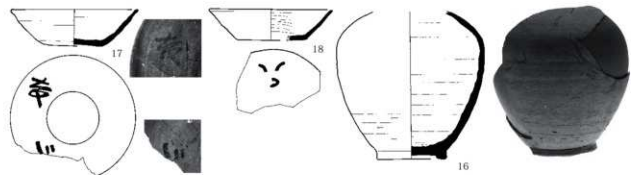
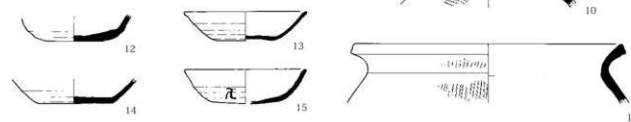
溝底



埋土下層



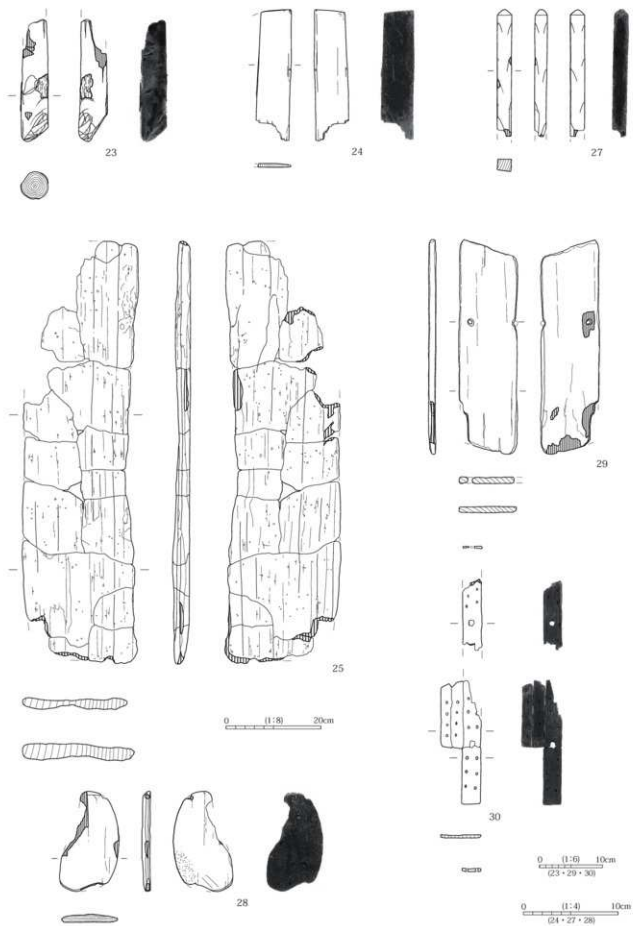
埋土中層



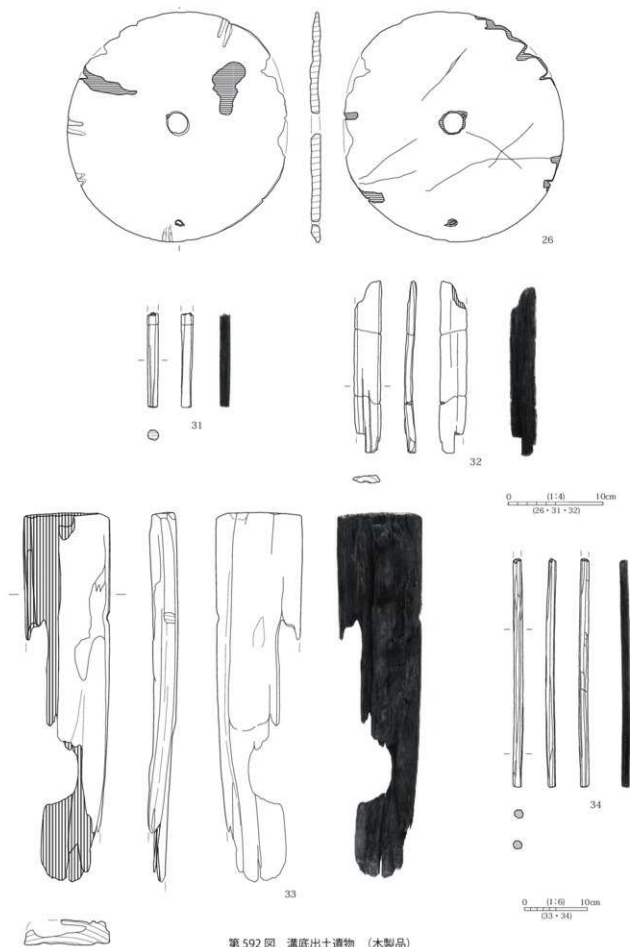
第 590 図 溝底及び埋土出土遺物 (土器)

0 (1:4) 10cm

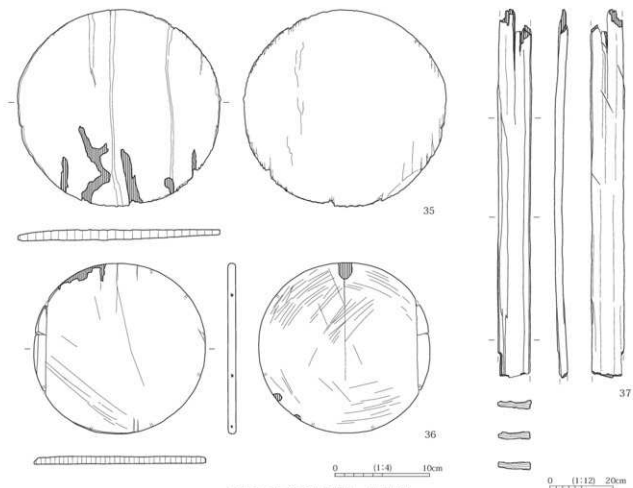
第3章 発掘調査の概要



第591図 溝底出土遺物（木製品）



第592図 溝底出土遺物（木製品）



第593図 溝底出土遺物（木製品）



「三」は後に書き添えられたものか、筆幅0.3cmの濃い墨で書かれる。18はW-9区の1/5個体。口径13.0cmで、外面に墨書「□」がある。筆幅0.3cm。19はX-1区No90。ロクロ成形痕を明瞭に留める。焼成はあまり良好でなく、やや軟質。底部糸切り離し手法で、底部内径6.0cm。体部外面に筆幅0.2cmで墨書「□」の一筆を確認できる。20はW-10区No89の甕E類口縁部破片。口唇角頭状で、体部外面回転横ナデ調整。21はW-10区の甕底部破片。工具幅2.5cmの横方向の叩き締め。22はX-2区No97の須恵器甕A類口縁部破片。31はX-2区の柄か。削出のサワラ材。一端欠損。もう一端は柄の先端部分か。木目残るもほぼ円状に加工。32はX-2.7区の棒状木製品。半割材。ヤマウコギ類。表面は炭化し、両端は欠損。芯持ち丸木の板目部分。33はW-9区の板状木製品。柾目でサワラ材。上端部は垂直に切断され、下端は腐蝕。板内部も腐蝕し空洞化している。34はW-9区の棒状木製品。削出材で、サワラ。35と36はX-1区検出而出土の曲物。35はNo52で、柾目のサワラ材。残りがよく、ほぼ完形。表面は埋没後の植物根により筋状に窪む。周縁一部に破損箇所がある。刻線は確認できない。側面に結合孔、釘穴等は観られない。36はNo53で、柾目のサワラ材。釘結合曲物。周縁に孔5ヶ所が残る。1ヶ所、周縁に破損箇所があるが、釘孔があった可能性もある。孔の間隔はほぼ均等で、破損箇所を中心に対称に位置する。内部には刻線が多数残る。37はX-1区No46の板材。板目?のモミ属。製材の板。形状から床材等の建築材と考えられる。表は平滑で、刃痕が残る。木裏には割痕がある。この他に、X-1区埋土中からウマの脛骨1点と部位不明骨片1点が出土している。

X-3~5区

溝底から埋土下層までの出土資料

1はX-4区No41の須恵器杯A類1/3個体。体部にロクロ成形痕を明瞭に留め、底部ヘラ切り離し調整。口径13.0cm、底径6.0cmを測る。内面には「イオウ状」附着物がある。2はX-5区No6の2/3個体。底部内径6.5cm、口径13.0cm。内面は使用によるものか、磨耗しツルツルする。3はX-4区の須恵器杯A類はほぼ完形個体。底部糸切り離しで、外面にはロクロ成形痕を明瞭に留める。口径13.0cm、底径5.7cm、底部内径5.3cmを計る。体部外面に倒位であろうか、筆幅0.1cmで「六」が書かれる。4~6はX-4区出土の黒色土器Aの杯A類。4と5は口縁部小破片で、6は底部。4は外面倒位にて、筆幅0.3cmの墨書「八」が書かれる。5も同様に倒位の墨書であるが、筆幅0.2cmで「八」が書かれる。推定口径14.0cm。6は底部に墨書「八」があり、4とほぼ同じ書き風。底部回転ケズリ調整で、底径6.4cmを測る。7はX-5区の須恵器甕E類口縁部破片。胎土中に黒色粒子を混入し灰褐色。口唇は外削ぎ状で端部は尖る形態。8はX-5区の下層と埋土の接合資料で、灰釉陶器の長頸壺体部下。外面は回転ケズリ調整で、自然降灰釉。古式の灰釉であろう。内面に墨汁痕らしき痕跡がある。9はX-5区の上層甕B類の底部。底部に木葉痕があり、縦方向のナデ後に板状工具による調整。この他、X-3区の溝底からは「イオウ状」附着物のべっとり付いた黒色土器A杯A底部破片が1点ある。63はX-4区No11-aの曲物1/2個体。柾目でヒノキ属。結合孔、釘孔は観られない。64はX-5区No18出土の杭材か。芯持ち丸木材でヤナギ属。一端は破損。下端は二方向より切断。切断痕あり。樹皮残る。65は板状木製品でモミ属。加工された片側側面は残るが、他は、すでに破損がはげしく形状はつかめない。66は割材。分割材でモミ属。一端垂直に切断される。分割材の一部で、その材の規模から建築材と考えられるか。67はX-3区No35のこも編台か。追柾目のサワラ材。工具の加工痕あり。中心部に半穴、左側面に欠き込み1箇所がある。炭素年代測定結果は554±30年AD。

埋土下層出土の資料

10はX-4区No76の須恵器杯A類2/3個体。体部にロクロ成形痕を明瞭に留め、口径13.0cm、底部内径6.5cm。体部外面に倒位にて墨書「六」が書かれる。筆幅0.2cm。11はX-4区No77の須

下層



第594図 下層出土遺物 (土器)

恵器杯 A 2/3 個体。底部糸切り離し調整で、口径 14.0cm、底部内径 7.5cm を測る。体部外面に倒位で筆幅 0.2cm で「ㄨ」が書かれる。12 は X-3 区の須恵器杯 A 類口縁部破片。口径 12.0cm。体部外面に倒位が、墨書「北カ」が、筆幅 0.2cm で書かれる。13 は X-5 区 No19 と埋土内の接合資料。須恵器杯 A 類の完形。口径 12.0cm、底径 5.8cm、底部内径 5.5cm。体部はロクロ成形痕を明瞭に留め、墨汁痕がべっとり付着し、墨汁を溜めた杯を重ねた様子を推測できる。また内面には、「イオウ状」付着部がべっとり付く。14 は X-3 区 No62 の須恵器杯 B 類 2/3 個体。口径 12.0cm、器高 3.6cm を測る。焼成良好で堅緻。高台は外面接地。高台内に筆幅 0.3cm で墨書「□」がある。15 は X-4 区 No17 の須恵器杯 B 類 2/3 個体。底部回転ケズリ調整で、体部ロクロ成形痕を残す。高台は低く平接地。口径 13.0cm、器高 4.0cm。体部外面に横位に「万カ」の墨書があり、底部にも同様な文字「万カ」が書かれ、金属製工具によるへら書き「×」が記される。内面には墨汁痕のような痕跡がある。16 は X-4 区 No37 で須恵器短頸壺の蓋破片。17 は X-4 区 No35 の蓋 2/3 個体。体部 1/2 程度をケズリ調整し、かえしは直。内面には指頭圧痕がそのまま残る。外面に墨書「面カ」が筆幅 0.15cm で勢よく書かれ、近くには薄れて判読できないが、他に 3 文字ほど記されていたようだ。18 は X-4 区 No34 の蓋。内面に墨書で「×」が書かれる。19 は X-4 区 No30 の須恵器高盤の皿部。口唇角頭状で、口縁部 1.0cm 幅で強いナデ調整が入る。口径は 20.0cm を測る。20 は X-4 区 No3 の須恵器短頸壺の体部。内外面ともにロクロ成形痕を明瞭に留め、硬質で胎土緻密、焼成良好である。21 は X-5 区 No16 と X-7 区 No96 及び No123 の接合した灰胎陶器長頸壺 2/3 個体。口縁部を欠失する。体部下半は回転ケズリ調整で、肩部に刷毛塗り施釉。22 は X-5 区 No28・No20 と埋土との接合資料で 1/3 個体。須恵器 D 類突帯付四耳壺。突帯は明瞭な角頭状で、耳部は粘土の貼り付け後、縦位に 0.1cm ほどの穴を穿つ。体部には幅 3.5cm ほどの板状工具の叩き締め痕が観察できる。焼成良好で、堅緻、肩部に自然釉が掛かる。23～26 は黒色土器 A 杯 A 類。23 は X-4 区 No42 でほぼ完形。底部及び体部下半はケズリ調整し、口唇直下は強い横ナデ調整。口径 14.0cm、器高 5.3cm、底径 6.0cm を測る。24 は X-5 区 No8 の 2/3 個体。内面は放射状にミガキ調整し、底部回転ケズリ。口径 13.0cm。25 は X-4 区 No25 の 2/3 個体。口径 12.0cm、底径 5.5cm、器高 3.3cm。底部及び体部下半は回転ケズリ調整。26 は X-4 区 No10 と No21 の接合例で、ほぼ完形個体。口径 13.5cm、底径 6.0cm を測る。内面良好にミガキ調整され、底部は回転ケズリ調整。体部外面に墨書「正」が正位に書かれ、対になるよう反対側には墨書痕らしき痕跡が観察できる。筆幅 0.2cm。27 は X-3 区の黒色土器 A 類皿 B の 2/3 個体。高台は低く、直立し、口唇緩やかに外反し水平。内面は良好に磨かれて、黒光りする。内面に焼成前刻書「坂」がある。金属製工具によるものか。28 と 29 は X-4 区出土の黒色土器 B 類の皿 B 類。28 は No32 の 1/2 個体。内面は放射状のミガキ調整で黒光りする。高台は貼り付け直状。内面には焼成後の刻書「坂」が刻まれる。幅 0.15cm で金属製工具であろう。29 は No24 の 1/2 個体。内外面良好にミガキ調整され、口径 13.0cm を測る。内面には「漆状」付着物がべっとり付く。また高台内には僅かに 1 筆であるが、朱墨「□」が書かれている。30 は X-3 区出土の土師器。土管状の資料で、粘土紐の積み上げ後ナデ調整、縦方向に板状工具による刷毛目調整。その他、須恵器杯 A 類口縁部の小破片に、墨書痕を観察できる例が 2 点あり、X-4 区では墨書 2 筆「□」を、X-3 区の資料では墨書 1 筆「□」を確認できる。また底部にへら書き記号「×カ」のある例 1 点もある。31 は、X-3 区下層出土の奈良二彩陶器の壺、口縁部破片。SD 03 の E-7 区溝底出土の底部（第 665 図 19）と同一個体と考えられる。

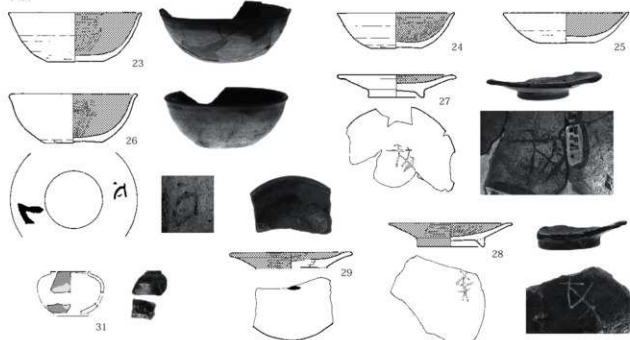
68 は X-3 区出土の経ぎ板か。SD 03 の E-17 区出土（第 645 図 33）と同類と考えられる。69 は X-3 区出土の柄か。芯持ち材の分枝部分。クヌギ節。把手部分と考えられる断面形は楕円形、上部の断面は角状。表面平滑に加工される。70 は X-3 区 No40 で割材。みかん割りのサワラ材。表面

は平滑で、形状から建築材の骨格材であろうか。側面に欠き溝が残る。71はX-3区で柄と思われる棒状木製品。削り出しのサワラ材。上端は斜めに切断。下端は僅かに欠損する。中心部断面形はふくらみを持ち、上端近くは比較的扁平。表面には削痕、加工痕が残る。72はX-4区No19の棒状木製品。削り出しでサワラ材。角状で、表面に浅い工具痕が入る。上端は幅1.0cm、長さ4.5cmで棒状に削り出し、ホゾをつくる。一部炭化。73はX-5区No24とNo25の棒状木製品。柾目のモミ属。中心部に孔があり、両端につれて削られ、やや丸みを帯びる。把手の部分と考えられる。炭素年代測定は644±30年ADを得た。74はX-4区の柄。削り出してヒノキ材。一端は両面から削られ、厚みを薄くする。柄と考えれば差込口か。もう一端には切断痕が数カ所に観察できる。中央部が一番太く断面形は円形。表面には調整加工が行われる。75はX-4区No2の鉢。横木取りでケヤキ材。挽物の容器。粗加工した材をロクロにかけて回転成形。回転体でロクロの爪跡や回転成形痕は一部に残るが、表面を磨きロクロ目を消すなど、爪痕を残さない工夫をしている。縁の部分1/5近く割れているもののほぼ完形。削り抜いた中央部はやや中心からずれて、縁の幅が倍近く異なっている箇所がある。縁の上にも成形痕が残り、側面にはロクロ痕が僅かに残る。76はX-4区の割材。板目でモミ属。両端割り、板状に加工。材の規模から判断し、建築骨格材に使用したものと考えられる。炭素年代結果は854±70年AD。77はX-4区出土のヒョウタン。ヒョウタンの上部ヘタの部分で、腐食は少なく、比較的しっかりしている。78はX-5区下層出土の木簡。長さ(13.0cm)、幅3.3cm、厚さ0.4cmを測る。長さは欠失する。表面に筆幅0.1cmで、6文字、手習いが書かれる。最下位の1文字は判読不能であるが、他は「緘」の字である。炭素年代測定結果は589±30年AD。詳細は644ページ。79はX-4区No10の曲物。追柾目でサワラ材。蓋板の一部か。3/4個体。周縁に鋭角の低い段を巡らし、側板を結合した結合曲物の蓋板片。段の縁に僅かだが結合孔1孔、半孔の状態が残る。蓋板の中心部に径1.2cmの1孔をやはり半孔の状態で留めている。蓋板表面には、極く浅い刻線が多数巡るが、破損後について可能性もある。80はX-4区No26の曲物。柾目でヒノキ材。樺皮結合曲物。周縁に段を有し、4箇所に樺皮が残る。側板も1/3程度残っている。81はX-5区No13で曲物。追柾目ヒノキ材。円板を側板の内側にはめ込み、側板の上から木釘を打ち込む釘結合曲物。円板側面部に2孔一対の結合孔が2対残る。欠損部にも円板周囲にほぼ均等であったと考えられる。内面には、向きが不揃いであるが、刻線が多数入る。

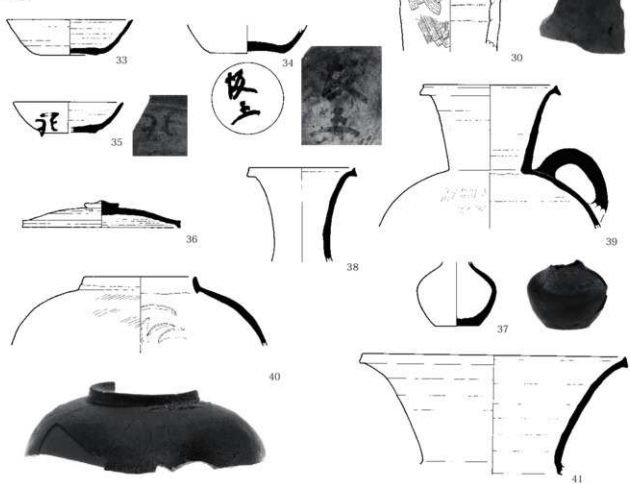
埋土上層出土の資料

32～41は須恵器。32～35は杯A類。32はX-3区No60とNo61の接合例。口径14.0cm、底径4.2cm、底部内径6.5cmを測る。底部系切り離し調整。胎土中に黒色粒子を大量に混入する。33はX-3区No86の1/2個体。底部系切り離し調整で、底部内径7.5cm。外面にタスキ掛け状の焼成痕跡がある。34はX-3区No65。系切り離し調整で、底部内径7.0cmを測る。底面に墨書「坂主」が、筆幅0.35cmで書かれる。35はX-3区No66。口径11.4cm、底部内径7.0cmを測る。体部外面に墨書「北」が筆幅0.2cmで書かれる。丸文字風であるが筆順は正しい。内面には墨汁痕が残る。36はX-4区No39で須恵器杯蓋1/3個体。体部1/2程度ケズリ調整し、かえしは直、つまみは扁平でつぶれた宝珠形。37はX-3区No59で須恵器の小壺2/3以上の個体で、口縁端部を欠失する。内面及び底部には墨汁痕がべっとり付着する。内面は墨壺として、外面は重ねの結果か。38はX-3区No52の須恵器長頸壺の頸部破片。内面に「漆状」付着物がある。39はX-5区下層No44とX-3区No71、X-1区埋土の接合例。須恵器把手付き長頸壺の大型品か。口唇部やや受け口状に折り返し、体部は回転横ナデ。把手は一箇所で、粘土紐貼り付け。40はX-2区No124とX-3区No68と埋土中の資料の接合した須恵器短頸壺の大型品。外面は板状工具による叩き締めの後、ナデ調整。41はX-2区とX-7区の接合例に、さらにSD 03のD-13区及びD-14区出土資料が接合する。須恵器甕A類の

下層



上層



第 595 図 下層及び上層出土遺物 (土器)

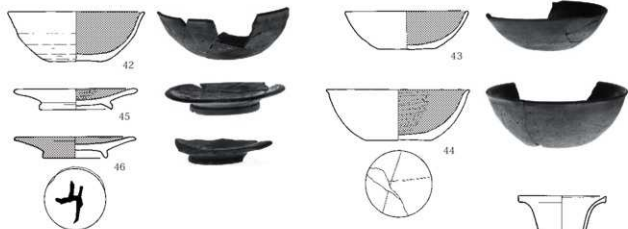
0 1:4 10cm

口縁部破片。42～44は黒色土器A杯A類。43はX-3区No50とNo53及び下層No55-Bの接合資料。口縁直立し、底部ケズリ調整。口径13.0cm、底径6.0cm。44はX-4区No40とNo43の接合個体で深碗形。内面黒光りし、底部糸切り離し後、ケズリ調整。口唇は強い横ナデにより玉縁状。口径14.0cm、器高5.8cm、底径7.0cmを測る。底部にへら書きで「×」がある。45はX-3区No72の黒色土器A類皿B完形。口径13.0cm、底部回転ケズリ調整し、高台貼り付け後、簡単なナデ。皿部内面は非常に良好にミガキ調整され、黒光りする。46はX-3区No79-2の黒色土器B皿B類の2/3個体。皿部内面は黒光りするほどにミガキ調整。推定口径13.0cm。高台内に朱墨、筆幅0.3cmで「山」が書かれる。ただし3画は長くはらう字風であり、別の文字であろうか。47と48は同一個体と考えられる灰軸陶器長頸壺。47はX-3区No78とX-2区埋土の接合した頸部。口唇折り返し外削ぎ状、端部は尖り直立。自然軸が掛かる。48はX-3区No78とX-1区、X-4区埋土資料との接合例。体部半ばまで回転ケズリ調整。49と50はX-4区出土の輪の羽口、同一個体か。49はNo46で、50はNo47にあたる。その他、X-3区No70とX-4区No5の黒色土器A杯A類底部破片には「漆状」付着物があり、X-3区No82の須恵器杯A類底部には、「イオウ状」付着物が付いていた。82はX-5区No1で曲物。柁目でサワラ材。3/4個体。樺皮結合曲物。低い段をつくり周縁に巡らす。結合孔は2箇所あり、樹皮は2箇所に残る。表面に刻線が入る。83はX-3区No32の曲物。サワラの柁目材。円板の周縁に低い段を巡らす樺皮結合曲物Aタイプ。円板に2孔一対の結合孔があり、4等分して位置する。樺皮は4箇所すべてに残る。表面には刻線が数本ある。

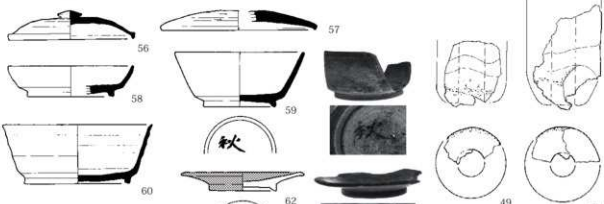
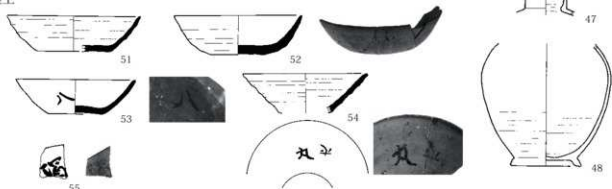
埋土中及び検出面出土の資料

51は須恵器杯A類1/2個体。焼成は軟質か。底部糸切り離し調整、口径14.0cm。52はX-5区出土の須恵器杯A類2/3個体。口径13.5cm。口縁内部に灯明痕らしき付着物がある。53はX-5区出土の須恵器杯A類ほぼ完形。口径12.5cm、底径5.4cm、底部内径6.0cmを測る。体部外面に正位にて、墨書「八」が書かれる。筆幅0.2cm。54はX-5区埋土中出土の須恵器杯A類1/3個体。口径13.0cmを測り、外面に2文字墨書がある。正位にて筆幅0.2cmで「丸」、倒位にて筆幅0.15cmで「六」である。これら2文字は筆幅、墨汁の濃淡、文字の向きの違いから、時期を違えて書かれたものと考えられる。55は出土地区不明の須恵器杯A類口縁部破片。外面に正位にて墨書「酒」が筆幅0.3cmで書かれる。56は出土地区不明の須恵器蓋2/3個体。体部を1/3程ケズリ調整し、つまみ部は扁平で碁石状。かえしは低く内傾。57はX-4区で須恵器蓋の小破片。かえし部は僅かに0.2cm程度。58はX-4区土層観察用坪内から出土。須恵器杯B類1/2個体。体部やや張り、ロクロ成形痕を留める。底部は回転ケズリ調整で、低く貼り付けられた高台と同じ高さとなるか。口径13.0cm、器高3.3cm。内面は使用によるものか、磨耗しツルツルする。59はX-4区埋土中出土の杯B類1/2個体。口径13.6cm、器高5.8cmを測る。底部に筆幅0.2cmで、墨書「秋」が書かれる。60は出土地区不明の須恵器杯B類1/2個体。口径14.0cm、底径10.5cm、器高6.2cm。61はX-4区の黒色土器A杯Aの1/3個体。内面は黒光りし光沢を帯びる。底部回転ケズリ調整。口径12.0cm、底径5.7cmを測る。62はX-4区の黒色土器B皿B類のほぼ完形。内外面には、「油状」の物質をかけたように黒光りする。底部は回転ケズリ調整で、高台は低く手でつまめない。口径13.5cm。高台内に焼成後の刻書「濱」と「井」が併記される。幅0.15cmの金属製工具による。84はX-5区埋土の皿あるいは例物か。横木取りのケヤキ材。縁の部分が反り上がり、他は平滑。破損がひどく形状は解らないが、何らかの容器であろう。85はX-4区埋土の板状木製品。柄か。柁目のサワラ材。両端部は破損。1mmにみえない孔が4箇所にある。上部断面は円形。下部は幅が広がり扁平となる。86はX-3区検出面の曲物。追柁目でヒノキ材。曲物の中心部が残る。他の曲物に比して厚みがある。木表には工具痕が残る。木裏下端に釘痕跡が残る。87は出土地区不明

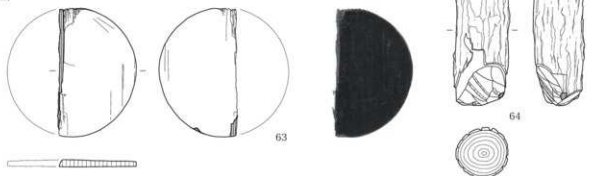
上層



埋土



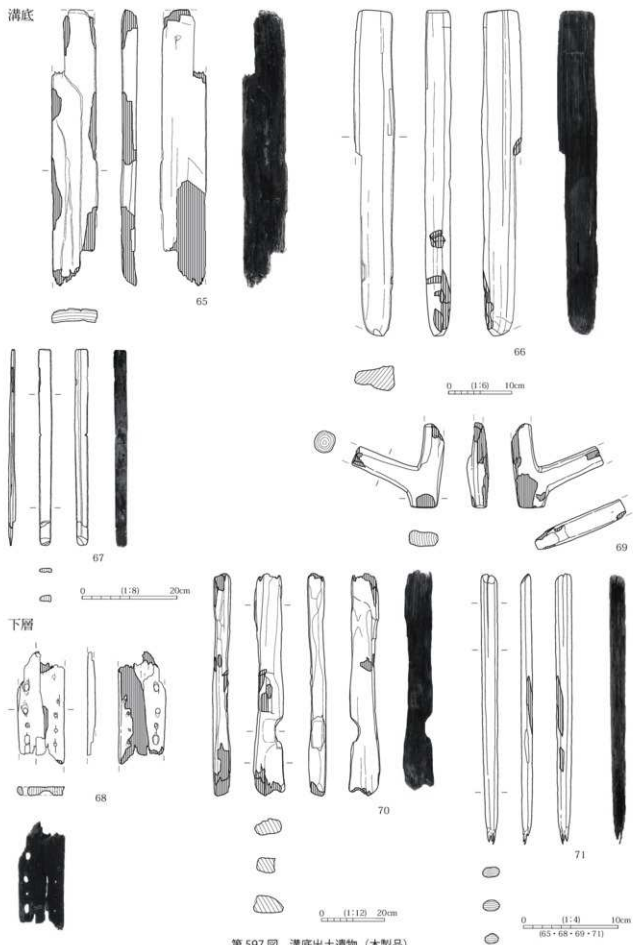
溝底



第596図 上層及び埋土出土遺物(土器と土製品)・溝底出土遺物(木製品) 0 1:4 10cm

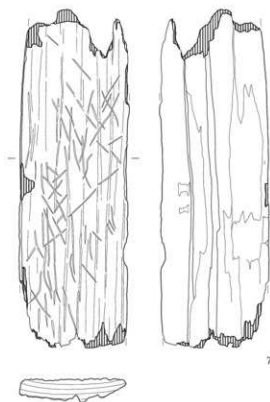
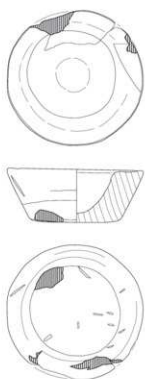
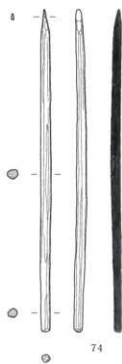
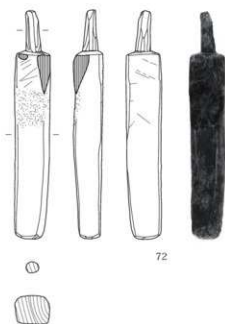
第3章 発掘調査の概要

溝底



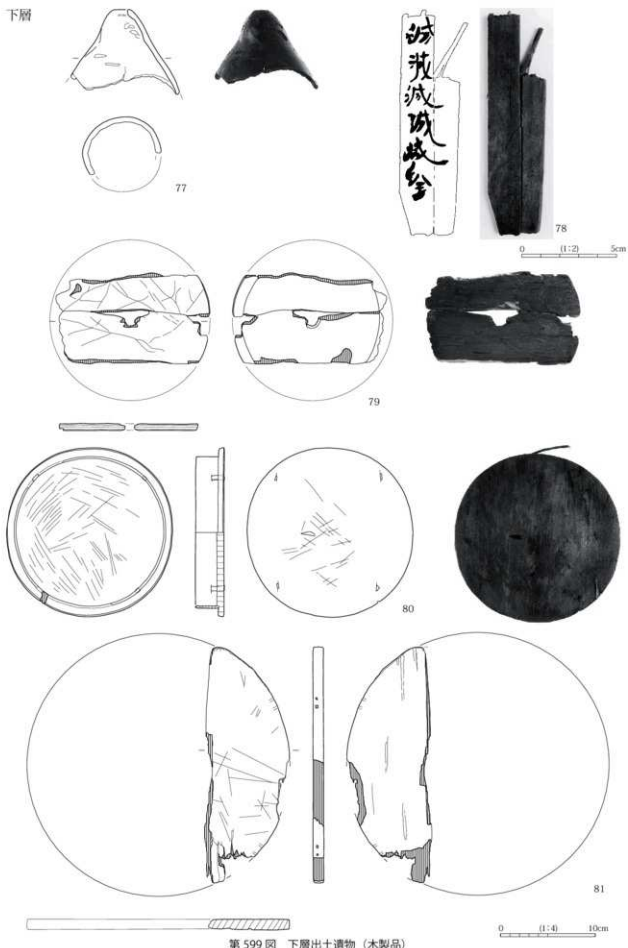
第597図 溝底出土遺物(木製品)

下層



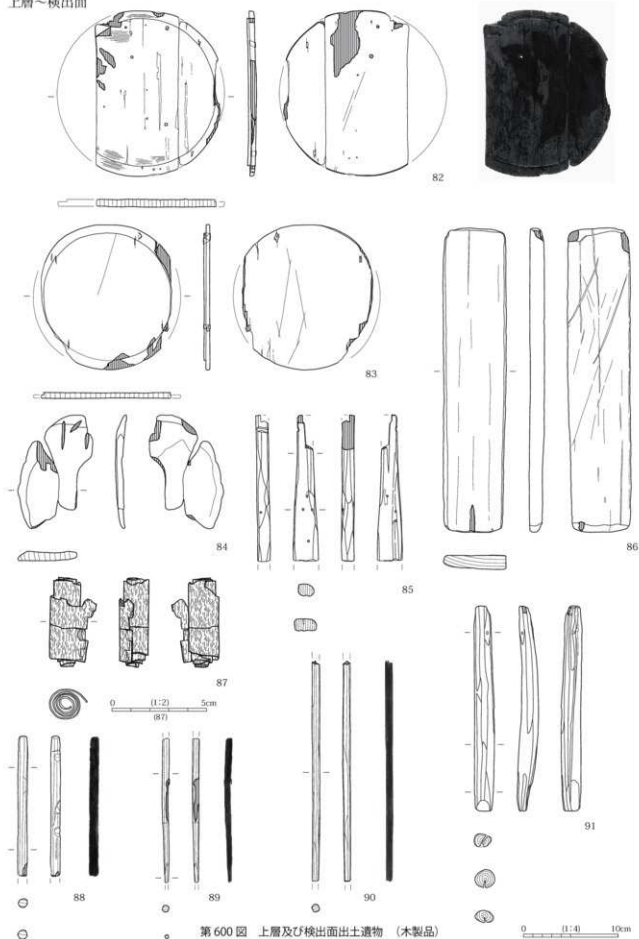
第598図 下層出土遺物（木製品）

下層



第599図 下層出土遺物（木製品）

上層～検出面



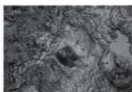
の検出出土の広葉樹樹皮。4.5cm前後の幅で4重に巻いている。樹皮の皮幅が一定していることから、何らかの目的で切り取ったと考えられる。曲物の皮紐に使用されるものか。88は出土地区不明の柄。削出でヒノキ材。削り後、調整加工する。柄の一部と考えられる。89はX-5区埋土の箸。削出のスギ材。上端破損。断面は10角形ほどに削る。先端2.0cm部分には、さらに削りを入れ尖るか。90も箸で、X-4区埋土出土。スギの削出材。8角に削り出し加工。両端部欠損。全面削りを入れる。下端やや幅減し。材質は堅い。91はX-4区検出面の樺状木製品。芯持ち材。クスノキ科。僅かに弓なりに湾曲。断面形は、中心部は丸く、下端は扁平に加工される。上端部付近には角状に小孔が残る。また、裏は縦に割れが入るが、背割りを入れたのか、自然に割れを起こしたのかは不明である。この他にX-3区からウマ中足骨1点と骨1点、X-4区から種不明の骨片1点、X-1区からウマの脛骨1点と骨1点、出土不明の歯(P2)1点、骨1点が出土した。

時期の判断基準：

①区と②区を区切る東西方向の溝。溝底及び下層出土の遺物は、糸切り離し手法の須恵器杯A類と黒色土器A杯A類が高率に組成している。黒色土器杯A類は、内面黒光りするほど良好にミガキ調整されて底部静止ケズリの手法である。非口クロ土師器の出土はなく、須恵器へラ切り離し手法の杯A類、杯B類の出土は極めて少ない。このことは、本溝が古代4期、8世紀後半以後に掘削された可能性の高いことを示唆しており、1975年の千曲市調査B地点出土土器の様相ともほぼ一致している。今回、第590図5や第595図28・29のような黒色土器皿B類の伴出、僅かではあるが灰釉陶器碗類の組成から、6期前後の様相が非常に濃厚か。第595図31は奈良二彩陶器の短頸壺で、SD 03 南北流路X-7区出土の底部と同一片と考えられる口縁部破片である。ほぼ同一時期に機能した両溝の証左であろう。かつてB地点では、奈良三彩の短頸壺蓋1/3個体(本書650ページ再掲)が出土しており、ここでの二彩陶器とほぼ同一である。何らかの関連があるのか。また第598図75のような刳物をはじめ、木製容器が比較的充実して出土している。第591図27のような角柱状を呈した珍しい斎車や「緘」の字を習書した木簡も出土。墨書には「示」・「で」、「八」、「坂」、「坂主」等の字体が窺われ、第594図13のような墨汁痕著しい杯、上層出土ではあるが、墨壺と考えられる須恵器の小瓶(第595図37)など、墨書関連の資料は多い。上層出土土器も、下層とほぼ同一傾向にあり、墨書「酒」、「秋」、刻書「濱」等がある。SD 01 は総じて出土量が少ないが、おそらくは4期から6期を中心に機能した溝で、9世紀以降はほぼ埋没してしまっただと考えられる。追記するが、X-2区から3区にかけて溝底から、長さ7m、径30cmほどの樹木が出土した(写真・P482)。枝等はなく、打ち払われた状態であった。貯木的な用途に向けられたものか。



木器 No26 出土状態



ひょうたん出土状態



SD 01 出土の土器

社宮司遺跡 SD 01 内堆積土の種実、花粉及び珪藻化石の分析

1. 分析の目的

遺跡北端を区画する SD 01 は東西方向の大溝である。事実上、大溝は遺跡の立地する扇状地状の扇央部から扇端部にかけて掘削され、地形的に地下水の流れる方向にあたる。埋没土は半ば泥炭化し、現地地下水が溝底から埋土下層近くまで達する。植物遺体や昆虫化石は良好に遺存しており、それら化石群から古植生を復元推定することがある程度可能と考えられる。また種実及び珪藻分析からは、SD 01 の当時の利用状況、さらには波来系栽培植物種や食用植物種の推定等を可能にすると考えられる。

2. 分析地点及び試料

分析試料は、SD 01 内に設定した土層観察用群 (X-4区からX-9区) 内から、堆積層ごとに抜き取り採取した。1層から5層の計7試料 (K-1からK-7)、種実分析については、大型のブロックで2層から5層の4箇所 (T-1からT-4) である。

1層 K-2 サンプル、2層 K-3 及び T-1 サンプル、3層 K-1 及び T-2 サンプル、4層 T-3 サンプル及び層上部 K-4・層下部 K-5、5層 T-5 サンプル及び層上部 K-6・層下部 K-7。

3. 分析結果

a. 花粉化石群集の記載

同定された分類群数は、樹木花粉 40、草本花粉 28、形態分類を含むシダ植物胞子 3 である。花粉化石群集は、その種構成や各分類群の出現率によって下位より 2 つの花粉化石群集帯を設定することができた。I 帯はコナラ亜属の優占で特徴付けられるが、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、クリ属の増加、カバノキ属、トチノキ属の減少で、さらに 2 亜帯に細分できる。

I 帯 (K-1 ~ K-7)

I a 帯 (K-7) は、樹木花粉の占める割合は約 56% である。その中で、コナラ亜属が約 24% と最も高率であり、次いでトチノキ属 (約 13%)、カバノキ属 (約 11%)、ニレ属-ケヤキ属 (約 9%) の順に高率である。他に、クマシデ属-アサダ属、クリ属、ブナ属 (各約 6%)、サワグルミ属-クルミ属とクルミ属 (あわせて約 5%)、カエデ属 (約 2%) などが出現する。草本花粉では、イネ科が約 31% と高率であり、ヨモギ属 (約 3%)、カヤツリグサ科 (約 2%)、オモダカ属、クワ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、アカザ科-ヒユ科、キジムシロ属近似種、マメ科 (各 1% 以下) が出現する。

I b 帯 (K-1 ~ K-6) は、樹木花粉の占める割合は約 44 ~ 53% である。その中でコナラ亜属が約 21 ~ 26% と最も高率であり、次いでクリ属が増加して約 7 ~ 20% で多産する傾向にある。比較的高率なのは、サワグルミ属-クルミ属とクルミ属 (あわせて約 2 ~ 9%)、クマシデ属-アサダ属 (約 6 ~ 9%)、ブナ属 (約 2 ~ 11%)、ニレ属-ケヤキ属 (約 4 ~ 10%) であり、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科も最上部では約 7% とやや目立つ。他に、さほど目立たないが低率であるが、スギ属、カバノキ属、ハンノキ属、カエデ属、トチノキ属も安定して出現する。また、上部ではキハダ属、下部ではウコギ科なども低率で出現する。草本花粉では、イネ科が約 23 ~ 40% と高率であり、ヨモギ属 (約 4 ~ 6%)、カヤツリグサ科 (約 2 ~ 5%)、クワ科 (約 1 ~ 4%) が若干目立つ。他に、概ね 1% 以下の低率であるが、オモダカ属、ミズアオイ属、サナエタデ節-ウナギツカミ節、アカザ科-ヒユ科、ナデシコ科、キジムシロ属近似種、キカシグサ属などが安定して出現する。

II 帯 (K-2、K-3)

樹木花粉の占める割合は約 38 ~ 58% である。その中で、クリ属が増加して約 17 ~ 45% で優占する傾向であり、コナラ亜属も減少するが、約 12 ~ 17% で依然として高率である。他では、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科 (約 3 ~ 9%)、サワグルミ属-クルミ属とクルミ属 (あわせて約 6 ~ 9%)、クマシデ

属—アサダ属(約6~8%)、ブナ属(約3~6%)が比較的高率であり、下部ではカキ属も1%以下で出現する。草本花粉では、イネ科が約22~34%と高率であり、カヤツリグサ科、ヨモギ属(各約2~5%)、クワ科(約2~3%)が若干目立つ。他では、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、サナエタデ節—ウナギツカミ節、アカザ科—ヒユ科、カラマツソウ属、ツリフネソウ属などが概ね1%以下で出現する。

b. 珪藻化石群集

珪藻化石は、淡水種が49分類群24属38種2亜種である。これらの珪藻化石から設定される環境指標種群は、淡水域が広域種を含め4種群である。検出された珪藻化石は3~55個体と少ないが、特徴から大きく4つの珪藻帯に区分できた。

I帯(遺構外)

検出された珪藻化石は3個体と少なく、堆積物1g中の珪藻殻数は 1.96×10^2 個と非常に少ない。このことから珪藻が生育する環境でなかったものと推定できる。

II帯(K-6, K-7)

堆積物1g中の珪藻殻数は 2.13×10^3 および 2.28×10^3 個、完形殻の出現率は約41および52%となる。このII帯からは陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* が特徴的に出現する。また中~下流性河川指標種群の *Melosira varians* と沼沢湿地付着生指標種群の *Pinnularia viridis* が随伴して産出する。これらのことから河川や沼沢湿地に近接した陸域環境であると推定できる。

III帯(K-1, 3~5)

堆積物1g中の珪藻殻数は 4.34×10^3 ~ 2.74×10^4 個である。完形殻の出現率は約16~50%となる。このIII帯からは陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys*、中~下流性河川指標種群の *Melosira varians*、沼沢湿地付着生指標種群の *Pinnularia viridis* が随伴して産出する。これらのことから河川に近接した陸域環境または沼沢湿地であると推定できる。

IV帯(K-2)

堆積物1g中の珪藻殻数は 5.87×10^3 個、完形殻の出現率は約27%となる。このIV帯からはII帯と同様に、陸域指標種群の *Hantzschia amphioxys* が特徴的に出現する。また陸域指標種群の *Pinnularia borealis* と中~下流性河川指標種群の *Melosira varians*、沼沢湿地付着生指標種群の *Pinnularia viridis* が随伴して産出する。

これらのことから河川や沼沢湿地に近接した陸域環境であると推定できる。

C. 種実群

同定できた分類群数は、木本13、草本29である。

埋土2層(T-1)

木本はクリ、モモ、サンショウ、カエデ節近似種、分類群不明の芽が出土した。草本はホタルイ属が比較的多産し、オモダカ属、ツリフネソウもやや目立った。他では、イボクサ、ミゾソバ、イシミカワ、ヤナギタデ、イヌタデ近似種、ノブドウ、メナモミが出土した。

埋土3層(T-2)

木本はオニグルミ、クワ属のみが出土した。草本はホタルイ属がやや目立ち、コムギ、ツユクサ属、イシミカワ、シロザ近似種、ツリフネソウ、ノブドウ、スズメウリが出土した。

埋土4層(T-3)

木本はオニグルミ、モモ、マタタビ、ガマズミ節、分類群不明の芽が出土した。草本はホタルイ属がやや多産し、イシミカワ、ツリフネソウ、ナスもやや目立った。他では、イネ、イヌビエ、イボクサ、ツユクサ属、カナムグラ、サナエタデ近似種、ボントクタデ、ヤナギタデ、イヌタデ近似種、ヒユ属、トウガ

ン、メロン仲間、スズメウリが出土した。

埋土5層 (T-4)

木本はオニグルミ、エノキ属、クワ属、モモ、フジ属、ブドウ属、ミズキ、分類群不明の芽が出土した。草本はホタルイ属が多産し、ツククサ属、イヌタデ近似種、シロザ近似種、ツリフネソウも比較的多産した。他では、イネ、エノコログサ属、カナムグラ、ミソソバ、イシミカワ、サナエタデ近似種、ボントクタデ、ノブドウ、イヌコウジュ属またはシソ属、ヒョウタン仲間、スズメウリ、ゴキヅルなどが出土した。

4. 小 結

珪藻化石の分析から、SD 01 は概ね陸域環境であったと考えられるが、埋土2～4層堆積時には河川に近接した沼沢湿地状であった可能性を指摘できる。

種実分析から得られた古植生は、木本は落葉広葉樹主体であり、オニグルミ、クリ、エノキ属、クワ属、サンショウ、カエデ節近似種、ミズキ、ガマズミ節が付近に生育しており、これら樹木に蔓性のフジ属、ブドウ属、マタタビや草本のカナムグラ、ノブドウが絡みついてたか。草本類についてみると、抽水ないし湿地性の分類群、つまりオモダカ属、ホタルイ属、イボクサ、ツククサ属、ミソソバ、イシミカワ、サナエタデ近似種、ボントクタデ、ヤナギタデ、ツリフネソウ、スズメウリ、ゴキヅルが目立っている。ことにホタルイ属、イシミカワ、ツリフネソウは、いずれの土層でも比較的目立っていることから、普通にみられた種類であろう。このような分類群の出土から、水位の低い水溜りのような環境が予想でき、さほどの水深はなかったのではないかとと思われる。なお、周辺には幾分乾き気味の場所もみられたと思われ、エノコログサ属、シロザ近似種、ヒユ属、メナモミなどが生育していたのであろう。

花粉化石群集の分析から、5層下部のI a帯には、コナラ亜属を主体にトチノキ属、カバノキ属、ニレ属一ケヤキ属を主要な要素とした落葉広葉樹林が成立していたと考えられる。また、クマシデ属一アサダ属、クリ属、ブナ属、ハンノキ属なども普通の要素として混じっていた。5層上部から3層のI b帯には、引き続きコナラ亜属を主体にクリ属、ブナ属を主要な要素とした落葉広葉樹林が成立しており、クリ属が林分を拡大したことが予想できる。また、クルミ属（サワグルミ属一クルミ属）、クマシデ属一アサダ属、ニレ属一ケヤキ属なども普通の要素であり、3層の段階には、針葉樹のイチイ科一イヌガヤ科一ヒノキ科も主要な要素であったのだろう。なお、I a帯の段階に主要な要素であったトチノキ属は大幅に林分を縮小し、カバノキ属も幾分林分を縮小したようである。2層～1層のII帯の段階では、コナラ亜属と共にクリ属が卓越しており、特に2層段階には、付近に相当広いクリ属の林分が成立していたと考えられる。主要な要素としては、イチイ科一イヌガヤ科一ヒノキ科、クルミ属（サワグルミ属一クルミ属）、ブナ属が生育していたであろう。なお、草本類については、各花粉帯で大きな変化はみられず、いずれもイネ科が高率であり、オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属などの抽水植物が随伴する。このことから、水位の低い湿地ないし水溜りのような環境として存続しており、さほど水深はなかったものと考えられる。また出土した化石で、栽培植物と考えられるものは、モモ、イネ、コムギ、ナス、トウガン、メロン仲間、ヒョウタン仲間であり、イヌコウジュ属またはシソ属もその可能性がある。

引用・参考文献

- 藤下典之 1984 出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法。
古文化財に関する保存科学と人文自然科学—総括報告書, pp. 638-654, 同朋社。
安藤一男 1990 淡水産珪藻に関する環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 東北地理, 42, 73-88。



出たした大型植物化石 (スケー441~3, 5~7が1cm, 4, 8~16が1mm)

1. オニグルミ, 核, T2 2. オニグルミ, 核, T3 3. クリ, 果実, T1 4. エノキ属, 核, T4 5. 6. モモ, 核, T1 7. モモ, 核, T4 8. サンショウ, 種子, T1 9. ツトウ属, 種子, T4 10. マナヅク, 種子, T3 11. オモダシ属, 果実, T1 12. イモ, 炭化胚乳, T3 13. コムギ, 炭化胚乳, T2 14. イヌビエ, 穂, T3 15. エノコログサ属, 穂, T4 16. ホナグルミ, 果実, T4

出たした大型植物化石 (スケー441~12, 14~17が1mm, 13が1cm)

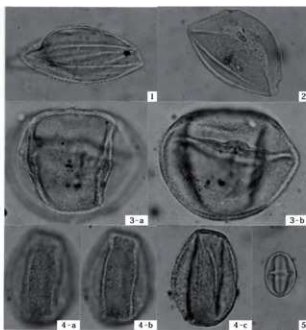
1. イボクサ, 種子, T1 2. ツクサ属, 種子, T4 3. カナムグラ, 種子, T4 4. ミソソバ, 果実, T1 5. イシヒカワ, 果実, T3 7. シロツメクサ属, 種子, T4 8. ヒコ属, 種子, T3 9. ササネソコ, 穂, T4 10. ノボドウ, 種子, T4 11. イヌコログサ属またはシソ属, 果実, T4 12. ナス, 種子, T3 13. トウガン, 種子, T3 14. メロン仲間, 種子, T3 15. ヒョウタン仲間, 種子, T4 16. スズメウリ, 種子, T4 17. メナモミ, 果実, T1

分類群・部位/試料名・層位	T-1	T-2	T-3	T-4
	2層	3層	4層	5層
オニグルミ	核		(1)	(3)
クリ	果実	(2)		
エノキ属	核			(1)
クワ属	種子		1	1
モモ	核	2	(1)	1
ツツ属	穂			1
サンショウ	種子	1		
カエデ類近縁種	果実	1		
ツトウ属	種子			(1)
マタタビ	種子		1	
ミズキ	核			(1)
ガマズミ属ガマズミ節	核		1	
不明	芽	(1)	2(2)	7(4)
オモダシ属	果実	4	1	
イモ	炭化胚乳		4	(1)
コムギ	炭化胚乳		1	
イヌビエ	穂		1	
エノコログサ属	穂			1
カヤツリグサ属	果実			1
ホタルイ属	果実	14(2)	7	11(1)
イボクサ	種子	1		1
ツクサ属	種子		1	1
カナムグラ	種子			1
ミソソバ	果実	3		1
イシヒカワ	果実	(2)	(4)	1(3)
ササネソコ近縁種	果実			1
ノボドウ	種子			1
トウガン	種子		2	1
ヤナギタデ	果実	1	1	
イヌタデ近縁種	果実	2	2	13(1)
シロザ近縁種	種子		1	8
ヒコ属	種子			1
ナデシコ科	種子			1
ツリフネソウ	種子	5(3)	1	3(3)
ノボドウ	種子	(1)	1	19(11)
イヌコログサ属またはシソ属	果実			3
ナス	種子		4	2
トウガン	種子		2	
メロン仲間	種子		1	
ヒョウタン仲間	種子			(1)
スズメウリ	種子		1	1
コキヅル	種子			(2)
メナモミ	果実	1		

数字は個数、○内は検出の数を示す

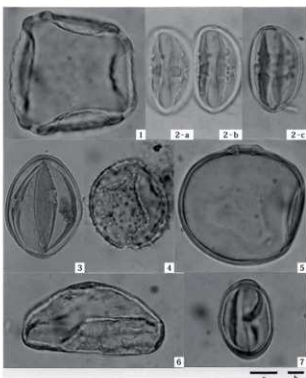
第 601 図 SD01 の大型植物化石写真と数量

第3章 発掘調査の概要



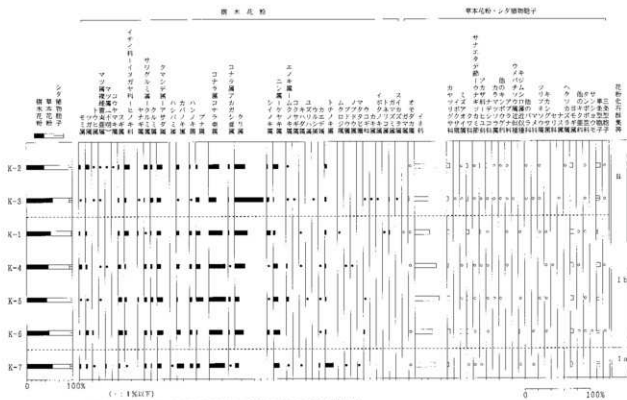
産出した花粉化石 (scale bar: 10µm)

1. イネイ科-イネ科イ科-ヒノ科, K-2, PALMN 1736
2. クマシロ科-アサギ科, K-10, PALMN 1745
3. アサギ科, K-11, PALMN 1746
4. コナラ科-ナナハコ科, K-8, PALMN 1743
5. ナナハコ科, K-3, PALMN 1737



産出した花粉化石 (scale bar: 10 µ m a: 1, 2, 4-7 b: 3)

1. ニレ科-ナナハコ科, K-6, PALMN 1741
2. ナナハコ科, K-10, PALMN 1744
3. ナナハコ科, K-3, PALMN 1739
4. ナナハコ科, K-3, PALMN 1738
5. イネ科, K-3, PALMN 1735
6. ヒメアオイ科, K-2, PALMN 1742
7. ナナハコ科, K-4, PALMN 1740



(樹木花粉は顕微鏡観察, 草本花粉・種子は顕微鏡・電子顕微鏡として百分率で算出した)

(K-2: 1層, K-3: 2層, K-1: 3層, K-4: 4層下部, K-5: 4層上部, K-6: 5層上部, K-7: 5層下部)

第 602 図 SD 01 の花粉化石写真と数量

出土地区	出土層名	取上げ No	種名	部位名	備考	R/L	U/L	歯	状態	c	ph	dh	pe	ps	s	ds	de
X-1		No 1	ウマ	脛骨		r			f			1					
X-1		1	ウマ	中足骨		l			f				1	1	1		
		2	ウマ	歯 P2		l	l	1	f								

第 187 表 社宮司遺跡獣骨一覧表 (SD 01)

ウマ



左中手骨 X03 解不明

第 603 図 社宮司遺跡獣骨写真 (SD 01)



社宮司遺跡出土の曲物類



社宮司遺跡出土の下駄

3号溝跡（第604図～第607図）

時 期： 東西流路（古期は8世紀後半～9世紀終末古代4期～8期、新时期は古代6期～8期）
 南北流路（8世紀後半～9世紀前半古代4期～6期）

長軸方向： 東西流路 E-1.5°-N 南北流路 N-6.5°-W

位 置： IXD-8, 9, 11～15, 17, 20区、VIIIY-21, 22区
 IXE-1, 2, 6, 7, 11～13, 16～18区

規 模： 東西流路・長さ58m、幅4m50cm、深さ84cm 性 格： 区画溝
 南北流路・長さ28m（推定51m）、幅2m80cm、深さ73cm

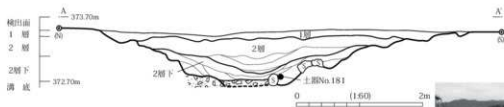
断面形態： 東西流路古期は上部アサゴオ形に開くタライ状（第604図A-A'）、新时期はタライ状（第605図B-B'）、南北流路はタライ状（第606図D-D'）。

壁の立ち上がり： 東西流路古期A-A'は44度、新时期B-B'は54度、南北流路D-D'は46度。

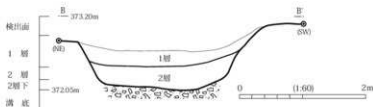
埋土堆積： 大別して2層ある。1層暗褐色シルト質粘土（7.5YR3/3）、2層暗緑灰色粘質土（10GY3/1）から緑黒色粘質土（10GY2/1）。粘性非常に強く、φ2mmの炭化物粒子を多く含む。東西と南北流路の合流点では、2層が含有物により、2aから2cに区別できた。

重複遺構： SD 53とSD 84、SD 76を破壊し、あるいは重なる。SD 56に壊される。

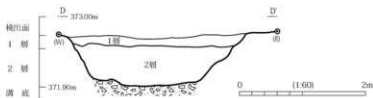
検出経過： 黄褐色砂礫層上面にて溝跡の落ち込みを検出した。E-2区及びE-7区周辺では南北方向に、D-12区及びD-13区では東西方向に伸びていた。E-11区からE-17区にかけての落ち込みは広がり、幅10mほどに達したため、凹地あるいは沼等の湿地状を想定した。掘削の結果、南北方向の流路と東西方向の流路、その合流点としての深み、さらには、D-20区にてL字形に屈曲して東西の流路と合流する別の東西方向の溝を確認した。東西の大溝埋土中には、バスケットボール大の礫が南岸側を中心に大量に出土した。L字の溝では北岸側を中心にソフトボール大の礫が大量に出土し、溝底には杭が列状をなして打ち込まれていた。六角木桶の出土地点は、合流点の深みの上層部分である。



第604図 東西古期流路の南北セクション（A-A'）



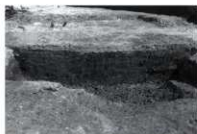
第605図 東西新时期流路の南北セクション（B-B'）



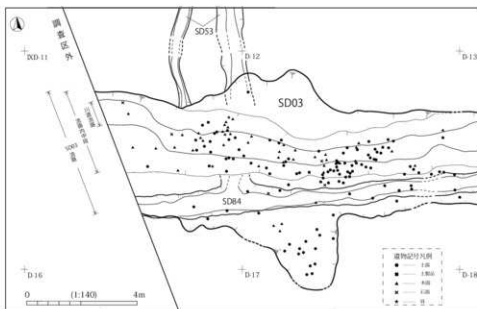
第606図 南北流路の東西セクション（D-D'）



A-A' 堆積土層



D-D' 堆積土層



調査風景 1



調査風景 2



獣骨出土状態



土器 No288 出土状態



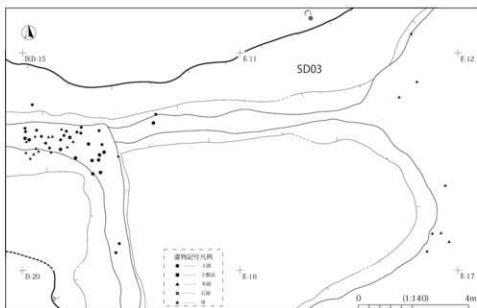
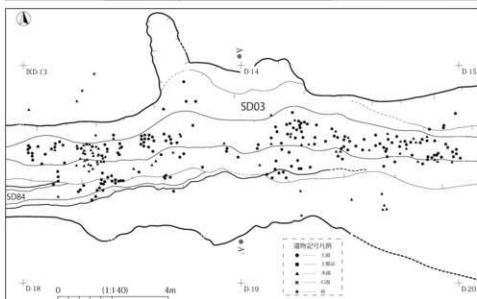
木製品出土状態



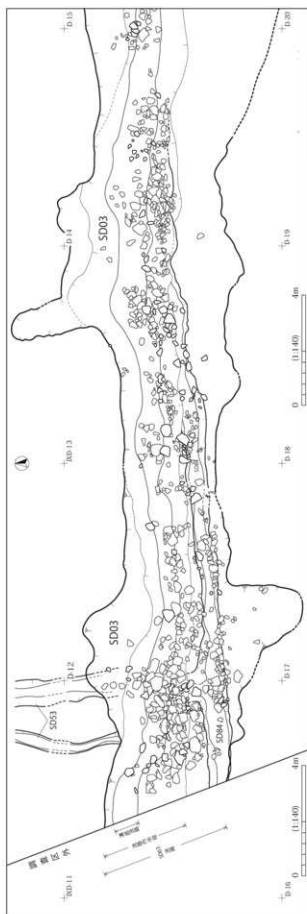
木製品 No28 出土状態



木製品 No186 出土状態



第 607 図 SD 03 東西流路 (古期流路) の遺物出土分布



第608図 SD03東西流路(古新流路)の掘出土分布



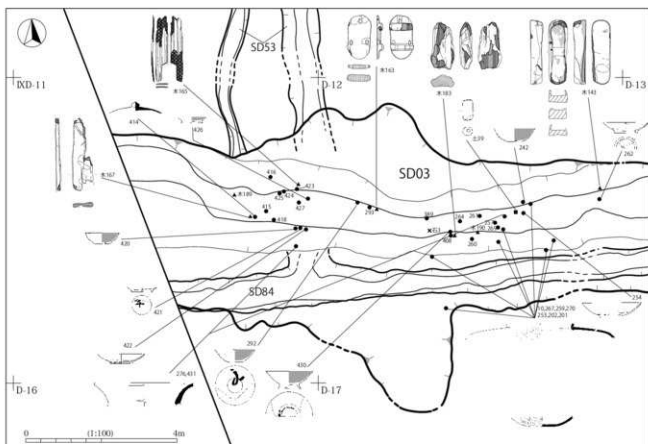
掘出土状態(北から)



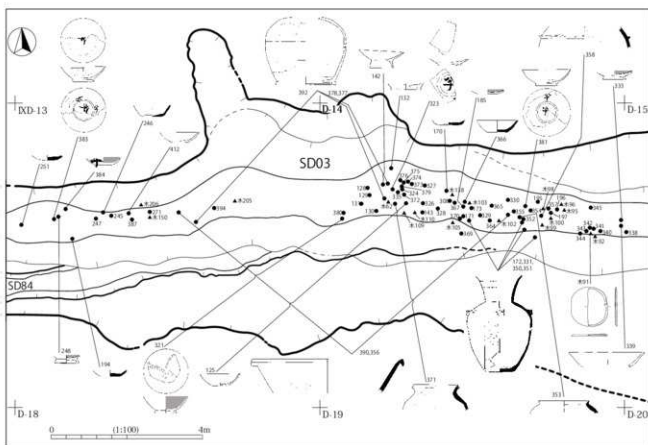
掘出土状態(東から)



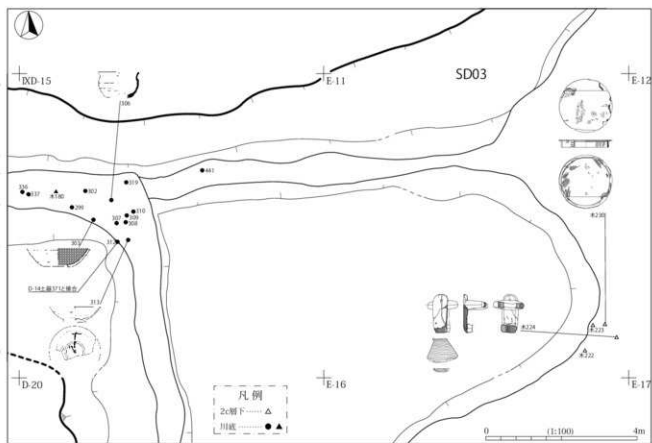
D-12・13区掘出土状態(西から)



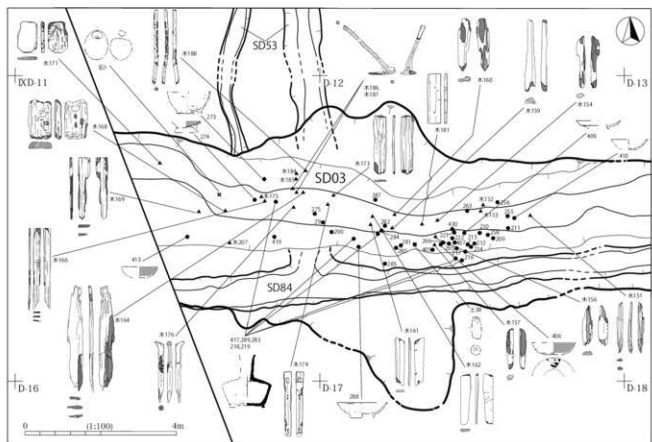
第 609 図 溝底の遺物出土分布 (D-11・12 区)



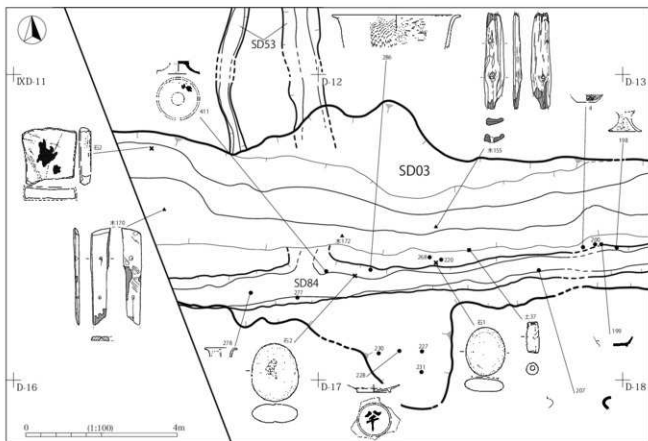
第 610 図 溝底の遺物出土分布 (D-13・14 区)



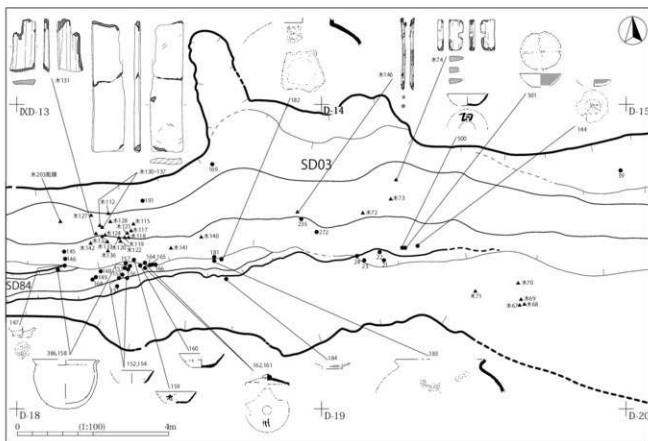
第 611 図 溝底の遺物出土分布 (D-15, E-11 区)



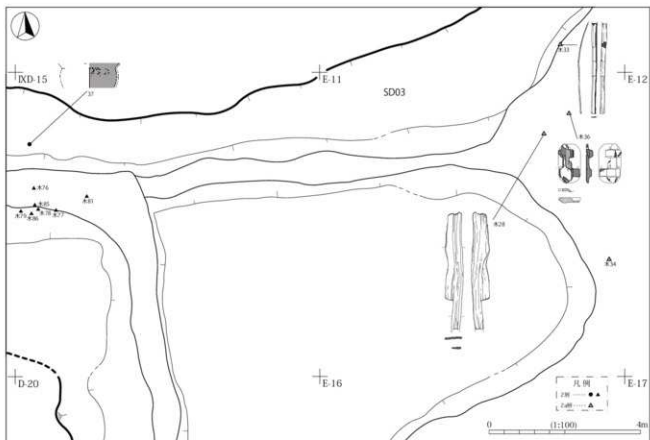
第 612 図 2層下の遺物出土分布 (D-11・12 区)



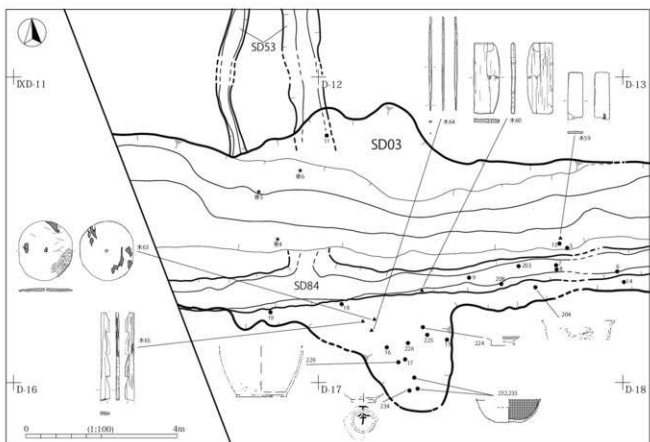
第 615 図 2 層の遺物出土分布 (D-11・12 区)



第 616 図 2 層の遺物出土分布 (D-13・14 区)



第 617 図 2 層の遺物出土分布 (D-15, E-11 区)



第 618 図 1 層～検出面の遺物出土分布 (D-11・D-12 区)

出土遺物の概要：

東西流路（古期流路）、D-11, 12, 13, 14, 15区、E-11区

溝底出土の資料（第619図～第624図）

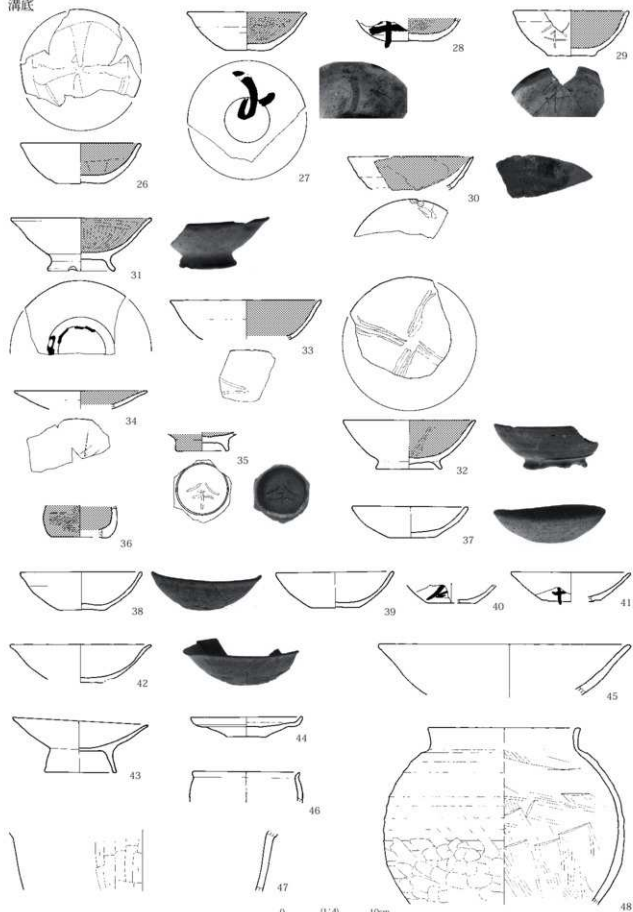
1から20は須恵器。1から7が杯形土器A類。1はD-13区No246のヘラ切り離し手法で、手持ちケズリ後にナデ調整。底部丸底形態。口唇部直下は幅1.0cmで丁寧にナデ調整され、使用結果であるうか磨耗しツルツルする。口径11.6cm、器高3.7cmを測る。2（D-14区No366）と3（D-12区）は糸切り離し手法により、口縁部はやや朝顔状に開く器形。2は糸切り後、幅2.0cmほどのヘラ状工具でおこした痕跡がある。口径12.7cm、底部内径6.5cm、外径7.0cmを測り、古式の部類に属すか。3は内面丁寧にナデ調整し、体部と底部の境は明瞭である。口径13.0cm。D-12区出土。4から7は、いずれも墨書のある破片。4は口縁部に筆幅0.6cmの墨書「□」があるが、破片で判読できない。D-14区出土。5はD-14区出土で、筆幅0.15cmの細字で、「音？」が正位に書かれる。6はD-15区出土の糸切り底の破片。筆幅0.15cmで「主」の一字が判読できる。「坂主」であろうか。7は静止糸切り離し手法により、体部下半に筆幅0.3cmで一筆「□」のみ判読できる。8と9は蓋B類。8はD-11区の3片（本体）とD-14区の2片が接合した資料。つまみ部は欠失するが平らなボタン状で、かえし部は直に立つ。体部外面2/3程度ケズリ調整し、凹凸のあるロクロ目を残す。径は14.0cm。9はD-11区No414（本体）と、D-12区2層とD-13区2層下の小破片が接合した資料。つまみ部は小さく宝珠形を呈し、体部1/3程度がケズリ調整される。10～12はD-14区出土の杯形土器B類。10は高台径6.0cmほどの小型品、外接高台。11は高台径8.0cmの中型品、底部回転ケズリ調整。高台は平接地。12は口径18.6cm、器高6.7cmを測る大型品で、口縁はやや外に開く形態。高台は平接地で、内面は布状の用具でナデ調整される。13～20は甕形及び壺形土器。13は口縁部緩く屈曲し、体部のやや張る甕E類。底部はヘラ切り離し調整。器高7.0cmほどで、鉢に近い。D-15区No306。14は短頸壺D類2/3個体。底部は糸切り離し調整で、外面は回転ナデ調整。口唇部は面取りされる。口縁から肩部にかけて自然釉がかかる。D-11区溝底例とD-12区2層及び2層下、D-14区溝底とD-15区が接合関係にある。15は口縁が直行して立ち上がる短頸壺の口縁部小破片。図では表現されていないが、口唇部はやや角頭状に面取りされる。D-14区No353。16は短頸壺D類の口縁部破片。体部は板状工具による叩き締め後、回転ナデ調整される。口唇部は面取りされ「く」の字状断面となる。D-14区No371とD-15区No312の接合例。特定産地の土器であろうか。17はD-14区No358Aで、突帯を境に上部・下半ともにナデ調整される。突帯付き四耳壺の体部破片であろうか。18はD-11・12区No276・No431甕C類の口縁部破片。口唇部は外削ぎ状にナデ成形され、口縁部全体はヨコナデ調整。肩部との括れ部分には漆状の付着物が内外面に付着し、破損部分にも一部にかかることから、欠損後の付着となる。19は大甕A類の口縁部破片。D-14区No356とD-12区2層下、D-13区No3902層下、D-12区2層下の出土資料に同一個体がある。20は長頸壺の頸部破片。口唇部外削ぎ状に立ち上がる。21～36は黒色土器。21～30は杯形土器A類。21はD-11区No420の1/2個体。体部の張る形態で、口唇直下は強くナデ成形される。口径11.0cm、器高3.4cmを測り、内面に「漆紙」が付着する。大半は欠落し、残存部は僅かだが、大きな部分で2.5cm×0.8cmの断片がある。詳細は639ページに記す。22は底部付近を強くナデ成形し、底部凸形に出る形態。口径12.5cm、底径5.1cmを測る。D-12区No242。23は底部糸切り離し調整で、体部の張る椀形。ほぼ完形で、口径12.6cm、底径6.0cmを測り、器壁は厚い。内面はタスキ状の暗文様のミガキが微かに観察できる。D-14区出土。24はD-15区出土の杯A類もしくは鉢形土器の体部。内面のミガキは良好で、底部外面はケズリ調整される。25はD-14区出土の口縁部破片。口径12.0cmを測り、口縁部の内外に幅1.5cmほどの「漆状」付着物がべつとりと付く。26は口縁部緩やかに立ち



第619回 溝底の出土遺物1 (土器)

あがる器形で、内面にタスキ掛け状の暗文様ミガキと口縁に併行に横方向のミガキが施される。口径12.3cm、底径5.0cmを測る。外面の風化は著しい。27はD-12区No292で、口縁直下に1.0cmほどの強い横ナデのある形態。底部が小さく糸切り離し調整。体部外面に正位で「夙」の字が書かれる。筆幅0.6cmと太く、一画は上に向かってはねる。28はD-13区No384の底部で、底径5.0cm、糸切り離し後ナデ調整。体部には正位に墨書「八千」が、筆幅0.5cmのしっかりした筆運びで書かれる。29はD-15区出土の1/3個体。底部は糸切り離し調整で凸形、体部の張り出す形態。口径12.0cm、底径4.8cm。内面は放射状にミガキ調整される。体部正位に「八千」の焼成前刻書が2箇所確認できる。幅0.2cmのしっかりした刻書。30はD-14区出土で、口径13.0cmを測る。外面にはロクロ成形痕を明瞭に留め、「漆状」の付着物が外面広範囲に、内面には細い帯状に付着する。31～33は椀形土器。31はD-12区No430で、体部やや張り、口縁部が緩く外反する形態。口径14.0cm、高台径7.0cmを測る。内面は放射状に、口縁部は横方向に良好なミガキ調整が施される。高台内面には「漆状」付着物がある。32はD-14区No321で、2/3程度の個体。体部緩やかに開く形態で、口径14.0cm、高台径7.0cm。内面はタスキ状の暗文様ミガキが入る。33はD-14区出土の椀口縁部破片で、体部には正位に「八千」の焼成前刻書がある。34はD-14区出土の皿B類の口縁部破片。椀のように凶化されているが、緩やかに開く浅い皿状の皿である。推定口径16.0cmを測る。体部倒位に焼成後刻書「八千」が書かれる。0.1cm内の鋭い金属製刃物で刻書される。35はD-14区出土の黒色土器Bの皿高台部。高台内の底部に焼成前刻書「八千」がある。「千」の第一画は左から右に逆に書かれる。36は黒色土器Bの小型瓶の体部破片。内外面良好にミガキ調整される。37～48は土師器。37から41は杯A類。37はD-13区No412で、ほぼ完形の個体。口径12.0cm、底径5.0cm弱。38もほぼ同法量の1/2個体。39はD-14区No125の生焼けの完形個体。口径12.0cm、底径5.0cmを測る。40は底部破片で体部外面に墨書「□」があるが欠失大きく、判読できない。41はD-13区出土で、口径12.0cm、底部5.5cmと広い底。体部外面に正位で「八千」の墨書がある。42はD-14区の椀形土器で、口縁は緩やかに開く形態で、口径14.0cm、高台部分を欠損する。43は土師器盤B類のほぼ完形の個体。皿部は大きく開き、口径14.0cm強。高台は垂直に近く立つ形態で、高さ2.5cmを測る。高台内には黒色処理？される。D-14区No142。44はD-15区出土の皿A類で、口縁部屈曲し立ち上がる。黒色土器Aの形態である。口径11.0cm、底径4.5cm、器高2.1cmを測る。45はD-14区No339で、土師器盤A類の口縁部破片。46はD-14区出土の短頸壺の口縁部破片。口縁の高さ0.2cm、内外面良好にナデ調整される。47はD-14区出土の土師器甕H類の体部破片。長胴の甕で、縦方向にケズリ成形が施される。48は土師器の壺。口縁部は直に立ち上がり、体部は球胴に張る。体部上半はロクロ成形痕を留め、下半部は斜め方向にケズリ成形される。D-14区No349。49～68は灰釉陶器。49から55、61～68は椀形土器。49は1/3個体。口縁緩やかに開く器形で、高台は貼り付けで三日月形。口唇緩く折り返す。刷毛塗り施軸。D-13区出土、口径16.4cm。50は体部やや張りのある形態で、E-11区出土。51はD-14区出土の1/3個体。口縁上部が屈曲して立ち上がる形態で、口唇緩やかに外反する。刷毛塗り手法で光ヶ丘1号窯式。口径14.8cm、高台径5.6cm、器高4.3cm。52はD-13区、口径9.4cm、器高3.3cm、高台径3.8cmの小椀。口唇緩く外反し、高台はやや直立気味。53はD-14区出土で、50と同様な作りの椀1/5個体。口径17.6cm、高台径7.4cm。54はD-14区出土、推定口径15.6cmを測る深椀の口縁部破片。口唇玉縁状に折り返す。刷毛塗り施軸。55は口径20.7cmを測る椀1/3個体。口唇玉縁状に折り返し、刷毛塗り施軸。高台部欠失するが、底部に墨痕がかすかに観察できる。D-12区No254。56はD-11区No422の皿2/3個体。低い貼り付け高台で、口唇緩やかに折り返すが、やや角頭状を呈する。口径14.6cm、器高3.0cm、高台径7.0cm。刷毛塗り施軸。57はD-14区の皿1/5個体。やや低い貼り付け高台で、口唇緩やかに折り返す。口径16.6cm、器高3.3cm、

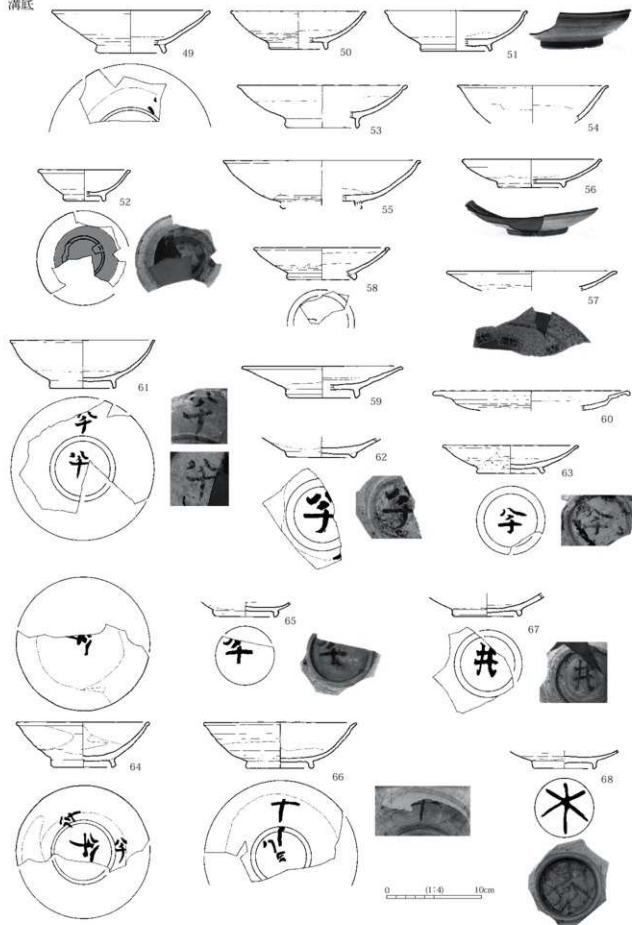
溝底



第620回 溝底の出土遺物2 (土器)

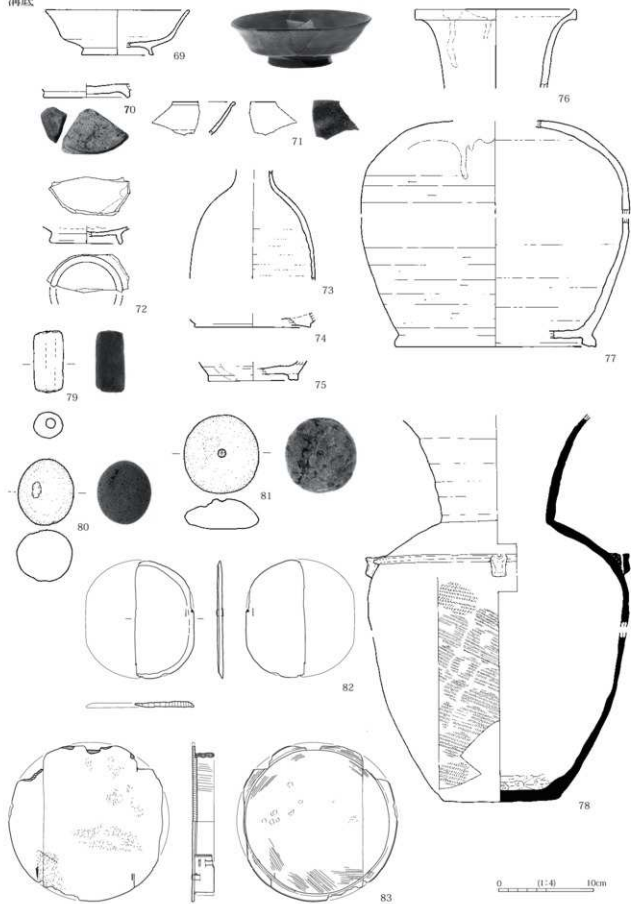
高台径 7.0cm。刷毛塗り施軸。58はD-12区 No262の皿 2/3 個体。大部分は2層下出土土器と接合関係にある。高台部は低く、丸みを帯びて外側に張り出す形態で、口唇はやや折り返し風となる。内面に墨汁痕が、高台内には墨書「□」が観察できる。59はD-13区出土の段皿。高台内に墨書「□」がある。60はD-14区の段皿の口縁部破片。推定口径 20.2cm を測る。口唇は下方向に折れ曲がる形態。刷毛塗り手法。61はD-14区 No381とD-11区・12区2層下、E-16区2層下との接合資料の椀 2/3 個体。口径 15.2cm、器高 5.1cm、高台径 7.0cm を測る。体部と高台内に「八千」の墨書がある。62はD-14区 No323の皿または椀の底部。底部ケズリ成形後に高台貼り付け、高台は低くぼってりし、施軸は刷毛塗り手法。内面には墨汁痕が明瞭で、体部及び高台内に墨書がある。底部は「八千」と判読でき、筆幅 0.5cm ほどの太字で力強く書かれる。63は皿 2/3 個体。高台は丸みがあり、外側に張り出す形態。口唇玉縁状で、刷毛塗り手法。高台内に「八千」の墨書がある。筆幅 0.3cm のしっかりした筆運びで、「千」の三画目ははねる書き風である。口径 14.0cm、器高 3.0cm、高台径 6.8cm。64はD-13区 No383で椀の 1/2 個体。口径 13.8cm、器高 4.8cm、高台径 6.2cm、口唇部玉縁状に折り返し、刷毛塗り施軸。内面と高台内の各 1 箇所、体部外面に 2 箇所（本来は 4 箇所か）の墨書がある。いずれも「八千」。「千」の三画目ははらう書き風が特徴。65は椀もしくは皿の底部。D-11区 No421。内面は極度に磨耗しツルツル、部分的に朱墨痕を確認できる。高台内には、墨書「八千」がある。筆幅 0.3cm、ややかすれた筆運びである。66はD-15区 No313の椀 1/2 個。口径 15.9cm、器高 4.9cm、高台径 6.9cm を測る。内面墨汁痕が、体部外面に「八千」の墨書がある。筆幅 0.3cm。67はD-14区出土の椀底部。高台内に墨書「井」が筆幅 0.3cm で書かれる。三画と四画は跳ね上げる書き風である。68はD-15区出土、皿の底部破片で、高台内にタスキ掛け状の墨書がある。筆幅 0.5cm。施軸は刷毛塗りか。意図的に体部を破損させたような剝離痕跡があり、高台内部には「イオウ状」の付着物がある。内面の一部に朱墨痕が観察でき、転用碗であろうか。9世紀の光ヶ丘 1号窯式。69と70は緑釉陶器。69はD-13区及びD-14区溝底、D-15区2層下との接合ほぼ完形資料。体部半ばで屈折して立ち上がる稜椀。口径 15.0cm、器高 4.8cm、高台径 7.0cm を測る。70は高台径 10.0cm を測る皿の底部か。D-14区とD-15区の溝底とD-13区検出而出土資料の接合例。全体は風化し施軸は剝落している。高台は先端部の尖る形態。71～77は灰釉陶器。71はD-14区出土の灰釉陶器椀の口縁部破片で、内面に金属光沢（いぶし銀色）が釉薬のようにかかる。その由来は不明だが、1点のみ出土している。72はD-14区の椀底部。内面には墨汁痕が観察できる。1.0cm を超える高い高台で、高台内には朱墨痕跡がある。73はD-12区とD-14区溝底、D-15区溝底、E-16区2層下の接合資料。瓶の体部破片。74はD-13区出土の灰釉瓶の底部破片。75はD-14区 No132の長頸壺または瓶類の底部。高台部は箱形に作りだし、内外面に施軸される。76はD-15区出土の広口壺の頸部。D-14区 1片とD-20区 2片、E-12区 1片が接合する。いずれも溝底出土資料。77はD-13区 No392とD-14区 No377の接合資料で、短頸壺の体部破片。D-14区 No378とD-20区 2層 4片、D-12区 2層下 1片とD-13区 2層下 1片、SB 01Pit1 及び埋土 2片（1点は口縁部）が接合関係にある。78はD-14区 No172とNo331、No350、No351の接合資料で、甕D類のほぼ完形の個体。79はD-12区 No39の土鍾。長さ 6.5cm、径 3.1cm、重さ 57.9g を量る。80はD-11区出土の敲石。安山岩材で、6.7 × 5.8 × 5.4、258.4g。81はD-15区出土の石製品。砂岩材、8.3 × 7.9 × 3.2cm、243.9g。表面に穿孔途中の穴があり、回転穿孔で直径 0.8cm、深さ 0.4cm を測る。以上のほか、D-14区から黒色土器B類杯Aの口縁部 1片、黒色土器A類の杯A口縁部破片 2片と体部破片 1片に「漆状」付着物を確認できた。また須恵器杯A類の口縁部破片 1片に墨書がある。幅 0.6cm で、文字の断片のみ観察できる。これらの内、黒色土器A類 1片に小破片ながら、極く小片の漆色の付着が観察できた。紙片は 1.5cm × 0.6cm の大きさである。詳しくは 637～645 ページ。D-13区から灰釉陶器椀

溝底

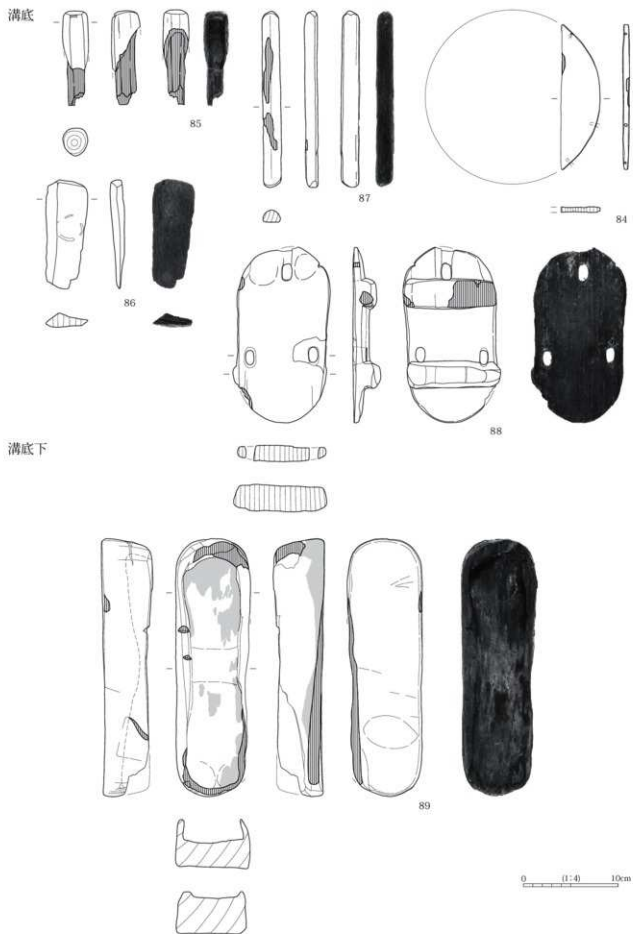


第621図 溝底の出土遺物3 (土器)

溝底

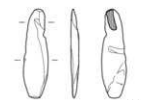


第622図 溝底の出土遺物4（土器・石器ほか）



第623図 溝底の出土遺物5 (木製品)

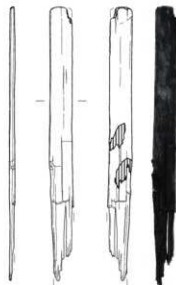
溝底



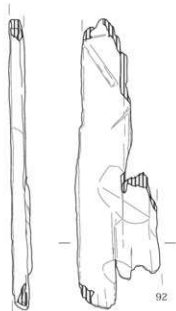
90



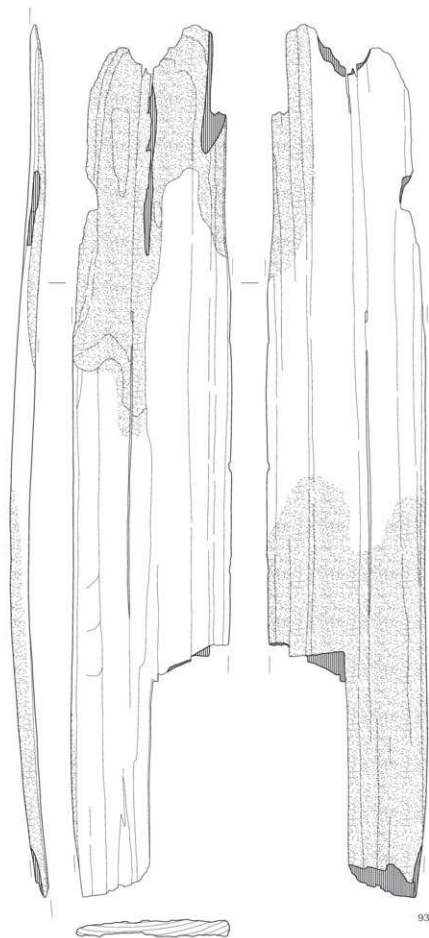
91



92



93



93

第624図 溝底の出土遺物6 (木製品)

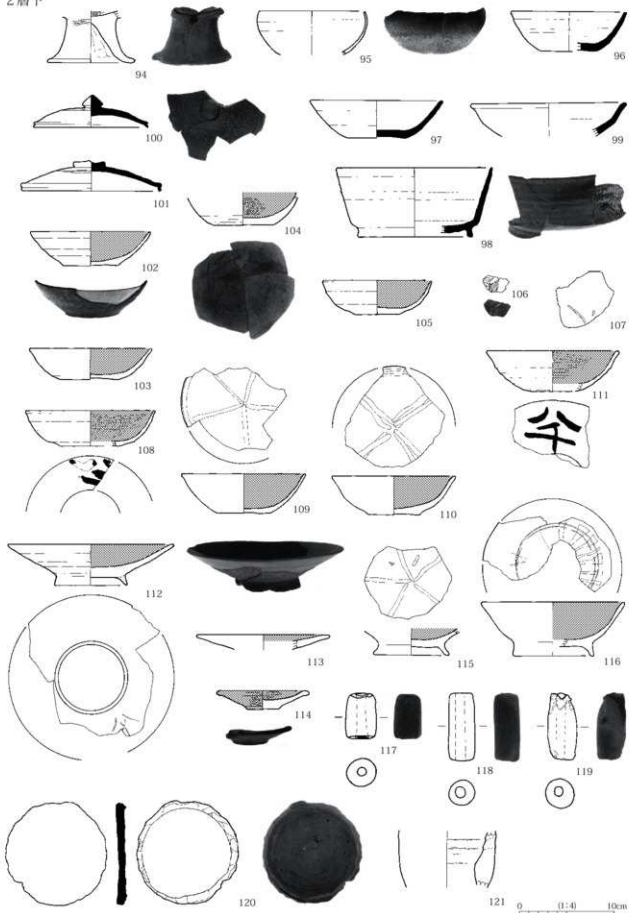
0 (1:4) 10cm

の底部破片1片があり、高台内に墨書「八千カ」がある。欠損し、「千」の字のみ確認できた。筆幅0.4cm。D-15区から灰釉陶器椀の底部破片2片に、内面および高台内に墨汁痕跡を確認した。D-15区の須恵器杯A類底部破片は、回転糸切り離し手法で、推定底径6.0cmを測る。底部に「坂主カ」の墨書2字目が観察できる。筆幅0.2cm弱の極細の達筆。D-14区の須恵器杯A類は推定口径13.0cmを測り、体部外面に正位に2字が墨書される。筆幅0.2cm弱の達筆。「若□カ」。82～93は木製品。82～84は曲物。82はD-14区No91の柵目材で、樹種はサワラ。1/2程度残る。周縁に段を有し磨耗する。他の曲物に比べ小さい。83はE-11区No230。84はD-15区出土の底板部分。85はD-13区出土の柄。丸木の芯持ち材。アサダ。生活用具の柄か。一端は欠損。角状に削り出される。漆が付着するか。86はD-13区出土の割材。板目。クリ。加工材の割材。面と面の角度が120度であることから、六角木軸の木片とも考えたが、比較検討の結果、別物と判断した資料である。浅く直径2.0cm前後の円が見える。87もD-14区出土の柄か。削出材でヒノキ科。断面形状は半楕円形状。両端形状は、対称に半円形を作る。D-14区出土。88はD-12区No163の下駄。追柵目のヒノキ科。ほぼ完形。左足用。前孔が中心部よりやや右より。指の圧痕のためか、やや表面がつぶれる。緒の孔は長軸2.0cm、短軸1.0cmの楕円状の孔である。前後ともに歯の前にあけられる。歯は台形状で下駄板から、ややせりだす。89はD-12区No143の靴状木製品。縦木取り、広葉樹か。表は中心部が盛り上がり、両端にいくにつれて、しだいに深く削られる。底部は平滑に加工される。側面には2.0cm前後の刃痕（チョウナカ）が残る。90～93は板状木製品。90はD-11区出土で、追柵目、オニグルミ。靴筒状の形態。左下側面は裏面より加工を施し鋭角の縁とする。右側面中央は表より加工し、鋭角とする。上部には刃痕があり、幅が狭まっている。柄とも考えられるか。一木製品。91はD-11区出土の柵目材でヒノキ科。板状。一端が欠損。一端角を円く落す。表面は削りか。その形状から、木簡の可能性も考えられる。92はD-11区の板目材でモミ属。施設部材の破材、斧痕跡あり、製材板の破材。93はD-11区出土の板目材でモミ属。壁板などの構造部材の一部であろうか。部分的に炭化する。この他、D-11区及びD-14区より磨石各1点の出土がある。

2層下から溝底出土の資料（第625図～第631図）

94と95は非ロクロ土師器。94はD-12区出土の高杯脚部。脚部高は低く、外面縦ナデ後に横ナデ調整。95は杯C類もしくはD類の1/2個体。口縁内湾する鉢形。底部は丸底となるか。96～101は須恵器。96は杯A類。推定口径14.0cmを測り、糸切り離し調整。D-14区出土。97は杯A類で口径13.9cm、底径6.0cm。回転糸切り離し調整。D-12区出土。底部内面は使用によるものか、ツルツルする。98はD-13区出土の杯B類Ⅲ類1/2個体。口径16.2cm、器高7.4cm、高台径11.8cmを測る。高台端部外反し、口縁部は垂直に近く立ち上がる形態。D-12区2層下と接合関係がある。99はD-13区の盤類の口縁部破片。100は蓋の2/3個体、口径12.0cm。つまみ部は宝珠状で、かえしは外反、外面には沈線状に凹線がある。体部外面1/2程度ケズリ調整。D-12区2層下から出土し、D-13区及び14区溝底資料と接合関係にある。むしろ溝底の扱いであろう。101はD-12区の蓋形土器で、径14.5cmを測る。つまみ部はボタン状で体部1/2程度ケズリ調整。かえしは垂下し端部は外反。D-12区とD-13区の2層下、さらにはD-14区溝底の接合資料。第626図137はD-13区No176と14区出土の短頸壺の底部。底部やや丸底風に成形し、下部はケズリ調整、上半部は横ナデ調整。138は須恵器甕形土器C類の1/3個体。口唇断面凸状にナデられ、体部は横ナデ整形。D-12区2層下と2層、D-13区及び14区2層、D-20区2層下とE-17区2層の接合資料。139はD-13区No432の甕C類口縁部破片。外面は板布巻き工具の横位叩き締めがある。淡い灰褐色。140は甕の体部下半の資料。D-14区出土。141は甕E類の口縁部破片。外面は板状工具による横位叩き締め、内面の当て具痕は直径3.5cmほどで、年輪は観察できない。142はD-12区とD-14区

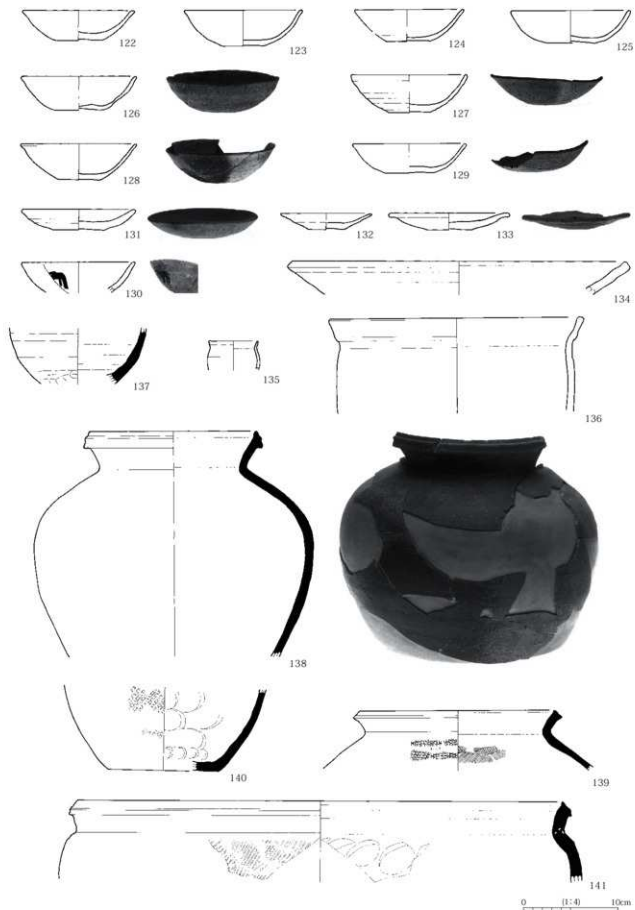
2層下



第625図 2層下の出土遺物1 (土器・土製品)

の接合資料の裏D類。四耳壺の体部破片で、耳部は粘土貼り付けのみの簡略化した形態である。外面は横ナデ調整の後、板状工具による叩き締め。143はD-13区No205、長頸壺の頸部。口唇部は鋭くつまみ上げる形態。102～116は黒色土器A類。102から111は杯A類。102は口縁緩やかに直立する形態。口径13.0cm、底径5.5cm。D-12区出土。103は底部から口縁部にかけて緩やかに開く形態で、回転糸切り難し後にナデ調整。口径12.5cm、底径5.5cmを推定。D-13区出土。104は底部ケズリ整形する杯。内面は極めて細かな縦方向のミガキ調整が施される。D-13区出土。105は体部のやや張り出す形態で、内面は良好にミガキ調整される。底部は糸切り難しで、三角刻目が入る。口径11.4cm、底径5.0cm。D-11区No413。106はD-12区出土の体部小破片。内面に木の葉形の暗文様ミガキが入る。107はD-15区出土の体部破片で、焼成前刻書「八」がある。「八千」であろうか。108はD-12区No406で、口唇直下を1.0cm幅で強くナデ調整し、底部付近もナデ調整により凸状に張り出す形態。内面良好にミガキ調整される。体部外面に正位に「八千」が墨書される。109は内面タスキ掛け状に、口唇近くは横方向にミガキ調整が施される。口径13.0cm、底径5.0cmを測る。D-13区No206。110はD-13区No192で、109とほぼ同様な調整方法で作られる。111はD-14区No325で、108とほぼ同形態。口径13.8cm、底径4.8cmを測る。体部外面に正位に「八千」の墨書がある。筆幅は太く0.6cmあり、力強い。112は皿のほぼ完形。口径17.2cm、器高4.4cm、高台径7.5cm。体部外面に倒位で、「八千」の刻書がある。幅0.1cm以内の鋭い金属製工具で焼成後に刻書する。D-12区出土。113は皿の口縁部破片。内外面ともに丁寧な調整。口径13.8cm。D-13区出土。114は黒色土器B類の皿1/2個体。D-12区出土。口径9.0cm、器高2.0cm、底径3.2cmを測る。口唇やや肥厚し緩く外反、内外面良好にミガキ調整する。115はD-13区No178の椀底部。内面に放射状の暗文様ミガキがある。116はD-13区No363の椀1/3個体。口径14.8cm、高台径8.0cmを測る。内面に沈線が2本入り、放射状の暗文様のミガキが入る。117から119は土鍾。117はD-14区埋土中の遺物で、長さ4.7cm、径3.2cm、48.5g、118はD-15区No8で、2層下出土。長さ7.1cm、径2.8cm、56.0g、119はD-12区No38で2層下出土。長さ7.0cm、径3.0cm、67.3gを量る。120はD-15区No440の須恵器杯B類の底部で、高台部及び底部周辺を縁に沿って意識的に打ち欠いた資料。一見、転用硯と考えられるが、磨耗面に堅著な使用は認められない。121はD-14区出土の輪積み痕跡を留めた土管状の資料。122～136は土師器。122～130は杯形土器A類。122はD-13区No193の2/3個体。口径12.0cm、底径4.6cm。口唇部に灯明痕が残る。123はD-14区No348で1/2個体。口径12.3cm、底径4.4cm、器高3.8cm、口唇直下を横ナデし肥厚する。124はD-12区No410で2/3個体。口径13.0cm、底径5.0cmを測る。125はD-13区出土の2/3個体。口径13.0cm、底径5.0cmを測る。直口口縁で、底部広底の形態。126はD-13区No243の完形個体。口径12.0cm、底部は乾燥時のヘタリにより底径5.0cmに広がる。器高3.7cmで直口縁。127はD-12区で1/2個体。口径12.0cm、底径4.5cm、器高4.0cm。外面にロクロ成形痕を留め、口唇やや内湾する形態。焼きは良好で硬質、須恵器に近い。128はD-11区出土、口唇横ナデにより肥厚、口径12.1cm、底径4.5cm、器高4.0cmを測る。胎土中に赤色粒子を多量に混じる。129はD-13区No244とNo243Cの2/3個体。底径広く、乾燥時のヘタリがある。器高は3.1cmとやや低い。形態及び法量は126に似る。130は墨書「□」がある。131～133は皿A類。131はD-13区No397で完形個体。口径12.0cm、底径5.4cm、器高2.2cmを測る。口縁やや内湾する形態。132はD-14区出土の1/3個体。口径10.0cm、底径3.7cm、器高1.7cmを測る。133はD-14区No20の2/3個体。口径13.0cm、底径4.8cm、器高1.8cm、緩く外に開く形態で、口唇外面は強い横ナデにより、玉縁状に肥厚する。良好な焼きで、須恵質である。134は盤A類の口縁部破片、推定口径35.0cmを測り、口唇角頭状。135はD-12区出土の小型裏口縁部破片。薄い作りで、外面丁寧な横ナデ調整。136はD-15区出土の裏I類口縁部破片。144

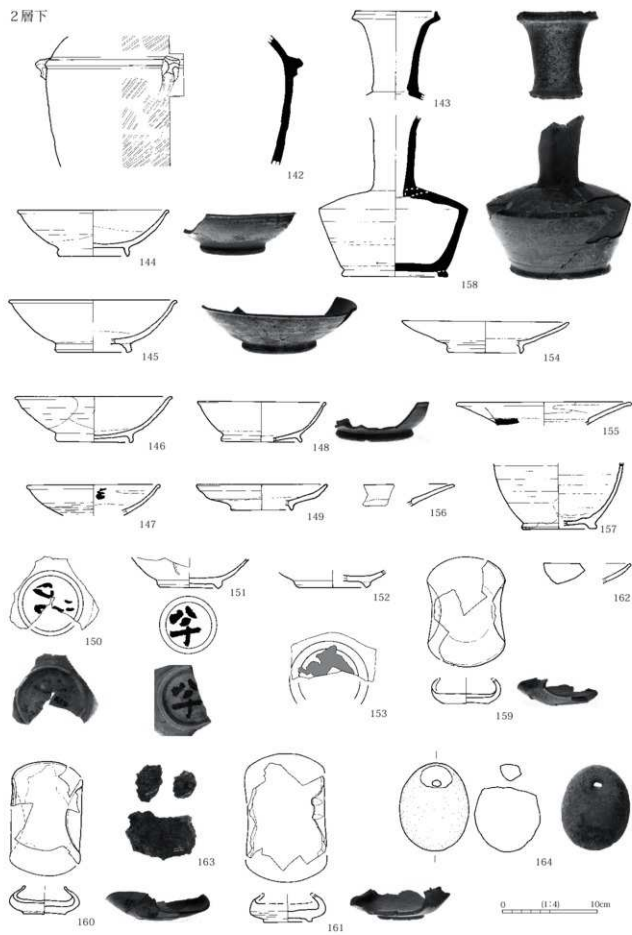
2層下



第626図 2層下の出土遺物2（土器）

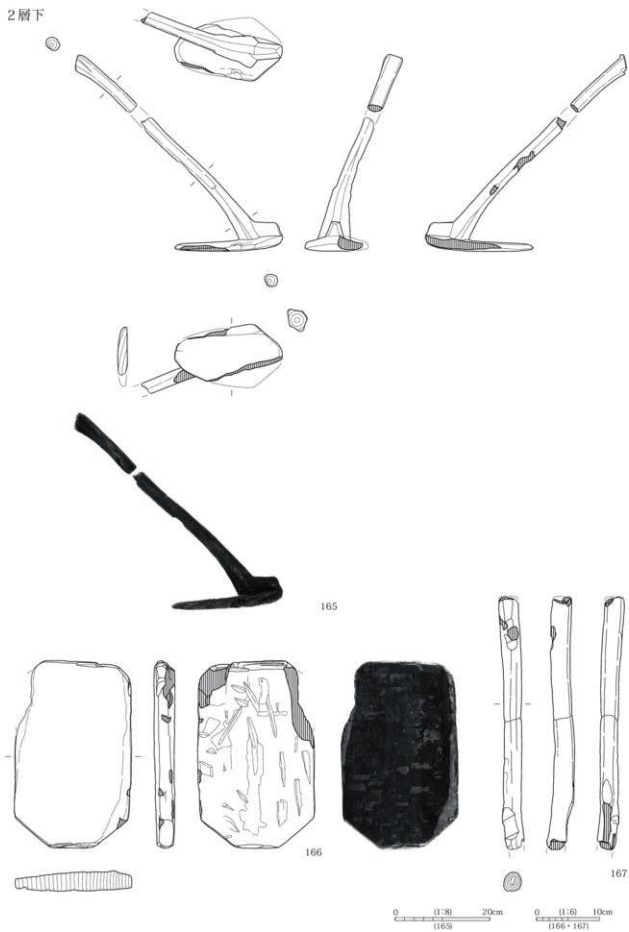
～160は灰釉陶器。144～153は椀形土器。144はD-12区No288で、口径15.6cm、高台径7.1cm、器高4.9cmを測る。口唇緩く外反し、刷毛塗り手法。高さのある貼り付け高台で、光ヶ丘1号窯式。145はD-13区No391の椀で、口径17.4cm、器高5.5cm、高台径7.6cmを測る。146はD-13区No359で、2/3個体。口径16.6cm、高台径8.2cm、器高4.8cmを測る。口縁は折り縁となり、深い湾形。高台は三日月状。刷毛塗り、光ヶ丘1号窯式。147はD-13区出土、口径13.7cm、刷毛塗り手法で、内面に「漆状」の付着物がある。148はD-11区出土の椀1/3個体。口径13.4cm、高台径8.2cm、器高4.3cmを測る。口縁は真直ぐに開き、高台は低く外側に開く形態。刷毛塗り手法。149はD-12区No409の皿1/3個体。口径13.6cm、高台径6.2cm。器高2.7cmを測る。高台は低く、貼り付け。器形は焼成前の歪みがある。刷毛塗り手法で、外面に墨汁痕がある。大原2号窯式。150はD-13区出土の椀底部か。高台内に、筆幅0.4cmの力強い墨書がある。かすれて判読が難しいが、「井」であろうか。151はD-13区No239で、高台内に「八千」の墨書があり、体部には刻書「□」の一筆がある。「八千」の「千」の字であろうか。「千」の一画ははねず、三画をはねる書き風。152はD-11区出土の椀底部。貼り付け高台は、低くポツテリした形態。153はD-13区No240の椀底部。高台内に墨汁痕がある。154～156は内面に有段のある形態の段皿。154は口径17.4cm、高台径7.6cm、器高3.3cmを測る。口縁は真直ぐに開き、口唇部輪花状。三日月状の高台で、刷毛塗り手法。155はD-13区出土の口縁部破片。口径18.2cmを測る。有段部は明瞭で、口唇端部は強く横ナデ調整する。刷毛塗り手法。外面に墨書「□」がある。156はD-13区出土で155と同形態。同一個体の可能性がある。157はD-11区No273の長頸壺の体部下半。高台内に焼成前のヘラ書き記号「□」がある。158はD-12区No417、No218、No283、No289、No219、2層下、D-14区溝底、SD53埋土内出土資料との接合例。長頸瓶の2/3個体。体部は明瞭にケズリ成形し、自然釉が掛かる。高台部は厚くポツテリし、体部と頸部を別に作成し結合させている。須恵質で、他の灰釉より、やや軟質感がある。須恵器との判断も可能か。7世紀後半の猿投産の窯式か。159～161は耳皿。159はD-13区No346の2/3個体でA類。160はD-20区溝底とD-12区2層下、E-12区溝底、D-14区溝底が接合。口縁を簡単に折り曲げた形態。内外面に墨汁痕がある。161はD-13区溝底と2層下の2片が接合した耳皿B類。外面は比較的大い範囲にケズリ調整痕がある。折り返し後に端部にヒネリを加える。162はD-12区出土の緑釉陶器皿の口縁部破片。屈曲なく開く形態で、口唇端部はやや尖り気味、直下の外面は横方向の強いナデ調整がある。163はD-12区出土の流動滓(92.7g)。164はD-11区石器No1の石錘か。9.1×7.3×6.9cm、409.3g。紐掛け穴径2.8cmを測る。安山岩材。165はD-11区No186及びNo187で、鎌の身。芯持ち材の分枝部。コナラ節。柄の部分は削り加工し、歯のつく側の柄の一部切り欠き状の窪みがある。身の付け根近くで広がり、付け根は柄2分の1以上の面を持つ。柄の中央部断面は円形で、末端は角状に広がる。身の歯部分は内側から削りが入り、先端が細くなる。上の面は平滑である。刃は4分の3程度が残存する。166はD-11区No171の鎌身の未製品か。167は棒材。芯持ち丸木材。広葉樹の枝肌い材である。端部近くに削り痕がある。168は漆塗りの挽き物か。ケヤキ材。湾曲している木片で、口縁部であろうか。両面に漆状の塗りがある。169は漆塗りの板状木製品。横木取り。ケヤキ材。形状は不明。両面に黒漆が塗られるか。170は漆塗りの挽物。横木取りのケヤキ材。欠損部多く、形状は不明。湾曲していて、両面共に黒漆状の塗りがある。171はD-12区出土の部材か。172はD-13区No54の角状木製品。柁目材でモミ属。上端は垂直に切断。先端部へ10cm前後の長い削りが入る。173はD-12区の建築部材か。柁目材でヒノキ科。角材を加工。一端はホゾ加工がある。もう一端は切断。表面は平滑。174はD-11区No168の建築部材か。175はD-12区No181の板材。板目材。穴が4箇所にある。両端は垂直に切断され、下端部に0.5cmのホゾ加工が施される。樹種はサワラ材。176はD-11区出土の板材。追根目材。モミ属。規模及び形状か

2層下



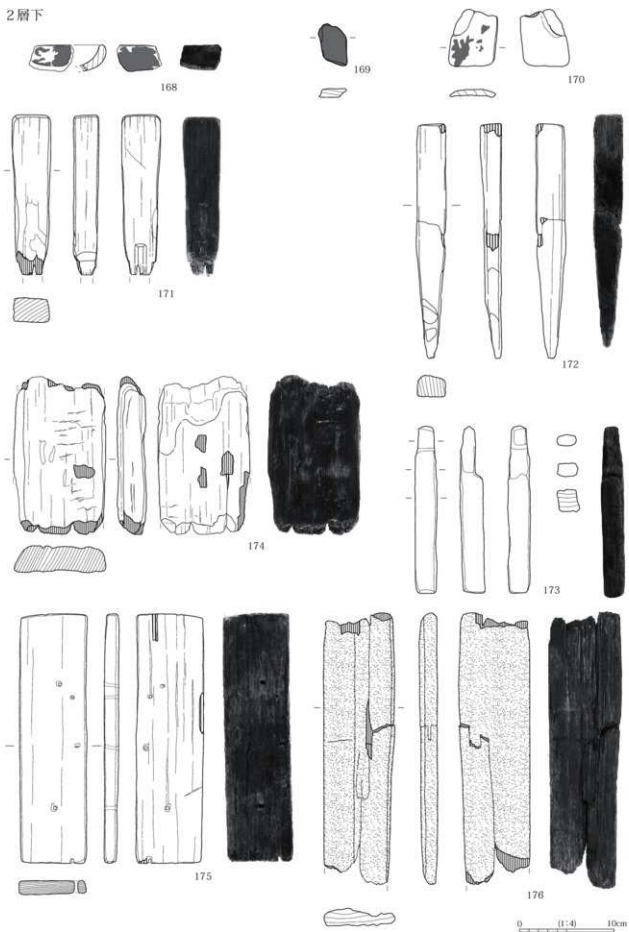
第627図 2層下の出土遺物3 (土器・石器ほか)

2層下

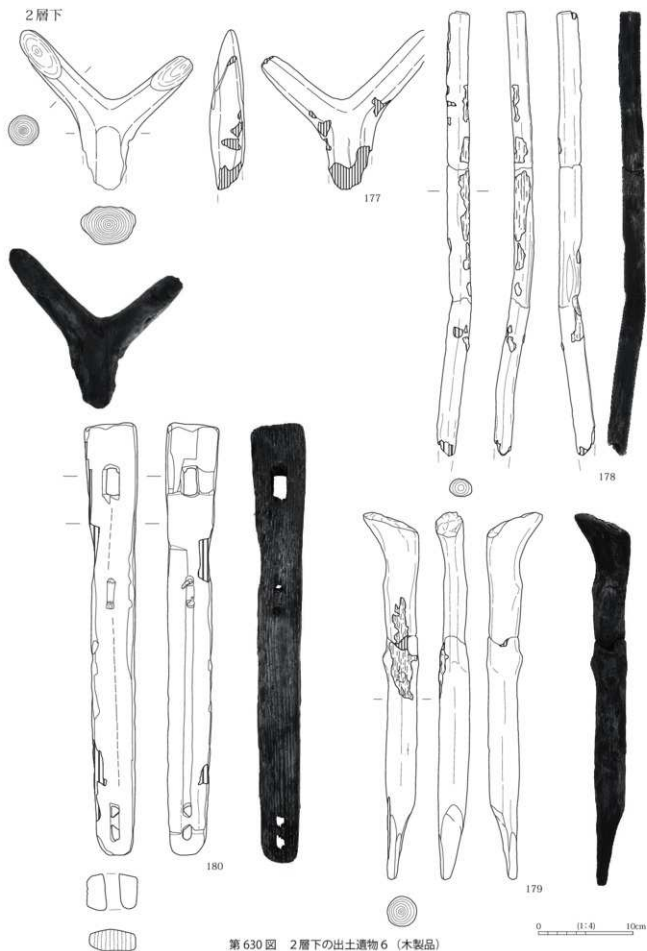


第 628 図 2層下の出土遺物4 (木製品)

2層下

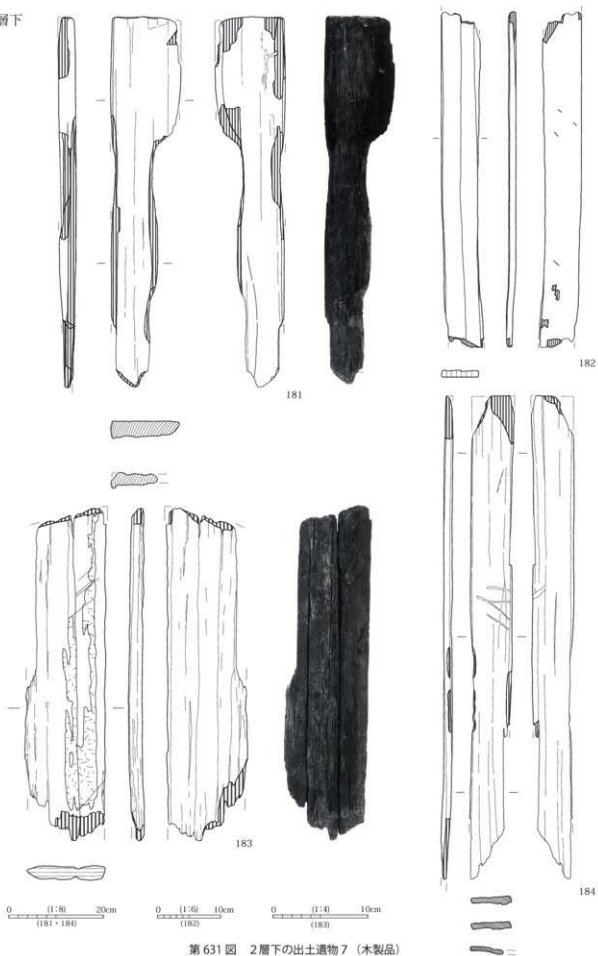


第 629 図 2層下の出土遺物 5 (木製品)



第630図 2層下の出土遺物6 (木製品)

2層下



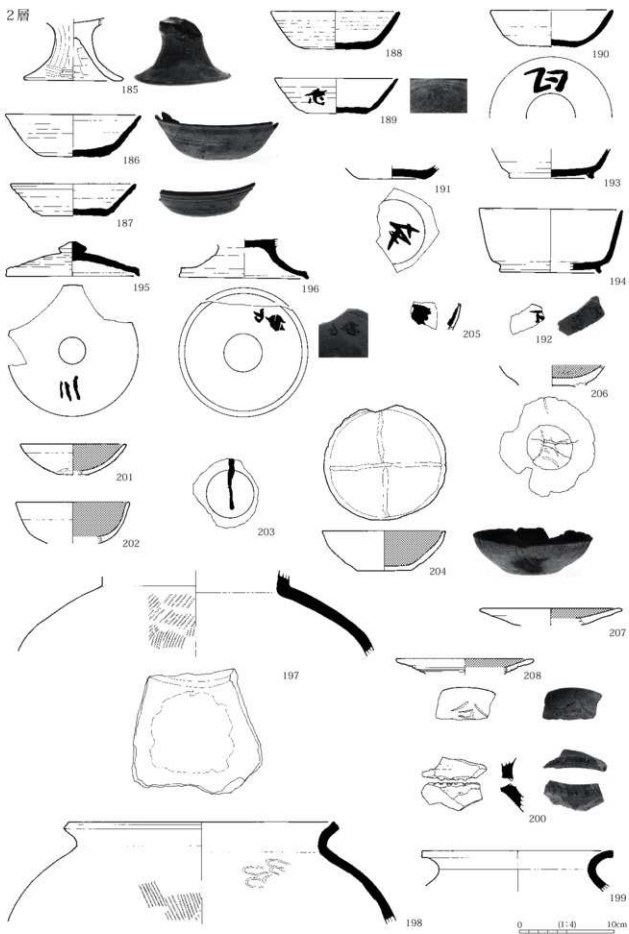
第 631 図 2層下の出土遺物 7 (木製品)

ら施設部材の破材であろうか。斧痕跡がある。全面炭化する。177はD-12区出土の棒材の枝又部分。クリの芯持ち材で、先端部は斜めに切断される。178はD-11区No188棒材。芯持ち丸木材。ウコギ属。両端欠損。表面に一部平滑な削り面がある。また、大きな斧痕？が鈍角に2箇所入り、V字状の溝を作り出す。179はD-11区No176。先端部を加工した棒材。カエデ属の芯持ち丸木材。上端は枝元か。下端部は両側より切断され先端が細る。180はD-12区No174で、柱目のモミ属。ホゾ穴が1箇所にある。181はD-11区No169の板材。柱目材。サワラ。建築部材の一部か。製材加工され、上端は垂直に切断。本遺跡の中では、板材の中で、かなり厚みのある材にあたる。1箇所にて穴があるが貫通はしていない。182は板材。板目。モミ属。製材され、形状から壁板等の建築材が考えられる。両端部欠損。183は板材。板目材のモミ属。施設部材の破材であろうか、斧痕跡がある。184はD-11区No166の板材。柱目でモミ属。壁板等、構造材の一部か。

2層出土の資料（第632図～第635図）

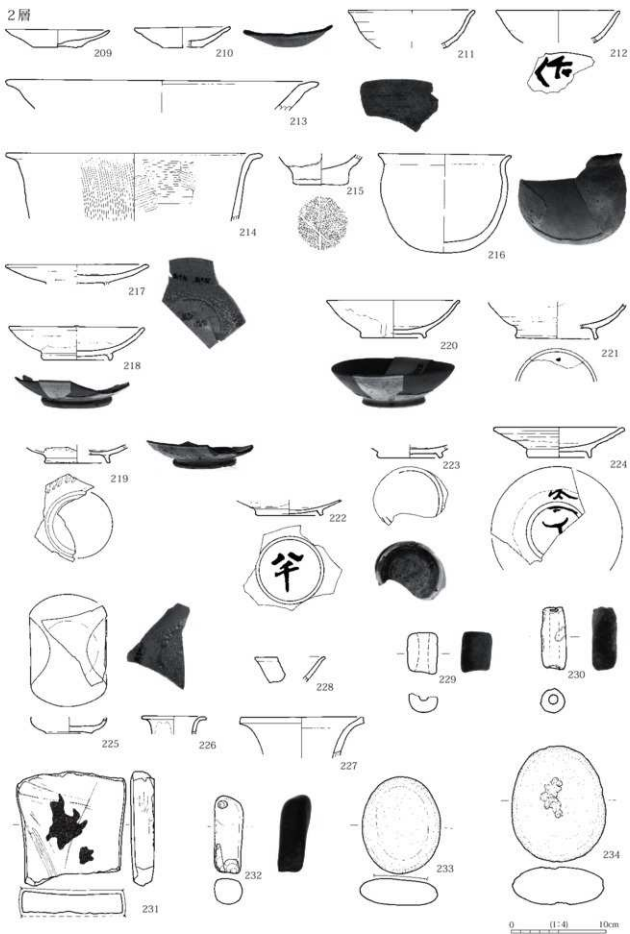
185はD-12区No198の非ロクロ土師器高杯の脚部。皿部内面は良好なミガキ調整。186～192は須恵器の杯A類。186はD-13区No160の2/3個体。口径14.1cm、底径6.1cm、器高4.4cmを測る。ロクロ成形痕は明瞭で、外面は沈線様となる。底部へラ切り離し調整。幅2.5cmほどの板状工具を使用し、へらおこしする。内面には「イオウ状」付着物がある。187はD-13区出土の2/3個体。回転系切り離し手法で、外面には凹凸のあるロクロ調整痕が観られる。底部内径7.0cm。内面は使用によるものか、磨耗しツルツルする。188はD-12区出土。外面にはロクロ成形痕を明瞭に留める。静止系切り離し後へらおこし。口径13.5cm、底径6.4cm、器高4.0cm、底部内径8.0cmを測る。189はD-13区No159、系切り離し手法の完形品。口径13.0cm、底径6.0cm、底部内径7.2cmを測る。幅の狭いロクロ成形痕を残し、外面には筆幅0.2cmほどの墨書「六」が正位に書かれる。190はD-14区No500の完形。系切り離し手法。口径12.8cm、底径6.0cm、器高3.9cm、底部内径6.5cmを測る。外面には墨書「日」が、筆幅0.5cmで正位に書かれる。191はD-13区出土で、系切り離し手法の底部。底部内径7.0cm。筆幅0.5cmで「坂」の一字が判読できる。「坂主」であろうか。流れるような早い書き風である。192はD-11区出土の底部破片。回転系切り離し調整で、底部に墨書「下」が書かれる。筆幅0.15cmで丁寧な文字。193と194は杯B類。193はD-12区No199、底部は手持へラケズリ調整後に高台貼り付け。高台は低く外側に張り出す形態。器の内面はツルツルする。194はD-11区出土の杯BⅢ類。高台は強く外反し外接する。195はD-13区No161・162。蓋B類のほぼ完形個体。径13.8cm、つまみ部は宝珠形で、体部外面2/3をケズリ調整する。かえし部は垂直で端部外反り。体部に墨書「三」がある。筆幅0.3cm。196はD-12区No411盤の脚部。脚内面に墨書で「守部」がある。197はD-13区No182の須恵器製の肩部破片。内面が硯として転用される。本遺跡唯一の特徴的な転用硯である。198はD-14区No183、甕C類の口縁部破片。内面の叩き締めは工具の端で押えたものか。内面には「イオウ状」の付着物がある。199はD-12区No207の甕C類口縁部破片。200はD-11区出土の盤脚部の破片か。皿部と脚部の接合部が凹と凸状をなし、それぞれが雌と雄に、鋸歯状に仕上げられて結合されている。201～208は黒色土器A類。201～204は杯A類。201はD-12区出土の1/2個体。口径11.0cm、底径3.2cm、器高3.3cmと小型の法量である。202はD-12区出土の1/3個体で、口径11.8cmを測る。口唇直下は強い横ナデにより、直口気味となる。203はD-13区出土の底部。体部から底面まで達する墨書「千」の三画と考えられる墨書がある。「八千」であろうか。204はD-14区No501の完形。口径12.8cm、底径5.8cm、器高4.3cmを測る。底部系切り離し調整で、口唇外面横ナデ調整。内面には十字に暗文様ミガキが入る。205はD-12区出土の体部小破片。内面に厚さ0.5cmで漆が付着する。206はD-14区No144の碗底部。内面は放射状にミガキ調整が良好に施される。高台部は欠失。高台内と体部に焼成前刻書がある。体部は正位に「千」

2層



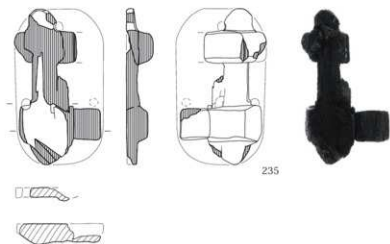
第632図 2層の出土遺物1 (土器)

の三画目が残存。高台内は「八千」と幅0.2cmでしっかりと書かれる。また底部には三角形「△」の刻目が入る。207と208は皿。207はD-14区出土の口縁部破片。208はD-13区出土の口縁部破片。口径13.0cmを測り、外面に焼成前刻書「八千」が正位に記される。幅0.2cmほどのしっかりした書き風である。209～216は土師器。209と210は皿。209はD-12区出土の1/3個体。口径10.9cm、底径5.1cm、器高1.9cmを測る。210はD-14区出土の1/2個体。口径10.0cm、底径4.0cm、器高2.1cmを測る。口唇直下は強い横ナデによる調整。211と212は杯A類。211は口縁部破片。口縁に幅2.0cmほどの横ナデが入る。212はD-13区出土の口縁部破片で、外面正位に墨書「作」が書かれる。筆幅は0.6cmと太く、文字は崩れる。213はD-14区出土の鍋口縁部破片か。推定口径32.0cmを測る。214はD-12区No286で、甕B類の口縁部破片。外面はやや斜め方向にヘラ状工具によるナデ調整がある。外面の風化が激しく、工具幅は不明。内面と同じ工具であれば、幅2.0cmほどであろうか。215のD-13区No147はそれぞれの底部か。木の葉文がある。216はD-13区No158・No386の小型甕1/2個体。外面はナデ調整。217から227は灰釉陶器。217と218は皿形土器。217はD-12区出土で1/4程度の個体。口唇内面から緩やかに外反する形態で、破損部分であるが、内面にのみに刷毛塗りされる。218はD-12区出土で1/2個体。口縁は直立して開く形態で、漬け掛け施釉。高台は強く張る三日月形。口唇部輪花状。219はD-14区出土の1/3個体。口径14.0cm、高台径7.0cm、器高3.3cmを測る。体部外面にウロコ状の刻みが入る。漬け掛け施釉か。220はE-11区出土の椀1/2個体。刷毛塗り手法で、内面に僅かながら墨汁痕を観察できる。221はD-14区出土で、高台内に墨書「□」がある。222はD-12区No228、椀の底部か。高台内に「八千」の墨書がある。223はD-12区出土の椀の底部破片か？。内外面に墨汁痕があり、内面は極度に磨耗しツルツルの部分がある。転用碗の可能性が。224はD-15区No298で、2層下にかけての接合資料。1/2程度の個体で、体部外面と高台内に墨書がある。筆幅0.2cm前後で文字としては判読できない。内面には墨汁痕がある。225はD-14区出土の耳皿A類、1/3程度の個体。226はD-11区No278で、瓶類の口縁部破片。227はD-13区とD-20区1層の接合資料。大型の長頸壺の口縁部破片か。228はD-12区出土の緑釉陶器椀の口縁部破片。口縁部直立気味の形態で、口唇端部は緩く外反させる。推定口径14.0cmを測る。229と230は土鍾。229はD-15区出土の1/2個体で、長さ4.3cm。230はD-12区No37で、長さ6.5cm、径2.5cm、42.6gを量る。231はD-11区石器No2で、砂岩材の置き砥石もしくは硯か。全体の1/3程度を欠失する。表裏側面の4面を使用し、表面には墨汁痕のような付着物がある。幅11.3cm、重さ500gを量る。232はD-13区出土の蔽石。ホルンフェルス材か。8.2×3.1×2.9cm、108.2g。一端に蔽ぎ痕跡がある。233はD-12区石器No1の磨石。安山岩材で、10.1×8.2×2.8cm、376.0g。234はD-12区石器No2の凹み石。安山岩材で、表裏と1側面にアバタ状の蔽打部がある。12.2×9.6×4.0cm、621.2g。この他、D-12区から緑釉陶器椀の体部小破片1片が出土している。228と同一個体か。またD-15区内からは中世内耳鍋の底部破片が1片(52.5g)出土している。235と236は下駄。235のE-11区No36は縦木取り(追柱目)。クリ材。1/3程度の残存。欠損部分も多く、摩耗が激しいため形状は明確でない。残存部分から判断して隅丸長方形か。前壺を左右いずれかによせて後壺を後歯の前にあけたタイプでBa式か。木裏を上面に据える。意図的に割った加工痕が残る。236のE-11区No224は板目の縦木取り、ケヤキ材。後歯部分に欠損が多い。前壺が前歯より前に、後壺が後歯より前に位置する。形状は隅丸長方形。前壺はやや右よりにあるため、左足用と考えられる。歯の形状は、扇形。台の両側よりも、少し内側から削り込み、前後歯とも側面から見て外開きになる。後壺の間が狭い。緒は台の大きさから考えるとかなり長かったと考えられる。台の大きさから子供用であろうか。歯の高さを考えても、成人では実用的ではない。あるいは儀式用なのか。237はD-12区No65の部材で、2層上面から1層付近にかけて出土。板目でモミ属。切り込みが3箇所にある。

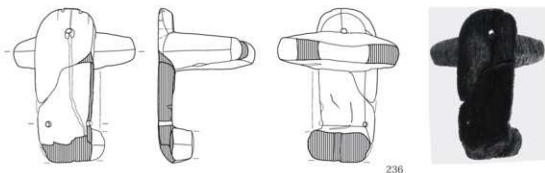


第633図 2層の出土遺物2 (土器・石器ほか)

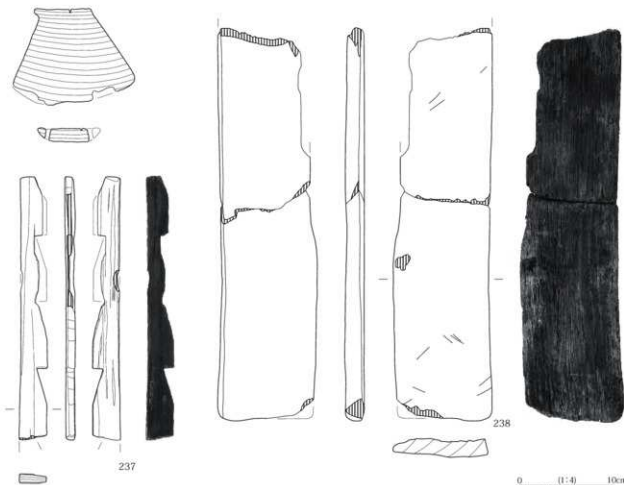
2層



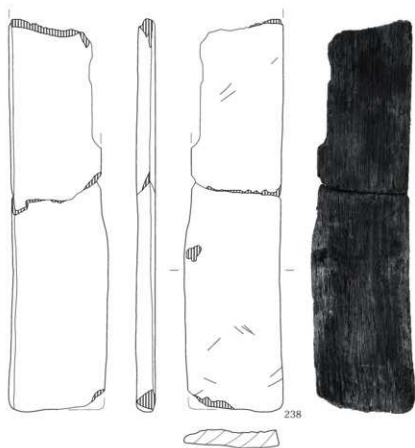
235



236



237

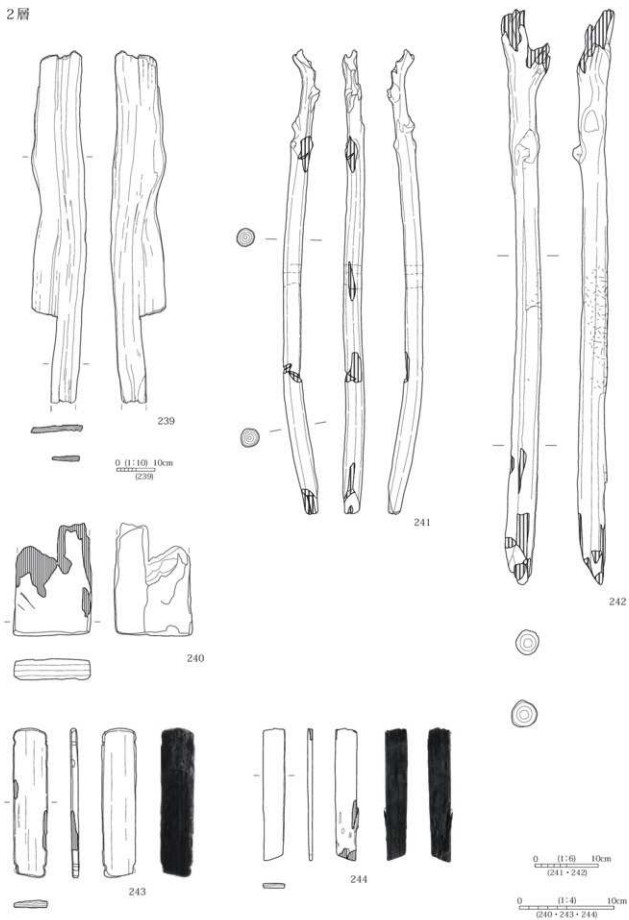


238

0 (1:4) 10cm

第634図 2層の出土遺物3 (木製品)

2層



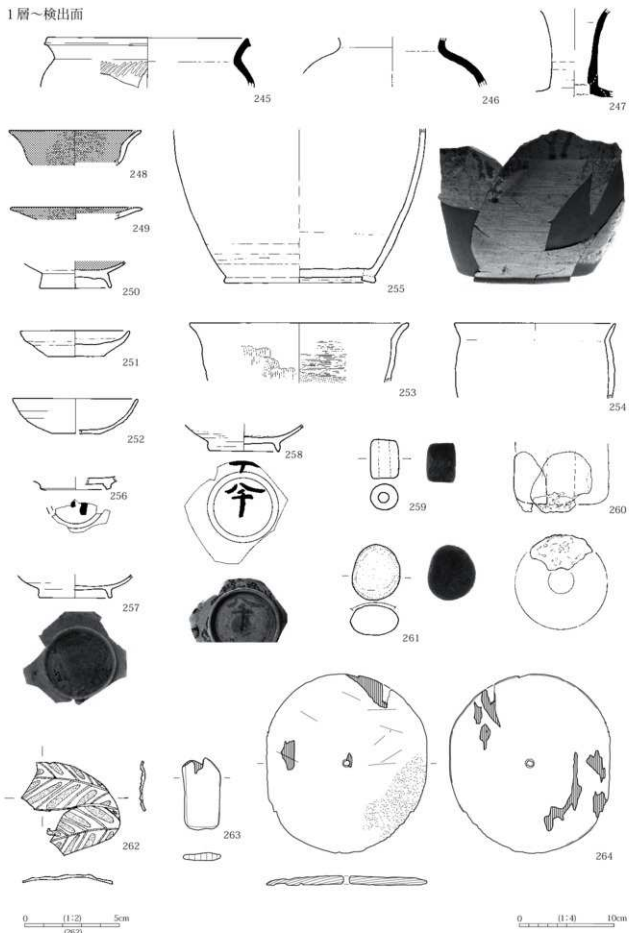
第635図 2層の出土遺物4 (木製品)

238はD-13区No130とNo137の割材。追証目でモミ属。木表と左側面は平滑加工。表面に僅かに刃痕がある。両端は切り折りの切断か。239はE-11区No28の板材。板目で、木目に沿って割った材。壁材か。240はE-11区の板材。柱目のモミ属。3点同一個体と考えられる残片がある。一端は垂直に切り落とされ、一端は欠損。241はD-9区出土の棒材。ウコギ属。242はD-13区No146の棒材。芯持ち丸木材。ウコギ属。先端部加工する。表面に削り痕跡がある。杭材か。243はE-11区出土の付け札。板目材でヒノキ。両端近くの両側面からの削り込みがある。赤外線カメラでは墨痕は確認できなかった。244は木筒状の木製品。板目材でサワラ。両端部欠損。一端近くに削りの痕あり。とりわけ側面部に深く入る。刀子によるものか。形状から木筒と判断したが、文字は赤外線カメラでは確認できなかった。この他、D-12区より流動滓4点(111.9g)と羽口の破片3点がある。

1層～検出面・埋土出土の資料(第636図～第637図)

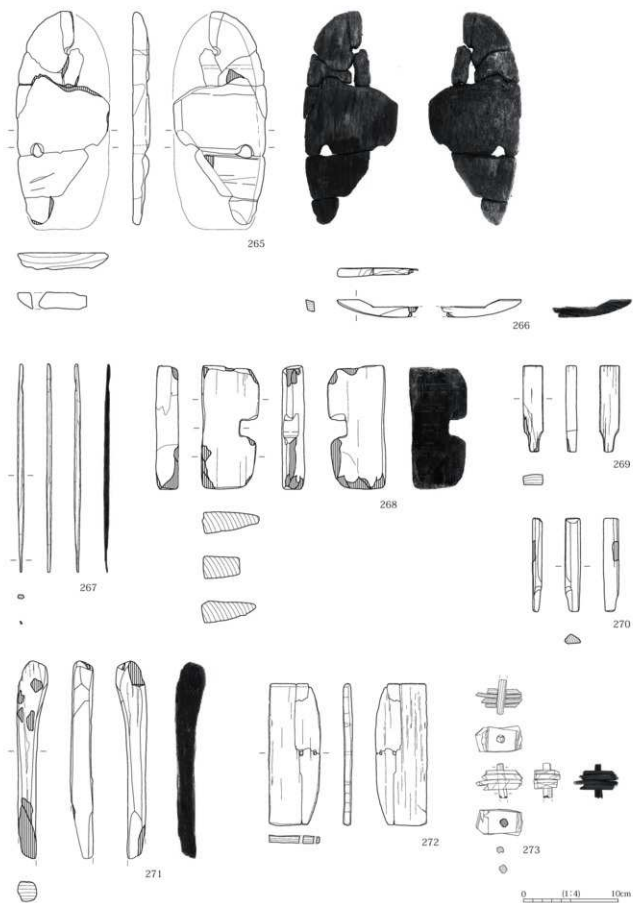
245～247は須恵器。245はD-13区1層の甕E類口縁部破片。外面は板状工具による横方向の叩きの後、ナデ調整が加わる。246は検出面出土の短頸壺肩部の破片。247はD-13区1層の長頸壺頸部。248～250は黒色土器。248はE-11区出土の内外面黒色の鉢口縁部破片。光沢を帯びるほどにミガキ調整される。249はE-11区1層出土の内外面黒色の皿口縁部破片。250はD-12区No224で、1層の椀底部破片。251から254は土師器。251はD-15区1層の皿形土器でほぼ完形。口径11.5cm、底径5.6cm、器高2.7cmを測る。252はD-13区検出面出土の杯A類1/3個体。口径13.0cm、底径5.0cm、器高3.7cmを測る。253はD-12区No204の甕B類口縁部。口縁部の屈曲は弱く、朝顔形に開く形態。254はD-13区検出面の甕I類口縁部破片。255～258は灰釉陶器。255はE-11区No229で2層とE-16区1層及び2層下とE-17区2層、E-7区2層の接合資料で、扱いとしては2層下とすべきである。大型の長頸壺体部下半の資料、底径15.6cmを測る。256はD-12区検出面の椀底部小破片で、高台内に墨書「□」がある。257はD-11区検出面出土の椀底部。高台は高くやや真直ぐ。高台の内部に墨汁痕と朱墨痕が観察できる。258はD-17区No234であるが、出土層位の不明な資料。椀の底部と考えられ、体部と高台内に墨書「八千」がある。筆幅0.3cmで「千」の三画は真直ぐ長く伸びる。259はD-11区検出面の土錘。長さ4.1cm、径3.0cm、41.9g。260はD-11区検出面出土の籬の羽口先端部分。261はD-13埋土中の磨石。安山岩材で、5.8×5.0×3.2cm、123.1g。片面に磨耗面がある。262はD-15区1層出土の籬甲製と考えられる髪留め。この他に、D-12区検出面より白磁の口縁部小破片1片と、D-14区検出面から青磁椀の体部小破片1片の出土がある。またD-15区からは白磁II類の皿口縁部破片1片が出土している。263はD-14区出土の板材の破材。264はD-12区No63の曲物。追証目でモミ属。釘孔、皮孔などは確認できない。中心部に孔がある。一部炭化。265はD-9区埋土中出土の下駄。板目材でケヤキ。台と歯が一木の連歯下駄か。前歯後歯ともにがれ摩滅する。鼻緒孔も前歯が半孔、後歯左孔残るが、一つは半孔のみ残る。台も右半分近くが破損する。前歯がやや右により、後歯の前に孔をあけるB式か。全体の形状については、前歯は半円形を呈し長軸に対し幅が比較的狭い形式。266はD-15区埋土の部材。板目でサワラ材。全体形状は湾曲。片側は鈍角に加工される。特殊な部材である。267はD-12区No64の箸。モミ属の削り出し。中心部が最も太い。両端にいくにつれ幅、厚みともに減じ、下端は尖る。268はD-14区出土の部材。柱目材でブナ属。片側の側面に2.0cmの欠き込み状の加工が入る。269はD-9区出土の題篋軸様の木製品。柱目のモミ属。270はD-9区出土の柄か。柱目のモミ属。271はD-9区No201の板材。追証目でモミ属。薄板材。両端欠損。生活用具の破材か。272はD-12区No60の板状木製品。板目でモミ属。両端垂直に切断される。中央部が削られ、細かい刃痕が入る。273は、D-14区埋土の用途不明品。削り出し。モミ属。中心部に径0.9cmの孔を有する、3.5×2.5×0.5cmの台形状薄板が4枚に割れているが、本来は1つか。この他、D-13区で流動滓1点(42.9g)がある。

1層～検出面



第 636 図 1層～検出面の出土遺物 1 (土器・石器ほか)

1層～検出面

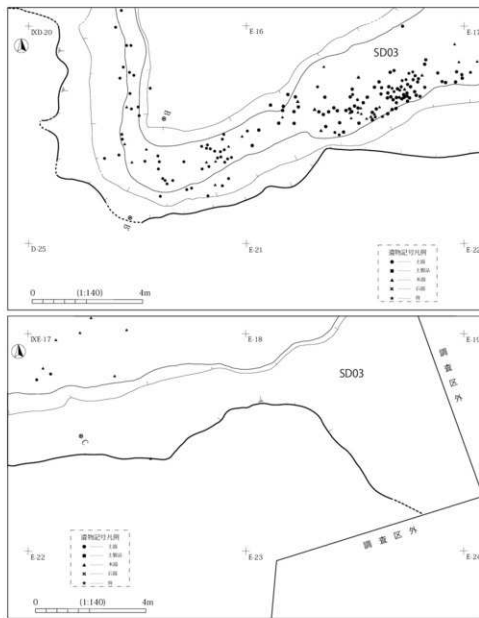


第 637 図 1層～検出面の出土遺物 2 (木製品)

遺構名	南口土器層		土器層		土器層		土器層		土器層		土器層		土器層		土器層		中世前期
	1B	1C	1D	1E	1F	1G	1H	1I	1J	1K	1L	1M	1N	1O	1P	1Q	
D11-12-17	4	120	13	1	7	49	2	13	2	1	4	2	13	6	2	13	1
遺土		4		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1層	5	6	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2層	5	6	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3層	5	6	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4層	5	6	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
D18-09-13-14	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
遺土		1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1層	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2層	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3層	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
D15-E11	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
遺土		1		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1層	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2層	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3層	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

遺構名	土器層		土器層		土器層		土器層		土器層		土器層		土器層		土器層		土器層		中世前期				
	1A	1B	1C	1D	1E	1F	1G	1H	1I	1J	1K	1L	1M	1N	1O	1P	1Q						
D11-12-17	39	10	17	27	43	9	18	8	1	1	3	26	2	1	3	2	1	3	0	127272			
遺土		1	5	1	4	3	1	7	2	4	1	3	1	1	1	2	28	26	3	5	1	20	
1層	85	24	32	31	76	42	40	7	28	9	13	3	1	1	2	38	36	3	7	5	13	4	17
2層	106	21	30	2	305	54	37	10	28	38	1	4	1	1	2	34	33	3	5	15	4	8	8
3層	55	16	19	2	32	34	22	3	22	6	1	2	1	1	18	13	3	3	3	3	4	4	1
D18-09-13-14	44	4	23	18	23	16	7	14	1	1	1	18	2	9	2	6	4	2	2	6	4	2	2
遺土		10	2	2	12	2	10	2	2	3	6	6	4	2	2	4	2	2	2	4	2	2	2
1層	18	7	11	13	30	10	6	3	3	3	1	2	2	6	4	3	3	17	3	3	17	3	4
2層	69	7	27	1	17	36	41	34	11	11	33	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4
3層	66	13	21	1	7	62	36	36	18	5	32	1	2	3	3	3	3	3	3	3	3	3	4
D15-E11	208	27	51	2	46	211	67	125	5	34	31	14	1	1	2	112	4	26	5	14	6	1	1
遺土		3	2	2	8	3	1	2	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1層	5	3	1	19	2	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2層	43	6	11	5	20	13	7	2	3	5	2	4	4	3	3	2	3	2	2	2	2	2	2
3層	69	11	16	1	4	20	15	9	11	5	4	1	1	1	1	26	3	2	2	2	2	2	2
4層	9	3	1	1	23	4	1	1	1	1	6	1	1	1	1	6	1	1	1	1	1	1	1
5層	53	9	21	5	66	38	32	5	12	17	27	1	4	11	2	27	1	4	11	2	2	2	2

第188表 東西流路（古期流路）出土器組成



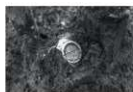
第 638 図 SD03 東西流路（新期流路）の遺物出土分布



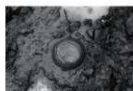
土器 No436 出土状態



土器 No54 出土状態



土器 No51 出土状態



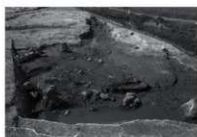
土器 No88 出土状態



土器 No69 出土状態



南側の新期流路（D-20区周辺・南から）



南北流路との合流点（E-17区周辺・南から）



木製品 No84 出土状態



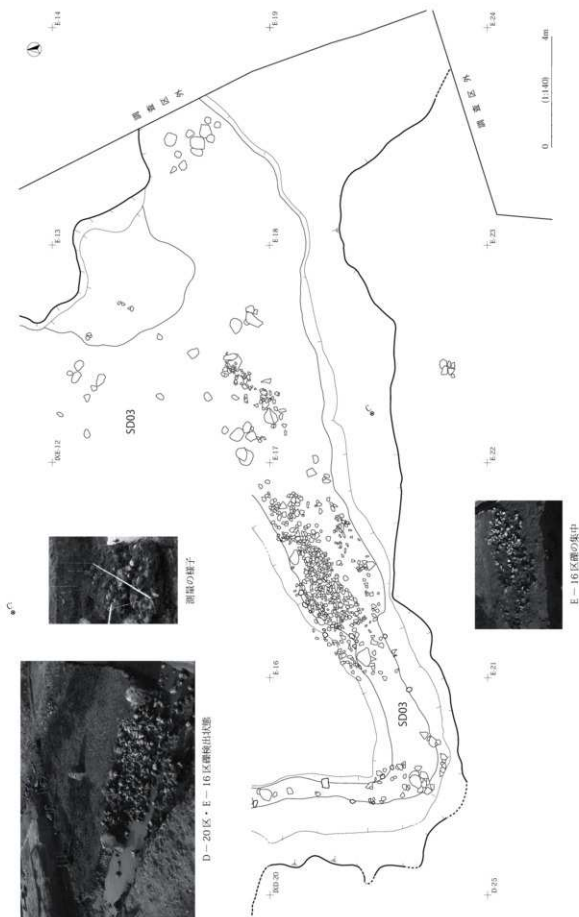
調査風景 1



調査風景 2

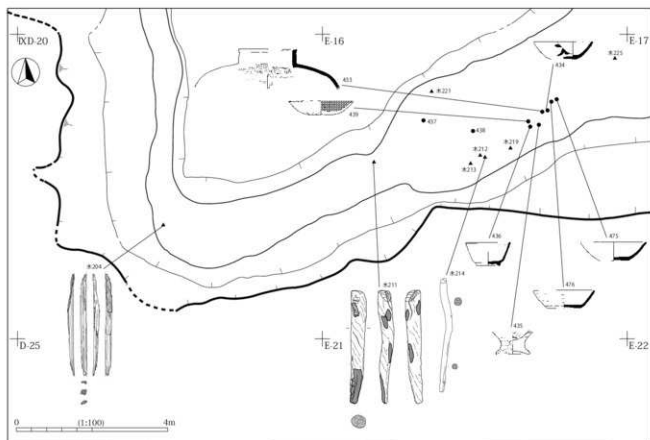


獣骨出土状態

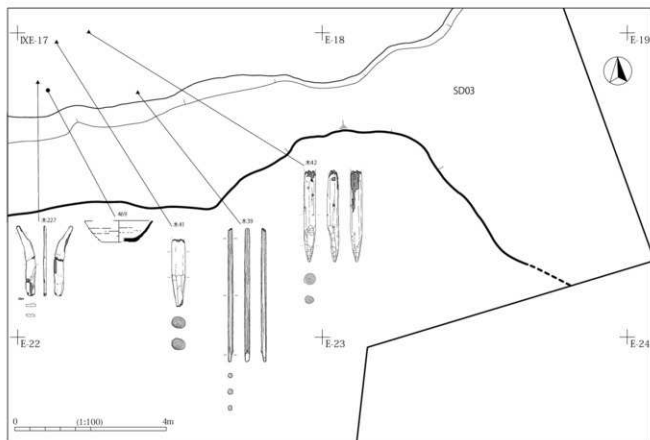


第 639 図 SD 03 東西流路 (新御流路) の出土土分布

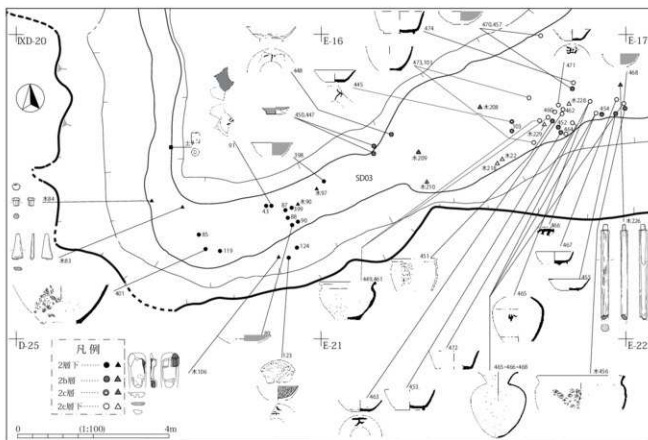




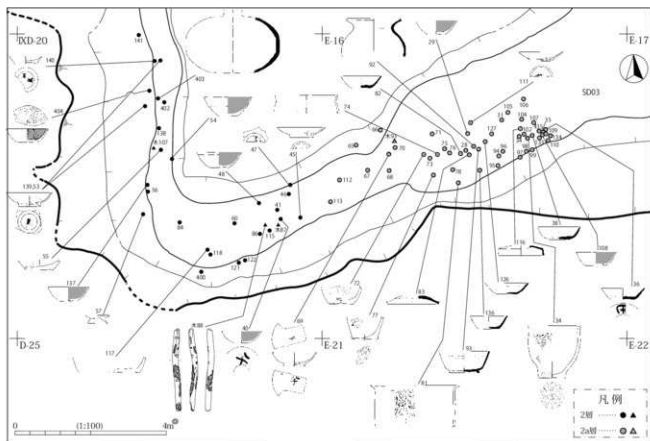
第 640 図 溝底の遺物出土分布 (D-20・E-16 区)



第 641 図 溝底～2層下の遺物出土分布 (E-17・18 区)



第 642 図 2c層下～2b層・2層下の遺物出土分布 (D-20・E-16区)



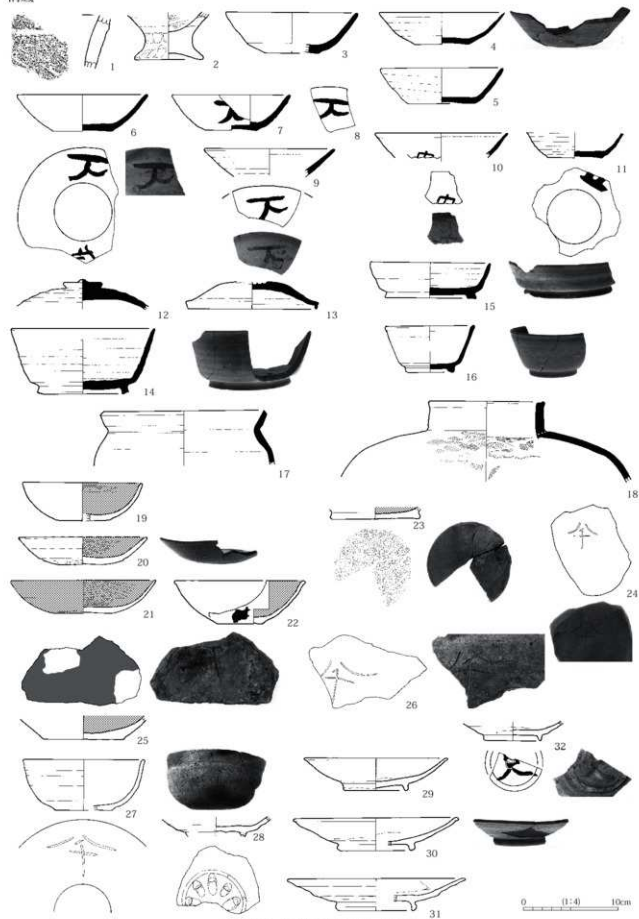
第 643 図 2a層・2層の遺物出土分布 (D-20・E-16区)

東西流路（新期流路）、D-20区、E-16, 17, 18, 19区

溝底出土の資料（第644図～第647図）

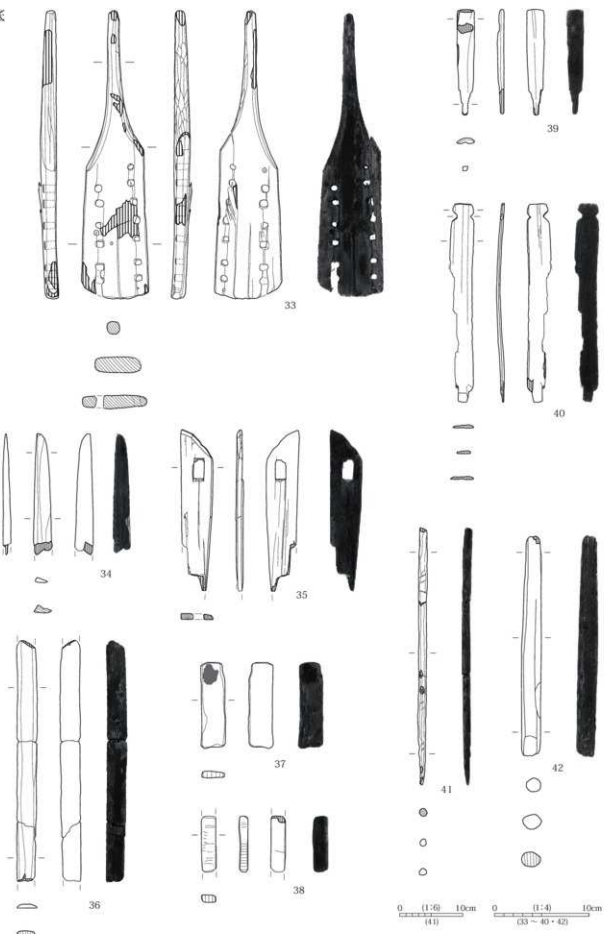
1は縄文後期深鉢形土器の体部小破片。沈線による矢羽状の文様が描かれる。加曾利B式か。2はE-16区No435で、非ロクロ土師器の高杯脚部。脚内面は中実で、指ナデ調整。内面は黒色処理し、指ナデ調整。3～11は須恵器。3～11は杯形土器A類。3はD-20区出土で、1/4個体。回転糸切り離し調整で、底部が凸状に張り出す形態。4はE-17区出土の2/3個体。回転糸切り離し手法で、ロクロ成形痕を留める。口径14.0cm、底部内径6.0cmを測り、内面には「イオウ状」の付着物がべつとり付く。5はE-16区出土。ロクロ成形痕跡を明瞭に留め、口径13.0cm、底部内径6.8cmを測り、内面は使用痕跡であろうか、ツルツルする。6から9は体部外面に墨書「入」が正位に書かれる土器で、いずれも筆順は1類。6はE-16区No475の2/3個体。7はE-16区No434でほぼ完形個体。ロクロ成形痕を明瞭に留め、口径12.5cm、底部内径は6.5cm、内面、底部は極度に磨耗する。8はE-16区出土の口縁部破片。筆幅0.4cm。9はE-17区出土の口縁部破片。筆幅0.4cm。10はE-17区出土の口縁部小破片。体部外面に「木々」の墨書がある。筆幅0.2cmで、丁寧に篆書体で書かれる。11はE-17区出土で、体部外面に墨書「口」がある。筆幅0.5cmと太く、三筆が確認できるが、判読できない。12と13は杯蓋。12はD-20区出土で、体部外面を1/4程度ケズリ調整し、つまみは扁平なボタン状で大きい。13はE-17区出土で、体部1/3程度をケズリ調整し、かえしは内傾し直立。径14.0cm、高さ2.5cmを測る。14～16は杯形土器B類。14はE-17区出土の1/2個体。堅緻な焼成。口径14.0cm、高台径8.0cm、器高6.9cmを測る。底部ケズリ調整後にナデ、高台は内面接地。15はE-17区出土の1/2個体。底部は回転ケズリ調整後、貼り付け高台。高台は凹状。口径13.0cm、高台径10.0cm、器高3.8cm。16はE-16区No436で、口径9.0cm、高台径5.0cm、器高5.0cmを測る。丁寧に作りで、内面に磨耗は認められない。17はE-17区出土の短頸壺D類口縁部破片。18はE-16区No433で、短頸壺A類の口縁部。口縁直立し、端部は角頭状。外面縄巻き状の工具で叩き締めが斜め横方向に施される。内面は年輪のある直径3.5cmの当て具で締められる。19から25は黒色土器。19はD-20区出土の杯A類1/2個体。体部やや張り、口縁は真直ぐに立ち上がる形態。内面は良好にナデ調整され黒光りする。底部から外面はナデ調整。口径13.0cm、底径5.0cm。20はE-16区No439で、回転糸切り離し、底部ケズリ調整の杯。口径13.0cm、底径5.5cm、器高2.8cmを測る。内面良好にミガキ調整され、黒光りする。21はE-16区出土の杯で、20と同様な成形・調整で、口径15.0cm、底径13.0cm、器高3.5cmを測る。底部の糸切り離し痕跡は、ケズリによりほぼ消し去られる。22はD-20区出土の1/3個体。口径13.0cm、底径5.0cmを測る。外面には「黒漆」と思われる付着物がある。23はE-17区出土で、底部形態は緑釉陶器に似せて作られている。24は底部の破片で、内面に刻書「八千」がある。内面ミガキ調整後に刻書されるが、焼成前であるか後であるかの判断は難しい。幅0.1cm前後の金属製工具で刻まれる。外面には「黒漆状」の付着物がある。D-20区溝底上面からの出土。25は鉢形土器の底部破片か。内面にはべつとりと「イオウ状」の付着物がある。26はD-20区出土の土師器壺1類の体部破片か。焼成前刻書「八千」が正位に記される。「八」の二画目のはらいは長く、力強い。27はD-20区出土の土師器杯Aの1/2個体。体部の張る椀形の形態で、底部糸切り離し手法。ロクロ成形痕を明瞭に留め、口唇直下に沈線状に一条入る。体部には正位に「八千」が焼成前刻書される。「千」の字は二画と三画の書き順は逆で、二画は右から左に刻まれる。28はE-16区出土の土師器椀底部。高台貼り付け後に、指頭により抉るようにナデ接合させる。本遺跡では、このような接合例が2例ある。29から32は灰釉陶器。29はD-20区2片とD-15区12片の接合した皿。高台は、外削ぎ状の端部で、高台内はケズリ後ナデ調整。口唇は緩く反する形態。

溝底



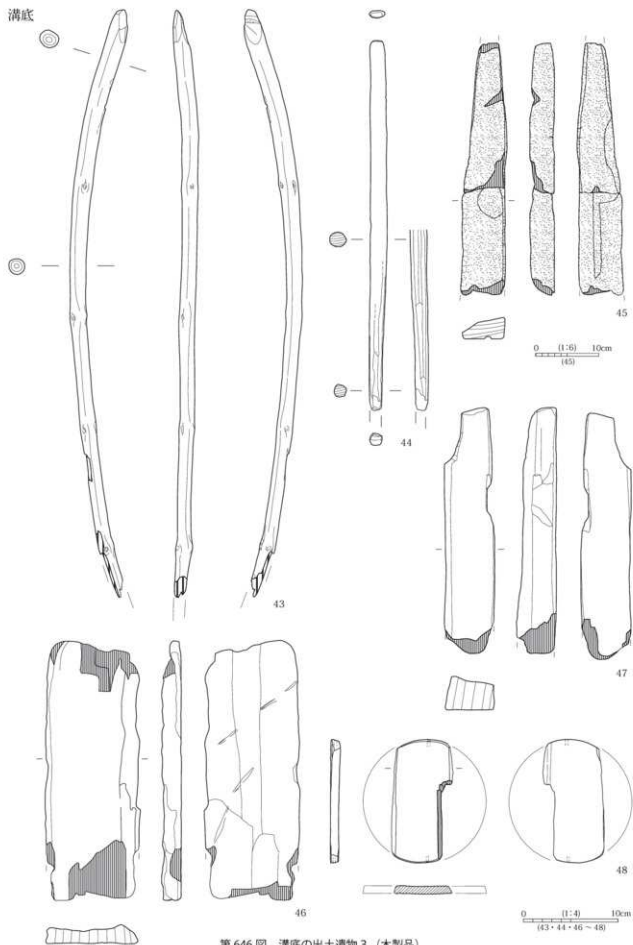
第644図 溝底の出土遺物1 (土器)

溝底

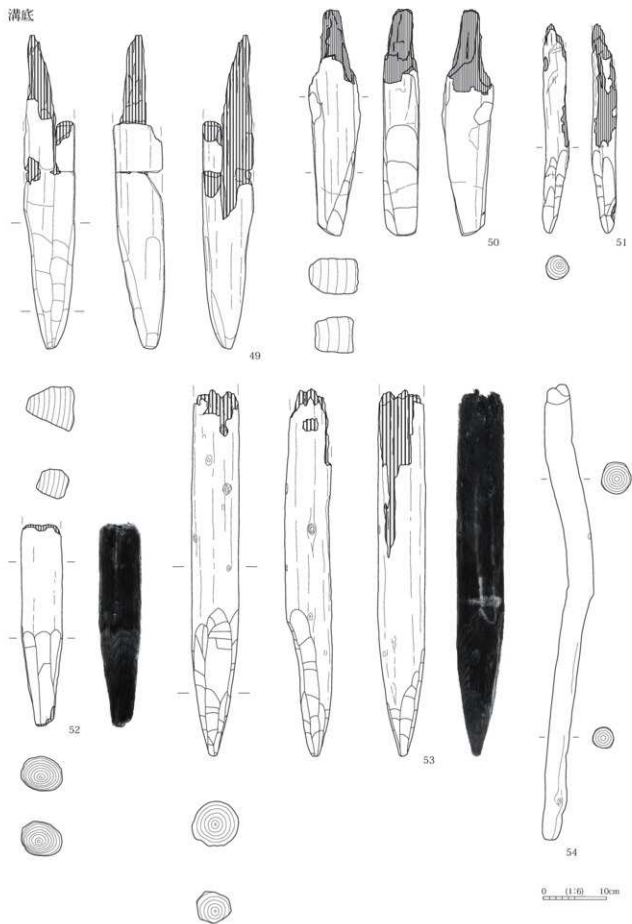


第645図 溝底の出土遺物2 (木製品)

溝底



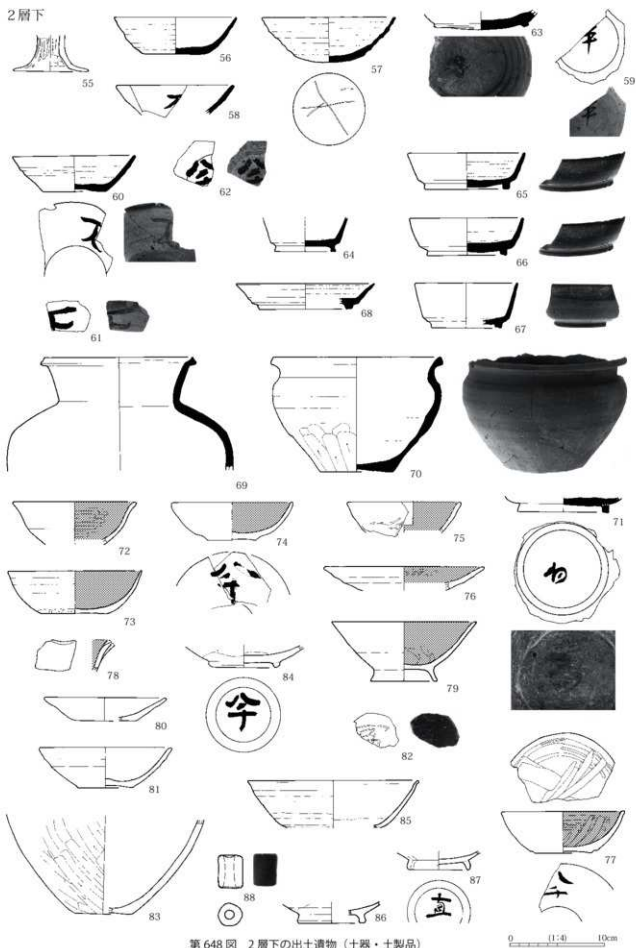
第646図 溝底の出土遺物3 (木製品)



第647図 溝底の出土遺物4 (木製品)

2層下出土の資料 (第648図・第654図・第655図)

55はD-20区No44で、非ロクロ土師器の高杯脚部。薄手で丁寧なミガキ調整が施される。脚は筒状。56から71は須恵器。56～62が杯A類。56はE-17区出土の2/3個体。回転糸切り離し調整で、ロクロ成形痕を明瞭に留める。口径12.0cm、底部内径6.5cm。胎土中には、白色微粒子をはじめ、多くの混入物がある。57はE-17区出土で、内外面にロクロ成形痕を明瞭に留め、底部はヘラ切り離し手法。底部には、ヘラ書きにより「×」印が刻まれる。58はE-16区出土の口縁部破片で、外面に墨書「□」がある。二筆確認でき、「ㄨ」であろうか。59はE-17区出土の底部破片。回転糸切り離し調整。底部内径7.5cmを測る。底部に「平」の字。60はE-17区出土の杯1/3個体。底部糸切り離しで、口径13.0cm、底部内径6.5cmを測る。体部外面に正位にて墨書「ㄨ」が書かれる。筆幅0.3cmで、二画と三画は「人」様になる2類。61はE-16区2層下から溝底にかけて出土した口縁部破片。体部外面に正位「ㄨ」が書かれる。筆幅0.4cmで、筆順は1類。62はE-17区の底部破片で、「八千」の墨書がある。63はE-16区出土の杯B類底部であるが、底部が凸状を呈し、高台は付くが接地しない。64から68は杯B類。64はE-17区出土の径の小さい底部。65はE-17区出土の1/3個体。堅緻な焼成で、胎土中の混入物はほとんど目立たない。口唇は尖り気味に成形され、回転ケズリ調整、高台は平坦で磨耗する。66はE-17区出土の2/3個体。堅緻だが、胎土中に黒色粒子の混入物がある。底部糸切り離し後、回転ナデ調整。高台は凹形。口径14.0cm、器高3.8cmを測る。67はE-17区出土の1/3個体。68は口縁部が外反する形態で、口径14.0cm、高台径10.0cm、器高3.0cmを測る。高台は凹形で外面接地。E-17区出土。69はD-20区No52の甕A類。口唇端部は折り曲げ、外削ぎ状にナデ成形。体部内外面ともにナデによる調整仕上げ。70はE-16区No461・No449の甕E類、ほぼ完形の個体。底部は縦方向のケズリ調整。71は杯B類の底部で、高台内に墨書がある。回転糸切り離し調整後ナデ調整、高台は平坦で端部は磨耗する。高台内には墨書「□」があるが、判読できない。72～79は黒色土器A。72はD-20区No398で、体部が屈曲して立ち上がる形態の杯A類。73は体部やや張り口縁が真直ぐに立ち上がる器形で、底部はケズリ調整。内面は黒光りするほどミガキ調整される。口径13.0cm、底径8.0cmを測る。E-17区出土。74はE-16区出土の2/3個体。口径13.0cm、底径5.0cmを測る。底部は強い横ナデにより凸状となる。体部外面に正位で「八千」が書かれる。筆幅0.4cm勢いのある字風。75はD-20区出土の杯A類で、体部外面に正位に刻書「八千」が記される。76はD-20区No89の盤B口縁部破片。外面にはロクロ成形痕を残し、内面は黒光りするほどにミガキ調整する。推定口径15.0cmを測る。77はD-20区No123、杯Aの1/2個体。口径13.0cm、底径6.5cmを測る。内面に十字状にミガキ暗文様の調整が入る。体部外面には墨書「八千」が正位に書かれる。78は片口鉢の口縁部破片。E-17区出土。79はE-17区出土の椀1/3個体。口縁は朝顔形に開く形態で、口径16.0cm、高台径7.0cmを測る。80～83は土師器。80はD-20区出土の皿1/2個体。底部糸切り離し後、ナデ調整。口径13.0cm、底径6.0cm、器高2.3cmを測る。内面全体ににス状の付着物がある。81はE-16区出土の杯A類。82はD-20区出土の体部破片で、刻書「富々」が記される。83はD-20区出土の甕の胴下半部の個体。縦方向のケズリ調整が施される。84～87は灰釉陶器。84はD-20区出土の椀底部。高台内に、「八千」の墨書がある。黒唐90号窯式か。「千」の一面ははねず、三画をはねる書き風。85はE-16区出土の椀口縁部破片。86はE-17区出土の底部破片。高台は焼成前のヘタリ及びヒッカキキズが激しく、やや変形する。87はD-20区出土の底部。高台内に「直」の墨書がある。筆幅0.2cmでしっかりと書かれる。体部は意識的に打ち欠いたような欠損状況を示している。88はD-20区出土の土錘。長さ3.4cm、径2.4cm、23.7gを量る。その他、D-20区からは黒色土器Aの杯A類底部に、「漆状」付着物のある資料1点がある。No43は黒色土器A杯A



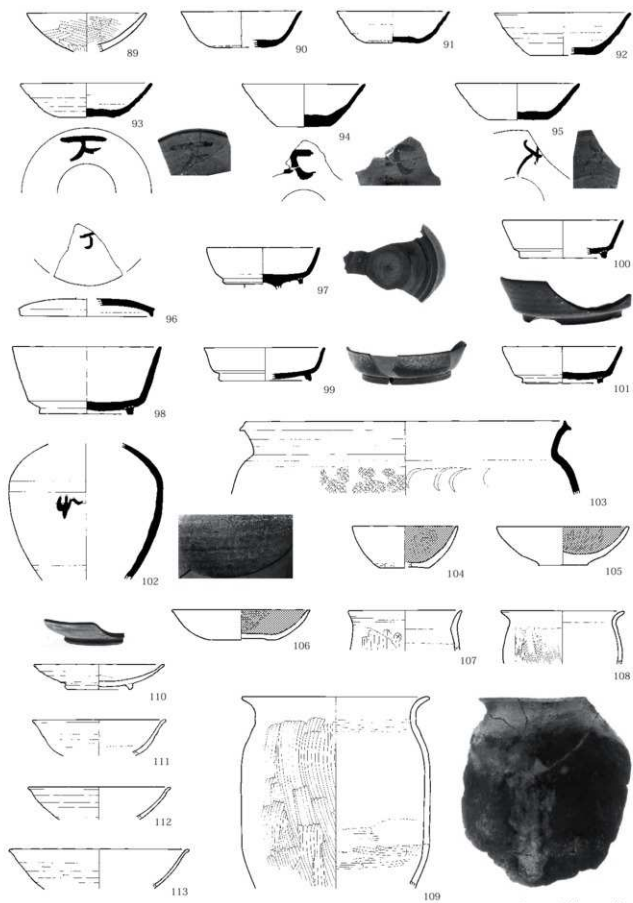
第648図 2層下の出土遺物（土器・土製品）

類の底部で、外面に「黒漆」がべつとりと付着している。灰釉陶器椀底部破片2点には、内面に墨汁痕が観察できた例1点と、高台内に墨書「□」の書かれた例1点が出土している。E-17区から灰釉陶器椀の底部破片1片があり、高台は高く、1.2cmほどあり、端部外側をナデ調整し外削ぎ状となる。高台内に墨書「□」の一部が確認できる。また須恵器杯A類底部破片が1点あり、体部に墨書「□」の一部が観察できる。墨書「千カ」のある黒色土器Aの杯A類の底部破片2点がある。おそらく「八千」と考えられる。筆幅0.6cmと太い。E-16区から須恵器杯A類底部破片が出土。体部外面に筆太0.8cmの墨書「大」がある。二画と三画は「人」様の書き風で2類。E-16区から墨書「□」のある須恵器杯A類口縁部破片2点と、墨汁痕ある灰釉陶器椀破片1点がある。D-20区No53・No139は灰釉陶器椀の1/4個体。高台高く外削ぎ状。内面に墨汁痕があり、高台内部には「八千」の墨書がある。筆幅0.25cm。No47の灰釉陶器椀底部は、高台内に墨書「□」と内面に墨汁痕がある。またD-20区出土の黒色土器B杯A類?の口縁部小破片には、外面に正位に刻書「鼎か」が篆書体で書かれる。焼成後の刻書。第654図185はD-20区出土の下駄。縦木取りで、ヒノキ科。一木で作る連歯下駄。前歯、後歯とも腐蝕がひどく、形状がはっきりしない。左か右がは不明。前孔は半孔。後孔から下部が破損する。前孔の中心部が破損してやはり半孔のみ残る。186はD-20区出土の部材か。柾目材でヒノキ科。表面を削り、面加工する。断面形状は扁平。両端部欠損。187はD-20区No84で栓状木製品。スギ材の削り出し。一部欠損しているが、上部平面形はほぼ五角形に作り出される。下部はほぼ円形に加工。木目ははっきり残る。188はD-20区の板材。部材か。追柾目のヒノキ科。両端部は緩やかに曲がり、加工が施される。表面に刃痕が残る。189はD-20区No83の板材。柾目のオニグルミ材。板材を加工し、形状は三角形に近い。下端は切断。片側面は緩やかに斜めに削られ、幅が細くなる。両面とも平滑。190はD-20区出土の柄。削り出しでヒノキ科。断面は長方形から楕円形に近い。191はE-17区No39の棒状木製品。ヒノキの削り出し材。顔料らしきものが付着する。

2c層・2c層下部出土資料(第649図・第650図・第655図)

本層は2層の下部に堆積した土層で、土層観察用畔のC-C'(P654)付近にて確認した。流路の面的調査では、確認が難しく、主にE-16区を中心に遺物は取り上げた。堆積の上下はあるが、遺物包含層としては、2層下とほぼ同一層順と考えられる。89はクワロ土師器高杯の皿部。内面横方向の丁寧なミガキ調整。90～103は須恵器。90～95までが杯A類。90は1/3個体。底径6.0cm、底部ヘラ切り離し手法。胎土緻密で堅緻。91は1/3個体で、底部糸切り離し後、底部外周にケズリ調整を施す。底部には十字にカスレ状の痕跡が付く。内面は使用痕であろうかツルツルする。底部内径6.5cmを測る。92はE-17区No469の1/2個体。口径14.0cm、底部内径7.0cmを測る。内外面に「イオウ状」付着物がある。93はE-16区No463で1/4個体。口径13.0cm、体部外面に墨書「大」が正位に書かれる。筆幅0.5cmで書き風は1類。94は2/3個体。口径14.0cm、底部内径5.5cmを測る。底部が非常に厚い作りで、0.8cmほどある。回転糸切り離し後、ヘラおこし、外周ヘラケズリ調整。体部外面に正位にて墨書「大」が書かれる。筆幅0.6cmで1類の書き風。95はE-16区No445で、口径13.0cm、底部内径6.3cmを測る。体部に横位で「大」が墨書される。筆幅0.3cm。内面は使用痕であろうか、ツルツルする。96は蓋形土器破片。かえし部は垂直で端部やや外反。体部に墨書で「大」が、筆幅0.3cmで書かれる。三画は不明瞭。「大」の可能性もある。97はE-16区No467の高杯?。杯B類に脚の付く珍しい形態(香炉形か?)である。胎土は堅緻で焼成は良好。口径11.0cm、高台相当部径9.0cmを測る。98～101は杯B類。98はE-16区No474で1/2個体。口径16.0cm、高台径9.0cm、器高7.0cmを測る。口唇直下は強い横ナデ調整が施される。底部糸切り後、回転ケズリ調整。凹状の高台。99は2/3個体。糸切り離し後、回転ケズリ調整、高台は内削ぎ状で、外面接地。口径13.0cm、器高3.5cm

2c層・2c層下



第649図 2c層・2c層下の出土遺物1 (土器)

を測る。「漆状」の付着物がある。100は1/4個体。外面接地高台で、口径13.0cm、器高4.0cmを測る。口唇部内面は使用により極度に磨耗する。101は1/2個体で、口径13.0cm、器高3.8cmを測る。回転糸切り離し後、回転ケズリ調整。高台は低く、凹状の形態。高台内に墨汁痕及び墨書らしき痕跡があるが、判読できない。102はE-16区No465の長頸甕体部。ロクロ成形痕を横ナデにより調整する。体部に正位にて「八千カ」の墨書が書かれるが判然としなない。103は甕E類口縁部。口唇端部折り返し、外削ぎ状にナデ調整。体部は板状工具による叩き締め、内面は年輪のない当て具で締められる。104～106は黒色土器A類。104はE-16区No468で、1/4程度の破片。内面は放射状に極めて良好なミガキが施される。105はE-16区No457とNo470で口径13.0cm、底径5.2cmを測る。内面は黒色処理し、放射状の暗文様ミガキ調整が施される。体部外面に刻書「千カ」がある。上半欠失するが、「八千」であろう。106は杯Aの1/2個体。内面のミガキは良好で黒光りする。底部糸切り離し後、ケズリ調整。口径14.5cm。107は土師器の小型甕口縁部破片。口縁は横ナデ、体部は縦方向のケズリ調整を施す。108は胴の張る小型甕で、体部縦方向の刷毛目調整が施される。109は甕B類の1/3程度の個体。幅1.5cmの板状工具による刷毛目調整が外面縦方向に、内面横方向に施される。内外面に多量の煮こぼれが付着する。110～113は灰釉陶器。110は皿2/3個体。体部にロクロ成形痕を明瞭に留め、高台は低く三日月状。刷毛塗り手法。111はロクロ成形痕を留め、体部下半の広い範囲にケズリ調整を施す椀口縁部破片。刷毛塗り手法。112は椀の口縁部破片。113は推定口径20.0cmを測る大椀の口縁部破片。口唇やや折り縁となり、施釉は刷毛塗り手法。この他、須恵器杯A類で、墨汁痕と墨書「□」のある口縁部破片1点、墨書「□」のある口縁部1点と底部1点、墨書「□」の三画まで判読可能な口縁部破片1点、そして体部に刻書「十カ」のある口縁部破片1点がある。No466Aは口縁部破片で筆幅0.7cmで、墨書「草」があり、四画まで判読できる。また「漆状」付着物のべっとり付いた黒色土器Aの杯A類口縁部破片1点と、灯明痕状に付着物のある須恵器杯A類口縁部破片1点が出土している。122はNo471の須恵器杯A類外形。回転ロクロ整形、ナデ幅0.7cmを明瞭に残し、凹凸状になる。糸切り離し後、ヘラおこし。口径12.0cm、器高3.8cm、底径5.2cm、内底径5.9cm。外面に「任」の墨書あり、0.4cm、直筆で入り、止めが明瞭で、丁寧な書き風である。内面には「漆状」の付着物がべっとり厚みをもって付く。付着物には長さ5.4cm、幅2.2cmの紙の断片が付着していた。状況から漆紙と考えられ、赤外線観察を行った結果、9文字を判読できた。「十月十一日 正税 甘東」。内容から出展帳の可能性を考慮することができる。年月日は1文字0.4cmで、下4文字は0.6cmと極めて小さな文字で書かれる。詳細については、642ページに記す。123は須恵器甕A類のほぼ完形個体。No465が1片、No466が111片、No468が6片、計118片の接合資料。他に7片の同一個体資料がある。復元口径30.5cm、器高52.1cmを測る大甕である。192は漆塗りの櫛。背に木口がある。イスノキ材。板片の一侧縁から細い歯を挽きだし、表面を平滑に研ぎあげた横櫛Ⅱ型。形状は長方形。肩部に丸みをもたせる。一端及び歯が欠損。3.0cm間に25本前後とやや目が粗いか。表面のみ黒漆が残る。193は弓か。芯持ち丸木材。針葉樹。単純弓であろうか。弓幹(ゆから)は1本の丸木からなる。弓の一端部のみ残ったものと考えられる。未強か本羽。194は棒状木製品。削り出しのサワラ材。角材に面を取って棒状にしたものか。端部は木裏を削る。195も194と同様な製品と考えられ、サワラ材。端部両側面を斜めに切り落とす。先端部は尖らない。196は曲物。柃目のヒノキ科。曲物と考えられるが、破損が激しいため、円形なのか長方形なのか不明瞭。周縁に段をつけるタイプ。皮結合部とも考えられる穴がある。

2b 層出土の資料 (第651図)

114はE-16区No455で、須恵器杯A類1/3個体。底部糸切り離し調整。口径12.5cm、底部内径7.5cmを測る。115はE-16区No453で須恵器杯B類1/2個体。口径15.0cm、器高6.5cm、高台は平坦で角状。



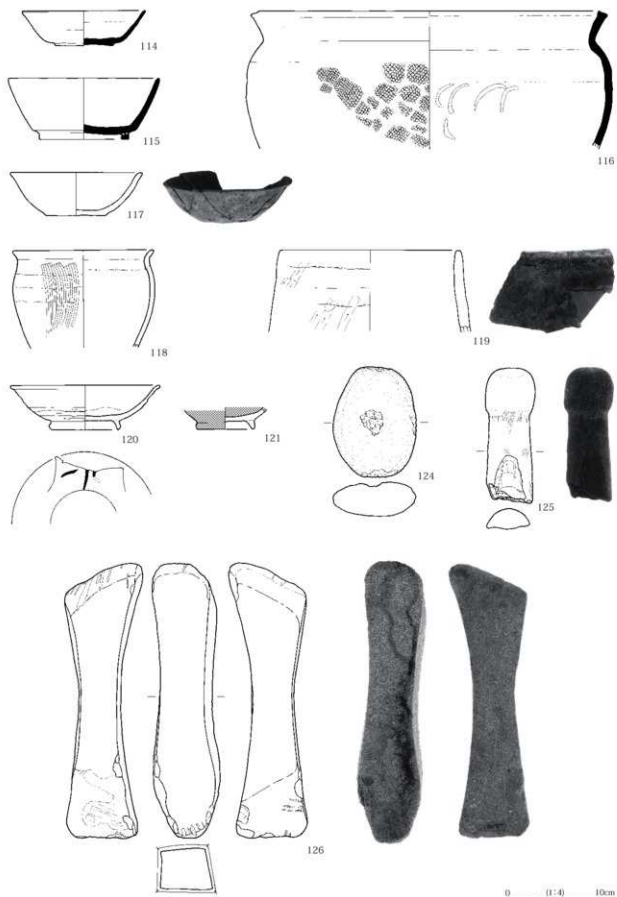
第650図 2c層・2c層下の出土遺物2(土器)

116はE-16区No456で、須恵器甕E類の口縁部破片。口唇端部つまみ上げ状に突出し、体部は布巻きの板状工具、3.5cm幅で叩き締められ、内面は年輪の不明瞭な径3.5cm程度の当て具で押えられる。117は土師器の杯A類、ほぼ完形。口径14.0cmを測る。内外面とも風化が著しく、胎土中の赤色粒子が浮き出た状態である。118はE-16区No451で土師器小型甕の口縁部破片。口縁部は小さく、体部の張る形態、外面縦方向に幅1.0cmほどの刷毛目調整が施される。119は非ロクロの土師器、甕形の土器であろうか。体部に刷毛調整が部分的に入る。120はE-16区No448で灰軸陶器碗の体部。口唇折り縁状に外反し、高台は三日月状、体部に墨書「平カ」が書かれる。121はE-16区No450・No447の黒色土器B類の碗底部破片。底部糸切り離し後ナデ調整仕上。124はE-17区の凹石。安山岩材で、11.5×8.5×3.7cm、493.3g。表及び側面にアバタ状の敲打痕がある。125はE-16区出土の石棒片。ホルンフェルス材か。縦横位に欠損し、14.2×5.3×2.6cm、270.4gを量る。126は中粒砂岩材の置き砥石、完形。28.7×8.8×6.8cm、176.2g。砥面は表裏側面の6面にあり、部分的に筋状砥面を合わせ持つ。表面の砥面は27.0×5.7cmを測る。

2層出土資料(第652図・第653図・第655図)

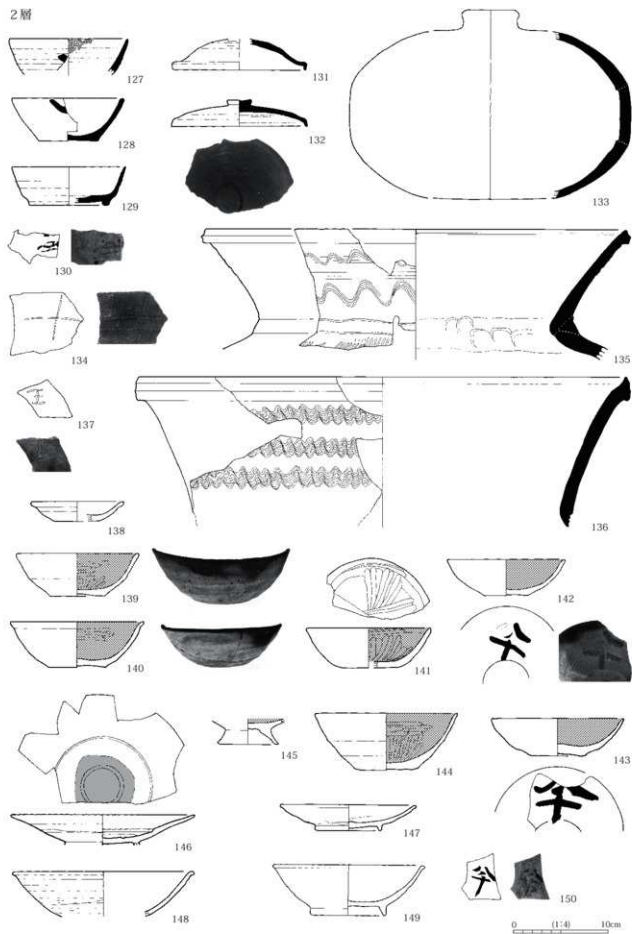
127～136は須恵器。127はE-17区の杯A類口縁部破片。外面に墨書「□」がある。128はD-20区の杯A類2/3個体。口径13.0cm、底部内径6.0cmか。体部外面に正位にて墨書「八千」が筆幅0.5cmで書かれる。129はE-17区出土の杯B類。130はD-20区出土の杯A類底部小破片。底部に墨書「忍カ」が書かれる。筆幅0.15cmで勢いのある筆使い。131はE-17区出土の蓋1/3個体。径13.0cmを測り、かえしは垂直に立つ形態。体部外面1/2程度をケズリ調整する。墨痕が2箇所にあるが、文字としては判読できない。132は蓋1/3個体。体部外面2/3以上をケズリ調整する。かえしは直立し、つまみ部は扁平なボタン状。133はD-20区No403の横瓶の体部破片。側面は円盤状の粘土貼り付け、外面は丁寧なナデ調整。134は甕A類の頸部小破片。焼成前のヘラ書きで「十」がある。幅0.15cmの金属製工具による。135及び136は甕A類の口縁部破片。137は土師器甕I類もしくは鉢形土器の体部小破片。外面横位に「王」の刻書がある。幅0.15cmで、二画と三画の筆順に誤りがある。138はE-17区出土の土師器皿1/4個体。口径10.0cmを測る。139～145まで黒色土器。139～143は杯A類。139はD-20区No137の1/2個体。外面ロクロ成形痕を留める。内面良好なミガキ調整で、放射状の暗文様に施される。口径13.0cm、底径6.0cmを測る。140はD-20区No48で、外面にロクロ成形痕を残し、内面は良好なミガキ調整により黒光りする。口径14.0cm、底径5.7cmを測る。141はD-20区No404の1/2個体。口縁部強い横ナデ調整が入る。口径13.0cm、底径5.5cm。内面は放射状の暗文様ミガキが顕著。142はD-20区No40の2/3個体。口径11.0cm、底径5.0cm、底部に焼成前の三角形刻み印「△」が入る。外面に筆幅0.6cmで墨書「八千」が入る。143はE-16出土の口縁部破片、体部に正位で「八千」が書かれる。筆幅0.4cm。144はD-20区No54の2/3個体で、口径14.0cm、器高5.5cm、底径6.3cmの大型品である。外面は幅1.8cmほどの大きなロクロ成形痕を留め、内面は良好なミガキ調整が施される。145はD-20区No57の盤B類の底部破片。高台部は貼り付け、つまみ調整で、ナデ等の仕上げは施されない。高台高1.6cmを測る。146から150は灰軸陶器。146はE-16区出土の段皿1/2個体。口径18.0cmを測る大型品で、高台部は人為的な打ち欠き痕が観られる。内面には朱墨痕がある。刷毛塗り施釉で、光ヶ丘I号窯式か。147はD-20区の皿1/3個体。底部は丁寧なケズリ調整で高台は低い。148はD-20区出土の大碗口縁部破片。推定口径18.0cmを測る。口唇折り縁状、刷毛塗り手法。149は碗1/2個体。高台は厚く高い形態で、口唇折り縁状。内面に墨汁痕が観られる。150はE-16区出土の皿?の体部小破片。横位に丁寧な文字で「八千」が墨書される。筆幅0.3cm。151はD-20区No139・No53で、灰軸陶器碗2/3個体。口径

2b層



第 651 図 2 b 層の出土遺物 (土器・石器)

2層



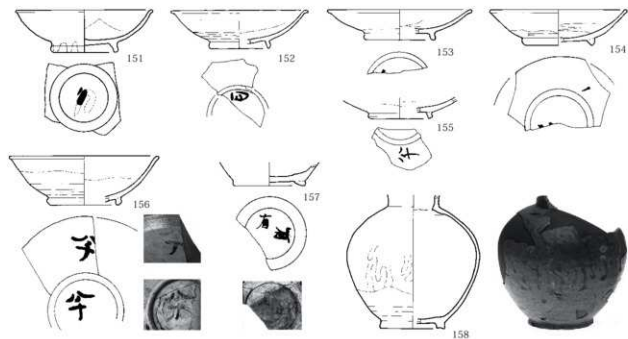
第652図 2層の出土遺物1 (土器)

14.5cm、高台径 7.0cm。口唇は折り縁状。高台は焼成前の潰れがあり、キズも著しい。高台内に墨書がある。「八千」の上から一字書いたようにも見えるが定かではない。152 は D-20 区出土の椀形土器で、口唇は強く折れ曲がる形態で、高台はやや高い。施釉は刷毛塗り手法。高台内に墨書「四」がある。筆幅 0.15cm。153 は D-20 区 No45 で 1/3 個体。口唇玉縁状で、施釉は刷毛塗り手法。高台内に墨書「□」がある。光ヶ丘 1 号窯か。154 は D-20 区出土の浅い椀 1/2 個体。高台は低く潰れた三日月状。施釉は刷毛塗り手法。高台内に墨書「□」がある。155 は D-20 区出土の椀底部破片で、底部外面に横位で「八千」が書かれる。筆幅 0.15cm と細い。156 は D-20 区出土の椀で、体部と高台内に墨書「八千」がある。157 は D-20 区 No140 の長頸壺 1/3 個体。底面の半分を欠失するが、「有」の墨書が 2 箇所にある。本来は 4 箇所にあったか。0.1cm 程度の細書きで丁寧に書かれる。158 は D-20 区と D-15 区検出面、E-16 区 2 層出土資料が接合した例で、長頸壺の 1/3 個体。159 は緑釉陶器の瓶類の底部か。D-20 区 No117 と 2 層出土 4 片、D-14 区溝底出土 1 片、E-16 区 2 層 1 片の接合資料。底径 20.0cm を測る。高台部分は欠失してない。160 は D-20 区出土のタギ。現存の大きさは、長さ 2.7cm、径 0.3cm、重さ 0.8 g。161 と 162 は D-20 区 2 層中にて検出した焼土ブロックから出土した黒色土器 A の杯 A 類である。内面はミガキ調整されるが、光沢は帯びない。また 1 点底部破片で刻書「□」のある資料が出土している。その他、E-16 区から墨書「千カ」のある黒色土器 A 杯 A 類の底部 1 点、灰釉陶器椀底部に墨書「□」、おそらく「八千カ」1 点と高台内に「八千」と墨汁痕ある底部 1 点、朱墨痕ある底部破片 1 点、墨汁痕ある底部 1 点がある。D-20 区では灰釉陶器椀底部に墨書「□」、おそらく「八千カ」と朱墨痕ある例 1 点、さらに朱墨痕ある底部 1 点、墨書「□」ある須恵器 1 点、刻書「□」のある黒色土器 B 類 1 点、鉢形土器の体部に刻書「八」のある例 1 点がある。E-17 区では、灯明痕状の付着物のある須恵器杯 A 類口縁部破片が 1 点あり、体部外面には筆幅 0.65cm で墨書「□」がある。また D-20 区から灰釉陶器の長頸壺 1/3 程度の個体があり、D-12 区 2 層下、E-16 区 2 層下、SK658 と接合関係にある。197 は E-16 区出土の部材。削り出しのモミ属。一端にホゾ加工がある。1.8cm × 横 1.5cm × 厚み 1.0cm。198 は E-17 区出土の容器。蓋板か。追柱目のヒノキ科。木目に沿って欠損。199 は D-20 区出土の板状木製品。柱目のクリ材。曲物か。右側面に等間隔に半穴が 3 箇所ある。

2a 層出土資料 (第 653 図・第 654 図)

163 から 169 は須恵器。163 は E-16 区 No38 の須恵器杯 A 類 1/3 個体。底部糸切り離し後ヘラおこし。口径 13.0cm、底部内径 8.0cm を測る。内面は使用痕によるものか、ツルツルする。164 は E-16 区 No82 の杯 A1/3 個体。回転糸切り離し調整。口径 13.0cm、底部内径 7.0cm を測る。165 は E-16 区 No36 で須恵器杯 A 類 1/5 程度の個体。外面にロクロ成形痕を明瞭に留める。推定口径 13.0cm。外面に墨書「田」が筆幅 0.3cm で書かれる。166 は E-16 区 No83 の蓋 1/4 個体。体部 1/2 程度ケズリ調整し、かえしは低く、内傾する。167 は E-16 区 No93 の杯 B 類 1/2 個体。口径 16.0cm、器高 6.8cm を測る。高台は平坦。体部外面に横位で「大」の墨書がある。筆幅 0.3cm。168 は短頸壺の体部上部の個体。169 は E-16 区 No92 の壺 1/3 個体。口唇は垂直に折り返し立つ形態で、内外面ともに丁寧にナデ調整される。170 は E-16 区 No116 で、灰釉陶器の短頸壺の蓋か。1/2 欠損例で、径 14.0cm を測る。171 は E-16 区 No29 の黒色土器 A 杯 A 類 2/3 個体。口径 13.5cm、底径 6.0cm、器厚がありどっしりする。172 は E-16 区 No108 で、内面は横方向の良好なミガキ調整が入る。173 と 174 は輪の羽口破片。173 は E-16 区 1 層の出土で、174 は E-16 区埋土の出土である。175 ~ 177 まで土師器類。175 は E-16 区 No81 の口縁部破片。如意形の口縁で、体部縦方向の刷毛目が入る。幅 1.0cm で目の細かな板状工具か。176 は E-16 区 No34 で、ほぼ完形の甕 B 類。

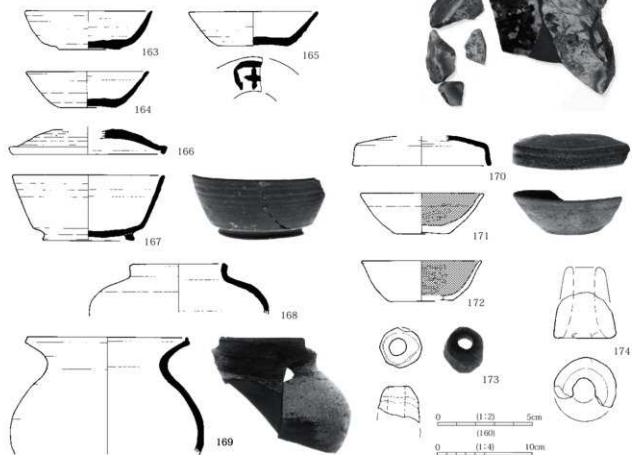
2層



焼土

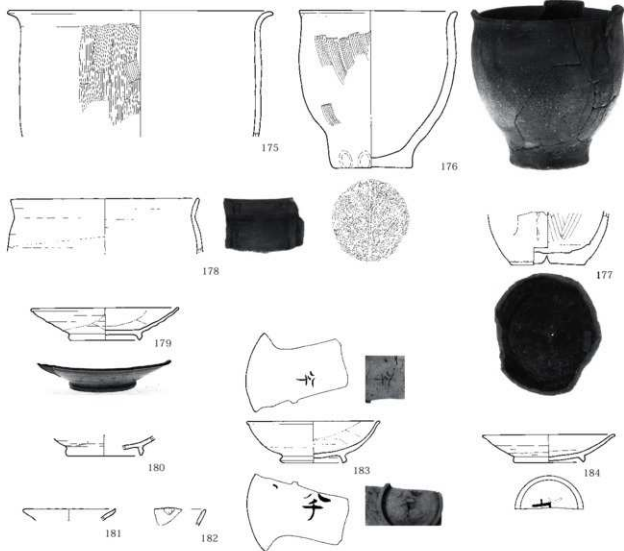


2a層



第 653 図 2層の出土遺物2 (土器・土製品・金属製品)

2a層

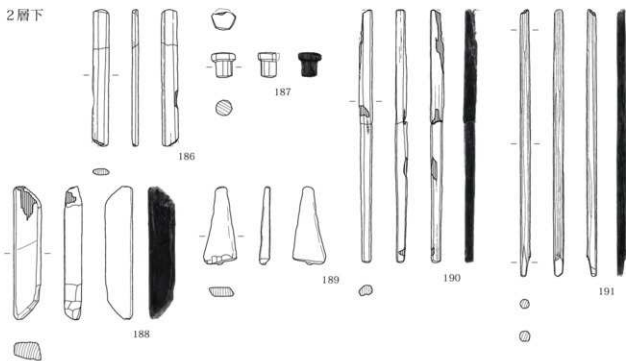


2層下

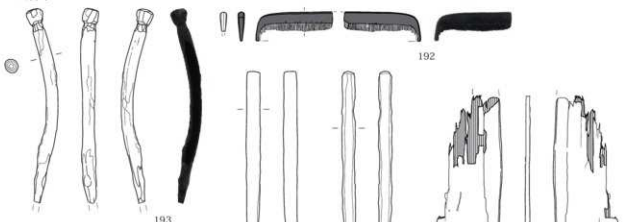


第654図 2層・2層下の出土遺物3 (土器・木製品)

2層下



2c層下



2c層～2層



第 655 図 2層下～2層の出土遺物 (木製品)

小振りな作りで、口縁部はやや直立気味に開き、体部は縦方向の刷毛目調整。175と同一の工具であろうか。177はE-16区No72の裏底部で、外面には焼成前刻書「千カ」がある。底部糸切り離しで三角刻目印「△」がある。また内面には、紡織具の回転痕らしき使用痕跡が多数ある。178はE-16区No74で土師器甕1類の口縁部破片。外面には墨痕のような痕跡がある。179～184はE-16区出土の灰軸陶器。179と180は椀。179はロクロ成形痕跡が比較的明瞭な個体。180はE-16区No28で椀の高台部分。内面には墨汁痕らしき痕跡がある。181は長頸瓶の口縁部破片で、182は輪花椀口縁部の小破片。183はE-16区No69で輪花椀1/2個体。体部外面に横線で「八千」が、高台内にも「八千」が墨書される。184はE-16区No111の輪花椀の1/2個体。口径15.0cm、口唇折り縁状で、高台は低く、端部磨耗する。高台内には墨痕らしき痕跡がある。高台内部に墨書「井カ」のある椀底部。この他に、E-16区No66は墨汁痕のある灰軸陶器椀底部破片であり、また中世陶磁器の破片2片も同層から出土している。

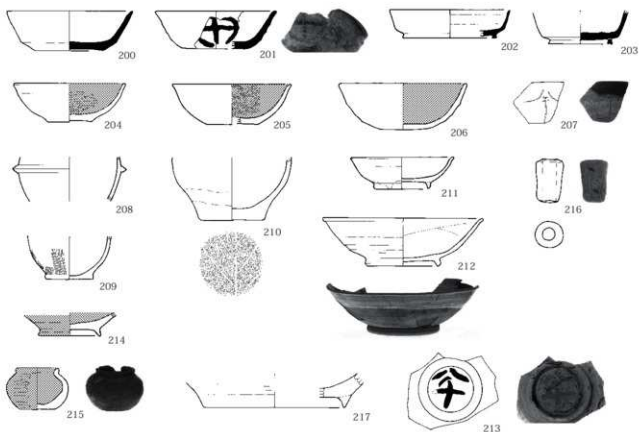
1層出土資料（第656図）

200～203は須恵器。200はD-20区No25の杯A類ほぼ完形個体。口径13.5cm、底部7.0cm、底部内径8.8cmを測り、底部凸状に張り出す形態。内面は使用によるものか、ツルツルする。201はE-16区出土の杯A類1/4個体。体部外面にロクロ成形痕を著しく留める。底部糸切り離しで、口径13.0cm。外面に正位に「田」の墨書がある。筆幅0.3cm。202はE-17区の杯B類1/5破片。口径12.0cm、器高3.1cmを測る。高台は平坦。硬質で焼成は良好である。203はE-16区の杯B底部で、高台径7.0cmを測る。やや凹形で、底部は回転ヘラケズリ調整。204～207は黒色土器杯A類。204はE-16区No30の杯A1/2個体。口径12.0cm、底径4.5cm、底部凸状に張り出す形態。205は杯A類でD-20区出土の1/2個体。内面は放射状にミガキ調整される。口径13.0cm、底径5.0cm。206はE-16区出土の1/3個体で、底部ケズリ調整。207は杯Aの口縁部破片で正位に刻書「八千」が刻まれる。幅0.15cmの金属製工具による焼成前刻書。208から210は土師器。208はE-16区出土の体部に罅のある釜形土器であろうか、口径はかなり小さい。209はE-16区出土の底部。器壁は薄く、縦方向に刷毛目調整が入る。210はE-16区No33の裏底部。体部下半ナデ調整し、底部には木葉痕がある。211はE-16区灰軸陶器小椀の1/3個体。口径10.0cm、高台径5.0cmを測る。施軸は漬け掛け。212はD-20区No49とNo50の灰軸陶器椀のほぼ完形個体。口径16.0cm、器高5.0cm、高台径7.5cmを測る。口唇は折り縁で、体部の2/3程度まで、回転ケズリ調整が施される。高台は低く、外削ぎ状。施軸は刷毛塗り手法。213はD-20区No51の椀底部で、高台内に「八千」の墨書がある。214はE-17区出土の黒色土器B類椀底部。高台部は低く、やや外反する。内外面とも風化著しい。215はD-20区No60の黒色土器B短頸壺の完形個体。外面良好にミガキ調整し、黒光りする。口径4.0cmを測る。216はE-16区の土鍾。長さ4.4cm、径2.9cm、32.4g。217はE-16区出土の中世こね鉢。この他、E-16区から刻書「八千」と考えられる文字のある黒色土器A杯A類口縁部破片1片と「田」と考えられる墨書の一部を確認できる須恵器杯A口縁部破片1点、墨汁痕の付いた灰軸陶器椀の底部2点、「漆状」付着物のある黒色土器杯A類の底部破片1点がある。緑軸陶器の椀体部の小破片がE-16区及びD-20区から各1点出土している。またE-17区から、弥生後期の箱清水式土器の小破片1片も出土した。

埋土中及び検出面出土資料（第656図）

218はE-16区出土の須恵器杯A類2/3個体。回転糸切り離し手法で、口径13.0cm、底部内径6.5cmを測る。219はD-20区No12の須恵器長頸壺1/3個体。肩部から頸部を欠失する。静止糸切り離した後、高台貼り付けナデ調整。220から224は黒色土器。220はD-20区壁際から出土した杯A類口

1層



埋土
検出面



第656図 1層～検出面ほかの出土遺物（土器・石器ほか）

0 (1:4) 10cm

縁部破片で、外面に、筆幅0.2cmで正位に「南カ」が墨書される。丁寧で立派な字風である。221はD-20区No294の2/3個体。内面は放射状に極めて良好にミガキ調整し、黒光りする。口縁部は強い横ナデにより緩やかに屈曲する。口径11.0cm、底径5.5cmを測る。222はD-20区出土で、底部へラおこし、ケズリ調整の杯A類で、口径15.0cmを測る大型品で、1/4個体。223はD-20区No120で、黒色土器B類の盤B類高台部分。高さ3.0cmを測る高い高台で、外面良好にミガキ調整され黒光りする。224はD-20区の黒色土器B類の耳皿、ほぼ完形個体。高台付きの耳皿B類か否かは判断できない。欠失しているようにも観察できる。口径6.0cm、底径3.5cmを測る。225は土師器盤の接合部。高台接合部は指頭により押えナデ調整される。226から229は灰釉陶器。226はD-20区出土の底部小破片で、高台内に0.15cmの墨書「□」と朱墨痕がある。227は底部小破片。高台内には筆幅0.2cmで墨書「大」があり、朱墨痕も観察できる。228はD-20区出土で灰釉陶器椀の底部破片。高台径4.0cmの小椀か。229はE-16区出土の短頸甕の蓋破片か。径14.0cmを測る。230は黒色頁岩材の磨製石包丁。半月形で両刃、1/2を欠損する。溝底から出土。現存の大きさ、10.4×6.2×0.8cm、78.8g。2穴で径0.6cm。この他、D-20区から土師器甕1類の口縁部破片2点があり、刻書「八千」が記される。いずれも小破片で判然としないが、同一個体であるなら、2個所に記されたか。黒色土器Aの杯A類口縁部破片には、筆幅0.7cmで墨書「□」がある。また、輪の羽口1点とすさ入りの焼成粘土塊5点(28.7g)がある。231はE-17区出土の板状木製品。箱形容器の一部であろうか。柾目のヒノキ材。左側面側、及び下方に径2mm前後の穴がある。また上部に1mmの穴があり、その穴より木目に沿って2片に割れる。両端は垂直に切断。鋸痕か。表面には塗料がぬられているか。



SD 03 ほかの出土木製品（農具関連）



Y-22区、E-2区川底の状態（北から）



南北道路の全景（雨天後の水没）



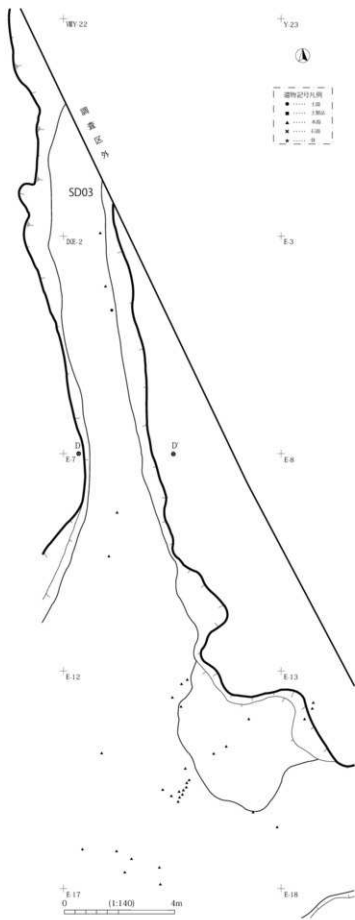
木製品出土状態（E-7区）



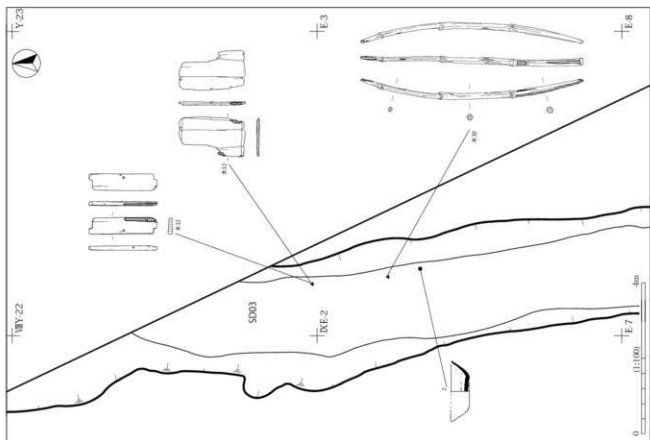
コロボシ出土状態（E-12区）



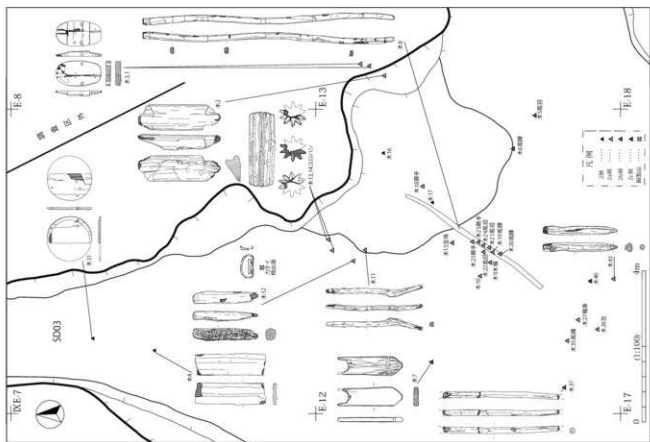
E-12区調査状況



第657図 SD03 南北道路の遺物出土分布



第 658 図 2層下遺物出土分布状態



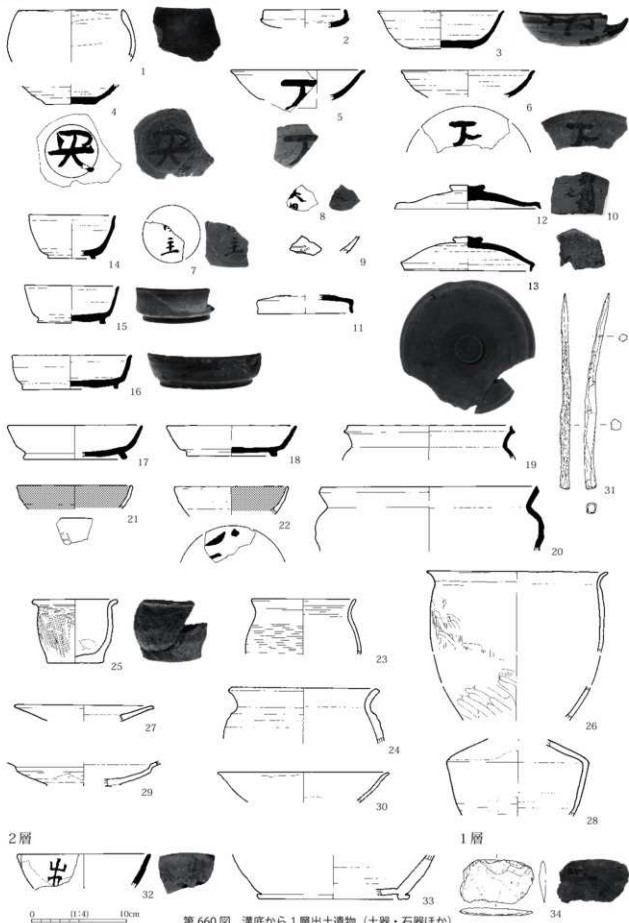
第 659 図 2層遺物出土分布状態

東西と南北流路合流点、E-12・13区

溝底出土の資料（第660図・第661図）

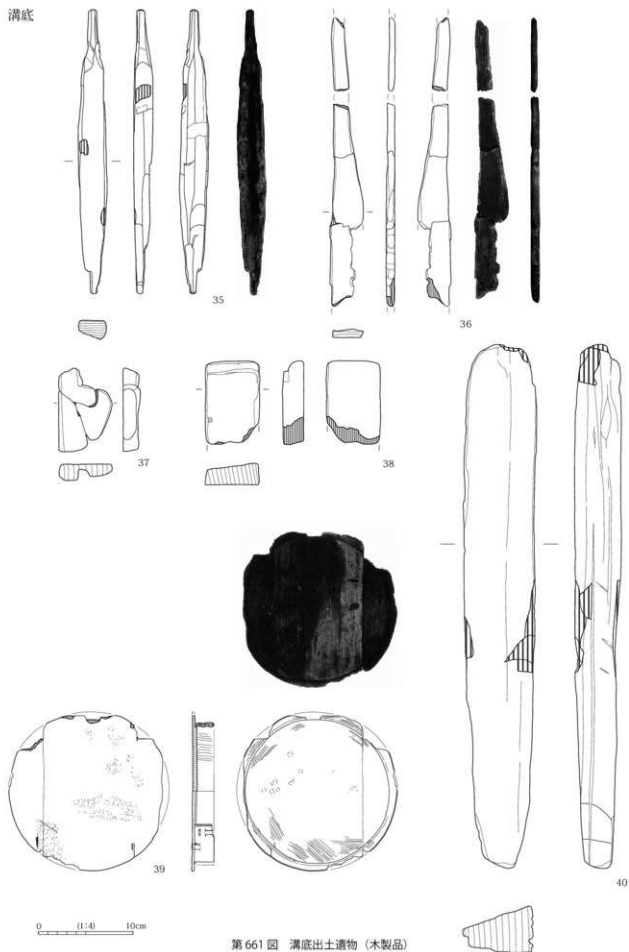
1は非ロクロ成形の杯口縁部破片。口縁やや内傾する椀形。内外面良好に横ミガキが施されるが、黒色処理はされていない。2～18は須恵器。2は杯H類の小破片。受け部はほとんど退化し形骸化する。口縁部は内傾し低く、端部丸味を帯びる。TK43型頃か。3～10は杯A類。3は2/3個体。回転系切り難し調整。口径13.0cm、底部内径7.5cmを測る。4は底部の破片で、墨書「突」が筆幅0.5cmで書かれる。四画は突き抜けない。5と6は、E-12区出土の口縁部破片。体部に正位にて「大」の墨書がある。5は筆幅0.6cm、6は0.5cmを測る。7はE-13区の底部破片。回転系切り難し調整で、墨書「口主」がある。筆幅0.2cm、「坂主」であろうか。8はE-12区の杯B類の底部破片と考えられる。小破片であるが、高台内部の底部であろう。筆幅0.1cm、一字0.8cmの小さな文字で、墨書2字「大田」が書かれる。9はE-13区の黒色土器A杯A類の体部小破片。0.15cmで刻書「守カ」が記される。10はE-13区出土の杯A口縁部及び底部破片。口径12.0cmを測り、外面にロクロ成形痕を明瞭に留める。器内外面には、「イオウ状」付着物がべっとり付着する。11と12はE-12区出土の蓋形土器。11はE-13区出土の短頸壺の蓋1/4個体。径9.0cmを測る。12は1/3個体で、体部1/3程度ケズリ調整し、かえし部はやや外反し低く、つまみは扁平なボタン状を呈する。13はE-13区出土で、ほぼ完全に近い蓋。径14.0cm、かえしは内傾。体部外面は1/2をケズリ調整する。つまみは扁平なボタン状。14～16は杯B類。14はE-13区出土の1/3個体。口唇直下に幅0.4cmの強い横線が入る。口径9.0cm、底径5.0cm、器高4.6cmを測る。15はE-13区の2/3個体。口縁直立し、口径11.0cm、器高3.8cmを測る。高台は凹形で非常に丁寧に作り出し、底部調整も極めて良好である。16はE-13区出土の2/3個体。口径13.0cm、高台径10.0cm、器高3.5cmを測る。口縁は垂直に近く立ち上がり、底部は系切り難し後、1/3程度回転ケズリ調整。高台は内面接地。17はE-12区出土の1/4個体。器高は低く、口縁外側に開く形態。口径12.0cm、高台径10.0cm、器高4.0cmを測る。18も17とほぼ同型で、E-12区出土の1/4個体。底部回転ケズリ調整、口径12.0cm、高台径9.0cmを測る。低い高台で凹形。19と20は甕E類口縁部破片、E-12区出土。19は口縁外削ぎ状に折れ曲がる。胎土は緻密にして堅緻な焼成である。20は口唇部面取り状に外削ぎ。体部にはロクロ成形痕を明瞭に留める。21はE-12区出土の黒色土器B杯A類の口縁部破片。内外面良好にミガキ調整され、外面に「八」の刻書が入る。小破片で全体は不明だが、「干」の一面が確認できることから、「八干」と考えられる。22はE-12区の黒色土器A杯A類口縁部の破片。外面にロクロ成形痕を明瞭に留め、正位で墨書「八干」が書かれる。筆幅0.6cm。23はE-12区の土師器小型甕D類の口縁部破片。体部は細身ヘラ状の工具により、所謂「カキ目」状に調整される。24はE-12区の土師器小型甕で体部ロクロ成形痕を留める。25はE-12区出土の小型甕2/3個体で、体部は縦方向に刷毛目調整が施される。内面には「イオウ状」の付着物がべっとり付き、付着物質である液体を溜めた容器であろうか。付着物分析の結果、「イオウ」成分Sの吸収ピークが高値にでている（P648第705図）。26は甕B類1/3個体。薄手で、体部外面縦方向に櫛歯状の調整が入り、以後、ミガキ状調整が加わる。E-13区出土。27～30は灰軸陶器。27はE-13区出土の段皿の口縁部破片。口径14.0cm、刷毛塗り施軸。28はE-13区出土の長頸壺肩部の破片。29はE-12区高台付き段皿の体部破片。30はE-12区椀口縁部破片。口唇折り縁状で、口径18.0cmを測る。31はE-12区から出土したシカ角の加工品。角を縦方向に割り、素材の先端を尖らせ、全体は棒状に仕上げている。刺突具であろうか。この他、E-12区からは灰軸陶器椀資料2点に墨汁痕が観察できた。いずれも高台内。また図示していないが石錘1点（12.2×10.5×2.8cm・549g）がある。35はE-12区出土の部材の削り出しか。モ

溝底



第660図 溝底から1層出土遺物(土器・石器ほか)

溝底



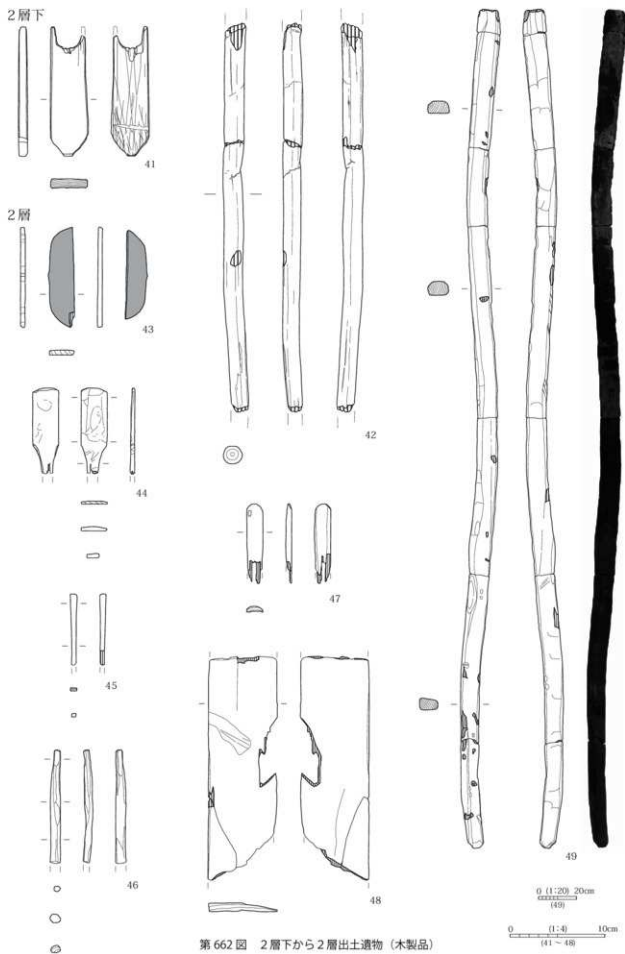
ミ属。両端部を突起状に作り出す。36はE-12区の火鑽白であろうか。板目のサワラ材。両端部欠損し、等間隔で4孔が開く。火鑽白とは断定できないが、孔断面に焦げたと思われる面が確認できる。37はE-13区出土の部材か。柾目のフジキ材。形状不明。調整加工面がある。38はE-12区の板状木製品。柾目のコナラ属コナラ亜属コナラ節。形状不明だが、両面平滑に加工され、一端近くに段を有する。容器の断欠材であろうか。39はE-11区出土の曲げ物。区境出土のため本区でも再掲した(P526第622図の83) 追柾目のヒノキ材。蓋板の周縁に低い段を巡らす。樟皮結合曲げ物A式に相当。結合孔2箇所があり、樹皮ともに残る。位置から考えて、全周を4等分して配置したと考える。残った木片の観察から、外縁じと考えられる。底板には側板を当てた痕跡が明瞭に残る。40はE-12区の杭材か。割材。柾目のフジキ材。先端部が加工される。下端に切断痕があり、板材を杭材に転用したのか。

2層下出土の資料(第662図)

41はE-12区出土の板材。板目のヒノキ材。上端欠損。欠け口がU字を作っていることから孔の部分で欠けたと考えられる。下端にいくにつれ僅かに広がる。先端2.0cmから幅が狭まり圭頭状になる。表面には木目に直行する削り痕跡が残る。42は棒材。芯持ちのウルシ材。枝元を残し表面を加工。

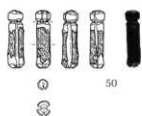
2層～1層出土の資料(第660図・第662図～第664図)

32はE-12区須恵器杯A類の口縁部破片。篆書体の墨書「木」がある。筆幅0.2cm。33はE-12区の灰陶器長頸壺あるいは平瓶の底部。高台は貼り付け、指頭による押え痕が明瞭。34はE-12区出土の大形刃器。頁岩材。7.8×4.6×0.8cm、34.8g。直刃で背部を剥離加工する。その他、黒色土器Bの耳皿破片1点と白磁碗の体部破片1点がある。43はE-12区の板状木製品、容器か。追柾目のサワラ材。片側側面中央部に1mm程度高くし、滑らかな傾斜をつける。特に加工痕は残らないが、表・裏・側面ともに平滑。特に表は滑らかで赤茶の面があり、何らかの塗料が塗られていた可能性もある。44と45は遺査軸状の木製品で、E-12区出土。モミ属で追柾目。細い板の一端を身とする。頸部からしだいに幅を狭め、柄につながるが、柄の部分は欠損し、45が接合する。身の先端部は緩やかな半円状で、片刃状に作出。44は四面とも調整されて細く、しっかり調整加工する。身の表裏両面は平坦に加工。削り痕が随所に残る。46は棒状の木製品で、柄の一部か。削り出し材で、マツ属複雑管束亜属。材質は堅い。形状はやや弓なりに反り上がる。ほぼ全面に削り痕あり。一端は欠損、もう一端は細くなり断面形がほぼ方形となる。ほぞ孔への差込口か。E-12区出土。47はE-13区の板状木製品。柾目材のヒノキ。下端は破損。上端は半円状に加工される。断面も緩やかな半円状となる。表面は調整加工が行われる。48はE-12区の板材。板目のモミ属。両端が破損。断面は片側面へ傾斜し薄くなる。刃痕は僅かに残る。焼け焦げの痕跡がある。49はE-12区No8出土の角状の材。長さ4m 43.5cm、厚さ12.0cm×7.3cmを測る。表面は3面に面取り製材され、断面亀甲状を呈する。六角木輪の風簾・蕨手等の上位に横たわって出土した。木輪と関連する遺物であろうか。50はE-13区の棒状木製品で、網の錘であろうか。芯持ちの丸木材。サクラ属。上端下1cm前後の位置に彫り込み頸部を作り出す。下端も角を削る。51及び52は薄板材で折敷か。追柾目のサワラ材。上端は垂直に切断。下端は斜めに割れる。上端の上部に穴がある。E-13区と12区から出土。52では上端近くには2孔があり、この内1孔には、異物(樟皮か?)が入っている。もう1孔と対をなし、結束するための孔であろうか。表面は平滑で、調整加工される。薄い板を加工。下端は欠損。53はE-12区No13とNo14のコロボシ。一木を加工している。歯の角度から想定すると総計10枚歯の可能性があるが、3枚歯及び2枚歯が接合し、内1枚歯は接合面がはっきりしない。歯の側面には断続的に加工痕が残っている。歯の先端部は片側方向から削りを入れ明瞭な刃部を作り出している。軸部は残っていない。54はE-13区No3・No1の下駄。板目、縦木取りのヒノキ材。形状は楕円形。鼻緒孔あり。表平滑。縦に二つに割れている。

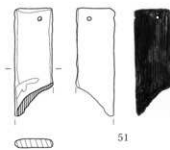


第 662 図 2層下から2層出土遺物 (木製品)

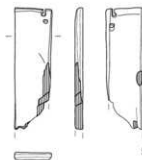
2層



50



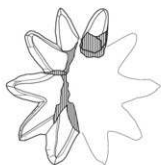
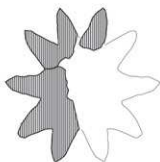
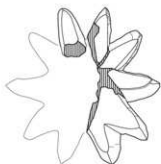
51



52

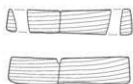
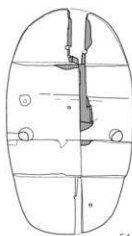
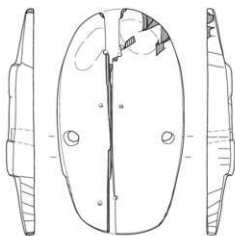


53

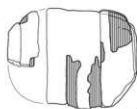


第663図 2層出土遺物（木製品）

2層



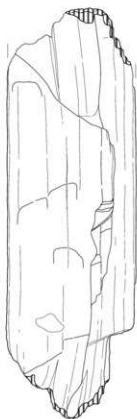
1層



56



57



55

埋土



58



第664図 2層から1層出土遺物(木製品)

0 (1:4) 10cm

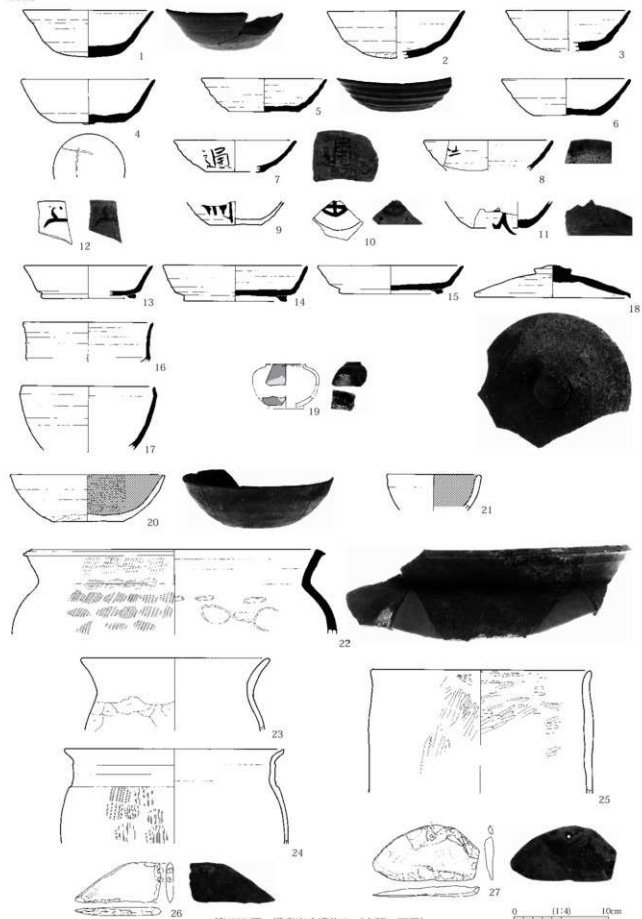
割れ面を挟んで0.3cm幅の孔がそれぞれ対になって3箇所あり。指圧痕が上部にある。裏は前歯、後歯ともに僅かに残る。両歯の間が厚く、前歯の上部、後歯の下部の倍を測る。55～57は1層及び埋土内の出土資料。55は割材。榎目材でクリ。割れ面は平滑で、骨格材の一部を加工したものか。一端近くに斧痕跡あり。E-13区No 2。56はE-12区の容器。曲げ物の一部であろうか。榎目のサワラ材。残存する木片からは、長方形曲物が推定できる。左上隅が丸く、段状になっている。表は平滑。蓋板か。57は漆塗りの曲げ物側板か。榎目のヒノキ科。薄板を加工し、下端は片側側面を斜めに切断。両面に黒漆が付着した痕跡が残る。E-13区出土。58はE-12区の棒材。種まき棒のような資料か。芯持ち材で、アジサイ属。枝元を残し、下端は先端を加工する。木表側面を5cm幅で削り込む。

E-1, 2, 7区, Y-21, 22区

溝底出土の資料 (第665図・第666図)

1～18・22は須恵器。1～11は杯A類。1はE-2区出土の1/2個体。胎土は緻密堅緻で、器厚があり、ポツリしている。底部へラ切り離し後、ナデ調整。口径14.0cm、底部内径7.5cmを測る。2はE-7区の1/3個体。底部へラ切り後ナデ調整仕上げ。内面に「イオウ状」付着物がある。口径14.0cm。胎土は緻密堅緻。焼成良好。3と4はE-7区出土の回転へラ切り離し後、ナデ調整で、底部は凸状を呈する杯。3は1/3個体で、口径13.0cmを測る。4は2/3以上の個体で、口径14.0cm、底部内径9.0cmを測る。硬質で、器厚があり、ポツリした形態。内面には大量の「イオウ状」付着物がある。底部にはへら状工具で、「×」記号がある。5はE-7区の2/3個体。内外面にロクロ成形痕が明瞭に残り、底部静止へラ切り離し手法。口径13.5cm、底径7.0cm、底部内径7.5cmを測る。6はE-2区のほぼ完形個体。糸切り離し調整で胎土中に黒色微粒子を多量に含み、器面は荒れる。口径13.5cm、底部内径6.5cm、底径7.0cmを測る。内面には「イオウ状」付着物がある。7はE-2区出土の1/5個体。底部糸切り離し調整で、口径12.0cm。外面ロクロ成形痕を留め、筆幅0.15cmで墨書「通」が書かれる。8はE-2区の口縁部破片。口径14.0cmを測り、外面に筆幅0.15cmで墨書「口」の一字がある。字風から、篆書体か。9はE-2区出土の底部。回転糸切り離し調整で、外面にロクロ成形痕を明瞭に留める。底部内径6.0cm。体部外面に正位か、墨書「酒」が記される。筆幅0.2cm。10はE-7区の底部小破片。糸切り離し調整で、墨書「田」がある。筆幅0.4cm。11はE-7区出土の底部破片で、外面正位に墨書「天」1類が書かれる。内面に「イオウ状」の付着物がある。12～17は杯B類。12は口縁部破片で、外面に倒位に「宀」が書かれる。筆幅0.4cm。13はE-7区の1/5個体。高台は低く、潰れて凹形。破損後「イオウ状」付着物が付く。14はE-7区の1/3程度の個体。底径11.0cmを測る。底部回転ケズリ調整で、筆幅0.15cmの墨書「部」がある。「守部」であったものか、一字目は欠失していて不明。15はE-7区の2/3個体。高台は低く、潰れた凹形。底部糸切り離し後、回転ケズリ調整。口径15.0cm、高台径10.0cm、器高3.1cmを測る。16はE-7区出土の口縁部小破片。口縁部緩く外反する形態で、通常の形態とは区別できる。体部にロクロ成形痕が明瞭に残る。17はE-7区出土の須恵器杯体部破片。口縁端部が屈曲内傾する形態で、所謂「仏鉢形」であろうか。非常に硬質である。18はE-7区の蓋2/3個体。ロクロ成形痕を明瞭に留め、体部1/2弱にケズリ調整を施す。つまみは扁平で、かえしは垂直にて極めて低い。内側には極度の磨耗と墨汁痕があり、「転用磁」であろうか。19はE-17区出土の奈良二彩陶器小壺の底部。SD 01のX-3区下層(第595図31)と同一個体と考えられる。20はE-7区出土の黒色土器A杯A類。口径直下は強い横ナデにより、外反状となる。底部ケズリ・ナデ調整で、口径16.0cm、底径7.0cmを測る。21はE-7区出土の黒色土器杯A類。口径の小さな個体で、口径直下に強い横ナデ調整が入る。22は須恵器裏E類の口縁部破片。

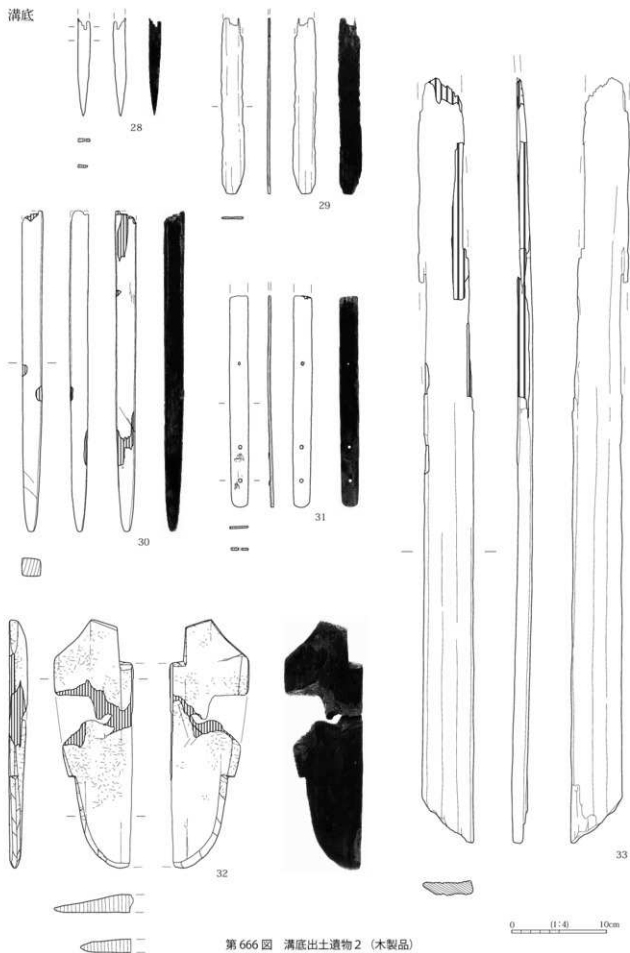
溝底



第 665 図 溝底出土遺物 1 (土器・石器)

0 (1:4) 10cm

溝底



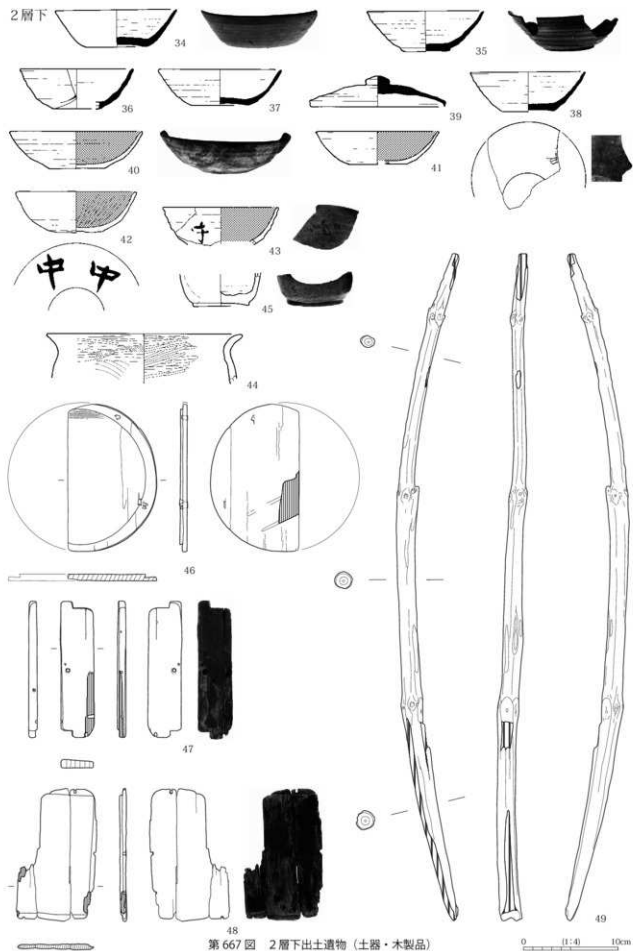
第666図 溝底出土遺物2（木製品）

外面は板状工具による叩き締めが顕著である。口縁部には「イオウ状」付着物に似た付着物がべっとり付いている。23は土師器甕C類口縁部。器壁が薄く、体部横方向のケズリ調整、口縁部は指頭による押圧で横ナデ調整。24はE-2区の土師器甕C類口縁部破片。器壁は極めて薄く、口縁部ケズリ調整後に、強い横ナデにより、断面「コの字」状の形態に仕上げる。他地域の土器であろう。25はE-2区の土師器甕F類口縁部破片。外面斜め方向に、内面横方向に丁寧なミガキが入る。この他、E-7区出土の黒色土器A杯A類口縁部破片は、破損後に「イオウ状」付着物がべっとり付いている。26と27は磨製石包丁。26はE-7区出土の1/2個体。砂岩材。直線刃半月形で、刃部及び背部は2次的使用によるものか、敲打される。組掛け穴は1穴のみ確認でき、図中の下の1穴は未完通である。27はE-2区出土の1穴の直線刃半月形。剥片を非常に簡単に粗く加工し、刃部のみを研磨加工した例。刃長10.2cm、刃幅1.1cmを測る。頁岩材。28はE-7区出土の斎車下部か。柁目のサワラ材。薄板材を使用。下端は剣先状。上端は欠損しているが、端部は孔があったような痕跡がある。29はE-7区の板材。部材か。柁目のサワラ材。両側面左右対称に凹凸のへこみがある。斎車の可能性もあるか。30は柄か。二方柁目のサワラ材。上端欠損。下端部は四方より削りを入れて加工。加工は丁寧で、表面には刻線が僅かに残る。31は板材。部材であろうか。サワラの柁目材。薄い板材を加工し、下端はU字形。中心線に沿って孔が3箇所ある。32はE-7区出土鋤先の1/2個体。柁目のアサダ。身の肩部を左右に突出させ、以下を一段削り込んで着装部を作出する。着装部の縁は、両面から斜めに削り、刃先状に整え、鉄の鋤先を付けるように整えている。身の上部には、ホソ穴がある。表面が炭化しているのは腐蝕を防ぐために焼き入れをしていたか。33はE-7区の板材。追柁目のサワラ材。製材板で、一端は斜めに切断。壁板等の破材であろうか。

2層下出土の遺物（第667図）

34から39は須恵器。34～38は杯A類。34はE-2区No2の1/2個体。底部糸切り離して、口径13.0cm、底部内径7.0cm。35はE-2区の2/3個体。内外面にロクロ成形痕を顕著に留め、底部糸切り離し手法。口径13.0cm、底部内径6.9cmを測る。36はE-2区の口縁部破片。やや軟質で、ロクロ成形痕を留める。外面に墨書「□」がある。筆幅0.2cmで、はらいの一筆のみ確認できる。37はE-7区の1/2個体。回転糸切り離し手法で、内外面にロクロ成形痕を明確に留め、口径13.0cm、底部内径6.5cmを測る。38はY-22区出土の1/3個体。外面にロクロ成形痕を留め、底部糸切り離した後、ヘラおこし。推定口径12.0cm、底部推定内径6.5cm。外面に筆幅0.15cmで墨書「□」がある。40から43は黒色土器Aの杯A類。40と41はE-2区出土。底部糸切り離した後、ケズリ調整。内面は良好なミガキ調整で、黒光りする。40は1/2個体で口径12.0cm。41は2/3個体で口径14.0cm。42はE-2区No1の完形個体。底部から体部下半まで回転ケズリ調整が施される。内面は良好な放射状のミガキ調整で、黒光りする。外面に、正位で墨書「中」が2字、併記される。筆幅0.3cm。口径13.0cm、底径6.0cm。43もE-2区の底部ケズリ調整の杯で、体部の小破片。外面正位に墨書「守」が、筆幅0.3cmで書かれる。44はE-7区の土師器甕F類口縁部破片。内外ともに良好なミガキ調整が施される。45はE-7区出土の灰胎陶器小瓶の底部。底部糸切り離して、内面は、回転ロクロナデ調整で、渦巻き状の模様が残る。46はE-7区No31の曲物。追柁目のヒノキ科。1/2残存。円板内面の周縁は、鋭角に段をつくる。結合箇所は2箇所確認でき、樹皮が残存する。復原径は15.7cmを測る。47はY-22区No32の板状木製品。サワラ材。薄板状。曲物板を転用加工した木製品であろうか。両端はL字に切断される。一端は僅かながらに段を有する。側面断面に2mmの穴が2箇所あり。また中央部側面側に3mmの穴があり中に木釘が残る。48はY-22区No32で折敷か。47と一括して出土。ヒノキ柁目。長方形曲物の底板か。底板の周縁に低い段を巡らせ、側板に結合するタイプ。全体形状ははっ

2層下



第667図 2層下出土遺物(土器・木製品)

きりしない。低い段の部分に3箇所孔が残る。49はE-2区No30の弓状木製品。芯持ち丸木材で、カヤ。弓状に湾曲。一端には縦方向に20cm前後の浅い削りが入る。

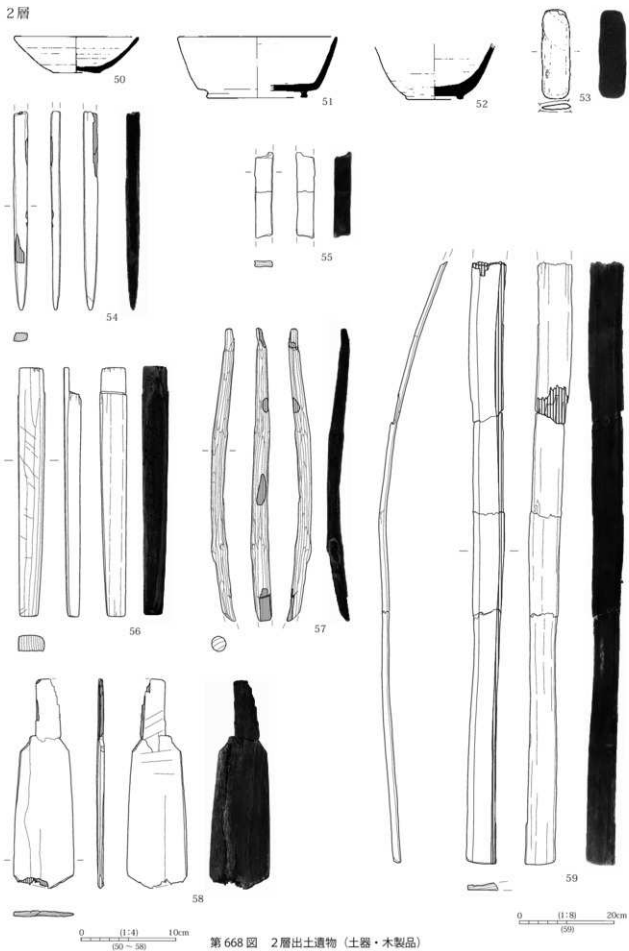
2層出土の遺物（第668図）

50はE-7区の杯A類1/3個体。回転系切り離し手法で、口径13.0cm、底部内径5.5cmを測る。51はE-7区出土の杯B類1/4個体。高台は高く平坦。器高7.0cm。52はE-7区の須恵器長頸壺底部。内面に「イオウ状」付着物が付く。53はE-7区出土の砥石。石墨片岩材か。9.3cm×2.9cm×0.6cm、27.8g。表と側面の2面を砥面とする。その他、E-7区から龍泉窯画花紋青磁碗の体部小破片が出土している。54はE-7区の角状木製品。柄であろうか。サワラの削り出し材。上端は欠損。下端は尖らせる。柄の差込部か。55はE-6区の板材。板目のモミ属。薄板材で、側面加工。56はE-7区の部材。削り出しの二方柱。サワラ材。上端が欠損しているようにも見えるが、「相欠き」接合のホゾとも考えられる。下端にいくにつれ片側面の角が削られ、幅が狭くなる。把手であろうか。57はE-7区出土の弓。削り出し材。カヤの丸木芯持ち材。58はE-6区の板材。羽子板状である。板目のヒノキ材。両端ともに欠損。上端より1/3あたりを頸部とし、次第に張り出し、幅が広がり板状の面を持つ。裏面には浅い刻線が数箇所入る。59はE-6区の板材。板目のモミ属。建築材の断欠材か。木目に沿って割った板である。両端は割り切断。

1層及び検出面等出土の遺物（第669図）

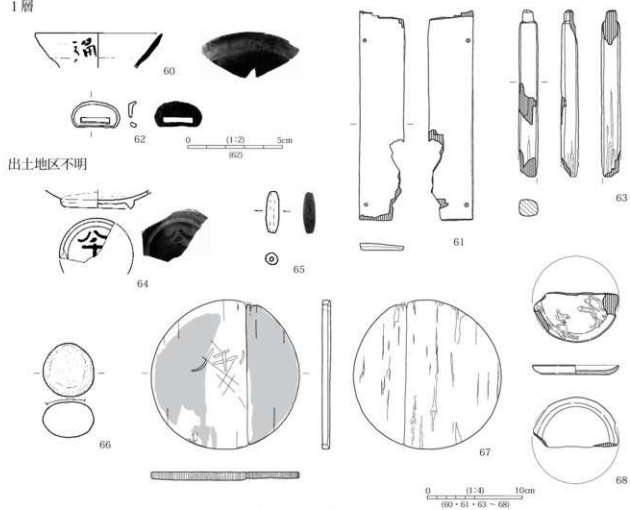
60はE-2区1層出土遺物と溝底出土土器の接合した個体で、溝底扱いとすべき資料である。須恵器杯Aの口縁部破片で、口径14.0cmを測る。外面に墨書「運」が筆幅0.2cmで、勢いよく書かれる。61はE-7区の板状木製品。板目材でモミ属。両端が欠損しているが、割ったと思われる痕跡がある。片側側面縁近くに、2.0cm前後の孔が、上下2箇所にある。また厚さが左右異なり、片側に緩やかに削りが入る。両サイドの厚み比は2:1。薄い右側面の一部が欠けている。木裏には刃痕がある。62はE-7区の検出面出土の銅製罽帯。2.5cm×1.3cm×0.2cm、3.3g。63はE-7区の角状木製品。サワラの削り出し材。上端にはホゾ加工があり、下端は欠損する。64から68は出土地区不明。64は2層下出土の灰軸陶器。碗の底部で、墨書「八千」が書かれる。65は土製の錘で完形。長さ4.3cm、径1.3cm、6.8gを量る。66は磨石。安山岩材で、5.6cm×5.4cm×3.8cm、175.2g。表裏面を使用する。その他、E-7区1層から陶磁器の破片が1点出土している。67は曲物。ヒノキの柁目材。円形底板。ややいびつな円形で、中央部に「ノ千」の刻書と想定できる文字が入る。千の右には「ノ」状の凹みがあり、文字として想定すれば、「八千」となるか。「八千」と書かれた墨書土器が多く出土していることから、それらとの関連で考えるべき例。千の文字線の幅0.3cm。やや黒色の付着物がみられるが、墨の可能性もある。なお、他に表面に浅い刻線が僅かに入る。結合孔と思われる部分が1箇所ある。68は検出面出土の挽物の皿。横木取りで、ケヤキ材。残存1/2。底部付近に回転成形痕が残る。漆と思われる内面付着物がある。その他、鞆の底板状の木製品（12.6cm×8.8cm×0.8cm・サワラ材）1点、板目の容器断片（スギ材）1点、挽き物の皿の断片（9.5cm×4.4cm×1.0cm・ケヤキ材）1点が検出面から出土している。3点とも漆が付着している。

2層



第 668 図 2層出土遺物 (土器・木製品)

1層



第669図 1層・出土地区不明出土遺物（土器・木製品ほか）



SD 03 ほか出土の木製品（曲物）

遺構名	板材	薄板材	角材	棒材	彫材	窓材	朽材	先端加工材	分割材	曲物	桐ざね	刀子軌	鎌柄	コロパン	折敷	敷	下駄	高床	木隠か	弓?	木っ堀材	器器	木種関連	樹皮	総数
Y21-22 2層下	1			1											1										3
※ 溝底				1																					1
E01-02 1層	3																								3
※ 2層下	1																		4						5
※ 溝底	1		1	3	2																				7
E06-07 埋土	13		1	1																			1		16
※ 1層	6	1	1	3																		1	1		13
※ 2層	29	4	2	2	3	1	1			1								1		9					53
※ 2層下	1																			2	1				5
※ 溝底	6		2	1										1	1					5					16
E12 埋土	2	1	1	1																	1				5
※ 1層	23	4	8	2	2	1	1			1	1									2	2	15			62
※ 2層	4	2	4			1												1						1	13
※ 2層下	7	1	3	4	9	1		2	1	1											3				37
※ 溝底	1		1																						2
※ 不明	2		1	1																					4
E13 1層	6	5	3	5	1			2	1												1				24
※ 2層	13	2	6	9			1	4		1													1		38
※ 溝底							1	1			1														3

第 192 表 南北流路出土木製品組成

時期の判断基準：

東西流路（古期流路）

②区と③区を区切る東西方向の溝で、溝底から若干浮いた状態でハンドホール大からバレーボール大の礫が多量に出土した（第 608 図）。それらは D-17 区等の③区側、南岸側から溝内に落ち込んだような状況で検出できた。護岸等の施設であれば、③区側に付属するものであろう。流路溝底出土の遺物は、古いもので非黒クロ土師器杯 C 類、高杯、そしてヘラ切り離し手法の須恵器杯類が僅かにある。数量的には数十点ほどと極めて微量であり、黒色土器 A 杯 A 類及び糸切り離し手法の須恵器杯 A 類の安定的な出現から、総じて古代 2 期（8 世紀初頭前後）頃の掘削と判断できるか。ただし同層出土土器の中には、刷毛塗り手法の灰軸陶器類、さらには土師器杯類や盤などが少なからず混在し、6 期あるいは 8 期といった 9 世紀代に位置付けられる要素が多分にある。調査状況から判断すると、古期流路は SD 84 と重複していることから、古くは SD 84 として機能した東西方向の小溝が存在し、6 期、すなわち 9 世紀代になって大きく SD 01 として再掘削されたものと考えられる。護岸施設が建設されたとすれば該期か。灰軸陶器の組成量は高く、墨書では「八千」が数多く出土する。第 622 図 69 の緑軸陶器稜枕、第 627 図 159 から 161 の灰軸陶器耳皿、第 623 図 88 の下駄、第 628 図 165 の一木鎌、土錘等の出土がある。溝底上位に堆積した 2 層下さらに 2 層中の遺物についても、ほぼ同様な傾向が看取できることから、6 期の再掘削後、土師器の登場する 8 期までは、同一の流路として維持、機能していたと考えてよいであろう。

東西流路（新时期流路）

東西流路から南側へ L 字状に掘削された溝である。L 字状に屈曲した E-16 区北岸付近には拳大からハンドボール大の礫が大量に堆積していた（第 639 図）。礫の検出レベルは溝底より若干高い位置で、旧 3 層付近である。護岸施設の残骸であろうか。E-12 区まで一部伸びているか。溝底出土の遺物は、糸切り離し手法の須恵器杯 A 類が高率で、これに杯 B 類が比較的割合を伸ばして組成する。黒色土器は安定しており、須恵器杯類の出土数とほぼ拮抗する。黒色土器杯類は、内面黒光りするほど良好にミガキ調整され、底部付近を明確に静止ケズリする手法が中心である。灰軸陶器は数量的に極めて少なく、土師器類も少数である。墨書は「天」を中心に、篆書体の「木」などが出土する。僅かながら出土している灰軸陶器や「八千」の刻書は、いずれも溝底より高位置の旧 3 層及び礫・砂利層付近であり、厳密

には区別できる可能性を含む。溝底遺物の傾向は2層下部・2C層下部～2層まで続くが、土師器類や灰釉陶器類の出土数量が飛躍的に増加する。本層のE-16区からは出挙帳の一部断片が漆紙文書として出土している。墨書では「八千」が目立つようになる。本流路は4期、8世紀後半代に掘削され、2層下部～2層で6期～8期、9世紀代まで維持・機能していたと考えられる。

南北流路

本流路はE-12区、E-13区で東西流路と重なる。したがって、それら②区出土遺物には東西流路所屬のものが含まれている。E-2区やE-7区での溝底出土遺物は、ヘラ切り難し手法で、底部凸状の須恵器杯A類に杯B類が比較的目的立ち、灰釉陶器や土師器の破片は少ない。掘削時期を特定することは難しいが、遺物量の多寡から判断すると、古代2期から4期頃、8世紀代と考えられる。第665図19の奈良二彩陶器の短頸壺は、SD 01出土の破片と同一片であり、SD 01と同一時期に機能していた証左である。さらには第666図32の鎌先が、千曲市調査のB地点1号溝（今回のSD 01）から出土した鎌先（P156、第149図35）と同一個体の可能性が高いことも、その理由となるか。伴出した第665図16と17の須恵器は、器形に特徴があって、17などは所謂「仏鉢形」と考えられる。墨書では「運」や「入」などがある。2層下部では、糸切り難し手法の須恵器杯A類と黒色土器Aの杯A類が目立ち、4期的な様相が若干強く、灰釉陶器はほとんど出土しない。墨書には「守部か」、「中」などが観られる。



SD 03 出土土器

イヌ



右脛骨 完形 E13 2層



右橈骨 E13 2層



左上腕骨 E13 2層



右尺骨骨幹部 E13 2層

ウシ



右脛骨 E7 川底



右上顎第2大白歯 出土地不明



左中手骨 E7 川底



右下顎第2大白歯 出土地不明

ウマ



左中手骨 E7 川底



右脛骨 出土地不明



左脛骨 E13 2層



右橈骨 E7 2層



右基節骨 D12 検出面



中足骨 E7 2層

ニホンジカ



右橈骨 出土地不明



右大腿骨 D11 層不明



左下顎骨 E12 2層



角 出土地不明

第 670 図 社宮司遺跡獣骨写真 (SD 03)

第3章 発掘調査の概要

出土地区	出土層名	取上げNo	種名	部位名	備考	RL	UL	歯	状態	c	ph	ch	pe	ps	s	ch	de
D-11		No 4	二ホンジカ	大股骨		r			f					1			
D-12	横出面		ウマ	基節骨		r			c	1							
D-8			ウマ	歯 P4		r	1	1	f								
D-8	横出面		ウマ	歯 I2		r	U	1	f								
D-13		No 3	ウマ	大股骨		r			f								
D-13		No 1	二ホンジカ	中手骨	骨幹部後面	r			f					1		1	1
D-13		No 2	ウマ	股骨		r			f					1		1	1
D-13	横出面		ウマ	歯 I2		r	U	1	f								
D-13	横出面		ウマ	歯 M2		r	1	1	f								
D-13	横出面		ウマ	歯 M1		r	1	1	f								
D-13	横出面		ウマ	歯 M2		r	1	1	f								
D-13	横出面		ウマ	尺骨		r			f				1				
D-13	横出面		ウマ	遠端	左側腕関節部	r			f								
D-13	2層		ウマ	歯 P4		r	1	1	f								
D-13	2層		ウマ	歯 P4		r	1	1	f								
D-14		No 3	ウマ	肩甲骨		r			f								
D-14	2層下		ウマ	歯 M3		r	U	1	f								
D-15	溝底		ウマ	歯 P2		r	U	1	f								
D-15	溝底		ウマ	歯	歯種不明多数	r			f								
D-15	溝底		ウマ	歯 M2		r	U	1	f								
D-15	溝底		ウマ	歯片		r	?		f								
E-11	2層		二ホンジカ	角	角皮部	r			f								
E-16	2C層		二ホンジカ	角片		r			f								
E-17			ウマ	歯 m 3	乳歯	r	1	1	f								
E-17	1層		ウマ	中手骨		r			f		1						
E-17	1層		ウマ	歯 M3		r	U	1	f								
E-17	1層		ウマ	歯 M2		r	1	1	f								
E-17	1層		ウマ	歯 M2		r	1	1	f								
E-17	1層		トリ	趾骨	若年	r			f								
E-17	2層		ウシ	歯 I2		r	1	1	f								
E-7	1層		ウマ	歯 P3		r	U	1	f								
E-7	1層		ウマ	歯 M2		r	U	1	f								
E-7	1層		ウマ	歯 I1		r	U	1	f								
E-7	1層		ウマ	歯 P3		r	U	1	f								
E-7	2層		ウマ	趾骨	骨端部関節部、若年	r			f				1				
E-7	2層		ウマ	大股骨	de 外側関節部	r			f								1
E-7	2層		ウマ	中足骨	骨幹部	r			f				1	1			
E-7	2層		ウマ	中足骨	遠位骨端、若年	r			f								1
E-7	2層		ウマ	趾骨		r			f		1						
E-7	2層		ウマ	趾骨		r			f		1						
E-7	2層		ウマ	橈骨	遠位骨端、若年	r			f								1
E-7	2層		ウマ	中手骨	骨幹部	r			f				1	1			
E-7	2層		ウマ	基節骨		r			f								1
E-7	2層		ウシ	歯 M1		r	U	1	f								
E-7	溝底		ウシ	趾骨		r			f		1						
E-7	溝底		ウシ	中手骨	pe 欠、d e 外側関節部欠	r			f				1	1			
E-12	1層		ウマ	歯 P2		r	U	1	f								
E-12	1層		ウマ	歯 P4	5/6	r	U	1	f								
E-12	1層		ウマ	歯 M1	6/6	r	U	1	f								
E-12	1層		ウマ	歯 P3	2/6	r	U	1	f								
E-12	1層		ウマ	歯 P4	3/6	r	U	1	f								
E-12	1層		ウマ	歯 M2	4/6	r	U	1	f								
E-12	1層		ウマ	歯 m 1 or m 2	乳歯	r	U	1	f								
E-12	2層		二ホンジカ	下頰骨	下部体+歯 P 2-M 3	r	1	1	f								
E-13	2層		ウマ	歯 M3		r	U	1	f								
E-13	2層		ウマ	趾骨	若年	r			f				1				
E-13	2層		イヌ	橈骨		r			f				1	1	1		
E-13	2層		ウマ	歯 M2		r	U	1	f								
E-13	2層		イヌ	趾骨		r			f								
E-13	2層		イヌ	肩甲骨		r			f				1				
E-13	2層		ウマ	橈骨片		r			f								
E-13	2層		イヌ	尺骨		r			f					1	1		
E-13	2層		イヌ	上腕骨	若年 pe 関節部欠	r			f								
E-13	2層		イヌ	趾骨		r			c	1							
E-13	2層		ウマ	歯 I2	1/2	r	U	1	f								
E-13	2層		ウマ	歯 I3	2/2	r	U	1	f								
不明			二ホンジカ	橈骨		r			f		1						
不明			ウマ	中手骨	骨幹部	r			f						1		
不明			二ホンジカ	角		r			f								
不明			ウマ	歯 I2		r	U	1	f								
不明			ウマ	歯 P4	2/2	r	U	1	f								
不明			ウマ	歯 P4		r	U	1	f								
不明			ウマ	歯 M1	1/2	r	U	1	f								
不明			ウマ	尺骨		r			f					1			
不明			ウマ	中足骨		r			f					1	1		

第193表 SD 03 出土骨一覽

53号溝跡(第671図～第681図)

- 時期：7世紀末～8世紀前半(古代2期・3期に比定)
 位置：ⅧX-16, 17, 21, 22区、D-1, 2, 6, 7, 11, 12区
 長軸方向：真北
 規模：長さ34m 幅2m14cm 残存深度48cm
 性格：区画・排水施設
 断面形態：U字状。北端は浅いタイライ状で、中央付近がV字に近いU字状、南端はU字状を呈する。

壁の立ち上がり：55度程度の傾斜

埋土堆積：大別して3層がある。下層には黒色粘質土(5GY2/1)が20cm程度堆積、中層はオリブ黒色粘質土(5Y3/1)、上層に黒褐色粘質土(10YR2/3)である。溝北端のX-16区付近では、炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土が部分的に確認できた。

重複遺構：北端からSD25、SD27、SD24を破壊する。ST31との切り合い関係は不明だが、ST31出土柱材の炭素年代値から判断すれば、破壊されたと考えてよい。

検出経過：黄褐色の砂層上面にて、黒褐色土の落ち込みを確認、南北方向へ長く延びることから溝跡を想定し調査した。埋土の上層を掘り下げたところ、-20cm下で平坦部を確認、底面と考えたが、東側より幅80cmほどで長く延びる流路相当部を確認した。確認面以下を第2層(中層)と捉え、流路内の掘削を続けた結果、深さ50cm程ある溝跡となった。流路底部付近に堆積した土15cmほどを下層と認定した。

遺物の出土状況：大部分が埋土中から出土しており、中層以下の流路内に主体がある。出土土器及び木製品の内訳は、第194表及び第195表に示す。

出土遺物の概要：

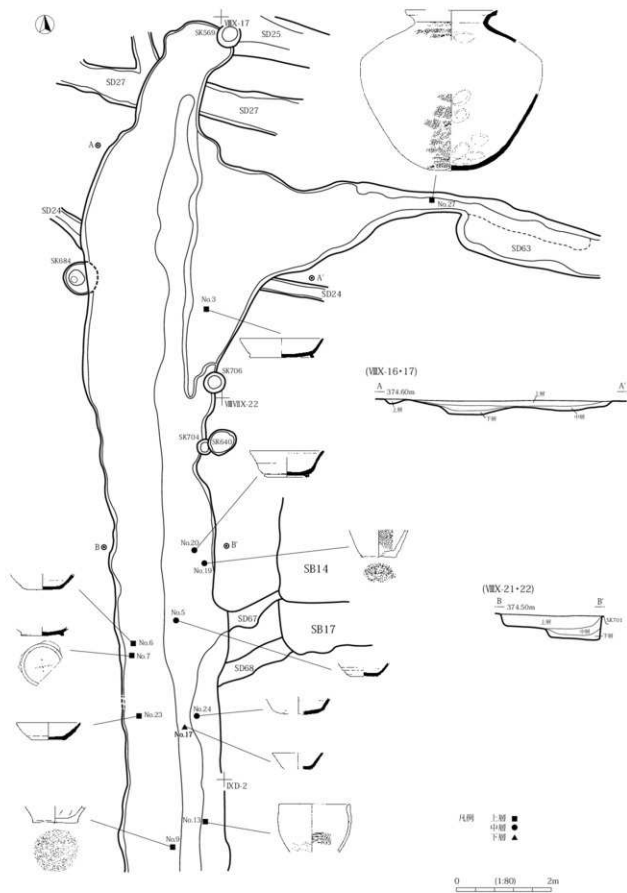
- 下層 1は第672図No14に相当し、非ロクロ土師器の杯C類。杯1類または鉢形土器の底部破片と考えられる。内面は丁寧なミガキ仕上げで、外面はケズリ後にミガキ調整する。2はNo12で、非ロクロ土師器の高杯形土器2/3個体。1と同様な胎土・焼成である。3はNo20の須恵器杯B類、1/2個体。底部付近がやや張り、緩やかに朝顔形に開く器形。高台部は低く凹形を呈する。4はNo16にあたり、須恵器盤の脚部。脚高4.0cm、ラッパ状に開き、裾部に2本の横線様の強いナデが入る。脚内面には、漆と思われる材料で「十」記号が描かれる。5はNo2の割材。みかん割りで、4箇所貫通孔あり。表面には工具の刃痕が入る。樹種はオニグルミ。6はNo4の芯持ち丸木材。上端部尖るが、上端は欠失して不明。樹皮はない。ウツギ属。7はNo101で芯持ち丸木材。上端は欠損。下端は2方向より切断した痕跡が残る。下端に近いほど径が広がる。8は柄。榎目のサワラ材。両端部破損しているが、下端は厚く削られている。炭素年代測定では694±30年ADの値を得た。No63。9はNo45の割材。刃痕があり、上端部に2箇所貫通孔あり。10はNo70の板材。榎目のヒノキ科。両端・両側面欠損する。斜め方向の切断痕がある。11は榎目の板材。薄板を加工



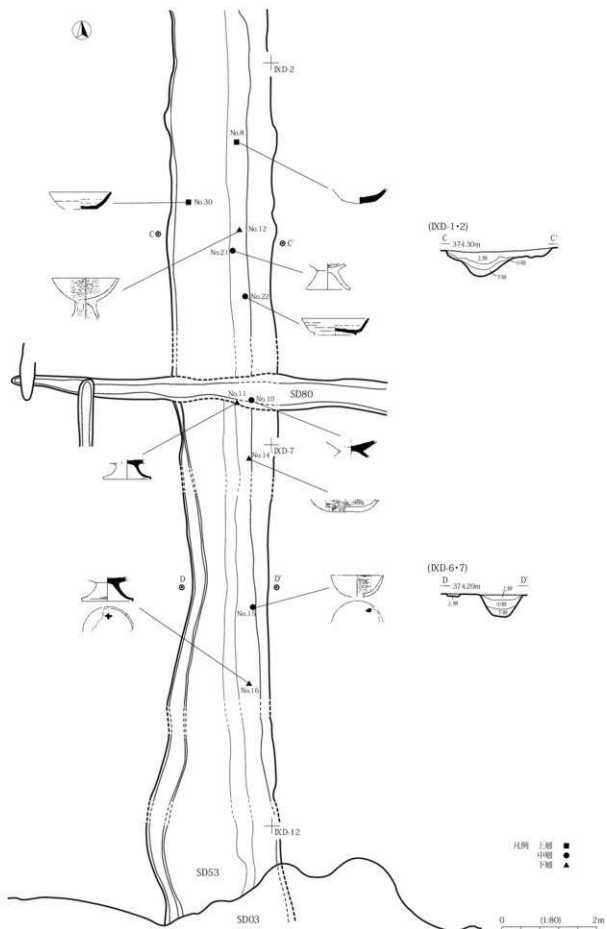
SD 53 遺物出土状態(北から)



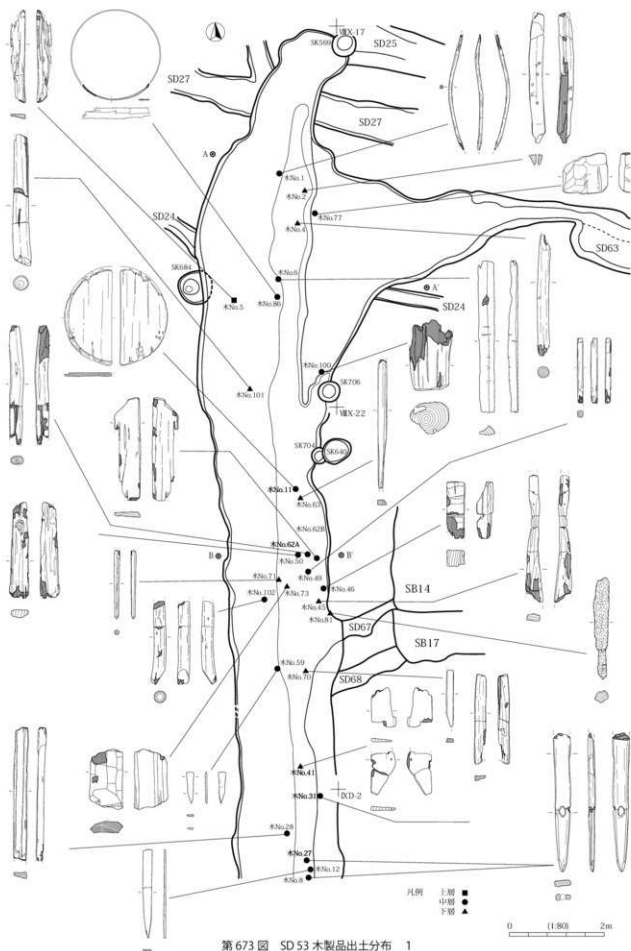
SD 53 完掘(北から)



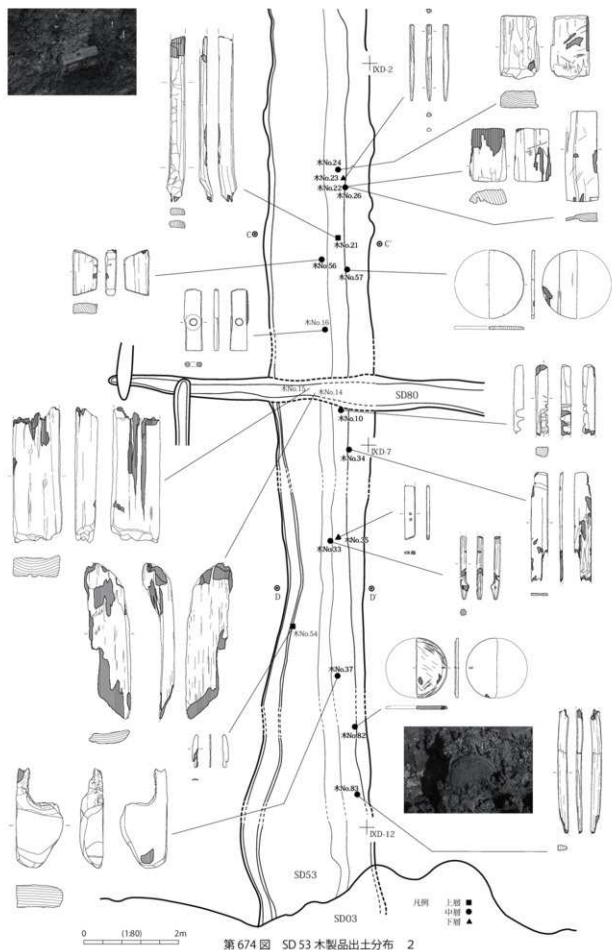
第671図 SD53 土器出土分布 1



第672回 SD 53 土器出土分布 2



第673図 SD 53 木製品出土分布 1



第 674 図 SD 53 木製品出土分布 2

第3章 発掘調査の概要

	非ロクロ土師器										土師器		黒色土器A		黒色土器B		近現代陶器			
	杯	杯C	高杯	鉢	鉢A	鉢E	鉢	鉢A	鉢B	鉢C	鉢D	鉢E	小笠	不明	杯A	杯B	皿	皿B	不明	
SD53 不明	7	6						3	26	7	13	7	7	4					1	
※ 埴土	4	31	8					8	6	8	125	94	4	8	84	11	32	40	1	1
※ 上層																				
※ 中層																				
※ 下層																				
※ 溝底	1							22		1	15		21					9		

SD53 不明	漆器														灰釉陶器				数/総重量 (破片/g)							
	杯A	杯B	蓋	鉢	鉢A	鉢B	鉢C	鉢D	鉢E	香	香B	香C	香D	香E	短頸	短頸B	短頸C	小瓶		焼	不明	短A	香	長頸	香A	
※ 埴土	11	3	1				42	2																		133/3,519.9
※ 上層	6	3	11				3	2	8	6																89/1,614.4
※ 中層	157	31	59	17	4	12	5	13	20	24	26	1	1	3	6	20	2	3	1	1	2	1	3			877/14,461.1
※ 下層	10	2																								18/995.9
※ 溝底	6	1	2	1	2		2	1	9	1																14/953.2
																										5/540.3
																										95/1,091.4

第194表 SD53出土土器組成

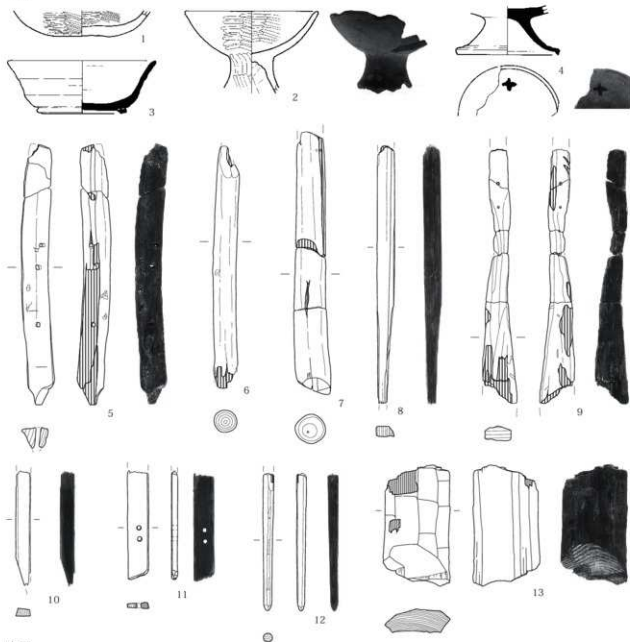
遺構名	板材	厚板材	角材	棒材	割材	部材	部材	加工材	曲物	桷	蓋	漆	鎌の柄	刀子の柄	火鑽板	ひょうたん	下駄	櫓	木々	用途不明	総数	
																						SD53
SD53	29	1	1	14	35	2			1	1	1	1	3	2	1							103
※ 埴土	4																					7
※ 上層	8		2	7	22	6	1		4		2		1		1						55	
※ 中層	7			8	7	1			1		1										26	

第195表 SD53出土木製品組成

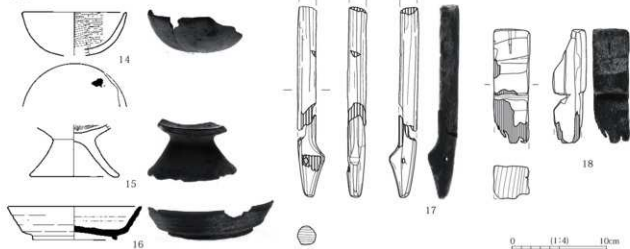
し、幅5mmの穴が中央部に2箇所ある。サワラ材。12はNo71で柄か。芯持ち丸木材で、上端が欠損する。断面はほぼ円形で、下端にいくにつれ径を減じる。下端より5mm上方から削りを入れ、尖らせている。柄の差込口であろうか。13はNo73で板目の割材、モミ属。下端は斜めに切断し、上端は割り切断。表面は四面に面加工される。

中層 14・15は非ロクロの土師器。14はNo15の杯C類、1/2個体。内面は良好にミガキ整形され黒光りする。外面には漆状の付着物が微量付着する。15はNo21の高杯。内面良好にミガキ調整される。16はNo22の須恵器杯B類の1/2個体。硬質で、内外面にロクロ成形痕を明瞭に留める。底部は内面に凸で、外面ケズリ調整後、貼り付け高台。高台は低く外接地。口径14.0cm、器高3.5cmを測る。17はNo33の鎌の柄。丸木の削り出し。シロモジ節。18はNo46の部材、二方板でモミ属。下端が斜めに切断され、中心部に深く鋭角の切り込みが入る。19は板目の部材か。中心部に径2.3cmの穴を穿つ。下端先端部分に向け、幅減じ細り尖る。表裏面は平滑、No8とNo27の接合。20はNo10の火鑽板。追紐目でサワラ材。上端側面に加工の痕跡があることから、部材等の製品加工材を火鑽板に転用したものであろうか。下端部は欠損する。角材の片側側面に4箇所の切り欠きを入れ、上部には未使用の切り欠きが1箇所ある。21はNo16で板目、長方形で板状の木製品。中心部に孔があり、周囲に1cmの幅で圧痕が残る。円形の棒が装着されていたと考えられる。22は部材。二方板。モミ属。23は棒材。芯持ち丸木材。上端を欠損し、下端は両側より切断される。24はNo12の齋串。紐目のサワラ材。25はNo59の齋串。紐目のサワラ材。26はNo37の部材であろうか。現状は、上部がU字状に大きく削られ加工されたように観察できる。27も部材か。下端は斜めに切断され、中心部には工具の刃痕が残る。28は割材。板目のモミ属。規模形状から壁板などの建築材の断欠材と考えられる。29から31は曲物。29はNo11で、ヒノキ材の板目、樺皮結合曲物。大形曲物で、周縁に段を持つ。穴は4箇所あり。その内の1箇所に皮紐が残る。曲物割板板片も僅かに残存しており、板目のサワラ材である。30はNo57で、釘穴結合曲物。釘穴が断面に3箇所あり。周縁に側板の接合痕が残る。31はNo82で追紐目のヒノキ材、樺皮結合曲物。円板周縁の中心部に結合孔あり、樺皮も一部に

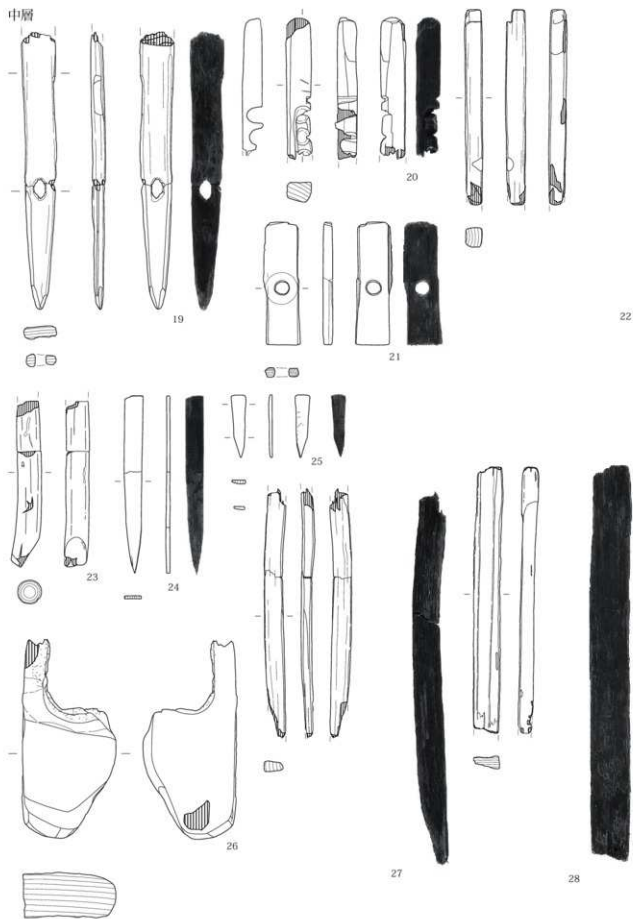
下層



中層

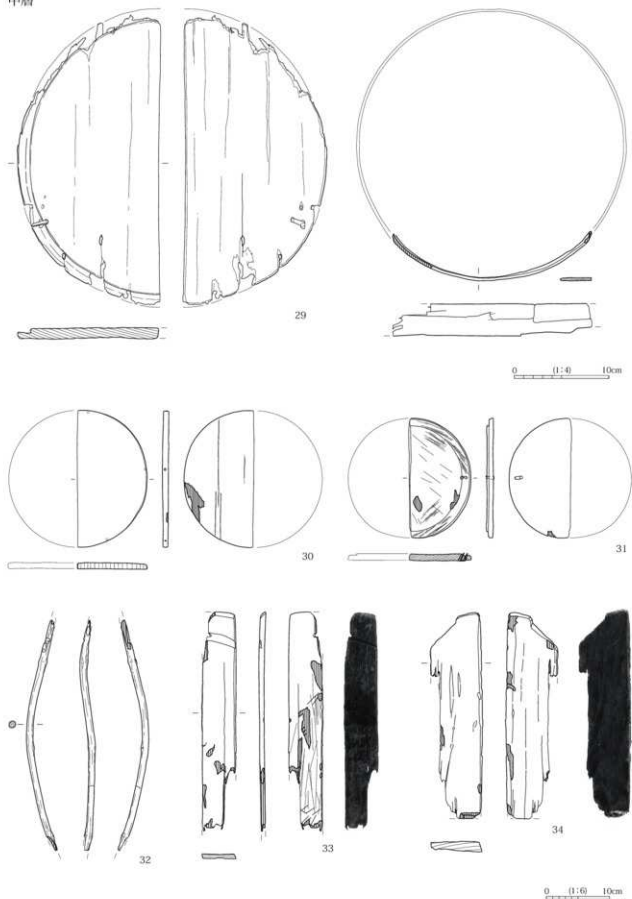


第675図 SD53 出土遺物1 (土器・木製品)



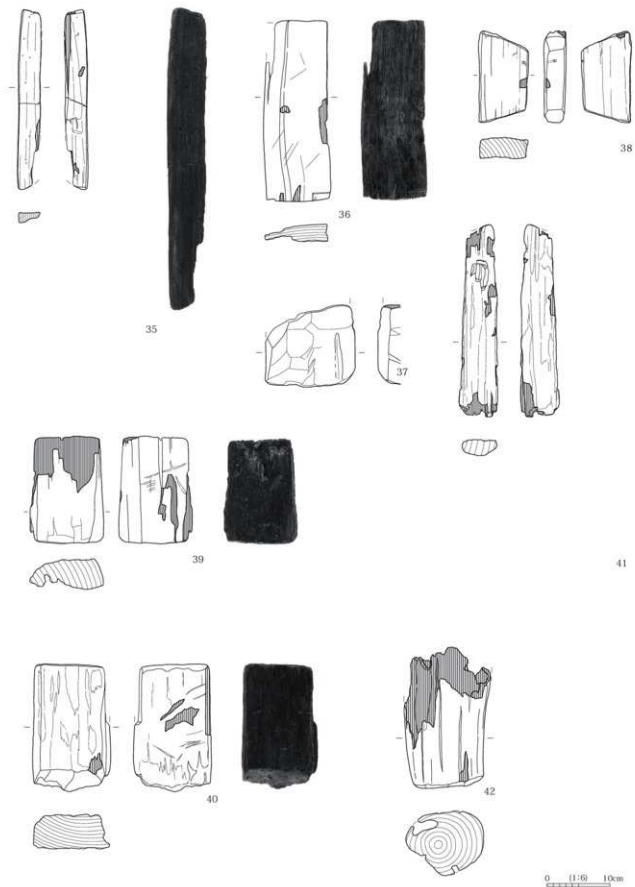
第 676 図 SD53 出土遺物 2 (木製品)

中層



第 677 図 SD53 出土遺物 3 (木製品)

中層



第 678 図 SD 53 出土遺物 4 (木製品)

残る。刃物キズが数箇所で観察できる。炭素年代測定結果は、474 ± 30年ADである。32は芯持ち丸木材。33は追柱目の板材。上端の角には、刃物を入れた痕跡が残る。34は板目の板材。製材した床板であろうか。壁板などの建築材の破材と考えたい。35はNo31の割材。柱目のケヤキ材。36はNo26の割材。裏面に工具の刃痕あり。板目のサワラ材。37はNo77で追柱目の部材か。38も部材であろうか。切断面は平滑で、右上方より側面に向かって斜めに孔が貫通している。表面は比較的平滑。39はNo22でみかん割りの割材。両端は垂直に切断されている。40はNo24の割材。柱目のクリ材で、下端部を斜めに切断する。建築用骨格材（柱等）の分割材であろうか。41はNo50の板材。下端は垂直に、上端は斜めに切断される。表面は平滑で、工具の刃痕は数箇所に入る。炭素年代測定結果は、784 ± 60年ADである。42はNo100の棒材。クリの芯持ち材。

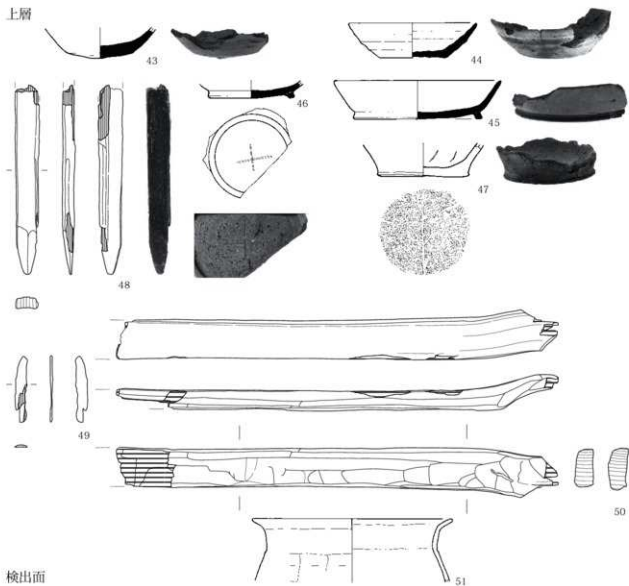
上層 43はNo8に相当し、須恵器杯A類の底部。底部突出した古手の形態で、ヘラ切り離し調整。図示していないが、No6も同一形態。44はNo23の須恵器杯A類の2/3個体。口径13.4cm、底径7.0cm、底部内径6.5cmを測る。やや軟質で胎土中には窯カスのような不純物が多量に混じり、器肌が悪い。糸切り離し。同様な資料に図示しないがNo30がある。45はNo3の須恵器杯B類1/2個体。口径17.5cmを測り、器高4.1cm、底径13.1cmと大形。底部はケズリ調整で、外側に突出、内面がやや凹む形態。46は須恵器杯B類の底部破片。45と同形態である。軟質。底部にはヘラ記号で「×」がある。47は木葉痕のある土師器甕形土器の底部、No9に相当。48は柄であろうか。上端欠損。下端部は尖り、差込み口と考えられようか。49はNo54で、齋串状の板状木製品である。破損激しく、器種の認定は難しい。柱目のサワラ材。50はNo21のヒノキ材の柱目、割材。

検出面 52はX-17より出土した須恵器甕A類の一括個体である。SD 03 (D-12・SD 84の埋土か?)の2層及び2層下の2片とSD 84 (D-11)の3片、D-11区の1片とが接合関係にある。口縁内面から口唇にかけて平らに真直ぐ延び、口唇端部は外削ぎ状に立ち上がる。肩部の張る器形で、底部は丸底に近い。器の外表面は縄板巻き工具で叩き締められ、内面には直径3.0cmほどの当て具痕がある。年輪を僅かに確認できることから、樹木と判断できる。底面にはカマ印であろうか、沈線で円弧が描かれる。51は土師器甕I類の口縁部破片。口縁はコの字状に折れ曲がり、体部はケズリ調整後、ナデ整形される。極めて薄い体部で器壁は0.4cm程度である。

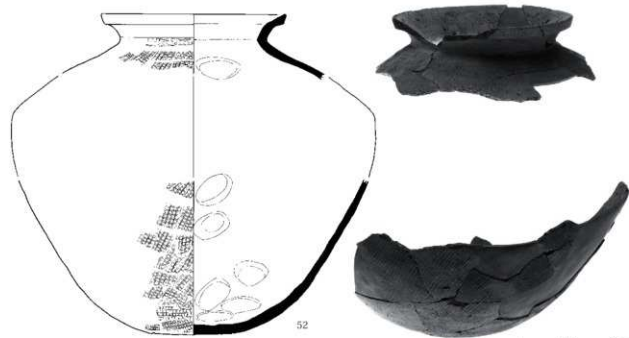
埋土 53は黒色土器Bの皿B類の1/3個体。口縁が平らに開く浅い皿形で、高台はやや直、内面はX-16ミガキ調整し、外面は丁寧にナデられる。54は須恵器杯A類の1/2個体。底径8.5cm、口径13.8cm、底部内径7.5cmを測る。ヘラ切り離し手法で、内外面とも丁寧にナデ調整される。底部には判読できない墨書が「□」2文字あり、さらに重ねてヘラ記号「×」が書かれている。55は須恵器杯B類の底部破片で、高台径9.5cmを測る。糸切り離し後、低い高台を貼り付け、丁寧にナデ調整される。底部には細筆であろうか、2.0cm内に墨書で「守部」が書かれる。56は柱目のサワラ材。一端欠損。先端部付近がやや突出し、平面的には把手状の形態を呈する。57は板状木製品。上端付近の中央部に5mmの孔を穿つ。追柱目のサワラ材。

X-21 58は非ロクロ土師器杯C類の口縁部破片。59～61は須恵器杯A類。59は底部破片。外面にロクロ成形を明瞭に残し、底部糸切り離し調整。硬質。60は1/2個体。口径11.8cm、底径4.9cm、底部内径6.0cm。小さな底部からロクロ成形痕を残しつつ、緩やかに立ち上がる器形。底部付近以外のロクロ痕は丁寧にナデ消されている。61は1/3程度の破片。内外

上層



検出面

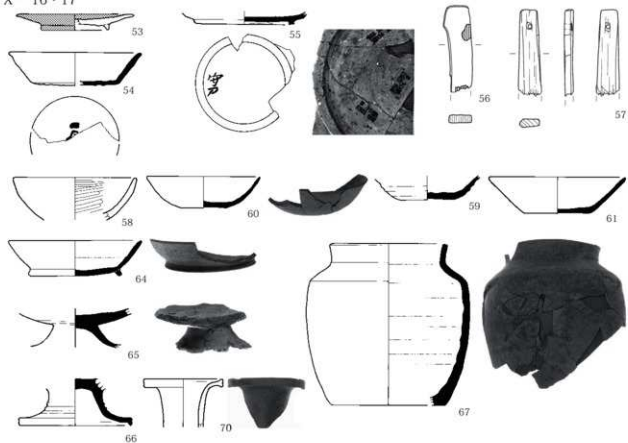


第679図 SD53出土遺物5 (土器・木製品)

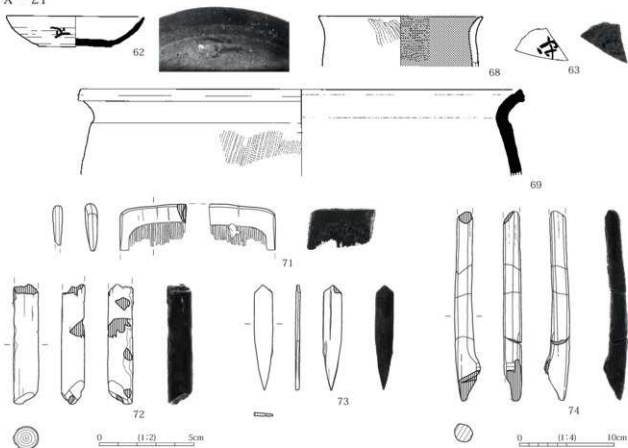
0 (1:4) 10cm

埋土

X-16・17



X-21



0 (1:2) 5cm
(71)

第680図 SD53 出土遺物6 (土器・木製品)

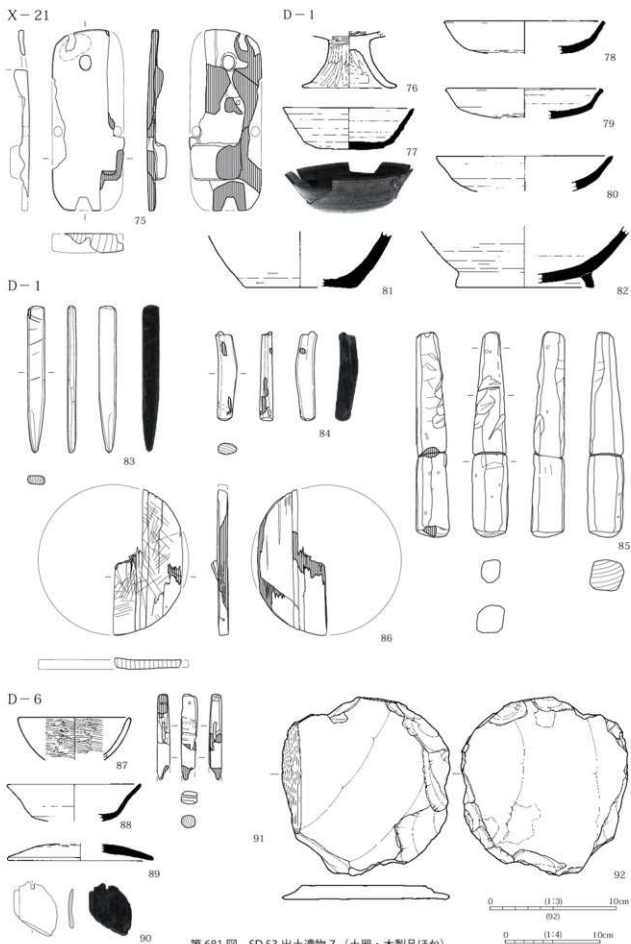


0 (1:4) 10cm

面に細かなロクロ痕跡を残し、やや軟質。糸切り離し手法で、底部内径 7.0cm を測る。64 は須恵器杯 B 類の 1/3 個体。口縁部は緩く外反し、高台は外側にせり出し、低く小さい。底部は凸状に張り出す。内面は使用によるものが磨耗してツルツルする。62 は須恵器杯 A 類の 2/3 個体。口径 6.0cm、底内径 6.5cm、口径 14.5cm を測る。外面には細かなロクロ成形痕を残し、体部がやや椀形に張る器形。底内面は磨耗しツルツルする。外面には倒位で墨書「宀」がある。別にもう 1 点、須恵器杯 A 類の底部（糸切り離し）小破片に、欠損により判読できない墨書「口」がある。63 は須恵器杯蓋の体部小破片。外面に「守」の墨書がある。破片のため定かではないが、X-16 で出土した No55 同様に「守部」となるか。67 は須恵器短頸壺 A 類の 1/3 程度の破片である。口縁部は直口し、なで肩で、内外面とも良好にナデ整形される。65 は須恵器盤の 1/3 個体。口縁と脚部の端を欠失する。脚高は低く 3.0cm ほどであろうか。66 は須恵器盤の脚部の破片。脚高低く 4.5cm 程度で、括れ部は凹線状の調整痕を明瞭に残す。68 は非ロクロ土師器のミガキ甕口縁部破片。69 は須恵器甕 E 類の口縁部破片。外面には撻紐巻きつけ工具による叩き締め痕が観察できる。70 は灰胎陶器の長頸壺の口縁部破片。71 は節 1/2 破片。縦木取りのイスノキ材。側縁から細い歯を挽き出し、表面を平滑に研ぎあげた横櫛。長方形で肩に丸みを持たせるタイプ（A II 式）。72 はヤマウコギ属の棒材。表面に炭化物が付着する。73 は斎串。柾目のヒノキ材。細い板材の上端を圭頭状に、下端を剣先状に作り出す。切り込みはない。74 は鎌の柄。削り出し丸木材、コナラ節。4 片に破損して出土した。75 は下駄。縦木取りでモクレン属。破損が激しい。前歯の形状は留めず、後歯も残りが僅かである。前壺の左上に親指の圧痕が明瞭に観察できる。後ろの孔は 2 孔とも欠損して残っていない。この他、SNo 1 出土の磨石が 1 点 (419.3g) ある。

- D-1 76 は非ロクロ土師器の高杯脚部の破片である。皿部内面は極めて良好にミガキ整形される。77 は須恵器杯 A 類の 2/3 個体。細かな回転ロクロ成形痕を残し、ヘラ切り離した後、ナデ調整。78 から 80 は須恵器盤の皿部破片。78・79 は口唇角頭状で、口縁が緩やかに立ち上がる器形。硬質。80 の口唇部は内削ぎ状で、口縁が緩やかに開く器形である。皿部の下部外面はケズリ整形される。81 は須恵器甕類の底部破片。ケズリ後ナデ整形される。82 は須恵器壺の底部破片か。体部外面はケズリ後ナデ整形される。83 は板状木製品（部材）。全面加工で、下端部は V 字状に削り込む。表面に刃痕数箇所が残る。柾目のサワラ材。84 は刀子の柄であろうか。カエデ属の削り出し材。下端近くの側面部よりに斜め方向の貫通孔を穿つ。85 は二方柁、アワブキの角材。下端近くは面取りしている。上端にいくにつれ、幅が狭まり厚さ 1 cm、幅 2 cm の扁平な断面となる。柄孔等への差込部分であろうか。表面には数箇所刃痕が入る。86 は曲物。柾目、サワラ材。釘穴を 1 箇所のみ確認する。釘穴結合曲物。この他、SNo 2 出土の磨石が 1 点 (1370g) と剥片 1 点 (103g) がある。

- D-6 87 は非ロクロ土師器の杯 C 類口縁部破片。88 は須恵器盤の皿部破片。やや軟質で、口径は 14.0cm。89 は須恵器杯蓋の体部。かえし部はなく、内面に凹線が作出される。つまみ部に近い部分を 1/2 程度ケズリ成形される。90 は割材。広葉樹。木端であろうか、湾曲した表皮が残る。91 は鎌の柄。削り出し、シロモジ節。出土した同一個体 6 片中 4 片を接合。欠損するが身の基部を挟み込む装着孔が柄に対し鈍角に残る。貫通孔内には 2 箇所、身が抜け落ちるのを防ぐために打ち込んだ釘痕（楔）と思われる浅い溝を留める。装着孔上部中央にも 1 孔がある。下端には工具の刃痕が残る。コナラ節。92 は黒色頁岩材の擦り切り痕のある石器。大きめな剥片の周辺部を粗く打ち欠き、一端に擦り切り後、切断した痕跡が残る。



第681図 SD 53 出土遺物 7 (土器・木製品ほか)

石包丁の素材の可能性はないであろうか。

時期の判定基準：

非ロクロ土師器が下層・中層から一定程度出土していること、第675図2・14・15の高杯脚部の形態的特徴が1期末頃に位置付けられること、須恵器杯A類、ことに糸切り離し調整が極めて少なく、杯B類を主体に、底部突出した形態例を幾らか含む点などから、古代1期から2期を想定したい。この傾向が上層・検出面でも認められるので、本溝の掘削・盛行期が2期前後にあることは間違いないであろう。検出面での第679図52の須恵器甕A類、第680図67の短頸壺A類、60及び他の盤類も2期相当であろうか。ただし、埋土中の遺物には、土師器杯形土器の破片8片と灰釉陶器類6片（第680図70の長頸壺含む）がある。全体量から比して、極めて稀少な遺物で混在の可能性が高いと判断するが、第680図71の櫛が長方形で肩に丸みを持たせるタイプ（AⅡ式）であり、7世紀には出現しないとされる点から、再考の余地もある。D-6・7区で本溝が2条に分かれて確認されたことから、あるいは6期以降の溝跡が重複している可能性もあるか。

発掘番号	取上No	層位	器種	本目	規格	取存量	備	厚さ	形状の特徴
第675図5	2	下層	彫材	みかん彫り	オニグルミ	27.4		2.8	穴有り
第675図6	4	下層	棒材	芯持ち丸木	ウツク属	(25.6)	遺埋 2.5		
第675図7	101	下層	棒材	芯持ち丸木	サナキ属	(27.7)		3.7	3.1
第675図8	63	下層	柄	不明	サワラ	27.2		1.8	1.1
第675図9	45	下層	彫材	不明	フジ木	(26.9)		3.4	1.5
第675図10	70	下層	板材	板目	ヒノキ科	12.1		1.5	0.9
第675図11	35	下層	板材	板目	サワラ	11.5		2.3	0.7
第675図12	71	下層	柄	芯持ち丸木	ヒノキ科	(14.5)	遺埋 1.1	0.95	0.95
第675図13	73	下層	彫材	板目	モミ属	12.5		6.9	2.3
第675図17	33	中層	鎌の柄	削出丸木	シロモシ節	20.1		遺埋 2.0	2.0
第675図18	46	中層	部材	二方柱	モミ属	12.6		3.5	3.5
第676図19	8・27	中層	部材	板目	モミ属	(29.3)		3.0	1.3
第676図20	10	中層	火箸板	透経目	サワラ	14.9		2.6	2.1
第676図21	16	中層	部材	板目	サワラ	13.0		3.8	1.0
第676図22	49	中層	部材	二方柱	モミ属	(30.9)		2.7	3.1
第676図23	102	中層	棒材	芯持ち丸木	サナキ属	(17.5)	遺埋 2.5	2.45	0.4
第676図24	12	中層	煮箸	板目	サワラ	18.7		1.9	0.4
第676図25	59	中層	煮箸	板目	サワラ	(6.6)	(1.6)	0.4	煮箸を染る
第676図26	37	中層	用途不明	板目	サワラ	21.1		9.9	4.6
第676図27	83	中層	彫材	透経目	サワラ	(39.5)		3.0	1.9
第676図28	28	中層	彫材	板目	モミ属	42.2		4.2	2.5
第677図29	11	中層	動物遺産 骨板	板目	ヒノキ	30.7		14.9	1.2
第677図30	57	中層	動物遺産	板目	ヒノキ	21.5		11.0	1.0
第677図31	82	中層	動物遺産	透経目	ヒノキ	18.9		9.7	1.1
第677図32	1	中層	棒材	芯持ち丸木	針葉樹	36.5		遺埋 1.0	可状
第677図33	34	中層	板材	透経目	ヒノキ科	34.8		5.4	0.8
第677図34	628	中層	板材	板目	モミ属	(32.7)	(8.1)	1.7	建築材部材か
第678図35	31	中層	彫材	板目	ケヤキ	(47.6)		5.8	2.7
第678図36	26	中層	彫材	板目	サワラ	28.6		10.5	2.7
第678図37	77	中層	部材	透経目	クリ	8.5		9.4	3.8
第678図38	56	中層	用途不明品	透経目	サワラ	14.5		7.9	3.3
第678図39	22	中層	彫材	みかん彫り	サワラ	17.0		11.7	4.8
第678図40	34	中層	彫材	板目	サワラ	20.3		12.3	5.3
第678図41	50	中層	彫材	板目	クリ	50.8		10.2	4.3
第678図42	100	中層	棒材	芯持ち丸木	クリ	22.2		12.9	10.0
第679図48		上層	柄	板目	サワラ	(20.0)		2.5	1.1
第679図49	54	上層	煮箸	板目	サワラ	(7.0)		1.3	0.2
第679図50	21	上層	彫材	板目	ヒノキ	(46.7)		4.5	2.5
第680図56		埋土	部材	板目	サワラ	(9.1)		2.9	0.9
第680図57		埋土	板状木製品	透経目	サワラ	9.2		2.4	0.9
第680図71		埋土	櫛	板木取り	イヌノキ	3.5		2.1	0.5
第680図72		埋土	棒材	芯持ち丸木	ヤマウツク属	12.7		遺埋 2.6	
第680図73		埋土	煮箸	板目	ヒノキ	11.1		1.95	0.4
第680図74		埋土	鎌の柄	削出丸木	コナラ節	(20.0)		遺埋 1.9	
第681図75		埋土	下駄	板木取り	モクレン属	19.2		7.6	2.0
第681図81		埋土	板状木製品	板目	サワラ	15.0		1.8	0.9
第681図84		埋土	刀子の柄か	削出	カズラ属	9.4		1.9	1.4
第681図85		埋土	部材	二方柱	アツキ	(21.7)		3.7	3.5
第681図86		埋土	木物	板目	サワラ	18.4		7.1	1.0
第681図90		埋土	彫材	板目	広葉樹	5.7		4.4	0.5
第681図91		埋土	鎌の柄	削出	シロモシ節	13.5		2.6	2.0

第196表 SD53出土木製品属性

3. 特殊遺構

3-1. 地鎮的遺構

地鎮的遺構の調査（第682図から第688図）

検出地区： XD-22区、I-2区（③区）

検出面： 黄褐色砂質土上面

遺構全体の形状： サイコロの5の目状配置。正方形に4基を配置し、中央に1基を設ける。

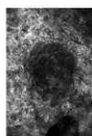
遺構全体の規模： SK 1160 - SK 650 の北辺は 480cm、SK 650 - SK 1063 の東辺は 486cm、
SK 1063 - SK 1179 の南辺は 440cm、SK 1179 - SK 11160 の西辺は 486cm、
正方形の面積（北辺×東辺）は 233.3 m²である。

SK 650 - SK 500 は 335cm、SK 1179 - SK 500 は 322cmを測る。

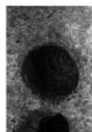
軸のふれ： N-3°-W

遺構認定の根拠： 当該地区では数百に及ぶ柱穴状の土坑を確認したが、埋土中に完形の土器を複数出土したのは、この5基のみである。規則的な配置、埋納された土器の数と出土状態から、いずれも性格を同じくするまとまりのある遺構と判断した。中央部から緑釉手付き瓶が完形で出土、墨書土器の存在、全体の配置などから、地鎮遺構を想定した。

遺構の時期： 猿投産緑釉陶器の存在から、9世紀後半を推定できるが、在地産と考えられる土師器、口径14.0cmを測り緩やかに外反して開く口縁の碗形土器、口径12.0cm～13.0cmで、糸切り難し調整の坏A類の特徴から、9世紀末から10世紀初頭（古代8期後半から古代9期）を考えたい。



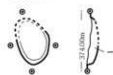
SK 1160 完照



SK 1179 完照

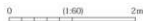


SK 1063



SK 1063 完照

第682図 地鎮遺構の完照状態



SK500 (第683図・第684図)

位置: KD-22・I-2区(③区) 形態: 円形、深いタライ状

規模: 52cm×44cm 残存深度: 26cm

壁立ち上がり: 15度

埋没土: 1層黒褐色粘質土(10YR3/2)、2層黒褐色粘質土(10YR3/1)の堆積

重複遺構: なし

検出経過: 黄褐色砂質土上面にて、やや黒味のある褐色土の落ち込みを確認した。形状から土坑を推定し調査、埋土を半載した結果、緑釉陶器の瓶を発見、周囲に土師器環類がまとまって出土したことから、一括的な埋納と考え、地鎖関連の遺構と判断する。

遺物出土状態: 土坑中央部に緑釉の手付き瓶完形個体1点が正位で出土した。南側にはNo2の土師器碗の完形個体が内面を外側に向け倒立で出土。西隣にはNo3の環A類が内面を内側に向け倒立で、さらに北隣にはNo4の環が内面外側に向け、やはり倒立で出土した。北側にはNo5の環A類が内面を上に向けて、坑内中央に傾くように出土した。状況から、いずれの環類も突き立てて倒立した状態であったと考えられる。

出土遺物:

緑釉把手付き瓶

第683図1はNo1の完形個体。全面を緑釉施軸する。内面にも施軸があり、口縁から3.5cm程までの間、さらに、底面の2/3程度には釉葉がかかる。回転ロクロ成形後、幅1.0cmほどの鋭いへら状の工具(鉄か)により、外面を2/3程度ケズリ整形する。把手部は0.8cmの厚みのある粘土帯を貼り付、口縁部は丁寧なナデにより器面になじませ、下の端部はさざくれ状にした上で器面に貼り付けている。その後粘土帯内面を厚さ0.5cm程度まで工具でケズリ込み、粘土帯の左右は持ちやすいように縦方向に切りケズリする。この時の工具痕が帯びに沿って器面にかすかに、縦方向に平行するように刻み込まれている。口縁部は1.0cm前後の軟質ハンマーにより内面から右回りに5回、更に注ぎ部あたりを2回程度微調整剥離し、ほぼ水平に口縁を打ち欠いている。底部はへら?切り離し後にナデ整形される。底部と体部接合部は一本の沈線状に整形される。容積1680ml。

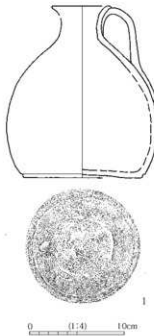
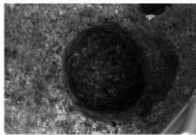
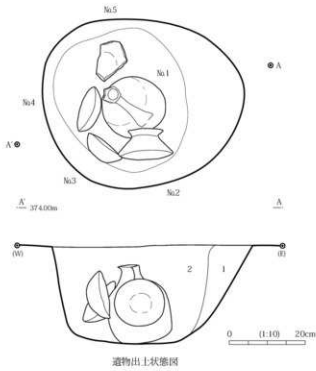
碗形土器

第683図2はNo2の完形個体。土師器の碗形土器で、口径14.0cm、内高3.5cm、器高5.5cm、320ml。回転ロクロ成形で口縁端部はやや折り縁状に外反する。高台は比較的強く外反し、高台径8.3cmを測る。体部外面には、正位で風の字に平「扇」の墨書があり、筆幅0.3cmで丁寧な筆運びである。

環形土器A類

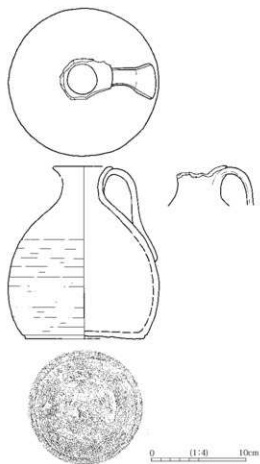
第683図3はNo5とNo6が接合した完形個体。口径13.0cm、器高4.1cm、底径4.0cm、220ml。底部小さく、回転ロクロ成形で、口縁は外反する。体部の張る器形で、体部屈折系の流れであろうか。赤色微粒子を多量に混在する。第683図4はNo4の完形個体。口径12.3cm、器高3.5cm、底径5.0cm、200ml。回転ロクロ成形で、口縁はやや外反し、体部はあまり張りださない。糸切り離し手法。赤色微粒子を多量に混在する。外面の調整はあまり丁寧でなく、ナデ整形痕が帯び状に残る。第683図5はNo3の完形個体。口径12.0cm、器高3.7cm、底径4.7cm、260ml。回転ロクロ成形で体部が碗形に張る器形。

以上の他、埋土中から、須恵器環A類の体部小破片2片(5.4g)と口縁部小破片1片(1.3g)、甕体部破片2片(6.1g)、土師器小型甕D類体部小破片1片(2.5g)、甕形土器B類体部微小破片5片(7.0g)、環A類の体部小破片10片(8.8g)と底部破片2片(11.5g)と口縁部小破片1片(0.4g)、器種不明1片(10.9g)、黒色土器A環A類の口縁部破片4片(5.6g)と体部小破片1点(0.9g)がある。



第 683 図 SK 500 と出土の土器

第3章 発掘調査の概要



第684図 SK500出土の土器と緑釉手付き瓶

SK650 (第685図)

- 位置：XD-22区 (③区) 形態：円形、深いタライ状
 規模：30cm × 30cm 残存深度：14cm
 壁立ち上がり：18度 埋没土：灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) の単純堆積
 重複遺構：なし
 検出経過：黄褐色砂質土上面にて、やや黒味のある褐色土の落ち込みを追求したが、確認できなかった。再度に及ぶ精査で、土師器環A類 (No1) を発見した。落ち込みの想定はなく掘り進めたところ、土師器類が一括して出土した。結果として、土坑であることが判明した。よって、他の土坑に比して検出レベルが低くなってしまった。
- 遺物出土状態：検出時、土坑北側にNo1の土師器環A類完形個体が内面を上、土坑中央に全体がやや傾斜したような状態で出土した。No1の真下には、重なるようにNo4の環A類が割れた状態で確認できた。土坑内の南側にはNo2とNo3があり、No3の椀形土器完形は内面を伏せた状態で出土し、これに一部重なるような状態でNo2の環A類が倒れ掛かるように出土した。

出土遺物：

椀形土器

第685図1はNo3の完形個体。土師器の椀形土器で、口径14.3cm、内高3.5cm、器高5.5cm、264ml。回転ロクロ成形で、口縁端部は内面のナデにより、やや折り縁状に外反する。高台は比較的強く外反し、高台径8.5cmを測る。焼成前の変形がある。胎土中には赤色粒子を多量に混入する。

環形土器A類

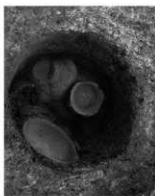
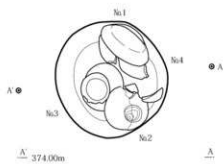
第685図2はNo1の完形個体。口径12.5cm、器高4.1cm、底径5.0cm、230ml。回転ロクロ成形で、外面に成形痕を留める。底部糸切り離し調整。口唇直下は強いナデ調整される。口縁は直口し、体部はやや張る器形。焼成前の変形がある。赤色微粒子を多量に混入。第685図3はNo2の完形個体。口径12.0cm、器高4.2cm、底径4.5cm、180ml。回転ロクロ成形で、口縁は直口し、直下の強いナデ調整により、やや外反状を呈する。体部はあまり張りださない。底部は小さく、糸切り離し手法。赤色微粒子を多量に混入。外面の調整はあまり丁寧でなく、ナデ整形痕が帯び状に残る。第685図4はNo4の完形個体。口径12.5cm、器高4.3cm、底径4.5cm、200ml。回転ロクロ成形で、口唇直下に横ナデ調整が入る。体部が椀形に張る器形で、底部は小さく、糸切り離し調整。丁寧な作りで、胎土中に赤色微粒子を多量に混入する。

SK1063 (第686図)

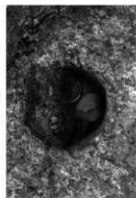
- 位置：XI-2区 (③区) 形態：不整円形、タライ状
 規模：(74) cm × 48cm 残存深度：16cm
 壁立ち上がり：12度 埋没土：灰黄褐色粘質土 (10YR4/2) の単純堆積
 重複遺構：SD 49及びST 16Pit8と重複関係にある。両者を破壊して構築していると判断した。
 検出経過：黄褐色砂質土上面にて、やや黒味のある褐色土の落ち込みを確認、形状から柱状の土坑と判断して調査した。検出時、SD 49及びST 16Pit8と重複していたが、切り合い関係及びその位置・ラインを埋土の違いから判別できなかった。状況から本跡が両者を破壊すると考えたが、極めて不明瞭。埋土中に土師器環類がまどまって出土したことから、その一括性を重視し、地鎮関連の遺構と推定した。

遺物出土状態：土坑南側にNo1の土師器環形土器A類が内面を上に向けて出土した。北側にはNo3

第3章 発掘調査の概要



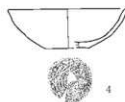
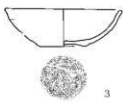
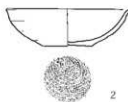
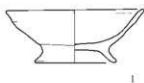
遺物出土状況



平截状況



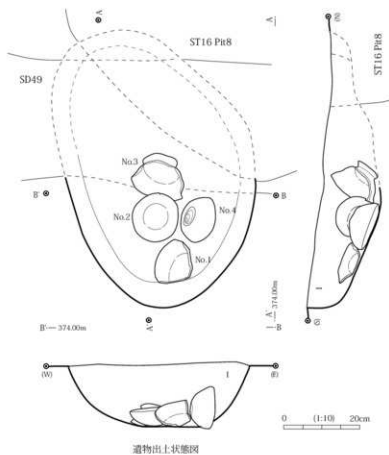
遺物出土状態図



0 (1:4) 10cm



第685図 SK650と出土の土器



半截状況



第 686 図 SK 1063 と出土の土器

第3章 発掘調査の概要

の椀が同じく内面を上にして出土、それらの間、土坑中央部分からはNo2が内面を上、No3が内面を下に出土した。各個体は埋没時、突き立てられていたものが、後に何らかの要因によって、倒れた結果と状況判断した。

出土遺物：

椀形土器

第686図1はNo3のほぼ完形個体。口径14.0cm、内高3.7cm、器高5.7cm、290ml。回転ロクロ成形で、口縁端部は内面のナデにより、やや外反する。器面は風化し著しく荒れる。高台は強く外反し、高台径8.0cmを測る。胎土中には赤色粒子を多量に混入する。

環形土器A類

第686図2はNo1の完形個体。口径12.0cm、器高3.8cm、底径4.5cm、200ml。回転ロクロ成形で、底部糸切り離し。器面は風化著しく観察できない。口唇直下にはナデ調整が施されているようだが不明瞭。口縁は直口し、体部は張らない器形。焼成前の歪みが少々ある。赤色微粒子を多量に混入する。第686図3はNo2の完形個体。口径12.0cm、器高3.3cm、底径4.0cm、200ml。器高の低い形態で、底部は小さく、糸切り離し手法。回転ロクロ成形で、口縁は直口する。風化著しく、調整の観察は難しい。赤色微粒子を多量に混入する。第686図4はNo4の完形個体。口径12.0cm、器高3.5cm、底径4.5cm、187ml。No2とほぼ同様な作りである。口唇はやや脹らみを持ち、直口。底部は小さく、糸切り離し調整。胎土中に赤色微粒子を多量に混入する。

以上の他に、埋土中から、須恵器A類の口縁部微小破片1片(2.0g)と土師器A類の微小破片1片(0.9g)が出土した。2者とも周辺部が磨耗しており、埋土中の混入物と考えられる。

S K 1 1 7 9 (第687図)

位置：	IX1-2区(③区)	形態：	円形、深いタライ状
規模：	31cm×29cm	残存深度：	25cm
壁立ち上がり：	10度	埋没土：	灰黄褐色粘質土(10YR4/2)の単純堆積
重複遺構：	なし		
検出経過：	黄褐色砂質土上面にて、やや黒味のある褐色土の落ち込みを確認し、調査した。形状から柱状の土坑と判断して、埋土を掘り下げたところ、坑内から、土師器環類がまとまって出土した。その一括性から、地鎮関連の遺構と推定した。		
遺物出土状態：	土坑南側にNo1の土師器環形土器A類が内面を内側に向けて倒立した状態で出土した。北側にはNo2とNo4の環Aが内面を上に向けて重なって出土した。椀形土器No3は、土坑中央部分に内面を上に向けて出土した。		

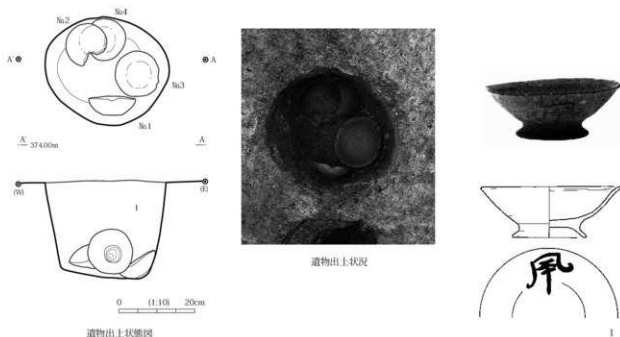
出土遺物：

椀形土器

第687図1はNo3の完形個体。口径15.0cm、内高3.7cm、器高5.6cm、330ml。回転ロクロ成形で、底部糸切り離し後、貼り付け高台、ナデ調整仕上げ。口縁端部は内面の強いナデにより、やや外反し、内面には稜を明瞭に残す。高台は強く外反し、高台径7.8cmを測る。体部外面には、筆幅0.3cmで、風の字に平「胤」の墨書が正位に書かれる。勢いのある筆運びで丁寧。胎土中に赤色粒子を多量に混入する。

環形土器A類

第687図2はNo1の完形個体。口径12.2cm、器高4.1cm、底径4.5cm、200ml。回転ロクロ成形



第 687 図 SK1179 と出土の土器

第3章 発掘調査の概要

で底部糸切り離し手法。器壁はやや厚い。口唇直下は横ナデ調整が施される。口縁は直口する。赤色微粒子を多量に混入する。第687図3はNo2の完形個体。口径12.2cm、器高4.2cm、底径4.2cm、220ml。底部は小さく、糸切り離し手法。回転ロクロ成形で、体部の張る屈曲系の形態に近い。口縁は直口し、口唇はやや厚みがあり丸縁。赤色微粒子を多量に混入。第687図4はNo4の完形個体。口径12.3cm、器高4.0cm、底径5.0cm、200ml。口唇直下は強い横ナデが施される。口唇は厚く丸縁状。焼成前の変形がある。底部は糸切り離し調整。胎土中に赤色微粒子を多量に混入する。

SK1160 (第686図)

- 位置：XD-22区(③区) 形態：円形、深いタライ状
規模：30cm×26cm 残存深度：21cm
壁立ち上がり：16度 埋没土：灰黄褐色粘質土(10YR4/2)の単純堆積
重複遺構：なし
検出経過：黄褐色砂質土上面にて、やや黒味のある褐色土の落ち込みを確認した。形状から柱状の土坑と判断して調査した結果、土師器環類がまとまって出土した。狭い土坑内に土師器が一括収納される状態から、地鎮関連の遺構と推定した。
遺物出土状態：土坑南側にNo1の土師器椀形土器完形個体が内面を伏せた状態で出土し、直下にはNo5の環形土器A類が内面を内側に倒立した状態で出土した。北側にはNo2とNo4の環類が、内面を上に乗るような状態で出土した。いずれの個体も、土坑中央部方向に傾斜していることから、東側で出土したNo3や南側のNo5のように本来は突き立てたように倒立していたと想定できる。

出土遺物：

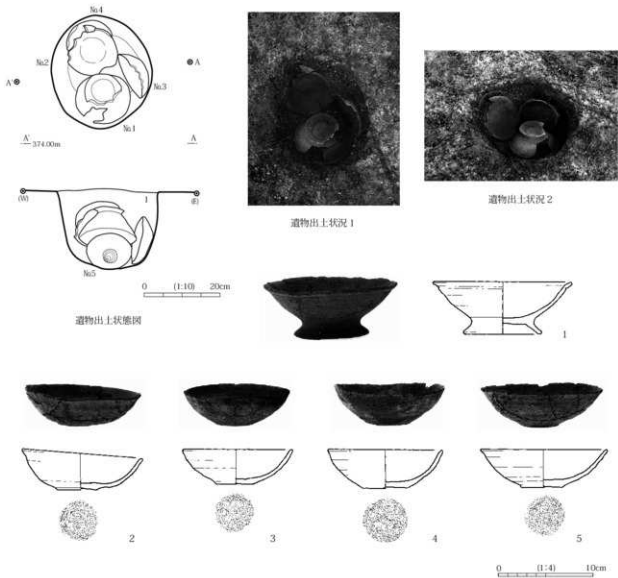
椀形土器

第688図1はNo1の完形個体。口径14.2cm、内高3.9cm、器高5.7cm、300ml。回転ロクロ成形、口縁端部は内面の強いナデにより、やや外反する。口唇直下の外面には、一本沈線様の筋が一周する。高台は強く外反、高台径8.0cmを測る。体部外面は風化著しい。胎土中の赤色粒子は少量。

環形土器A類

第688図2はNo2の完形個体。口径13.0cm、器高3.8cm、底径4.0cm、200ml。回転ロクロ成形でロクロ成形痕を留める。底部は小さく凸状で、糸切り離し手法。口唇直下は横ナデにより、口縁やや外反気味。器面は風化で荒れる。赤色微粒子を多量に混入する。第688図3はNo3の完形個体。口径11.8cm、器高3.7cm、底径4.0cm、180ml。底部は小さく、糸切り離し手法か。風化激しく、器面調整の観察不能。焼成前の歪みがある。赤色微粒子を多量に混入。第688図4はNo4の完形個体。口径12.5cm、器高4.2cm、底径4.8cm、200ml。器面の風化著しく、焼成前の変形も強い。口唇直口し、やや丸縁状。底部はやや大きく、糸切り離し調整。胎土中の赤色微粒子は少量である。第688図5はNo5の完形個体。口径13.0cm、器高4.2cm、底径4.2cm、200ml。回転ロクロ成形で、外面に成形痕を明確に留める。底部小さく、やや凸状。糸切り離し調整。口唇直上し、やや厚みのある丸縁。器面の風化著しく、焼成前の変形も強い。胎土中に赤色微粒子を多量に混入する。

以上のほか、埋土中から、須恵器甕形土器C類の体部小破片7片(45.9g)と土師器甕形土器の体部小破片4片(6.3g)、黒色土器Aの環A類2片(24.9g)が出土した。



第 688 図 SK 1160 と出土の土器

第3章 発掘調査の概要

Pit番号	SK番号	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	埋土の 分類	土色補記号	柱材の 有無	出土遺物	切り合い	備考
1	SK1160	円	A	30	26	21	a	10YR4/2	—	有り		
2	SK650	円	A	30	30	(14)	a	10YR4/2	—	有り		
3	SK1063	楕円	(D)	(74)	48	16	a	10YR4/2	—	有り	SD49,ST16pit8を切る	
4	SK1179	円	A	31	29	25	a	10YR4/2	—	有り		
5	SK500	楕円	A	52	44	26	d3	1層 10YR3/2, 2層 10YR3/1	—	有り		

第197表 地鎮遺構の属性

小 結

今回、地鎮遺構とした土坑群は、ほぼ正方位、正方形を呈する。正方形の中心部には、1基特別な土坑を設置し、サイコロの5の目状をなすことに特徴がある。それぞれの土坑中には、土師器椀形土器が必ず1点含まれ、ほかに環形土器3点が組成する。このセットは南西に位置したSK1160のみが異なっており、椀1点に坏4点を組成する。土器の出土状態は、明らかに人為的埋納形態を示すと考えられ、出土状態から原形を推定してみると、円形状を呈する土坑に対し、北側に2点の環形土器が内面を内側に向けて倒立して埋められる。さらに東側あるいは西側に1点、やはり内面を内側にして坏が倒立し、それら3点の上に椀が1点、伏せて重ねられていたと判断できそうである。中央部の1基は、中心に緑釉把手付瓶が1点正位に置かれ、その脇に南北向かい合わせに土師器坏A類が内面を内側に向けて倒立し、左右には坏1点と椀1点が内面を外側に向けて倒立して置かれていたと考えられる。



地鎮遺構出土の土器

3-2. 土墳墓跡 (SK740)

木棺墓の調査 (第689図から第699図)

検出地区: XD-13・18区 (③区)

検出面: 黄褐色砂質土上面

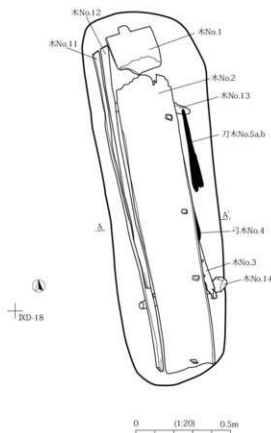
形状: 長楕円形状

規模: 長軸200cm×短軸62cm、深さ28cmを測る。壁の立ち上がりは81度程度。

軸のふれ: N-3°-W

埋没土: 黒褐色粘質土(10YR3/2)の単純堆積。白色粘質土粒子を微量混入し、部分的に砂質土混入
重複遺構: なし

検出の経過と出土状態: 黄褐色砂質土上面にて、黒味を帯びた褐色土の落ち込みを確認した。検出当初は、極めて新しい溝跡あるいは攪乱の可能性を考えたが、埋没土を掘り下げたところ、板状の木製品が出土、状態から棺材の可能性を考え、土坑(墓塚)を推定し調査を継続した。棺材とした板材は、当初、天井板と考えたが、精査の結果、天井板ではなく、棺の側板であることが判明した(第689図)。北側で折れ曲がり、棺内に落ち込んだ状態で出土(P627写真)。これを取り除き精査したところ、人骨1体が、頭を北に、そして体全体を西に向けて発見できた。棺ごと西側に向けて横位に埋置された状態と捉えられたが、なぜか底板と推定した板材(木No12・第696図)は天井板(木No11・第695図)と重なり合って天井板側から出土した。側板には底板側に3つのホゾ穴があり、底板は横方向の貫き棒状の軸で留められていた可能性が高いが、軸の出土はなかった。第699図10の小さな角材がそれに該当するも



第689図 検出状態 1



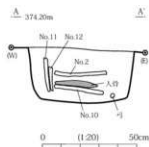
側板 (No1) の出土状態



調査の様子

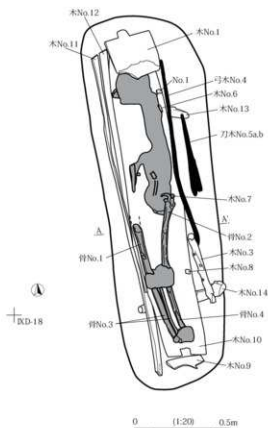


埋積土層



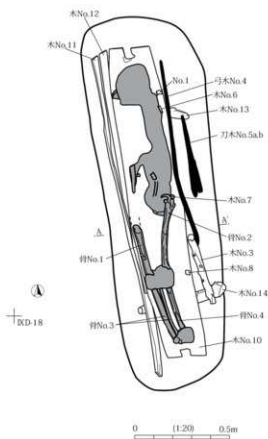
第690図 中央部の土層

第3章 発掘調査の概要



人骨の検出状況

第 691 図 検出状態 2 (右側板 No2 を取り除いた状態)



頭蓋部の検出状況

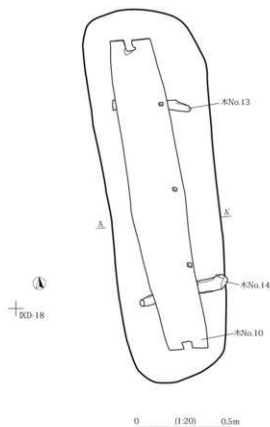


胴部の検出状況

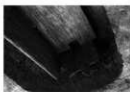


両足部の検出状況

第 692 図 検出状態 3 (上下側板 No1 と No9 を取り除いた状態)

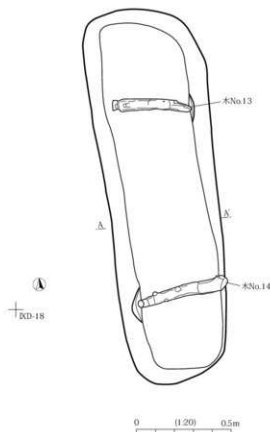


天井板と左側板の検出状態



下板板との組み合わせ状態

第 693 図 検出状態 4 (天井と底板 No11 と No12 人骨等を取り除いた状態)



棺材取り上げ後の検出状態



北側の柱木検出状態



南側の柱木検出状態

第 694 図 検出状態 5 (左側板 No10 を取り除いた状態)

のであろうか。同様な材が2点ほかに出土しており、ともにヌルデの割り材である。人骨は伸展葬で、顔は右（西側）、後肢は前面が下向きで、右の大腿骨が左側に、左の大腿骨が右側にあることから、うつぶせの状態を想定できる。棺が90度回転していたことから、埋葬姿勢が崩れて、うつぶせ状態になった結果か（註1）。人骨の右（東側）、背の部分には弓状木製品1点と刀形木製品2点が揃って出土した（第692図）。棺材の下には、長さ42cm～48cmの枕木が2本据えられていたが、特筆すべきは枕木の長さは墳底面の幅よりも長く、縦方向から墳内に入れ、横方向にねじ込んで挿入したものと推定できる。ともにクヌギ属でやや径の細い同材の棒材1点（第699図9）が他にある。

棺 材： 天井板（第695図1）は、モミ属の1枚材で、上下両端は垂直に切断される。表裏面には工具によるケズリ痕跡が明瞭に観察できる。大きさは170cm×23.4cm、厚さ2.4cm。

底板（第696図2）は、モミ属の1枚材。上下両端部は垂直に切断されているように観察できるが、長さが短く、片方は欠損か。中心よりやや上方に、炭化している部分がある。大きさは129.4cm×15.2cm、厚さ1.6cmを測る。

上下の側板（第696図3、4）。3は上部、頭位側（北側）の側板で、ホゾが片側に残る。本来は両端部にあり、主軸の側板と3枚が組み継ぎ状になる。モミ属で、切断面はノコギリによるものか。幅（33.3）cm、高さ23.7cm、厚さ2.0cm。4は下部、足下側（南側）の側板で、ホゾが両側に残る3枚の組み継ぎ形式である。モミ属で、切断面はノコギリであろう。幅34.0cm、高さ（20.0）cm、厚さ2.0cmを測る。

左右（長軸）の側板（第697図5、第698図6）。5は右側（東側）の側板。北側、頭部方向を欠失する（図の下方）。モミ属で、長さ（156.8）cm、幅28.4cm、厚さ2.4cmを測る。底板を留める方形のホゾ穴は3.5cm×2.5cmで、3箇所にある。頭部側の1穴から50cmで2穴目が、さらに34cmで3穴目がある。6は左側（西側）の側板。出土時、土城底面より出土、完存品である。モミ属で、長さ170cm、幅27.0cm、厚さ3.0cmを測る。上下端部は厚く、中心部はケズリによりやや薄い。長さ5.0cm前後の工具痕が裏面に明瞭に残る。

副葬品： 刀形木製品大と小（第699図12・13）。12は刀形の大で、モミ属の板目材で、長さ429cm、幅3.0cm、厚さ12.0cmを測る。直刀状で、切先と中茎部分は丁寧に作出され、刃区も明瞭である。13は刀形の小。12とほぼ同形の作りで、切先と中茎部分はやはり丁寧に作出される。モミ属の板目材で、長さ24.9cm、幅2.7cm、厚さ0.7cmを測る。

弓形木製品（第699図11）。11はサクラ属の丸木芯持ち材。枝払いと弦の作出で造形される。本羽の作りは丁寧であるが、末羽はやや不明瞭。欠損しているものか。長さ（54.0）cm、直径1.6cm。

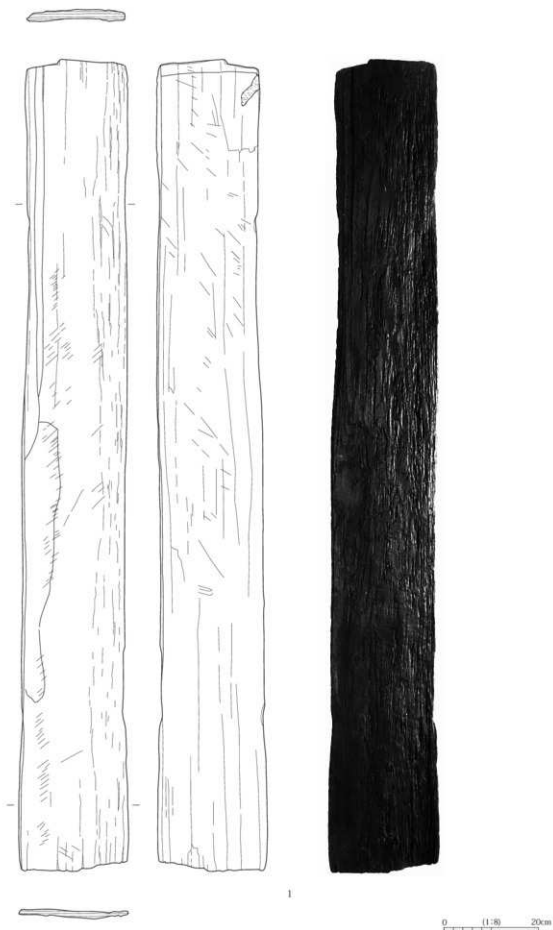
遺構名	棺材(天井)	棺材(側板)	棺材(底板)	枕木	棒材(枕木?)	角材	刀	弓	総数
SK740	1	4	1	2	1	3	2	1	15

第198表 SK740出土木製品組成

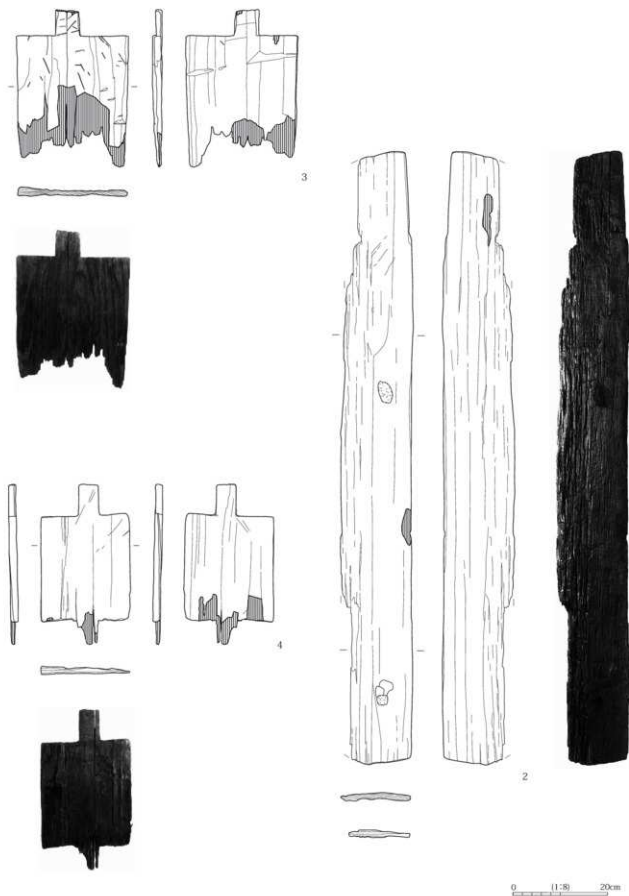
人 骨： 伸展葬で埋葬され、顔は右を向いているか。後肢は前面が下向きでうつぶせであることを思わせる。ただし、この木棺自体が右に90度回転していると思われるので、埋葬姿勢が崩れてその際に遺体もうつぶせ（後述）になった可能性がある。木棺の長さが170cmあまりで、埋葬姿勢から推定される身長は150cm前後である。下肢は伸展しているが膝をやや右方向下にしている。

頭蓋骨

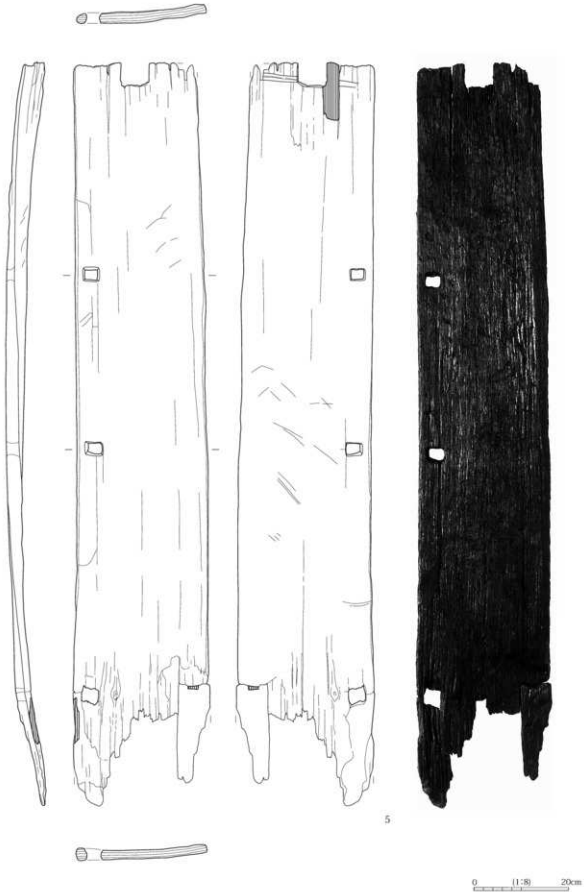
頭蓋骨はほとんど残っておらず、内部が鋤型の様な形態で残る。歯は残存していない。



第 695 図 天井板



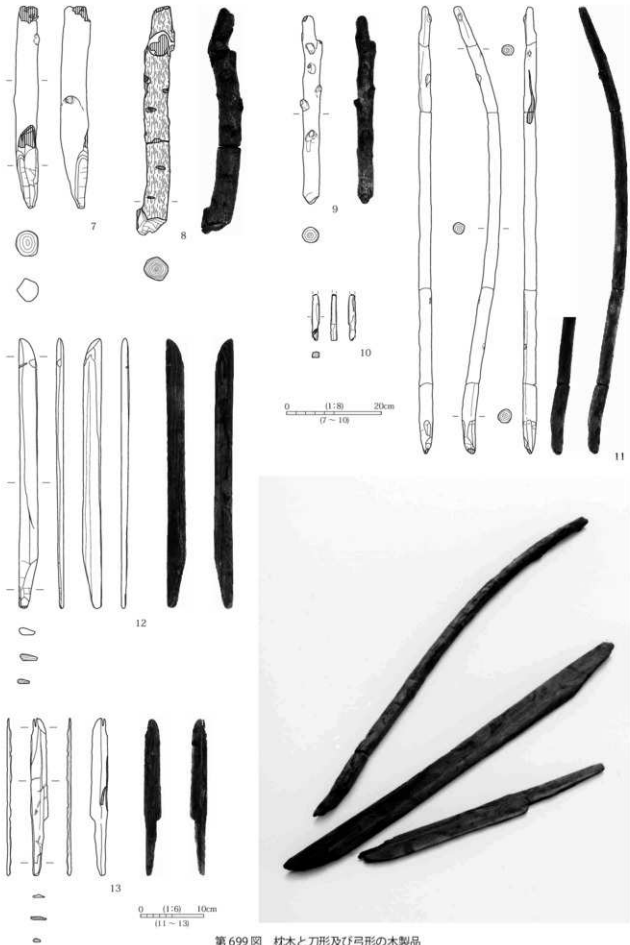
第 696 図 上下側板と底板



第 697 図 右側板



第 698 図 左側板



第699図 杖木と刀形及び弓形の木製品

上肢骨・体幹骨

上肢や脊椎部は発掘時の位置がようやく推定できるほどの残り方である。

下肢骨

下肢骨がようやく形態が推定できるほどの残存状態である。しかし、どの骨も骨端部や表面の緻密質の多くは失われており骨幹の一部が残っているだけである。

大腿骨

大腿骨はさほど細いわけではない。外側の殿筋隆起がやや発達している。中央付近は扁平な印象である。右の大腿骨が左側に、左の大腿骨が右側にあり、さらに、出土した大腿骨の前面向下向きになっているので、うつぶせになっていたと考えられる。

土器：埋土及び棺内埋没土中から土器小破片が出土した。状況から判断して、埋没土中の混入遺物と考えられる。埋没土中では、土師器甕形土器Ⅰ類口縁部破片1片（第691図No1、6.7g）と坏形土器体部破片2点（10g）、黒色土器A環A類口縁部破片2片（3.8g）・体部破片2片（3.6g）、須恵器環A類口縁部破片1片（3.6g）・体部破片1片（1.9g）、蓋形土器つまみ部破片1片（No2、8.8g）と体部破片1片（4.0g）、甕D類体部破片1片（37.0g）と甕E類体部破片1片（45.3g）そして灰釉陶器碗の底部破片1片（19.3g）がある。棺内埋土内では、土師器環A類体部破片2片（3.5g）、甕体部破片1片（2.2g）、黒色土器A環A類口縁部1片（2.5g）・体部1片（1.6g）、須恵器蓋つまみ部および体部の破片2片（72.3g）がある。

所見：この木棺墓は、社司宮遺跡全体の中で唯一の墓跡である。墓標等の上部施設はすでに存在していないが、墳内には棺材がほぼ完存していた。棺は板継ぎ手法で組み合わせられ、側板には、方形のホゾ穴が穿たれている。底板の状態が悪く、判断としないが、残存部分から推定するに、ホゾではなく、貫き棒のような渡し材を使用し、その上に底板が置かれていたと看られる。棺内には人骨1体と副葬品として、刀形木製品大形1振りと小形1振り、弓形木製品1本がある。それぞれが金属製武器ではなく、形代としての木製品である点は、極めて特異である（註2）。また墓標の大きさは、棺材とほぼ同程度の大きさで構築されており、棺がやっと入る程度である。なのに何故か、棺は西側に90度回転しており、右の側板が上側を向いていた。そして、天井板と底板が2枚合わさるようにして、天井板側に出土した。側板を支えていたであろう貫き棒状の軸は、第699図10のような角状の削材があるが、3点とも破損している。状況から予想できることは、墓の盗掘である。貫き棒が貫かれ、底板が割がされ、副葬品の持ち出しもあったのだろうか。極めて異例な出土状態である。

註1) 出土人骨の鑑定は、京都大学霊長類研究所所長茂原信生氏より報告を頂いた。本項の人骨部分の観察結果は、町田が先生の了解を得、文中に反映させたものである。

註2) 木棺墓に関しては、京都大学教授上原真人氏より丁寧なご教示を得た。棺の取上げ後であったため、先生には出土後の状態を観察し、ご指導を得た。

遺構の時期：本跡は時期比定できる遺物が無いため、棺材等の炭素年代測定（AMS法）から時期推定した。それぞれの暦年較正年代値は、天井板（第695図No1）が1045年～1155年、底板（第696図No2）は1040年～1150年、右の側板No2（第698図No6）が884±35年、足方向の側板No9（第696図No4）が1030年、弓が1005年もしくは1015年、枕木No14（第699図No8）が994±30年、No13（第699図No47）が1020年、人骨は954±30年であった。自然木で表皮部の残る枕木No14を、伐採年代に最も近い値と判断すれば、11世紀初頭（994±30年）となるが、棺材ほかの年代値が30年以上新しいのは、なぜだろうか。

第3章 発掘調査の概要

後半～9世紀前半にかけての「北」や「穴」→9世紀代の「守部」や「坂主」そして「大」や「八千」
→9世紀終末の「胤」となるか。

遺構名	一	ノ	レ	+	×	○に×	カゴ目	★(木炭痕)	件	王	坂	十?	万	帝?	富?	守	口	八	千?	八千	漢・井	三矢	合計
SB 01									1									1					2
SB 02																	1						1
SB 03																				1			1
SB 05	1																				1		1
SB 10	1																						1
SB 12																	1					4	5
SB 15									1														1
SD 01					2		1			3												1	7
SD 03	2		1	1	4					1		1	1	1	1	1	7	4	1	21		1	48
SD 25					1																		1
SD 53					1																		1
SD 77						1																	1
SD 84					1																		1
SK 0339		1																					1
SK 0658					1																		1
検出面	3												1									2	7
合計	7	1	1	2	9	1	1		1	1	1	3	1	2	1	1	1	10	5	1	28	1	80

第200表 社宮司遺跡出土の刻書文字一覧



社宮司遺跡出土の墨書土器

b. 漆紙文書

遺跡から出土した漆付着の土器資料は、総数で13点ある。この内、紙片の付着した個体が3点ある。SD 03に2点、SK 746に1点である。いずれも洗浄後に確認した例で、出土時の状況は不明である。それぞれをア〜ウと仮称し以下に記述する。

ア号漆紙

SD 03のD-11区下層(古代6期?・9世紀比定、P521第619図21)出土。黒色土器A類の環A類1/2個体。口径11.0cm、底部内径5.0cm、器高3.4cmを測る。体部半ばがやや屈曲し、緩やかに立ち上がる形態。内面には漆状の付着物がべつとりと付き、2.5cm×0.8cmの紙片が付着する。赤外線観察の結果、墨痕等は確認できなかった。

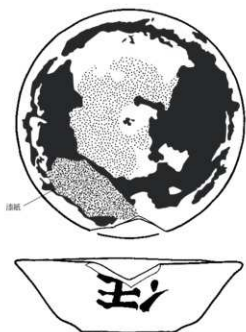
イ号漆紙

SD 03のE-16区2c層下部(古代6期・7期・9世紀比定、P565第650図122)出土。須恵器環形土器A類の完形個体。一部、発掘時の破損がある。回転口ケ口整形、ナデ幅0.7cmを明瞭に器面に残し、凹凸状になる。糸切り離し、ヘラおこし。口径12.0cm、器高3.8cm、底径5.2cm、内底径5.9cm。体部外面に倒位に「住カ」もしくは「伍カ」が筆幅0.4cm、直筆で入り、止めが明瞭。勢いのある美しい書き風である。内面には漆状の物質がべつとりと厚みをもって付着している。状態から、漆状の液体が土器内を満たしたまま固結した様子である。液体表面は紙で覆われ、所謂「ふた紙」があったようだが、すでに脱落しており、紙片は土器内面の片隅にのみ一部残っていた。長さ5.4cm、幅2.2cmの断片である。赤外線観察の結果、9文字が判読できた。「十月十一日正税廿束」、釈文は「じゅうがつじゅういちにち しょうぜいにじゅうそく」と読むか。この内、日付の部分「十月十一日」が一字0.4cm、「正税廿束」の部分が一文字0.6cmである。9文字の両脇には、別の文字列が想定できるが墨痕は不完全で判然としない。赤外線カメラを通して、目視する限りでは、両脇にも文字列がありそうである。行があると仮定するならば、行の間隔は1.5cm幅程度となるか。

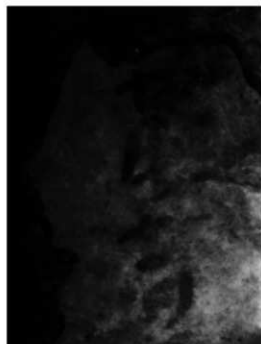
本漆紙文書は断片ながら、その記載内容から「出挙返納帳様文書」と考えられる。本例に関しては、国立歴史民俗博物館館長 平川 南 氏に判読をお願いし、玉稿を頂いているので、以下に掲載し、所見とする。

ウ号漆紙

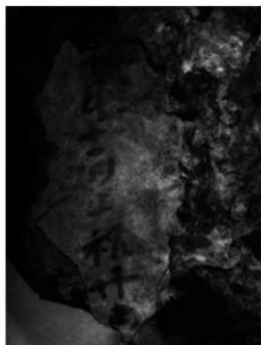
SK 746埋土内出土の黒色土器A類の環A底部小破片(P162第149図)。肉眼観察では、器面付着の漆は極く微量で、2.2cm×2.0cmの紙片が器面に貼り付いた状態であった。赤外線観察の結果、墨痕等は確認できなかった。



第700図 SD 03 出土の漆紙付着の土器



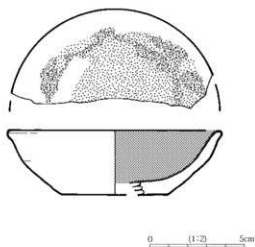
十月十一日の5文字



イ号漆紙文書全体（赤外線写真）



正税廿束の4文字



第701図 SD 03 出土の漆紙付着の土器（ア号漆紙）



第702図 SK 746 出土の漆紙付着の土器（ウ号漆紙）



社宮司遺跡出土の漆等付着物ある土器

社宮司遺跡出土のイ号漆紙文書

国立歴史民俗博物館 平川 南

1. 形状

須恵器形土器の内部に漆が付着しており、漆紙文書はその表面を覆った状態で貼り付いている。漆紙は茶褐色をなし、一見風化した革のような感じであり、漆紙の大きさは僅か5.4cm×2.2cmである。

なお、紙片の付着した須恵器環の年代は、9世紀代と考えられている。

2. 積文

「十月十一日正税甘束」（じゅうがつじゅういちにち しょうぜい にじゅっそく）

3. 文書内容

僅かな断片ながら、確認できる9文字は1文字の大きさがほぼ0.5cmぐらいで、記載様式と文字の大きさから推して、帳簿とみて間違いはない。

文書の構成は、現存部分では「月日+正税+（稲）の束数」となっている。正税は公的な税すなわち出挙稲と考えられる。出挙制は、春（3月）・夏（5月）に稲を貸付け、秋の収穫（主として9月）期に利息（公出挙5割、私出挙10割）を付して返納するものである。

本文書が出挙に関するものであることは、次の2点からも裏付けることができる。

まずひとつとして、日付が「十月十一日」とあり、「正税」の用語とともに、いわき市荒田目条里（あつためじょうり）遺跡出土の木簡が参考になる（資料1）。また、古代磐城郡家（根岸遺跡・荒田目条里遺跡など）に接した遺跡である小茶円（こちゃえん）遺跡出土の木簡は、本来の出挙返納期である九月と書いた後に、実際の返納月日である「十月三日」に書き直している（資料2）。この他にも、埼玉県児玉町上ノ南遺跡出土出挙木簡の日付「宝亀二年十月二日」（資料3）、大分県国東町飯塚遺跡出土木簡は、表裏両面に（表）「十月十日加納春息米十三石」

（裏）「以十月十八日加納春息米四石五斗七升」（資料4）

などと、いずれも十月に出挙稲の収納を行っている。



資料4 大分県国東町飯塚遺跡出土木簡

・ 檜前マ名代女上寺稲肆拾束
 宝亀二年十月二日税長大伴因足
 (一八二) × 三七 × 五

資料3 埼玉県児玉町上ノ南遺跡出土木簡

・ 判^{はし}郷戸主生子継正税^(削除)
 (年息)
 二二七 × 一六 × 二

・ 大同元年九月 大同元 十月三日
 (釈文)

資料2 福島県いわき市小茶円遺跡出土木簡

・ 道正税
 (五七) × 二 × 四

資料1 福島県いわき市荒田目条里遺跡十一号木簡

したがって社宮司遺跡のイ号漆紙文書に記された「十月十一日」は出挙返納日とみてほぼ妥当であるといえる。

二つめとして、「正税(稲)升束」は、出挙稲の取納額とみた場合、出挙に関する出土資料によれば、一人の1回の出挙額にほぼ該当する量目である。

遺跡	内 訳	1回1人の出挙額
1) 宮城県 田道町遺跡	464 束 ÷ 10 人 = 46.4 束	46.4 ÷ 2 = 23.2 束 ≈ 23 束
2) 埼玉県 小敷田遺跡	1370 束 ÷ 3 = 45.6 束	45.6 束 ÷ 2 = 22.8 束 ≈ 23 束
3) 富山県 北高木遺跡	50 束	50 束 ÷ 2 = 25 束
4) 茨城県 鹿の子C遺跡	一人平均出挙額 45 束	45 束 ÷ 2 = 22.5 束 ≈ 23 束
5) 長野県 屋代遺跡群	(87号) 五月廿日稲取人	20 束
	(13号) 酒人マ□荒馬 [大万]	20 束
	酒人マ□□	20 束

また、出挙に関する出土資料をみるかぎりでは、秋の取納は本稲と利稲そして未納稲をそれぞれ別々に記載している。

結局のところ、本文書断簡は、出挙取納帳のような性格の帳簿と推定できるであろう。

古代信濃国更級郡家の推定所在地にきわめて接した遺跡からの出土である。郡家の管轄する公出挙に関する取納帳の一部とみておきたい。



資料5 本漆紙文書の残存度を示す正倉院文書との比較

—断片(漆紙文書)と「出雲国計会帳」(天平六年・734年)—

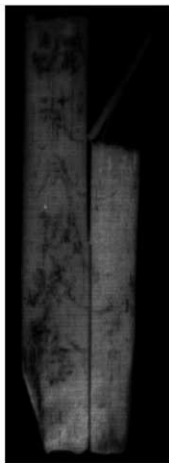
C. 習書木簡

木簡状木製品は、その形状から8点の資料を推定した。SB 14に1点(第470図9)、ST 27に1点(第545図5)、SD 01で2点(第599図78)、SD 03で4点(第645図40、第635図243)である。この内、ST 27の第545図5とSD 03の第635図243、SB 14の第470図9の3例が所謂、貢進物付札状木簡であり、すべてヒノキ材からなる。他の木簡は文書木簡と推定でき、5点中3点がサワラ材(2点は未同定)である。8点の資料に対し、赤外線観察を行った結果、墨書文字の確認できた木簡は1点のみであった。したがって、貢進物及び文章の様式・内容に関しては、まったくの不明である。唯一、文字の確認できた木簡は、その記載内容から漢字手習いの木簡であることが判明した。

手習いの木簡は、遺跡を東西に区画する北側の大溝SD 01、X-5区下層(古代4期?・8世紀に比定)から出土した第599図78の資料で、長さ(13.0cm)、幅3.3cm、厚さ0.4cmを測る。樹種は未同定であるが、AMS法による炭素年代測定の結果は、暦年代較正值でAD 645年となる。この木簡は、横位に切断され、縦方向に裂かれた状態で発見された。文字は片面にのみ確認でき、一文字約1.5cmの大きさで6文字ある。筆幅は0.1~0.15cm程度で、墨痕の残り具合はあまり良好ではないが、「誠」または「誠」の字と判読できた(註1)。第703図は、観察した状況のままに、文字を実測したもので、6文字全体の状況から、「誠」の字の手習いである可能性が高いと判断された。最下部の一字に関しては判読不能である。



SD 01 出土の習書木簡



習書全体(赤外線写真)



「誠」の字

第703図 SD 01 出土の習書木簡

所見：

第703図に示したように、習書文字に関しては、やや不明瞭である。「緘」の字であれば、その意味合いは、「封緘」・「緘札」・「緘制」等、とじる、つづる、くくるなどの意味合いで用いられた文字なのであろうか。墨書文字や手習いの木簡には、あまり類例を見ない。役所的な文字と評価してよいものか速断はできないが、気にかかるのは、出土状態である。現存長は折り取られ12.0cmほどであるが、現存する部分の上端から2文字ほどのところで、横位に切り込まれ、さらに縦位方向に裂かれたようである。この状態を見る限りは、千曲市屋代遺跡群114号木簡の廃棄工程との類似性を指摘できる。ただし114号木簡には、表面文書部縁にケズリが施されるところに違いがあり、しかも114号木簡は、「符 屋代郷長里正等～」に始まる所謂、郡符木簡である。郡符木簡は、郡内での最高権威に値するので、その悪用を防ぐために、差出と宛先を切断したものであるという。注意したいのは、社宮司遺跡習書木簡が、切断・折断の作法によって、廃棄されている点である。本遺跡出土の付札状木簡が、いずれも完全な形を残していることと比較して、文書木簡状木製品はいずれも折断後に廃棄されている。しかもなお、この習書木簡を見る限り、そこに文書木簡を廃棄する役人の一定の作法が現れているようである。

註1) 国立歴史民俗博物館 平川 南教授に判読指導いただいた。『木簡研究第24号』2004年所収。

平川 南 2003年 『古代地方木簡の研究』吉川弘文館



社宮司遺跡出土の貢進物付札状木簡

4-2. 土器に付着する漆・油脂・硫黄

遺跡から出土した土器には、極めて特徴的な3種類の付着物があつた。それらは、いずれも目視可能で、a 漆状の物質、b 油脂状の物質（灯明痕と観られるもの）、c 無機質の化合物（重鉱物の化合物と観られるもの）である。aは、一見して黒色の油脂状物質が土器器面にべっとりと付着した状態（表現すれば膠状に貼り付く）である。bはスス状またはタール状の黒色物質が、土器の口縁部に線状あるいは線取り状に観られる例である。土器体部であればaとの区別が付き難い場合もあり、認定には口縁部の付着に限定した。cは、灰褐色の粘性ある溶解物質が硬化したように、土器器面にべっとりと付着した状態（表現すれば溶鉱炉から溶解物質が流れ出たように付く）である。

これらa～cの物質は、我々が調査するどんなタイプの遺跡にも例外なく在するものではなく、特定の、cに於いては、これまで見聞したことのない物質であつた。したがって、これら物質の成分を調べ、その由来を探索することは、遺跡調査の根源的な課題のひとつである。そこで化学的な手法に基づいて、分析を実施した。

分析試料： aとbに分類された資料は、総数で36点ある。その内訳は、aが25点、bが10点である。cについては、総数は不明である。（数量の抽出は、完全なものではないため、提示以上の数量に及ぶことは確実である。cについては、抽出が遅れたため、カウントしきれていない。数量概算の内訳は、第201表に示す。この中で、代表的な例をa～cごと2点程度抽出し分析する。分析は、(株)パレオ・ラボに業務委託し、分析成果と所見を得た。

状態と出土位置	検出面	SB 02	SB 03	SB 09	SB 10	SD 01	SD 03	SD 25	SD 53	SD 84	SK 746	合計
a漆状	2	6			1	3	10	1		1	1	25
b油脂状		1		2			7					10
c化合物状		2	1			3	14		1	1		22
合計（登録のみ）	2	9	1	2	1	6	31	1	1	2	1	57

第201表 社宮司遺跡出土の土器付着物一覧

方法： a漆状物質とb油脂状物質は、フーリエ変換顕微赤外分光光度計（日本分光（株）製 FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて透過法によって赤外吸収スペクトルを測定した。

c無機質化合物は、X線分析顕微鏡を用いた元素マッピング（(株)堀場製作所製 XGT-5000Type II）で、マッピング分析の結果から、典型的な場所を選定し、ポイント分析を行う方法とした。測定の定量計算は、標準試料を用いないFP法（ファンダメンタルパラメータ法）で半定量分析を行った。

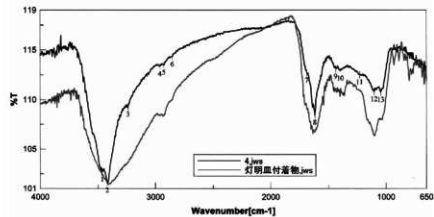
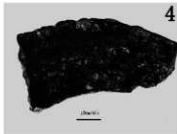
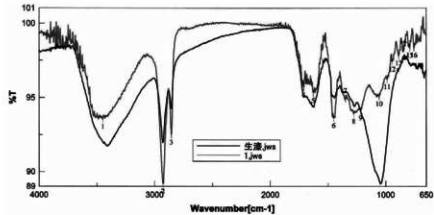
No	器種	遺構	出土地区	付着物	付着状況	分析法
1	環	SD 03	E-16	a	内面全面	赤外分光分析
2	環	SD 03	E-16	a	内面全面	赤外分光分析
3	環	SD 02	I-4	a	内面全面	赤外分光分析
4	環	SD 03	E-7	a	内面全面	赤外分光分析
5	環	SD 03	E-17	b	口縁部	赤外分光分析
6	環	SD 03	D-14	b	内外面全面	赤外分光分析
7	環	SD 03	E-13	c	内面全面・流れ痕	蛍光X線分析
8	小費	SD 03	E-12	c	内外面全面	蛍光X線分析

第202表 付着物分析資料一覧

結果：

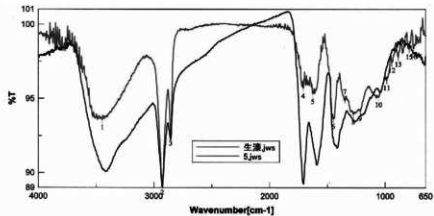
赤外線分光分析結果（※ 縦軸は透過率（%T；Transmittance）、横軸は波数（Wavenumber (cm-1)；カイザー）

試料No1～3は、生漆の赤外吸収スペクトルとほぼ一致し、漆と同定できる。目視で漆と判別したNo4では、No1～3と吸収スペクトルが異なつた。別にNo5と6の比較用試料として用意した灯明皿付着物(愛



ピーク検出結果

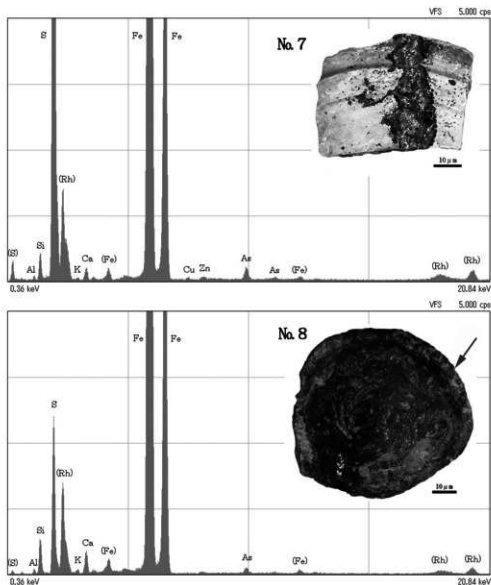
No.	位置	強度	No.	位置	強度	No.	位置	強度
1:	3463.53	90.5098	2:	3421.10	89.5336	3:	2339.82	96.3790
4:	2962.13	96.9780	5:	2927.41	100.0943	6:	2834.13	100.8294
7:	1887.41	99.3846	8:	1617.98	96.8215	9:	1436.71	99.7467
10:	1396.14	99.5079	11:	1236.43	99.2045	12:	1103.08	97.7267
13:	1045.23	97.6568						



生漆の赤外線吸収位置 (試料No.1~3, No.5・6共通)

No.	位置	強度	No.	位置	強度	No.	位置	強度
1:	3449.06	93.5366	2:	2928.38	89.1931	3:	2856.06	92.4929
4:	1709.59	96.8852	5:	1626.66	95.3059	6:	1450.21	93.6168
7:	1349.93	94.9413	8:	1276.65	93.0144	9:	1215.80	94.1453
10:	1056.80	95.0817	11:	997.38	96.2200	12:	943.98	97.3990
13:	888.06	97.8108	14:	848.53	98.2700	15:	792.60	98.3351
16:	755.96	98.3444						

第 704 図 赤外線分光分析チャート (資料 1, 4, 5)



第705図 蛍光X線分析チャート（資料7, 8）

知県八王子遺跡出土灯明皿付着物；藤根、2001）と比較して、吸収スペクトルの位置が複数位置で一致した。このことは、No4が灯明油である可能性が高いことを示す。代わってNo5と6は、比較用試料の灯明皿付着物とはスペクトルを異にし、すべての吸収位置において生漆と一致する訳ではないが、それに近いと判断できる。むしろ漆成分の炭化および変質の結果により、位置の不一致が出たと判断したい。

蛍光X線分析結果（元素マッピング及びポイント分析）

No	Al ₂ O ₃ (%)	SiO ₂ (%)	P ₂ O ₅ (%)	SO ₂ (%)	K ₂ O (%)	CaO (%)	Fe ₂ O ₃ (%)	CuO (%)	ZnO (%)	As ₂ O ₃ (%)	合計
7	3.79	13.21	0.00	15.48	0.20	0.96	66.14	0.00	0.05	0.16	99.99
8	1.84	5.22	0.19	57.12	0.10	0.44	34.85	0.04	0.04	0.17	100.01

第203表 蛍光X線分析による半定量分析結果

試料No7と8は、鉄FeとイオウSのピークがともに高い。典型的な部分（鉄のピークが高い位置）でのポイント分析では、No7は、鉄34.85%、イオウ57.12%であり、No8が鉄66.14%、イオウ15.48%であった。また、通常土壌中では少ないヒ素Asが若干含まれている点は特筆できる。鉄以外の金属元素は、銅

あるいは亜鉛が含まれるものの土壤中の濃度と同程度と考えられる。なお、試料 No8 の元素マッピング分析では、裏底部を対象としていることから、鉄に比べて感度の低いイオウは中央部付近において低いが、実際はイオウ含有量がポイント分析位置と同程度に高いものと思われる。

No	器種	付着物	測定試料の採取位置	結果	備考
1	環	a	内面	漆と同定	
2	環	a	内面	漆と同定	
3	環	a	内面	漆と同定	
4	環	a	内面	灯明油の可能性	
5	環	b	口縁部内面	漆の可能性	
6	環	b	内面	漆の可能性	
7	環	c	外面	イオウ利用の痕跡の可能性	
8	小甕	c	底部内面	イオウ利用の痕跡の可能性	

第 204 表 付着物分析の結果

所見：

目視でこれまで灯明痕と判断していた、明らかに灯明芯状の黒色物質からは、灯明油の有機成分ではなく、漆成分のスペクトルが得られた。このことは、土器口縁部付着物の状態が灯明痕ではないことを意味する場合と、灯明油の起原の問題ではなく、灯明芯そのものの痕跡、すなわち漆紙などをひねり使用した結果を表現している場合が想定できる。土器の観察状況から判断すれば、後者の可能性を考えることが妥当と判断できるか。

また、c の付着物は、これまでの見地にないことも反映してか、イオウ成分が濃厚に反応した。イオウ成分を含む代表的な鉱物としては、黄鉄鉱 (FeS_2)、黄銅鉱 (CuFeS_2)、閃亜鉛鉱 (ZnS)、方鉛鉱 (PbS)、辰砂 (HgS)、石膏 ($\text{CaSO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$) などが指摘される。硫黄はマッチおよび黒色火薬等の原料となる成分であるが、日本での火薬精製技術は 16 世紀以後の話である。火薬そのものは、硝酸カリを加えた精製があり、16 世紀以前の製法？については定かではない。日本は火山国であり、火山灰土壌中には鉄やアルミニウムなどの酸化物が主体的に含まれている。酸性化した土壌は、帯電しマイナスイオンを引き寄せる傾向があるという。ことに、佐野川扇状地のように Ph の高い酸性土壌では、イオウが滞留し放出量が少ないと考えられる。しかしながら、土壌中にごく微量にしか存在しないヒ素の反応がともに認められた点は気に掛かる。硫黄と砒素は、主として石黄 (As_2S_3) および鶏冠石 (As_4S_4) などの硫化鉱物として産出する。それらは、顔料としての使用法が挙げられるが、遺跡内に、それを追跡する事はできない。イオウ含有量の成分比ピークが、鉄などの一般金属以上に高い状況にあることや、硫化物として検出された鉄やヒ素を伴う鉱物が予想されることから、イオウを利用した何らかの精製痕跡があった可能性はある。またイオウには泉質の効能書きにもあるように、角質の軟化、殺菌・殺虫等の作用があるという。今回の硫黄の検出例は、古代の典薬式、年料雑薬記載に見る石硫黄三斗八升の貢進規定と何か関係するのであろうか。硫黄の採掘・貢上の事実追認もさることながら、硫黄を用いた何らかの合成物製作が地域で行われていたとするのであれば、律令社会の地域特定産物のあり方を追求する上に、実に重要な発見となろう。いまだ発見資料が少なく、定かなことは解らないが、今後の類例増加と確実な製作痕跡の把握に期待したい。

引用文献

- 藤根 久 (2001) 墨書土器の墨材料。愛知県埋蔵文化財センター調査報告書「川原遺跡第三分冊」、財団法人愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センター、P.73-75
 馬淵久夫 (2000) 元素の事典。朝倉出版、304p.
 梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明 (1992) 日本語大辞典。講談社、2302p.

4-3. 奈良三彩及び緑釉陶器

遺跡から出土した焼き物の中に、鉛釉の陶器がある。緑色を基調に、黄色あるいは白色に発色した奈良時代の陶器、奈良三彩と、緑色単色の平安時代の陶器、緑釉陶器である。奈良三彩陶器は、二彩も含め3点の出土があり、緑釉陶器は破片数で37点、推定個体数で17個体が出土している。

a. 奈良三彩陶器

ア. 短頸壺（小壺）の蓋（第706図・第707図）

1975年、千曲市教育委員会等によるB地点の発掘調査で出土した。1号溝跡から出土しており、今回の調査で確認したSD 01と同じ溝跡にあたる（第706図）。

特徴： 全体形の1/3程度が残る。内径4.0cmを推定。つまみ部分は欠失し、形状は不明である。かえし部は直に立つ形状。全体の緑は光沢のある明るい黄緑色であり、内面側にもうすら釉薬がかかる。厚みのあるところで0.3cmの厚さを測る。表面の右下（実測図）には、径1.0cmほどの斑点状の淡い黄色の発色があるが、緑の部分は剥落して不明。また左側には、1.5cm×1.0cmほどの、やはり斑点状の白色の発色がある。この部分には表面に酸化鉄がこびりついており、状態はよくない。

イ. 短頸壺（小壺）の体部（第707図）

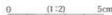
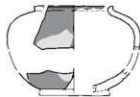
今回の調査で、SD 01（X-3区中層から下層）とSD03南北流路（E-7区溝底）から、同一個体と考えられる体部破片が出土した（P497第595図31・P587第665図19）。

特徴： SD 01出土例は、口縁部の1/4程度の破片で、器厚は厚いところで0.3cmある。口径4.0cmを推定。肩部はゆるく張り出し、口縁は直立するが、やや如意形に外反。光沢のある明るい深緑で、口縁内面にも釉薬がかかる。体部下半に、1.5cmほどの白色の発色がある。SD 03出土例は、底部1/4程度の破片である。底径は推定で3.8cmある。光沢のある明るい深緑で、右上（実測図）と左下に白色の発色がある。焼成と色調が、SD 01例と若干異質な感じを受け、接合部分もないが、ほぼ同位置の上部と下部であろうか。同一個体と考えた場合の推定復元実測図を示すが、口径4.0cm、器高4.8cm、底径3.8cm程度か。緑彩と白彩の二彩陶器である。

ウ. 関連資料

二彩陶器の可能性のある緑釉陶器に、SD 03の2層を中心に出土した大型の短頸壺もしくは瓶類と考えられる底部破片資料がある。取り上げNo117とD-20区出土の4片が接合し、E-16区とD-14区に各1片、同一個体と考えられる資料がある（P570第653図159）。

特徴： 底径は推定で19cmを測り、底部には高台が付く。大形の器形で、大部分が欠失し、全体形が解らない。基調の緑はあわい黄緑色で、径3.0cmほどの黄色の発色が、斑点状に3箇所ほど観察できる。緑彩単色の「色むら」と判断しておいたが、いかなものか。今後に検討が必要な資料と考える。



第706図 1号溝出土の短頸壺蓋（B地点）

第707図 SD 01・SD 03出土の短頸壺（A地点）

b. 緑釉陶器

破片数一覧は、第205表に示すが、それらを個体識別すると、すべて17個体が推定できる。この内訳は、短頸壺もしくは瓶類(上記のウ)が1個体、手付き瓶が1個体、椀が8個体、皿が3個体、椀もしくは皿か不明の4個体分の破片がある。これらの産地は不明であるが、概ね猿投産と観察できるか。釉薬の発色具合・色調の観察から、識別できる種類に4種類がある。やや深い黄緑色が8個体、黄緑色が7個体、あわい黄緑色が2個体である。

手付き瓶 (P617 第683図1)

第12節2項の1、地鎮的遺構にて詳述してある。

椀

大型の椀1点 (P526 第622図70)。底部の破片で、D-14区溝底、D-15区砂利層、D-13区検出面の接合個体である。表面の釉薬は剥落してしまっているが、黄緑色と想像できる。高台径9.0cmある。

中型の椀4点。ひとつは、同一個体と考えられる底部(D-19区検出面)と体部(X-11区検出面)がある。(第299図7)。高台は高く、まっすぐに立つ。光沢のあるあわい黄緑色である。2つ目は、SD03のD-12区2層出土の口縁部破片で、口唇緩やかに外反する形態。硬質緻密で、非常に光沢ある深い黄緑色を呈する(P542 第633図228)。3つ目は、SD03のD-11区2層出土の体部破片である。4つ目は、SD52埋土中の底部破片。黄緑色と推定できる(P207 第246図9)。

中型の稜椀2点。ひとつは、SD03の溝底を中心に出土した7点の接合個体(D-11区2層・D-13区2層下・D-14区と15区の溝底4片・E-16区2c層下)と1点(D-12区2層)の同一個体である(P526 第622図69)。口径15.0cm、器高4.8cm、高台径7.5cm、高台高0.8cmを測る。やや外に開く形態。端部は内削ぎ状で、手でつかみ難い。非常に光沢ある深い黄緑色で、所々に発色の薄い部分が斑点状に観られる。2つ目は、SB07の床面と埋土出土の接合例で体部破片。深い黄緑色で、発色の薄い斑点部分がある(P302 第444図21・22)。

小型の椀1点。同一個体と考えられる底部(SB02のPit7)と体部(SB02の1層出土)がある(P279 第425図53)。高台端部は内傾し、高さ0.7cmを測る。全体がうすく、あわい黄緑色。

皿

皿の底部がD-24区から1点出土している。高台は低く、手で握みにくい。椀の可能性もあるか。全体がうすく、あわい黄緑色。皿の口縁部はSD03のD-12区から出土している(P534 第627図162)。胎土は非常に硬質緻密で、非常に光沢のある、やや深い黄緑色を呈する。また体部の破片がSD03のE-17区から1点出土している。やや深い黄緑色。

この他、椀もしくは皿と考えられる口縁部微小破片1点(SB02埋土)と体部微小破片が2点(SD03のE-16区1層とD-20区1層)あり、非常に光沢のある、やや深い黄緑色を呈する。また体部微小破片の1点(SB09床下)は、黄緑色を呈する(P309 第451図3)。

器種	SB02	SB07	SB09	SD01	SD03	SD52	SK500	検出面	合計
緑釉陶器	2				5	1		2	10
椀					9				11
皿		2			2			1	3
椀か皿	1		1		2				4
壺					8				8
手付き瓶							1		1
二彩陶器 短頸壺(小壺)の体部				1	1				2
三彩陶器 短頸壺(小壺)の蓋、B地点				1					1
合計	3	2	1	2	27	1	1	3	40

第205表 社宮司遺跡出土の緑釉陶器ほか一覽

4-4. 六角木幢

a. 六角木幢の調査（第708図～第747図）

出土地区： SD 03 南北流路（IX E-12区）と東西流路との合流地点

出土層位： SD 03 の2層（2a層）

出土状態： 北東側の溝岸から南西側の溝岸にかけて、長さ6.0m程の範囲にわたり、一括埋置された状態で出土した。

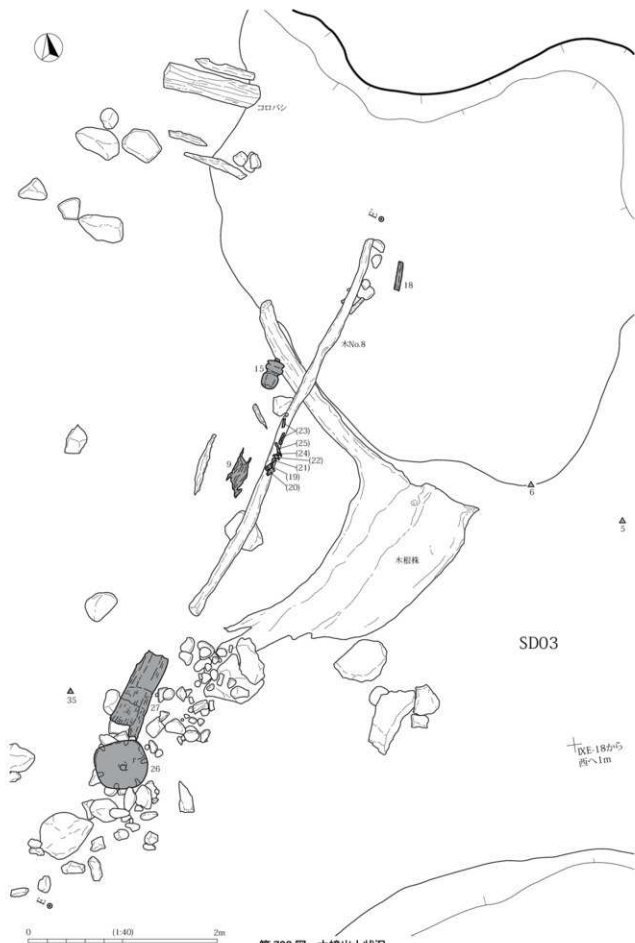
検出の経過： 4m40cm程ある角材 No8 を最初に検出した。図示してないが、拳大からハンドボール大の礫が、敷き詰められた様な状態で現われ、その上面に埋もれて出土した（写真）。礫は北東岸から南西岸へ、E-17区を経て、E-16区へ伸びる状態であった。丁度、SD 03 を堰き止める様に看取された。次いで角材 No8 から南へ1.0mのところ、木幢輪身部分を検出したが、発見当初、木幢とは認識できず、建築部材と判断していた。ことに輪身は、上面部分が激しく損傷しており、所見では一括廃棄後の2次的な流水による損傷と考えられた。続いて発見した笠、さらに宝珠から、何らかの木造物であることが推測できた。No8 を取上げたところ、下からまともって、風鐸2個（No19. 20）、風招3個（No21. 22. 24）、蕨手4個（No23a～c. 25）が出土した（写真）。この時点で、木造物の全体像を予想することが可能となり、部材と考えた No27 を輪身と理解できた。もともと、取り上げ時点では、それぞれの部品等の名称は解っていなかった。周辺部分の掘り下げを進めた結果、角材から東へ2m60cmと4m弱で風鐸1個（No6）と風招1個（No5）を発見した。笠や輪身等の下位には若干の礫が確認できたが、2b層以下は、あまり出土していない（第710図）。輪身から角材にかけての部分には、下位に堆積土20cmほどを挟んで、大きな木の根株が横たわり、南西には大きな角礫等が出土した（第708図）。これらは2c層内の堆積と考えられ、木幢を含む2a層とは区別できる。

伴出及び関連遺物：

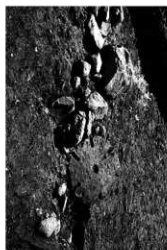
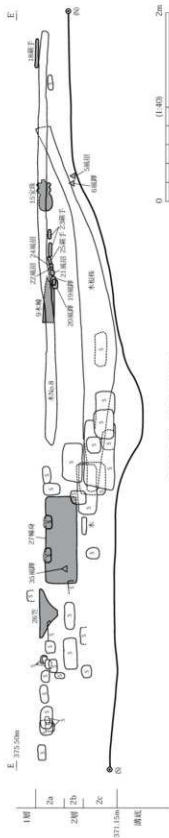
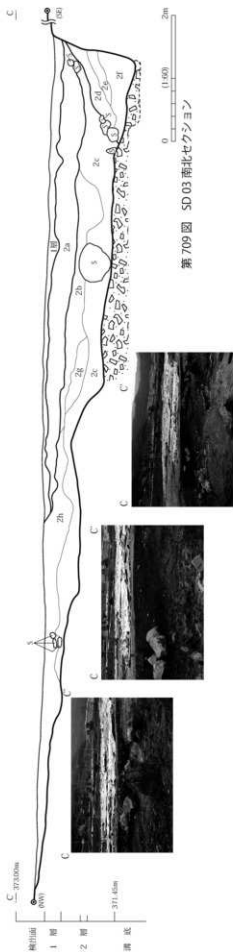
六角木幢出土位置から、北へ3.0m、南北流路の東岸に位置して、木製農具「コロバシ」が出土した。出土層位は2層上面で、木幢とはほぼ同一層位にあたる。輪身と同じ様に、上面は著しく損傷しており、流水の結果によるものと判断できる。また No8 の西隣りからは、No9の角材（第708図、断面形態が多角形ないしは六角形）が割れた状態で出土した。面と面の内角が輪身と同じで、一括資料中の遺物でもあることから、関連遺物と考え、第742図に示した。表面に加工痕があり黒漆が塗られている。

b. 六角木幢及びその関連遺物

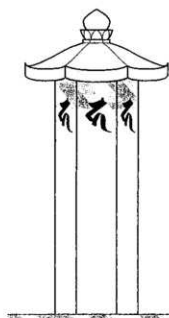
今回出土した木製塔は、国内初出の仏塔であり、遺物固有の名称はなかった。整理検討委員会（第1章 P32）での経過から、現存する石幢（せきどう、第711図・第712図）をヒントに、こうした仏塔を木幢（もくどう）と総称することにした。特に今回の出土例は、本体を六角柱に仕上げる特徴があり、これを遺物名称に盛り込んで六角木幢（ろっかくもくどう）と呼称した。六角木幢の構造は、石幢の構造をたよりに、上位より宝珠（ほうじゅ）、請花（うけばな）、笠（かさ）、輪身（どうしん）からなり、六面取りの笠には蕨手（わらびて）、風鐸（ふうたく）、風招（ふうしょう）の垂れ飾りが、各六個付く。本例は、宝珠と請花の造りが一体で1点、笠が1点、輪身（1/2 残存）1点、蕨手5個体分、風鐸5個体分、風招5個体分がある。輪身の下に台座が存在したか、否かは、その出土がないため解らないが、本例の一括性と、遺跡内から出土がない点、輪身最下部の腐食が上部に比して著しい点などから、台座は存在しなかった可能性がある指摘できる。以下、各部分・部品につき、概要を記述する。



第708図 木棺出土状況

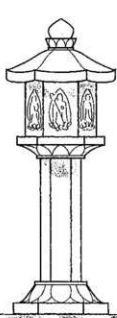


単制



宝珠花
笠
幢身

宝珠花



宝珠花
笠
幢身
中台
竿
基礎

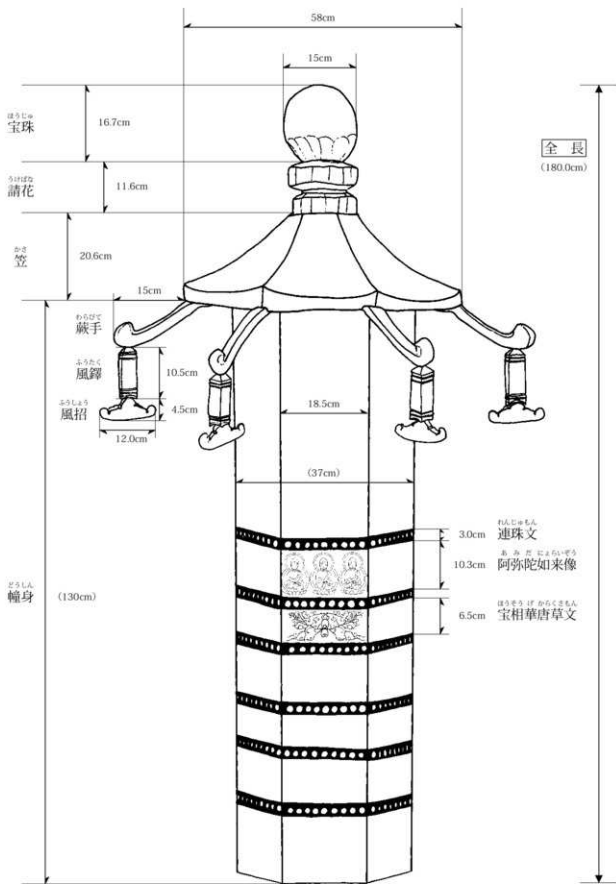
重制

第711図 石幢の部分名称 (文献1より転載)

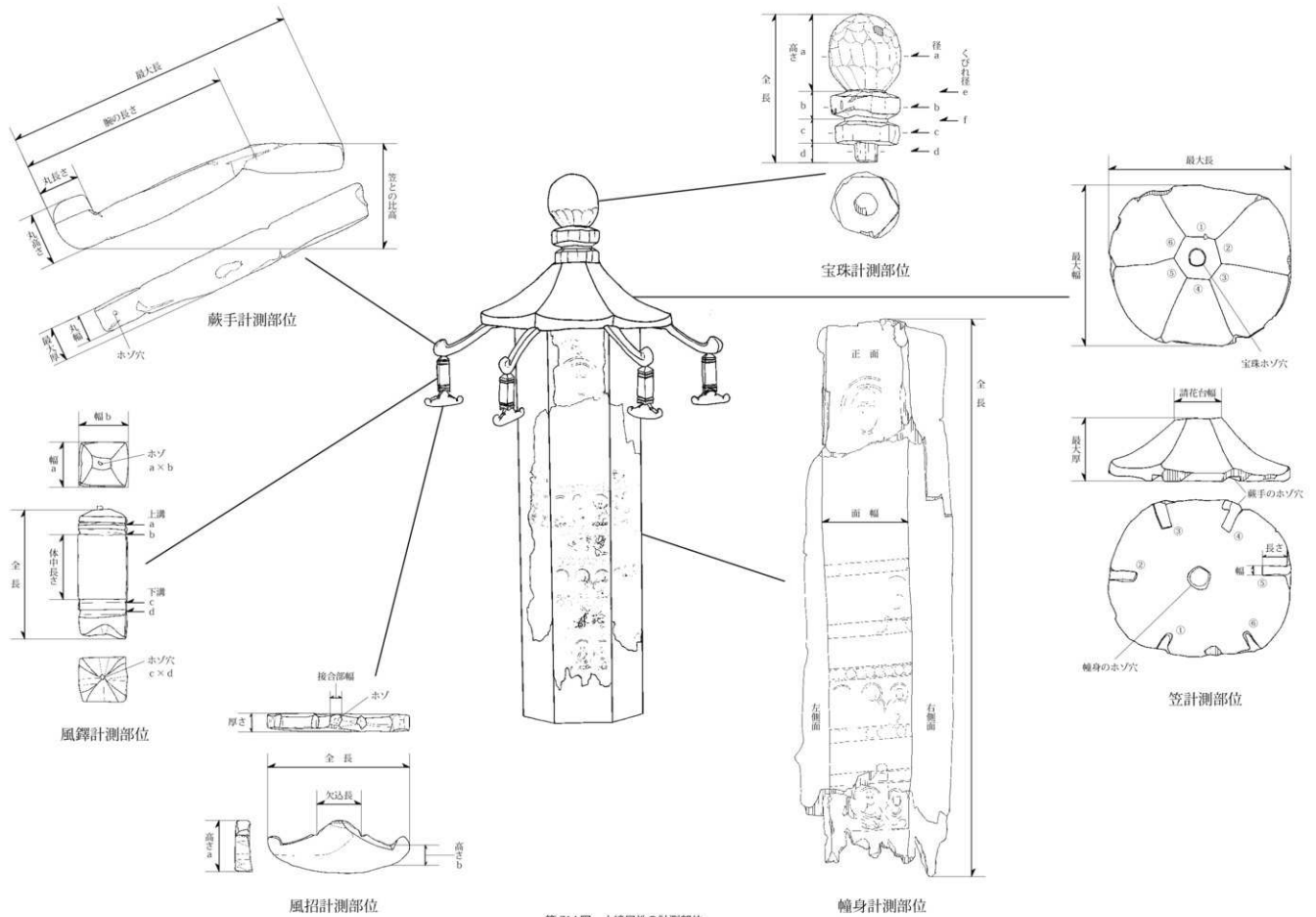


第712図 長野市松代町の石幢

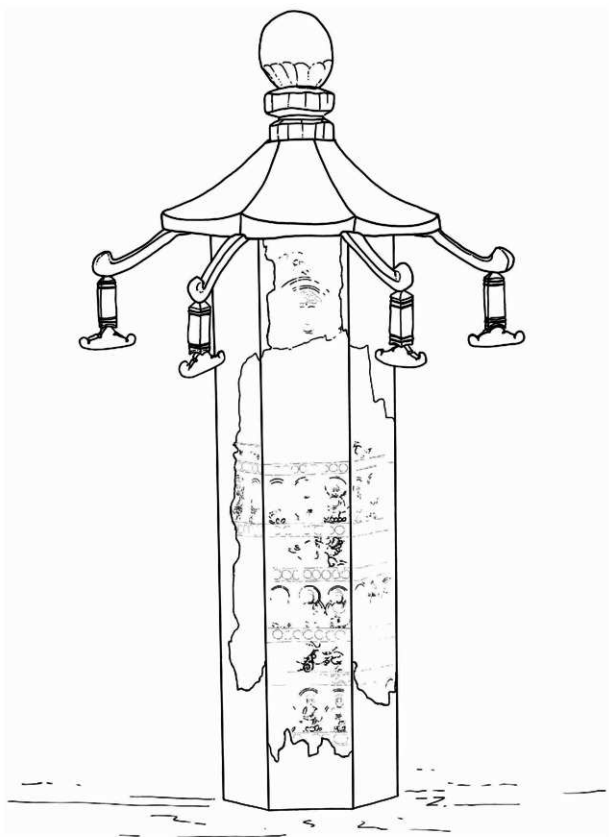
第3章 発掘調査の概要



第713図 木幢の部分名称と略寸法 (S 与 1/8)



第 714 図 木幡属性の計測部位



第715回 残存する仏画 (Sと1/8)

宝珠と請花(第716図)

取り上げNo15。クリの丸木芯持ち材一木で製作される。取り上げ後の全体の色調は、黒味の強い茶褐色。宝珠と請花は、ケズリ出しによる一連の工作で、請花は、相輪状に表現されている。工具による加工痕を明瞭に留め、全体的に粗雑な感じ、丸みが少ない印象を受ける。笠との接合部分、ほぞの作りはやや丁寧で、円柱状に仕上げられる。全長 32.1cm、最大径 15.0cm を測る。宝珠の長さ 16.7cm × 幅 15.0cm、請花の長さ 11.6cm × 1 輪目の径 14.1cm、2 輪目の径 13.3cm を測る。表面部分の炭素年代測定の結果、宝珠部で 1070 年 ~ 1160 年 AD(calAD1040 ~ 1100・60%) の 11 世紀末、請花部分で 1160 年 AD(calAD1040 ~ 1100・60%) の 12 世紀中頃の値を得た。

名称	出土地区	層位	図版番号	取上番号	全長	宝珠			請花			くびれ部		ほぞ		木取り	樹種	C14 炭素年代測定
						高さa	径a	高さb	径b	高さc	径c	径e	径f	高さd	径d			
宝珠	SD 03 E12	2 層	第 716 図	15	32.1	16.7	15.4×15.0	6.1	15.0×14.1	5.5	13.8×13.3	8.2	9.1	3.8	5.0	丸木芯持ち	クリ	宝珠 910 ± 30BP 請花 895 ± 30BP

第 206 表 宝珠属性

単位 (cm)

笠(第717図・第718図)

取り上げNo26。ケンボナシ属の丸木芯持ち材。一木の太い枝分れ部分を利用している。発見時の全体の色調は、やや黒味のある茶色。工具による加工痕はほとんど目立たず、丁寧に調整される。笠表面は六面に面取りされ、笠頂部から裾部にかけての勾配は 36 度程度で、緩やかに反る。笠頂部は請花接合部分を平坦に直径 14.0cm にカットし、その中央に直径 5.4cm のほぞ穴を穿つ。請花 c の幅 13.3cm、ほぞ幅 5.0cm が乗るに十分だが、やや間隙が多い。平面形は部分的に損傷があり、ややつぶれた楕円形を呈する。横幅が最大で 58.8cm、縦幅がやや損傷し 51.6cm である。厚さは 20.6cm ある。裏面は蕨手装着部が蟻型追い込み風に作出され、長さ約 9.0cm、幅約 1.5cm、深さ約 1.5cm の縦長のほぞ穴を穿つ。表面部の炭素年代測定の結果では、1020 年 AD (calAD990 ~ 1035・100%) と、1020 年 AD (calAD995 ~ 1040・87.7%) の 11 世紀前半の年代値を得た。

名称	層位	図版番号	取上番号	最大長	最大幅	最大厚	宝珠の穴	請花の穴	請花台取付辺の長さ						蕨手開口(幅×長さ)						深さ	樹種	C 14 年代測定	
									①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫				⑬
笠	2 層	第 717 図 第 718 図	26	58.8	51.6	20.6	径 5.4	幅 14.0	9.8	7.6	6.6	7.4	7.4	7.8	2.2×5.8	3.0×8.8	3.4×8.6	3.0×9.2	3.0×9.2	2.0×7.0	3.8	4.0	ケンボナシ属	A 1010 ± 30BP B 1000 ± 30BP

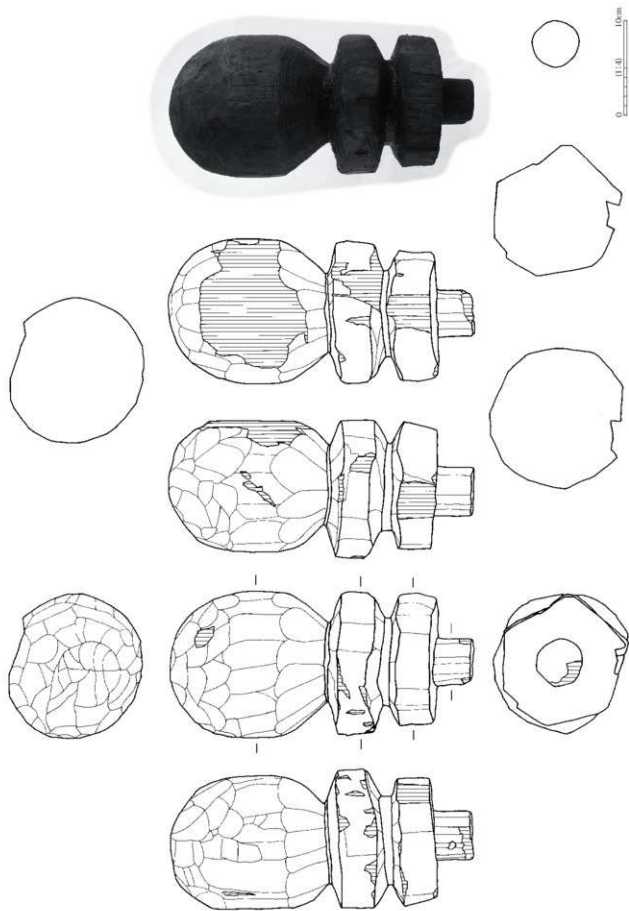
第 207 表 笠属性

単位 (cm)

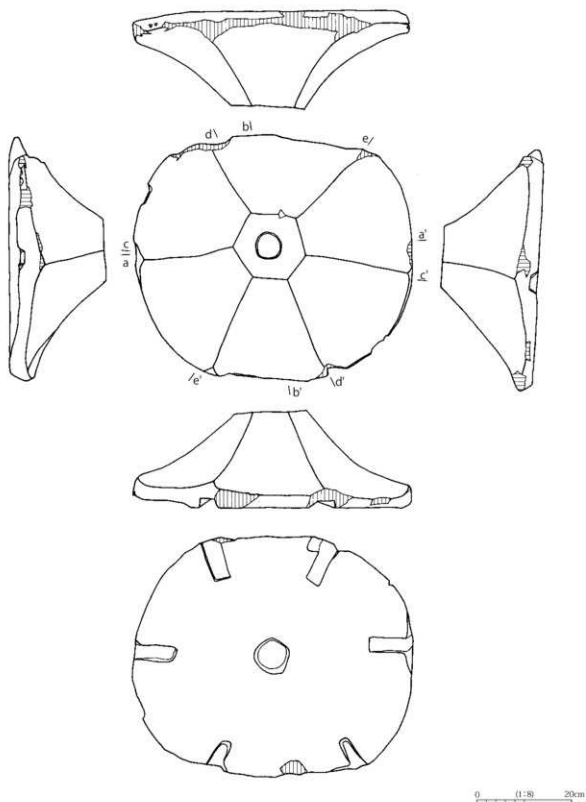
蕨手(第719図~第723図)

5 個体分の出土がある。1 個体は未発見。取り上げ No18 以外は、角材 No8 の下位から一括出土した。個体番号 A は E-12 区 2 層出土の No18 で、全体形の解る唯一の完存品である。ヌルデの斜め材。全長約 24.0cm。笠のほぞ穴接合部は長さが 8.5cm あるので、この蕨手を装着した場合、笠の外に長さ 15.6cm ほど出る計算となる。笠からは、斜め下方向に 24 度程度屈折して垂れ下がる形状となる。蕨手先端の頭部は、長さ 3.7cm、高さの推定 2.9cm、幅(厚さ) 2.0cm を測る如意形・猫足形に加工される。この頭部下端には、風鐸を接合する目的の径 0.3cm の穴が穿っており、そこに木製の軸が残っている。蕨手全体の加工は丁寧に面取りされているが、頭部形状等、細かな部分の加工は粗雑である。個体 E に比較して、後出的表現と判断すべきであろうか。炭素年代測定の結果、1040 年 ~ 1155 年 AD (calAD1080 ~ 1125・46%) の 11 世紀半ば以降の年代値を得た。

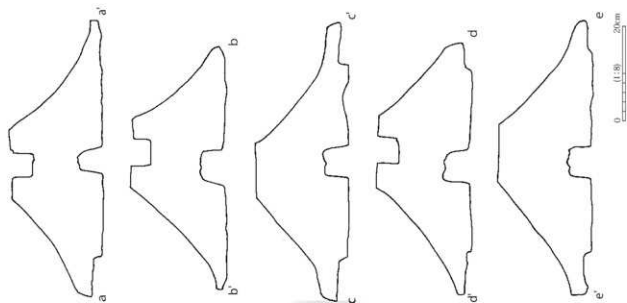
個体 B は No23 の 3 と E-7 区 1 層出土例で、頭部と体部の一部が欠損する例である。2 点とも、木目等の材質感から、同一個体の可能性が考えられるので、個体 B として提示した。ともに板目材か。ケズリ



第716図 宝珠



第717図 笠



第718図 笠

第3章 発掘調査の概要

は比較的丁寧で厚みがある。頭部は、長さ3.8cm、推定の高さ4.2cm、幅2.7cmを測る。

個体CはNo23-1aと1b、No23-2bの一括出土例。接合面は確認できないが、一括出土し、材質感等が同一であることから判断して、図化提示したような1個体のもと考えられる。板目材。全長は約24.0cmと推定できる。下端に風鐸を接合する径0.3cmの穴があり、竹材のような木製軸が残る。No23の2bは笠接合部分に相当するか。

個体DはNo23の2aと2cの一括出土例。2aは先端の如意形の頭部で、丁寧なケズリ加工が認められ、下部には木製軸が残る。2cは左右側面とも丁寧なケズリ調整で、笠との接合部分と推定できる。一括出土した2bは、全体の材質感等から個体Cと同一と考えてよいであろう。

個体EはE-12区2層No25で、屈折部分から先端（腕の長さに対応）が、ほぼ完全な状態で出土した。屈折以下の腕の長さ16.8cm、屈折は35度程度である。先端の頭部は、長さ4.3cm、幅5.8cm、厚さ1.8cmを測る。全体は粗い加工で、如意形の頭部下は、細くケズリ出す。斜め材か。如意型の先端下部には木製軸が残る。

名称	出土地区	層位	図版番号	取上番号	全長 (現存長)	厚さ	笠から突出した部分				先端部			木取り	樹種	C14年代測定
							腕の長さ	笠端と比高	丸長	丸高	丸幅(厚)	ほぞ穴				
熊手A	SD 03 E 12	2層	第719図	18	23.6	2.9	—	7.8	3.7	(2.9)	2.0	0.3	斜め	ヌルズ	935 ± 30BP	
熊手B			第720図		(15.4)	—	—	—	3.8	4.2	2.7	0.3	板目			
B-1	SD 03 E 7	1層			—	—	—	—	3.8	4.2	2.7	0.3	板目			
B-2	SD 03 E 12	2層		23-3	—	(1.5)	(11.7)	—	—	—	—	—	板目?			
熊手C			第721図		(24.0)	2.0	(17.0)	(8.0)	3.6	(3.7)	2.0	0.3	板目?			
C-1	SD 03 E 12	2層		23-1a	(12.3)	2.0	—	—	3.6	(3.7)	2.0	0.3	板目?			
C-2	SD 03 E 12	2層		23-1b	(4.8)	2.0	—	—	—	—	—	—	板目			
C-3	SD 03 E 12	2層		23-2b	(7.5)	2.0	—	—	—	—	—	—	板目?			
熊手D			第722図		—	—	—	—	—	—	1.3	0.3	板目?			
D-1	SD 03 E 12	2層		23-2a	—	—	—	—	—	—	1.3	0.3	板目?			
D-2	SD 03 E 12	2層		23-2c	(9.3)	(1.8)	—	—	—	—	—	—	板目?			
熊手E	SD 03 E 12	2層	第723図	25	(21.0)	3.0	16.8	9.8	4.3	5.8	1.8	0.3	斜め?			

第208表 熊手属性

単位 (cm)



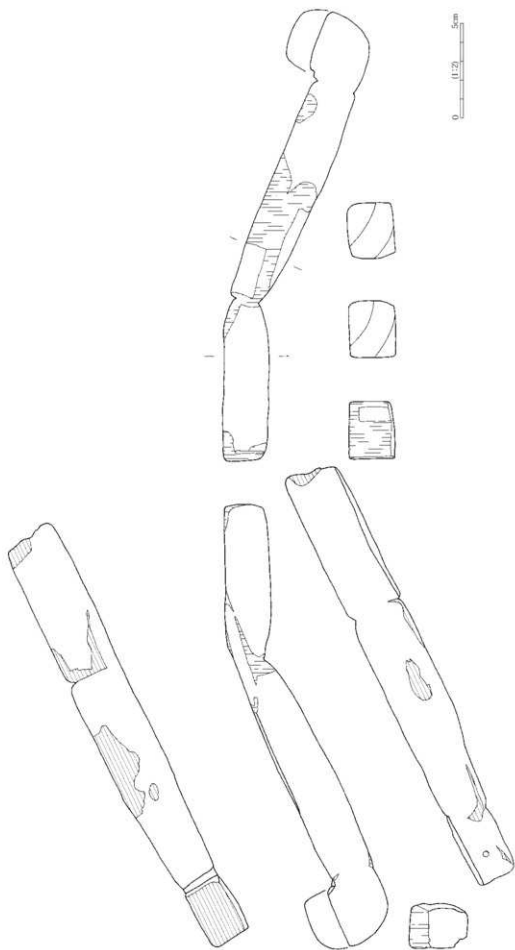
熊手出土状態



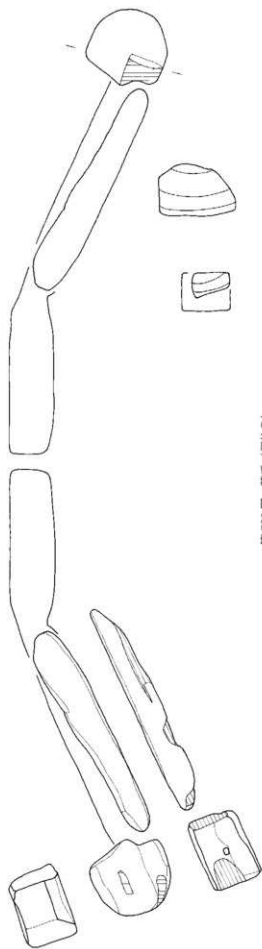
熊手

風鐸 (第724図～第728図)

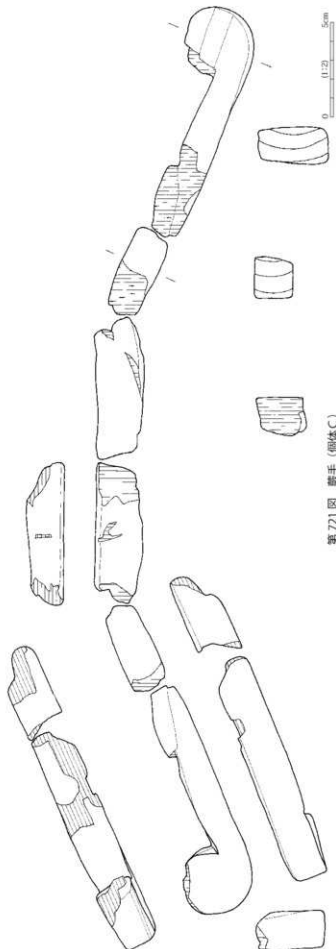
5個体分の出土があり、1個体は未発見。また取り上げNo203はD-13区1層出土例で、他の個体がE-12区出土であることと隔たりがある。直線距離にして32mほど西であり、SD03の上流部にあたる。SK740とは至近距離にあるが、遺物水洗中に確認したため、出土状態・場所等は残念ながら不明である。



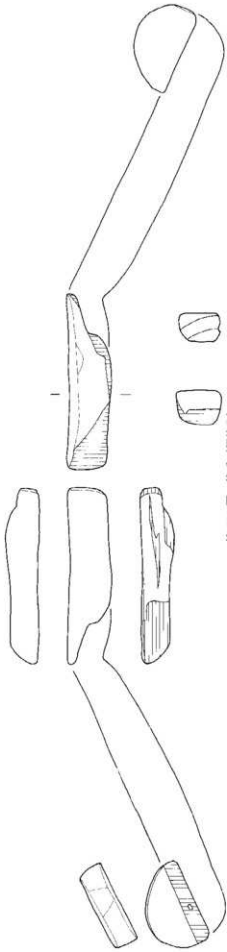
第719図 藤手（部体A）



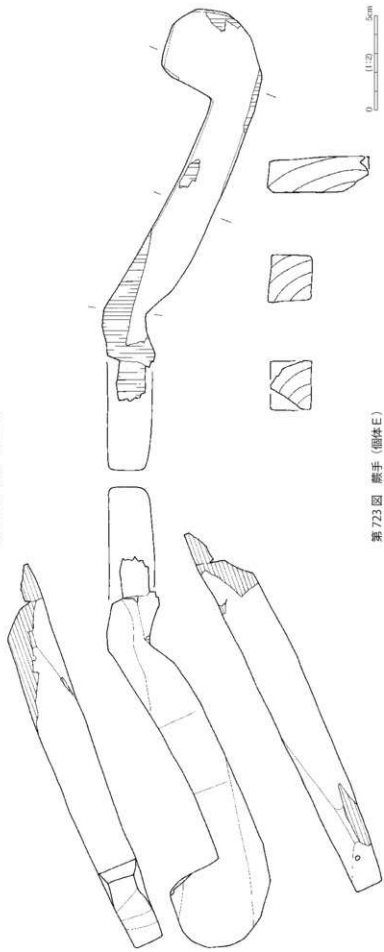
第720図 藤手 (個体B)



第721図 藤手 (個体C)



第722図 藤手 (部体D)



第723図 藤手 (部体E)

第3章 発掘調査の概要

個体Aは、取り上げNo20。四角柱で、10.8cm × 3.6cm × 3.9cmを測る。上位と下位に2条の沈線が走る。沈線は幅0.3cmと0.5cmが上下2対となり構成される。山形の頂部は葺手と、下部は風招と接続し、竹と考えられる木製軸が残存する。ヒノキの板目材か。

個体Bは、取り上げNo19。10.5cm × 3.5cm × 3.5cmを測る。個体A同様に上位と下位に2条の沈線が走り、同じ型式と考えられる。沈線は幅0.3cmと0.4cmが2対となる。やはり山形頂部と下部に木製の接合材が残存する。ヒノキの板目材か。

個体Cは、取り上げNo35。10.2cm × 3.5cm × 4.1cmを測る。2条の沈線は、幅0.3cmと0.2cmが対となり、個体AやBより細い線である。下位の沈線は1本のみ深くケズリ込まれ、対となるはずの別の1本は線書きのみでケズリ込みは施されていない。全体の作りもAやBに比して粗雑である。ヒノキの斜め材か。炭素年代測定の結果、1030年AD (calAD1090 ~ 1120・42%) の11世紀前半の値を得ている。

個体Dは、取り上げNo6。E-12区出土ではあるが、個体A等の一括群よりは、出土位置が2m 70cm東にある。風招B個体 (No5) と比較的近接して出土していることから、2者は組み合わせ関係にあるか。10.6cm × 3.5cm × 3.8cmを測るが、一面は欠失する。2条の沈線は、幅0.5cm及び0.6cmと幅太で、粗雑なケズリ込みである。頭頂部のケズリも山が低くて粗雑である。ヒノキの板目材か。炭素年代測定では、1000年ADまたは1015年AD (calAD985 ~ 1020・100%) の11世紀前半の値を得ている。

個体Eは、取り上げNo203。D-13区から単独で出土した。遺物洗浄中に確認されたもので、出土状態は不明である。頭部を欠失し、さらに縦位方向に1/3ほど欠損する。(9.4) cm × 3.5cm × 3.8cmを測る。上位の沈線は欠損により、部分的にしか確認できない。下位の沈線2条は、共に幅0.2cmで、幅は狭い。全体として粗雑な作りで、表面の劣化は激しい。モミ属の斜め材か。炭素年代測定では、980年AD (calAD955 ~ 1000・66%) の10世紀終末の値を得た。



調査風景



風鐸出土状態

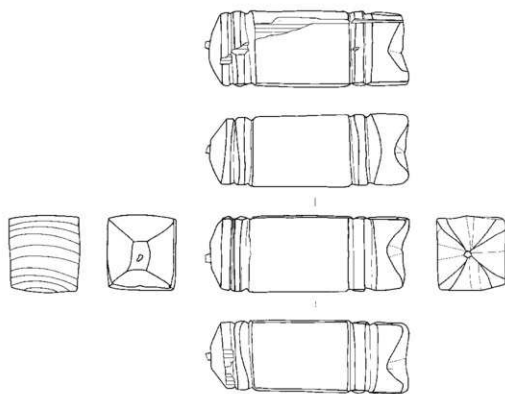


調査の様子

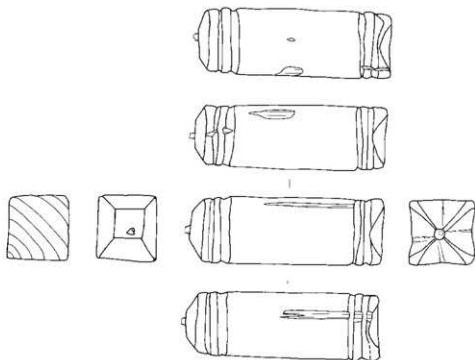
名称	出土地区	層位	図版番号	取上番号	全体長	幅 (a × b)	上接合部幅 (a × b)	体部の計測値				下接合部幅 (c × d)	木取り	樹種	C14年代測定		
								上溝 a	上溝 b	体中長	下溝 c					下溝 d	
風鐸A	SD 03 E 12	2層	第724図	20	10.8	3.6 × 3.9	0.3 × 0.4	0.3	0.5	5.2	0.3	0.5	1.0	1.0	板目 板目		
風鐸B	SD 03 E 12	2層	第725図	19	10.5	3.5 × 3.5	0.4 × 0.3	0.3	0.4	6.5	0.3	0.4	0.6	0.7	板目		
風鐸C	SD 03 E 12	2層	第726図	35	10.2	3.5 × 4.1	0.4 × 0.3	0.3	0.2	6.1	—	0.2	0.6 (0.5)	斜め	ヒノキ	965 ± 308P	
風鐸D	SD 03 E 12	2層中	第727図	6	10.6	3.5 × 3.8	0.7 × 0.6	0.5	0.6	6.0	0.6	0.5	0.7	0.7	板目 板目	ヒノキ	1040 ± 308P
風鐸E	SD 03 D 13	1層	第728図	203	(9.4)	3.5 × 3.8	0.4 × 0.4	—	—	6.4	0.2	0.2	—	0.4	斜め	モミ属	1085 ± 308P

単位 (cm)

第209表 風鐸属性

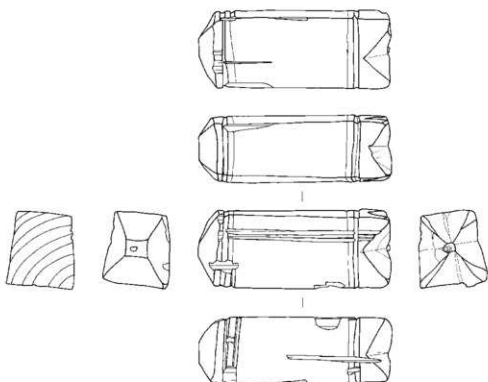


第724図 風鐸（個体A）

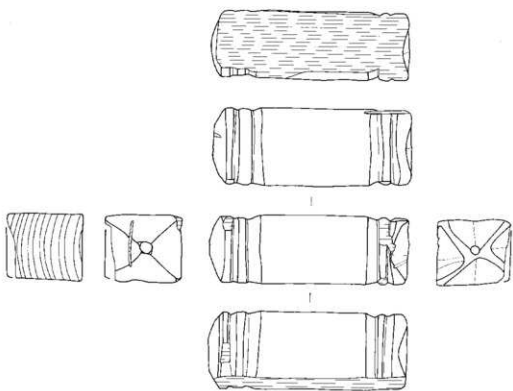


第725図 風鐸（個体B）

0 (1:2) 5cm

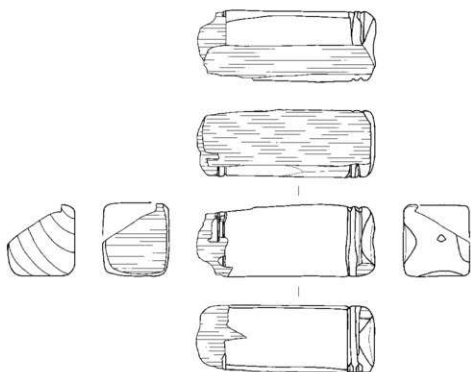


第726図 風鐸（個体C）



第727図 風鐸（個体D）

0 (1:2) 5cm



0 (1/2) 5cm

第728図 風鐸（個体E）



風 鐸

風招 (第729図～第733図)

5個体分の出土があり、1個体は未発見である。取り上げNo5の個体BとNoなしの個体CはE-13区2層からの出土例である。他の個体は、E-12区で木器No8の角材下、風鐸と共に出土した。

個体Aは、E-12区2層No22。横幅10.1cm、高さ4.5cm、厚さ1.9cmを測る。器面の調整は丁寧で、調整痕は僅かに観察できる。肩部に欠き込みの観られない型式である。山形の上部、接合部分の幅は0.8cmあり、木製の軸(径0.4cm)が残存する。板目材。サワラか。

個体Bは、E-13区2層No5で、横幅9.8cm、高さ4.5cm、厚さ1.9cmを測る。器面の調整は丁寧で、肩部に欠き込みは観られない。板目材で、個体Aと同型式である。上部に木製軸(径0.3cm)がある。サワラ材か。

個体CはE-13区出土。頭部を欠失し、体部の先端も一部欠損する。横幅(9.3)cm、高さ(3.4)cm、厚さ2.0cm。器面の風化は著しい。サワラの板目材で、個体Aと同型式であろうか。上部に木製軸が残る。炭素年代測定では、1035年ADまたは1145年AD(calAD1085～1120・43%)の11世紀半ばまたは12世紀半ばの値を得た。

個体Dは、E-12区2層No21で、横幅12.2cm、高さ4.1cm、厚さ1.4cmを測る。幅が大きく、器厚は薄い。肩部に欠き込みが左右対にある。ヒノキの板目材。個体Aの一群とは別型式である。上部接合部は幅0.9cmを測り、木製軸が残る。炭素年代測定は、1035年ADまたは1145年AD(calAD1085～1120・42%)の11世紀半ばまたは12世紀半ばの値である。

個体Eは、E-12区2層No24で、横幅11.5cm、高さ4.2cm、厚さ1.4cm。板目材で、肩部に欠き込みがあり、個体Dと同型式である。上部に木製軸が残る。

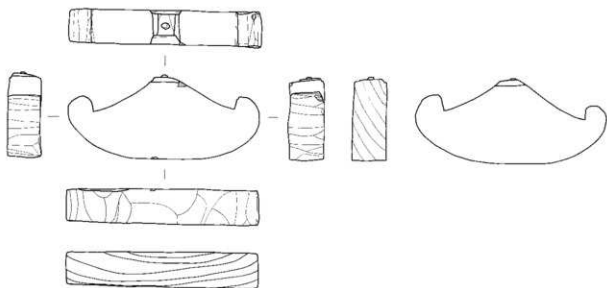


風 招

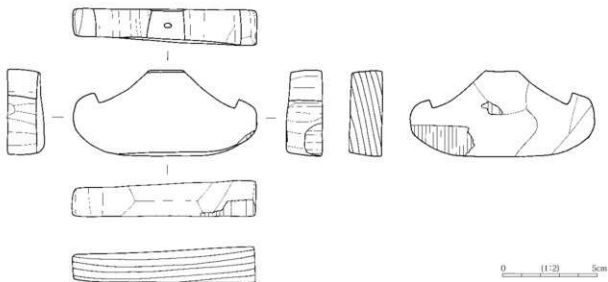
名称	出土地区	層位	図版番号	取上 番号	全長 (横幅)	厚さ	高さ b		接合部幅	穴込長	ほぞ穴	木取り	樹種	C14年代測定	
							左	右							
風招 A	SD 03 E 12	2層	第729図	22	10.1	1.9	4.5	2.0	1.5	0.8	—	0.4	板目		
風招 B	SD 03 E 13	2層中	第730図	5	9.8	1.9	4.5	2.4	2.1	1.8	—	0.3	板目		
風招 C	SD 03 E 13	2層	第731図	—	(9.3)	2.0	(3.4)	—	—	1.2	—	0.3	板目	サワラ	955 ± 30BP
風招 D	SD 03 E 12	2層	第732図	21	12.2	1.4	4.1	1.7	1.7	0.9	3.3	0.4	板目	ヒノキ	950 ± 30BP
風招 E	SD 03 E 12	2層	第733図	24	11.5	1.4	4.2	1.4	1.5	1.1	3.5	0.3	板目		

第210表 風招属性

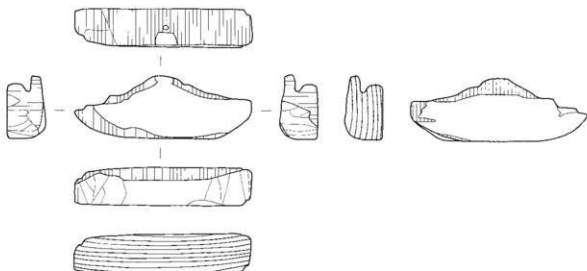
単位 (cm)



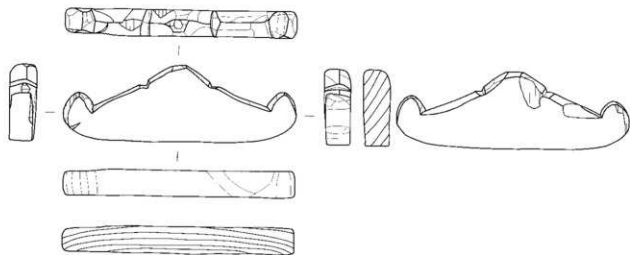
第729図 風招 (個体A)



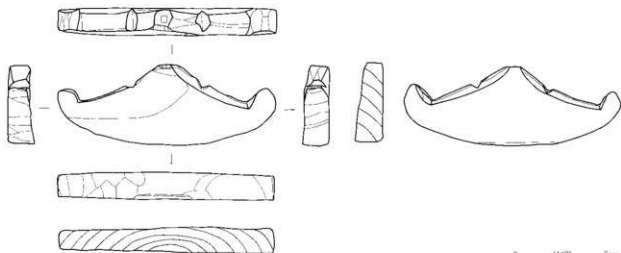
第730図 風招 (個体B)



第731図 風招（個体C）



第732図 風招（個体D）



第733図 風招（個体E）

0 (1:2) 5cm



第734図 棺身

幢身(第734図～第741図)

1体分の出土がある。エノキ属の一本で、六角柱に仕上げられている。下部を大きく欠失するほか、縦位方向に1/2程度、欠損する。出土時は取り上げNo27の1体分であったが、出土後に大きく3個体に破損してしまった。以後、それらを幢身の上部・本体・下部のように仮称し扱った。また幢身の残存部分については、出土時下面の状態がよく、仏画等を明瞭に確認できたことから、その面を仮定の正面として取り扱うこととした。残存部位の全長は115cm、最大幅34.1cm、最大厚17.2cmを測る。炭素年代値は1025年ADまたは1035年AD(calAD1015～1040・48%またはcalAD1090～1120・42%)を得た。仮定・正面(第735図～第738図)

幢身正面には、仏画が描かれており、その構図は、大別して上半と下半に分けて考えることができる。上半は長さ50cmに、下半は現存長で60cm内に割りつけられる。上半には、大きな仏一体が描かれているが、残念ながら頭部以外は、消失して全体像は不明瞭である。また仏の頭部右上方には、判然としなが、1.4cm程度の木の葉形を呈した模様を描かれている。類推するに、散華もしくは天蓋の一部である可能性を指摘できるか。また仏の頭部には、外径12cm、内径8.5cmの二重の頭光を確認できる。仏相・顔面は全体的に扁平で、やや面長の丸顔である。頭部には肉髻(につけい)と地髪(ぢはつ)が表現され、肉髻部は地髪より幅狭で小さく、やや尖る形状か。螺髪(らほつ)そして白毫(びやくごう)を看取できるが、肉髻珠は確認できない。螺髪一粒の大きさは直径0.2cmと非常に繊細である。白毫は径0.1cmで、丁度、この白毫部分に頭光描線のコンパス中心点がある。髮際(はっさい)はほぼ水平に近い表現か。顔面には眉と目の一部、口を明瞭に観察できる。眉と目の割付はほぼ水平で、眉は眉頭と眉尻(註4)がほぼ水平に描かれている。目は上臉線がやや水平に近い三日月型である。鼻の表現は簡略で小さく、小鼻の表現はないか。唇は小さく、上と下の区別はつきにくい。薄く、同じ程度で水平と視られる。顔面の下には首があり、三道(さんどう)部分が明瞭に確認できる。

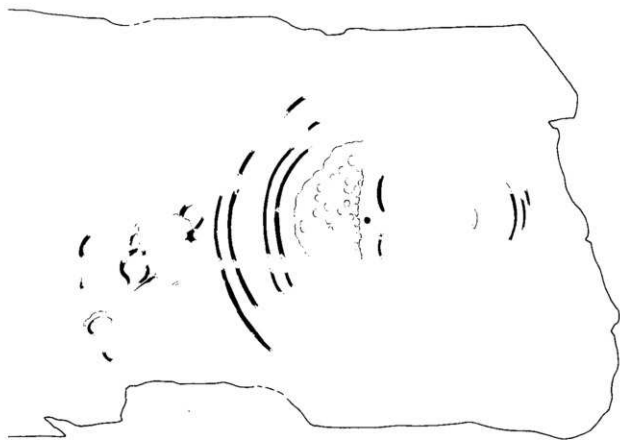
幢身の下半は、3体の阿弥陀如来坐像と考えられる仏がセットとして一帯、宝相華唐草文(ほうそうげからくさもん)と考えられる文様が一帯、それらが連珠文(れんじゅもん)と呼ばれるタガ状の帯模様によって区切られて、交互3段にわたって配置される。したがって、3体で1セットの仏が3段あるので、



阿弥陀如来坐像

9体の仏が描かれる結果となっている。実際には、9体の仏の尊像すべてが、阿弥陀如来像であるのか、不完全で観察できないが、右側面、左側面の尊像の観察から総合して、阿弥陀如来像と判定した(写真)。3体の阿弥陀如来の描かれた割付幅は約10cm、連珠文幅は約3.0cm、宝相華唐草文の割付幅は約6.5cmを測る。最下部は欠失して不明だが、3体の阿弥陀如来の下に連珠文が1帯あるところまでは確認できる。

正面の比較的観察が可能な尊像を見る限り、光背、肉髻、地髪、鼻と口、耳、三道、衲衣、弥陀定印、結跏趺坐などを観察できる。地髪は第737図右端のように菩薩の単髻のように見える仏もあるが、第739図に代表される、地髪と肉髻の明瞭な如来頭部と考えてよいであろう。地髪は肉髻より大きく、髮際はほぼ水平。肉髻珠及び白毫は観察できない。仏相はややふくらみのある丸顔。鼻は低く、口は小さい。耳は肉付きがよく、耳たぶは細く真っ直ぐに垂下して丸い。三道は明瞭で、等間隔にやや際立っている。髀部(たいぶ)には、大胸筋や横隔膜等の表現は見当たらない。



0 2.3 5cm

第735図 樟身正面上半の阿弥陀如来像

蓮華座は浅い茶碗形で、蓮肉が大きい特徴がある。

阿弥陀如来像1体の大きさは、頭光から蓮台までの高さ約9.0cm、身光幅約6.0cmを測り、座高は約7.0cmほどか。頭光の径は4.0cmと3.6cmの二重線、頭部は2.0cm×1.8cm、身長径は6.0cm、肩幅は2.8cm程度である。蓮台部の幅は身長と同じ6.0cmか。

宝相華唐草文は、モチーフ全体の様子が判然としなない。ことに中央部分の表現が消えて判読できないが、一見、蓮華のようなモチーフにも見て取れる。樹枝はツルのように柔軟に伸びる表現で、分岐した枝は互い違いに反転して渦巻くように表現されているか。

連珠文は、幅3.0cm弱の帯状で、直径1.8cmほどの円が数珠様に9個横位に連なっている。ただし描出された部分は、連珠部ではなく、円の外枠である。帯状の上下に、描画計画線（第737図ほか）が確認できることから、割付ラインを入れた後、円をコンパスで描き連ね、円形の外を塗りつぶして完成させたものと考えられる。円の直径は、阿弥陀如来頭部幅と同じ1.8cmの規格値である。

仮定・左側面（第739図）

仮定した正面の左に隣接する面は、ほぼ2/3程度が残存する。上半の割付部には、正面では確認することができなかった唐草のモチーフが、幅4.0cmで描かれる。線描部分はほとんど消失しており、構図全体を読み取ることはできないが、正面の宝相華唐草文とは違っているように見て取れる。連珠文を挟み、尊像部分を観察でき、この像が唯一、印相及び顔面の様子を仔細に観察できる例である。この像の特徴をひとつの根拠として、3体セットの仏が定印の阿弥陀如来であることを推定したのである。ただし頭光部分の外線と内線の間隔が正面の仏画より若干広く、かつ仏相が、正面に比して、福よかで、やさしく、品のある面持ちに感じられる。絵師が複数いる合作か、それとも、修復的な加筆、もしくは改革の結果なのであろうか。留意しておくべき観察点である。3体仏以下、直下の連珠文までは明瞭に確認できるが、それ以下は、線画が消失してしまっている。連珠文帯のみは確認できることから、正面下半の割付部とほぼ同様な構図があったものと判断したい。

仮定・右側面（第740図・第741図）

正面の右に隣接する面は、ほぼ完全に残存している。ただし、仏画の残存状態は極めて悪く、ほとんど細部に関しては観察できない。上半の割付部には、左の隣接面と同様な唐草のモチーフが、幅4.0cm程で描かれ、以下、連珠文、如来像、連珠文と確認できる。このことから、おそらく右隣接面の下半の構図も、正面下半と同様なものであったと推定できる。

仮定・右右側面（DVD内のみ）

仮定正面の右側の隣接面のさらに、右隣には1/5程度の面を確認できる。しかしながら、面が幅狭で、損傷も激しいことから、仏画等の情報は得られなかった。

※ 仏相の特徴から、平安時代末期（藤原期）の作と判断して矛盾はないと考えられる。

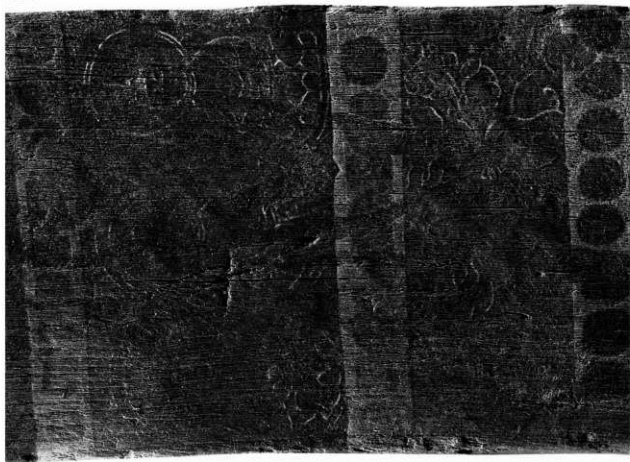
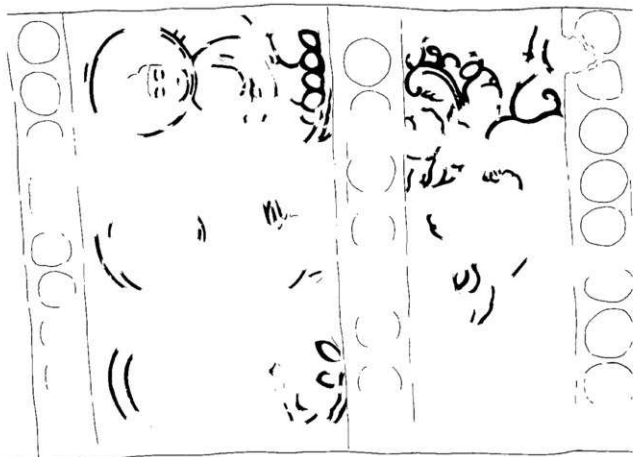
軀部（たいぶ）は、立体像に見られるように藤原の末期の様相である。胸部・みぞおち部・下腹部のふくらみがあまり目立たない（P190、西村1997）という特徴を平面で表現したのか。大胸筋や横隔膜等の表現は見当たらない。

三道は、格段の肉付きが少なくなり、太さでも下から太い・中・小と重なり、特に首に力を入れたような感じはない（P171、前掲）という。確かに力はいらないが、比較的明瞭に表現されて、弾力があり、ゴムのように跳ね返す感じがある。すなわち平安前期の様相か。

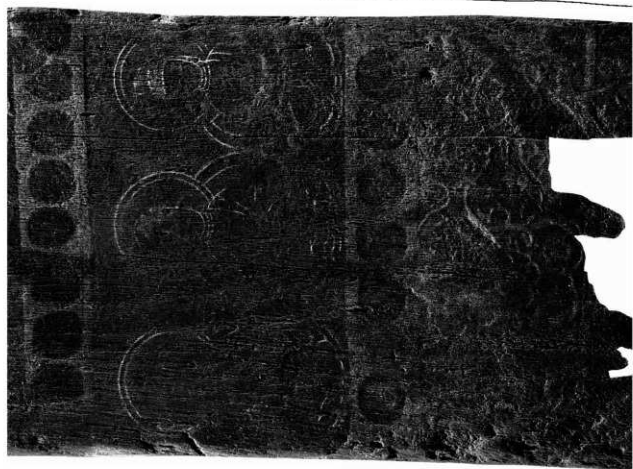
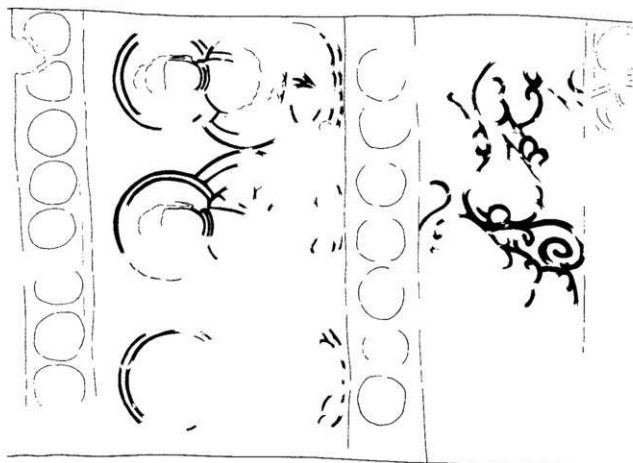
名称	出土地区	層位	取上 番号	最大長	最大幅	最大厚	面の幅	面の仏画割付幅（長さcm）				木取り	樹種	C14年代測定	
								上半の 尊像	3体の 阿弥陀	左右上半の 宝相華文	宝相華文				
機身	SD 03	2層	27	115	(34.1)	(17.2)	18.0	6.0	3.0	10.7	4	6.5	削出	エノキ属	A 985 ± 30BP B 960 ± 30BP

第211表 機身属性

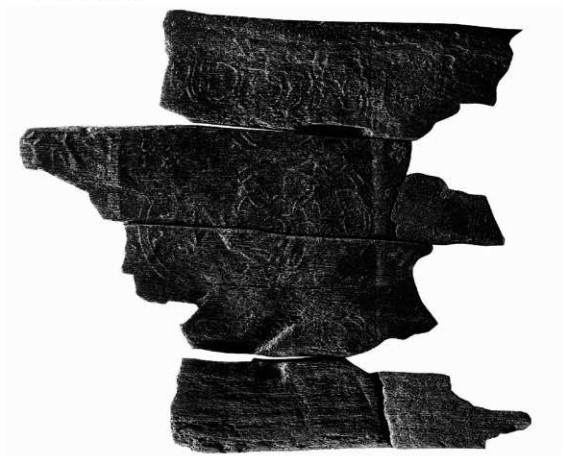
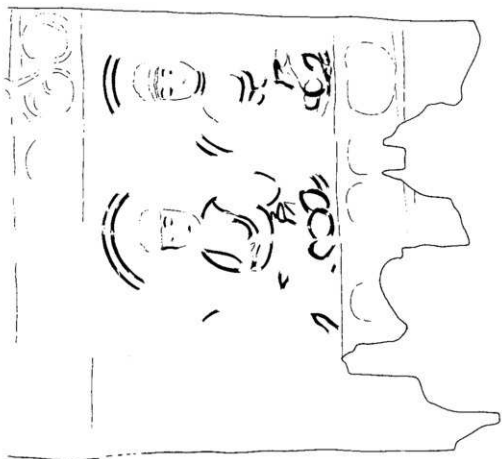
単位 (cm)



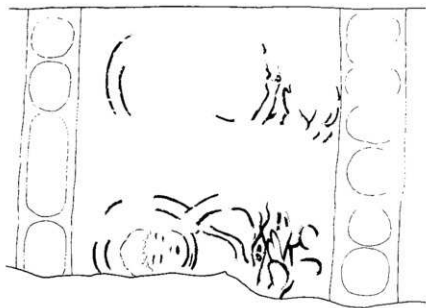
第736図 幃身正面の阿弥陀如来像と宝相華唐草文 1



第 737 回 幢身正面の阿弥陀如来像と宝相唐草文 2



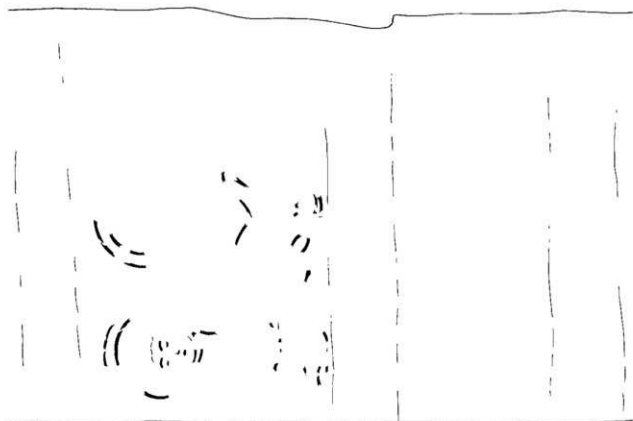
第738回 椽身正面の阿弥陀如来像と宝相華唐草文 3



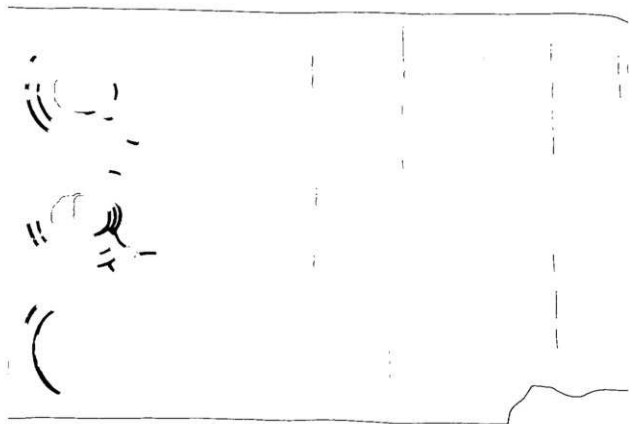
第739図 椀身左隣接面の阿弥陀如来像

名称	割付帯		仏一体の大きさ		座高	頭部の大きさ	肩幅	頭光		身光		蓮台		備考 (cm)	
	構図高	構図幅	仏像数	全長				全幅	外径	内径	外径	内径	高さ		幅
阿弥陀如来像	10.7	18.0	3	9.0	6.0	8.0	2.0 × 1.8	2.8	4.0	3.6	6.0	5.4	1.0	6.0	数値は総数

第212表 阿弥陀如来像属性



第740図 榑身右隣接面の阿弥陀如来像 1



第741図 榎身右隣接面の阿弥陀如来像 2

幢身と仏画

以上、幢身は合計4面の残存を確認できたが、仏画の観察ができた面は3面のみである。残りのよい假定正面の左右隣接面の状況から、少なくとも下半の割付部に関しては、共通した仏画が、3面は描かれていた可能性は高い。しかしながら、正面上半に割り付けられた一体の大きな仏に関しては、他の面の損傷が激しく、正面以外にも描かれていたか否かを観察することはできなかった。また、最下部は欠失してしまっており、3体の阿弥陀如来像の下が、連珠文で終わるのか、さらには宝相華唐草文をもう一帯配置して終了させるのかは定かではない。画像強調の結果は、連珠文があるのか、宝相華文があるのか、はっきりと判断がつかなかったのが、実際である。観察所見によれば、連珠文のような細帯で締め括られると判断すべきか。連珠文と宝相華文の曖昧さは、さらにその上段の構図（第738図）にも現われており、右側の連珠文の一部には、あたかも唐草文が入り込んで重複しているように、画像強調できた。これも実物観察の所見では認められないので、幢身表面に現われた損傷等のノイズをデータとして拾った可能性も考えられるか。本稿では、構図の連続性を重視して、規則的なモチーフであったと理解しておくが、デジタル画像観察の結果もひとつの事実であるから、これを真摯に受け止めて、留意点のひとつとしておきたい。また、幢身の残存長は115cmあり、連珠文の構図で終了と考えると、失われてしまった以下の長さは、さらに10cm以上プラス、すなわち幢身の推定長が126cm以上にはなると考えられる。宝珠と笠の大きさを加算すれば、丁度、170cm前後になる見当である。課題は、木幢が台座の上に乗っていたか否かである。台座でなく、地中に突き立てられていたのであれば、幢身長は、さらに10cm（全長180cm見当）、20cm（全長190cm見当）と長くなるものと考えられる。

台座

本出土例で確認できたのは、以上、幢身までである。石幢の事例から考えると、台座の存在は十分予想できる。ただし、今回の発掘調査では、台座と考えられる資料は出土していない。観察所見では、幢身の上部に比して、下部が著しく腐食していることから、地面に直接突き立てられていた可能性は高いと指摘できる。



宝珠と笠、装飾品



幢身

関連遺物（第742図・第743図）

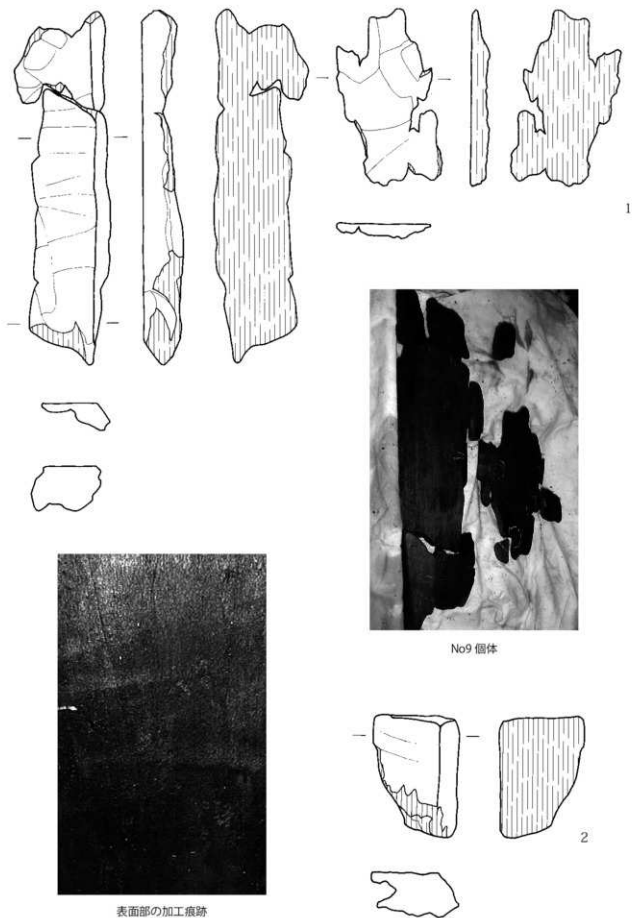
六角木幢と伴出した遺物及び関連が予想される遺物について、以下に記述する。六角木幢の風鐸等装飾品が一括出土したのは、E-12区2層からである。検出時、取り上げNo8の長さ4.4mの角材が出土し、その直下にて発見した。この意味では、No8の角材も木幢に関連する遺物といえるか。No8に関しては、2項の4、SD03（P583）に掲載した。別に、No8の北隣からNo9の角材（第742図1）が、さらに付近から木幢断片とみられる角材片が1点（第742図2）出土した。これらに関しては、出土状況と材の性状の近似から、木幢関連資料として扱っている。1は出土時一一体であったが、出土後に破損し複数に分かれてしまった。本来、多角形状の個体であったと推定でき、その一部表面が脱落して出土したものと考えられる。その製品名を特定することはできない。1の図柄は、最大長（28）cm、幅（7.6）cm、厚さ（3.0）cmを測る。関連遺物とした根拠は、以下の3点による。1.木幢部品と隣接し一括性を開ける状態で出土したこと、2.表面部加工の様子が幢身上部表面と同じであること、3.表面部に2面が残るが、面と面の作る内角が124度であり、幢身の内角（規格的には120度だが、実際は変形により120度～125度ある）とほぼ一致する。こうした内角をもつ木製品は、遺跡内には他に存在しない。留意点は、本資料が黒塗塗りであり、木幢にはない属性を持っていることである。関連資料とすれば、仏教的な製作産品を想定すべきか。

SD03のD-14区から、取り上げNo101のひれ状装飾付き木製品（第743図）が1点出土している。木幢出土位置から西へ約10mほどの位置か。一部欠損するがほぼ完形個体である。最大長41.1cm、最大幅3.8cm、最大厚1.4cmを測る。ひとつの側面中央部分に、装着・組み合わせ時のほぞ穴が2か所穿っており、竹と考えられる木製の軸が残存する。これは、蕨手と風鐸・風招の結合方法とまったく同一方法である。装着面の反対側は、凹凸をもたせ、波のように削り出されている。中央部分には、反対側から穿たれた装着・組み合わせ時のほぞ穴2か所が貫通しており、この部分には、さらに別の部品が装着されていたことを暗示する。上下の端部は、表裏面から鋭角に削り出され、面とはなっていない。また表裏面の片側には、装飾絵が描かれており、これを正面とする。正面には、高さ2.0cm、幅3.0cmの秋草？、ススキのような図柄が4箇所に描かれている。図柄の向きから推定すると、波形の側面が下位に、したがって、最大長を横幅とする製品と考えられるか。やはり遺跡内では唯一の装飾絵柄付きの製品に該当し、木幢との関連を推定できる資料か。

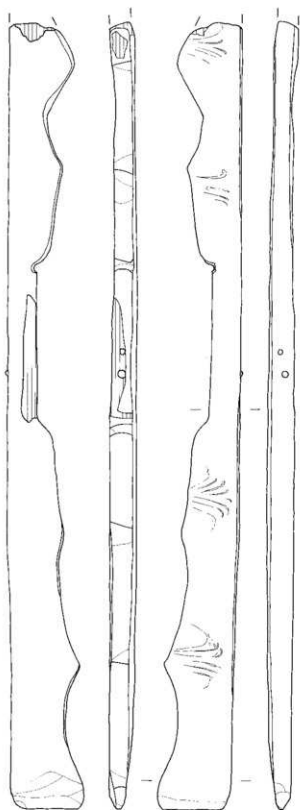
c. 六角木幢の概要と若干の考察

ア. 発見と整理の経緯

六角木幢は、平成13年（2001年）6月、社宮司遺跡の3号大溝（SD03）から出土した。全体の形状が、第711図に示すような石幢と呼ばれる建造物に類似しており、その構造をヒントに宝珠・笠・幢身の部分名称を考え、「木幢」（もくどう）を仮称した（第713図）。また幢身部分は六角柱を呈していることから「六角」を付し、「六角木幢（ろっかくもくどう）」とした。本出土例は笠に蕨手、風鐸、風招といった装飾品が付き、幢身各面には阿彌陀如来像と考えられる仏教像が描かれていた。このような特徴を兼ね備えた仏教塔は、石田茂作氏の『日本仏塔の研究』ほか、仏教関連書物の中にある笠塔婆あるいは仏龕塔婆（ぶつがんとうぼ）と呼ばれる遺物に酷似していた。それらの説明文には、仏龕塔婆は広義の笠塔婆で、龍形の存在をもって、笠塔婆とは区別するとあり、中尊寺の宝塔曼荼羅や曹源寺餓鬼草子等の絵画中に見られ、藤原末期から鎌倉時代にかけて流行したが、それが木製であったために現存例は少ないと記されていた。しかし実際には、木幢に類似する木製塔婆の現存する遺品はなく、本出土例が日本初出の木製仏龕塔婆、「木幢」である。木幢は発見当初から幢身部分が脆弱で、取り上げ時及び洗浄時に上部と下部が破損してしまった。写真及び図中に見る接合部分が、その時点の破損箇所にあたる。検出の経過（P652）



第742図 木椀関連遺物 1 (No9)



裝飾絵柄付木製品



第743図 木権関連遺物 2 (No101)

でも述べたが、発見当初は出土品が何であるか解らず、取り上げ後に木輪と解り、輪身部分に仏画のあることが判明した。

出土した平成13年に、水漬け状態の木輪仏画を拡大映像装置で観察・記録し、樹種鑑定と年代測定の実験委託を実施した。平成14年度の冬期整理時には、水漬け状態の木輪を実測した。第734図がそれであるが、輪身部分に関しては水漬け状態での簡易計測実測であったため、厳密な意味での実測図ではない。保存処理業務の終了後、再度、実測の必要がある。

平成15年度、当センターは藤澤典彦大谷女子大学教授を委員長に、「六角木輪等整理検討委員会」を発足、出土品の本格的な記録・保存業務を進めることにした。検討委員会の助言を受けながら、16年度に仏教像の判読図化作業を、デジタル画像処理手法によって実施した。その成果が第735図以下であり、デジタル解析等は貼付DVDに収録してある。彩色顔料等の分析は、東京文化財研究所並びに奈良文化財研究所に依頼した結果、それらの付着及び残存は認められなかった(第744図)。また木輪の記録保存に向けて、木輪自身の崩壊を防ぐ必要から、16年度から奈良文化財研究所に依頼し、保存処理業務を進めることにした(P32第1章第3節2)。

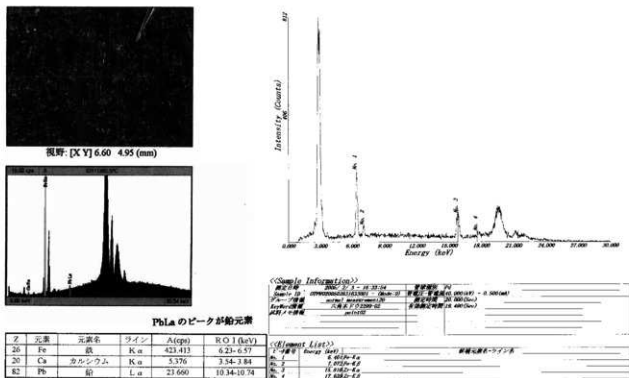
17年度は、保存処理業務に伴う木輪の崩壊・変形等の危険性に配慮し、委員会指導に基づき、処理前の木輪実物レプリカの作成を実施、同年10月に完成した。保存処理業務は継続中で、平成20年3月に完了予定である。

なお、検討委員会での検討事項並びに討議内容、復元レプリカ作成報告、保存処理業務報告等、六角木輪そのものに関わる整理概要は、保存処理完成時に、『整理報告』として、別途に刊行する予定である。

イ. 六角木輪の概要

製作年代

六角木輪の出土位置は、遺跡全体を区画する東西の大溝SD 03上層(2層)である。同層以下の層位から、古代6期以後に当地に搬入された東濃産光ヶ丘1号窯式の灰軸陶器類が出土したことから、その年



第744図 蛍光X線による顔料分析

代、9世紀前半を遡るものとはならない。幸いにも本例は木造品であるから、僅かな損傷で放射性炭素年代測定（AMS法）を実施することができた。破損部分を中心にメスを入れて分析した結果が、第206表から第210表である。暦年較正年代は、宝珠1070年～1160年、請花（相輪部）1160年、笠1020年、幢身1025年・1035年、蕨手1040年～1155年、風鐸980年～1030年、風招1035年・1145年の年代値を得た。塔総体として、11世紀前半から12世紀中頃に取まっている。古代14期から古代16期、社宮司遺跡のVI期からVII期以前に、ほぼ相当する。まさに藤原摂関期そのものに所属時代がある。ただし炭素年代測定は、分析位置の値を、的確に確立的に表示するものであり、木幢のような加工材であれば、樹木の伐採年そのものを表すものではない。したがって分析位置によっては、古い年代値が得られることもある。1σあたりの確率的な暦年較正範囲は、宝珠以下の文中にて記したとおりである。測定誤差は±30年。木幢は、最も古い年代値（980年）から新しい年代値（1160年）まで180年もの開きがある。最も新しい年代値を根拠に、12世紀中頃までは確実に存在（存立）していたと考えられるので、少なくとも13世紀以前、平安時代の作と考えるのが妥当である。

木幢には、蕨手・風鐸・風招の飾りが付く。これらには、明かな型式の2者があり、製作上の精粗あるいは木材の2種を合わせ考えると、製作時期の違いまたは製作者の違いを推定することができる。風鐸3点（個体C・D・E）の分析結果から、樹種の違うE個体が最も古く（980年）、型式差のある個体Cが最も新しい（1030年）。個体Eと個体Dは同型式である。個体Cと同じヒノキ材の個体D（1000年・1015年）を比較すると、15年から30年の開きがあり、それが型式差を反映したものと捉えると、理解し易い。風招は、古型式の樹種の違う2者（個体Cがサワラ・個体Dがヒノキ）を分析した結果、ともに1035年・1145年の値を得た。100年もの開きは、測定値が2峰性の分布曲線で、確率ピークが2つあることによる。蕨手に関しては残念ながら新型式の1種類（個体Aがヌルデ）しか分析しておらず、1040年から1155年となる。このことから、型式差は時期差につながる可能性が高いと考えられ、飾り物総体として古い値は1030年頃、新しい値で1145年頃を推定することができる。そこで、木材の木取りと加工部位から、樹木表皮に近い部分をもつと考えられる宝珠・笠・幢身をみると、クリ材の宝珠が1070年から1160年、ケンボナシ属の笠が1020年、エノキ属の幢身が1025年・1035年となる。最も表皮に近い部分が残ると考えられるのは、笠であり、その値が樹木伐採年に限りなく近いと考えたい。笠と幢身を比較すれば、然程の年代差はなく、およその所、1030年頃と見て問題はないであろう。とすれば、宝珠の値をどのように考えるか。そこで注意されるのが製作技術である。笠と幢身は、削り出し・はつり加工の後、ほぼ全面に及び丁寧な削り加工が施され、平滑面を形成している。これに対し、頂部に乗るべき宝珠は、荒々しい削り加工が残り、請花も相輪状に円形となるべきところ（原形かは別の問題）、面取り痕の残る多角形状（六角を意識したか）を呈している。一見して、いかにも応急的な製作と受け取れる。つまり宝珠は、木幢存立期間内に修繕加工された可能性を示唆できるのである。

以上から、六角木幢の製作年代は、笠と幢身を基準に、風鐸と風招の年代を踏まえ、1030年前後と考えてはば間違いないであろう。1020年藤原道長による法成寺の建立（9体阿弥陀）の頃に比定できるか。

製作材料

木幢は、各部品の材種が多様なことに特色がある。全体を形作る部品では、宝珠がクリ材（ぶな科クリ属）、笠はケンボナシ属（くろうめもどき科）、幢身はエノキ属（にれ科）である。飾りの部品では、蕨手はヌルデ材（うるし科うるし属）、風鐸はヒノキ（ひのき科ひのき属）とモミ属（まつ科）、風招はヒノキとサワラ材（ひのき科ひのき属）である。風鐸と風招に樹種2者が存在する点は、型式的な違いと相俟って、破損修繕的な追加製作と考えられる。また蕨手と風鐸、風招を結合させている軸材は、樹種分析を行っていないが、タケ材と推定できる。木材の樹種は、すべて千曲市内で調達可能（第2章第1節2）であ



クリの木



クリの葉



ケンボナシの大本



ケンボナシの実



エノキの大本



エノキの葉

第 745 図 六角木柱に用いられた樹木

るが、当然のことながら、樹木が存在すること、加工に適した大きさの材が調達できるのとは別の問題である。木材採取場所に関しては特定できない状況にある。

ところで、六角木輪に使用された樹種を概観すると、ひとつの方向性を読み取ることができる。全体像を作るクリ・ケンボナシ・エノキは、果実を食べることが可能な身近な落葉高木であり、飾り物はヒノキ・サワラ・モミなど建築材として好まれる山間の針葉樹である。またクリやケンボナシは経年変化の中で、黒味を帯びてくる材種であり、エノキ材は茶色に、ヒノキやサワラ材は比較的白木のままだに残る特徴がある。樹木に多種を用いる理由は、調達が馴染みある至近か遠方か（場合によっては安価か高価か）、木肌の色合いが、白か黒か（生木の表皮は茶色と灰色）を選択したものと考えられる。

製作の特徴

木輪は、国内初の出土品でありながら、宝珠から輪身まで、全体像を窺い知ることのできる、すべての部品（註1）が残っていたことに、高い資料的価値がある。各部品の製作技術に関して簡単にまとめると、まず宝珠と請け花は一体、一木で作られている。強い削り加工によって作出され、請花は相輪状に2段を設ける。表面は粗い加工痕を残したままで仕上げられ、請花部分の輪状部は、円形ではなく多角形状である。六角形を意識して製作されたとしても、やや歪である。請花の下部はほぞを設け、笠のほぞ穴に結合させる。

笠は一木の芯持ち材で、枝分かれ部分のある樹木の最大径部分を使用している。削り出し材で、緩やかな傾斜、弱い反外形態に作り出す。表面は削り加工の痕跡を残さないほど、丁寧に研磨されている。六面形成で丁寧に面取りされ、面と面の稜線裏側には蕨手6個を装着させる削り込み溝が彫られている。蟻型の迫い込み形式と考えられるか？裏面は削り痕跡を残し、仕上げ調整はなされていない。

蕨手は笠裏面の溝状のほぞに噛み合わせて装着されていたと看られ、笠からは35度程度の角度で緩く折れ曲がる。木取りは板目が中心か。蕨手先端の如意形の頭部は、作り出しに2種がある。細かな削り調整により丸みを強調したタイプとそれがなく丸みに欠けるタイプで、前者に個体C（個体B・D）が、後者には個体E（個体A）がある。前者が丁寧な作り出しから古式型式で、後者が新式（むしろ手抜きと考えたほうがよいか）であろう。樹種鑑定及び年代測定は、後者の個体Aで実施しており、推定でしかないが、古式型式のもの、別の樹種で年代も古いと考えたい。蕨手先端部には四角柱の風鐸1個と、風鐸の下にはさらに風招1個が竹ひご状の木製軸で付く。風鐸は柱目どりが基本で、上位と下位に2本の平行沈線が深く刻み込まれる。ことに上位は、山形頭部と二条線の構図を意識しているか。やはり製作上に2者があり、上下2本の沈線が太くしっかり彫られるタイプと、沈線のみで簡略化したタイプがある。前者に個体A（個体B・D）が、後者に個体C（個体E）がある。前者がしっかりとした作りで年代値も古いことから古式で、後者が年代値も新しく新式（手抜きか）であろう。ただし、個体Eはモミ属で、別地区の出土である。炭素年代値が最も古い点（980年）をどのように解釈するのが、今後の検討材料となるか。風招は板目材で、山形の肩部に挟り込みのある型式とない型式の2者がある。やはり時期差を考えたいが、樹種分析及び年代測定は、肩部に挟り込みのある丁寧な型式の例のみを分析している。蕨手等の型式差（むしろ製作差と表現したほうがよいか）から判断して、丁寧な作りタイプの型式を古式と考えたい。

輪身は、一木の芯持ち材で六角柱に仕上げられている。笠の乗る頭部は2/3程度欠失しているが、やや円錐状に削り出し、笠ほぞ穴との結合部と考えられる突起状のほぞ部分端部が僅かながら確認できる。輪身は、残り具合のよい面を正面と仮定するが、正面・右側面・右右側面の一部・左側面2/3程度が残存する。埋没状態によるものか、六角柱に少々の変形がある。下部は欠失しており、輪身本来の長さとはつかめない。推定で130cm程になるか。正面の上位（仏画より上方）には、はつり加工の痕跡がやや残るが、全体には丁寧な調整加工・研磨作業がなされ平滑化している。表面には仏教像が描かれている。

台座の存在は予想されるが、今回の発掘では確認できなかった。輪身の上部に比して、下部が著しく腐

触している点から、本例は地面に直接立てられていた可能性が高いと考えられる。

仏教画の特徴

仏教画は、正面と右側面・左側面に確認できる。腐蝕が進んでおり、全体の構図が解るのは正面視のみである。正面最上位に描かれた一体の仏教像以外は、すべて同じ構図が展開していたと考えられる。尊像に掲げられた仏教像が、果たして何であるかは判然としない。正面及び左側面にて確認した、それぞれ一体の仏教像が阿弥陀印を結んでいること、三体一セットの構図で、それぞれの尊像に大きさまき方の違いが認められないことから推定して、尊像はおそらく阿弥陀如来坐像と推定できる。ただし、最上位に描かれた1体の尊像に関しては、頭部しか残存しておらず、頭光、頭部の螺髪、そして肉髻や白毫の存在のみから、阿弥陀如来像を推定した。正面三体の阿弥陀像は、3段（九体阿弥陀と考えてよいか）にわたって配置され、それぞれの間には宝相華草文を挟み、それらをタガ状に巡る連珠文によって区画していく。この構図は岩手県平泉中尊寺金色堂内陣の巻柱の構図（註2）と同様である。構図の割付けは、連珠文の上下に観察された細線痕跡から釘状の工具で多段に割り付けたことが解る。その中にコンパス取りで頭光と光背を割り付け、阿弥陀像を描いている。下絵どりの手法については観察できていない。三体ある阿弥陀像は、いずれも正面向きと推定でき、奈良県元興寺極楽坊の板敷千体阿弥陀如来連坐像などと同様な描き方と考えられる（註3）。

阿弥陀像は地髪が肉髻より大きく、髪際はほぼ水平、鼻は低いようで、口は小さい。耳は肉付きがよく、耳たぶは丸い特徴がある。蓮華座は浅い茶碗形で、蓮肉が大きい。これらの様相から、平安時代末期の作と考えて矛盾はないであろう（註4）。宝相華文については、図柄をほとんど読み取ることができない。

造立場所

出土地点は遺跡南端のSD 03 埋土上層である。バスケットボール大の礫を芯材として土手状に連ね、その上に木輪部品を敷くようにして一括出土した。出土状況から判断して廃棄された結果と看することができ、塔の各部品が揃って出土したことから、それを造立した場所は、出土位置から至近の距離にあった可能性が高い。出土位置の西側には、SD 03 古期流路と新时期流路によって形成された方形の区画部分があり、有力な候補地のひとつである。検出時、遺物1点すらない空白部分であったことから、中世以後の土地削平によって、旧表土が消滅してしまった可能性もある。また、第二の候補に木輪出土位置の西側30m地点で発見されたSK 740 木棺墓付近がある。そこには木輪の部品である風鐸1点（個体E）が出土し、かつ人骨1体を埋葬した墓の炭素年代が1000年と木輪造立の推定年代1030年頃に近似していることから、有力視できるか。このことが六角木輪の造立場所を追究する上に、最大の鍵となっている。

性格と意義

木輪は国内初出の事例であり、その性格を判断することは極めて難しい。木輪に類似する仏教塔婆は、平安時代末期頃に描かれたとされる『餓鬼草紙』（註5）の中に求めることができる。ひとつは、河本家本一巻第四段の「疾行餓鬼」に、墓場を荒しまわる餓鬼と、その背後に特種的な階層を思わせる墓標が建っている（第746図・巻頭カラー）。さらに曹源寺本一巻第二段の「水施餓鬼」には、寺門前に立ち水施される信仰対象物がある（第747図・巻頭カラー）。また『餓鬼草紙』とは別に、『吾妻鏡』第九、文治五年九月の関山中尊寺の下りに、「先自白河間至延外濱〜其路一町別立笠卒塔婆。其面図絵金色阿弥陀像。」（P359）とある。これは藤原清衡が白河から外浜まで1町ごとに金色の阿弥陀像を描いた町石を造立した事例で、このことから町石卒塔婆（道標）のような性格も推定することが可能となる。ところで『餓鬼草紙』は「地獄草紙」や「病草紙」とともに『六道絵』と呼ばれる絵巻物の地獄巻である。地獄絵が描かれていた平安時代、貴族層は源信の『往生要集』（985年）を愛読していたという。がしかし、彼らは六道の厭相を説く前半部分ではなく、浄土の莊嚴を説いた後半部分に関心を置き、極楽を造形美術化した結果が、道長の法成寺に代表される（註6）と家永三郎氏は説く。『餓鬼草紙』に描かれた世界は、そこに描写

された苦界（穢土）に、餓鬼の世界と人界のあさましさを巧みに表現する。「疾行餓鬼」は、墓場に墓標の建つ見事な塚と、棺ごと無残に置き捨てられた庶民を対照的に描く。「水施餓鬼」にみる念仏諸行は、庶民たちの厭離穢土、極楽浄土への願いをも表現したものが。そこに描かれた仏塔は、墓標とされる例（註7）が重制形式で、市井の例が単制形式である。重制の例には、中尊寺の『金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図』（註2同様）に見る仏塔がある。そこには郎等？に射掛けられる貴族層が仏塔とともに描かれており、「疾行餓鬼」同様、傘塔婆が特権階級の造立物である可能性を示唆できる。形式の上で六角木輪は、「水施餓鬼」に見る単制形式の信仰対象物に近いか。「水施餓鬼」例は、長野市松代町に現存する石輪（P655 第712 図）に酷似しており、四角柱で、信仰対象物として寺門前あるいは市井に建立されていたことが事例として確認できる。

しかしながら六角木輪は、六角柱で、何より、輪身の上から下まで全面に仏画の描かれるところに最大の特徴がある。岩手県中尊寺の金堂内陣巻柱（阿弥陀堂四天柱）や大分県富貴寺の阿弥陀堂四天柱などと同じ構図を用いるところに重要な意味があると考えたい。それらは、いずれも阿弥陀堂内に荘嚴に飾るといふ目的を持ち、家永氏の言にあるように、平安貴族層の思想を具現化したものと考えられる。つまり木輪は、建築物としての装飾様式を反映するのであり、木輪自身が荘嚴化されるとともに、それによって荘嚴化される対象が必要である。その対象にこそ、木輪造立の目的があると考えたい。したがって六角木輪は、町石卒塔婆とは、少々用途を違えるとして理解し、性格を分けたい。また市井の民衆救済を掲げる信仰対象物であれば、荘嚴化される直接の対象はない。阿弥陀如来の世界のみが荘嚴であればよく、建造物として「水施餓鬼」のように、龕部にのみ弥陀三尊等を配し、装飾耳と色彩によって荘嚴化が図られるのが通例だろう。この系譜に松代町の石輪などは入り、同形式をとる。では墓標はどうであろうか。六角木輪は残念ながら裏面側が大きく欠失しており、戒名等があったとしても検証の方法がない。また「疾行餓鬼」に見る他の



第 746 図 疾行餓鬼（東京国立博物館蔵）



第 747 図 水施餓鬼（京都国立博物館蔵）

卒塔婆や釘貫状施設の材料等も出土していない。しかし墓標として塚上に造立されたのであれば、荘厳化されるのは被葬者自身であることが強くなり、よほどの特権階級者を想定できるか。第746図「疾行餓鬼」には並存して数基の墓が描かれているが、仏龕塔婆（笠塔婆）のある右端の塚と、3基の卒塔婆のある塚が右奥にある。その2者が、階層差を表したものと看するのか、それとも埋葬後の時間差を表したものと考えてよいか。後者の考え方も首肯できないだろうか。荘厳化とは、被葬者を取り巻く空間を、阿弥陀の世界つまり浄土の世界へと昇華させることこそが重要である。中尊寺金色堂の内部埋葬施設は、その際たるものであろう。3基の卒塔婆のある塚を死没後、あまり時を経ない墓となし、仏龕塔婆のある塚を追善供養期の荘厳施設、供養塔と解せないだろうか。つまり「疾行餓鬼」に描かれた仏龕塔婆の塚は、墓標ではなく供養塔としての施設ではないかと。

このように考えると、やはり木輪造立地の候補となった場所、そこにあるSK 740 木棺墓が気が掛かる。墓の推定年代値（1000年頃）と木輪造立の推定年代値（1030年頃）は30年足らずと近似している。木輪を供養塔と仮定すれば、「疾行餓鬼」のようにして造立されたとしても何の不思議はない。それでも年代差は30年あるから、生前の、または死後直後の造立ではないだろう。死者への経年供養となれば年忌法要が考えられる。今日の事例では、二十七回忌・三十三回忌・五十回忌頃に相当してくる。想像遅く、1030年を考えると、三十三回忌頃が推定でき、年忌法要「弔い上げ」の記念碑として造立したものだろうか。ここに至って、奈良県有形民俗文化財の「傘堂」（1674年?）のことが想起される。傘堂は高さ4.77mもある建造物で、木輪とはまったく大きさも形も違っている。しかし、重要なのは造立後の経緯である。『奈良県指定文化財』（1984年）によると、郡山藩主本多政勝が没した後、家臣の郡山奉行吉弘統家が願主となって、政勝の「影堂」を建立した。その後、この御影堂には関係者の墓碑が建てられ、浄土信仰の浸透とともに、次第に霊地化し安業往生を願う庶民の信仰を広く集めるようになったという。本来の発願は藩主への供養であるが、それが次第に民間信仰の対象物となり、地域結合の象徴的建造物となっていた事例である。

六角木輪は、補修・修繕を経て、少なく見積っても推定では1100年頃まで、70年以上建っていた計算になる。社宮司遺跡Ⅵ期（11世紀前半）の造立推定時期から、木輪の解体が確実視される時期（13世紀）まで広く見積れば、実に150年間以上の空白がある。10世紀後半に登場したと予想される「開発願主層」を第1代当主と仮定すれば、11世紀前半に木輪造立願主となった人物は第2代当主に該当するか。第2代当主による追善供養が屋敷内で執り行われたとして、11世紀後半には早くも屋敷の移転がはかられる。第4章で屋敷の移転を荘園成立と絡めて捉えたが（P715第3節）、石清水八幡宮家への寄進の経過が、木輪にとっては重要な歴史的事件として関わっているように思える。11世紀後半段階までは、屋敷内で木輪の管理・維持がなされたとしても、木輪の炭素年代値を動かし難い事実とすれば、さらに50年以上の存立期を見込まなければならない。もちろん木輪は木質であるから、長期間の風雪には耐えられない。覆屋あるいは御堂を想定する必要も当然あるが、遺跡地からは検出できていない。掘立柱建物跡が25年前後存続することから予想すると、野ざらしであれば1回程度は作り変えなければならないだろう（註8）。問題は、屋敷移転後の木輪存続を、奈良の傘堂と同じように考えることができるか否かである。11世紀後半以後、建物の構築は見られないのであるから、木輪のみが、御堂の存否があったにしても、耕地に建っている風景を想像できるか否かにある。まさに、畑中に立つ松代の石輪のように。木輪解体の一括廃棄に関わる事例として、代掻き具（コロバシ）の伴出（P584第663図）があり、炭素年代値（1160年）を考慮しても妥当なところにある。耕作地化された12世紀の風景、そこに働く民衆と木輪を維持管理した人物の陰が果たして垣間見えるか。13世紀以後、新たに建物構築がなされるまでの扶間に、木輪の終焉を位置付けることができるか。

六角木輪の造立された時代は、まさに平安時代も後半期である。第4章第4節5にて歴史的背景は概略

した。938年頃、市井では空也(市聖)が念仏を唱和し、呪術的な踊りにより万人救済を進めた。985年には源信の『往生要集』がなり、専修念仏の骨組みが構築される。摂政藤原道長は、1020年に法成寺を建立し、九体の阿彌陀如来像(註9)を安置した。「御堂閑白記」を書き、望月の歌を詠んだ道長も1027年には没する。側近に看取られた道長は、北枕、西向き、そして右脇腹を下(涅槃浄土の姿勢)にして往生したという。永承7年(1052年)には、仏法(ブツダ)の教えが減り去る年、すなわち末法の世(註10)に突入すると考えられた。この平安末期に広がった末法の思想は、この世を救われたい苦界とし、死後の世界に地獄を描いた。浄土信仰は人々を苦界から救い(厭離穢土)、地獄から救う(極楽浄土)教えを説く。貴族層の極楽浄土の思想は、法成寺を始めとする寺院の建築、建造物の造立にみる荘厳化した浄土空間の創出となって具体化していった。そうした極楽浄土の思想を、天皇・貴族ら特権階級のみならず、民衆へと開放したのは、市井で活躍した聖たちである。ただ「南無阿彌陀仏」の念仏を称名することで、信仰の階層的差別化を払拭させていったのである。六角木幢は一体の阿彌陀如来像を尊像とし、以下に九体の阿彌陀(全体で54体以上の集仏か)を配置する荘厳化した建造物である。そこには、極楽浄土を祈願する極めて強い信仰心と、願主の特権性があるように思えてならない。何故、ひとつの龕部に三尊形式ではなく、巻き柱の構図をとり入れたのか。九体の阿彌陀(集仏の観想か)にこだわった理由は何か。追跡すべき課題は多い。社宮VI期に建築された屋敷の主人は、栄華を極めた藤原道長の臨終のように、北枕に西向き、棺ごと右側に寝かせて埋葬されていた。本来、生前に使用したであろう刀や弓を、実物ではなく、木製の形代に変えて副葬されていた。まるで、それらが死後の世界に無用であるかのように。

- 註1) 飾り物一式は5セットしかない。蕨手・風鐸・風招の1セットがまるごとない。台座は存在しなかった可能性が高い。
 註2) 中尊寺の内陣巻き柱は、菩薩坐像と宝相華唐草文・連珠文の構図である。巻き柱の主題は、密教的色彩の強い胎藏界曼荼羅と推定されている。中尊寺については執事北淵澄照氏よりご教示を得た。
 註3) 元興寺の板絵・曼荼羅に関しては、藤澤典彦氏よりご教示頂いた。
 註4) 仏画の観音項目及び呼称名は、西村公朝『仏像の再発見』1976年吉川弘文館に基づいた。
 註5) 秋山光和「地獄草紙 餓鬼草紙 病草紙の絵書」『新修 日本絵巻物全集 第7巻 地獄草紙 餓鬼草紙 病草紙』1976による。
 ※第746図「疾行餓鬼」は東京国立博物館蔵貸出票No2005-12-19許可、第747図「水施餓鬼」は京都国立博物館蔵特観第2005-572号許可に基づき使用。
 黒坂勝美編『吾妻鏡 第一』吉川弘文館 1989年
 註6) 家永三郎「六道絵とその歴史」『新修 日本絵巻物全集 第7巻 地獄草紙 餓鬼草紙 病草紙』1976による。
 註7) 『餓鬼草紙』に見る笠塔婆の解釈は、近藤昭一氏の論考「笠塔婆考」信濃29巻5号(1977)を参考にした。P464に墓の可能性を示唆する。
 註8) 木幢の幡身の仏画には、加筆の痕跡は認められないが、連珠文が不規則なところ(P683第739図)、宝相華文が連珠文にかかるように判読される部分(P681第737図下)もある。
 註9) 九体阿彌陀は、法勝寺(1077年後鳥羽)、尊勝寺(1105年堀河)、中尊寺(1107年)にある。
 註10) 釈迦の入滅後、正しい教えが受け継がれる1000年間を「正法」、その後1000年間は教えの形、法だけが受け継がれる内実のない時代「像法」、そして法が廃れ墮落してしまう「末法」の時代、最後には完全なる前壊「法滅」の時代となる

引用・参考文献

- 1965年 千々和 実「平安時代の経幢」『史跡と美術』352号
 1968年 奈良県教育委員会『奈良県文化財図録Ⅲ 建造物(重要文化財編1)』
 1971年 『中尊寺』河出書房新社
 1974年 「元興寺極楽坊V」『日本仏教民俗基礎資料集成第五巻』中央公論美術出版
 1976年 家永三郎編集『新修 日本絵巻物全集 第7巻 地獄草紙 餓鬼草紙 病草紙』角川書店
 1996年 庚申懇話会編『日本石仏事典』雄山閣
 2001年 文化財探訪クラブ8『石仏と石塔』山川出版社 ※文献1
 2004年 『国宝 中尊寺展』佐川美術館
 2005年 『浄土の本』学習研究社

5. 総括

社宮司遺跡は、7世紀終末から9世紀を中心とする遺跡である。溝跡等の7世紀以前に属する時期、総柱高床式の建物あるいは土壇墓等の10世紀から11世紀代に属する時期、13世紀ないしは14世紀ごろの柱穴群または溝状遺構等の所属期が、ほかにある。概ね、飛鳥時代から鎌倉時代までに収まるが、古代律令制の成立から崩壊期、荘園制の成立前夜までが主な所属時期である。調査概要でもふれたが、かつて1975年に発掘調査が実施され、遺跡近傍の「郡」地籍のこともあって、古代更級郡衙関連遺跡との評価が与えられた。今回は、前回調査地の西隣りを発掘調査し、竪穴式建物跡16軒、掘立柱建物跡52棟、大溝3本、溝跡61本、土壇墓1基、土坑1014基、集石跡3箇所、焼土跡4箇所を確認した。また出挙返納帳と考えられる漆紙文書、習書木簡や付札状木簡、墨書土器、奈良二彩陶器、緑釉陶器など、地方官衙遺跡を特定するに十分な考古資料の出土をみた。よって社宮司遺跡を、地方官衙を構成する一施設群とみなし、古代更級郡衙関連遺跡として再評価する。調査した遺構を時期ごとに整理・区分し、その概要を以下に記す。

規模

遺跡の範囲・規模は、これまでの2回の発掘調査から、南北に約120m、東と西に、少なくとも100m以上を有することが理解できた。すなわち、北はSD 11及びSD 01で区切られ、南は旧宮川の流路によって区切られた範囲内に限定されるが、東西方向は、さらに範囲が伸びることが予想できる。

遺構

遺構の所属時期が、出土遺物から、ある程度推定できたものに関して以下にまとめる。社宮司遺跡は、全体を7つの時期に大別し、おのおのを2つから3つの小期に分けて考えている。

社宮司1期1小期・・古代2期(7世紀後半)

社宮司1期以前、すなわち7世紀後半以前に位置づけることのできる遺構は、ほぼ確実なところで、SD 16・SD 46・SD 24・SD 27がある。SD 16とSD 46は、平行する溝で調査区北東から南西方向に走り、これにSD 24とSD 27がほぼ直行するかたちで、北西方向から南東方向に掘削される。ことにSD 27出土の土師器壺形土器と木製二又鎌は、その形式から7世紀以前と推定できるが、何故か鎌の炭素年代測定結果(AMS法)は8世紀末の値を得た(P177)。遺跡は東に開く佐野川扇状地の南端にあり、伏流水が高位にて出水する場所である。溝埋土内からは、打製刃器(SD 46)や木製農具(SD 27)が出土していることから、水稲耕作の行われた場所を想定できるか。その時期については判然としなが、遺跡内で2片のみ出土した弥生時代後期の土器破片や磨製石包丁、あるいはSD 32出土の板状木製品の年代値(6世紀)、SD 27出土の木製二又鎌等から、弥生時代の末から古墳時代後期にかけての、いずれかの時期に構築されたものと考えたい。居住施設等は存在しない。

7世紀後半代に至ると、SB 05とSB 16の2軒の竪穴式建物が調査区北端と南端に丁度、対になるように構築される。大部分を破壊されており、その性格については残念ながら不明である。またSD 27の周辺には、ST 15、ST 29、ST 27の3棟の側柱建物を想定でき、これらを合わせ、社宮司1期1小期を構成すると考えたい。建物の配置から推定して、施設は、さらに西方に展開すると考えられるか。建物跡は出土柱材の炭素年代測定から推定したが、ST 29は、SB 14及びSB 17との切り合い関係もあり、建て替えがあった可能性もある。古い年代値は、Pit 1の礎板材から得ており、Pit 2の柱材(ST 29で唯一の柱材)の値が100年(あくまでも測定部分での年代差)ほど新しい。このことは、ST 15に柱材と礎板材の改築状態があり、建て替えを推定していることと同様に、該期の建物が同一場所で建て替えられていることの証左となるか。



第748図 社宮司1期1小期ほかの遺構（7世紀後半以前）

1期2小期・・古代2期から3期(8世紀前半)

7世紀終末から8世紀前半代に位置づけることのできる遺構は、SB 17、ST 19とST 37・ST 25・ST 30・ST 08・ST 33・ST 12、SD 11・SD 01・SD 53・SD 84がある。竪穴式建物、その規模6mを計るSB 17のみであるが、2期に存在したSB 05及びSB 16が該期まで存続していたか否かは、遺構の切り合い関係はなく不明である。SB 17は次期改築のSB 14に破壊されて、その全体を把握することは難しいが、SB 14同様に、SD 53と周溝外排水施設により連結していた可能性が高い。ST 19は、ST 42と切り合い関係にあり、同一位置での柱穴の使用が認められる。年代測定結果は、Pit3で7世紀前半、Pit2で8世紀後半の値を得、やはり100年もの開きがある。柱穴重複状況からPit3を本跡とし、出土土器の様相を加味して8世紀前後まで下げて位置付けたい。1間×2間の南北棟側柱建物である。ST 37は、これのほぼ真北に軸を揃えて建てられていることから、出土遺物はないが、ほぼ同時期と考えた。ST 25も同様な理由から時期比定したが、埋土から出土した木材の年代値は、9世紀または13世紀の値であり、出土土器の様相とはそぐわない。400年もの開きのある木製遺物の共存は、樹齢異なる樹木の加工部位の違い以外に説明はできない。ST 25と同一の柱穴を改築使用するST 22のPit3柱材の年代が8世紀中頃の値を示すことから、何らかの事由による遺物の混在と考えるべきか。これら掘立柱建物も竪穴式建物同様、前時代の建物が存続していた可能性も想定できるか。これについては、第4章(P721・P722第760図)に示すが、少なくともST 29は切り合い関係があり、SB 17とは同時存在はしない。

該期で特筆すべきは、まず東西方向の区画溝が掘削されたことである。北にSD 11とSD 01、南にSD 84である。SD 11とSD 01は、平行して構築されており、併設する施設の可能性がある。ただし、南側のSD 84が、次期にSD 03として再掘削されることを考えると、SD 11からSD 01への転換も考えられるか。東西方向に走る北側の溝と南側の溝の掘削により、南北に幅50mの空地(仮称・北区、②調査区に該当)が設定されたことになる。溝の長軸の傾きは、僅かに3度程度である。空間内は、さらに東西方向のSD 25によって北側が区画され、SD 01との間に、南北幅16mほどの区画帯を作り出している。SD 25以南は、SD 84との間を南北方向のSD 53を掘削することで、東西に区分する。SD 53の長軸の傾きはほぼ真北を指し、区画帯は、ほぼ正方位に割り付けられる。2つ目として、SD 84以南の空地(仮称・南区、③調査区に該当)に、ST 12を中心とした掘立柱建物群が構築されることである。ST 12は、2間×6間を推定する大型の東西棟で、推定床面積50㎡を計る。次期に移設されるST 11と同様な施設と考えると、東西2間ごとに、間仕切り柱を設ける3室構造であろうか。ST 12と軸を90度振るかたちで、ST 33とST 08が縦列で施設される。両建物跡は2間×3間の南北棟である。これら建物群は、ST 19やST 30のようなSD 84以北の建物群とは、規模や軸方向が異なり、性格を異にする可能性がある。ST 12の機能を「倉」と考え、ST 33等を「屋」と解すべきなのか。特別な空地が新たに設定されたと考えたい。

1期3小期・・古代3期から4期(8世紀中頃から後半)

該期は2小期の区画を継承し、竪穴式建物及び掘立柱建物の建て替え、増設が行われる。8世紀中頃から8世紀終末に位置づけることのできる遺構は、SB 14とSB 11、ST 22・ST 26・ST 42・ST 35・ST 24・ST 39・ST 11・ST 16・ST 45、SD 01・SD 53・SD 03である。竪穴式建物ではSB 11がSD 03(旧SD 84)の南側に構築される。SB 16が2小期まで存続したか否かは不明だが、それとほぼ同じ位置に掘削されている。SB 17は、北に1mほどずれてSB 14として改築される。周溝施設が整備され、木製の樋と集水枡、排水管を完備する様は、恒常的な排水作業を伴ったと推定できる。埋土中からは、出土遺物がほとんどないため、その性格については不明であるが、集水枡中からは琴柱形木製品1点が出土している。掘立柱建物は、ST 25がST 22へ、ST 19がST 26及びST 42へ、ST 37がST 35へと建て替えられ、さらにST 12がST 11へ、ST 33がST 16へ、ST 08がST 45へと建て替えられる。全体として、東に位置を少しずらして移設されたと考えられる。区画溝は、SD 84がSD 03として大きく再掘削され、北側に



第749図 社宮司I期2小期の遺構（8世紀前半）

走るSD 01とSD 03を連結させるようにSD 03南北流路が新たに掘削される。このことにより、中央部は大きく東西に区分けされ、およそ50m四方の方形区画が東西方向に連なる状態となる。千曲市調査地点(B地点)の3号及び2号、4号などは、長軸線の方位と建設位置から該期に比定できる可能性を指摘できるか。同様にST 47(門跡の可能性もあるか)あるいはST 49も該期への位置付けを検討すべきか(P 721・722第760図)。結果、北区ではSD 03南北流路を挟んで、東側の建物群と西側の建物群が区画され、さらに南区の建物群が別に区分されることになる。こうした建物配置のあり方は、正方位志向に基づく、50m単位(およそ方半町)の計画的な設営であり、それぞれの建物群に機能的分掌が与えられたと仮定するならば、極めて官衙的な施設と評価し位置付けられるか。またSD 01の西側端、SD 55付近には、溝で囲繞した方形状の特殊施設が設けられている。SD 03南北流路脇のB地点にも同様な施設があり、確たる証拠はないが神祇的施設を推定してみるも一考であろうか。2小期ないし3小期のSD 01からは、「臈」の字の習書木簡(炭素年代測定では7世紀中頃)、奈良二彩陶器の小壺、三彩陶器の蓋の出土がある。墨書土器では、「酒カ」「坂主」「北」「秋」「穴」などがある。SD 53からは墨書「守部」「穴」が、SD 03の溝底からは、付札木簡(炭素年代測定は8世紀中頃)の出土がある。またSD 03南北流路からは、奈良二彩陶器の小壺(SD 01と同一個体か)、墨書の「酒カ」「廻」「中」「守部」などが出土している。

Ⅱ期・古代5期から7期(9世紀前半)

該期は、建物構成上、I期とは大きく転換する段階にあたる。北区の建物群は、SD 53の機能消滅とSB 14の廃絶に伴ない、掘立柱建物跡の縦列的配置が崩れて、中央部分に分散設置されるようになる。南区では大型の東西棟及び南北棟が消失し、竪穴式建物が建設される特徴がある。該期の建物群と3小期のそれらとは重複関係が少ない点から、3小期に追加建設された可能性も否定できない。年代測定結果等で8世紀終末前後に位置付けられる建物跡も含んでいることから、厳密には区別しきれない部分がある。北区の方形区画は残り、正方位志向を保って掘立柱建物跡が散在して配置される。ST 10・ST 18・ST 40・ST 41・ST 17そしてST 31がある。B地点の8号や9号建物も該期に相当するか。ST 22は前述した理由から、9世紀初頭の年代値を推定でき、該期に位置付けるべきだが、2小期と3小期の建物移設の状況から察すると3小期に建てられた可能性もあり、両期に掲載して考えた。材の補強あるいは改築があった結果なのか、判断は難しい。またST 18は年代測定結果から8世紀代の比定も可能であるが、ST 24との切り合い関係から、それよりも新しいと判断した。ST 10はST 18ほかと比べ、主軸の傾きをやや西に振るが、年代測定結果では8世紀後半から終末を得ている。ST 41はSB 04と重複し、いずれかが古いはずであるが判断はつかない。調査ミスで柱穴の記録が判然とせず、全体形状もつかみがたい。1間×2間もしくは1間×1間と推定でき、9世紀前半段階か。ST 31は1間×2間、5本柱穴と特異な形態を呈している。調査時の丹念な精査でもほかに柱穴を確認できなかったことから、これで完結した建物構造と考えられる。果たして、いかなる構造であろうか。類例を待ちたい。南区では大型の掘立柱建物を中心とした建物群が解体消滅し、竪穴式建物跡SB 07と掘立柱建物跡ST 28のみが登場する。ST 28は軸方向がST 18やST 40と異なり、ST 10にやや近い。同じ南区のSB 07とはほぼ同じ傾きであり、この点からも1期南区には機能的関連性があると判断できる。本遺跡で唯一の総柱式建物で2間×3間。柱穴は大きく深い特徴があり、重量のある上部構造を推定できる。「倉」と考えてよいであろう。

9世紀中頃までに位置付けられる遺構は、東西南北の区画溝SD 01とSD 03を始め、SB 06・SB 12・SB 04・SB 08、ST 02・ST 06・ST 05・ST 21である。この段階まで、初頭期の建物群が存続していた可能性はもちろんある。SB 04とST 41、ST 05とST 07の重複関係、SB 08とST 17の併設状況から、改築等を含めた段階的な変遷があったと考えたい。出土土器の検討から、北区と南区に一辺4m程度の竪穴式建物が各2軒建てられ、加えての1間×1間の小規模建物(ST 05の年代測定結果9世紀半ばを根拠に



第750図 社宮司1期3小期の遺構（8世紀中～後半）

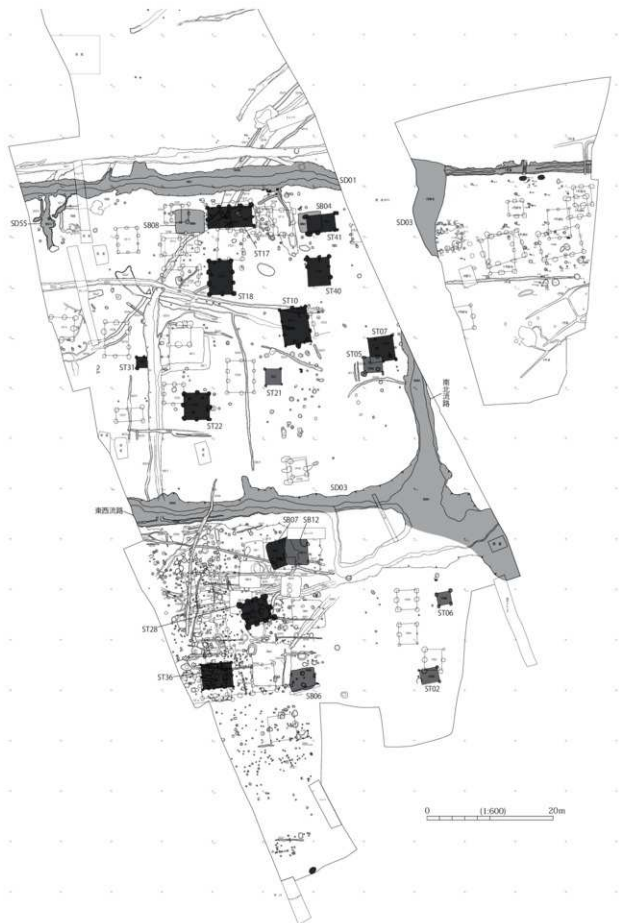
類推)が建設されたと考えられる。この段階に至ると、SD 01 と SD 03 南北流路の機能は、ほぼ終息状態に向かったと考えられる。機能を継続する SD 03 東西流路からは、該期前後に位置付けられる漆等付着土器とともに漆紙文書が出土している。「十月十一日正税甘束」の文字を判読でき、出挙返納帳と考えられる。区画溝の消滅と掘立柱建物群の衰退、そして竪穴式建物と1間×1間程度の小建物の設置は、遺跡の構造的な大転換を示すものである。該期から灰軸陶器の供給も開始され、まさに8世紀奈良時代と9世紀平安時代の画期に適合するような状況を看取できるか。

Ⅲ期・古代8期(9世紀後半)

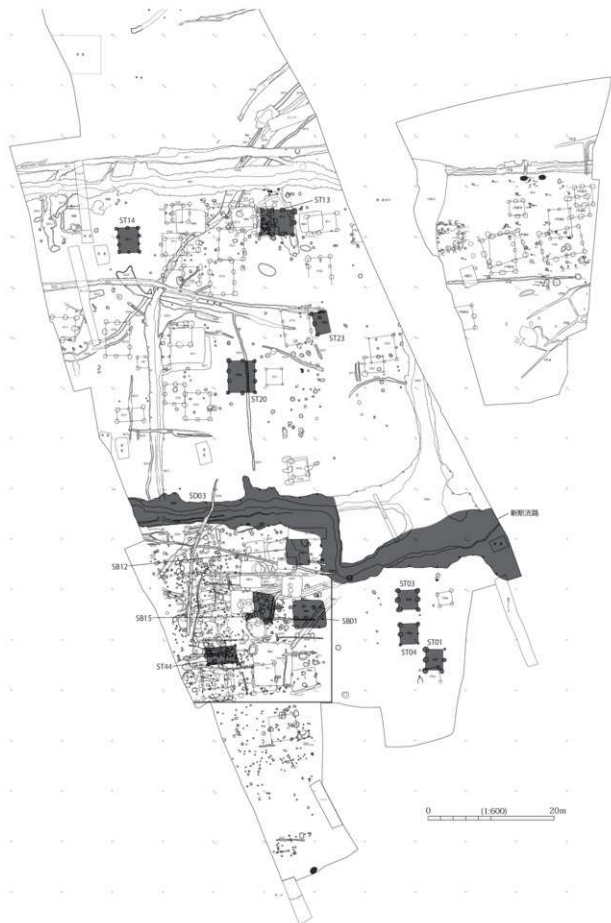
該期に位置付けられる遺構は、SB 01・SB 12・SB 15、ST 01・ST 03・ST 04、ST 13・ST 14・ST 20・ST 23・ST 44がある。北区と南区を区画した大溝 SD 03 は、大きくL字形に屈曲して再掘削される。SD 03 新期流路である。北区では2間×3間の掘立柱建物が規則的な配置は示さないが、散在して設置される。南区には一辺5mの竪穴式建物 SB 01 を中心に、4m級の建物がほぼ等間隔に整然と配置される。その東側には ST 01 ほか、1間×2間の南北棟2棟が建つ。L字形に掘削された SD 03 の南側延長部分は、竪穴式建物群を取り囲むように地表面に段差が設けられ、方形台状の削り出しが認められる。この東側には ST 01 ほかの該期比定の掘立柱建物跡が然程の削平を受けずに存在していることから、この段差の形成は古代まで遡る可能性のあることを指摘しておきたい。残念ながら、この方形台状の削り出しの時期を決定する明かな判断根拠は得られていない。実際、現代の水田耕作地は、この台状の削り出し地形を利用して、少なからず畦畔等の改変は加わっている。SB 06 の南側部分が8期段階の掘削によって消失したと捉えられるならば、台状の削り出しを該期に位置付けてよい証拠となるが、台状部分の西側は調査区外で不明だが、南北に関しては、ほぼ長さ25m(およそ1/4町)を測る。竪穴式建物のみで構成された、この台状削り出し部分の空間地を、屋敷地の形成と評価しておきたい。SB 12 は出土土器の内容から、前段階の様相が強いと判断したが、埋土中出土の灰軸陶器平瓶が SB 01 埋土(P264の17)と SD 03 埋土と接合関係にあり、該期に構築、あるいは該期まで存続した可能性を示唆しておきたい。また ST 23 は、東側半分を後世に破壊されて全体像は解らないが、軸の傾きと、2間の柱間から、おそらく2間×3間の東西棟と推測できる。とすれば、B地点検出の6号棟、1号棟も主軸方向と規模から、該期の可能性を考える必要があるか。SD 03 新期流路からは、墨書土器「八千」・「大」・「田」・「大」などが出土している。

Ⅳ期・古代9期(9世紀終末から10世紀前半)

該期に位置付けられる遺構は、SB 02・SB 03・SB 09・SB 10、これに地鎖的遺構がある。前段階に存在した南区東側の ST 01 や北区の ST 13 ほか、該期まで継続した可能性も考えられるが、竪穴式建物が移設されたことと、掘立柱建物が移設されないことの不具合から、継続しないものと判断した。したがって、該期の遺構は、すべて南区の屋敷地内のみに限定される結果となる。SB 02 は、一辺7mを測る大型の建物で、床面に3基の大型土坑を持つ。それらが溝状遺構で連結されて SD 64 を通じて建物外へ、そして SD 03 へと通じていたとされる。大型土坑からは多量の土師器環類が出土しており、溝等の一連の造作から推定して、排水施設を兼ねた特殊な建物である可能性を示唆できるか。土坑出土の炭化物の年代測定から9世紀終末の値を得ている。また SB 02 に併設した SB 03 の Pit1 からは、「風」の墨書ある土師器環形土器が出土している。地鎖的遺構そして SD 03 と共通しており、それらの共時性を示す材料となるか。地鎖的遺構は、畜産跡と考えられ、正方位区画の祈禱遺構である。一辺約5mの方形の四隅に土坑を配置し、中心部には緑軸手付き瓶を納めた1基を設ける。中央土坑と南西土坑(裏鬼門)には「風」の字の墨書ある椀を埋置する。風水の思想に極めて優れた計画的施設であるが、これに伴う建築物を確認できていない。建物建設以外の祭祀行為を想定すべきと考える。緑軸は尾張地域の猿投産で9世紀後半とされるが、在土器の型式が10世紀初頭から前半であり、該期まで使用・伝世した品と考えたい。



第 751 図 社宮司II期の遺構（9世紀前半）



第752図 社宮司川期の遺構（9世紀後半）



第753図 社宮司IV期の遺構 (10世紀前半)

V期・古代12期から13期相当か？（10世紀後半～終末）

IV期以後、時期の判断できる遺物、特に土器等の煮炊具や食膳具がほとんど出土していない。SD 03もすでに埋没し、ほぼ終息に向かった段階であろうか。明確に時期を決定できる材料はないが、総柱高床式の建物3棟ST 50・ST 51・ST 52を確認できる。それらは、IV期以前の建物とは柱穴規模が明かに異なり、重複関係から、IV期以降であることは間違いない。いずれもIV期までの屋敷地内に限定して建設されている。同様な視点に立つと、ST 50等と同規模の柱穴を持ったST 44とST 36を挙げることができる。2棟はST 11及びST 12との重複関係から、それらよりは新しい時期、すなわちIII期以降に比定できるが、柱間寸法から判断して、該期まで下る可能性が高い。その他、小規模な柱穴状の土坑群を無数確認したが、それらに関しては建物跡を組成させることができなかった。やはりV期前後に位置付けて考えられるか。一方、大型の土坑にも時期の定まらない例が幾つかある。その中で該期まで時期の下る余地のある例に、SK 696とSK 870がある。高床式建物の東に位置し、タライ状で浅いことが特徴である。出土遺物にはIV期以前の遺物を若干含むが、構築時期が新しい可能性がある。SK 870は、その調査状況から、北に伸びる溝跡（旧SD 14）、さらには井戸跡を想定したSK 590と切り合い関係が不明瞭で、ほぼ同時期か、あるいは併設的な遺構と判断できる。SK 590はSB 10及びSB 15を破壊していることから、確実にIV期以後の井戸跡である。SK 870及び旧SD 14が該期に所属する可能性は、やはり高いか。

ST 50とST 51は平行して併設されていることから、同時存在と考えられる。ST 52は、それらと重複しており、互いの新古については不明だが、規模と柱の配列から新しいと判断した。ST 50は床面積20㎡を測り、ST 51は16㎡を測る総柱高床式の建物跡である。柱穴は直径25cm程度と小さいのが特徴。ST 51の南西隅には、Pit10とした浅い小さなタライ状の土坑SK 840が存在する。出土遺物はない。

一方、屋敷地の北端、旧SD 03沿いに1基の木棺墓がある。組み合わせ式の棺材に、1体の人骨とともに刀形木製品2点（大と小）と弓形木製品1点のみを副葬してあった。特筆すべきは、北枕、西向きの埋葬姿勢を示している点で、仏教的作法を強く感じさせる。驚くべきことに、その状態は、棺ごと素掘り土坑内に横位に埋置されていた。経過はわからないが、少なくとも埋葬に立ち会った近親者が、わざわざ行った行為であろう。特記しておきたい。木棺墓は遺跡内に1基しか存在しない。屋敷地の北端、高床建物の北側に構築されており、屋敷の初代当主の墓と考えられるか。人骨や棺材等の年代値はほぼ近似しており、枕木の年代から10世紀最終末を考えたい。

VI期・古代14期相当か？（11世紀前半）

VI期には、V期の高床式建物と重複して確認したST 52を推定したい。床面積92㎡を測る大型の高床式建物で、柱筋の通りはあまりよくない。やはり南西隅には、Pit21にSK 550が、Pit22にSK 820の浅いタライ状の小土坑が存在している。出土遺物はない。規模の拡大を指標にして、付属建物にはST 36を考えたいが、Pit8から須恵器環A（古代4期・5期頃）完形個体が出土したことから、社宮Ⅱ期前後に比定した。大型のタライ状土坑にはSK 870をあてたいが、建物と近接しすぎており、SK 696が相応しいか。井戸跡も同様に時期設定が難しい。SK 350もしくはSK 454のいずれかが組成すると考えられるが、判定根拠はなにもない。SK 870にSK 590が付随する可能性が高いことからして、SK 350が該期となるか。SK 454については不明である。

一方、時期の特定は難しいが、該期に位置付け可能な遺物に、仏塔「六角木幢」がある。木幢本体（笠と幢身）の炭素年代測定結果からは、11世紀前半代への設定も可能である。宝珠と笠の年代値には100年もの開きがあり、測定誤差を配慮しても、補修・修繕行為によって作り変えられた作品が混在していると考えたほうが妥当なようだ。事実、蕨手や風招には型式差があり、そこに年代的なズレを読み取ることもできる。木幢はSD 03の上層から一括して出土した。蕨手・風鐸・風招の1セットを欠くのみで、すべてが揃っ



第754図 社宮司V期の遺構 (10世紀終末)



第755図 社宮司VI期の遺構 (11世紀前半)



第756図 社宮司Ⅶ期の遺構（13世紀～14世紀）

ている。その内の唯一1点の風葬が、木棺墓の周囲から出土しており、屋敷墓あるいは屋敷との関わりが濃厚となっている。屋敷墓（木棺墓）とは、年代的な開きが30年から50年近くあり、同時構築にはならない。屋敷墓がV期のST 50に伴うのであれば、木輪はVI期の屋敷ST 52に伴うことになる。その性格は断定できないが、追善供養（この場合は1代当主である木棺墓被葬者）あるいは極楽浄土を願う信仰対象物としての造立を考えることができるか。少なくとも宝珠の年代値12世紀半ばまでは、補修修繕がなされていたと考えられる。

Ⅶ期・中世（13世紀後半～14世紀頃）

社宮司遺跡は、ST 52を位置付けたVI期はもちろんだが、V期以後の遺物がほとんど解らない。出土遺物を見渡した所、11世紀後半から12世紀代の年代値を与えられそうな遺物は、六角木輪と木製代掻き具「コロバシ」だけである。いずれもSD 03上層から出土しており、至近距離にある。出土状況から考えて伴出とみてよいだろう。六角木輪は前述したように、11世紀前半代に造立され、補修・修繕が繰り返されたと考えられる。課題は、木製農具である「コロバシ」が伴出している点にある。遺跡の最終期は、北区と南区の大部分が水田等の耕作地となっていたことが、東西南北に走る細長い溝状遺構から推察できる。その時期は定かではないが、溝の方向の違いから、少なくとも2時期程度は存在したと推定できる。遺跡南端に構築された最も新しい建物跡の残骸からは、13世紀後半と考えられる「かわらけ」が出土している。したがって13世紀以前には建物は確認できず、農具である「コロバシ」のみが出土していることになる。このことから12世紀には、一面が耕作地化していた可能性が高く、11世紀前半代に建設された建物群が廃絶されて、間も無く、水田等の耕作地化が図られたものと考えられる。

遺物

出土した遺物は膨大な量に及び、それらの概略をひとつひとつ記述することはできない。出土遺物に関しては、すべての資料に関して計測属性及び観察事項を「観察表」として記し、付属DVDに掲載した。

土器は多量にあるが、7世紀終末から10世紀初頭までの時期に主体がある。煮沸具としての土師器長胴甕類は甕B類を中心とするが少量で、小形甕が一定量ある。食膳具では黒色土器を中心に、須恵器、土師器がある。黒色土器はあらゆる機種が出土しているが、盤B類と耳皿は希少である。やや大型の鉢類が少なからずある。須恵器は環類が圧倒的に多く、次いで甕類、壺類となる。高盤はやや少なく、横瓶はほとんど出土していない。珍品では燭台風の台付きの坏B類（P563第649図97）と白（P302第444図4）がある。土師器は、耳皿と高盤、そして羽釜以外は出土しており、大型の盤A類が2例ほどある。灰釉陶器は様々な機種があり、碗を主体に皿、壺、そして段皿も比較的多い。大型の平瓶2点が出土している。ただし深碗タイプの碗B類はない。光ヶ丘1号窯式のもの圧倒的に多く、ついで大原2号窯、黒笹窯の順となる。虎浜山1号窯式と古手の山茶碗の出土はまったくない。緑釉陶器は、碗を中心に稜碗があり、手付瓶1点がある。大部分が猿投産と考えられる。

金属器は、ほとんど出土していない。主なものは竪穴式建物跡から出土した刀子、土坑より出土しU字状鉄刀鋸先（P174第182図10）、検出而出土の鉄製紡錘車、そしてSD 03検出而出土の銅製帯金具（P593第669図62）のみである。

木製品は、大量に出土している。過半数は掘立柱建物跡に残った柱材及び礎板材である。ことに礎板材は柱材等の建築部材を転用しており、年代測定の支障となっている。筏穴の開いた柱材が目立ち、遠距離からの河川利用の輸送が考えられるか。生活用具では曲げ物や折敷等の容器が圧倒的に多く、次いで箸や碗、下駄などが目立つ。農具はほとんど出土していないが、鎌の柄、一本の膝柄鋸（P535第628図165）、コロバシ（P584第663図）などがある。紡織具関係はほとんどないが、経ぎ板と考えられる羽子板状の木製品が2例（P500第597図68、P557第645図33）出土している。

第4章

発掘調査のまとめ



わが心なぐさめかねつ更級や

姨捨山にゐる月を見て

古今和歌集

卷十七

第4章 発掘調査のまとめ

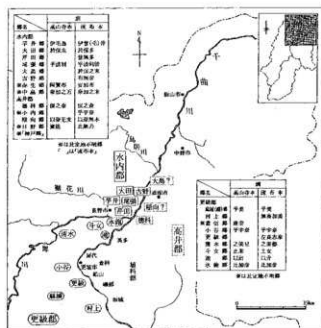
一 社宮司遺跡にみる更級郡衙関連遺跡の諸様相一

はじめに

八幡遺跡群社宮司遺跡(やわたいせきぐん しゃくぐうじせき)は、7世紀後半に本格的な遺跡形成がなされ、以後、9世紀終末まで連続・機能した遺跡である。10世紀代あるいは11世紀代にも遺跡は形成されていたと考えられるが、近世以降の耕作によって、その大半が破壊されてしまっている。断片的な資料の継ぎはぎで、想定可能な時代範囲は15世紀前後までと判断できる。これまで、第1章から見てきたように、八幡遺跡群は、佐野川と宮川に囲まれた佐野川扇状地上に点在する遺跡の総称である。総称の前提として、古代「八幡条里的遺構」(P16. 遺跡番号85)の推定範囲があり、米軍航空写真によっても、それはある程度判読可能である(P6)。しかしながら、1984年の西部冲県営ほ場整備事業による発掘調査、この度の国道18号線改築事業に伴う発掘調査によっても、条里的遺構の決定的証拠をつかむことはできなかった。坪付けに伴う大畦畔、坪地割りの痕跡も発見できていない。これは、遺跡群の遺構検出面が高く、現代までの耕作地面に近い位置関係にあることに起因すると考えられる。扇状地端部に形成された社宮司遺跡でさえ、現耕上下、30cm 足らずで遺構検出面に到達してしまい、掘り方の深い遺構でないと、消失の可能性があるのである。今回の発掘調査は、千曲川の流れる東側に、大きく開放した扇状地を、北から南に縦断するように行っている(P16 第4図)。調査の結果、遺跡登録されている外く称(85-8)、中道(85-3)の2遺跡については、遺跡外にあたる部分と判断し、大道遺跡(85-17)については、新発見の遺跡として登録できた。全長1.5km、幅員27m 道路の開発行為によって、北稲付遺跡(85-15)と大道遺跡、そして社宮司遺跡(85-16)の3遺跡の部分的破壊、記録保存業務に留まったことは、幸運であったと考えたい。もとより社宮司遺跡は、八幡字郡(こおり)の地名の存在と、ほ場整備事業に基づく1985年の発掘調査によって、古代更級郡衙(さらしなぐんが)に関連する郡内官衙遺跡として評価を与えられてきた。事実、今回の10000㎡に及ぶ発掘調査で、掘立柱建物跡を中心とする遺構群と、奈良二彩陶器や緑釉陶器を始めとする膨大な量の土器、漆紙文書に習字木簡、一本鎌やコロパン(代掻き具)等の木製品を検出し、国内初出とされる木製仏塔「六角木輪(ろっかくもくどう)」の発見にまで及んだ。その概要は第3章第12節にて取り上げたが、この遺跡の歴史的な重要性を鑑み、今後の遺跡保存と歴史的景観の保護に供すべく、社宮司遺跡を中心とする発掘調査の成果を、以下にまとめる。

第1節 更級郡とは

『延喜式』巻二十二「民部上」にみる古代信濃国は、10の部をもつ上国である。北から水内部(みのち)・高井部・埴科部(はにしな)・更級部(さらしな)・小県部(ちいさがた)・佐久部・安曇部(あ



第757図 律令期の北信濃の郡郡名(長野県史1998より抜粋)

づみ)・筑摩郡(ちくま)・諏訪郡・伊那郡がある。信濃の語源は、科野-シナノ-シナヌと辿り、シナはノ(ヌ)の修飾語であり、ゆるやかな傾斜地を意味する。シナには諸説があり、樹木(科の木)、坂(級坂しなさか)、風(風の速い所)、地形(千曲川の蛇行部分)などに由来すると考えられている。信濃国の郡名で、シナは更級郡と埴科郡のみに付き、郷名では、高井郡保科、更級郡更級と當信(たてしな)、安曇郡前科、埴科郡倉科の5箇所だけである。更級は「シナノの中心的位置にある盆地状の平地」の意味であり、埴科は「シナノの中心的位置にある赤黄色の粘土の産する所」の意味かと推定される。更級と埴科は千曲川を挟んで左岸域と右岸域に区別された地形的区分である。『倭妙類聚抄』廿巻「郷里部」によれば、更級郡に9郷、埴科郡に7郷がある。更級郡の9郷とは、北から氷鉋郷(ひがの)・池郷郷(いけさと)・斗女郷(とめ)・清水郷・當信郷・更級郷・小谷郷(おうな)・麻績郷(おみ)・村上郷である(第757図)。この内、八幡遺跡群の所在する郷は小谷郷にあたり、現在の八幡・桑原・稲荷山・塩崎周辺を含むと考えられている。

※ 以上の記載内容は、すべて1994年『更埴市誌第一巻』第二章「更級郡・埴科郡の成立」よりまとめた。

第2節 更級郡衙とは

更級郡衙は、9郷を抱える郡の、令制下における行政機関である。大宝令では、郡の職員である郡司に、国司同様の四等官(大領・小領・主政・主帳)を置くとする。郡司の定員は郡の等級に基づいて定められていた(第758表)。天平11年5月(739年)には、郡里制の廃止に基づいて、郡の官吏員数を削減している。郡司以下の下級職員を雑任と呼び、弘仁13年9月(822年)の太政官符によれば、郡書生・每郡家主・鑰取・税長正倉官舎・微税丁・調長・服長・庸長・庸米長・驅使・厨長・器作・造紙丁・採松丁・炭焼丁・採葉丁・簞丁・駅伝使補設丁・伝馬丁などがあつた。更級郡の行政規模は中部にあたり、郡司4名(739年以後3名か)、雑任100人前後が勤務したと考えられる。

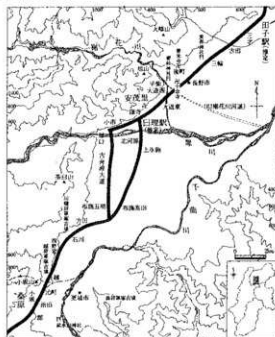
更級郡衙は、現在の八幡地区に「郡(こおり)」の地名が残り、この付近を東山道支道が通過していたと推定されることから、八幡の郡地籍付近に施設されていた可能性が高いといえる(P19第2節2)。ただし、八幡地区は推定小谷郷域であり、更級郷域にない点、若干の問題が残るか。これまで、郡集落周辺を発掘調査した経過はなく、いまだ郡家の存在は確認できていない。

※ 以上の記載内容は、1998年『長野県史 通史編 第一巻』第三章「律令政治の展開と信濃」よりまとめた。

等級	里(町)数	郡名	郷数	郡司の定員			
				大領	小領	主政	主帳
大	20-16			1	1	3+1	3+2
上	15-12			1	1	2+1	2+1
中	11-8	更級	9	1	1	1+0	1
		赤内	8				
		小坂	8				
		佐久	8				
下	7-4	伊那	5	1	1	0	1
		諏訪	7				
		筑摩	6				
		安曇	5				
		高井	5				
		埴科	7				
小	3-2			領	1	0	1

※ 等級は「郡名郷数表」の郡数(高山寺中・道長寺)による推定。
郡司の定員欄の+の付した数字は、天平11年の改訂によるもの。

第758図 信濃国の郡等級と郡司定員(長野県史1998より抜粋)



第759図 東山道支道推定路と更級郡(長野県史1998より抜粋)

第3節 社宮司遺跡とは

八幡遺跡群社宮司遺跡は、更級郡内に建設された郡内官衙遺跡である。この遺跡の重要性は、地方行政機構の一端を担い、律令制の衰退とともに変容し、官人の活躍から富豪層の台頭へと歩み、やがて荘園制の中に包括されていくという、まさに古代信濃の幕開けから中世社会への転換まで、地域社会の中核として継続し続けた点にある。その流れは以下のように、まとめられる。

7世紀後半の「評」制期に建物の構築が開始され、小規模ながら掘立柱建物跡を中心とする遺跡が形成される。8世紀前半には正方位に則った計画的な建物造営が進み、その後半期には構造的に最も充実した官衙的機能が形成される。方半町四方の区画構造を持つ公的実務空間の設置で、手工業生産に関わる竪穴式建物跡1棟と9棟以上の掘立柱建物跡で構成される。それら実務空間に併設して、溝による区画構造を持たない、いわば私的な生活空間、官人層の居宅とも捉えられる建物の設置がある。2間×6間の大型掘立柱建物跡1棟と2棟の掘立柱建物跡、小規模な竪穴式建物跡1棟で構成される。9世紀前半は、その奈良時代の規則的・官衙的な建物配置が一掃されて、少数ながらも整然とした掘立柱建物の設営が進められる。官衙実務機能の低下、転換をそこに読み取るべきか。私的空間内も構造が一変し、南北両端に竪穴式建物1軒ずつを配置、その中央部には2間×3間の総柱式掘立柱建物を構築する。そこに地域社会を担ってきた氏族の土俗的生活様式の復興をみて、律令制の衰退と新たな時代の幕開け、信濃の平安時代を考えたい。9世紀後半は、方半町の区画が消失し、かつての公的実務空間には3～4棟の掘立柱建物跡が散在して構築される。翻って私的空間の充実を強調でき、L字形に掘削された溝と地形切り出しによる方形区画(1/4町四方)内に、竪穴式建物3軒を整然と配置、東側には1間×2間の掘立柱建物3棟を置く。この段階に至っては、令制の懐にありながらも、新たな地域社会の秩序が確実に形成されてきたとみられ、そこに有力農民・いわゆる「富豪層」の台頭を読み取りたい。この動きは、9世紀の終末から10世紀前半にかけて、さらに強固なものとなり、一辺7mの壁立ちの大型竪穴式建物1軒を中心に、3軒の竪穴式建物を規則的に配置してくる。私的空間は、富豪層の宅地・屋敷地として完成したものか。この時期、掘立柱建物はすべて消失し、宅地周辺は水田等、圃地化されたものと推定できる。屋敷地内には、猿投産緑釉手付き瓶を用い、密教的思想に基づいた極めて厳格な地鎮の遺構が築かれる。水害または早魃等に対する郡衙レベルあるいは国衙レベルに近い祈祷祭祀が行われたものと推定できるか。10世紀後半は、竪穴式建物は消失し、変わって総柱高床式建物2棟に、井戸あるいは井泉状施設を伴う中世的な屋敷地が形成される。屋敷地北端には木棺墓が築かれ、その被葬者を初代当主と評価し、墓の年代値1000年以前を築造年としたい。木棺墓の被葬者は、北枕・西向き、涅槃浄土の埋葬姿勢をとり、武器である太刀大小、弓1振りをも製形代に変えて副葬していた。軍事的側面を備えた有力者の姿があり、極楽浄土の来世観を具現化した姿には、非在地的なという表現が適切か否かは解らないが、少なくとも新しい政治体制に移行した後の価値観を彷彿とさせるものがあり、古代社会の終焉さえ感じる。在地の「富豪層」から「開発領主」へ、「郡司子弟」から受領子弟等の「郎従の徒」へと転換したと仮定するならば、あまりにも教科書的評価であろうか。ここに遺跡の不連続面、一大転換期を設けたいが、屋敷がかつての私的空間内に連続して設営されていることを考えると、何らかの継承性・関連性を認めなくてはならない。屋敷地は11世紀前半には、90mに近い建物に改築され、倉や井戸、井泉状施設(池か)も作り変えられている。第二世代の富力に、「六角木輪」をすり合わせて、祖先供養あるいは極楽浄土祈願の仏塔と位置付けを説けば、最も説明が容易いのだが。しかし木輪の造立年は、笠・輪身部分の年代値から11世紀以降が濃厚だ。修理・補修を経て、12世紀前半まで建立されていたと考えられるが、該当する時期の遺構は見あたらない。1158年の『石清水家文書』から察するに、ここ小谷郷域は、それ以前に石清水八幡宮に寄進され荘園化していたことに

なる。寄進に在地「富豪層」または在地化した「開発領主」が関わったであろうことは十分予想でき、木棺墓被葬者の血縁である可能性が高いと考えたい。おそらくは11世紀後半から12世紀前半に、領域が寄進されたために、新たに「荘所」として屋敷が移転し、木輪のみが残ったか。木輪は浄土思想に基づく信仰対象物であり、補修され、修理されて、長らく田地に立っていたものか。時期を経て、最終的に建物構築されたのは、13世紀～14世紀頃と考えられる。かつての屋敷地の南側に、高床式建物跡と礎石立建物跡の残骸があり、それ以北はすべて、水田等の耕作地に開墾されたようだ。この時期の開墾によって、六角木輪は解体され、湿地化した、かつてのSD 03内に廃棄されたと考えたい。

※ 「社官司(しゃぐわじ)」とは、鎌倉時代以降の神事記録にみる御左口神(みしゃぐものかみ)に由来する。御左口は「みしゃぐじ」と呼び慣わし、赤蛇のことを指す。蛇神信仰は、諏訪大社の蛙狩神事や御室神事として残り、須波神と関連する。『長野県史 通史編』1998より。

第4節 社官司遺跡にみる郡内官衙の変遷とその背景

社官司遺跡の遺構変遷を辿りながら、その歴史的背景について考えてみる。国史に関しては、本章末尾に示した概説書を参考にまとめている。本来なら地域史的視点に立って、論述すべきであるが、資料検討が追いつかず、歴史要領としてのみ提示した。

1. 律令国家への歩みと評制の成立

a. 7世紀後半の八幡遺跡群

ア. 「評」制の成立以前

佐野川扇状地内に遺跡が形成されるのは、古墳時代後期頃と考えられる(P18第2章第2節)。発掘調査によって、その全貌を予測できたのは、今回発見した大道遺跡が唯一である。竪穴式住居跡2軒から3軒が、集落の構成単位であり、これに2棟程度の掘立柱建物跡が付随する。7世紀代の集落遺跡であり、住居の切り合い関係から、少なくとも二つの時期がある。扇状地のほぼ中央よりに集落が設営されていることから、八幡遺跡群の中核を担う集落であり、八幡古墳群の築造を考慮すれば、大道遺跡の規模は、さらに拡大するものと考えられる。また遺跡西方には「郡」地籍があり、次期の動向を踏まえると、そこには豪族居館あるいは、それに匹敵する集落遺跡が埋没している可能性は高い。八幡古墳群の全貌は不明だが、糠塚古墳ほか7基が、大道遺跡を始めとする八幡遺跡群内の集落と対応してくる墓所と考えたい。

この他、八幡遺跡群ではないが、佐野川左岸の桑原遺跡群に古墳時代の集落遺跡、湯屋遺跡があり、47軒の竪穴式住居跡が確認されている。古墳時代前期から継続する遺跡であり、北側近傍に位置する一本松古墳群が、その墓所となるか。一本松古墳は、径11mの盛土を持つ円墳で、横穴式石室構造である。『桑原村誌』によれば、金環1、土製勾玉1、直刀1、八稜鏡2(追葬か)が出土したとある。古墳築造は7世紀後半代と考えられ、大道遺跡の成立期に近い。湯の崎古墳は一本松古墳の外延部、標高385m前後に立地する円墳群で、一本松古墳群に属する。1号は出土須恵器の型式(TK208からTK23)から5世紀後半代、2号墳は有段口縁の壺形土器と小型丸底土器の特徴から5世紀前半の築造となり、ともに古墳時代中期と考えられる。3号墳は直径10m規模で、主体部は横穴式石室、玄室内より須恵器横楕円と直刀、馬具、片刃箭鏃、柳葉鏃、三角鏃の副葬があり、6世紀末から7世紀前半の築造と考えられる。古墳周辺部分には古墳時代前期から中期の竪穴式住居跡2軒と該期相当の土坑5基の検出がある。1号と3号土坑からは複数のガラス玉が出土したが、発掘所見は古墳ではないと判断された。それらと、竪穴式住居跡2軒との関係は定かではないが、墓跡的空間として選地された遺跡と考えられる。

社官司遺跡は、645年大化の改新から庚午年籍の作成された670年頃に造営が開始されたと考えられる。

竪穴式建物2棟と掘立柱建物3棟を、ほぼ北位に軸をとり配置する。建物の間尺が一定しておらず、同時期の存在が否かに疑問もあるが、前述したように年代測定結果から判断して、該期に含めて考えた。地域支配拠点に関わるような施設群の可能性を考えるには、やや不十分な内容であるが、自然地形に逆らって、一定の建築方位を志向している点、古代1期でも後半の年代的位相（681年飛鳥御浄原律令の制定に近い時期を予想したい）から、律令社会の開幕期に、地方行政に参画していく施設の誕生と評価しておきたい。

1998年 更埴市教育委員会『長野県更埴市 桑原遺跡群 湯屋遺跡』

1998年 更埴市教育委員会『長野県更埴市 湯の崎遺跡・一本松古墳』

イ、「評」制に関して

「評」の成立が議論される7世紀後半は、社宮司遺跡1期1小期と呼称した時期に相当する。該期の建物群は、大化の改新（645年）から庚午年籍の作成された670年頃までに設置されたと考えた。佐野川の扇状地を利用した溝施設と重複するかたちで、少数の掘立柱建物と竪穴式建物が設置される。竪穴式建物の規模と形状（掘り方等）に比して、掘立柱建物2棟の形状は立派である。7世紀前半代に位置付けられる八幡遺跡群大道遺跡と比較しても、竪穴式建物は居住施設として貧相の感がある。このことは、掘立柱建物跡が正方位志向にあることに意義をみつけ、炭素年代測定の誤差（木どりと採取位置、測定誤差40年）を捉えて、時期推定に疑義を持つ必要もあろうが、遺構総体としては、該期もしくは次期の中で、理解すべき遺構と捉えておきたい。

「評」は朝鮮諸国の制度を参考にした統治体系で、軍事的性格が強く、氏族制とは別に用意された行政区画である。「評」の成立は、常陸国風土記（649年）にみる海上国造と那珂国造のクニの一部から、新たに「香島評」を作り、評造を任命した記載を拠る所に、7世紀中頃の天智朝成立説が示されている。実際には、「評制成立期の定点は得られず、山中敏史氏によれば、孝徳朝立評説（7世紀中葉）と孝徳朝一部立評説（1天智朝期説、2天武朝期説、3飛鳥御浄原令施行期説）があるとされる。ここで、「評制」成立の時期を7世紀末とする山中説（註1）に立つと、社宮司遺跡1期1小期から2小期にかけての成立が予想できることになる。正方位志向の掘立柱建物跡を2小期（第760図）に掛かる時期として組成させると、8世紀前半と明確に一線を分かつことはできないまでも、地方官衙成立に関わる建物配置を、ある程度、看取することはできないだろうか。それは佐野川扇状地への遺跡進出が、該期に本格的に始動することと合わせ、次期、地方官衙（郡衙）成立の出発点とは別に、ひとつのステージを設ける余地を示しているのかも知れない。

註1）山中敏史氏は、701年の大宝令制定以前（7世紀末）を評制下の評衙（初期評衙と評衙に区分）とし、それ以後を郡衙と認定する。郡衙遺跡における官衙施設の初現時期を、「7世紀第IV四半期から8世紀第I四半期の間に含まれるものが大部分」（P330）と明言し、「評衙は、～首長の居宅をそのまま転用・拡充して創設されたものではなく、それとは別に新設されている。という傾向が認められる。この私宅と官衙との分離は、評制下の人民支配が旧来の族制的支配とは異なる官衙制の支配へと実質的に転換されたことを意味するものであろう」（P340）と説く。

1994年 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房

b. 7世紀後半の国史概略

643年、蘇我入鹿が聖徳太子の子である山背大兄王とその一族を滅ぼす。蘇我氏は百済系渡来人、東漢氏の一族である。当時の東アジアは、唐帝国の強大な軍勢力を前に、百済・新羅・高句麗の朝鮮3国が冊封を受け、半島では百済と新羅の隣国戦争、高句麗内でのクーデター等、内乱の時代となっていた。その渦中に倭国でも「クーデター」が勃発したのである。間もなく、645年中大兄皇子と中臣鎌足による蘇我入鹿の暗殺が行われ、新政権が樹立される。世に言う乙巳の変（大化の改新）である。当時、倭国は氏族制度を根幹とし、ムラ社会でクニがまとまっていた。八幡古墳群や桑原古墳群の被葬者たちも、そうした血縁の紐帯による世襲性により、地域社会を掌握していたと考えられる。この支配の構造を断ち切り、氏

族制を利用しながらも、地域社会全体を中央に集権させることが、新しい国家形成の目標であった。新政権は地方の豪族を「部の民」に編入し、人口と田地の調査、官職（国造・伴造ほか）の実情、武器の徴収、「男女の法（夫系制度）」を徹底した。646年には「部」制度の改革、647年に「礼法」の定め、冠位十三回の制を定めている。新しい官職制度の浸透に際し、朝廷は「田之調」「調の副物」「庸の米」を、部を統括する地方豪族に与え、さらには、ウジ名によって結束してきた地域社会を包括し重ねていくための方策として、仏教を積極的に導入していったのである。残念ながら、この過程を示す遺跡調査は、八幡遺跡群にはまだない。660年には百済が滅亡し、663年白村江の戦い、668年には高句麗が滅亡する。668年大津宮へ遷都、中大兄皇子は即位し天智天皇となる。中臣鎌足は、朝鮮諸国を手本に近江令の制定を促した。670年には戸籍の登録、庚午年籍が作成される。氏族は「氏上」（664年定め）に基づき、「ウジ」と「カバネ」を与えられ、庶民は「部」に編成された。

672年壬申の乱。673年大海人皇子は、飛鳥浄御原宮で即位、天武天皇となる。天武朝の治世、氏族制を根幹とした国造の支配領域・クニを、中央からは「国宰・国司（クニノミコトモチ）」を派遣して、律令的な国領域として再編成していった。天皇中心の集権国家が形成され始め、「評」そして「国」を設置したのである。氏族制度の解体は、673年官僚制の施行を経て、国造が、やがて郡司として任用され、氏族を地域の郡司貴族に編成し統治する方法で進められた。部曲を廃止し、官人には食封を支給した。食封とは「封戸に指定された戸が貢納する租庸調を封戸の与えられた者に支給する制度」（P121, 吉田）であり、やがて国司を通して収納した封戸物を、中央から封戸主に再支給するようになっていった。

また、七道の制をして国々を編成していったが、シナノ（註2）は東山道の一国である。684年八色の姓（真人・朝臣・すくね・忌寸・道師・臣・連・稲城）を制定し、上級官人を出すことのできるウジを指定した。天武朝は仏教を奨励し、685年には家ごとに仏舎を造り、仏像と経を礼拝する戸を命じている。天武天皇は686年に没し、690年持統天皇が即位する。688年、唐にならった法典、飛鳥浄御原令が制定された。690年には庚寅年籍が完成し、六年一造の制、国一評一里一戸の制が確立した。694年藤原京遷都（694年から710年）、本格的な宮都の造営が始まる。宮に天皇が在し、官人には土地を班給（五位以上がおよそ一町以上）して集住させたのである。この頃が丁度、社宮司遺跡2小期の開始期にあたる。註2）シナノの語源については、本章第1節（P714）に記す。

2. 律令国家と郡制の施行

a. 8世紀の八幡遺跡群

ア. 郡制の施行と展開期

社宮司遺跡1期2小期は、古代2期相当であり、屋代遺跡群SD 7035の16層出土の紀年銘木簡が、696年「戊戌年」であることから、開始期はそれよりは古いと判断されている（註3）。概ね、2期は686年持統天皇の治世ころからと捉えておきたい。690年には庚寅年籍が完成し、六年一造の戸籍の作成、国一評一里一戸の制が確立する。715年には国一郡一郷一里の制が確立、戸をさらに房戸に分割し、律令制の細分統治が図られた。屋代遺跡群15号木簡「符 更科郡司等 可□□□」は、8世紀前半に、更級郡司宛の国府が、埴科郡司までの敷部を一ブロックとして運送されていた証拠となる資料で、この国符では「更級」を「更科」と表記している。しかしながら該期の遺跡は、八幡遺跡群内では、現在のところ社宮司遺跡以外には調査確認できていない。桑原遺跡群湯屋遺跡には、該期と考えられる2間×2間、3間×5間の掘立柱建物跡ほか5棟の建物跡が検出され、竪穴式建物を含まない点から、官衙的な遺跡と考えられている。全貌は解らないが、郡集落の佐野川を隔てた対岸、小谷郷域であり、更級郡衙関連遺跡のひとつとして評価できるか。



第760図 社宮司1期1小期・2小期の遺構全体(7世紀後半～8世紀前半)

社宮司遺跡が、郡内官衙として更級郡衙との関係が濃厚となるのは、7世紀終末から8世紀前半、社宮司1期2小期からである。690年の庚寅年籍完成から701年の大宝律令の制定、710年平城京遷都を経て、740年頃の郡郷制施行期までが該当する。遺跡北端には東西方向の溝(SD 01とSD 11)が掘削され、南側には、それらと平行する東西溝SD 84が掘られる。直線距離にしておよそ50mの東西に伸びる区画帯(北区)が作られ、SD 84以南の空間(南区)と大きく分けられる。さらに、北区の区画帯の中は、北側より東西方向の溝(SD 25)を掘削することで、幅16mの細長い帯状の区割りが実現する。このSD 25に直結するようにSD 53が南北に掘られ、中央部分に、東西を二分する正方位の空間が作出される(第760図)。北区中央部には、規模のやや大きな竪穴式建物跡SB 17が1軒のみ構築され、近くに掘り方の立派な正方位志向の掘立柱建物1棟が建設される。SB 17は次期にSB 14として建て替えられるが、SB 14の状況を根拠に、SB 17にも排水施設があり、SD 53に直接排水していたと看られる。排水施設を常備するような特殊な竪穴式建物、手工業生産に関わるような施設を考えたい。SD 53を境に西側には2間×3間の南北棟ST 30が建てられ、ここに1小期に位置付けた掘立柱建物跡を加えることができれば、中央部西側の区画内に、東西そして南北に連なる規則的配置の建物群を推定することも可能となる。北側の区画帯には、1間×2間の小規模建物が設置され、竪穴式建物は作られない。小形の側柱建物、すなわち屋あるいは倉の設置空間となるのか。建物は南北棟と考えられ、中央部に建てられたST 25と軸線を揃える。ST 37と対峙するように東側には5号建物跡が配置されるか。時期の比定は難しいが、2号建物跡、さらにはST 46も該期に含まれるとすれば、SD 01に沿って東西方向に4棟が配置される屋群と観ることができる。ただしST 46はST 47と入れ子状に重複しており、切り合い関係は判然とせず、特殊な建物の可能性もある。これと対峙するかのごとく、中央部の南側、SD 84沿いにも、ST 48とST 49があり、類似した重複関係を示している。一方、南区は、南端に2間×(6間)・3室構造の長大な倉の建物ST 12が建設され、これと直行する方向にST 33とST 08の南北棟が建てられる。いずれも軸方向を西に3度程度振っており、北区空間の建物群とは、明らかに差異がある。このことは、正方位区画をとり規則的な建物配置を行う北区空間が、屋または倉等の収蔵施設と、特殊な手工業生産の場を備えた公的な空間であるのに対し、大きな倉と屋からなる南区が、私的な生活空間と推定できる性格差であるように感じられる。北区を公的実務空間、南区を私的空間と呼んで遺跡を評価しておきたいと考える(注4)。その背景には、律令制開幕期の地域支配拠点、「評衙」に関わるような官衙施設群の設置を、積極的に示唆しておきたい。

8世紀中頃から後半、奈良時代後半期は、740年郡郷制の施行から743年聖德太子永年私財法の制定、757年養老律令、784年長岡京遷都頃までに該当する。社宮司遺跡1期3小期である。遺跡北端に掘削された東西溝SD 01と中央部の南北溝SD 53は存続する。南側に掘られた東西溝SD 84は、幅150cm、深さ100cm程度の大溝SD 03として再掘削される。区画上の大きな変化は、SD 25の機能消失とともに、北側の区画帯がなくなり、SD 01とSD 03を連結させる南北溝SD 03南北流路の掘削によって、中央部が明確に東西区分されたことである。SD 53機能は幅を狭めて継承されるが、大きな50m四方の正方位区画帯内(方半町程度)に包括されるものと看られる。8世紀前半の2小期建物群が、ほぼそのまま継承される点に特徴があり、特記すべきは、いずれの建物も東側に1mないしは2mずらして再構築されていることである(第760図と第761図比較参照)。移設の状況は、公的実務空間の北区、私的空間の南区に例外なく、再配置がなされたようである。ただし中央部の特殊竪穴式建物跡のみはSB 14として北にずれて再構築される。SB 14周溝部に施設された木製樋と集水樹、排水管の施設完備は単なる竪穴内排水施設とは考え難い。想定は難しいが、常時排水を伴う特殊な手工業生産、あるいは集水樹出土の琴柱形木製品をヒントに祭祀的要素を考えてみる必要もあるか。類例を待ちたい。東西大溝SD 01からは、「緘」の字の習書木簡、奈良二彩の小壺、奈良三彩小壺の蓋など官衙的要素の強い遺物の出土がある。墨書文字に

は、「守部」・「坂主」、「邨」、「酒」などがあり、特殊なものでは「穴」の出土例が目につく。国郡里の地方行政制度の確立が具体的に進む中、掘立柱建物群の建て替えと、竪穴式建物の改装が、一時に計画的に進められた結果であり、「評価」関連施設から郡衙関連施設への転換、郡制施行への大きな転換・画期を、そこに読み取りたい。

註3) 2000年 鳥羽英維「善光寺平南縁の古墳時代前期～古代の土器編年」『更埴里遺跡・屋代遺跡群—総論編—』

註4) 国際日本文化研究センター教授 宇野隆夫氏のご指導に基づき呼称した。

イ. 律令制に関して

律令制は、中国唐の制度を手本として制度化されたもので、律令格式の法体系に基づき運営される政治体制である。官制、身分制、土地制、財制、政治制、司法制等の確立がそこにある。律令制度下の国家の特徴は、概ね以下のように整理できる。

- ① 国・郡（里）という領域によって住民を区分し、地域支配を遂行する。
- ② 天皇を頂点とした二官八省の中央行政機構と国衙・郡衙に代表される地方行政機構による中央集権的支配である。
- ③ 行政機構を構成し、官司制・官僚制を施行する。
- ④ 戸籍・計帳による人民の掌握と支配。
- ⑤ 良賤制あるいは公民制という身分制による支配と、国家的土地所有（公地公民制）。

律令制下、国は四等級（大・上・中・下国）に分かれていたが、信濃国は東山道の一国にて上国、方六町程度の規模を有し、守・介・掾・目の四等官と史生3人の7人で構成されたと考えられる。美濃掾使美濃守笠朝臣麻呂の管下に置かれたとされる。

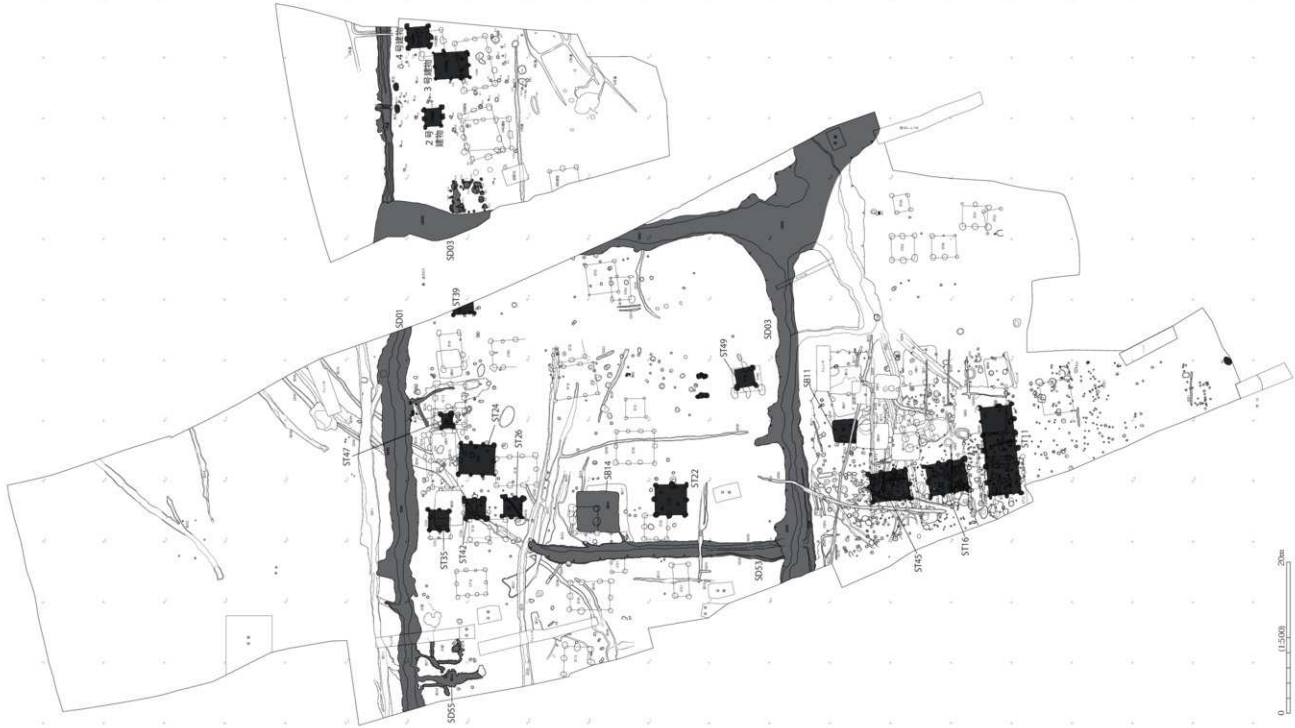
土地には、宅地や圃地（高地）、水田があり、田は輪租田と不輪租田、輪地子田などに分かれる。口分田は、良民の男子6歳に二反、女子はその2/3の一反120歩、家人奴婢は1/3の240歩～160歩を与えられ、死を持って変換し、6年ごとに再分配する仕組みである。一方、位田や職田、公廩田等是不輪租田であったため、用益件の永久化がおこり、私有地化する問題点を含むとされる。人口増加に伴う班田の不足は、三世一身の法並びに墾田永年私財法などによって、開墾田として増やしていくことで解消する方向が操作された。

租税は、一反に付き二束二把（註5）、収穫の3/100を納め、大部分を国の管理とした。この他に庸調雑徭が課せられた。庸は人頭税で、青年男子、正丁（21歳から60歳）で10日/1年間の京の使役があったが、代わりに布二丈六尺の物納でも可能であった。調は地方の特産物を献上する。雑徭は国司が1年間に60日以内正丁を使役できる。

ウ. 郡衙について

信濃国は10郡（伊那郡、水内郡、諏訪郡、高井郡、筑摩郡、更級郡、埴科郡、安曇郡、小県郡、佐久郡）からなり、八幡遺跡群は、その内の更級郡内にある。更級郡は、9郷（麻績・村上・常信・小谷・更級・清水・斗女・池郷・氷鹿）を数える。この内、小谷郷（乎宇奈）が今日の八幡・桑原・稲荷山・長谷一帯を指すと考えられている。一郷は50戸、1戸が40人程度と仮定して、一郷平均2000人で構成される計算である。更級郡は信濃国でも人口の多い郡に相当する。750年頃には信濃国分寺が小県郡内に創建されたと考えられ、信濃国府は小県郡内の2箇所が推定地とされるが、明確な証拠は確認できていない。『倭妙類聚抄』に「信濃国国府在筑摩郡」とあることから、信濃国府は、ある時期に移転したと考えられ、731年以後879年までの間、731年に近い頃と推定されている。721年には諏訪郡が一時独立するが、731年再併合となる。

郡衙の所在地を「郡家ぐうけ」（日本書紀、続日本紀、倭名抄）と呼ぶ。初期の郡家は、地方豪族の住宅を直接的な祖形としたとする考えと、各部独自で創出されたとする考え方があり。社宮司遺跡の場合には、郡庁を始めとする郡家の中心部を調査できていないので、はっきりとは解らない。郡家は、政務・儀



第761図 社宮司 I 期 3 小期の遺構全体 (8 世紀中頃～後半)

式・饗宴等の機能をもつ郡内統治の行政的拠点である。政務とは、郡司告朔上申報告、徴税文書・木簡の作成・文書通送・税物の検校などがあつたと考えられる。郡家には郡院・倉庫院・厨院（『令集解』儀制令）、あるいは正倉・郡庁・館・厨（上野国交替実録帳 1030 年頃）が配置される。郡庁の規模は、およそ半町と考えられている。

厨家とは、納屋・備屋・酒屋などを指し、米・酒・塩・酢・醤などの食料品や食器類の収納を目的とした施設である。側柱建物に収納されるのが普通で、館付属施設を厨、郡衙施設を厨家と呼称する。

正倉には、穀倉・頒倉・頒屋・義倉・備倉がある。穀倉は稲穂から脱穀した粃粒や田租の穀穂を貯蔵する倉、頒倉は頒稲・稲穂を束ねたもの、出挙雑用の頒稲を保管する倉・屋、義倉とは貧窮民の救済を建前として徴収した粟等を取納した倉、備倉は米を蒸して乾燥させた備が非常用として取められた倉とされる。

郡内の政治的構造は、一元的なものではなく、複数の郡司層が交代で郡領職についていたと考えられる。また郡家以外にも郡内官衙遺跡のあつたことが予想でき、「郷家」や郡衙の出先機関としての「郷倉」なども、その一例として示唆されている。長屋王家出土の木簡から、邸宅内には多くの技術者（鋳物師、鍛冶、轆轤師、工、琴作り工、靴縫い、木履作りなど）がいたことが知られるが、郡内官衙遺跡の中にも、郡家付属の技術者集団の存在が濃厚である。

註5) 令の規定では田租は頒納が原則で、一段につき二束二把。8世紀初頭まで続くが、地域によっては8世紀後半・9世紀まで続くと思われる。一束＝一斗の換算か。734年郡稲は正税に吸収される。

註6) 山中敏史氏の定義では、総柱建物を「倉」と呼び、側柱建物を「屋」と呼ぶ。「倉」は稲や粟などの米穀類を納めるもので、「庫」は兵器や文書・調書の布や雑物器物を納めるものとする。

b. 8世紀の国史概略

天武天皇は686年に没し、690年に持統天皇が即位する。690年庚寅年籍が完成し、六年一造、国一評（郡）一里一戸の制が確立する。戸籍に基づく編戸は、青年男子3から5丁、平均で4丁含むように構成し、一戸（官人支給の封戸と同意か）から兵士一人を出す制度であった。694年藤原京遷都（694年から710年）。中央で本格的な宮都の造営が始まり、宮に天皇が在し、その周辺の官人に土地を班給して住まわせる体制となる。715年には国一郡一郷一里の制が確立、701年の大宝律令では50戸一里と定めた。この頃に天皇の称号と日本（702年頃か）を名乗るか。701年には途絶えていた遣唐使を再び派遣する。四隻で大天使以下、500人から600人程度が唐に渡ったという。その頃、東アジア諸国では、698年に渤海が成立、渤海は727年日本と国交を結び、遣唐使が送られている。朝鮮半島では、唐を半島から退けた新羅の勢力が強大化したが、遣新羅使は何度も送り続けられていた。710年平城京に遷都され、712年『古事記』、720年『日本書紀』が成立、本格的な国史が編纂された。718年藤原不比等による養老律令の編纂開始、以後、藤原仲麻呂（恵美押勝）によって施行された。724年聖武天皇が即位する。平城京は、朱雀大路を挟み、右京と左京、外京からなる京城を持ち、羅生門と朱雀門が対峙する。都城整備と条坊制の都市計画は、藤原京から開始され、平城京にも引き継がれた。条里制は中国の井田制を手本とし、一里（300歩＝高麗尺1800尺）を六分割し、36等分を1町とした。八幡条里の遺構の検出はないが、社司官遺跡の南北大溝によって区画された方半町の土地区画は、この時期の条里制施行と強く結び付いていると考えたい。律令制の班田收受は、公民に口分田を与え、課役を課すことで成り立っていたが、口分田の不足等は、722年百万町歩の開墾計画、723年三世一身の法を経て、740年墾田永年私財法に至った。永年法では、国司に開墾地の占定許可権を掌握することを認めたため、貴族や寺社が畿外へ進出する契機をつくったらしい。一方で、本質を離れる浮浪人に対して、墾田と出挙の制による統制を広げて、736年には浮浪人帳も作成されている。733年の大飢饉、734年大地震勃発、735年天然痘の流行などの時代相を経て、740年聖武天皇は恭仁京へ遷都、741年には国分寺・国分尼寺造営の詔が出された。この頃、天平の經典書写事業

が開始され、平城京内では行基による布教活動が活発化した。孝謙そして淳仁天皇の治世、紫微令から大師（太政大臣）へと躍進した藤原仲麻呂は、私鑄と私出禁禁止の中、鑄銭と挙稲を許可され、錢貨の改鋳を進めた。新貨の普及は、やがて物価の高騰を招くこととなった。この頃、良弁の弟子、道教の活躍がある。

奈良時代史は、天皇家の皇位継承と官人の勢力争い（藤原四家を中心とする）が激化した時代である。724年聖武天皇が即位。729年長屋王の変、740年藤原広嗣の乱、764年藤原仲麻呂の乱、769年宇佐八幡宮神託事件が勃発した。おりしも中国唐では、安祿山（755年）の変により、玄宗皇帝が長安を追われ、国力が衰退し始める時期にあっている。朝鮮半島では、新羅が分裂・内紛状態となり、日本への移民が続出した。770年光仁天皇が即位。781年山部親王即位し、桓武天皇となる。桓武天皇の治世は、蝦夷征討と造作に代表される。780年伊治公若麻呂の反乱により、陸奥国府・多賀城が焼失する。789年には蝦夷の大征討が行われ、790年には、駿河・東山道・東海道の諸国に、革甲二千領を作るように命じている。坂上田村麻呂を征夷大將軍とする征討により、802年阿弼流為が降伏、三十八年戦争に決着をみる。蝦夷との戦争で、騎馬兵力の戦闘能力の高さが具現化され、歩兵主力の軍団が廃止される。792年「郡司子弟」を登用する健児設置令が出され体制化される。784年「甲子革命」の年、桓武天皇は長岡京に遷都。785年藤原種継の暗殺、794年に平安京へ遷都する。造営は805年の「徳政相論」により中止・終了された。

3. 律令国家の衰退と郡制の変質

a. 9世紀の八幡遺跡群

ア. 郡制の変質期

789年蝦夷の大征討と東国への移住政策の推進、794年の平安遷都と、平安時代の幕開けを迎える。790年頃には信濃国府が移転し、この時期、社宮遺跡の構造は改変される。八幡遺跡群内では、8世紀の後半以後9世紀段階までの遺跡として、北稲付遺跡がある。佐野川扇状地の中央部北端に位置し、南端の社宮遺跡と対峙して扇状地の両翼を担う位置関係にある。社宮司からは北方へ約1000m隔てる。小竪穴状遺構と東西方向に伸びる埋没流路を調査し、「春」の墨書土器に「□三縄」の付札状木簡、銅製の帯金具、曲げ物や下駄などを検出している。更級郡衛に関わる郡内官衛遺跡と考えられ、竪穴状遺構の性格は判然としませんが、官衛に付属した手工業生産施設等の可能性を示唆できるか。部分的な調査であり、全体はまだ解らない。社宮遺跡では、9世紀前半の古代5期から7期を、社宮司Ⅱ期と呼称した。正方位志向は残るが、列状に建物を配置する規則性は崩れてしまう。建物規模も不統一となり、1間×1間の小建物が新たに増設される。新出の建物がいかなる機能を備えたものか推定は難しいが、公的実務空間内に建設されており、仮設的な建物であることを考慮すると、手工業生産等に関わる作業場か何かであろうか。

該期に出土のある漆付着土器から、漆等の手工業生産をそこに求めることも一考である。このように公的実務空間の機能的転換が図られたことは、そこに何らかの政治的影響力があることと理解できる。一方の私的空間部では、長大な掘立柱建物や側柱建物が消失し、2間×3間の総柱式掘立柱建物（倉）が1棟築造される。周囲には竪穴式建物が配置され、東国の古代そのものといった景観が現われる。ここに、在地氏族層の自由闊達な施設造営、土俗的生活様式の復興を想像し、律令からの脱皮を覗きたいが、いかなものだろうか。792年の健児設置例に基づく「郡司子弟」らの活路は、蝦夷征討三十八年戦争を経て、「弓馬の士」などと呼ばれる軍事勢力さえ一部に生み出し、開けさえすれば、閉ざされることはなかったと考えたい。律令制の実質的衰退の進む中、そうした「郡司子弟」らを含む「力田の輩」などと呼ばれた「富豪層」の登場が、除し難い小権力となって地域社会をまとめあげていったことと考えられる。

SD 03より出土した「十月十一日正税廿束」の出挙帳反古紙は、社宮司遺跡が郡衛と直接関わっていた証左であるとともに、そこに記された額稲での返納は、少なくとも律令税制に基づいた正税出挙である。



第763図 社宮司社宮司川期・IV期の遺構全体(9世紀後半～10世紀前半)

旧暦10月は、今日の11月にあたる。11月初旬には妖捨にも雪が来る。返納期としては最も遅い時期である。寒い時に税を返納した班田農民の心境は、いかばかりのものであったろうか。妖捨山の雪を見て、戸籍を離脱し、浮浪・逃亡を思い立ったのだろうか。思えば、『続日本紀』神護景雲二年(769年)の「信濃国更級郡の人建部大垣、人となり恭順にして、親に事へて孝有り、・・其の田租を免じて身を終えしむ」は、親孝行から租を免除された人物の記録である。8世紀代の郡衙行政最盛期には、そんな粋な計らいもあった。これに対して、8世紀後半に読まれたとされる『古今和歌集』巻17の「わが心なくさめかむつ更級や妖捨山にてる月を見て」は、かの有名な「妖捨伝説」に関わるとされる歌である。伝説の成立を9世紀前半とすれば、なんとも悲しい結末となってしまうか。

9世紀後半の社宮司遺跡は、Ⅲ期と呼称する。849年には、かの加賀郡勝寺札が立てられ、農民の退廃が進んだことを推測できる。遺跡を南北に分ける東西大溝SD 03は改築されて、南側の私的空間を取り巻くようにL字形に掘削される。私的空間はさらに整備されて一辺25mの正方形の区画を生み出す。竪穴式建物3軒を計画的に配置し、「屋敷」化が図られる。屋敷地内からは掘立柱建物が消えて、近接した東側の空間地に1間×2間の掘立柱建物3棟が建てられる。公的空間内の施設は、ほとんどが消失してしまう。9世紀、集権国家の政治的退廃は律令支配そのものを瓦解させ、国衙への権限委譲が、班田農民はもちろん、郡司層への締め付けを強化する結果となった。少なくとも、遺跡に視る公的実務空間の放棄、私的空間の拡充・整備は、律令支配からの完全なる脱皮と、新しい価値観の萌芽を表現しているようにみえる。大溝SD 03に打ち捨てられた大量の灰釉陶器類や、少ない緑釉陶器の出土を見れば、遺跡としての終息感も感じられない。灰釉陶器類には「八千」の墨書文字が目立つ。我田引水して、郡司や「郡司子弟」の活路としての「富豪層」の成長を見るならば、この新しい価値観の形成こそが、列島全体を揺るがす地域社会のエネルギーとして胎動し始めたように思われる。宇野隆夫氏の説く、在地有力層主導型の古代前期荘園の確立期でもあり、荘園制成立の課題も念頭に置くべきか。866年更級郡の武水別神社は諏訪大社と同じ、従二位に叙せられている。彼格の叙数の背景に何を読むべきか。871年を前後し、京の都で大洪水、地震が頻発する。信濃では888年頃に有名な仁和の大洪水が発生し、更級・埴科郡域に多大な爪あとを残した。本遺跡には施設を直接破壊するような災害の痕跡は認められない。

b. 9世紀の国史概略

804年最澄(天台宗の祖)と空海(真言宗の祖)が唐に渡る。809年嵯峨天皇即位の翌年、平成上皇と藤原葉子の変が失敗に終わる。嵯峨天皇の治世は、「源平藤橘」の誕生、官人層の都への集住化が進み、「畿内」・「畿外」から「みやこ」・「ひな」へと概念が転換する時期である。820年には仁弘格式が頒進される。この頃、最澄そして空海による密教文化が開花し、現世利益と即身成仏、鎮護国家の思想が天皇から農民までを包みつつ社会に浸透していく。823年小野岑守の提案により、大宰府官内に「公営田」制が実施される。律令税制の基本となった租と調庸を、田地からあがる収穫額に一元化して賄う政策である。国衙の正税を用いて、調庸を買い上げるシステムである。「公営田」制の基盤は、この頃、地域社会の中で、次第に力をつけてきた「郡司子弟」らの有力農民(富豪層)であり、「力田の輩」、「村里幹の輩」、「殷富の輩」と呼ばれた人達であった。この頃の荒田の開発は、有力農民と弱小農民の上下関係により成り立っていたと考えられる。「郡司子弟」は健児の制度化により、身分化され、一部の有力農民には下級官職を賈うような状況さえ生まれた。いわゆる「弓馬の上」が社会的にも認知され、国家権力に対抗する勢力として増大していったと考えられる。834年から848年頃、平安京を中心に「群盜」が活躍する。838年最後の遣唐使が派遣された。842年伴健岑と橘逸勢による承和の変が起こり、藤原良房が台頭、857年太政大臣に昇進した。863年流行性感冒が京ではやる。866年伴善男、応天門の変にて失脚し、藤原氏による紀氏、伴氏、夏井氏の排斥が進む。894年遣唐使が廃止される。901年には菅原道真が左遷されている。

872年藤原基経右大臣となり、887年に宇多天皇が即位、「阿衡事件」が起こる。「天下の政を摂行」し、「万機の巨細、百官の懇己、皆太政大臣に関わり白し」する政治体制、藤原氏による前期摂関政治の成立が進んだ。一方、地方では、889年「東国強盗首」物部氏永が蜂起する。この年、高望王は「平」の姓を与えられ上総介となっている。9世紀も終末には、895年頃より坂東富豪層「蹴馬の党」が、陸路の調唐物を襲い、信濃・上野・甲斐・武蔵を荒しまわったために、相模国足柄坂と上野国碓氷坂に関門が設置された。838年には畿内群盗の追捕、山陽・南海道の海賊の捕縛が命じられている。

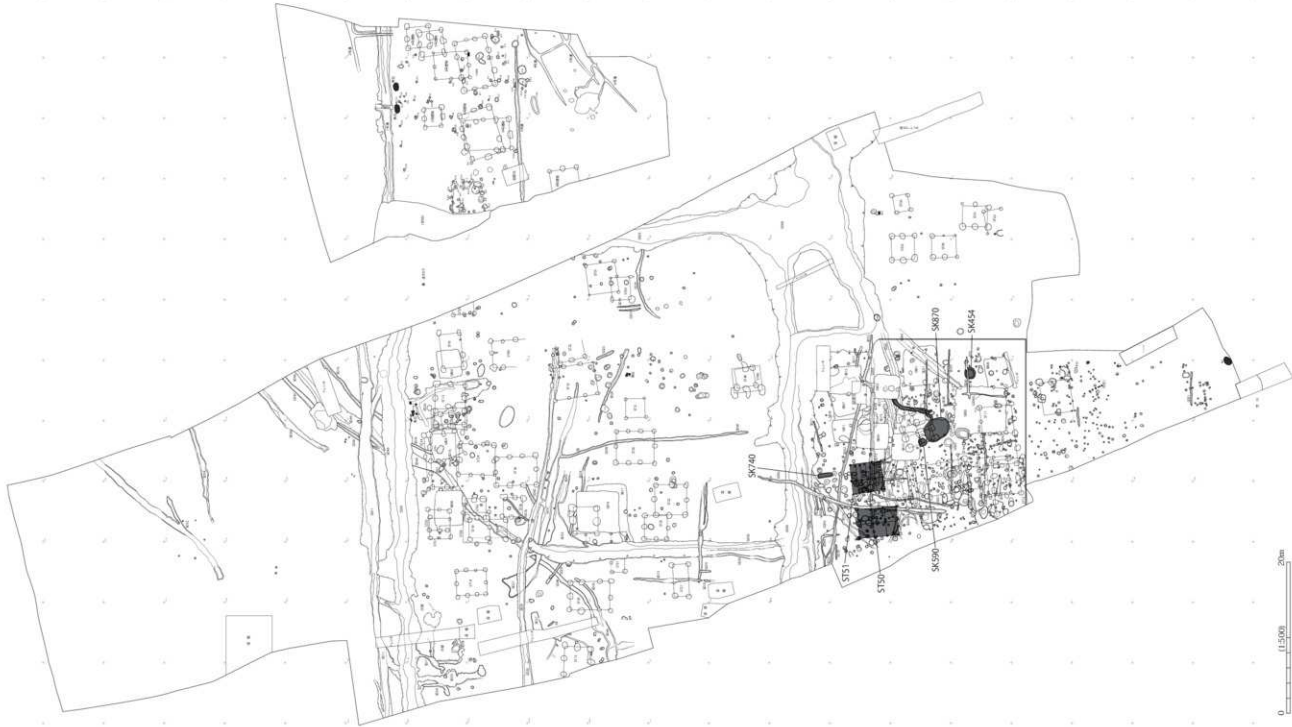
4. 王朝国家の成立と富豪層の台頭

a. 10世紀の八幡遺跡群

ア. 荘園制成立期

9世紀終末から10世紀初頭（～前半）にかけては、7世紀以後、構造改変しながら連続と継承してきた機能が、完全に転換し終える時期、いわば社宮司遺跡のひとつの終焉にあたる。9期後半（Ⅲ期）の集落構造が完成された姿と捉えることができ、出土土器の様相と次期高床式建物の出現等を見据えて、一時期を設定し、社宮司Ⅳ期とする。該期は『扶桑略記』にみる上野や武蔵国、駿河国の群盗蜂起、荘園制が成立し、902年には延喜の荘園整理令により、班田は12年に1度、事実上最後の班田貸与となる。914年には世の乱れを憂えた三善清行が「意見封事十二箇条」を出して国政改革を説く。社宮司遺跡では、25m四方の屋敷地内にあった竪穴式建物が改築・整備され、1棟の大型建物を中心とする中小型建物3棟が正方位に配置される。一辺7m規模の大型住居SB 02は、床面に3基の土坑を掘削し、排水施設を兼備した特殊な壁立ち建物と考えられる。社宮司造営期のSB 14等を剪断とさせるが、その機能は具体化できない。「力田の輩」等、「富豪層」台頭の社会的背景を考えると、浮浪する弱小農民等を囲い込み、労働力を使役する行為、そこに大量の土師器杯類の出土を加味し、「給食」等の保証行為を想像することはできないのか。最も『類聚三代格』にみる饗宴群飲の禁止事項に係るような行為を読むことも一考であるが、残念ながら考古学的根拠は得られていない。SB 03からは「尻」の字の墨書土器があり、SD 03並びに地鎖的遺構との共時性、あるいは関連性を示している。888年頃に仁和の大洪水の被害が更級・埴科郡域を襲ったことは前述したが、時期を然程違わずに地鎖的遺構が造作される背景と何か関係があるのか。908年戊辰の年には、旱魃があり神楽苑の水門を開いている。一辺5mの正方位の畜産形成、中央部に埋置された猿投産緑釉手付瓶（9世紀後半から伝世か）、裏鬼門に書かれた「尻」の墨書文字、風水に基づく厳格なる造作は、一個人の家屋造営とは考えられない。おそらくは郡衙あるいは国衙レベルで主導された地鎖的行為あるいは祈雨の行為をそこに考えたいが、いかがなものか。一方、屋敷地以北・以東には、建物が消滅しており、発掘所見はないが、水田または園地等、耕作地化されたものと考えたい。

10世紀第2四半期から第4四半期にかけての社宮司遺跡には、考古学的に裏付けのとれる遺構はまったくない。それも土師器等の土器資料が確認できないことに起因している。日常雑器の質が変換してきていることにも一因があるか。しかし何といても高床式建物跡以外に遺構の存在しない点は、遺物から相対的に年代値を決める考古学にとっては致命的である。唯一、年代測定が可能となった土壌墓は、994年（枕木表皮近傍の年代値）であり、社宮司Ⅳ期（10世紀初頭）まで展開した屋敷地の北端に築かれている。土壌墓の南隣りに確認した高床式建物2棟を、この墓の宅、屋敷と考え、少なくとも10世紀後半段階での建設を推定したい。総柱式高床の建物で、20mを測る宅と付風棟1棟の併設で構成され、東には径400cm弱の土坑（井水状遺構か）、そして井戸跡（SK590）が伴うのか。また次期以後に設定した耕作地関連の溝状遺構が、該期に伴う畠地を継承したものである可能性は高く、井戸跡以南に広がる空閑地に高跡を想定したい。ここに前時期までの社宮司遺跡とは違う大きな画期を設けたいが、かつての私的空間



第764図 社宮司V期の遺構全体(10世紀終末)

地に同様に屋敷を設けている点は、継続性あるいは何らかの関連性を考える必要があるか。在地「富豪層」が「郡司子弟」を含む有力者と考えると、この有力者は、むしろ新出の在地「開発領主層」であり、受領の子弟郎等など私的武力者「郎従の徒」などを想定したいところだが、根拠はない。ただし少なくとも、前時期までの竪穴式建物とは違う生活様式が導入されており、それまでの部衙施設からの継続的な構造改変とは、まったく別の次元での改変があったようだ。それが「郡司子弟」と「郎従の徒」など新興勢力との支配交代であるとなれば、部衙の解体と「負ん体制」の確立、荘園制の成立という教科書的図式が当てはまるか。屋敷内の土壌墓は、モミ属の棺材を組み合わせ、副葬品には大小の太刀形と弓形の木製形代のみがある。茶碗類や金属器類はまったく持っていない点、やはり新出の葬法なのか。被葬者は北枕、西向き、棺ごと西側に寝かせた様態であり、涅槃を強く意識していることか。まるで京の都の藤原道長臨終を思わせる。

b. 10世紀の国史概略

897年宇多上皇となり、醍醐天皇が即位する。901年右大臣菅原道真は左遷され、左大臣藤原時平が政権を掌握する。同年『日本三代実録』、905年『古今和歌集』が撰進される。この頃『日本霊異記』なるか。902年には延喜の荘園整理令で新立荘園を禁止。この頃より額納から穀納へ転換が図られるか。破銭法は、悪銭での取引を禁止し、銭での流通促進を図ったものである。914年には三善清行の言に「澆季」(末法の世)があり、律令制下の国政改革を説く「意見十二箇条」が奉呈された。この頃、東アジア世界は、907年唐の滅亡、926年耶律阿保機による渤海の滅亡、936年には高麗が朝鮮半島を統一するといった目まぐるしい国家の交代劇が展開されていた。927年延喜式が完成、神社が規定される。938年空也は「阿弥陀号」を唱え座禪練行、「市聖」と呼ばれる。この頃京周辺では、羽蟻群飛、大風暴雨、天候不順が続いたという。945年志多良神の入京(石清水八幡宮)がある。10世紀初頭は律令制からの脱却、土地制度をめぐる改革の時代である。律令制は公民制と官僚制によって支えられてきたが、9世紀後半より、公民の浮浪・逃亡が増大、籍帳自体のシステムが瓦解し始めている。彼らは有力富豪層に囲込まれていき、公民制は完全に崩壊に向かっていった。公民制の崩壊は、調庸制を取り崩し、財政破綻を招いた。官僚制は「天皇・太政官—国郡司—公民」という律令体制から、「院宮王臣家—諸司—富豪層—(非公民)」という「初期権門体制」へと移行していったと考えられている(P94 吉川 2002)。そして官人の俸禄給与から所領収取形態への移行が、官職の世襲化を促し、家格を形成したとされる。936年藤原忠平が太政大臣となり、941年朱雀天皇の関白となる。946年村上朝の治世となり、『新国国史』の編纂、958年最後の皇朝十二銭「乾元大宝」の鑄造が行われた。この頃、東アジアでは960年に宋が建国される。967年冷泉天皇が即位。969年安和の変にて、源高明が失脚する。984年花山天皇が即位。同年源為憲が仏教説話「三宝絵詞」を進上する。985年には恵心僧都源信が『往生要集』を著し、十門「厭離穢土・欣求淨土・極楽証拠・正修念仏・助念方法・別時念仏・念仏利益・念仏証拠・往生諸業・問答料簡」を論ずる。986年結買法の定め、この時代に畿内諸国では、家・宅地・墾田等が、皇朝十二銭での売買ではなく、正税での取引として一般化していた。993年には「値直米」での宅地取引の事例がある。994年疱瘡の大流行。10世紀半ばから以後は、律令制の脱却から摂関政治と院政への開花期へ向かう。

一方地方では、9世紀終末、「就馬の党」による強盗が目立つようになる。略奪は、信濃・上野・甲斐・武蔵方面に及び、相模国足柄坂と上野国碓氷坂に関門が設置される。915年上野介が上毛野基宗に殺害され、919年武蔵守が源住に襲撃されるなどの事件が勃発、有力富豪層の権力形成とともに、坂東諸国は治安が悪化していた。高皇王の子孫平将門は、藤原基経の子、忠平の家人であった。忠平と将門は、院宮王臣家と坂東富豪層との関係、封戸・荘園の上納と庇護の関係を結んでいたと考えられる。935年に源守と平国香との戦闘を行い、938年国香を討討し信濃国分寺周辺で戦っている。939年上野国府にて国司を信

濃に追放し「新皇」を名乗った。「坂東の大乱・天下の大騒動」である。940年平貞盛と藤原秀郷の手により討たれる。940年には伊予国の掾であった藤原純友が讃岐・伊予国府を襲撃し、天慶の乱が勃発するが、941年に橘遠保に追捕縛され平定。公民制の解体と官僚制の変質は、地方律令制下にあった地方氏族、郡司あるいは郡司子弟らの階層に大きな影響を与えた。彼らは受領あるいは院宮王臣家と結託して、地域社会に継続して根ざした。ここに公田と荘園の対立、荘園制の基礎があると考えられている。国司四等官の上級者が、裁量権を拡大し、「負名体制」を採用して、次第に国の権力を掌握していった結果が受領である。やがて「国合」に基づく受領の横行を田堵百姓らが訴える事件が続出する。988年「尾張国郡司百姓等解文」では三十一箇条にわたり訴えられ、翌年藤原元命は罷免されている。994年には九州より疫病がはやり、全国に蔓延、1000年前後にも疫病が多発している。1007年、道長は998年納経発願し、金峯山神社に金剛製の経筒を奉納する。

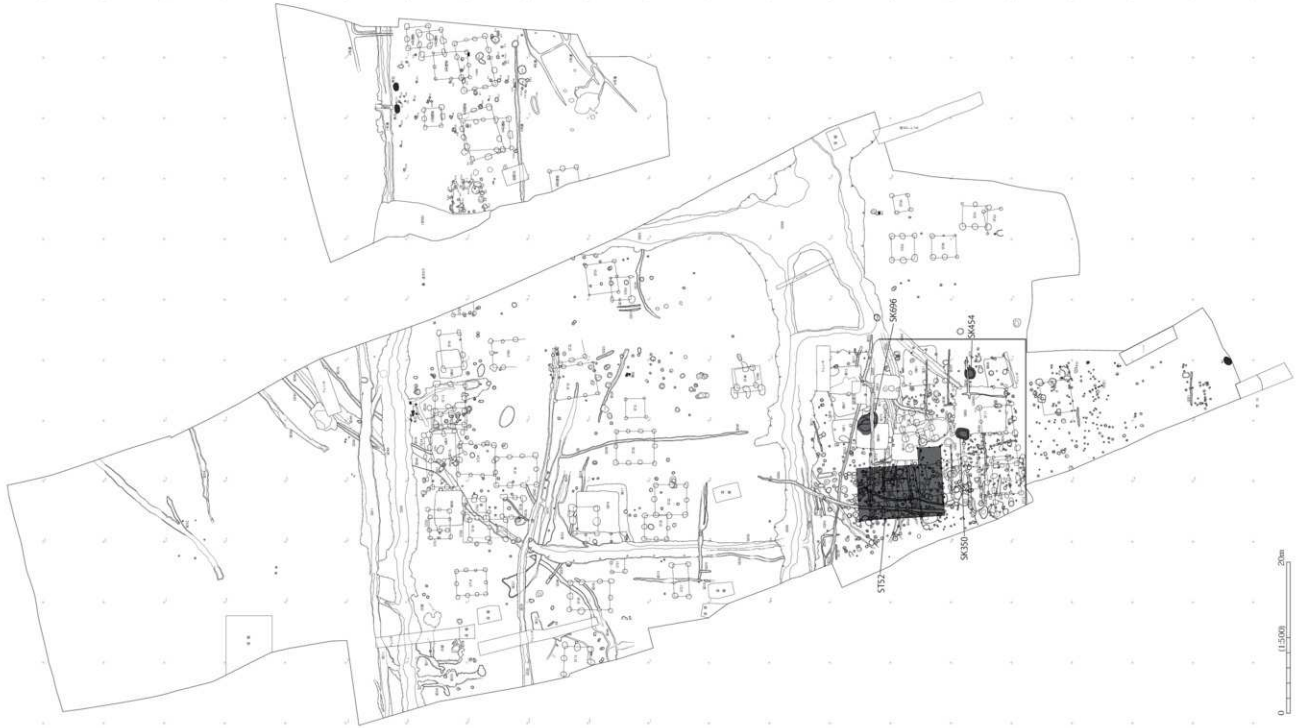
5. 摂関政治と武士の台頭

a. 11世紀前半の八幡遺跡群

ア. 摂関政治の確立期

11世紀代に位置付けることのできる可能な建物は、社宮司V期の高床式建物ST 50及びST 51と重複関係にある総柱高床式の建物ST 52である。建設の古新を判断する証拠はないが、床面積90㎡余りを測る大型例の出現を新期と捉え、土城構築時期(994±30年AD)以後の該期に位置付けた。社宮司遺跡VI期と呼称する。高床式建物1棟とともに、東側にある径270cm弱の土坑(池か)、井戸跡(SK3560)はV期のものが改築されたと考えられる。設計の類似点から、継続的な屋敷地と判断でき、「開発領主層」を仮定した有力者の第二世代にあたるかと評価したい。

仏塔・六角木幢は、風鐸1点(P671、第728図)の出土位置から、V期構築の木棺墓近くに立っていた可能性が高い。木幢造立年は11世紀から12世紀中頃と年代測定され、V期以後に位置付けるのが妥当である。風鐸等の垂れ飾りに型式差、時期差があり、補修・修繕の可能性を考慮する必要があり、木幢本体部分の暦年代較正値を基軸とすれば、宝珠(1070～1160年)、笠(1020年)、幢身(1025～1035年)となる。樹木表皮部分に比較的近い笠及び幢身部分の年代を根拠として1030年前後、11世紀前半を推定したい。宝珠と請花はクリの木材であり、最も新しい年代値12世紀中頃(1160年を含む)を示している。補修の結果と判断すれば、笠や幢身と100年程度の開きがあり、年代測定誤差等を考慮しても、造立後の経過年数には50年以上が見込まれることになる。少なくとも第二代当主のVI期屋敷地が解体して以後も立ち続けた計算となり、現在も長野市松代町の畑地に立つ、鎌倉時代作とされる石幢の実例(P655第712図)を想起できるか。六角木幢は阿弥陀如来坐像を尊像とすることから、浄土思想に基づく仏塔と考えられ、『戯草紙』の世界にみる末法思想下の建造物(P695第747図)に似ている。末法突入は承承7年(1052年)頃と推定されているので、六角木幢の造立年とほぼ時期を同じくする。「開発領主」と仮定した第二代当主が、祖先供養あるいは極楽浄土の信仰のために造立した仏塔と考えるのが、調査の所見である。阿弥陀如来像ほかの仏画は繊細で、笠と幢身、風鐸等垂れ飾りの一部(造立期の製作品)は、丁寧な削り調整で仕上げられている。製作には身近な樹種を選択していることから、都の絵師・仏師(聖層の可能性が高い)の手により、あるいはその指導下に、在地で製作されたものと考えられる。一方、補修は粗雑で、葺手や風招なども本来の型式を逸脱していることから、おそらく在地の作り手になると言えるか。やはり京の都との関連で造立者の姿を思考すれば、都鄙間の交流を担っていた階層であり、末法思想を理解し、木幢造立の財力を持ち得た人物像となる。極楽往生の善法を取り入れた屋敷墓の主人を、受領子弟郎等など新出の「開発領主層」に求めるか、それとも「富豪層」化した旧来の「郡司子弟」等に求



第765図 社宮司VI期の遺構全体(11世紀前半頃)

めるか、発掘所見から証拠は得られない。しかしながら社宮司Ⅳ期（9世紀末～10世紀初頭）とⅤ期（10世紀後半）に認められる若干の時間の間隙（20年～60年）を念頭に、竪穴式建物の消滅と総柱高床式建物の出現、屋敷墓の形成など中世世界の諸様相を垣間見れば、新出の「開発領主層」に求めるのが妥当のように思える。11世紀後半には第二代の屋敷地も解消しており、そこに「小谷荘（おうなのしょう）荘園の成立を仮定し、本所の新設を説けば、話はスムーズに流れる。小谷荘の記録は、1158年（保元3年）の『石清水家文書』に、領家・預所等が所領につき押領したため、本所である石清水家に返付することを命じた官符がある。このことから保元3年以前には荘園が成立し、石清水八幡宮に寄進されていたことが解っている。また1094年には白河院への呪詛の咎で、源仲宗の子、盛清が信濃国に配流されている。盛清の子、為国が村上を名乗ったことから、その配流地は、更級郡村上郷と考えられる。11世紀終末での史実であるが、この時、盛清の配流先の選定に、あるいは受け入れを行った在地層にどんな人物が関わったのか。更級郡小谷郷・社宮司遺跡で仮定した新出の「開発領主層」に迫る糸口のひとつになるか。為国は保元の乱（1156年）で信濃源氏として崇徳上皇側に参戦、敗北している。為国の末裔には入山氏・屋代氏・栗田氏・千田氏等、北信濃を担っていく武士たちがいる。

六角木輪と作出した代播ぎ具「コロバシ」の較正年代値が、宝珠と同じ1160年であるのは、水田等の営みが木輪補修とともにあったことの証左であり、保守点検者が「コロバシ」製作者であった可能性も十分考えられる。やがて六角木輪は、13世紀から14世紀頃の水田耕り化によって解体され、「コロバシ」とともに打ち捨てられる。

b. 11世紀の国史概略

一条天皇の治世、左大臣藤原道長。1001年枕草子なる。1008年凶作により信濃国の正税出挙数を3年間減少することを許可する。この頃より『源氏物語』。1007年道長は、金峯山神社に金銅製の経筒を奉納する。法華経や無量義経ほかを道長自らが書写。1016年道長が敦明親王を皇太子とし摂政となる。1019年刀伊の入寇、この年末に藤原頼道が関白となる。1020年道長が無量寿院（法成寺）を建立し、九体の阿弥陀如来像を安置する。1028年上総国平忠常が、安房守惟忠を殺害する。朝廷より河内国の源頼信（源基基の孫）は追討の宣旨を受け、忠常を降伏させる。武勲を上げた頼信は、美濃守を任命される。河内源氏の台頭。在地領主層と荘園領主を結ぶパイプ役を、河内源氏が果たすようになる。1031年頃、『上野国交代実録帳』がなる。1040年長久の荘園整理令、1045年後冷泉天皇が即位、寛徳の荘園整理令を出す。1051年源頼信の子、頼義が陸奥守となる。前九年の役勃発し、1057年頼義が安部頼時を討ち平定。1051年頼道、宇治の別業を平等院と号す。1052年末法到来（源信は1017年と考えていた）、浄土信仰が盛んになる。1068年後三条天皇が即位。1083年後三年の役が始まり、源義家が清原武衡を討伐し平定。1086年白河天皇譲位し、院制が始まる。1087年頃より藤原宗忠が『中右記』を、源師時が『長秋記』を記す。1108年源義親の追討宣旨が、平正盛に与えられ追討、伊勢平氏の台頭となる。

※ 本章の国史概略は以下の文献から引用、まとめたものです。

参考文献

- 1989年 『長野県史 通史編 第一巻 原始・古代』長野県史刊行会
- 1994年 『更埴市史』更埴市史編纂委員会
- 1988年 吉田 孝『体系 日本の歴史3 古代国家の歩み』小学館
- 1988年 棚橋光男『体系 日本の歴史4 王朝の社会』小学館
- 2002年 佐藤 信編『日本の時代史4 律令国家と天平文化』吉川弘文館
- 2002年 吉川真司編『日本の時代史5 平安京』吉川弘文館
- 2002年 加藤友康編『日本の時代史6 摂関政治と王朝文化』吉川弘文館
- 1991年 中野采男編『律令社会解体過程の研究』塙書房
- 1992年 瀧音能之編『律令国家の展開過程』塙書房

付 シンポジウム 六角木幢と信濃中世の幕開け

— 特別公開 六角木幢 ～ 極楽浄土への道しるべ ～ —

1. 経緯

国内初出の六角木幢は、平安時代末期の作と考えられる木製仏塔である。社宮司遺跡を南北に区画する東西大溝に一括廃棄されて出土した。長い間の埋没状態から、傷みが激しく、脆弱な状況であったため、記録化には保存処理が必要となった。保存処理に先立ち、処理中の事故等の危険に対処する目的で、現状の(現物のままの)型取りを実施、複製品を製作した。現物の保存処理完成は2008年3月の予定である。型取り後の複製品は、2005年10月に完成、出土時以来、4箇年の歳月を経て、現物の複製ではあるが、六角木幢全体(巻頭写真)を目前で見るのが可能となった。木幢の歴史的意義・重要性を考えると、早急な公開が必須であると判断し、広く一般に公開展示することを決定した。六角木幢を出土した社宮司遺跡の発掘調査報告書刊行を目前に、その調査成果と合わせて、六角木幢を検討することが、埋蔵文化財の記録・保存上、適切な手法であると考え、シンポジウムを計画、2005年12月4日、長野県立歴史館にて実施した。末尾ではあるが、本調査報告書に、その概要の一部を掲載し、発掘調査報告の一助とする。

2. 社宮司遺跡の調査所見

社宮司遺跡は、古代更級郡衙に関連する郡内官衙遺跡である。「郡」地籍を扇状地の頂点とし、そこより東西に伸びる大道を挟んで、北に北稲付遺跡、南に社宮司遺跡を配置した計画的な官衙域にある。遺跡は、北側に公的空間、南側に私的な空間を設ける企画的な施設の配置をとる。それらが時代とともに、機能的な変化、社会的地位づけの変化として変遷していくところに、遺跡の重要な歴史的意味がある。7世紀後半に施設が設置され、9世紀前半まで官衙的な施設群が継続、9世紀の後半期には官衙機能を司った公的空間が崩壊し、私的空間の拡充が図られる。そこに官衙関連施設の解体と郡司等公的実務官僚の質的転換を想定し、富豪層等有力者の台頭を予想する。10世紀には私的空間部に高床式の居室を構える屋敷地が現れる。10世紀の終末頃には屋敷地北端の居室脇に木棺墓が築造される。墓には第1代当主が埋葬されたと推察でき、仏教的作法に基づく埋葬法であるが、刀と弓の木製形代のみを副葬する。11世紀前半頃には屋敷の建て替えがあるが、そのあと、遺跡内に遺構を確認できるのは13世紀ないしは14世紀頃の柱穴群のみとなる。六角木幢の造立は、炭素年代測定から11世紀から12世紀前半までに位置づく可能性が高く、造立場所は木棺墓の近傍を推定する。木幢の年代値から推察して、11世紀前半頃の屋敷との関係が濃厚である。その屋敷を第二代当主の建築物と考えれば、六角木幢は、第一代当主の追善供養塔のような性格を想定できることになる。

3. 更級郡衙についてのコメント

古代の郡衙機能は、河川交通を利用した郡衙と郡衙の結びつきが重要である。この地には、社宮司遺跡等の更級郡衙と屋代遺跡等の埴科郡衙が千曲川を挟んで対峙した関係にある。千曲川の沿岸部には船継場があり、そこより郡衙への物資の運び込みがなされる。更級郡域には、中道南、中道、笹穂への道路網があり、郡へと通じている。極めて交通の便がよい要所で、出挙関連資料が出土したことを合わせ、郡衙が存在した可能性は極めて高い。また千曲川に近い扇状地の端部、社地の地籍には、現在の武水別八幡宮が存在する。武水別神は9世紀に従二位に叙せられている。かつて、武水別神社は諏訪神の建御名方富命の御名別であると考えられていたが、武が八幡神のことで、水別とは氏神と解釈できる。武水別神は、中世に小谷荘の荘園鎮守となる神。社宮司遺跡周辺は、古代の更級郡小谷郷域にあたり、平安時代末期以後、石清水八幡宮の荘園となる。郡衙域から荘園への変遷、氏神から荘園鎮守への過程を、歴史学的に検討で

きる最良のフィールドであり、今回の調査成果に期待するところ大である。正税出挙は、郡司が国司から請け負い徴税していたと考えられる。貸付の経営が機能していた時はよいが、飢饉等で失敗すると、たちまち国衙への負債を抱え込む。国衙への申し開きのために、郡司は借金したと考えられ、その相手が、ここでは八幡宮となる。そこに荘園寄進のからくりが求められるか。遺跡で検出した木棺墓、畿内周辺では10世紀頃に屋敷墓が登場してくる。ただし一代から二代、大体三代くらいで消滅するのが通例である。それらは地域開発の有力者と考えられ、墓の主人は氏神となる。一般人は野辺に捨てられるのが仕来りである。したがって屋敷墓には、先祖の供養塔として、その傍らに木輪などが造立されることは十分考えられ、副葬品が木製形代であるのは、儀礼的、魔よけのような性格をもつか。被葬者は少なくとも通常の人ではなく、意識された人物であろう。

4. 小谷荘についてのコメント

武水別八幡神社は石清水八幡宮の末社である。かつては八幡の社地川原にあり、一本木から新宿を通り、滑石、郡へと道がつながっていた。「郡」地籍の背後には、一重山・霊浄山があり、この山が霊鷲山であったと考えられる。八幡宮から霊浄山までが社地であり、神聖な場所である。社官司遺跡のある場所は、この神聖な社地の外れ、宮川よりである。つまり木輪は聖地と世俗の境界地点から出土したことになる。八幡宮を巡る社会の動きは、945年に志多良神が入京、石清水八幡宮と合体する宗教運動が起きている。そのころに飢鬼、怨霊が都に集まるとの迷信が広まり、呪術信仰が発達する。948年には石清水八幡宮の法生会が勅祭となり、全国に波及する。石清水八幡宮は、1072年に記録荘園券契所から存立荘園の審査を受けるが、この時点で小谷荘の名はない。ところが1158年には小谷荘の記録が出てくるから、1072年から1158年の間に小谷荘荘園が成立したと考えてよい。まさに六角木輪と重なる時代である。六角木輪は廃棄された遺物である。そのことは石造物などもそうであるが、お参りしていた人がいなくなったり、あるいは塔としての性格の役目が終わるなど、社会の大きな動きの中で、捨てられたものと考えられる。そこに荘園成立を合わせ考えてよいのか、慎重な検討が必要である。

特別公開
(複製)

六角木輪

極浄土への道しる

平成17年11月19日(土)
平成18年1月15日(日)

報告・講演会・シンポジウム
平成17年12月4日(日)11時から16時

①調査報告「六角木輪と社官司遺跡」	11時00分～11時05分 現田昌徳
②講演会「六角木輪とその背景」	11時30分～12時00分 藤原典彦
③シンポジウム「六角木輪と信濃中世の幕開け」	12時30分～13時00分 宮下輝一 藤原典彦 丹波今朝男 武笠 勇 町田順晴

主催 長野県歴史文化財センター・長野県立歴史館
後援 長野県教育委員会・千代田教育委員会 協力 (株)ヒューズ(株)信濃製作所



5. 六角木幢についてのコメント

六角木幢は、石の塔婆（石幢）出現前に木製仏塔のあったことを立証できる極めて貴重な資料である。出土地が更級郡衙に関わる遺跡であることから、郡衙の近くにはあったとされる道標の可能性もある。河川交通の入り口のようなところにも道標は立つ。立石などの地名は、その名残と考えられる。また木幢と似た笠塔婆の描かれた餓鬼草紙は、法会の経過を描いたものではないかと考えられる。1132年の法会の記録に、第一から第五までの部屋に地獄絵を並べて、本尊の前には仏像と塔形を並べたとの記述がある。この塔形が何にあたるか。木幢のようなものであった可能性もある。つまり六角木幢は、供養塔でもあり、道標でもあり、法会の際の荘厳具でもあるのではないかと考えられる。ひとつの機能に限定して考察する必要はないと思われる。

木幢に描かれた仏画から阿弥陀如来と判断できる材料は非常に乏しい。阿弥陀如来3体と仮定しているが、如来と菩薩、阿弥陀三尊の可能性もある。宝相華文については、細かな様式はわからない。阿弥陀如来・連珠文帯・宝相華文の横図は、岩手県中尊寺の四天王柱（1124年）に似る。それと木幢の製作年代の違いは、どちらが古いかは解らない。仏画顔料は痕跡として残っていない。画風はシンプル系。平安時代後期の描き方の特徴でよいと思われる。3体の阿弥陀の描き方は、京都淨瑠璃寺の九体阿弥陀如来坐像の胎内にあった摺仏・刷り物の仏あるいは印仏・判子みたいに押す仏によく似ている。この例は1105年・12世紀初頭の作であり、木幢とも近い年代値である。または中尊寺大長寿院の曼荼羅図のようなタッチに似る。阿弥陀仏を使つての追善供養は飛鳥・白鳳の時代から、すでにあるが、浄土信仰の隆盛は10世紀の後半からと考えられる。源信の『往生要集』が広く読まれるようになってから、阿弥陀堂や阿弥陀仏の造立が盛んになった。1053年の宇治平等院鳳凰堂は、定朝の作で平安時代末期である。この頃の長野県には、まだ阿弥陀堂はない。上田の大法寺の十一面観音や智識寺の十一面観音などの仏像のみで、12世紀後半頃になって浄土信仰に基づく阿弥陀如来や阿弥陀堂が出現してくる。以上から、六角木幢は12世紀代の作と推定するのが無難である。一方、阿弥陀に絡んで信濃を代表する信仰には、善光寺信仰がある。それが文献に登場するのは、1113年ころ、つまり12世紀前半のころで、六角木幢の造立後まもなくである。善光寺信仰は、志多良神や宇佐八幡神と同じような流行神と考えられる。善光寺そのものは庶民の納骨の場であったが、阿弥陀信仰と骨寺の納骨が一体化したのものとして善光寺信仰が現れてくる。文献から善光寺と石清水八幡は近接した関係にあったことがわかっている。1119年に鳥羽天皇の中宮璋子が宇治から旅をしたが、その船を用意したのが善光寺別当で、その船が石清水八幡宮の船であったという。社宮司遺跡のある小谷荘は、石清水八幡宮領である。その地から阿弥陀如来を描く木幢が出土した。木幢造立より後、まもなく善光寺信仰が現れる。そこに何らかの関連性を読み取ることができる否か、現状ではまったくわからない。

第 5 章

結 語



信濃では月と佛とおらが蕎麦

伝

一

茶

第5章 結 語

八幡遺跡群の地形環境の一端が明らかになった

八幡遺跡群は、西端の霊浄山を起点に東にひろがる遺跡群で、北端は佐野川、南端は宮川に区切られている。佐野川によって形成された扇状地上に立地し、千曲川に向かって緩やかに傾斜している。扇状地の扇頂部は「郡」集落、扇端部は県道とそれに沿う集落となっている。扇尖部は、水田や果樹園などに利用されていて、バイパスは扇尖部を通過するように計画された。そのため、今回の発掘調査は、八幡遺跡群の中央部を南北方向に縦断するトレンチを入れることになった。その結果、八幡遺跡群全体にまたがって、地形環境の一端が明らかになった。

遺跡群北端の佐野川右岸では、河川堆積土と埋没流路および佐野川に向かって傾斜している状況が確認できた。遺構は検出されず、人の生活に適するような地ではなかった。中央やや北よりの北稲付遺跡や稲付遺跡一帯（市道9100号線付近）からは、掘立柱建物が発見され、居住域に利用できる環境にあったといえる。その南へいくと湿地帯や埋没流路が連続し、流れ込みの遺物はあるが遺構は検出されなかった。中央やや南よりの大道遺跡（市道9140号線付近）からは、竪穴住居跡が検出され一時期集落域として利用されていた。この南では、再び湿地や埋没流路が見られ、宮川左岸一帯に立地する社宮司遺跡へと続いていた。社宮司遺跡も湿地的様相にあったが、溝を掘削したりしながら7世紀後半以降長期間集落域として活用された。

このように、八幡遺跡群が立地する扇状地の扇尖部は湿地あり、埋没流路あり、微高地ありと現状の景観には現れていない微地形が埋もれており、それらが交互に連続している状況が補まされた。今回の堆積環境に関するデータ資料をもとに、古地図や航空写真などからそれぞれの地形の広がりを把握していけば、発掘調査だけに頼ることなく遺跡の状況を類推していくことができよう。

「更級郡衙」の存在、「伊那郡衙」「埴科郡衙」所在推定地と比較すると

八幡遺跡群内の西側一帯の地名が「郡」であることや、基盤整備事業・工場建設などに先立って実施されてきた発掘調査の結果、八幡遺跡群一帯に古代更級郡衙が所在していた可能性が高いと考えられてきた。

今回の発掘調査で得られた考古資料は、更級郡衙の所在地見解をさらに高める内容であったといえる。詳細については、前章で述べられている通りであるが、中でも漆紙文書の発見の意義は大きい。「十月十一日正税甘束」と解読された漆紙文書は、社宮司遺跡のSD 03から出土した。出挙帳の反古紙で、内容は律令税制に基づいた正税出挙と判断できる。今回の発掘調査では、郡衙そのものとしてできる施設や部名が書かれた墨書などの文字記録は発見されていない。しかし、出挙帳が社宮司遺跡に残されていたことは、社宮司遺跡に郡衙と関係する人物の存在が想定でき、社宮司遺跡周辺に郡衙が存在したと考えることが自然である。郡衙そのものの発見は今後にゆだねられるが、八幡遺跡群の一角に更級郡衙が存在したであろうことは確実といえよう。

さて、古代信濃国10部のうち、考古資料などによって郡衙所在地の可能性が高いとされているのは、飯田市恒川遺跡群の伊那郡衙、千曲市屋代遺跡群の埴科郡衙の二郡衙である。これに八幡遺跡群の更級郡衙が加わると三郡衙になる。この三遺跡群の郡衙成立以前の状況を比較すると違いのあることに気づく。

恒川遺跡群と屋代遺跡群では弥生時代から古墳時代にかけての大きな集落が連続と営まれ、出土遺物も一般集落とは異なったものが出土している。地域の中核的な集落が存在したと評価できる遺跡群である。郡衙の成立は、この延長線上上と考えられる。言い換えれば、地域の中心地で地域の有力者が律令体制

下に組み込まれていった状況が想定できる。

一方、八幡遺跡群の発掘調査では弥生時代や部衙成立以前の古墳時代の遺構遺物はわずかに発見されたにとどまった。南北縦断トレンチをあけたのであるから近辺にこの時期の大きな集落などがあれば、埋没水路などに遺物が包含されていていいと考えるが、遺物はほとんどなかった。今回の発掘調査では、大道遺跡・社宮司遺跡で7世紀後半から8世紀にかけての集落の一角が発見され、その状況は突如集落が出現したという感じである。そして、社宮司遺跡では官衙的な様相を保持しながら集落が継続したことが明らかになった。すなわち、上級部衙は、地域の中心的集落ではない地に成立したような状況にあり、伊那郡衙や埴科郡衙の成立とはおもむきを異にしているといえる。部衙の成立や律令体制の浸透を考える上で、重要な点であろう。

六角木輪はわが国の古代から中世への変容を語る

平成17年12月、六角木輪の複製品を特別公開した展示会にあわせて「六角木輪と信濃中世の幕開け」と題してシンポジウムを開催した。わが国初めての出土、わが国唯一であるといった重要性の認識に加えて、六角木輪が語りかけてくれる歴史事象を引き出そうというねらいで行った。その一端は本報告書にも掲載したのでご覧いただきたい。

六角木輪が誕生したのは、律令体制が行きづまり、荘園・公領制に社会システムが移行していく時期であった。これまでの状況が変わっていくということに、人々は漠然とした不安を抱くものである。不安に対して、素手で向き合うか、仏教などの教えを身に付けて向き合うか、集団として向き合うかなど対処法はいくつか考えられる。こうした心の動きが反映された結果としての六角木輪、と考えると六角木輪についての見方も変わってくる。

六角木輪そのものや描かれた仏画などを、分析・追究・解明していくことで、歴史資料として継続評価していくことは、調査担当者としての責務であり、今後も行っていこうと考えている。その一方、いろいろな方面からの追究を試みていく必要があることも認識している。古代から中世へ、単語にしてしまえばこれだけであるが、その中味は複雑で謎も多い。六角木輪は、その謎解きに大きな役をかってくれる一級資料である。

八幡遺跡群のこれから

八幡遺跡群は、八幡地区一帯の歴史を紐解いていく上で欠くことのできない遺跡であることは当然であるが、繰り返し述べてきたように、上級部衙の存在などから長野県の歴史を紐解く上で欠くことができない。さらに、六角木輪は、わが国の古代から中世への移り変わりを追究する上で欠くことのできない資料といえ、六角木輪が出土した社宮司遺跡をはじめ八幡遺跡群は、日本歴史追究レベルで重要視される遺跡である。

バイパス開通後、道の両脇が徐々に開発の波を受けることは、同様の事例を見れば明らかである。虫食いの発掘調査がなされ、結果的に多種多様な建造物が乱立してくる状況が想定される。しかし、開発に際しては、少なくとも八幡遺跡群が内包している無限の歴史的価値について、それなりに理解された上でなされるようにする必要がある。さらに、八幡遺跡群の歴史的価値を、積極的に社会的資本に位置付ける取り組みを行っていくことこそが私たちの責務であるといえよう。

中央自動車道長野線の娯楽サービスステーションからは、棚田と八幡遺跡群が眼下に眺められる。その眺めは、心をほっとさせてくれる景観である。私たちは、こうした景観も含めて、文化財を後世に継承すべき責務を負っている。

(市澤英利)

索引

特殊遺物の主な掲載ページ

種 類	文 章 ページ	図 版 ページ	表ページ
墨 刻 書	40・59・68・126・154・172・179・201・ 221・241・290・301・313・314・317・ 339・488・493・495・498・502・505・ 520・522・524・529・531・533・539・ 541・545・554・555・560・562・564・ 566・569・573・574・575・579・582・ 586・589・591・595・596・609・612・ 615・616・622・637・639・698・702・ 704・723・728・733・734	44・60・70・155・172・174・179・202・ 222・241・291・302・314・319・339・ 340・489・494・497・499・521・523・ 525・530・532・534・540・542・546・ 553・561・563・565・567・568・570・ 571・574・580・587・590・593・610・ 611・617・623・640	69・173・ 292・314・ 320・637
	171・179・189・227・248・263・276・ 289・290・296・311・317・318・320・ 406・452・488・495・498・522・531・ 533・539・541・554・555・560・562・ 564・566・569・573・575・579・586・ 591・595・609・637	179・191・227・248・265・290・312・ 319・408・453・489・494・497・499・ 523・530・534・540・556・561・568・ 574・580・587・593・600・610・611・	173・263・ 292・318・ 320・638
	172・173・179・195・210・289・290・ 298・312・317・493・495・496・502・ 505・524・529・533・541・545・562・ 564・566・569・573・575・579・586・ 637	174・179・195・210・291・297・312・ 319・494・495・525・534・542・546・ 568・587・605	292・320・ 637
	△刻目 301・318・539・555・566・573	302・319・540	
付 着 物	漆 68・172・189・242・275・290・312・ 495・496・498・520・522・524・529・ 533・554・555・560・564・573・599・ 604・639・646・647・704・728	70・174・191・277・312・497・521・ 523・534・556・601・605・647	312・646・ 647・648・ 649
	イオウ その他 65・189・230・276・305・307・308・ 493・498・520・524・531・539・554・ 555・560・562・564・569・579・582・ 586・589・591・646・648・649	191・230・277・309・310・494・498・ 525・532・540・556・561・571・572・ 587・647	283・646・ 649
緑釉陶器	68・126・145・208・227・276・278・ 301・305・524・533・541・554・569・ 573・615・616・626・650・651・698・ 704・712・715・717・733・734	70・207・227・279・302・309・526・ 534・542・556・570・617・618・650	69・207・ 283・286・ 302・308・ 576・594・ 651
	二彩陶器 126・495・505・586・596・650・698・ 702・715・723	497・580・650	651
三彩陶器 126・154・650・702・723	155・650	651	
漆紙文書 126・162・520・564・596・637・639・ 641・642・649・704・715・728	162・521・565・640・641・642・643	642	
漆器 43・142・209・430・533・586・591	45・142・210・432・536		
木簡 59・126・325・430・496・505・529・ 545・555・637・644・645・702・715・ 720・723・727・728	60・330・432・502・528・544・557・ 602・626・644	549・595	
斎串 59・189・488・502・589・604・609・612	60・191・490・502・588・602・610・ 611・626	595・604・ 614	

報告書抄録

ふりがな	いっばんこくどう 18 号 (さかき こうしょくばいばす) まいぞうぶんかざいほくつちょうさほうこくしょい					
書名	一般国道 18 号 (坂城更地バイパス) 埋蔵文化財発掘調査報告書 1					
副書名	社宮司遺跡 ほか					
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	78					
編著者名	町田勝則 豊田義幸 市澤英利					
編集機関	財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター					
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4 TEL. 026-293-5926					
発行年月日	2006 年 3 月 31 日					
調査原因	国道 18 号線の改築事業に伴う事前調査					
調査地	長野県 千曲市大字八幡 ながのけん ちくまし おおあざ やわた					
ふりがな 所収遺跡名	コード		遺跡内の北緯 ° ' "	遺跡内の東経 ° ' "	調査期間	対象面積 (調査面積)
	市町村	遺跡番号				
外く赤遺跡	20216	85-8	旧 36° 00' 01.88086" 新 36° 00' 01.88066"	旧 138° 29' 58.56708" 新 138° 29' 58.56725"	2000 年 6 月 22 日～7 月 12 日	7.143 m ² (1.838 m)
北幅付遺跡		85-15	旧 36° 00' 01.87697" 新 36° 00' 01.87677"	旧 138° 29' 58.56548" 新 138° 29' 58.56566"	2000 年 6 月 13 日～6 月 26 日	3.011 m ² (1818 m)
幅付遺跡		85-6	旧 36° 00' 01.87470" 新 36° 00' 01.87450"	旧 138° 29' 58.56548" 新 138° 29' 58.56566"	2000 年 7 月 10 日～7 月 19 日・ 9 月 18 日～10 月 12 日	7.251 m ² (1.477 m)
中道遺跡		85-3	旧 36° 00' 01.86237" 新 36° 00' 01.86217"	旧 138° 29' 58.56029" 新 138° 29' 58.56046"	2000 年 7 月 21 日～8 月 8 日	4.629 m ² (679.4 m)
大道遺跡		85-1	旧 36° 00' 01.85523" 新 36° 00' 01.85503"	旧 138° 29' 58.55830" 新 138° 29' 58.55847"	2000 年 8 月 11 日～12 月 19 日 2001 年 10 月 23 日～11 月 1 日	6.154 m ² (2.368 m)
社宮司遺跡		85-16	旧 36° 00' 01.84322" 新 36° 00' 01.84302"	旧 138° 29' 58.55989" 新 138° 29' 58.56007"	2001 年 4 月 17 日～12 月 20 日 2002 年 6 月 1 日～7 月 5 日・ 11 月 15 日～11 月 29 日	9.188 m ²
宮川遺跡		105	旧 36° 00' 01.83933" 新 36° 00' 01.83913"	旧 138° 29' 58.56229" 新 138° 29' 58.56246"	2000 年 4 月 17 日～4 月 19 日	1.462 m ² (138 m)
主な遺跡名		種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
外く赤遺跡	散布地	平安時代	埋設道路	漆器土器・木製品	遺構の確認はなく、埋設道路内から遺物を収集	
北幅付遺跡	官衙関連 遺跡	奈良・平安 時代	埋設道路	土師器・須恵器・木 製品・古銭・馬の歯	過去 1 回の千曲市による発掘調査で、小竪穴と埋設道 路を検出し、漆器土器や木簡が出土した。	
幅付遺跡	官衙関連 遺跡	奈良・平安 時代	溝跡・竪穴式建物跡	須恵器・木製品・鉄片	今回の調査地点は、北幅付遺跡と同一遺跡である可能 性が高い。	
中道遺跡	散布地	不明	なし	土器小破片	今回の調査地点は遺跡範囲外と考えられる。	
大道遺跡	集落	古墳時代 後期	竪穴式住居跡・ 掘立柱建物跡・土坑	土師器・須恵器・柱材・ 耳環	新発見の遺跡で、竪穴式住居と掘立柱建物により構成 された集落遺跡。	
社宮司遺跡	官衙関連 遺跡	奈良・平安 時代	竪穴式建物跡・ 掘立柱建物跡・溝跡	土師器・須恵器・ 陶磁器・木製品	習書木簡、漆紙文書等が出土した史鞍部衙関連遺跡、 国内初の平安末期の仏馬・六角木簡が出土した。	
宮川遺跡	散布地	古代	なし	須恵器等小破片	今回の調査地点は遺跡範囲外と考えられる。	

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 78

一般国道 18 号（坂城更埴バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書 1

—千曲市内その 1—

社 宮 司 遺 跡 ほか ≪第 2 分冊≫

発 行 平成 18 年 3 月 31 日発行

発行者 国土交通省関東地方整備局

長野県埋蔵文化財センター

〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4

TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157

印 刷 信毎書籍印刷株式会社

〒 381-0037 長野県長野市西和田 470

TEL 026-243-2105